

# ガンダムビルドダイバーズ アナザーテイルズ

守次 奏

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

繋がりがかった。誰かと、いつか、どこかで。

高校デビューに失敗した少女、蔵前梨々香は何をするでもなくネットサーフィンをして日々を潰していた中で、世界を変える力と、繋がりが合うことで生まれた奇跡がもたらした軌跡の数々と——GBN、ガンプラバトル・ネクサス・オンラインと出会う。

もしかしたら、GBNの世界なら、こんな自分でも誰かと繋がることのできるかもしれない。そんな淡い期待を胸に、少女は電子の海を彷徨い続ける。

フォースメンバーは引きこもり、シスコン、お嬢様、災害系ブラコン。果たしてツダりかねない少女たちは、GBNを生き残ることができるのか。

これは、もう一つの繋がりが合い、再構築する小さな小さな少女たちの冒険譚。

追記：拙作に登場するダイバー、ガンプラ、ミッションなどはハーメルン内のビルドダイバーズ及びビルドダイバーズRe:RISEの二次創作に限り、良識の範囲でフリ素です【FAQ等↓ <https://syosetu.org/?mode=kappa|view&kid=251720&uid=325739>】

追記その2：前作ほどがつつりそう描いているわけではないのですが百合っぽい描写があったのでガールズラブタグを追加しました(2

0  
2  
0  
:  
1  
2  
/  
1  
3  
)

## 目次

第一話 「電層マーメイド」	1
第二話 「ダイブ・トウ・GBN」	10
第三話 「舞い降りる聖剣（EXカリバー）」	19
第四話 「セイリング・デイ」	29
第五話 「梨々香、その決意と誓い」	38
第六話 「ブランシユ、大地に立つ」	47
第七話 「気になるあの子はお姉ちゃん」	56
第八話 「リリカ・リライズ・リスタート」	65
幕間：「レッドアラート・エマージェンシーコール」	74
第九話 「紅のキリングレンジ」	81
第十話 「ぜんえいのおしごと！」	91
第十一話 「シャフランダム・ロワイヤル」	102
第十二話 「武士道狂想曲（カプリッツィオ）」	112
第十三話 「リバース・ジ・エッジ」	122
第十四話 「リリカ・ヘウレーカ」	131
第十五話 「歩くような速さで」	140
第十六話 「涙の昨日にサヨナラ」	149
第十七話 「駆け出すきぎはし、それぞれの思惑」	161
第十八話 「消えない傷を抱えたままでも」	170
第十九話 「僕らが望んだ戦争（レイドバトル）だ」	180
第二十話 「ノツキン・オン・ヘブンス・ドア」	189
第二十一話 「デストロイ・デストロイヤー」	198
第二十二話 「フォース・アナザーテイルズ！」	209
幕間其の二：「駆け抜ける新鋭たち」	218

第二十三話 「初陣、アナザーテイルズ！」	226
第二十四話 「世界は広く、大海は深く」	235
第二十五話 「グランダイブ・チャレンジャー！」	244
第二十六話 「水底五百米（メートル）」	253
第二十七話 「福音との邂逅」	263
第二十八話 「戦場の天使たち」	273
第二十九話 「デッドヒート／バーニング・レイジ」	282
第三十話 「最速への招待状」	292
第三十一話 「ハイウェイ・スター狂詩曲（ラプソディ）」	301
第三十二話 「緋き狙撃手（スナイパー）」	312
第三十三話 「過去の残滓、未来への欠片」	322
第三十四話 「三桁の英傑」	331
幕間その三 「美羽と梨々香の蹉跎と再生」	341
第三十五話 「私に何か足りてない」	349
第三十六話 「拳は悲しく、道のりは遠く」	358
第三十七話 「天地神明、決意の表裏」	368
第三十八話 「カエデのヴァルガ探訪録」	378
第三十九話 「リビルドガール／ライジングガイ」	388
第四十話 「グラン・サマー・フェスティバル！」	398
第四十一話 「真夏のお宝奇想曲」	408
第四十二話 「灼熱ビーチサイド・ガールズ」	417
第四十三話 「はじめてのたからもの」	427
第四十四話 「白き魂の御座」	437
幕間其の四：「噂のアナザーテイルズ」	446
第四十五話 「呼ばれて飛び出て御主人様（あなた）のために」	

第四十六話 「白輝の支配者」

第四十七話 「繋がり合うことで生まれるキセキ」

第四十八話 「二桁からのお誘い」

第四十九話 「ハンズクラップ・オン・ユア・マークス」

第五十話 「バース・オブ・ニュークイーン(前)」

第五十一話 「バース・オブ・ニュークイーン(後)」

第五十二話 「わたしの目線でできること」

第五十三話 「胎動する闘い」

第五十四話 「戦闘狂のラスト・リゾート」

第五十五話 「パラダイス・ロスト」

第五十六話 「幕を開ける饗宴」

第五十七話 「交錯する宿星たち」

第五十八話 「宇宙戦艦大戦争」

第五十九話 「流星、空を切り裂いて」

第六十話 「イマジナリイ・アーク」

幕間其の五：「ディアフター・フェスティバル」

第六十一話 「レイズ・ユア・フラッグ」

第六十二話 「本気だからこそ」

第六十三話 「放っておけないってこと」

第六十四話 「トゥ・ザ・ビギニング」

第六十五話 「激突する新星」

第六十六話 「始まりが故」

第六十七話 「勝利の星よ、燦然と」

第六十八話 「リビルドガールズ」

第六十九話 「旅路は遙か遠くとも」

最終話 「これはわたしの物語」

## 第一話「電層マーメイド」

繋がりがかった。

誰かと手を繋いで、そうじゃなくなつて、一緒にお昼ご飯を食べたりだとか、他愛もない話をしながら放課後の帰り道を歩んだりとか。

蔵前梨々香は、いつもそんなことを夢見ていた。

そして、失敗した。

遮光カーテンが作り出す夜闇の中に埋もれるように、梨々香はゲーミングチェアに体育座りをして、何をするでもなく、ただ茫洋と電子の海を眺め、漂い続けている。

ネット上には日々、その真偽や正確性を問わず——ゴモラの市のように、様々な情報が漂っていて、それを摂取することでなんとなく自分が有意義に生きているような、そうじゃなくなつて何かをしたような気分になれるからこそ、混沌とした電脳回廊を、梨々香は今日も泳ぎ続けるのだ。

俗にいう引きこもり。

その言葉に対して、世間が浮かべるパブリックイメージに違わず、梨々香は十六歳という年齢でありながら、四月を境に、行くべき高校には通っていないかった。

そこに何か壮絶な、筆舌に尽くしがたい悲劇があつたわけではない。

ただ、ありふれた失敗と、それに伴うありふれた孤独が横たわっているだけで、それに耐えきれなかったからこそ、こうして一人、梨々香は自室に籠って一日を無為に過ごしているのだ。

本当であれば、学校帰りにクレープを食べて、他愛もない会話をしながらタピオカドリンクを啜って——大して興味もなければ名前も顔もどうでもいいような芸能人の不祥事に、ああだこうだと騒ぎ立てる文字列に何かを思うこともなく、擁護する側にも非難する側にも等しく冷笑にも似た角度で、それを斜めに見るだけだ。

「……はあ」

ついた溜息が滞留して、部屋の空気は淀んでいるのかもしれない。



梨々香は茫洋と、二酸化炭素濃度が濃くなってきた部屋の空気に気怠げな頭痛の予兆を感じつつ、そんなことを考える。

いつそ執拗なほどに、病的なほどに、歯を磨いていけば、髪も、身体も毎日毎朝毎晩洗っているのに、自分にまとわりつく鉛の綿にも似たような感覚が消えてくれないことに、梨々香はまた一つ溜息を増やす。

不祥事について何がいいとか悪いとか、そんなことを考えられるほど余裕もなければ、熱心になれるほど興味など持っていない。

だからこそ、梨々香は心のどこかで、熱を持って何かを語り合うこと——そのベクトルが正であれ負であれ——を羨ましく思っていたのかもしれない。

良くも悪くも、梨々香のそんなささくれだった感情は出力されることもなければ、仮に出力されたとしても、電子の海ではあつという間に霧散して消えていくことだろう。

だからこそ、意味もなくネットを覗いている。

そこに意味を伴わないから、なんとなくの言い訳にぐらいはなつて、一日を潰すのに最適だから。

そんな、どこまでも後ろ向きな理由。

きつと人が聞いたら指をさして笑われるのであろう、情けない理由。

なんとなく、部屋の壁にかかった時計を一瞥すれば、時刻は十二時過ぎを指している。

今頃、クラスメイトたちは机を寄せ合って、持ってきた弁当を分けあつたりしているのだろうか。

些細な挫折、だけど大きな蹉跌に囚われる前は、いつだって脳裏に描いていたことを脳裏に描いて、梨々香は静かに涙ぐむ。

何が悪かったのだろうか。

何を間違えてしまったのだろうか。

陸の孤島で一人遭難してしまったような自分が、考え続けたって答えなんて出てこないことぐらいわかっているのに、いつだって考えてしまう。

そうしていつも頭の中に、最後によぎるのは首の動脈か、そうじゃなければ今も無意味に血液を送り続けている心臓に包丁の刃を突き立てる想像だ。

だけど、梨々香はそんな勇氣も持ち合わせていなかった。

だったら、どうしたって生きていかなきゃいけないのに、どうやって生きてきたのかも、どうやって生きていくのかもわからない。

そんな「ハテナ」に埋め尽くされた梨々香はいつだって、膨れ上がる自責に苛まれて、パンクしそうになってしまうのだ。

だからこそ、梨々香がその動画のリンクを踏んだのは、ただの偶然に過ぎなかった。

『あたしはここにいる！ 絶対三人で……チイちゃんを取り戻すって決めたから！ ……エリイちゃん！』

『はい、アイカさん……！ お願い、リビルドウォート！ わたしの……だいききな人に、だいききな人たちに、応えて……っ！ サイコ・キャプチャー……っ！』

第三次有志連合戦(非公式)とタイトルが付けられたその動画は、別なコンテンツから動画サイトに転載された映像だった。

確か、ガンダムというのだったか。

梨々香は涙をごしごしと袖で拭いながら、画面の中に映っているその光景をじっと見つめる。

機動戦士ガンダム。

それがこの国で有名なロボットアニメであることと、そして動画の中で乱舞している、モビルスーツ——ガンダムに出てくる人型兵器を模したプラモデル、「ガンプラ」であることは、梨々香も知っていた。

だが、画面の中で、どこか人間をそのままロボットにしたか、そうじゃなければ人間を模したロボットとして作られたような機体に対して「サイコ・キャプチャー」なる武装を放ったり、或いはその足にしがみ付いているガンダムの名前を知っているわけではない。

『アイカもさ、エリイもさ、アキノも……どうして、泣いてるんだよ』  
それでも、各々のガンプラを駆る彼女たちが、その人間を模した口

ポット——モビルドールチハヤを繋ぎ止めるために、傷だらけになってまで月面まで追いかけてきたことぐらいは、梨々香にも理解できた。

それはどこか、自分が追い求めてきたものとよく似ていて。

両眼が、じん、と、塩辛い熱を帯びるのを感じる。

梨々香は、どこか吸い寄せられるように、その動画に関連するものとして表示されている動画に向けて、カーソルを伸ばしていた。

GBN——ガンプラバトル・ネクサス・オンライン。

確か、日本で初めて、否、世界で初めての電子生命体を生み出す土壌になったゲームであり、「ガンプラ」を読み込ませて戦い合うゲームだったはずだ。

それはゲームであつても遊びではない——などということはない。

どこまでも熱を持つことができる、誰かのために、或いは自分の掲げる何かの為に全力になれるのは、遊びだからだと誰かが嘯く。

きつとそれは、間違っていないのだろう。

梨々香がクリックした動画——「第二次有志連合戦」の見所を切り抜き、映したもののの中では、この国で初めての電子生命体として認められた少女、「サラ」を救う為に、這々の体になつても立ち上がらんとするガンダム——「ガンダムダブルオースカイ」の姿がある。

『サラにいっぱい教えてもらった。一緒に経験した、皆との絆、ガンプラとの繋がり、楽しむ気持ち、諦めないこと、前を向いて進むこと、ガンプラを大好きだつてこと……いっぱい感謝してる。だから諦めたくない、サラにいっぱい笑顔にもらった、大好きつて気持ちを教えてもらった、俺たちの好きが産んだ命がサラなら、俺たちの手でサラを消したりしちやいけない、自分達の好きを自分達で否定したくないから、だから俺達は、俺たちの好きを諦めない！』

涙を浮かべ、絶望と背中合わせになりながらも、不敗にして無敵を誇るチャンピオンである男に立ち向かおうとするその少年——「ビルドダイバーズのリク」が切った啖呵は、きつとGBNの内外を問わず大きく響いたものであつたのだろう。

GBNが消滅するか、電子生命体「サラ」が消滅するか。

三年前に、そんな事件があったことは梨々香もネットサーフィンの中で何となく記憶の中に留めていた。

だが、今この瞬間まで梨々香はガンダムのガの字にも興味がなかったし、GBNについてだって、ガンプラを組み立てなければプレイすることができない、というハードルから、面倒くさいの一言で、関心を持っていなかった。

それでも、クリックして眺める動画の中には、自分が探していたものが、求めていたものが、埋もれているように見えてならない。

熱を帯びた梨々香の瞳が、涙を零す。

それは第一次有志連合戦の中で、チートツール「ブレイクデカール」によって異常強化されたビッグ・ザムを浄化するように、トランザムシステムがオーバーロードを起こしたのか、粒子が翼となって広がる瞬間。

それはレイドボス「アルス」との戦いで、梨々香はその内情を知らずとも、GBNという自分たちの仮想郷——理想にして、現実にあらずとも魂の故郷である場所を守ろうとするダイバーたちの輝き。わかっている。

動画をクリックする度に、その中身を覗く度に心臓が高鳴る。

そんな都合がいいものが転がっているわけじゃないことぐらい、梨々香にもわかっている。

それでも、どこかで期待してしまうのだ。

今日もそこで、GBNという仮想郷で、「大好き」を求めて戦い続ける彼らの、彼女らの間に存在する「繋がり」とでもいうべきものがあることに間違いはない。

——だったら、私も。

もしかしたら、の話だけれど。

梨々香は、関連動画を一通り見納めると、ごしごしと丈の余った袖口で浮かんだ涙を拭いながら、クローゼットを開け放つ。

制服を着ていくのはまずいかもしれない。

ぶかぶかと丈の余った部屋着から、梨々香は何かに弾かれたように、見繕った余所行きの服に着替えていく。

「……ん、っ……」

少しばかり胸の周りがきつくなってきた、一年前の余所行きのパターンを無理やり留めて、梨々香は家の鍵を握ると、ばくばくと早鐘を打つ心臓が赴くままに、玄関へと駆け出していった。

外の世界に行くことに、抵抗がないわけじゃない。

いくら梨々香が引きこもりであったとしても、衣食住の内、食に關してはどうしたって付き纏ってくる問題だ。

そのため普段からコンビニなどには行っているが、それは通行人が少なくなつた夜の話を、真つ昼間に出掛けるなどいつ以来かわからない。

もし、同級生と鉢合わせたら。

もし、変な人に絡まれたり、後ろ指をさされて嗤われたら。

そんな不安が、梨々香の伸ばした手を震わせる。

——それでも。

（わたしの……だいすきな人に、だいすきな人たちに、応えて……っ！）

動画の中でそう叫んでいた、「エリイ」という気が弱そうな女の子の言葉が、梨々香の脳裏を過ぎる。

もしかしたら、そこにも見つからないのかもしれない。

もしかしたら、今と同じで、躓いて、転んで、今度は起き上がらなくなってしまうのかもしれない。

それでも——梨々香の求めている「繋がり」が、GBNに存在していることは確かなのだ。

「……っ、えいっ……い！」

だからこそ、一念発起、一世一代の覚悟をもって、梨々香は家の玄関を開け放ち、その仮想にして理想の郷に向かう為——GBNへとログインするために、家を出るのだった。



五月の東京湾を吹き抜ける海風は、どこかまだ冷たさを残して肌を

撫でるようだった。

梨々香は少し薄着だったかな、と反省しながらも、モノレールに揺られた先にある埠頭に降り立ち、小さく身体を震わせる。

とはいえ、ここ最近は季節が狂っているのだからどうしようもない。

昨日は七月初旬並みに暑かったかと思えば、今日には三月下旬のよくな気温に戻ることも珍しくない時代だ。

だからこそ、別に服装に関して梨々香に落ち度があるだとか、そういうことでは断じてなかった。

ガンダムベース、シーサイドベース店。

実物大エールストライクガンダム立像をシンボルとするその店は、制作ブースからGBNの筐体を並べたゲームブース、そしてガンダムとのコラボメニューが提供される「G-Cafe」というフードコートも備えている、初心者から上級者まで満足のサテライト……らしい。

スマートフォン画面に並んでいる文字列を眺めながら、梨々香は海風に身体を震わせつつ、エールストライクというらしい、十八メートルの高さまで忠実に再現されたその立像を見上げる。

「……ガンダム、だっけ」

確か、目が二つあるのがガンダムで目が一つなのがザクだったか。興味のなかった梨々香では、今調べた限りではそれが精一杯だった。

とりあえず今見上げている立像は目が二つあるからガンダム。

ヨシ、とばかりに指をさして小さく頷くと、梨々香は恐る恐るといった調子でガンダムベース、シーサイドベース店へと踏み込んでいく。

「いらっしやいませ、ガンダムベースシーサイドベース店へようこそ！」

「……わ、プラモデルが喋った……じゃ、なくて、ええと、あなたが……？」

「はい、チイはELダイバー……電子生命体ですよ」

チイ、と名乗ったその推定少女はショーケースの中から無垢な笑みを浮かべて、梨々香に手を振ってみせる。

確か、気のせいではなければさっき見た動画の中でサイコ・キャプチャーに捕まっていた機動人形のパイロットも同じ名前を名乗っていたはずだが。

——他人の空似だろう。

どこかで聞いたようなことで結論付けて、手を振るチイに会釈をしながら、梨々香はゲームブースを目指して猫背で歩く。

平日の真つ昼間だというのに、ガンダムベース、シーサイドベース店は活気に溢れている。

暇そうな大学生が「G—C a f e」で何やらガンダム談義に花を咲かせながら時間を潰していたり、或いは制作ブースで、一心不乱に脇目も降らず、水中用みたいな装備をした、SD——というらしい種類のガンダムこと、ガンダイバーを組み立てている壮年の男性がいたり、周囲を眺めているだけで気力を吸われていきそうだと。

そんなげつつつそりとした感覚の中、何とか這々の体で梨々香がたどり着いたのは、ゲームブース……ではなく、インフォメーションカウンターだった。

「……あ、あの……」

「はい、いらっしやいませ。どのようなご用件で？」

インフォメーションカウンターで待機していた、人の良さそうな壮年の男性——シーサイドベースの店長を務めている男、マツムラ・ケンは俯き、もじもじと消え入りそうな声で話しかけてきた梨々香の声を確かに聞き取って、優しい声音で問い返していた。

「……わ、私……その、GBN、やってみたくて……でも、ガンプラとか、持ってなくて……その……」

人と話すのなんて、家族を除けばいつ以来か。

コンビニの「袋いりますか」や「温めますか」にも首を振る形で応答してきた梨々香にとっては、それだけでも十分精神が金属疲労を起こしそうだった。

しかし、マツムラ店長も慣れた男だ。

梨々香がコミュニケーションを苦手としている——自身がバイトとして雇っている少女の恋人である少女とよく似た人種であることを即座に看破すると、決してぐいぐいと詰め寄るのではなく、梨々香の歩調に合わせる形で、彼女が紡いだ言葉を読み解いていく。

「ふむ、ええと……レンタルサービスがあるんだけど、使ってみる？」  
「レンタルサービス、ですか……？」

「うん、ガンプラを貸し出してるんだけど……っと、あつたあつた」  
マツムラはデスクの下の収納に収まっているケースから、緩衝材に包まれたそれを取り出すと、梨々香に提示してみせる。

「レンタル料金はかかっちゃうけど、アカウントの本登録もできるからとりあえずはこれがおすすめだけど、どうかな」

「……わ、わかりました……ありがとう、ございますっ……」

どうせ右も左も分からないのだから、毒を食わば皿までの精神で梨々香はレンタル料金をマツムラに支払うと、彼から貸与される形で差し出されたガンプラ、「EG ガンダム」をそっと、壊してしまわないように優しく受け取って、ゲームブースへと向かっていく。

どうやら、GBN筐体のプレイ料金はかからないらしい。

スマートフォンで調べるだけの情報を調べて、梨々香は同じく付与された「ダイバーギア」に、EGガンダムを載せて、ゴーグル型のデバイスを装着する形で、仮想郷へと潜行する。

『GPEX SYSTEM START UP——』

どんなものが待っているのかなんてわからない。

欲しいものがあるとは限らない。

それでも——梨々香は、もがいて、手を伸ばすように。

「……えっと、い、行きますっ……」

GBNの世界へと、解けた意識を託していくのだった。



## 第二話 「ダイブ・トウ・GBN」

「電腦空間へと転送されていく梨々香の意識は解けて、新たに再構成されようとしていた。」

ダイバーギアに何のガンプラも読み込ませずにログインした場合、ゲストとして「機動戦士ガンダム」に登場するマスケットロボ、「ハロ」のアバターをあてがわれるのが恒例となっているがそこはそれ、今回、梨々香はEG……エントリীগレードの初代ガンダムをマツムラ店長から借り受けていたために、本登録をしなければならぬのだ。

無数のパーツや装飾品の中から、なりたいたい自分を選んでくださいとばかりにアナウンスされる声に戸惑いながらも、梨々香は恐る恐るといった調子でパネルの一つに、人差し指でそっと触れる。

「わ、すごい……！」

すると、現実の容姿と殆ど変わらない形で構成された初期アバターが持ち合わせていた鳶色の目が蒼く染まっっていく。

持ち合わせた容姿にコンプレックスがあるわけではない。

ただ、GBNにおけるキャラメイクの範囲は極めて広く、例えば先程梨々香がデフォルトのまま設定した碧眼だって、細かくカラーチャートをいじることで色合いを広く変えることができるのだ。

だからこそ、梨々香がある種のめり込んでいたのは、必然だといえよう。

現実だと薄茶色といった風情の髪の毛の色合いを濃くして、着ている服も、学生服のようなブレザーにプリーツスカートというものに変更し、と、アバターのキャラメイクをするだけで、梨々香は実に小一時間近く、時間を費やしていた。

その甲斐もあってか、最終的に「このアバターでゲームを始めますか?」と機械音声のアナウンスをする頃には、ある程度納得のいくアバター……GBNにおける躯体は完成を迎えている。

「えっと……は、はいー！」

声に出す必要はなかったものの、問いかけを肯定しながら梨々香が

OKのボタンに触れば、仮想の世界へと解け切る一步手前で立ち止まっていた意識の残滓が完全に、ふわりと、重力を失った状態で下から引きずり込まれるようにGBNへと転送されていく。

或いは、長いエレベーターで延々と降り続けているような、そういう感覚だろうか。

そこに違和感を覚えながらも、恐らくは慣れていくのだろうとして、解けていく意識に身を委ねて、電脳空間へと梨々香は意識を委ねて解けていく。

こうして梨々香は——「リリカ」として、生まれ変わる。

GBNへと足を踏み入れた証である、そしてその仮想郷で何かを求め続ける「ダイバー」として、再構築されてゆくのだった。



ガンプラバトル・ネクサス・オンライン。

それはVRMMO全盛の時代において、数世代先の技術を先取りしたといわれているファンタジーな神ゲーと肩を並べる存在として君臨する、時代の象徴のようなものだ。

アクティブユーザーを実に二千万人も抱えて、そこから更に拡張を辿り続けているだけではなく、ELダイバー……法律上の定義においては「特定電子生命体」として扱われる存在を生み出す産土となったGBNは、最早ゲームの域を超越して、第四世界と呼ばれるほどに広がったといってもいい。

梨々香の意識が再構成され、「リリカ」という躯体を得て降り立ったロビーは、そのことを如実に示していた。

平日の真つ昼間だというのに中央ターミナルエリア、総合受付ロビーには様々な格好に扮したダイバーたちでごった返していて、端っこの方で他愛もない会話に花を咲かせている二人組がいるかと思えば、コンソールを操作して何かを確かめているダイバーもいる。

そんな人の多さに思わずリリカは目眩を起こしてしまいそうになったが、ここで立ち止まっていたのでは何にもならない。

と、いうより電腦空間で倒れたらどうなるのだろうか。

強制ログアウト措置は取られるのだろうか、最悪死んだりするのだろうか、などとぶつぶつと呟きながら、梨々香がロビーを歩いていた時のことだった。

「やあ、君、もしかしてGBNを始めたばつかりの初心者かな？」

やけにフレンドリーに明るい声が、リリカの耳朵を震わせる。

声のした方向に振り返れば、そこには緑色の軍服——「機動戦士ガンダム00」のセカンドシーズンに登場する軍事組織、「アロウズ」のものである——を纏った、自身よりも頭三つ分ぐらい背が高い青年が、ご丁寧にもかがみ込んでリリカへ視線を合わせようとしている姿があった。

「は、はい……でも、どうしてわかつたんですか？」

「そりやあね、俺も結構長くやってるから。ところでなんだけど、君、受けるミッションとか決まってるのかな？」

「ミッション、ですか？」

「ああ。ここでは決まったミッション……まあ、他のゲームでいうところのクエストとかを受注できるんだよ」

一応、リリカはVRMMOを遊んだことがないというわけではない。

例の神ゲーから、ふすまを突き抜けて天誅を下されたり、果ては口グインボーナスを確認している間にも天誅を下される世紀末、もとい幕末極まったゲームまで幅広く手を出してはどれにも飽きてやめていたから、何となく青年が言わんとするところは理解できた。

リリカが引つ掛かりを覚えていたのは、ただ、このGBNで何をしようか、というその一点のみだ。

ミッション。使命とも言い換えられるそれは、今のリリカにとって重要なものとそうでないものがあつて。

小首を傾げてリリカは小さく唸る。

大きなミッション、使命があるとしたら、それは自身が願つてこの仮想郷を訪れた理由であることには違いない。

だが、小さなミッション——借りてきたガンプラを使う、ゲーム内

コンテンツにおいて何をするのか、というのはすっかりリリカの頭から抜け落ちてしまっていたのだ。

「えっと……特には、決まっています」

だからこそリリカは、正直に答えることにした。

やけにフレンドリーな態度で接してくる青年から目を逸らしつつ、もじもじと両手の人差し指を突き合わせながら、消え入りそうな声で答えを返したりリリカだったが、だからこそ、気付かない。

青年の細められた瞳の中に潜んでいる悪意の毒牙に、そして今、剥き出しになったその牙から一雫の劇毒が滴り落ちようとしていることに。

「じゃあさ、このミッションとか受けてみないかい？ 俺、これでも情報屋やってさあ」

どこか粘度と湿度を帯びた声音に変わった青年が手早くコンソールを操作して呼び出したパネルに記されている概要をつらつらと、リリカはいつものように流し読みする。

【クリエイトミッション：薬草を集めよう！】

【推奨ダイバークラス：F】

【ミッション開始地点：ハードコアデイメンション・ヴァルガ 北部廃墟都市地帯】

【勝利条件：指定座標に咲いている花の納品】

【敗北条件：自機の撃墜】

概要だけを見るならそれは、いわゆるお使いミッションであることはわかった。

だが、リリカは心のどこかで、何か引つ掛かりのようなものを覚えていた。

概要に何か変なことが書いてあるわけではない。

ただ単に、ロールプレイングゲームのチュートリアルでよくあるように指定された場所まで行って、何かしらの目的を果たして帰ってくる、というだけのミッションだ。

しかし——リリカは知る由もないが、そこには猛烈な悪意の毒が潜んでいる。

ハードコアデイメンション・ヴァルガ。

そこは「チンパンたちのラスト・リゾート」、「戦闘狂の行き着く果て」、「理性を失った奴らのサナトリウム」などと様々な不名誉極まる渾名をいただいている、無制限フリーバトルが解禁されたデイメンションなのだ。

普通のゲームであれば、何のイベントでもない時にプレイヤーをキルする行為は重罪であり、咎められるべきものとして、キルした側には何らかのペナルティが課されることとなるのが通例だ。

それは、このGBNにおいても概ね同様であり、通常のデイメンション内で、双方の合意なしに攻撃を仕掛けた場合は、先に仕掛けた方に対してその罪状に応じたペナルティが課せられる。

だが、ハードコアデイメンション・ヴァルガは弾けた。

表向きは無制限のフリーバトルを解禁してほしい、という要望に伝えて設立されたその場所は、果たしてログイン天誅、漁夫の利天誅、戦略兵器ぶっぱ天誅など、あらゆる外道行為を尽くしてプレイヤーを、ダイバーをキルしたとしても一切のペナルティが免罪される、いわば戦闘狂の隔離場なのだ。

だからこそ、初心者はヴァルガに棲まう修羅の民たちにとっては鴨がネギと調味料とガスコンロと鍋をセットで持ってきたようなおやつにしか見えないのである。

無論、この情報屋を自称する青年は、それをわかっている、リリカにそのミッションを受けるように持ちかけているのだ。

「……え、えっと。わかりました、じゃあそれで……」

「ちよつと、待ちなさい！ そのアナタ！」

どこか悩ましげな吐息と共に、トーンの高い声が、クリエイトミッションの受注ボタンを押そうとしていたリリカと、そしてその様子を、獲物を舐めつける蛇のような眼で見つめていた青年へも投げかけられる。

声のした方を振り返れば、そこには筋骨隆々とした仮想の肉体をびっちりとした質感の衣装に包んだ紫髪のダイバーが、怒りも露わに、青年へと詰め寄ってくる姿があった。

「げっ、マギーさんかよ!？」

「アナタ、あれだけお仕置きされても、まあだ懲りずにこんなことしてたのね？ 悪いけど、情状酌量の余地はないわ」

「ばちこーん、とウインクを決めながら指をさす、マツチヨな漢女おとめというその温度差で風邪を引きそうなダイバーにどこか恐怖のような感情を覚えながらも、リリカは言われた通りに受注を受けるボタンに伸ばした手を引っ込める。

「ひよい、と、米袋を担ぐように情報屋を名乗っていた青年を担ぎ上げると、マギー、と呼ばれたダイバーはかがみ込んで、リリカへと視線を合わせるような形で、その唇から言葉を紡ぐ。

「危なかったわね、アナタが受けようとしていたミッション……いわゆる『初心者狩り』ってやつなのよお」

「初心者狩り、ですか……?」

「マギーは悩ましげな吐息と共に体をくねらせながら、鸚鵡返しに問いかけたリリカの言葉を首肯する。

「ええ。ハードコアディメンション・ヴァルガつてあつたでしょう？」

「あそこ、PKし放題の無法地帯なのよ」

「そして、スポーン地点である北部廃墟都市地帯は極めて乱戦が発生しやすい危険なエリアであると、マギーは困ったように、ジタバタと抵抗する担ぎ上げた青年を抑えつけながら嘆息した。

「……私、騙されてたんですか?」

「ええ、残念だけど。もし気を悪くしちゃったならごめんさいね。アタシが代わりに謝るわ」

「え、えつと……大丈夫です、そんな……私が迂闊だっただけで」

「律儀に自称情報屋を抱えたまま頭を下げる、その人徳に気圧されながらも、リリカはどこか遠慮をするようにぶんぶんと前に突き出した両手を左右に振り続ける。

「このマギーというダイバーが運営スタッフなのかそれとも、ただ単にお節介焼きなだけなのかはわからないが、自分なんかに頭を下げる必要は無いと、涙ぐんでリリカは首を横に振った。

「正直なところ、シヨックがなかったといえば嘘になる。」

青年は人が良さそうだったし、もしかしたら善意でミッションを勧められていて、クリアしたらフレンドになってくれるんだろうかと、リリカは無意識の内に期待してしまっていたのだから。

だが、そんな都合のいい話など、悪意にまみれた世の中に転がっているはずがない。

わかってはいたのに、裏切ったどころか最初から騙していただけだというのに、リリカの瞳からは涙がこぼれ落ちて止まらなかった。

「……本当にごめんなさいね。初めてのGBNだったんでしよう？」

「……つく、ぐすつ……は、はい……」

「これ、アタシのフレンド申請。今はちよーつとこの不埒者にお仕置きしなきゃいけないけど、何かあったらアタシに言ってちょうだい。きつと力になってみせるわ」

両眼を擦って泣きじやくるリリカの頭をそつと撫でて、マギーはフレンド申請を渡す。

人は見た目によらないというが、まさにその通りだろう。

フレンドリーな青年は初心者狩りの悪党で、オネエ言葉を使う筋骨隆々とした漢女おとめは底抜けの善人で。

リリカはマギーからの申請を受け取って、自分も同じように申請を飛ばそうかと指を伸ばして、逡巡する。

迷惑だったらどうしようと、言葉にこそ出さないが、確かに抱いていた不安を見抜いたかのように、マギーは優しく微笑むと、いいのよ、とばかりに首を縦に振る。

「……その……よろしく、お願いします」

「ええ。リリカちゃんっていうのね。とつてもキュートで素敵なお名前だわ」

「……そ、そうですか？ えへへ」

「ええ。それじゃあアタシはちよつと野暮用で離れちゃうけど、キュートリアルミッションなら、その受付から受注できるわよ」

クールに去るわ、とばかりにひらひらと手を振ったマギーの大きな背中を見送って、リリカは彼女に言われた通り、エントランスの中央に配置されたインフォメーションセンターのようなところへ、ふらふ

らと幽鬼のような足取りで向かっていく。

受付に配置されているのは、いわゆる「中の人」がいるアバターではなく、管理用に開発されたAI——NPD、ノンプレイヤーダイバーだ。

紋切り型の「どのようなご用件でしょうか」という問いに、ミッションを受注しにきたトリリカが答えれば、ずらりと膨大なリストが提示されて、その中から駆け出しでも受けられるものを受付のNPDは訊かれずともピックアップしていく。

「ログイン日数一日目の貴女におすすめなミッションはこちらとなっております」

受付NPDが提示してきたミッションは、大きく分けて四つになる。

一つは、先ほど初心者狩りの男が、ハードコアデイメンション・ヴァルガでやらせようとしていたヤナギランの採取を、PKの心配がほぼない通常デイメンションで行うもの。

二つは、機体の、ガンプラの慣熟訓練とでも呼ぶべきもので、武器の試し撃ちと操作のチュートリアル。

最後に残ったものが、試し撃ちと操作のチュートリアルを複合したものだ。

何を受注しても、正直なところトリリカはそこに熱意を抱かなかつたものの、少なくとも早速できたトラウマである採取ミッションだけは避けようと、残り三つの中から絞り込む。

機体の動かし方や武器のテストに関しては、正直なところ単調さを感じてしまうだろう。

トリリカはチュートリアルがそんなに好きではない人間だ。習うより慣れる、というわけではない。

単に他の誰かが国語の教科書で授業中に扱う題材を読んでいる時に次の単元を黙読するような、そういう人種だからこそ、ある程度GBNにログインする前に操作関連については当たりをつけていたのだ。

「じゃあ……この総合チュートリアルミッションでお願いします」



「かしこまりました。お客様のミツシヨン受注が完了しましたので、格納庫エリアへの転送、並びに指定ディメンシヨンまでのゲート開門を実施いたします」

丁寧な受け答えと共にNPDが頭を下げると、リリカの躯体はテクスチャが解けて、ロビーから一瞬のうちに、格納庫エリア——ミツシヨン前の転送地点にして、ガンプラを嗜む者であればもつとも興奮するコックピットの中へと再構成されていく。

正直なところ、まだ気乗りしないところはある。

リリカは右手で操縦桿を握り締めながら、ずきり、と内側を金槌で殴られたような痛みを覚える胸を左手でそつと抑えた。

それでも、諦めたかと問われれば。

「……諦めたく、ない」

リリカがどこか自分に言い聞かせるように呟くと同時に、十八メートルクラスに拡大されたEGガンダムが機体搬入口へとリフトで運ばれていく。

ゆつくりと開いていくハッチの中に、陽光が差し込む。

確かこんな時、ガンダムでは何とこのだったか。

「……リリカ、行きます……っ！」

そうしてリリカは、お決まりの啖呵を切ると、まだ先行きもわからなければ、手に入るかもわからない、何もかもが「ハテナ」で埋め尽くされた電子の海へと、旅立ってゆくのだった。

### 第三話 「舞い降りる聖剣（EXカリバー）」

総合的な慣熟訓練、ということもあって、梨々香が受けたミッションはそれぞれ三つのウェーブに分かれていた。

ずしん、と地響きを立てて、機動戦士ガンダム00に登場した「ユニオン」の空軍基地をモチーフとしたステージに、十八メートルに拡大されたEGガンダムが確かに降り立つ。

それは、ガンダムをあまり知らないリリカにも、どこか言葉にならない高揚感を与えていた。

以前に見ていたアニメの中で、機体と自分が一体化したような感覚に耐えきれず脱落する、という設定があったことを思い出す。

勿論、GBNにおいて完全にガンプラとダイバーは一体化を果たすわけではない。

バージョン1・78からは擬似感覚のフィードバックが目玉の機能として実装されたが、それだつて操縦時のGだとか、機体に伝わる衝撃がコックピットを揺らしたりするだけで、腕を切断されたらその感覚がダイレクトにダイバーへと伝わる、などということはないし、仮に出来たとしてもあつてはいけないものだ。

「すごいなあ……GBNつて」

リリカは、まるでお上りさんのようにきよきよと周囲を一望するが、電脳の世界に浮かべられたテクスチャは現実のそれと遜色がないほどに綺麗なもので、しばらくミッションの内容すら忘れて、見入ってしまった。

オブジェクトとして配置された「ユニオンフラッグ」や「ユニオンリアルド」の存在もあつて、現実こんな景色は存在しないとわかつていても、これだけ精巧に架空を作り上げたのであれば、それは最早現実と遜色ないものなのだろう。

高度に発達した科学は魔法と区別がつかない。

誰が言ったかはわからないその名言に近しく、高度に発達したヴァーチャル・リアリティは、リアルに見劣りしないほど、真に迫っている。

一頻り、景色を堪能したりリリカは、タイマーの表示時間に慌てながらも、ウエーブの一つ目であるコンテナ回収ミッションを淡々とこなしていく。

「よっ、と……ある程度は、オートでやってくれるんだ」

昨今のVRMMOに違わず、GBNにおいても思考補助システムは採用されている。

元より、二本のスティックだけで巨大なロボットの細かい操作や制御を行うのは無理がある、などと夢を忘れた大人たちはボヤいたりするが、ゲームというのは煩雑さよりも直感的な要素の方が元より重要だし、何より架空のドラマにケチをつけるほど無粋なことはない。

リリカはビームライフルを腰のマウントラッチに、そしてシールドを背中にマウントすると、コンテナに機体を近づかせる。

ロックオンマークがコンテナに向いていると、なんとなく「こうした方がいい」という形で思考の補助を行うサブシステムに促されるまま接近し、機体を屈み込ませれば、ガンダムの両手はしっかりとコンテナを掴んで離さない。

「それで、立ち上がって……こうかな……」

機体を立ち上がらせたリリカは、早速試してみよう、とばかりに、チュートリアルでは指定されなかったブーストを噴かす。

そして、リリカの操縦に導かれたガンダムは白線が四角く引かれたエリアに急接近、そのままコンテナを置くなり、機体に制動をかけて、バック宇宙の要領で姿勢を立て直した。

「……えへへ、上手く、やれてるかも」

当たり前だが、コンテナ運び自体はそうそう難しいミッションではない。

無論、リリカにもそれはわかっている。

何より、チュートリアルから早々に「極端に低いアイテムドロップ率を狙うか、NPCやPCを襲撃して薬草を強奪する」ゲームのような難易度であったなら、GBNは神ゲーと呼ばれていない。

それでも、リリカはそこにちよつとした充足感を覚えていた。

二個、三個とコンテナを積み上げる内に、自らのVRクソゲー遍歴

を目覚めさせるかのように、リリカのガンダムはアクロバティックな挙動を見せつける。

どれもこれもろくでもないゲームばかり掴まされてきたが、その中で挫折しながらも鍛え上げたセンスや感覚は、そのまま神ゲーの中でも応用が効く。

故にこそ、リリカは今、この瞬間においてただ、自由だった。

心の赴くままに、思考がそうさせるがままにスラスターの制動で宙を舞うガンダムに身を委ねて、リリカは、気付けばその口元に小さな笑みを浮かべていた。

笑ったのはいつ以来だろうか。

五つ目のコンテナを積み上げたところで、自分の口元が緩んでいることに気付いたリリカは、じわり、と、眦に涙を滲ませる。

「……………え、えへへ……………楽しい、かな……………」

考えれば考えるほど悲しくなるだけだ。

だからこそ、過ぎ去り、そして足元に堆く積み上がった過去の、今日であったはずの時間の死骸を数えるのをやめて、リリカは機械音声に促されるままに、次のウェーブへと歩を進めていく。

二つ目のウェーブとして配置されているのは、文字通り巨大な的だった。

それが五つ並んでいて、このモードに限ってはビームライフル等射撃兵装の残弾が無限に設定されるなど、オートロックこそあれど、いかにもエイミングの感覚を掴むための訓練ですといわんばかりだ。

リリカは腰にマウントしていたビームライフルを掴むと、五つ並んだ標的のど真ん中にロックオンカーソルを合わせて、照星を覗き込む。

そして、ビビツ、と小さく鳴り響いた電子音に合わせる形でリリカは操縦桿のトリガーを引いた。

マニアにとってはお馴染みの、独特の甲高い音を立てて放たれたビームの弾丸は、オートロックシステムの誘導に違わず、標的の中心を射抜いて彼方へと消えていく。

「すごい……………ロックアシストも、弾の挙動も常識的……………」

驚くところはそこじゃないだろうと、誰かが聞いていたらきつとそう突っ込みたくなるであろう言葉を無意識に唇から紡ぎ出しながら、急かされたようにリリカは次へ、次へと狙いをつけた箇所にはビームを撃ち込んでいく。

その輝きにフラッシュバックするのはかつてプレイした、クソゲーとは言わずともとにかく難しかったゲームの影だった。

だが、あれはロックオンや各種機体制動を全てマニュアルでこなさなければいけない煩雑さがダメだったのであって、弾の挙動や機体の挙動に関しては極めてリアルな仕上がりを見せているこだわりの一品なのだから、安易にクソゲー認定すればマニアから袋叩きにされかねない。

それはともかく、ロボットという題材を扱ったVRMMOにおいて、GBNが異様なほどユーザーフレンドリーに作られている、というのは確かだった。

五つの標的、そのコックピットにあたる部分や頭部、手足などを撃ち抜いたり、ビームサーベルで斬り飛ばした末に、ウェーブクリアの通知がコンソールにポップする。

同時に、「まだ攻撃訓練を続けますか？」という問いも投げかけられていたが、リリカの答えは決まっていた。

「いいえ、つと……」

ウィンドウに表示された、「NO」の文字をタップして、オートパイロットに任せるがまま、リリカは次のウェーブへと機体を移行させる。

操作訓練が一通り終われば、あとは実戦あるのみだ。

そういわんばかりに、リリカが導かれたのは基地内でも一際広く、大きな模擬戦を行うためのエリアだった。

既にその場所では三機のガンプラ——極めて標準的な、ドラムガンとシールドで武装した「リーオーNPD」が、来訪者であり挑戦者であるリリカと、そして今彼女が駆っている初代ガンダムを待ち受けている。

流星にチュートリアルから先制攻撃を加えるようなルーチンは設

定されていないものの、リリカがロックオンマーカを向けると同時に、三機のリーオーNPDは散開する形で、その狙いを攪乱する。

「チュートリアルなのに……!?!」

すっかり頭から抜け落ちていたが、元々このチュートリアルミッションは他の三つをクリアしてからの攻略が推奨されるものだ。

AIの思考ルーチンはFランク相応に設定されてこそいるものの、ただ棒立ちになったまま散漫に射撃を繰り返すといった生易しきは浜かどこかに捨ててきたとばかりに、包囲戦術をのたのたと展開しながら、リーオーNPDはドラムガンを連射する。

「……こ、の……っ!」

リリカはそれをバク宙の要領で回避すると、正面に陣取っていた、カメラアイが赤く染まっているリーオーNPDに向けてビームライフルを放つ。

正射必中、というわけではないが、回避を判断するルーチンが意図的に遅くなるように組み込まれているその一機はコックピットに直撃を受ける形で見事に爆散する。

「やった……!」

一瞬、我を忘れて浮かれかけたりリリカだったが、まだ敵は残っている。

三方向からの包囲を諦めたリーオーNPDたちは、今度は一機を囲みに、もう一機が死角からの射撃を放つことで挟撃を行うという算段を決め込んだようだった。

しかし、Fランクのチュートリアルで出てくるモブがそこまで機敏に判断を下せるわけではない。

彼らがどこか逡巡したように立ち止まり、ようやく二手に分かれようとしたところに、空中で姿勢を立て直したりリリカのガンダムは、ビームサーベルを構えて斬りかかる。

「このっ……このっ、このおっ……!」

がむしやらに振り回したビームサーベルは、リーオーNPDの盾に防がれてしまう。

だが、その耐久値もチュートリアルである以上極めて低く設定され

ている以上は、長く持つはずもない。

リリカが振り回したビームサーベルを三発受け切ったことで限界に達したのか、シールドが接続されている左肩ごと胴体を袈裟斬りに切り裂かれて、黄色にカメラアイを発光させていたリーオーNPDは沈黙、爆散する。

GBNにおいては、被撃墜時の爆発も相手にダメージを与えるように設定されている。

無論。賛否こそあっても、それが仕様なのだからぼやいたところでどうしようもない。

思考補助に身を委ねる形でリリカは正面に盾を構えて、その爆発ダメージから自身のガンダムを守り立てた。

そして、幸運なことにもそれは残り一機となったリーオーNPDがようやく動き出した攻撃からも身を守ることにも繋がっていた。

ドラムガンから吐き出される実体弾が、ガンダム・シールドに弾かれてかん、かん、かん、と甲高い音をリズムカルに刻む。

だが、貸してもらったEGガンダムも素組みである以上、耐久値に極振りしているとかそういうわけではない。

シールドのゲージが削れていく感覚に焦燥を覚えつつも、リリカは、どうすればいいのかを頭に描いて、そのまま機体を前進させた。

「負けない……負けられない……!」

確かにシールドゲージは削れている。

だが、チュートリアルで出てくる敵が、果たして素組みとはいえそれを削り切れるだろうか。

答えは否だ。

それを実証するようにリリカはドラムガンの一斉掃射を受け切ったシールドを、おもむろに最後のリーオーNPDへと叩きつける。

もしも中身があつたのなら、大いに動揺していたことだろう。

そんな風情に硬直を晒して姿勢を崩した機に乗じて、梨々香は構えていたビームサーベルを青くカメラアイを明滅させているリーオーNPDのコックピットへと躊躇いなく突き立てようとした、その時だった。

自機のコックピットに、けたたましいアラートが鳴り響く。

それは敵機からの攻撃を示すものだった。

「どうして……？ チュートリアルなのに、ボスとか……ううん、違う、まさか……！」

『そうよ、そのまさかよー！』

PK。プレイヤーキルを示すその行為は、確かにハードコアディメンション・ヴァルガにおいては免罪符が発行されている。

だが、このメインターミナルエリアにおいて禁止されている以上、運営に目をつけられてもおかしくはないのだが、通信ウィンドウにポップした男の歪んだ笑顔は、そのリスクさえも楽しんでいるように映っていた。

あえてプレイヤーキル、それも初心者を嬉々として狙うようなダイバーがまともであるはずもない。

ビームを放ってきた、赤くずんぐりとした、いかにも重装甲ですと主張しているような機体——「アヘッド」を駆る男は、先程詐欺クリエイトミッションをふっかけてきた青年とは別人だったが、奇しくも同じアロウズという結びつきを持ち合わせていた。

反射神経でビームを回避したりリリカは、二機目のリーオーNPDへとトドメを刺す際に放り投げていたビームライフルを回収し、接近してくるアヘッドに狙いをつける。

『はっ、すつとろいんだよオ！』

だが、リーオーNPDと違って、対峙しているのは中身の入った——ダイバーの駆るガンプラだ。

リリカとしては即座に対応したつもりであったが、どことなく戦い慣れた雰囲気醸し出す男にとっては、欠伸が出るほどに遅く映ったのだろう。

リリカが構えたビームライフルは相手が放った粒子ビームによって破壊され、そして爆発から身を庇おうと体勢が揺らいだところに、次々とビーム弾が撃ち込まれる。

『さらさらさらさらア！ 初心者風情が一丁前に抵抗しないで、さっさとダイバーポイントになっちまえばいいんだよオ！』



ここは遊び場じゃねえんだからよ、と、口角泡を飛ばす勢いで捲し立てる男の姿は、鬼気迫るといった風情だが、やっていることは極めて情けない。

ただの初心者狩りでイキり散らしているだけだ。

頭では、リリカもそれはわかっている。

わかっているのだが、男の剣幕と、そして「ここはお前なんかの居場所じゃない」とばかりにぶつけられた暴言は、胸の奥に穿たれた傷跡を抉り、透明な、色のない血液をリリカの両眼に滲ませる。

「あ……ああ……っ……」

——だから、やめておかなければいけなかったんだ。

脳裏に冷たく響いた声は、男のものでは断じてない。

日々インターネットの海を漂う情報や文字列を斜めから読み飛ばしていた、他でもない自分自身の声がそうさせていた。

何を期待していたというのだろう。

期待したって無駄なことなんてわかりきっていたのに、浮かれて、そしていつも通りに隅っこへと追いやられて。

それでも、GBNなら変われると、そう思っていたのか。

リリカに問いかけ続けるその声は、紛れもなく「梨々香」のもので、そして、堆く足下に積み重なった、今日であった日々の死骸たちが、昨日が深淵から低く唸らせる呻きだった。

何をすればいいのかわかっている。

回避をしながら持っているビームサーベルで、接近戦を仕掛けてくるアヘッドというモビルスーツでありガンプラに反撃すればいい。

だけど、身体が動いてくれない。

涙を流して硬直している間にも、リリカのガンダムは放たれるビームに四肢をもがれ、地面へと倒れ伏していく。

今回も、ダメだったんだ。

リリカの瞳から零れ落ちる涙の粒が、一際大きくなっていく。

高校に入った時もそうで、どこかで何かを期待して——そして、裏切られる。

違う。叶わないのだ、最初から。

どうせ私のような根暗で、泣き虫な人間は負け組として隅っこで一人静かに暮らしているのがお似合いなのだ。

古傷から血が吹き出すように、滂沱の涙がリリカの頬を濡らす。

四肢をもがれて倒れ伏したE.Gガンダム——奇しくもそれはリリカがトドメを刺そうとしていたリーオーNPDと同じである——へと引導を渡すべく、アヘッドがずんぐりとしたその脚でヘリウムコアを踏みつけて、コックピットへとビームサーベルを少しずつ、ゆつくりと、弄ぶように突き立ててくる。

怖いだろう。そうやって怖がり続けるんだ。

それが何よりも楽しみなんだからよ、と口元を歪める男の哄笑と、過去のトラウマが重なり合って、リリカの視界が真っ白にホワイトアウトしかけた、その時だった。

『トライスラッシュユブレイド……コール！ EXカリバー！』

凜とした叫びが、リリカと男の鼓膜を震わせる。

そして、彼方から超速で飛来する黄金の極光が、男の駆るアヘッドを呑み込んで、テクスチャのチリへと帰せしめていく。

だが、足元で踏みつけられていたリリカのガンダムには傷一つついていない。

メインカメラが損傷したという設定から、レッドアラートが鳴り響くコックピットから見えるその姿にはノイズがかかっていたもの——極光を振りかざしたのは、確かに一機のガンダムだった。

リリカはまだ、その名前を知らない。

だが、蒼穹の下に粒子のマントをはためかせて君臨するそのガンダムは、紛れもなく——

『バカな、なんでチャンピオンが——』

『エマーゼンシーアラート……間に合っていたようだな』

機体が完全にテクスチャのチリに還る瞬間、PKを行おうとした男が口にした通り、滂沱の涙を流しながらもリリカが見上げるその機体こそ、そしてそれを駆るダイバーこそ、このGBNにおいて無敵を誇るチャンピオン、クジヨウ・キョウヤと、そして。

『初心者狩り……そんなことは僕と、このガンダムTRYAGEマグ

ナムが許さない……!』

ガンダムTRY AGEマグナム。ダイバーたちから一心に畏敬を集める最強の象徴に、救世主に他ならないのだった。

## 第四話「セイリング・デイ」

極光が過ぎ去った後に残ったのは、最強の証明だった。

正直なところ、リリカには何が何やらといった風情で今も頭の中には無数の疑問符が林立し、音の割れた音楽が流れ続けているのだが、チャンピオンが突然現れたことにはもちろんカラクリがある。

エマーゼンシーアラート。

それは、通常デイメンション内でプレイヤーキルに相当する行為が発生した場合、ガードフレームへの通報と同時に、周囲やサーバーに同接するダイバーたちに無差別の救援依頼が通知されるという、バージョン1.78から細かなアップデートとして実装されたものだ。

初心者からすればありがたいこの機能だが、戦っていたら突然PK行為が発生したのでアラートに割り込まれて被弾したのだ、アラートそのものが鬱陶しいなど、ダイバーたちには割と不評だったこともあって受信側は大体オフに設定しているためにとにかく影が薄かった。

しかしそこはそれ、初心者がGBNを楽しもうとしているところに水を刺すようなPKerを許してはおけないという義侠心に満ち溢れたダイバーだつて、アクティブ二千万人の中には存在しているわけで、そして、チャンプが他でもないその一人だったというだけだ。

突然のPKに困惑したのか、それとも単純にリリカの攻撃でダメージを負っていたからか、アクティブながらも行動を起こしていないリーオーNPDPを、チャンピオンはロングバレルのドッズライフルで撃ち抜く。

「さて、これで後顧の憂いは断ったか……君、大丈夫かい？」

そして、ガンダムTRYAGEMAGナムの機体をかがめて、四肢をもがれて頭部も半壊したりリカのカンダムを、俗にいうお姫様抱っこのような形で抱きかかえると、優しく、耳元で囁くようにチャンピオン——キョウウヤはリリカへと問いかける。

「……つく、ぐすつ、えぐつ……」

感謝をしなければいけないのはわかっていた。

だが、あまりにも怖くて、涙が溢れて止まらないのだ。  
悪意を向けられたのは初めてではない。

初めてではないが、だからこそリリカはその痛みを、恐怖を知っていたために、子供のように泣きじゃくっていた。

思えば、高校生になる前だっただけそうだった。

いつも誰かと比べられて、そして劣っているからこそ、リリカの――「蔵前梨々香」の現実における居場所はいつだっただけ教室の隅っこだったし、だからこそ一念発起して高校では明るい自分になろうとしたのだが、その結果はもはや語るまでもない。

「……怖かっただろう。始めたばかりの君にこんな思いをさせて、チャンピオンとして……いや、GBNをプレイする一人のダイバーとして、本当に申し訳なく思っている」

「……ぐすつ、うえええ、んっ……」

「だが、もう大丈夫だ。君を付け狙う危険は存在しない」

存在したとすれば自分が実力を以て排除する、とばかりに、キョウヤは穏やかな笑みを浮かべながらも、その語気には強い感情を宿して、リリカへと断言する。

そして、キョウヤがアライアンスとして現れ、最後のリーオーNPを撃破したことでミッションが達成されたと判断したのだろう。

機械音声が「Mission Success!」と無機質に通知を下すと同時に、リリカの躯体と、そしてキョウヤの躯体はテクスチャへと解けて、意識はロビーに転送されていくのだった。



「……………ごめん、なさい。私……………お礼、言わなきゃ、いけないのに……………」

ロビーに帰還した後も、リリカはしばらく泣きじゃくっていた。

ようやく言葉が絞り出せるようになって、嗚咽が挟まることでそれは上手く形になってくれない。

それほどまでにリリカは、悪意を向けられたことが、怖かったのだ。

だが、その間にもキョウヤは決して彼女を見放すことなく、傍らで優しく、そして静かにリリカが泣き止むのを黙して待ち続けていた。「いいんだ。君のように繊細な子を付け狙うダイバーがいる……それは僕にとつても許しがたいことだ。それに、君の気持ちもわかる、というのは傲慢かもしれないね」

キョウヤも悪意をその身に受けることには慣れきっていた。

当たり前、というのも嫌な話ではあるが、このGBNにおいて、チャンピオンとして不動のまま座を譲ることなく君臨し続けている偉業を称える者もいれば、それを快く思わない者もいる。

何より、キョウヤが駆け出した時代は、もつとGBNの治安は混沌としていて、PKerを示すものもレッドネーム……ダイバーネームが赤く染まるだけで、PKerをキルする行為、PKKにはペナルティが課されない、という杜撰な対策しか施されていなかったのだから。

無論、キョウヤは狙ってきた相手をことごとく返り討ちにしてきたからこそ今もチャンピオンとして君臨し続けているのだが、そこは割愛しよう。

「……キョウヤさん、強いんですね」

「はは、まさか。そう言ってくれるのは嬉しいけど、僕は臆病な男さ」オフレコでお願いするけどね、と、付け加えて、リリカの言葉へ冗談交じりにそう返したキョウヤは茶目つ気たつぷりに笑ってこそいたものの、その「臆病」という言葉は本心から出たものだ。

リリカはそれを意外に思ってこそいたが、そこに本心が含まれていることもわかっていた。

悪意を見抜けるということは、善意を感じる力があるということでもある。

良くも悪くも繊細なリリカは、そういう他人の心の機微に聡いところがあった。

「……臆病、ですか？」

「そうさ、いつも最強の……最高の存在でありたいと思うからこそ、誰にも付け入る隙を与えないように立ち回る。それは言い換えるのな

ら相手の攻撃が怖いから避けたり防いだりする、ということさ」

「……怖いから……」

「だから、怖がりなのは決して悪いことなんかじゃない。こんな体験をさせておいて言うのもおこがましいかもしれないが……君がこれからG B Nを続けてくれるのなら、それは大きな武器になる」

キョウヤの言葉に嘘がないことは、リリカにもわかる。

だが、臆病なことが、怖がりで泣き虫な自分が「いいこと」なのかどうかについてはまるで判然としないだけだ。

この性格のせいで、いつだって自分はすみっこに挟まって、息を潜めるように暮らしてきた。

だからこそ、臆病さを、そして弱さを肯定することはリリカにとっては難しい。最難関だといってもいい課題だった。

それでも——不思議と、このG B Nで最強のチャンピオンが、幾たびの戦いを超えて不敗伝説を更新し続けている人が、自分を「臆病」と評していることは、意外でこそあったが、リリカの中に何か言語化できない、温かな熱を滲ませている。

変わりたくて、繋がりがたくて、仮想の世界に手を伸ばした。

リリカはそつと目を伏せて、ノイズがかかったモニターに映った最強の証明——【ガンダムTRY AGEマグナム】の姿を脳裏に描く。

もしも、おこがましいのはわかっているとしても、自分がチャンピオンと同じ、「臆病」なら、そしてそれがいいことなら。

今まで感じたこともないような熱が、いつも流していた涙とは少し違った、痛みではなく温かな感情の発露としてのそれがこぼれ落ちることを促して、リリカは再びはらはらと落涙する。

「……わ、私……」

「どうしたんだい？」

リリカの呟きに帰ってきたキョウヤの言葉には、どうしたいのか、という問いかけが込められているような、そんな気がした。

正直にいつてしまえば、自分を発露することは今でも怖い。

下手なことを言って、クラスメイトたちから物笑いの種にされたり、面白いと思つて言ったことが上滑りしたりと、いつだってリリカ

のコミュニケーションは不全で、レッドアラートを掻き鳴らし続けている。

それでも、必死に手を伸ばし続けてきた。

誰かと繋がりがたくて、いつも教室の隅っこで見ているしかなかった、陽のあたる場所に向かいたくて。

だからこそ、リリカはいつだってがむしやらに頑張ってきたのだ。

その軌道は上滑りして、結果は不全に終わっても。

リリカは、確かに挑戦者、チャレンジャーだった。

不屈とは行かず、脆くヒビが入った心を抱えながら、すー、はー、と、何度も呼吸を整えて、リリカはチャンピオンの問いかけに、精一杯の勇気を持って答えてみせる。

「……変われ、ますか……？　チャンピオンみたいに……キョウヤさんみたいに、なれますか……？」

心臓がばくばくと早鐘を打つ。

変なことを言っていないだろうかと、一語一語を確かめるように発話したりリリカは、きゅつと目を瞑って、どこか祈るような心境でチャンピオンへと問いを返した。

臆病な自分。泣き虫な自分。

何をするにも空回りばかりで、足跡ばかりが、その度に諦めと共に朽ちていった今日であった日々の死骸が堆く積み上がるような、そんな日常にいつだって嫌気が差していた。

だからこそ、それがリリカにとっては、ガンダムもガンプラも知らない中で、唯一持ち合わせてきた「理由」に他ならない。

GBNを始めただけで変われるだなんて、失笑されるかもしれないけれど。

動画の中で見た「リビルドガールズ」たちのように、誰かと繋がりがあえるかどうかなんてわからないけれど。

それでも今、目の前にいるチャンピオンは、クジヨウ・キョウヤという一人の青年は、リリカの言葉を馬鹿にせず、真摯に受け止めてくれる気がしたのだ。

だからこそ、リリカは涙と共にその問いを、必死にいつも投げかけ



続けていたエマージェンシーコールを、受け取って欲しいという願いと共に託す。

「……ああ。なれるとも。クジヨウ・キョウヤには誰でもなれる」

そして、チャンピオンは、キョウヤは決してリリカの涙交じりの問いかけを否定することなく、笑顔で首肯してみせる。

勿論、王座に手をかけようとする挑戦者になるならば、そこに一切の加減をするつもりはないが、誰だつて自分のように、臆病でも、弱くとも、「ガンプラが好きだ、GBNが好きだ」という気持ちさえ持っていれば、そのスタートラインに立つことはできるのだ。

「……キョウヤ、さん……」

「これは僕のフレンド申請だ。君が……ここまで上り詰めてくることを楽しみにしているよ、リリカ君」

キョウヤからのフレンド申請を受け取つて、リリカもまた申請を送つたのを確認すると、それを受諾したキョウヤはクールに踵を返して、雑踏の中に溶け込んでいく。

それは果てしなく迂遠で、どこまでも先の見えない道のりなのかもしれない。

だとして、それが何になるだろう。

リリカははらはらと涙を零しながらも、確かに心の奥底で、これから旅立つ者に向けられたエールを、「クジヨウ・キョウヤには誰でもなれる」というその言葉を噛みしめる。

まだ悪意に晒されるのは怖い。GBNをもう一度始めるのに躊躇いがないこと問われて、すぐに首を横に振ることだつてできやしない。

それでも、リリカの中には強い理由が、確信があった。

歯を食いしばって、涙を流しながらもこの仮想郷の土を再び踏むだけの動機が、リリカの心臓を拍動させる。

——ガンダムTRYAGGマグナム。

その姿にはノイズがかかかってよく見えなかったけれど、それはリリカにとつての憧れであり、そして。

「……私も……できる、かな……」

紛れもない、この電子の大海へと帆を張り漕ぎ出す、始まりであった。



「お帰り、その調子だと……何か良くないことでもあったのかな」

レンタルしていたE Gガンダムをインフォメーションカウンタ―に返却した梨々香の目は赤く泣き腫れていて、マツムラも、思わず心配をかけてしまう。

「えつと……大丈夫です、はい……」

だが、その目の奥に宿っている輝きは、かつてGBNではなくGP Dが一斉を風靡していた頃、愛機が無残な姿になって涙を零しても、次の日にはシーサイドベース店を訪れているようなプレイヤーとよく似ていた。

それでもどこか危うさがあることは否定できない。

E Gガンダムを受け取って、梱包材に包みながら、マツムラは梨々香に聞こえないように小さく嘆息する。

とはいえ、ここからは個人の問題だ。

あくまでも客と店員という問柄で踏み入ってはいけない領域だと理解しているからこそ、あえてマツムラは何もいうことはなく、シヨップिंगブースへとふらふらと向かっていく梨々香の背中に、「頑張れ」と視線でエールを送る。

「店長、本当にあの子大丈夫ですか？」

「それは流石に店員とお客さんの間では触れられない問題だよ、愛香ちゃん」

「まあ、それはそうですけど……」

モツプに細い顎を乗せていた少女、朝村愛香はマツムラ店長のどこか煮え切らない答えに釈然としないものを覚えながらも、確かにその正論には抗えず、お手あげだとはかりにため息をついてモツプがけを再開する。

「……なんだか、会ったばかりの頃の絵理みたい」

愛香が呟いたその言葉は、果たして梨々香に届くこともなければ、届いたとしても理解されることはない、他でもない愛香自身がよくわかっていた。

だからこそ、愛香は店長にどやされる前に、そそくさと無心で床にモップをかけるのだった。



人と話すのには勇気がいれば、体力だって使う。

それが例え会計という事務的なものであったとしてもだ。

梨々香はガンダムベースシーサイドベース店から帰るなり、真っ暗な部屋に置かれているベッドにその身を投げ出して、深く、長い溜息を吐き出す。

チャンピオンが使っていたガン프라であるガンダムTRYAGEマグナムは、そのレプリカモデルが新規金型をわざわざ起こす形でガンプラの版元が作ってくれていたのだが、生憎シーサイドベース店にその在庫は存在しなかった。

ガンプラのガの字も知らない梨々香にとって、代わりを探すのは骨が折れた。

それでも、どうにかノイズの中で見抜いた特徴に合致していた、映像作品「機動戦士ガンダムAGE」シリーズの主役機であるガンダムAGE-1ノーマルと、そして幾つかのキットとニツパー、紙やすり、エポキシパテ……そしてダイバーギアが、机の上に置いた袋の中には詰まっている。

それは紛れもなく、梨々香が梨々香自身の手で勝ち取った結果に他ならない。

真っ暗闇の中で目を伏せれば、目蓋の裏には星座が浮かぶように、今日の出来事がフラッシュバックしてくる。

あの仮想郷にもう一度向かいたいかどうか、梨々香は己に再び問いかけてみた。

だが、答えなんて最初から決まっている。

梨々香は、部屋の電気をつけて、買ってきたガンプラたちの中からまずはガンダムAGE―1ノーマルの箱を開け放つ。

ガンプラというのは値段に対して狂氣的な色分けと組み立て易さを実現した狂気の産物ではあるが、それでもランナーの量に梨々香は少しだけ気圧されてしまう。

それでも。

「……私も、あなれるかな……」

内袋を開く手に迷いはない。

アクティブユ―ザー二千万人の頂点に立ちたいというわけではないが、それでもいつかどこかで誰かと一緒に、あの世界を旅してみたいという気持ちだが、今の梨々香を突き動かしている。

忘れかけていたが、あの世界の空は確かに綺麗だったのだ。

ぱちん、ぱちんと小気味よく部屋の中に響く音は、どこか雨が降るのにも似ている。

説明書に記されたパーツを、二度切りと呼ばれる、ゲートをちよつと残して切り離し、残ったものを再度切り飛ばすという工程を丹念になぞりながら、梨々香はガンダムAGE―1ノーマルを組み上げていくのだった。

## 第五話 「梨々香、その決意と誓い」

梨々香は、ガンプラを組むのは初めてだった。

それ故に、組んでみてわかったことがある。

「……なんで、ガンダムって手足が二本あるんだろう」

その答えは人型だから、に他ならないが、完成を急ぐ心が焦りを生み出すのと、そして、二度切りとゲート処理という作業を並行して行わなければならぬ都合上、どうしても同じパーツ構成かつ、部品の多い手足という部分は億劫になってしまふところがあるのもまた事実には違いない。

ただ、焦ってゲート跡を思い切り抉ってしまったらすれば、それはGBNにおいて144倍に拡大された「傷」となってしまう。

パーツを二度切りで切り出して、そこに番手の荒いペーパーから順に当てて、と、およそ初心者らしからぬ凝った工程で、概ねAGE-1ノーマルを組み立てていく梨々香だったが、なんということはない。

事前にガンプラを組むために必要な工程をネットサーフィンで調べていただけの話だ。

とはいえ、そんな煩雑なことをしなくともニツパーそれ一本で関係することを版元が売り文句にしている以上、ゲート処理やペーパーがけ、そしてこの後に待ち受けている工程はほとんど趣味の領域だといつても差し支えはない。

だが、趣味だからといってそれを軽視したり手を抜いて良い理由はどこにもないのもまた事実である。

梨々香は、いつてしまえば凝り性だった。

遊びだからこそ本気になれる。

詠み人知らずのその格言に突き動かされるまま、梨々香は切り離したパーツの「面」を出すように、そして「角」を潰してしまわないように意識しながら、ニツパーでは完全に均しきれなかったパーツを平滑に磨いていく。

実を言ってしまうえば、梨々香のAGE-1、それ自体はほとんど完

成していた。

机の上には、同じ工程を踏んで丹念に作られたガンダムAGE―1ノーマルの胴体が、さながら胸像のように鎮座している。

梨々香が今作っているのは、同時に買ってきたガンプラ……同じく機動戦士ガンダムAGEを出典とする機体、「Gバウンサー」だった。あのノイズと極光の中で、ガンダムTRYAGEマグナムの勇姿はほとんど拝めずじまいだっただが、とにかく疾く、そして力強かったことと、胴体の部分がAGE―1ノーマルに似ていたことだけは辛うじて覚えている。

レプリカモデルが売り切れている以上、今から梨々香が作り出そうとしているのは、自分なりにTRYAGEマグナムを解釈して作り出したオリジナルのガンプラ、ということになるが、やはりというかなんというか、一個キットを作るだけでも大変なのに、複数のそれを混ぜ合わせるという労苦は凄まじいものがある。

それでも――噴き上げてくるこの疲労感も含めて、梨々香はそれを嫌いにならなかった。

自分が何かを作っている、そして少しずつ思い描いた形に近づいていく。

確かに完成を焦る気持ちこそあるものの、それさえどこか愛おしく思えてくる。

ぱちん、ぱちん、とパーツを切り離し、ゲート跡をサツと均して――そんな繰り返しの際てにようやく、Gバウンサーの手足は完成する。

機動戦士ガンダムAGEを出典とするガンプラは、今日に通じる共通規格で構成されていることが大きな特徴だ。

厳密に言えば、「機動戦士ガンダム00」セカンドシーズンに発売されたキットも設計上、共通の処理をされている部分もあるのだが、明確な組み換え遊び――「ゲイジング」を前面に押し出して発売した、という意味での先駆者はAGEになるだろう。

メーカー側の努力もあって、作り上げたAGE―1ノーマルの胴体に、Gバウンサーの下半身とそして腕を接続する工程は、驚くほど呆

気なく終わった。

そして梨々香は、組み上がった自分だけのAGE―1を見て、安堵と感嘆が入り混じった息を小さく吐く。

「わあ……出来た、出来るんだ、私なんかにも……」

それだけでもガンプラバトルに出して差し支えないミキシング―  
―厳密にはコンパチブルモデルだが―ガンプラが、勇ましく机の上を大地に立っている姿にこみ上げてくる感動に目を潤ませながら、梨々香はもう一つ、購入してきたガンプラの箱を取り出した。

ガンダムAGE―3オービタル。それは宙間戦闘を目的とした第三世代にあたるキオ編の主役機だが、ミキシングに採用する部分是最初から決まっている。

ぱちん、と、梨々香はAGE―3オービタルに着く、肩部後ろのスラスターとバックラーを一つ切り出して、それらのゲートをまとめて処理していく。

「えっと、確か……エポキシパテが必要なんだっけ」

ガンダムTRYAGEマグナムを横から見たその姿はぼやけてこそいたものの、腰の部分から大きく伸びるスラスターがあつたことだけは辛うじて、梨々香も記憶に留めていた。

だが、説明書を読む限り、オービタルのスラスターと、本来であればサーベルラックが懸架されているGバウンサーの腰では接続方法が大いに異なっている。

それをなんとかする魔法の、とまではいかなくとも便利アイテムが、エポキシパテなのだ。

乾燥する前は粘土のような質感を持っているそれは、時間をかけて硬化させてやればプラスチックに匹敵する硬度を持った塊に変化するため、主にモデラーが肉抜き穴を埋めたり、自作のパーツを作ったりするときに使われるものである――というのが、事前に調べた知識だったが、触るの自体はガンプラ同様、今日が初めてだ。

梨々香は、使い捨てのビニール手袋を両手に嵌めて、黄色の主材と白い硬化剤を目分量ながら均等に切り出して、それらをこねるように混ぜ合わせていく。

そこだけ見てみれば、プラモデルというよりなんだかパン生地を作っているような心地だったが、実際、土台や下地となるという意味では確かに似通った所があるのも事実だった。

主材と硬化剤がマーブル模様を描かず、均等に混ざり合ったことを確認すると、梨々香はAGE-3オービタルのスラスタ、本来であればポリキャップが収まるべき隙間にそれを充填していく。

「最初は、少しはみ出るくらいでいいんだっけ？ でも、別なポリキャップを埋め込まなきゃいけないから……」

梨々香は一人、机のスタンドライトのみが照らす部屋で、ああでもないこうでもないと思ひながら、今回は肉痩せ——パテが硬化した際に面積が減る現象を考慮せずに、丁度びつたりと収まるような配分でパテを詰める。

誤差だよ誤差、で済まないのが144倍に拡大されるGBNの世界ではあるが、梨々香が買ったエポキシパテは、それなりにお値段がするものの、削りやすく、そして肉痩せしにくいことを謳い文句にしたメーカーのものだ。

GPDが全盛だった頃は、扱いの難しいプラネットコーティング対応パテを使わなければ上手くコーティングが定着してくれないというトラブルもあったようだが、後期には改善され、そしてガンプラバトルの主戦場がGBNに移行した今ではレジンやポリパテといった素材も、メーカーを選ぶことなく気兼ねなく使えるというのも大きなメリットだろう。

オービタルのスラスタにパテを詰めたのを確認すると、梨々香は慎重にその平面へ、腰に接続するためのポリキャップを埋め込む。

理論上はこれでオービタルのスラスタをGバウンサーの腰に接続することができる筈だが、試せるのはエポキシパテが硬化しきってからのお話だ。

「ふ、う……」

梨々香は使い捨てのビニール手袋を脱いでゴミ箱に投げ入れると、一作業を終えた安堵に、額に浮かんだ汗をそっと拭いた。

きつとあのチャンピオンは、キョウヤさんは、こんな工程をいくつ



も、そして幾度もこなしてきたからこそ最強の座に君臨し続けているだろう。

恐らくキョウヤはそれを苦としないタイプの人間なのだろうが、それでも、おびただしい手間と暇と金を持っていかれるこの作業を完璧にこなした偉大な先達たちに、梨々香は尊敬の眼差しを向けざるを得なかった。

とはいえ——まだ、完成度としては80、いや、60パーセントと行ったところだろう。

AGE-1の上半身に、Gバウンサーの手足と下半身という、まだ名前を持たないミキシングビルドを一瞥して、梨々香はすっかり凝り固まった肩をほぐすように、ぐっ、と背筋を大きく伸ばす。

「……頑張ろう、うん……」

頑張る。無意識だったが、その言葉が自分の口から飛び出てきたことに、梨々香は驚いていた。

いくら頑張っても無駄だと、どうせろくでもない結果に終わるのだと、いつだってそう思い続けてきたのが、梨々香の半生だ。

それでも、諦めたくなかった心がそうさせたのか、或いはGBNでの出会いがそうさせたのか、そうでなければ。

——そうでなければ、このガンプラがずっと、自分にエールを送り続けてくれたからなのだろうか。

御伽噺だ、と笑いながらも、梨々香は完成を待ち、堂々と机の上に立っているガンプラに視線を合わせて、にへら、と緩んだ笑みを浮かべる。

「そうだったら、いいな……」

御伽噺は嫌いじゃない。

いつか魔法が解けてしまおうとしても、読んでいる間だけは魔法にかかれるから。そして、かける側にはきつと自分は回れないから。

梨々香が振り返る己の半生の中で、ガンプラとGBNが登場するのは僅か一欠片、宙を舞うひとひらの塵のようなものなのかもしれない。

それでも——梨々香は、世界を変える力に出会った。

ガンプラと、GBNという仮想郷が見せる夢と未来にはまだ遠いか  
もしれないが、確実にその一步を踏み出したことは、確かだったのだ。



再び訪れたガンダムベースシーサイド店は、平日の真っ昼間である  
にも関わらず、やはりというかなんというか人でごった返していた。  
それだけガンプラとGBNが生み出したブームというのは凄まじ  
いのだろう。

人波に揉まれて挫折そうになりながらも、梨々香は梱包材で丁寧に  
包んだ上で工具箱に保管したガンダムAGE-1ノーマルとGバウ  
ンサーを守るかのように、豊かな胸元に押し付けながら、今度は一路  
ゲームブース……ではなく、制作ブースを目指して歩いていく。

制作ブースは、確かにそれなりの利用料金こそかかるものの、設備  
として置いてある塗料や工具が使い放題だというメリットがある。

そして一軒家に住んでいるとはいえ、エアブラシとコンプレッサー  
を持っていない梨々香が、思う形にこのミキシングビルドを仕上げる  
には、それらの力が不可欠だったのだ。

どうしても家で塗装したいなら缶スプレーを買うという手段もあ  
るといえばあるのだが、調べた限り缶スプレー塗装はどちらかといえ  
ば上級者向けで、その情報を信じるのなら、ハードルこそ高いものの  
エアブラシが最適解である、ということになる。

「いらっしやい」

「……あ、え、えつと、その……制作ブースを……」

インフォメーションカウンターに座しているマツムラ店長へ、勇気  
を振り絞って話しかけながら、梨々香は制作ブースをそつと指差し  
た。

「制作ブースを利用したいのかい？ なら料金はその看板に書いて  
ある通りで、ツールは使い放題だから、わからないことがあったら  
いつでも聞きにきてね」

挙動不審を極めていた梨々香の言葉を丁寧に汲み取って、マツムラ

店長はよつこらせ、と立ち上がると、今は利用者が一人もない制作ブースへと梨々香をエスコートする。

シーサイドベース店が混んでいる理由は様々だが、その多くは限定のガンプラが発売されたから、だとか、GBNをやりに来た暇な大学生だとか平日休みの社会人がいるからだとか、そういうものが主たる理由だった。

そして、今日混んでいたのは不幸にも新作のガンダムベース限定ガンプラである「HGCEゲルズゲー リミテッドクリアエディション」が発売したからなのを、梨々香は知らなかった。

そんな不幸なのか幸運なのかわからない巡り合わせに翻弄されながらも、梨々香は制作ブースをレンタルするなり、胸に抱え込んでいた工具箱の中から丁寧に、まだ名前のないミキシングビルドを取り出して、机の上に置いた。

オービタルのスラスターに詰めていたエポキシパテも、一日を置いたことで完全に硬化している。

まずはそれが嵌るかどうかを試すべく、梨々香はGバウンサーのサーベルラックを取り外して、初めて加工したそのパーツを取り付けていく。

「わ、やった……！」

果たしてそれは梨々香の計算通り、ぴたりと腰に収まってくれた。

念のために反対側でも、そしてもう一つある方でも同様の工程を試してみたが、接続には問題がなかったし、ポロリと取れる気配もない。

初めてにしては随分センスがいい、と、小躍りする梨々香を横目に、マツムラはその姿に在りし日のクガ・ヒロトを重ね合わせていた。

否、ヒロトだけではない。

きつと誰しも、そうやって始まっていくのだ。

最初は簡単に見えるかもしれないミキシングを足がかりに、或いは原作の再現を徹底的にこだわったり、いきなり背伸びをしてディテールアップから始めたりとばらばらでこそあるものの、そこにある動機や理由はただ一つ、変わることはない。

——大好きを、諦めない。

かつて「ビルドダイバーズのリク」が世界に向けて言い放った台詞をなぞるように、梨々香はオービタルのスラスタに最後の仕上げであるペーパーがけを行ったり、Gバウンサーのシールド基部から切り出したパーツを、オービタルのサーベルラック兼バツクラーに接着したりと、目を輝かせながらそんな作業をこなしている。

少しずつ積み重ねてきたものは、そして足跡は、確実に今、形を成そうとしていた。

そしてとうとう出来上がった「自分だけのガンダム」を今度は分解した上で、梨々香は一つずつ、必要な色ごとに分けてそのパーツをクリップに挟んでいく。

「もうすぐ、だからね……」

マツムラ店長には聞こえないようにガンプラへと囁きかけて、梨々香はまず一番色数の多い、白成型のパーツから塗っていくことにした。

下地として使うのは定番のグレーサフ。青という濃い成型色の部分も白に染め上げたいのだから、ホワイトサフでは若干隠蔽力が足りない、と判断したわけではなく、ただ単にサーフェイサーと書いてある缶を手にとっただけだ。

だが、梨々香のその行動は結果的に正解だった。

シロッコファンが唸る音を響かせるブースに、猫の爪とぎのような段ボール製のクリップ立てを慎重に運んで、梨々香はサーフェイサーを優しく吹きつける。

それだけで、白成型のパーツも青いパーツ……AGE-1ノーマルの胴体もライトグレー、一色に染まっただけのだから既に達成感を覚えてしまう。

いわゆるサフ萌えに陥る前に、食器洗浄機を改造したドライブブースにサーフェイサーを吹いたパーツを放り込んで、次に色数の多い関節部分には、それ単体で関節色として使えるダークグレーのサフを、そして数少ない赤色の部分には下地としてピンクサフを、という工程を繰り返すこと数時間、グレーサフの上から吹きかけた、どこか鉄のようなグレーがかかった質感のホワイトも見事にパーツを染め上げてい

た。

「やった……！」

ドライブースでの乾燥を経ているから、ペンキ塗りたてとまではいかないものの、塗料特有の光沢を放っているそれを組み上げてみて、梨々香はイメージ通りに仕上がったその出来栄えに、胸の奥を柔らかなものでも締め付けられるような感触を覚える。

ああ。まだ、トップコートが残ってこそいるけれど、思い描いた姿がここにある。

ダクト部分と首の基部、元はイエローだった部分はダークグレーに、そして追加したアンテナをはじめとした本体の殆どは白で、色を引き締めるように胴体の赤はそのまま残し、腰との接続部分はあえてグレーで塗っているそれを、最早ただ「ガンプラ」と呼ぶのは無粋だろう。

「よろしくね、ガンダムAGEー1ブランシユ……」

それは、何にもまだ染まっていない色の名前。

そして、これから何かを始めようとする、真つ新たな世界に引かれた白線。

塊単位でバラして、トップコートを吹き付けながら、梨々香は小さく、しかし確かな決意を込めて——箱を開けた瞬間から、ずっと温め続けていたその名を、愛機にして相棒の名を呟くのだった。

## 第六話 「ブランシユ、大地に立つ」

艶消しのトップコートを施されたことで完成を迎えたガンダムAGE-1ブランシユ、その勇姿は、梨々香にとってはただ眺めているだけで充足感が湧いてくるような出来栄であった。

実際、既存キットを自分専用カラーに塗り替えるというだけでも手間暇がかかる塗装作業をこなした果てに、思い描いた通りの形が出来上がったのなら、そこに充足感を覚えるのは自然なことだ。

だが、梨々香がブランシユを作った理由は、飾って嬉しいコレクションにするためではない。

ドライブースという文明の利器によって、自然乾燥よりも遥かに早く仕上がった己の愛機を手にとると、梨々香はどこか恍惚とした目で、シールによって光を灯したその双眸をじっと見つめる。

ELダイバーや、一部の人間……共感覚、シナスタジアを持つ人間であればガンプラの声が聞こえるらしいが、梨々香にはまだAGE-1ブランシユの声は聞こえない。

それでも、早く旅立ちたいと、あの空を飛び、大地を駆け、海を征きたいと、そう願っているように思えたのだ。

「あ、あのっ。これ……」

「利用料金ね。はい、確認したよ」

恐る恐るといった風情で、梨々香は財布からそれなりの制作ブース利用料金をマツムラ店長へと手渡すと、震える手で代わりに帰ってきた領収書を受け取った。

人と話すのはまだまだ怖い。

それでも、きつとこの人は悪い人じゃないんだろうな、と、梨々香の中で直感がそう告げる。

実際、マツムラ店長は気前の良い人として常連客からは「ケンさん」の愛称で親しまれているし、梨々香は知る由もないが、バイトである愛香やヒナタ——ムカイ・ヒナタ、ヒロトの同級生である——からの評判も決して悪いものではない。

シーサイドベース店にこの人あり、と言わしめるまで彼がどんな

キャリアを積み上げて、そこにどんな苦労があったのかもまた梨々香にはわからないことだった。

だが、マツムラ本人からすれば、いつだってこんな風にガンプラを手にとって目を輝かせている誰かを見ていられることが至上の幸せなのだ。

代金を受け取るなり、そそくさとゲームブースに足を運んでいく梨々香の背中を見送りながら、マツムラはそこに、かつてこのシーサイドベース店を訪れた客たちの姿を、そしてヒロトの姿を、愛香の姿を重ね合わせて小さく微笑む。

「あの子も、何か見つけられたみたいでよかったですね」

ちようど梨々香とすれ違う形で、棚卸しの作業を終わらせた愛香は、どこか満足げな顔をしているマツムラ店長に向けてそう言った。

それは他でもない、愛香自身もかつては追い求めていた何か。

そして仮想郷に潜り、希求し続ける理由。

「愛香ちゃんも随分と風格が出てきたねえ、流石は『リビルドガールズ』の切り込み隊長つてところかな」

「あはは……いや、そんなことないと思うんですけどね」

どこか冗談めかしたマツムラ店長の言葉に苦笑しながら、「リビルドガールズ」きつての武闘派扱いされている己の現状を鑑みて、愛香はがくり、と、肩を落とすのだった。



ダイバーギアの上にガンダムAGEーブランシュをセットして、ゴーグル型のデバイスを装着すれば、「蔵前梨々香」の意識は解けて、仮想と電脳の海の中でダイバー、「リリカ」として再構築される。

特に何も考えず、リアルネームをそのままダイバーネームにしたリリカだったが、あの時はGBNへの期待で頭がいっぱいだっただけで、今思えば少し凝った名前を付ければよかったのだろうか、と、小さな後悔に胸がちくりと痛む。

蔵前と梨々香をもじって「クラリス」だとか……などと、ロビーに転送された後もリリカは小首を傾げて考え続けていたものの、悩み続けている時点で答えなんて出ないものだ。

だからこそ、問題を先送りにする形でリリカは、初心者狩りに出会わないことを祈りながら、しばらくロビーを散策する。

「……濃いなあ、GBNって」

周囲を見渡してみれば、ガンダムのキャラになりきったアバターをメイクしている王道派のロールプレイヤーもいれば、己の趣味を限界まで積み込みました、とばかりに属性過多なダイバーもいて、それぞれが、忙しくロビーを闊歩している。

中でも埴輪か粘土細工にガンダムのアンテナやザクのモノアイを貼り付けたような独特の質感をしたダイバールック——ピキリエンタポールズというらしい——だとか、リリカはその出典を知らないものの、漫画作品「機動戦士クロスボーン・ガンダム」に登場するキャラクター、ザビーネ・シャルの格好をしながらも両眼に眼帯をつけているという奇妙な出で立ちのダイバーが一際目を引いていた。

「……つと、いけない。ミッション受けなきゃ……」

消え入りそうな声で呟くと、ダイバー観察をやめて、リリカは受付ロボットのNPDに、例によっておすすめのためのミッションを問う。

「ログイン二日目のお客様には、こちらがおすすめとなっております」  
応答するなり、一秒もかからず多くのミッションをリストアップしてくれるあたり、GBNに実装されているAIの技術も相当なものなのだろう。

前回とは打って変わって、ずらりとリストに並べられたミッションの数は膨大で、どれを受けたものかとリリカは逡巡する。

採取ミッションが一番楽なカテゴリであることは、己のダイバーランクが最低値であるFであることから察せられるが、心機一転、愛機を作り上げたのだ。

ならば、その初陣を飾るのはバトル系のミッションがいいと、リリカはタブを操作して、戦闘関連のミッションへと絞り込みをかける。

Fランクダイバーに与えられるミッションはどれも似たり寄った



りといった風情ではあるが、それでも対MS戦なのか、対MA戦なのか、あるいはどの作品の機体と戦うかによっても、その難易度は大きく変わってくる。

ただ致命的なのは、リリカにガンダムの知識がほとんどないことだった。

グルドリンだのザムザザーだの言われても、どれが強いのか、そしてどれが戦いやすいのかなんて判別がつかはずもない。

ほとほと困り果てた末にとりあえずリリカが選んだものは、「ガンブラ、大地に立つ」というリストの一番上に表示された初心者向けのミッションだった。

「えっと……じゃあ、これで……」

「承りました。お客様の武運をお祈りしています」

ペこり、と折り目正しく腰を折ってお辞儀をする辺りもよく作り込まれている、と感心している間に、リリカの意識は解けて、ロビーから格納庫エリアへと転送されていく。

ガンブラ、大地に立つ。

それは他でもない、映像作品「機動戦士ガンダム」の第一話をオマージュしたものであり、スペースコロニーサイド7を模したステージで、ザク二機と戦うというミッションだった。

勝利条件はザクの撃破。

敗北条件は自機の撃墜。

極めて単純明快な討伐系ミッションではあるが、何せクソゲー遍歴があるとはいえ、リリカはまだまだログイン二日目のダイバーにすぎないのだ。

出撃前のブリーフィングフェイズとして与えられた数十秒という時間の中で、リリカは自分の頬をぴしゃりと叩いて、気合を入れ直す。

「あいたた……擬似感覚、ここまでフィードバックされるんだ……」

とはいえ、その痛みは擬似感覚としてひりひりと、ダイレクトに頬へと伝わってくるのだから気合を入れるというよりかは、出鼻を挫かれたような気分になる。

肩を落としてつつも、落ち込んでいる時間はない。

感じるのはGや上昇する感覚ではなく、何かに覆われているような闇の暗さだ。それは奇しくもどこか、遮光カーテンを閉め切った自分の部屋によく似ていた。

このミッションは、いつも通り搬入口からカタパルトへと機体が運ばれていくのではなく、今回は野ざらしになっているトレーラーに仰向けで乗せられるという特殊なスタートが設定されている。

だからこそ、立ち上がるのにはカタパルトの補助ではなく自身の操縦が必要になってくる。

「え、えつと……リリカ、頑張ります……！」

早速レーダーに敵機を示す赤い点が二つポップしたのを確認すると、リリカは自身のガンダムAGE-1ブランシユを覆っていた布を勢いよく剥ぎ取って、その白亜の機体を円筒の大地に直立させる。

双眸に灯す光は黄色。HGのAGE-1に余剰パーツとして付いてくる蓋パーツをセットしたことで「ガンダムAGE-1フラット」がベースとして判定されたのか、それともただの不具合かはわからない。

だが、その目覚めはファーストガンダム……リリカが借り受けていたEGガンダムと同じような構図を描き出す。

そして、立ち上がったことを視認した二機のザクのうち、おそらくジーン役として設定されているであろう一機がブーストを噴かし、「シヤア少佐だって、戦場の戦いの中で出世したんだ」とばかりに突出してくる。

ザクマシンガンによる銃撃を、機体を跳躍させるのではなく真横にステップを踏む形で回避すると、リリカはAGE-1ブランシユが装備しているビームライフル、もといドツズライフルでジーン役のザクへと狙いをつけた。

「お願い、当たって……！」

ロックオンマークが赤く染まったのを視認して、リリカがトリガーを引くと、螺旋状に回転を伴ったビームが、AGE-1ブランシユが構えていた銃口から迸る。

本来、コロニーで相手を誘爆させる危険があるビーム兵器を使うの

は褒められた行為ではないがそこはそれ、ここはGBNで、そしてこのミッションはFランク相応の難易度に設定されているのだから問題は無い。

見事にコックピットを撃ち抜かれたことで、爆散したジーン役の機体を確認すると、デニム曹長役のザクはようやくヒートホークを構えて襲いかかってくる。

「格闘戦……？ あ、えっと」

ザクマシンガンでは痛手を与えられないとAIが踏んだのか、手斧を構えてのしと走り寄ってくるザクを再びロックオンマークの中心にセットして、リリカはその引き金を引く。

ドッズライフルから迸る光を、一応ジーン役よりは上位の思考ルーチンが組まれているデニム曹長役のザクは肩の盾で受けようとした。が、無情にもその盾ごと貫かれる形で、ザクはあえなく爆散していく。

元よりビームライフルを防げるような装甲値ではない、ということにはしておくとしても、ドッズライフルは通常のビームよりも弾速と貫通力に優れたものとしてパラメータが設定されている。

そのため、チャンプのように作り込んだダイバーであれば、並のアンチビームシールドだとか、ナノラミネートアーマーのパッシブ効果も踏み倒す形で、強引に破壊できるという特性を持っているのだ。

「勝った、のかな……？」

リリカは額に浮かぶ汗を拭って、コックピットで一人ぼつりと呟くが返事がくることも、そしてミッションのクリアを告げるアナウンスもない。

バグにでも遭遇したのだろうか、リリカが己の屑運を呪いかけていた、その時だった。

【Secret Success!】

見慣れない通知とアラートが、コックピットの中に響き渡る。

そして、遠方からザクマシンガンのもと思しき銃撃のけたたましい音が、リリカの鼓膜を震わせた。

『連邦のモビルスーツ……よもやあんなものまで作っていたとはな』

「……え、えっ？ これって、どういう……」

リリカは無意識にはあるが、シークレット……隠し条件として非公開でこそあるが設定されている、「二機のザクを三十秒以内に撃墜する」という条件を達成していたために、本来は現れるはずのない、赤いザク——【シヤア専用ザク】と、そしてNPDとして再現されたシヤア・アズナブルが現れたのである。

シークレットエネミーは、通常の場合そのミッションよりもワンランク上の思考ルーチンが設定されていることが多い。

コロニー内に専用のザクで侵入してきたというイフの設定を忠実に反映した赤いザクの攻撃速度は、あのジーン役のザクと比較して三倍以上早いものがある、と、攻撃を回避するリリカの直感がそう告げる。

「よくわからないけど……やるしかないなら……！」

『モビルスーツの性能の違いが、戦力の決定的な差ではないということとを、教えてやる！』

とはいえ、ログインボーナスを受け取ろうとしていたら襖を突き破って長ドスが飛び出してきて天誅を下されるだとか、リスポーン地点で復活した瞬間に斬りかかられて天誅されるよりはよっぽどマシンな部類だ。

リリカのAGEーイブランシユは、自慢の機動性でシヤア専用ザクが放ってくるザクマシンガン回避しながら、ドズライフルによる攻撃を行うが、相手も相手で腐っても、ランクが低くてもネームドのAIであることに違いはない。

ロックオンマーカを頼りに狙っただけの射撃など、当たらなければどうということはないとばかりに、シヤア専用ザクはガンダムAGEーイブランシユの「銃口を読む」形でその攻撃を掻い潜って、巧みに距離を詰めてくる。

「……そっか、銃口……」

かつてプレイしていたクソゲーでも、相手が持っているリボルバー式の拳銃に刀で挑みかからなければならぬ時、見ていたのは常にその銃口だった。

オートロックとオートエイムは確かに便利なシステムではあるが、100パーセントの必中を約束してくれるわけではない。

最後の一発は偏差射撃を狙って「置いた」ものの、惜しくもそれはシヤア専用ザクのスパイクショルダーを吹き飛ばしただけで、致命の傷には至らなかつた。

『なるほど……できるようだな、連邦のモビルスーツ！』  
連邦がどうかジオンがどうか、そんな事情をリリカは知らない。

だが、本気を出す、ついてこられるかとはかりにその動きをさらに機敏なものとした、シヤア専用ザクの飛び蹴り——代名詞ともいえるシヤアキックは確かに、AGE—1ブランシユの胴体に直撃していた。

「か、はっ……」

衝撃のフィードバックに思わず息が詰まるが、ここで体勢を崩したまま倒れてしまえば、それこそ相手の思う壺だ。

リリカは歯を食いしばって機体に制動をかけると、後詰めとしてシヤア専用ザクが振り下ろしてきたヒートホークを、左腕に装着していたAGE—3オービタルのバックラーで受け止める。

『なんと！ ええい、連邦のモビルスーツは化け物か！』

「こ、この子は……」

そのまま衝撃を受け流す形でバックブーストを噴かし、リリカはAGE—1ブランシユを上昇させる。

ただ飛び上がっただけでは隙を作るだけだというのはクソゲー遍歴からわかりきっていることだ。

故に、リリカは弾切れとなつてリキャストを待つ必要があつたドッグライフルを躊躇いなくシヤア専用ザクへと投擲して、わずか数秒の猶予を作り出す。

『そんな、散漫な攻撃では！』

「……この子は……ガンダムAGE—1ブランシユ……私の、私の……ガンダムです！」

そして、バックラーから抜き放つたビームサーベルで、ライフルを

切り払うという選択肢をチョイスしたシヤア専用ザクを、リリカはけさがけに、一刀の下に斬り捨てる。

『ええい、認めたくないものだな、若さゆえの過ちというものは……！』

「はあ……っ、は、あ……っ……」

紙一重の勝利だった。

リリカが安堵に、肺の辺りで滞留していた息を吐き出すのと同時に、シヤア専用ザクが沈黙したことで、改めて「Mission Success!」の通知がコックピットにポップする。

GBNには、知られていないものも含めて多くのユニーク要素やシークレット要素が眠っているともいわれている。

今回リリカが引き当てたのはその一端だったが、相も変わらず運がいいんだが悪いんだかわからない己の体質に苦笑しながらも、その心はどこか、安堵と充足感に満たされていた。

「勝った……勝ったんだよ、私たち……ブランシュ……」

——こんなに嬉しいこと、ないよ。

気付けば、リリカはにへら、と笑いながら、愛しい人にでも囁きかけるかのように、或いは己の相棒を労うように、そんな言葉をぽつりと呟いていた。

そして、勝利の凱旋とばかりに、意識は解け、ロビーへと再構築されていくのだった。

## 第七話 「気になるあの子はお姉ちゃん」

初陣を勝利で飾ったりリリカを出迎えてくれるダイバーは一人もいない。  
それもそのはずだ。

自分はただNPDを相手に、江戸の仇を長崎で討つような真似をしただけで、この仮想郷の中でもまだ、一人ぼっちなのだから。

そんなことを想いながら、再構築された意識に従って電腦の躯体をリリカが動かした瞬間だった。

ぱん、と、何かが短く炸裂する音と共に、金銀のラピーテープやメタリックな加工が施された紙吹雪……を模したテクスチャが展開されて、数秒間空間に留まったのちに消えていく。

「初ミッション、そして初クリアおめでとう〜！ リリカちゃん、シークレットまで出しちゃうなんて、もしかしてGPDでもやってたのかしら?」

筋骨隆々とした躯体をぱつちりとしたスーツに包んだ、褐色肌に紫色の髪という、それだけでも大分属性過多気味なのに、特徴的なオネエ言葉。

聞こえてきた音と声に戸惑いながらも、リリカは小首を傾げて彼女の、GBNにおいてはチャンプを除き、色んな意味で随一の知名度を誇る漢女おとめの名前を口にする。

「ま、マギーさん……?」

「ピンポーン！ ふふ、じっくり見てたわよ、リリカちゃんのミッション」

マギーは悩ましげに体をくねらせながら、ロビーエリア中央に鎮座している巨大なディスプレイを指差してリリカの問いにそう答えた。

彼女が指差した通り、ロビーエリアにおいては、ライブモニターが設置されているため、大会などが映されていない時は、その時点でミッションを受けているダイバーの視点がランダムで再生されることになっている。

そして、マギーの話の鑑みれば、その抽選の一つに引っ掛かったの

がりリカだった、ということなのだろう。

今は桜色を基調とした塗装が施され、羽をAWACSデインのものに、そして脚部や胸部をジャスティスガンダムのもので換装したフリーダムガンダムが、持ち前のスナイパーライフルで何か遠くにいる敵を撃墜する勇姿が収められている。

リリカはそのフリーダムを一瞥すると、まるで我が事のように自分の帰還を喜んでくれているマギーに視線を移す。

きつと、いいひとなのだと、そう思った。

わざわざフリーバーアイテムであるクラツカーを使つてまで自分を祝福することに対して、恩義や嬉しさを感じていないかといえば嘘になるどころか真逆で、青色に染まつたりリカの両眼はその眦に大粒の涙を湛えている。

ただ、なんだか申し訳ないような、そんな気分がするだけだ。

ごしごしと涙を拭いながらも、止め処なく溢れてくるそれに困惑しつつ、助けを求めるようにリリカはおずおずと顔をあげて、自分に視線を合わせてくれているマギーの瞳を覗き込む。

「……ま、マギーさん……」

「なあに、リリカちゃん？」

「……その、いいんですか。私なんか……」

「リリカちゃんは遠慮がちなのねえ、そういう謙虚なところはいいところ。でも、これはアタシがしたくてしていることなんだから、受け取ってくれる方が嬉しいわ」

言葉が足りていない、リリカの声に挟まった行間を完璧に読み取つて、マギーはばちこーん、と得意げにウインクを決めてみせる。

褒められたことなんて、数えるほどしかない人生だった。

リリカはこみ上げてくる感情にはらはらと涙をこぼしながら、己の半生を振り返る。

徒競走ではどんなに頑張つたって銅メダルすらもらえなくて、勉強だって、中学に通っていた頃までは頑張つても平均よりちよつと上にいるぐらいで、そんな自分が両親から褒めてもらったのは一体いつだっただろうかと、思い返すだけで虚しく、そして悲しくなる己の人



生に、リリカは堪らず嗚咽を漏らしていた。

「……つく、ぐすつ……えぐつ……」

「あら……その様子だと、リリカちゃん。大変だったのね」

それが大変だった、という言葉で片付くようなものでないことはマギーも、背景こそ分からなくともリリカの態度から察することができ  
る。

良くも悪くも、マギーがリアルで経営している酒場にも、そしてこのGBNで開いているバーにも、訳ありの客が訪れることは少なくともない。

そして、今のリリカはそんな彼女らと同じ、怯えた目をしているのだから、何があったのかはわからなくとも、何かを抱えていることぐらいは容易に判別できるのだ。

「……ぐすつ、ごめんさい、私……こういうの、あんまり慣れてなくて……」

「ふふ、大丈夫よりリリカちゃん。少しずつ、少しずつ慣れていけばいいの。少なくともアタシはアナタの味方。それはわかってくれたでしょう?」

「……は、はい……え、えへへ」

「そうそう、笑った顔もキュートだわりリリカちゃん」

GBNの治安は、第二次有志連合戦を境に——「ビルドダイバーズのリク」が全世界に向けて切った啖呵に触発されて、その治安は劇的なまでに改善されたといってもいい。

それでも、アクティブユーザー二千万人という膨大な数を抱えていれば、問題行動に出る困ったダイバーがいることは確かで、キョウヤからリリカが初心者狩りに遭っていた、という情報を聞かされた時は、マギーも気が気でなかったのだ。

だが、それでもリリカはGBNに戻ってきてくれていて、それぞれろか初めてのミッションでシークレットクリアまで成し遂げるとい  
う快挙まで達成している。

それが嬉しいことではなくてなんなのだろうか。

笑顔を浮かべようとして、涙でくしゃくしゃになっているリリカを

そつと、優しく抱きしめて、マギーはまるで母親のような慈しみを込めてその茶髪をそつと撫でる。

——嬉しかった。

リリカが今の気持ちを一言で表すのなら、それに尽きるのだろう。だけど、どんな言葉も今は嗚咽にかき消されて意味を、形を成さない。

寄り添ってくれるその温かさに、そして懐の深さに縋り付くようにリリカも抱擁の熱を受け入れて、ただ静かに落涙するだけだ。

無粋な通行人たちが無遠慮な視線を向ける、ということがないのは、彼らも少なからずどこかでマギーに助けられてきたからに他ならない。

底抜けのお人好しで、そして一度鎌を手にとれば無慈悲な刑死を相手に告げる、そんな個人ランキング23位の強者が初心者慈悲む光景は、ある種GBNにおける風物詩ともなっているのだ。

「落ち着いた？ リリカちゃん」

「はい……その、ごめんなさい……」

「ノンノン、違うわ。だってアタシは迷惑なんて感じてないもの」

マギーの行動理念は、その殆どが善意で占められている。

見返りを求めることのない無償の愛が、報われないことだって数多い。

それでも、このGBNに、仮想にして理想の郷に何かを求めて潜ってきたダイバーたちに対して、さながら神父のように祝福を授けるのはある種のライフワークのようなものであり、誰かにやめろと言われたって譲る気のない、信念のようなものだ。

「……あ、ありがとう……ごぎいますっ……」

「どういたしました。アナタならきつと……そうね、近い内にきつと高みまで上り詰められるわ。アタシ応援しちゃうんだから」

ごめんなさいより、ありがとうを。

それは押し付けかもしれない。だが、マギーにとってそれは曲げることのできない心情なのだ。

にへら、と緩んだ笑いを浮かべようとしながらもまだ涙に引つ張ら

れているリリカを抱擁し、耳元で優しく囁くその光景は正に母と娘と  
いった風情であり、そんな様子を見守る歴戦のダイバーたちもまた、  
己の過去を振り返って、ほろ苦くも甘酸っぱい思い出に浸る。

「見ろよ、あの子マギーさんに抱きしめてもらってるぜ」

「懐かしいなあ、ブレイクデカールが流行ってた頃、コテンパンにされ  
て、悔しくて泣いてたらあたしもマギーさんに抱きしめてもらったっ  
け」

見知らぬ男女が腕を組みながら、リリカたちの様子を一瞥して感慨  
深そうにそんな言葉を残す。

リリカは知らないものの、忌まわしき、ブレイクデカールという  
チートツールが流行った三年前、そしてそれ以前のGBNを知る者た  
ちからすれば、今のGBNはユートピアに他ならない。

そしてそれは、マギーやチャンプといった有名ダイバーたちの地道  
な啓蒙活動が身を結んだ結果であるともいえよう。

「それじゃあ次のミッションも頑張ってるね、リリカちゃん。あとこれ、  
アタシがやってるフォースネストの場所。いつでも困ったらここに  
来てちょうだいね」

一頻り泣き止んだのを見計らって、マギーはそつとリリカに自身の  
率いているフォース「アダムの林檎」の本拠地であるフォースネスト  
の所在地を託して、雑踏に溶け込んで消えていく。

「…………え、えへへ…………ありがとうございます…………」

まだ、素直にその言葉を受け取れるかどうかは自信がない。

それでも、いつ以来か、誰かに褒めてもらえたという体験は、リリ  
カの中に得難く、そして燃え上がるような熱を感じさせる。

にへら、と、今度は口元を緩めてちゃんと笑えていたその笑顔がマ  
ギーに届いたかどうかはわからない。

それでも、またGBNにログインしてみようかな、と、そう思える  
ぐらいには、褒めてもらったことは嬉しかったし、何より。

「…………楽しかった、な…………」

リリカは、己の愛機であるAGEEー1ブランシユと共に駆け抜けた  
戦場のことを思い返す。

順風満帆というには少しばかり格好のつかないスタートダッシュであったかもしれないけれど、それでも、あのシャア専用ザクと戦っていた時に感じていたものは、紛れもない高揚だった。

ふと見上げたライブモニターには、先程の桜色に染められたフリーダムが各部を損傷しながらも、二本のビームサーベルを引き抜く形で、同じようにボロボロになった、金色のレジェンドガンダムと対峙する姿が映っている。

フリーダムもレジェンドも、互いに負けられない、といわんばかりに激しく燃やしている闘志は、モニター越しにもびりびりとリリカの脊髄へと伝わってくる。

きつと——彼女かとはわからないが、あの二人もそれぞれの理由を胸に秘めて、戦いの場に赴いているのだろう。

動き出したレジェンドが携えていた、同じように金メッキが施された対艦刀「エクスカリバー」による一撃を読んでいたかのように回避して、桜色のフリーダムは二刀流による剣撃で二度はその手を使わせない、手数でレジェンドを圧倒する。

「わ、背中から何か……飛んでる?」

だが、幸いなことにレジェンドにはドラグーン・システムという切り札があった。

攻勢から一転して守勢に回らされたフリーダムは回避運動を選択し、その隙をつく形でレジェンドは再び黄金の対艦刀を構えて、タツブダンスを踊っているかのような機動でドラグーンを回避していたフリーダムへと切り掛かっていく。

『死ねよやあああつ!』

威勢の良い、そして微妙に引つかかる言い回しで、褐色肌のレイザ・バレルといった風情のダイバールックに身を包んだレジェンドの操縦者は叫びを上げる。

だが、フリーダムは黙したまま、大上段に振りかぶったその一撃を、敢えて最低限、コックピットへの直撃だけは避ける形で顔面受けし、カウンターとして連結させたビームサーベルをレジェンドのコックピットへと迷いなく突き立てた。

肉を切らせて骨を断つ、ということわざを体現するかのような立ち回りだ。

リリカは思わずログアウトするのも忘れて、その戦いに見入っていた。

「あえて直撃を受ける……っっていうのもあるんだ」

このGBNにおいても、旧世代のレバーをガチャガチャと操作して機体を動かすタイプのゲームでもそうだが、漫画作品「機動戦士ガンダムSEED XASTRAY」において、ライバルキャラにしても一人の主人公ともいえるカナード・パルスが放った、「生きている限り負けじゃない」という言葉はどこでも通用する金言だ。

最期の瞬間まで諦めない限り、勝利の可能性は僅かにではあるが手元に残り続ける。

それを信じられるかどうか、裏を返せば、優勢であったとしてもそこから一息に巻き返される危険性を警戒できるかどうか、勝負を分けるというのは、ある種、初心者と中級者のボーダーラインにして、上級者が常に意識していることだった。

リリカは顔面受けからの逆転に感心しつつ、ログアウトのボタンに指をかけて承認する。

そして、長いエレベーターを降ってきたのとは対照的に、今度はどこまでも上に引っ張られていくような感覚を共にして、解けたリリカの意識は、「梨々香」として現実へと回帰していくのだった。



疲れた。

GBNの筐体に設けられたゲーミングチェア、その背もたれに体重を預けながら、梨々香は凝り固まった背筋を伸ばす。

今の心境を表すのならば、それはただ疲れたという他になく、ダイバーギアにセットしていたAGE―Iブランチュを回収すると、梨々香はどこかふらふらとした足取りで筐体を出る。

もうなんだか甘いものでも食べたい気分だ。

そんな風に思考が横道に逸れていたからなのだろう。

どん、と、鈍く肩と肩がぶつかり合う音と鈍い痛みが駆け抜けて、不幸にも誰かにぶつかってしまったのだと梨々香は悟って、顔を青ざめさせた。

「ご、ごめんなさい！ 私、周り見てなくて……」

「うん、大丈夫ですよ、美羽も周り見てなかったから……って、お  
お？」

「……えっ……？」

梨々香と肩がぶつかってしまった人物は奇しくも、というより必然的に、梨々香と瓜二つの容姿をしていた。

同じ色の髪の毛でこそあるが、ふわふわとウェーブがかかったそれは真つ直ぐストレートに伸ばし放題な梨々香とは対照的で、どこか眠たげな目つきもまた、垂れ気味であることは似ているものの、梨々香のそれとは微妙に趣を異にしている。

「おお……梨々香ちゃん、ガンダムベース来てたんだ」

「……う、うん……お姉ちゃんも……」

「うんうん、何を隠そう美羽ちゃんもGBNやってたんだよ」

くあ、と、気怠げに欠伸をしながら、美羽と名乗った少女——梨々香の双子の姉である、蔵前美羽はえっへん、とばかりに、梨々香と同じように豊かな胸を反らしてみせる。

そんなどこまでもマイペースな美羽とは対照的に、梨々香はどこか居た堪れないような、そして気まずい感覚に、胸の奥へ鉛の綿を詰められているような暗澹たるものを抱いていた。

「……お、お姉ちゃんは……」

「なになに、この後ソフトクリームでも食べに行く？」

「う、うん……じゃ、なくて、その……」

「うんうん、美羽はそういうの、気にしないから大丈夫だよ」

以心伝心、といった風情で梨々香の足りない言葉に挟まっていた行間を読み取って、美羽は少し得意げに、眠気を誘うような声で答えると、ピースサインを浮かべてみせる。

その言葉に、梨々香はほっと胸を撫で下ろすが、気まずいものは気

まずい。

んじや行こつか、と、気怠げに言った美羽は梨々香の手を取って、フードコートへと向かっていく。

どこかベルトコンベアに流されるように、そして気まぐさの沼にずぶずぶと沈んでいくように、思わぬところで再開を果たした姉妹はG—Cafeの客席に陣取って、提案した通りのソフトクリームを二つ、注文するのだった。

## 第八話 「リリカ・リライズ・リスタート」

G-Cafeの一席で、梨々香は両肩に鉛のように重い透明な何かがかかっているか、そうでなければ自分の周りだけ重力が増大しているかのような息苦しさや重苦しさを感じていた。

対して、美羽はとくに何か思うところがないのか、くあ、と小さく欠伸をすると、そのまま寝てしまいかねない勢いで机に突っ伏して、全身を伸ばしている。

猫のようだと、一瞬そんな考えが梨々香の脳裏をよぎるが、冗談で済むような場合ではないのだ。

梨々香がGBNを始めたことは、当然だが家族にも黙っている。

昼間学校にも行かず、部屋に閉じこもっているのだから、そんな自分の自分がやるべきことを放棄して遊んでいます、と宣言するようなものだから当然だ。

しかし、美羽がGBNをやっている可能性について考慮していなかったのは盲点だった。

今は特に気にしている様子はないものの、突然お説教をされたりするのだろうか、捕食者に睨まれた小動物のようにふるふる震えながら梨々香は縮こまっているが、美羽としてはそんなつもりは毛頭なかった。

梨々香は優しくして繊細で、とつてもキュートな子なのだ。

双子の姉としていつも隣で見守ってきたのだから、誰よりも、何なら放任主義の両親よりも知っているのと美羽は自負して憚らない。

とはいえ、梨々香が高校デビューに失敗して閉じこもるようになった責任の一端は間違いなく自分にあることもまた自覚しているため、奔放に振る舞ってこそいるが、美羽もまた同様に、少しばかりの気まぐさを感じているのだ。

「ん、ねえねえ梨々香ちゃん、何頼む？」

そんな気まぐさを誤魔化すように、美羽はメニュー表を広げて自ら口火を切った。

恐る恐るといった調子で梨々香が覗き込んだメニュー表には、当然



だが、ガンダム劇中に出てきた料理やキャラクターをイメージしたメニューが連ねられている。

G-Cafeが、ガンダムに明るい人間のために作られている以上当然ではあるのだが、塩が足りないフライドポテトとか、ハイン・ヴェステンフルスをイメージしたノンアルコールカクテルだとか言われても、何が何だかわからないというのが正直なところだった。

最近はガンダムを知らない層も放課後の時間をGBNという仮想郷で過ごす、という層も増えてきたために、普通に見えるよう、写真付きでメニューを掲載しているのは運営スタッフ側の良心なのだろう。

仮にそうだとしても、今は何を食べても同じ味がしそうだ、というかわわっている暇なんてなさそうだ、というところが最大の問題点なのだが。

美羽から提示されたメニュー表と、穏やかに、眠たげな顔をしている美羽の瞳との間を、梨々香の視線が忙しなく行き来する。

「くあ……梨々香ちゃんはどうがいい？ 美羽ちゃんはこのガンダムホワイトソフトクリーム、ってやつがいいかなあ……」

定番メニューでこそあるが、かつてモデルチェンジされる前のガンダムマーカーにおける白色が、あまりにも隠蔽力に欠けていたため「牛乳」呼ばわりされていた自虐ネタを盛り込んだ——ことなんて解読されなければわからないメニューを指して、にへら、と美羽は欠伸と共に小さく微笑んだ。

「……あ、えつと……私も、その……」

「おんなじやつだね、おっけー、店員さくん」

本人だけでなく周囲も眠たくなるような甘ったるく間延びした声で、美羽は近くにいたアルバイトの店員——ムカイ・ヒナタを呼び寄せる。

「ご注文はお決まりですか？」

「えつと、このガンダムホワイトソフトクリームっていうのとく、フライドポテトを一つ、あとはハイン・ヴェステンフルスの黄昏ノンアルコールカクテル二つ」

「はい、ガンダムホワイトソフトクリームとハイネ・ヴェフテンフルスの黄昏ノンアルコールカクテルが二つ、そしてフライドポテトが一つでよろしいですか?」

「はいはい、大丈夫ですよお」

「承りました。ご注文が届くまで少々お待ちください!」

ぱたぱたと受け取った注文表を手に、キッチンへと向かっていくヒナタの背中を見送りながら、美羽はくあ、と一つ欠伸をする。

美羽も、自分でも行儀があまりよろしくないことは自覚していた。

ただ、どうしてそんなに眠いのか、とか、寝てないのか、とか訊かれても、寝ているし、なんならどうしてこんなに眠いのか自分が訊きたいぐらいなのだからどうしようもない。

そんな具合に、脳内における三大欲求の殆どが睡眠で埋め尽くされていそうな美羽だが、それでも今の梨々香が自分を警戒してる、ということぐらいはわかっていた。

「梨々香ちゃん、美羽のこと怖い?」

「……っ、そ、そんなこと……あの……」

「うんうん。気持ちはわかる……って言ったら、多分梨々香ちゃんが怒っちゃうよね……でも、美羽は気にしてないし、むしろ嬉しいんだあ」

テーブルに置かれたお冷を指先でつんつん、とつつきながら、美羽はにへら、と朗らかな、そして梨々香とよく似ている笑みを浮かべてみせる。

だが、今度困惑するのは梨々香の番だった。

どうしていいのかわからない、といった風情に小首を傾げると、言ったものか言わないものかと、たつぷり五分ほど時間をかけて逡巡した末に、消え入りそうな声で梨々香は美羽に問いかけた。

「……そ、その。怒って、ないの……? お姉ちゃん……」

「うん、怒るところか嬉しいよお」

「……嬉しい、って……だって、その、私……」

「梨々香ちゃん、頑張ってここまで来たんでしょ?」

その問いに、俯きながらもじもじと縮こまっていた梨々香は、はっ

とした調子で顔を上げる。

美羽は相変わらず眠たそうに微笑んでいるが、その瞳は決して曇つてなどいない。

「美羽ね、梨々香ちゃんが頑張り屋さんなのは知ってるよお、お姉ちゃんだから……今の梨々香ちゃんはとつてもつらくて、悲しくて……でも、頑張つて、ガンダムベースまで来てたんだよね？　だから、そんな風にちよつとでも前向けたら、美羽ちゃんはお姉ちゃんとして嬉しんだよ」

お説教みたいになつてごめんねえ、と小さく付け加えて、美羽はどこか、感情を持って余しているように笑った。

実際これじゃあお説教で、それが梨々香にとってはつらいことなのかもしれないし、今はそんな言葉で慰められたくない、ということも察しはついている。

だとしても、美羽にとつてそれは紛れもない本心であつたし、引きこもつていた梨々香が何らかの形で再起を迎えることができたのなら、よつぽど後ろ向きな——喫煙だとか飲酒だとかなら咎めていたが、そんな理由でなければ諸手を挙げて歓迎したいところなのだ。

美羽はとにかく、眠たげでこそあるがその分人より要領がいい。

梨々香は眦に涙の雫を滲ませながら、ただそんな美羽の瞳を恐る恐るといった様子で覗き込んだ。

いつだつて美羽は眠たそうで、気怠げにしているのに、どれだけ頑張つても自分よりテストの成績は上で、運動だつて、梨々香が並より下であることを差し引いてもよくできる方だ。

そんな美羽が梨々香の再起を喜んでくれていることに、複雑な思いがないかと訊かれれば、即座に首を横に振ることはできない。

かたや高校デビューに失敗して、部屋に閉じこもるようになった自分。

かたや何事もなく高校デビューを果たしてクラスにも馴染んでいゝるであろう双子の姉。

そこには、致命的な断絶が横たわっている。

だからこそ、美羽もあまりその話題には触れたがらないだろうし、

今だって平然を装ってこそいるけれど、しきりにお冷に口をつけては梨々香の方を見るといふ奇行を繰り返している辺り、美羽も美羽で少なからず悩んでいるのだろう。

——それでも。

ぱたり、ぱたり、と、雨粒が落ちるように、頬を滑る梨々香の涙がテールを濡らす。

思い出すのは、ついさつきまで言葉を交わしていたマギーと、そして自分がここに足を運ぶようになったチャンピオンの言葉。

——なれるとも。クジヨウ・キヨウヤには誰でもなれる。

したくてやっていることに遠慮されたり、謝られるよりは、ごめんなさいよりはありがたいというの方が嬉しいと、マギーは確かにそう言っていた。

そして、蹲って泣いている自分の背中を押すように、GBNの頂点に君臨するチャンピオンたるクジヨウ・キヨウヤは、自分が臆病だという秘密を曝け出して、思い出したその言葉をかけてくれた。

だったらそれは、美羽も同じなんじゃないかと、梨々香は思う。

コミュニケーションはいつだって不全で、エマーゼンシーとレッドアラートが鳴り響いている梨々香だったけれど、恩師とでもいふべき二人の言葉を思い返せば、胸の奥には小さくとも確かな熱を持った光が灯る。

今はまだ、チャンプのようになれるかはわからない。

でも、一步踏み出さなければそれは、永遠にわからないままだ。

痛みも弱さも、きつとそれはいつまでだって、どこまでだって引きずっていかなければいけないもので、きつちりと折り合いを付けられる人間はそうそういない。

頑張れ、と、そんな言葉をかけることはいつだって容易いものだ。

けれどその多くは、強さとか勇気とか、そういつたものを求めているのと同じで、臆病さや脆さを抱えたまま蹲っている梨々香たちのような人種は、それだけでももう既にいっぱいいっぱいなのだという視点が抜け落ちている。

チャンプは言った。自分は臆病だと。

そしてその臆病さを肯定した上で、「クジヨウ・キヨウヤには誰でもなれる」と、梨々香の背中を押してくれたのだ。

だったら、そんな弱さを抱えていることが許されるなら。

「……え、えつと……ぐすつ……そ、その、ね……？」

「うん」

「……わ、私……頑張った、よ……その、お父さんとお母さんは怒るかもしれないけど……私……頑張つて……うええええ、ん……」

嗚咽をこぼしつつ、梨々香は手提げのバッグからタッパーと梱包材で二重に包まれていた己の愛機にして初めて作り上げたガンプラーガンダムAGE―Iブランチュを取り出して、美羽へとそれを提示してみせる。

梨々香、一世一代の頑張りだといったら人はきつと嘲笑うのかもしれない。

それでも、それが臆病さと傷ついた心と背中合わせになりながらできる、梨々香にとっての精一杯であることに違いはない。

「よしよし……美羽は怒つてないよ。凄いねえ、梨々香ちゃん……初めてこれだけ作れるなんて、そして……もしかして、ミツシヨンとかクリアしちゃった？」

そして、美羽はそれを決して否定することはなかった。

嗚咽を零して両手で顔を覆っている梨々香の頭をそつと撫でながら、美羽は正直に、素直に、AGE―Iブランチュの完成度を称賛する。

確かに梨々香は多くのことでは美羽に敵わなかったかもしれない。

だが、その繊細さを形にしたように、こと手先の器用さといったところに限っては美羽を上回っているところがある。

メーカーの努力や、グレー寄りにすることで隠蔽力を上げる工夫が施されているとはいえ、白を基調とした塗装は本来難しいものだ。

だが、梨々香のAGE―Iブランチュは、エッジが透けることもなく、そしてどこかで噴きすぎが起こってダマになることもなく、均一な塗膜で覆われて、その上から艶消しのコートが美しくかけられている。

「これねえ、お姉ちゃんのガンプラなんだけど……実は二代目なんだよお」

そう言つて、美羽が梨々香と同じ容量で学生鞆の中にしまい込んでいたタツパーから、取り出してみせたガンプラは、奇しくもライブモニターで金色のレジエンドガンダムと戦っていた、あの狙撃仕様にカスタマイズされた桜色のフリーダムガンダムだった。

二代目、ということとは当然初代があるのだが、美羽が初めて制作ブースを利用した時に作ったその素組みにピンク色を吹き付けたフリーダムガンダムは、塗料が詰まったりダマになったりして大分悲惨な仕上がりになってしまつて、今は何かの記念と戒めとして、部屋の棚に鎮座している。

そこからはもうエアブラシの仕様だとかミキシングの作例だとかを勉強した末に、美羽はこの「フリーダムガンダムルージュー」を完成させたのだが、梨々香は一発でAGEEー1ブランシユを完成させているのだから驚くほかにない。

我が妹ながらその器用さと繊細さが誇らしく、愛おしい。

そう言わんばかりに涙を零している梨々香を抱き寄せて、頬をすり寄せながらそつとその真つ直ぐに伸びた髪の毛を美羽は優しく撫でる。

癖つ毛の自分と違って、綺麗な髪。

そして、ちよつと泣き虫だけど、誰よりも優しく、慈しみ深いその心。

梨々香は、全部が全部愛おしくて大切な美羽の宝物なのだ。

流星の美羽としても、ちよつと恥ずかしいから口にごそ出さないけれど、それは確かなことであり、そして俗にいうシスコンに美羽は片足、もとい両足をつっ込んでいるのだ。

「……お姉ちゃんのガンプラ、その……格好よかつた、よ……」

「ありがとね、まあライブフル撃たれちゃって最後はやけっぱちだったんだけどねえ……」

あの肉を斬らせて骨を断つ戦法は意図したものではなく、回避運動が間に合わないと判断して咄嗟に繰り出したカウンターがうまく決

まってくれたというだけの話だ。

だから思い出すだけでもちよつと恥ずかしくなるのだけれど、梨々香からの称賛ということもあって、嬉しさとの間で板挟みになりながら、美羽は苦笑をその唇に浮かべる。

「お待たせしました。こちらガンダムホワイトソフトクリーム二つと、ハイネ・ヴェフテンフルスの黄昏ノンアルコールカクテル二つ、そしてフライドポテトが一つになります」

タイミングを見計らっていたかのように、キッチンから戻ってきたヒナタは、二人の客の間に何かがあつたことを察しつつもそこに言及することはなく、バイトとはいえプロフェッショナルとして、注文された料理を黙って、しかし笑顔で配膳する。

「うむうむ、注文来たみたいだねえ、早く食べないと溶けちゃうし……梨々香ちゃん、一緒に食べよつか」

「……う、うん……お姉ちゃん……そ、その……」

「んん？ どしたの、梨々香ちゃん」

待つてましたとばかりにプラスチック製のカップ——初代ガンダムの頭部を模した形状である——に盛り付けられたソフトクリームをスプーンで掬った美羽を呼び止めて、梨々香は小さく深呼吸をする。

「……え、えつと、ね……その、お姉ちゃんが、よければなんだけど、その……」

「ふむふむっ」

「……い、一緒に……GBN、やってくれると、その……嬉しい、って、その……ぐすつ……」

精一杯の勇気を振り絞って、梨々香は美羽にその提案を持ちかけた。

元々、ソロでやりたいのではなく、誰かと繋がりがたくて始めたGBNだ。

知らなかったとはいえ、コンプレックスこそあれど気心の知れている美羽がプレイヤー、もといダイバーであるなら、一緒にやってみたいと思うのは決して打算などではなく、本心からの言葉に相違ない。

梨々香の言葉に目を丸くしていた美羽は、一瞬思考停止した様子で硬直すると、今度は蕾が綻ぶように、眠たげな目を見開いて、満面の笑みを浮かべながら梨々香に言葉を返す。

「うんうん、美羽ちゃん大歓迎だよ、っていうか、ソロ専でスナイパーはそろそろ辛いと思ってたから渡りに船だよお、ありがとうね、梨々香ちゃん」

「…………え、へへ。その、ありがとう…………お姉ちゃん…………」

いつしか子供の頃に帰ったかのように、梨々香と美羽は瓜二つの顔ににへら、とよく似た笑顔を浮かべ、そして眦には涙を滲ませて笑い合う。

目が合えば笑うだけだと、誰かがそう歌ったように、滲み出る透明な雫はそれよりも綺麗に、そして生命に溢れた輝きを放つ。

始まりだった。間違いなく、そして紛れもなく。

微笑み合う二人は、何物にも替え難く、そして無二であるその場所に記念碑を建てるかのように、ノンアルコールのカクテルで乾杯を静かに交わすのだった。



幕間：「レットアラート・エマージエンシーコール」

GBN総合スレpart. 1105

1：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ここはガンプラバトル・ネクサス・オンライン、通称GBNに関する総合雑談スレッドです。

各種ミッションについてはwikiを参照した上で専門スレへ、フォーヌ勧誘、ビルド構築、クリエイトミッションの攻略に関する相談も専用スレでお願いします。

【GBNまとめwiki】<https://>

【ミッション攻略スレ】<https://>

【ビルド構築スレ】<https://>

【フォーヌメンバー募集スレ】<https://>



283：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ミッション中に謎の通知が来てビームの直撃くらったわ、狂いそう

……！（静かなる怒り）

284：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>>283

エマージエンシーコールとかいうやつだな、あれ通知切つとかないとたまにそういうことになるから設定から切つとけ

285：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あれ一応PKが出た時初心者が周りに助け呼ぶ防犯ブザーみたいな機能らしいけど無差別に救援依頼出されるのがなあ

286：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

第二次有志連合戦からこっち、PKerもめつきり見なくなっちゃまったからな……てかエマージエンシーコールが発動したってことはPKあつたんか

287：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

モニターで見てたけどEGガンダムに乗ってた女の子が狙われてたな

288：以下、名無しのダイバーがお送りいたします  
本当にただ見てただけかよ草

289：以下、名無しのダイバーがお送りいたします  
大体のダイバーはあれの通知切ってるからしようがないやろ

290：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

その子には悪いけど正直邪魔だからなあ……ミツシヨン中のダイバーには救援依頼飛ばないようにするとか改善が欲しいところさん

291：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>288

いや、しようがないから行こうとしたんだけどチャンプが秒速で飛んでってEXカリバーしてたからなんもできんかったわ

292：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

チャンプはさあ……（定型文）

293：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ああ……チャンプなら納得だわ

294：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

その女の子も最近は絶滅危惧種になったかヴァルガを狩場にしてPKerに狙われて、チャンプに助けられるとか運がいいんだか悪いんだかこれももうわかんねえな

295：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

エン力運は腐ってるけど逃げ運がいいみたいだな

296：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ひっでえ言われようで草、EGガンダムってことは多分レンタルサービスから入ってきたマジモンの初心者やろその子

297：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

その後ロビーでめっちゃ泣いてたからなあ、なんか見てるこっちも可哀想になってきた

298：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

リリカって名前の子か、まあよくあることだったしそれを乗り越え

て天誅返しできるようになるといいな！

299：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>298

頭幕末かよ、まあでも気持ちはわかるわ、悔しいけどそれ乗り越えて返り討ちにできるようになるまでがGBNみたいなどこはある

300：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

黎明期は酷かったからな色々、俺も散々タコられたしその後マギーさんに励まされてなかったらやめてたかもしれない

301：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あの人はGBN屈指の聖人だからな、まかり間違つてママみを感じるダイバーは多い

302：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

まかり間違つてるんですかねそれは

303：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

マギーさんにママみを感じる……普通だな！

304：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

お前ら精神状態おかしいよ……でも俺もソーナノ（小声）



719：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ぬわ疲、砂のライフル落として勝ち格かと思つたら天誅返しされて

頭に来ますよ

720：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

射撃特化型は弾切れしてからが本番だからな

721：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それ砂じゃなくて範囲攻撃する方やろ

722：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

慢心、ダメ、絶対

723：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

勝ち確煽りから負けることほど無様なもんはないからな

724：以下、名無しのダイバーがお送りいたします  
体力ゲージ0にするまでが戦闘だつてばっちやが言つてた

725：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そもそも他人を煽るんじゃない定期、多分その試合見てたけどあの  
ストライクルージュみたいな色のフリーダムダイバー、初心者狩り  
に遭つてた子と似てたな

726：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

流星に他人の空似やろ

727：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それもそうだなとも言い切れないのが怖い

728：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ガチ百合に戦闘狂にELダイバーに頭マクギリスなお嬢様に鳥頭  
の全身タイツ軍団とか割となんでもありだからなGBN、アバターの  
双子コーデとか珍しくもなからう

729：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>728

改めて羅列されるとひつでえ魔境だなここ

730：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

コラボ記念の他版權アバターとかもあるからたまに何のゲーム  
やってんのかわからなくなる時はありますあります

731：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

へー、初期のミッションにもシークレット要素とかあったのか

732：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>731

どれよ

733：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

初期のミッションについても腐るほどあるからな

734：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>732

「ガンプラ大地に立つ」ってやつ、既出だと思うけど規定の秒数以内に  
ザクを始末するとシヤアザクが出てくるっぽい

735：以下、名無しのダイバーがお送りいたします  
へー、知らなかったわ

736：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

初期のFランクミッションとかわざわざ受け直さねえからなあ  
……お前どう？

737：以下、名無しのダイバーがお送りいたします  
(知ってはいたけどわざわざ受ける気が起き) ないです

738：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

アーカイブ見てたら直近の映像あつたわ、てかシークレット出した  
あの初心者狩りに遭つてた子か

【G—Tubeへのリンク】

739：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

銃口見て回避してるとて即座に気付いた辺り本当に初心者か？

740：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

なんか別ゲーやってたんじゃねえの？ それこそ幕末とか

741：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

申し訳ないがあこのヴァルガを煮詰めたようなクソゲーの話はNG

742：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

なんならリスポーンに時間かかる分リススキルが成立しないヴァル  
ガの方がマシまであるからな

743：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それはどうでもいいけどリリカか、素質はありそうだし覚えておく  
か



「へいふっ……」

五月になつてもまだ冷たさを残す夜風に当てられたのか、どこかで  
誰かが噂をしているのか、梨々香はガンダムベース、シーサイド店か  
らの帰り道で小さくくしゃみをしていた。

「ん……？ どしたの梨々香ちゃん、風邪引いちゃった？」

「…………えっと、ううん、ただ、風が冷たいなあ、つて……」

「うん、そつかそつか……最近は季節も狂ってるからねえ、おいで梨々香ちゃん。昔みたいにな、一緒に手繋いで歩こっか」

にへら、と眠たげな目で笑って、半歩先の車道側を歩いていていた美羽が、くるりと踵を返して梨々香へと、春風のように手を差し伸べる。

「…………いい、いいの…………？ お姉ちゃん…………」

「いいに決まってるよお、さあ、どーんと来いだよ」

芝居がかった仕草で両手を広げる美羽に、おずおずと躊躇いつつも梨々香は手を差し伸べて、その体を寄り添わせる。

こうして帰るのも一体いつ以来だろう。

お互いを感じていたコンプレックスだとか、そして、引きこもってしまった負い目だとかが今は薄れていくように感じられるほど、寄り添う温もりは穏やかな木漏れ日のよう。

なまじ知性があるから誤解して、分かり合えないとは「劇場版機動戦士ガンダム00」における名言だが、案外それは本質をついているのかも知れないと、本当は誰よりも甘えたがり、孤独な妹の重みを受け止めながら、美羽は茫洋とそんなことを考える。

「でも、言葉がなくなっちゃ分かり合えないよねえ…………」

「…………お姉ちゃん？」

「ううん、なんでも、なんでもないよお、梨々香ちゃん」

囁くように、控えめにすり寄せられた妹の耳元で美羽は呟く。

互いに寄り添いあったとしても、まだ断絶が癒えたわけではない。時が傷を治してくれるという保証だつてどこにもない。

それでも、梨々香がGBNを通じて立ち直ってくれるなら。

美羽は誰よりも愛しい妹の体温と鼓動を刻みつけるように瞑目して、自身が今まで戦ってきた仮想郷を振り返る。

孤独。孤高。一文字違うだけでも大きく意味を異にするその二つの内、後者にはならなかったけれど、そして梨々香が抱えていたものほどではないけれど、前者の苦い味は、美羽にもよくわかっていた。

「…………お姉ちゃん」

「なにになにく、梨々香ちゃん」

「……ううん、その……なんでも、ない……」

「そっかあ」

きつと、梨々香もそれを察してくれていたのだろう。

でも、まだその資格があるか分からなくて、梨々香は伸ばした手を引っ込めて、そして美羽は目を閉じてしまうから映らなくて。

誰かが呟いたように、コミュニケーションは不全。オールグリーンにはまだ遠く、手を繋いだ二人の間には、見えないレッドアラートが光っている。

沈黙。都会の騒々しさから切り離されたような夜の茫漠の中で、二人は傍目から見れば仲良く、だけどどこか途方に暮れたように、コンクリートの砂漠を歩くのだった。

## 第九話 「紅のキリングレンジ」

美羽と一緒にGBNをすると約束した梨々香ではあったが、それはそれとして美羽が学校に通っている都合で、ガンダムベースシーサイドベース店で合流できるのは必然的に放課後、ということになる。

映像作品「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」に登場する地球連合軍の主力量産機、GAT-04「ウインダム」による包囲と砲火を掻い潜りながら、梨々香、もといりりカは、AGE-1ブランシュのバックラーから直接発振したビームサーベルですれ違いざまにその一機を両断した。

その間、具体的には昼から夕方までの間にりりカが何をしているのかといえば、GBNの練習として片っ端から討伐系のミッションに没頭しているのだ。

この前、シークレットエネミーであるシャア専用ザクを撃墜し、ミッションのリザルトもA評価だったことからりりカのダイバースランクは、最低値のFから一つ繰り上がってEランクに落ち着いている。

そして、今実に三十機という膨大な数のウインダムとりりカ、そしてAGE-1ブランシュが対峙しているのは、いわゆる「無双ミッション」と呼ばれる、討伐系のミッションを受注しているからだ。

無双ミッション、「駆け抜ける衝撃」は、機動戦士ガンダムSEED DESTINYにおいて、主人公であるシン・アスカがこなしていたウインダム三十機との対決を再現したものだ。

その推奨ランクこそEとなつていているものの、数が数であるために実際はDランク以上でないと厳しいという評価がつけられている、いわゆる「難易度詐欺」に当たるミッションだった。

一機をすれ違い様に切り裂いたかと思えば、下手にスラストを噴かして上昇していれば真下や真上という死角からの攻撃が降り注いでくるそれは、確かに思考ルーチンこそDランク相応なものであれど、数というアドバンテージを鑑みるなら適正ではないといえる。

しかし、りりカは特に気にすることもなく、AGE-1ブランシュ



の空中姿勢をアクロバティックな軌道で制御して、反撃だとばかりに直上の敵にはドズライフルの一撃を、そして真下の敵には膝部のニードルガンを放つ形で同時に撃墜した。

「……大丈夫、怖くない」

リリカはコックピットの中で、己に言い聞かせるようにそう呟く。実際、包囲されているとはいえこのウインダムの中身はNPDだ。以前のPKerのように、無言を貫くAIは悪意をぶつけてこない。

ならば、銃口や動きを、そして包囲するための運動をリーダーと目視で観察していれば突破は容易い。

がちやがちやと操縦桿を忙しく動かしながら、リリカとAGE-1ブランシユは、八艘飛びをするように、オブジェクトとして配置された地球連合軍の水上艦や空母を足場に駆け回り、時には空中でスラストの制動をかけて、まさしく「無双」を体現するが如く、数々のウインダムを撃墜していく。

仮にこのミッションを見ている誰かがいたなら、初心者とは思えないと評するであろう身のこなしだが、それには当然理由がある。

GBNに出会うまで、リリカのゲーム遍歴は極めて偏ったものだった。

それはエンカウント運が絶望的に腐っていることもさながら、VRゲームというジャンルが急速な発展を遂げたことで、その市場が玉石混交、良作を探すのであれば沼の中で一粒のダイヤモンドを拾う覚悟が必要なほどに混沌としているのも要因の一つである。

そして、見事にハズレを掴まされたリリカは悪名高い幕末の名で呼ばれるバトルロワイアルやら、今の数の十倍の敵に全方向から包囲されて密度の高い弾幕を撃ち込まれるシューティングやら、そういった類のクソゲーを泣きながらプレイしていたことで、その地力がいつしか培われていたのだった。

三十機いたウインダムは実に十分という時間の中でその数を半分未満に減らしていて、持ち前の包囲陣には明らかな綻びができて始めている。

ならば、負ける道理はない。

「行こう、ブランシユ……！」

リリカは太陽を背にスラストを噴かして跳躍すると、ドツズライフルの三点射で、視界を奪われたウインダムを三機撃墜する。

残る数は九機だけだ。直撃コースのビームライフルによる弾幕だけをバックラーで防御しながら、リリカはニードルガンをばら撒きつつ、足場となる空母の甲板に着陸した。

ドツズライフルの弾はさっきの三点射で撃ち尽くしている。

「こ、の……っ……このっ、このおっ……！」

ウインダムが馬鹿正直に突っ込んでくるのを確認すると、リリカはドツズライフルの砲身を握りしめ、銃床でウインダムのメインモニターを砕くという荒技を披露してみせた。

叫ぶ声こそか細く消え入りそうなものだが、冷徹に叩きつけられた殺意は、さながら女帝にこうべを垂れるかのようにウインダムを甲板に平伏させる。

そして、追撃として放たれたニードルガンがジェットストライカーに着弾したことで誘爆が機体を飲み込めば、あっという間にスクラップの出来上がりだ。

リリカの心を小さな感慨が満たしていくが、それに浸っている時間などない。

慢心は隙を生む。驕りは全て致命に至る。

些細な隙を見せただけで天誅を下されるクソゲーで叩きのめされてきた記憶を想起しながら、リリカは戸惑う様子を見せた空中のウインダムへと果敢に切り掛かった。

「……て、天誅……っ……！」

なんとなく言ってみただけだが、その一言はあの魔境において全てを正当化してくれる魔法の言葉のようなものだ。

ビームサーベルで串刺しにしたウインダムを敵陣にそのまま放り投げて、誘爆からの連鎖爆発を起こしてリリカは、空母の甲板に転がっていたウインダムのビームライフルをその手に取る。

いい武器だな、少し借りるぞ。

などと、眩きこそしなかったものの、自前のビームサーベルを喪失してまで、まるっと敵陣に誘爆を手招いたのは、アジャストまでの数秒という時間を稼ぐために他ならない。

残弾は六発。やたらめったら撃ってきた中では比較的新鮮なライフルだ。

そして残る敵機が三機なら、六発の弾丸で事足りないはずはない。リリカの瞳が無機質に照星を覗き込み、それぞれ武器とコックピットを狙ったダブルタップが、とうとう包囲をやめて個別での射撃戦に移ろうとしたウインダムを正確に捉え、テクスチャの塵へと帰せしめる。

【Mission Success!】

無機質な電子音声の通知がコックピットに響いたことを確認して、ようやくリリカは安堵に小さくはあ、と、息をついた。

今回はどうやらシークレットは達成しなかったか存在しなかったかの二択のようだが、前者であった場合は自分が数の多い時の処理に若干手間取ったからだろうと反省する。

「難しいなあ、GBN……でも、えへへ」

——でも、たのしい。

誰に聞かれているわけでもないからと、リリカは意識が解けて口ビーへと再構築されていくまでの数秒間、にへら、と笑みを綻ばせて、満足げにそんなことを呟くのだった。



「お待ちせう、リリカちゃん。戻ってきたよお」

無双ミッションをクリアしてからしばらく、手に入ったBCで仮想の炭酸飲料を飲んでいると、どこか気怠げで眠気を誘うような甘い声が、リリカの耳朵にそつと触れる。

「あ……えっと、お姉ちゃん……」

「うんうん、この世界でもミワなお姉ちゃんだよお」

蔵前美羽、から妹同様に何か捻った名前をつけるでもなく、リアル

での容姿をベースに目の色を青に変えた程度のキャラメイクまでそっくりな美羽もといミワは、まるで生き別れの妹と出会ったが如く、どこか大仰に笑顔の花を咲かせながら、ぎゅつ、とりリカに抱きついた。

「ごめんねえ、待った〜?」

「…………え、えへへ…………その、えつと…………私も今、ミツシヨンクリアしたばかりだったから…………」

「そうなんだあ、偉いね、リリカちゃん。うんうん…………ミワちゃんも負けてられないなあ」

リリカの柔らかな頬に自らのそれを擦り寄せつつも、ミワは気合を入れ直すが如くふんすふんすと息を荒くする。

とはいえ、何をするかどうかについては全く決まっていない以上、負けてられないも何も無いのだが。

そして、あまりベタベタされていても、リリカの側も困ってしまうだろう。

そんな具合にリリカ成分を補充したミワは我に帰ったかのように抱擁を解くと、くるり、とその場で回ってみせる。

「それじゃあそれじゃあリリカちゃん、何しよつか〜?」

「…………え、えつと、私、特に決めてなくて…………」

「うんうん、ミワも何も決めてなかったなあ…………どうしよ〜?」

思い返してみれば、完全に計画性なく行き当たりばったりで取り付けたしまった約束だった。

そこに気まずさを感じてリリカは沈黙し、そしてミワは笑顔は笑顔でもどこか困ったように眉を八の字に歪める。

完全に何も考えていなかった。

リリカはそう内省しながらも、選択肢を考える。

無双ミツシヨンや討伐ミツシヨンはさつきクリアしてしまったから連続で受けるのもなんだか気が咎めるし、採取系ミツシヨンにはトラウマができてしまったし、何よりミワが退屈するかもしれない。

——そうになると、残っているのは対人戦ぐらいなのだが。

その声が聞こえたのは、リリカがその選択肢を脳裏に浮かべて、逡

巡に眉を八の字に歪めた瞬間だった。

「やあ、君たち今暇だったりする？」

「なになに、ナンパのお誘いですか？　なら死んでもお断りですけど」

「いや、違うんだけど……なんていうかその、俺ら今、フリバの相手探してるんだけどさ、あんた『赤砂』だろ？　そっちの子は知らないけど、ちよつと相手になってほしくてさ」

アロハシャツにサングラス、そしてよく日に焼けた健康的な肌といった具合のダイバールックに身を包んだ青年、ダイバーネーム「ラーチャオ」は、一瞬ミワが見せた表情に怯えながらも、仲間と思しき二人と一緒に笑顔を作ってそう問いかける。

赤砂。別にそれは名譽ある名前だとかそんなことはなく、ルージュカラーという目立つ色でソロ専のスナイパーをやっていたことから、ごく一部の人間がミワをそう呼ぶようになっていただけのものだ。

「んん、赤砂とかどうでもいいけどお……リリカちゃん、どう？」

「……え、えつと……」

ミワから話を振られたリリカは当惑しながらも、やはりというかなんというか腐っている己のエンカウント運を呪っていた。

対人戦が怖くないかと問われて、はいと答えれば当然それは嘘になる。

脳裏をよぎるのは、PKerのアヘッドがぶつけてきた純粋な悪意と殺意。

思い出すだけでぞくりと背筋が粟立って、脊髓が凍りつくような感覚に苛まれる。

——それでも。

「……そ、その、お姉ちゃんが良ければ……」

「うんうん、偉いねえリリカちゃん……つてことでフリバだけならいいですよ」

それでも、GBNというこの仮想郷に向き合っていくならそこから逃げることはできないし、きつと逃げてはいけないのだろう。

——クジヨウ・キヨウヤには誰でもなれる。

あの日背中に受けた追い風を思い返して、リリカは精一杯に勇気の帆を張って、対人戦という新たな世界へと一步を踏み出したのだ。

ミワはその勇気を汲んで、涙を眦に滲ませたりリカの頭を豊かな胸元に抱き寄せて、そつとその髪を撫でるのだった。

フリバだけなら、というミワの言葉に若干不満そうな顔をしていたものの、ラーチャオは二人の仲間と何やら相談を交わすと、どこことなく胡散臭い笑顔を浮かべて、フリーバトル申請をミワとリリカに送信する。

「そんじゃあバトつてく感じでヨロシクう！」

「正々堂々、なんも小細工なしでな！」

「赤砂ちゃんとのフリバかあ、てか妹ちゃんいたんツスね」

ラーチャオ三人組は三者三様にそんな言葉を残すと、一足先に、バトルフィールドに指定した、メインターミナルがあるセントラル・エリアの草原へと転送されていく。

三人組の名前と顔に興味こそないが、リリカにとって負担になってないだろうか、ミワは格納庫エリアへと向かうまでの間にその横顔を一瞥するが、どうやらその心配はなさそうだった。

「……チャンピオンに、私もなれる……私も、キョウヤさんみたいになれる……」

掌に「人」の文字を書いて呑み込むルーティーンのようにそう繰り返しているリリカの方は微かに震えているが、その瞳には確かな決意が、そして、何よりも強い勇気が宿っている。

「……頑張ってるんだねえ、リリカちゃん」

強くなる必要なんてないと、ミワはそう思っている。

弱い人間が弱さを抱えたまま生きていけない方が残酷で間違っていると、常々そう思っているミワだが、それでも、リリカが変わりたいと願うのなら、頑張りたいと願うのなら、その判断は尊重するつもりだった。

呟いた言葉が果たしてリリカに届いたかどうかはわからない。

だが、きつと届いてなかったってリリカは頑張れる子なのだ。

なら、心配などないだろう。

頭の中でそう結論付けて、一足先に格納庫に向かったリリカへと続く形で、ミワもまた、己の愛機に乗り込むべく、ロビーからの転送を選択するのだった。



リリカのガンダムAGE-1ブランシュは、極めて汎用的な機体として仕上がっている。

それは戦場を選ばずに戦えるということでもあるが、裏を返せば、特長がないことが特徴……何かに特化しているわけではないことが、弱点として真っ先に挙げられるだろう。

特に、「極端」な敵相手であれば尚更その負の側面が強くなることは、致し方ないといえた。

長閑な春風が吹き抜ける、遮蔽物のない草原地帯を駆け回る、上半身が人型で下半身がクモの怪物を思わせるモビルアーマー「ゲルズゲー」が展開した陽電子リフレクターが、無情にもリリカが放ったドッズライフルの一撃を跳ね返す。

『フツフウー！ 無駄無駄あ！ そんな攻撃じゃこのゲルズゲーはオチやしないぜ！』

『ラーチャオお前徹夜で並んでたからなあ』

『赤砂ちゃんを倒して、俺らの知名度グリーンと上げるチャンスっしょ！』

『ウエーイ！』

GBNにおけるモビルアーマーの扱いは、基本的にモビルスーツのそれと変わらない。

原作では複座型として設定されている「ザムザザー」も基本的には一人で動かさなければいけないのだが、登録方法を少し工夫すれば、複座を実現すること自体は可能である。

だが、ラーチャオはそうしなかった。

仲間の二人を随伴機としてではなく、自身のゲルズゲーを盾としてリリカを引きつけながら、仲間二人がスナイパーとして遠方に陣取っ

たミワを囲んで撃破する。

我ながら完璧な算段だ、と、リリカによる攻撃を自慢の陽電子リフレクターで跳ね返ししながら、ラーチャオは己の作戦に酔いしれていた。

だが——それは、数秒後に瓦解することとなる。

パリン、と、何かが割れるような、強いていうなら、ガラスを踏み砕いた時に似たような音が鳴ったかと思えば、ゲルズゲーのコックピットが真っ赤に染まり、レッドアラートが鳴り響く。

『ラーチャオ!』

『ええ、ウツソでしょ流石に!』

『ちよ、ま、何があつて——ウエーイ!?!』

息つく間もなく衝撃は再びラーチャオのコックピットへと伝播して、アラクネの怪物——ゲルズゲーはあっさりと沈黙し、爆散した。そして、その爆発を照星から見据えていた者こそ、ゲルズゲーをたった二発で撃墜という驚異的な戦果を挙げた者こそ、後方に陣取っていた「フリーダムガンダムルージュ」であり、ミワに他ならなかった。

フリーダムルージュが構えていた、ヅダの対艦ライフルから、立ち昇る硝煙が吹き抜ける風に薫る。

自作のビームコート貫通弾。それこそが陽電子リフレクターを二撃で破った絡繰だった。

ミワが砲撃機であるフリーダムを狙撃機のベースに選んだのは、単純に機動力による足回りで、位置取りをしやすくするためだ。

スナイパーを見たら親の仇の如く追い詰めろ、が鉄則であるGBNにおいて、ソロではどうしても囲まれたり追いつかれたりして苦労していたのだが、今はリリカが前衛を務めてくれている。

ならば、この程度の相手を自らの——紅に染められたフリーダムのキリングレンジに入れることなど、ミワにとっては造作もないことだった。

『ラーチャオがやられたのかよ、うおおお?!』

『チラーヤ! うわああああつ!』



「……隙あり、です……！」

そして、盾が破れたのであれば、前衛としてのリリカはフリーになる。

一瞬でもそれを忘れていたのが、チラーヤと呼ばれた男ともう一人、チャーラの運命を分かっ結果となった。

枷から解き放たれたように、そうでなければ追い風を受けたかのように、好機を見出したリリカは、フルブーストで機体を突っ込ませる。

そして、AGE―Iブランチュは、ラーチャオの算段ならば、本来ミワのフリーダムルージュを倒すつもりだった二機のガンダム……【カオスガンダム】と【カラミティガンダム】を、一刀の元に斬り捨てるのだった。

「や、やった……私、できたんだ……！」

「リリカちゃんは、やっぱりやればできる子だねえ」

爆炎の中に佇むAGE―Iブランチュの双眸が、そんなリリカの喜びに呼応するように、一際強く光を放つ。

くあ、と小さく欠伸をすると、一刀の元に二機を斬り伏せた妹の偉業に、そしてコックピットの中で喜びを噛み締めて、眦に涙を浮かべながらもへら、と緩んだ笑みを浮かべるリリカの姿に、ミワはどこか満足げに、そして誇らしげに、うんうん、と、首を縦に振るのだった。

## 第十話 「ぜんえいのおしごと！」

私の火力が足りてない。

リリカが率直に今の心境を述べるのであれば、その一言に尽きた。チームチャラ男カツコカリを無事に撃退こそできたものの、そのMVPは間違いなく遠距離から陽電子リフレクターをぶち抜くという離れ技を見せたミワに他ならないし、自分のやったことといえば精々戸惑って隙を晒していたカオスとカラミティをなます斬りにしただけだ。

フリーバトルの決着を告げる電子音声と共に、ロビーへと帰還していくリリカはどこかしよんぼりと肩を落とし、その眦には涙が滲んでいた。

「いやー、やっぱパネエっすわ、オレらもガチめに対策練ったつもりだけどやられっちまいましたわ、『赤砂のミワ』は伊達じゃねッス。グツドゲームっした！」

『GGっした、ウエイー！』

ロビーへと帰還したラチャオ三人組は、さっきまでの強気な態度は何処へやらといった具合に、少しだけ気まずそうな空気を醸し出しながらも、最後は笑ってミワへと握手を求めた。

威圧的な外見でこそあるものの、なんだかんだで根は悪くない人たちなのだろう、と、リリカはミワの背中に隠れようにも隠れられず、ぶるぶると全身を震えさせながらも、ぺこり、と、ラチャオたちに頭を下げた。

「んー……ん？ ミワは何もしてないよお、リリカちゃんがいてくれたおかげー、赤砂って名前も勝手に呼ばれてるだけだからね〜」

ミワはくあ、と眠たげに欠伸をすると、ラチャオたちから差し伸べられた手を取って、小首を傾げながら事もなげにそう返す。

それは確かに本心からの言葉であり、あの戦いを客観視するのであれば紛れもない事実には相違ない。

スナイパーは、前線で戦ってくれる前衛がいるからこそ輝くポジションであり、そういう意味では攻撃こそ通じなくとも果敢にゲルズ

ゲーへと挑みかかり、更にはカオスとカラミティが十字砲火による殲滅を試みる前に処断を下したりリリカの活躍こそが、ミワにとってはMVPだったのだ。

凸砂、いわゆる突撃スナイパーというポジションも存在して、リリカと組む前はソロでプレイをしなければいけなかった都合上、ミワは野良試合では必ずそういう戦術をとっていたのだが、当然勝率が安定するはずもない。

狙撃手の本懐はあくまでも後方支援とピンポイントキルだ。

だが、リリカにとつてそれは、ミワがどこか自分に気を遣つてくれているような感じがして、どうにも居心地が悪いような居た堪れないような、そういう気分させられるのだ。

だが、姉の心を妹が知らないように、妹の心を姉もまた完全に知ることはできない。

赤砂のミワ、という二つ名も正直なところ格好悪いから返上したいという思いで苦々しく、小首を傾げるミワだが、二つ名を持つほどGNで姉が活躍している、という事実もまた、リリカにどこかもややとした気持ちを抱かせる。

胸の中に鉛の綿を詰め込まれたような感覚に、リリカの頬を一雫の涙が滑り落ちていく。

「んん……？　どしたの、リリカちゃん……？」

「う、ううん……なんでもない。お姉ちゃん、凄いなあつて……」

「そうでもないよお、スナイパーはね、前にいてくれる人がいるから戦えるんだよ〜」

何となくではあるが、妹の悩みを察して、ミワは微笑みながらリリカの方をフォローを試みるが、発言しているのが他でもない自分であることが問題なのだということも自覚していた。

確かに事実や正論で諭すのであれば、ミワの理屈は正しいということになる。

だが、それを理解できても納得がいくかどうかというのは別な話であり、リリカに足りていないものは、その「納得」なのだから、問題の当事者であるミワとしてはどうしようもない。

リリカも、わかってはいるのだ。

自分が活躍できていないという思い込みの方ではなく、ミワがミワなりに自分を気遣ってくれていること、つまるところ姉からの愛情自体はちゃんと理解していて、腑に落とそうともしている。

ただ、どうしても過去に作ってきた数々の負い目がそれを邪魔してしまう、というだけの、人から見れば大したことがないように見える理由。

しかし、それは当人にとって何よりも重く、苦しいことなのだ。

愛想笑いを浮かべようとして、はらはらと涙を零すリリカに対して。ミワはただ黙って抱きしめて、その髪を撫でてあげることぐらいしかできなかつたし、リリカとしても、それが受け止められる精一杯だった。

(……私のせいで……お姉ちゃんとの、初めてのミッションなのに……)

空気を悪くしてしまったこともまた、リリカの負い目に拍車をかける。

一秒がどこまでも薄く引き延ばされていくような感覚の中で、リリカはミワに対してただごめんなさい、と詫びることしかできず이었다。

ラチャーオたちはもう雑踏に溶けて消えてしまったものの、彼らももし何か一言でもフォローを入れていたならば違っていたのだろう。

だがそれはたられればの話だし、元より彼らはピンポイントでミワをメタるためにゲルズゲーと、そして大火力による十字砲火という選択肢を採用していたのだから、言い方こそ悪いものの、リリカのことは最初から眼中になかつたのだ。

「……つく、ぐすつ……」

「うーん……ミワも困っちゃったよお……」

泣いているリリカを抱きとめて、慰めることこそできるがそれ以上が思いつかないのが、ミワにはただもどかしくて仕方がなかった。

一応リプレイを俯瞰視点で見直せば、リリカのAGE-1ブランシュが持ち前の機動力でもってライン……自軍の行動可能範囲を押

し上げて、その上でミワのフリーダムルージュが狙撃ポジションについて、例のA B A P F S D F Sを叩き込んだとわかるのだろうが、今のリリカに必要なのは正しさではなく、優しさの方なのだ。

自分が当事者でなければ、と、心の底からミワは後悔を抱く。

「でもでもリリカちゃん、今回が初勝利でしょ、それはめでたいことなんじゃないかなあ」

「あつ……」

とりあえず、課題こそ残っても勝利自体を収めたことは事実ではある。

それは、取りも直さずリリカがP K e rによる襲撃というトラウマを乗り越えたことを如実に示しており、本題からは脱線するもの、まずはそつちを褒めようと、ミワもつられて泣きそうになっていたところを笑顔でそう締めくくる。

「……お姉ちゃんのおかげだよ」

「じゃあ、ミワはリリカちゃんのおかげ、これでいいんじゃないかなあ」

「……そう、かなあ」

「そうそう、そうだよお」

小難しいことや反省会なんてものは後ですればいいのだ。

本来であれば勝った者はその勝利という美酒を飲み干して盛大に笑うのが筋というものである以上、湿っぽいのは似合わない。

どこか不貞腐れたような、そうでなければ諦めたような目をしていたりリカの瞳に光が戻ってくるのを見届けて、ミワはVサインを浮かべてみせる。

確かに、ラチャーオたちの外見はあの名前も知らないP K e rに勝るとも劣らないぐらい威圧的なものだったが、無我夢中になっていたとはいえ、そんな彼らへ、リリカは確かに果敢に挑みかかって正面から撃破していたのだ。

それは紛れもない、リリカ自身の成長である。

あの時震えるばかりだったところから一步踏み出せたことを噛みしめながら、リリカは眦に涙を滲ませて、ぺこり、とミワに頭を下げ

る。

「……そ、その……ごめんなさい……お姉ちゃん」

「んーん。ミワは気にしてないよお」

「……じゃ、じゃあ、その……ありがとう……」

「どういたしましてだよ、それじゃ、帰ろつかあ」

自力で何とか前に一歩踏み出せたリリカの頭を改めてそつと撫でて抱擁すると、ミワはコンソールに浮かべたログアウトのボタンに手をかけようとしたが、ぴたりとその手を止めて、どこか気まずそうにリリカへと視線を向けた。

「……ど、どうしたの、お姉ちゃん……？」

「え、えつとね……ミワちゃん、リリカちゃんにフレンド申請してなかったのを思い出しちゃってねえ」

「あつ……」

姉妹という間柄であるから忘れていたものの、GBNにおいては血縁など何の関係もなしにリリカとミワは互いに独立した一ユーザーでしかない。

何事も卒なくこなしていく姉にしては珍しい凡ミスに、リリカは少しだけ救われたような気分と、自己嫌悪が縋い交ぜになった感情を抱く。

ミワでも失敗することがある。

それは当たり前なのに、これじゃあまるでミワが失敗したことを喜んでみるみたいで。

そんな姉から飛んできたフレンド申請を受諾しつつ、自身もフレンド申請を返しながら、リリカはそんな、複雑な想いを胸に抱くのだった。



美羽が学校に通っている間、梨々香は今度はガンダムベースシーサイド店ではなく、家からGBNへのログインを試みていた。

と、いうのも、この前はなあなあで終わらせてしまったものの、自

分の火力が足りているかどうかについての検証だとか、もやもやした気持ちも晴らしてもう一度ミワとミッションを受けるための気分転換だとか、そういうあれこれをやりたかったから、一番落ち着く自室から、仮想郷へと旅立ったのである。

ダイブする感覚は家庭用のVR端末でもあまり変わらない。

ベッドに身を横たえて、どこまでも降下していくエレベーターに乗っているような錯覚と共に、梨々香の意識は解けて「リリカ」へと再構築されていく。

そして数秒もかからず形成された仮想の躯体はGBNのロビーへと降り立って、かつん、と踵が歩を踏み出す音を奏でる。

「……どうしよう、何も決めてない……」

ただもやもやした気持ちを晴らしたい。

その一心でGBNへとダイブしたりリリカだったが、その手段についてはまるで見当もつかないまま、勢い任せだった。

無双ミッションや討伐ミッションを受ければ、AGEーイブランシユの性能を確かめること自体は可能だとわかっている。

ただ、対人戦におけるセオリーとNPD戦におけるそれはまるで別物だ、ということとは、先日の戦いでリリカも身をもって理解していた。

平日の真つ昼間であるにも関わらず、いつも通り人でごった返しているロビーの隅っこを歩くように肩を竦めて、リリカはミッションカウンターへと歩いていく。

考えるより、行動した方が早いことは往々にしてある。

そして多分、今はその時なのだろうと、堂々巡りを繰り返してループする思考を断ち切るべく、ミッションリストでも眺めていれば気分転換にはなるだろう、と、一縷の望みを託してリリカは受付のNPDが提示してきたオススメのミッションを一望する。

「……採取系ミッション……」

ぼそり、と消え入りそうな言葉で呟いたそれは、リリカが意図的に避けてきたものであり、そしてお勧め欄の上位に並んでいるものだ。

勝利条件はヤナギラン一本の納品。敗北条件は特になし。

強いていうならば規定の時間をオーバーすればタイムアウトで敗

北扱いになるのだが、そのミッションに設定された猶予時間と内容を鑑みれば、寝落ちでもしない限り余裕でクリアできるようなものだ。伸ばす指先にコンテナ運びのトラウマが蘇り、リリカに震えを抱かせるが、大丈夫だ。

名前も知らないPKerの顔を思い出してもちよつとびつくりするだけで、昨日はミワも一緒だったとはいえ乗り越えられたのだ。

「えいっ……いっ！」

気合を入れてそのミッションを受諾すると、リリカの躯体は何事もなくさらさらとテクスチャに解けていき、格納庫エリアに再構築される。

案ずるよりどうのこうのといった通りで、やってみればやる前の心理的なハードルは大体どうにかなるものなのだ。

十八メートルに拡大された愛機のコックピットに乗り込んで、リリカは気分転換を行うべく、搬入口からカタパルトまで運ばれたAGEー1ブランシユの姿勢を軽く前に屈ませる。

「……り、リリカ、頑張ります……っ！」

こういう時は「ガンダム、発進します」だとか、「アムロ、行きまーす」だとかが定番だというのは、ガンダムの知識に乏しいリリカでもわかっている。

だからこそ、少しでも没入感に浸るべく、いつもより大きな声でそう呟いて、リリカとAGEー1ブランシユは長閑な風が吹き抜ける草原地帯……セントラル・エリア内に存在するフィールドへと飛翔していく。

カタパルトから射出されるGのフィードバックにもすつかり慣れたものだ。

眼下に見る、戦いとは無縁の長閑な世界を一望しながら、リリカは仮想の海に浮かべられたテクスチャが形作るその世界の美しさに、思わず息を呑む。

GBNは何も、戦うばかりが楽しみではない。

黎明期、GPDからの移行組がユーザーの大半を占めていた時期はそういう趣があったことは紛れもない事実であるが、この最新バ―



ジョンに至るまで幾度も行われたアップデートで、ライトユーザー向けに運営は様々な機能やミツシオン、アバターなどを追加してきた。このヤナギランを採取するミツシオンだつてその一つだし、先日リリカ……というよりはシステムが自動で発動させたエマージェンシーアラートもその一つである。

目的のヤナギランは、エリアを飛んでいる内にすぐ見つかった。元より推奨ランクがFに設定されている以上、あまり複雑で難解な迷路を解かせたりだとか、凝ったギミックだとかは設定されていない、ただ本当に機体を動かしてみたい、という人に向けたミツシオンなのだろう。

リリカはヤナギランが咲き乱れる花畑に愛機を着陸させて、その一本を手にとると、コンソールから納品を選ぶのではなく、ぺたんと仮想の地面に座り込んだ。

どこかひんやりした感覚だとか、ヤナギランの根についている土の一つ一つまでテクスチャで作り出すという狂気的かつ偏執的ともいえるモデリング班とプログラムの努力により生み出された結晶である美しい景色を眺めながら、リリカは小さく嘆息する。

「はあ……私、やっぱり向いてないのかな……」

助けを求めるように見上げたAGEーブランシユのツインアイは沈黙を保つたままだ。

主人に跪くように膝立ちの姿勢を取っている愛機が、何かを語ることはない。

ただ黙してリリカを見下ろしているのみだと、リリカはそう思っていたのだが。

「いや、そいつはそう思っていないみてーだぜ」

「……………!?」

何者かは、明確にリリカのネガティブな考えを拒絶する。

花畑の反対側から聞こえてきた声に、リリカはびくりと身体を震わせた。

リリカの眼前には、バレエ・ダンサーのようなレオタードに半透明のスカートをあしらったダイバールックに身を包んだ小柄な少女が

いつの間にか立っていて、AGE―1ブランシュとリリカへと交互に視線を送りながら、そんなことを呟いている姿がある。

そして、リリカはその顔に見覚えがあった。

「えっと……チィ、さんですよね……？　ガンダムベースの……」

「おう、チィはチィだぜ。てか、さんとかいららない……まあ今日は休みだからふらふらしてただけだよ」

アキノはいねーしアイカとエリィは相変わらず二人でおデートだからな、と、別なミッションを一人で受けてきた帰り道であることを補足して、そんな具合にチィは語る。

見慣れた人間にとってはこっちの、ラフで小生意気な口調で喋るチィこそが本当の「チィ」なのだが、ガンダムベースで会ったばかりの、つまり営業モードの彼女しか見ていないリリカは、そのギャップによる温度差で風邪をひきそうになっていた。

「……え、えっと……」

「ん？　口調のこと？　なら散々言われてっけど、仕事は仕事だからね。コンビニの店員とかが家帰ってもあんな口調で喋ってるわけじゃないっしょ」

それにしたって落差がひどいことは認めつつも、チィはどこか呆れたようにリリカが紡ぎかけていた言葉の先を察して溜息をつく。

「……じゃあ、その……この子が、ブランシュがそう思っただけ……」

確かに言われてみればその通りだと、納得した様子でリリカはほつと胸を撫で下ろすと、今度はツインアイの光が消えた愛機を指してチィへと問いかける。

「んー……タダ働きは趣味じゃないんだけど、まあいつか。チィたちE.L.ダイバーはなんか知らんけどガンプラの気持ちがなくなくなわかんだよ、そんで、ねーちゃんのガンダムはねーちゃんに才能がないなんて思っただけだし、むしろ感謝してるみてーだから声かけたただけだよ」

最近チィたちのご同輩じゃなくてもガンプラの声が聞こえる奴がいるみてーだけだな、と付け加えて、ニヒルに笑いながらチィは肩

を疎めてみせる。

その言葉がどこまで本当なのかはわからない。

だが、調べたことを信じるのであれば、E.L.ダイバーというのはいわゆる、ガンプラに対する想いから生まれてきたのだから、チイが言っていることは正しいのだろう。

それでも、納得はできなかった。

リリカは俯きながらコンソールを操作すると、チイに先日戦ったチャラ男三人組との記録映像が収まったタブをそつと差し出す。

「……私、活躍できてなくて……お姉ちゃんの足を引っ張ってるんじゃないかって、それで、その……ブランシュにも、悪いことしてるんじゃないかって……」

初対面、ではないにしろ、ほとんどそれに等しい相手に何を訊いているんだと一瞬、リリカは我に返ったが、どうしてか、理性より先に言葉が走り出していたのだ。

物質化したIBCを指先で弾きながらその映像を、片目を瞑って一瞥したチイは、何を言ってるんだとばかりに天高く、より強くコインを弾き飛ばして溜息をつく。

「なんだ、ねーちゃん十分強いじゃん」

「……えっ……？」

「チイはスナイパーじゃないけど、前衛の仕事は極端な話、前に突っ立ってくれて、ラインを押し上げて後衛に攻撃が向かないようにすりゃ最低限成立するもんだよ。確かにねーちゃんのガンダムはゲルズゲー相手にや分が悪かったかもしれないけどさ。残った奴らも秒殺してたっしょ？」

多分お姉ちゃんとやらもおんなじこと言ってたんじゃないかと、付け加えて、チイはぱしん、と落ちてきたコインを左手の甲で受け止める。

「おっ、表じゃん。運がいいねい……ってことで相談料は口ハにしとくよ。言っとくけどチイがこんなサービスすること、滅多にねーんだからな」

——ねーちゃんのガンプラに免じてな。

そう言つてチイは自らの軀体を少女のようなダイバールックから、モビルドールと呼ばれる少女とメカが融合したような機体へと変えて、何処へと飛び去っていく。

「……ブランシュ……」

チイの話がどこまで本当なのかは、まだ判断がつかない。それでも。

リリカはその瞳に涙を滲ませながら、きつと、ずっと励ましてくれていた愛機へと手を伸ばす。

ごめんね、と、ありがとう、の想いを込めて、寄り添った装甲にぱたり、ぱたりと涙の雨がこぼれ落ちていく。

そうだ。誰よりも——疑っていたのは自分で、信じなければいけなかったのも、全部自分で。

活躍がどうのこうの以前の話だったと後悔を抱きながらも、AGE——ブランシュの冷たい装甲に滲んだ体温が、それを赦してくれるように、リリカをそつと包み込む。

「……ありがとう、ブランシュ……ありがとう、チイちゃん……」

やるべきことは、やらなきゃいけないことは、まだまだ残っている。

それでも、一歩踏み出せたことへの感謝を、リリカは気まぐれな機動人形が飛び去っていった空に投げかけて、愛機のコックピットから、一本のヤナギランを納品するのだった。

## 第十一話 「シャフランダム・ロワイヤル」

ヤナギランを納品して、ロビーへと帰還したりリリカは、何よりも先にミワの姿を探すべく、人でごった返す雑踏の中を駆け抜けていく。時刻は大体放課後を過ぎた辺りで、ミワが通って、リリカが一応籍を置いている学校を早めに出ればシーサイドベース店に間に合う算段になる。

謝らなければいけない。そして、お礼を言わなければならない。

今でも完全に、ミワの言葉や過去に自分を軽々と乗り越えて高みへと登っていったその才能に対する嫉妬だとか、そういうものを完全に捨てられたわけではない。

それでもミワは、間違ったことは言っていないかったのだ。

チイから伝えられたメッセージを頭の中で繰り返しながら、リリカは、走り抜ける仮想の躯体にフィードバックされる疲労に息を切らす。

前衛の仕事は、立っているだけでもそれが達成できる——と、いうのは極論が過ぎるが、リリカの場合それをどう活かすかを考えれば、自ずとミワへと狙いを向けないように立ち回るタンク役と、そして近距離アタッカーというのが妥当なものになるのだろう。

「はあ、はあ……っ……っ……」

リアルと同じように、走り続けていれば息が上がるところまで忠実に再現したGBN運営班の技術には驚くべきものがあるが、急いでいる時はただ邪魔なだけだ。

声が聞こえたのは、切らした息を整えるように、リリカが立ち止まったその時だった。

「やつほやつほー、リリカちゃん。もしかして、探した〜?」

ちようど今ログインしたばかりであることを示すように、リリカの眼前で再構成されるテクスチャが、人の形を成していく。

それは他でもない、姉の——ミワの姿に他ならない。

この仮想郷においても、とろんとした眠たげな瞳に、どこか気怠げな喋り方、そして、癖っ毛気味であることを除けば自身とよく似た容

姿をしているミワを、リリカが間違えるはずもない。

「う、うん……お姉ちゃん……!」

「うんうん、それは嬉しいなあ……それで、どしたの〜?」

完全にアバターが構築されきったことで、はつきりとロビーに姿を現したミワは小首を傾げながら、リリカへと問いかける。

どうしたの、と問われれば、どうかしていて、そして、やるべきこととかかかけるべき言葉だとか、そういったものが瞬時に脳裏で膨らんで、リリカの思考回路はショートしそうになる。

コミュニケーションはいつだって不全な、機能を果たしていない自身の脳内回路を無理やり繋ぐように深呼吸をすると、リリカは勇気を振り絞って、ふるふる拳を震わせながら、ぺこり、と腰を折ってミワへと頭を下げた。

「……ごめんなさい……私、お姉ちゃんのこと、疑って……でも、お姉ちゃんが言ってたこと、嘘じゃなかったから、その……ありがとう、って言いたくて……!」

しどろもどろになりながらも、最後まで言い切ることができたリリカの言葉に、ミワは思わず目を丸くしていた。

ミワもミワで、正直なところ、ログインするのに抵抗感を覚える気まずさを抱えていたのだが、何があったのか知らないが、リリカはそんな、鉛の霧を振り払うように頭を下げて、言いづらかったであろうことをはつきりと言ってくれたのだ。

ミワにとっては、それが何よりもただ誇らしかった。

そして少しだけ羨ましく、妬ましかった。

帆船のように誰かに背中を押されてリリカは行動するタイプの人間だ。

そして、その追い風としての役割を果たせる人間は決して多いものではない。

マギーなのかチャンプなのか、はたまた他の誰かなのかはミワにはわからないが、そんな風に、自分の殻に閉じこもりがちなりリリカの背中を押す言葉をかけることができる人間に、そしてそれが自分ではないことに、泥濘へと足を捕われたような感じを覚えるのだ。

——それでも、リリカが前を向いてくれるなら、それ以上の喜びはないのだが。

昨日のリリカ同様に、嬉しさと複雑さの間で板挟みになりながら、ミワは曖昧に、出鱈目な季節に降る雪のように小さく微笑む。

「大丈夫。大丈夫だよお、リリカちゃん。お姉ちゃんも……リリカちゃんに信じてもらえて嬉しいんだあ」

本心を全て曝け出すことができないところまでよく似てしまったことに奇妙な因果と、そして自虐的なものを感じながらも、ミワはその複雑さを切り捨てて思考のゴミ箱に放り込むことで、「喜び」だけを心の内側に取り込んだ。

どこかぎこちなかった笑みも、にへら、と緩んだもの変わって、嬉しき全開とばかりにミワはリリカを抱き寄せて、頬をそつとすり寄せる。

「……え、えへへ……そ、その……それで、お姉ちゃん……」

「うんうん、リベンジだよねえ……ちようどミワも、リリカちゃんと一緒に戦いたい、って思ってたんだあ」

気まずさを感じていたことこそ否定はできないが、紡ぎ出したその言葉に嘘はない。

リリカが続けようとした言葉の先を読んで、ミワは頻りに首を縦に振る。

二人はどこかぎこちなく差し伸べあった手を繋いで、ミツシヨンカウンターに並ぶ列に加わるが、例によってノープランであるために、列が捌けるまでの間、ミワはGBNまとめWikiをコンソールから開いたウィンドウに表示して、受けられるミツシヨンの種類を絞り込む。

「んー……この前の雪辱戦、って感じならこのバトランダムミツシヨンが最適解なんだけどね〜」

「う、うん……でも、私、まだEランクだから……」

「だよねだよねえ……責めてるんじゃないよお、ただリリカちゃんはリリカちゃんのペースで走ってくればそれで構わないからね〜」

バトランダムミツシヨン。

それは、ダイバーランクDから解禁される「フォース」……平たくいえばチームのようなものを組んでなければ受けることのできないミッションであり、完全にランダム抽選で同時にミッションを受注しているフォース同士がマッチングして、戦い合うというものだった。一応平均ランクだとかそういうものは、マッチングの材料として考慮されているらしい。

だが、基本的には無差別で抽選が行われる都合で、初心者がなんとかDランクまで漕ぎ着けて組んだフォースが、フォースランキング第1位にして、不動のチャンプたるクジヨウ・キョウヤが率いる「AV ALON」だとか、それに次ぐ「智将」ロンメルが率いる「第七機甲師団」、そして戦いは数だよ、を地で行く巨大フォースアライアンス、「GHC」——グローリー・ホークス・カンパニーと鉢合わせることだって、十分にあり得るのだ。

それならば野良のマッチングシステムを使って、条件を絞り込んだ上でフォース戦を申し込んだ方が確実に見えるのだが、その分バトランダムミッションは、獲得できるダイバーポイントやBCが通常のフォース戦に比べて大きいという特徴づけがなされている。

だからこそ、闇鍋だとわかっていても各種フォースはその闇に沈んだ一筋の光明を求めて、今日もバトランダムミッションを受注するのだ。

とはいえ、今のリリカとミワには関係ない話なのだが。

タブをスクロールして、関連項目を探りながら、ミワはむむむ、と小首を傾げる。

前に並んでいるのは気付けば、いかにもバカッフルといった風情にイチャイチャと乳練り合っている、映像作品「機動戦士ガンダムSEED」の主人公、キラ・ヤマトとヒロインであるラクス・クラインを思わせるダイバーだけになっていた。

しかし受けるミッションが決まらない、と、ミワが首を捻っている時だった。

「……え、えつと、これ……」

「ん、なになに、どしたの、リリカちゃん？」



おずおずと、控えめにリリカは「バトランダムミッション」の関連項目に表示されている、「シャフランダム・ロワイヤル」なる項目を右手で指して、ミワが着ている衣装の裾を左手で軽く引っ張る。

「おお、おお……確かにこれは盲点だったな」

「お姉ちゃん？」

「うんうん、ぐっどだよおリリカちゃん。これはまあ、受ければわかるけど、今のミワとリリカちゃんに多分びったりなミッションかなあ」

シャフランダム・ロワイヤルの項目を開いて、概要をリリカに提示しながら、ミワは前のバカップルたちがミッションへとダイブしていったのを確認して、受付のNPDにそれを受ける旨を伝える。

シャフランダム・ロワイヤル。

それは劣化版のバトランダム・ミッションとでも呼ぶべきものであり、フォースを組めないランクであったり、或いはソロでプレイすることを信念としているダイバーに向けて作られたミッションだった。

パーティー申請は反映されるものの、基本的には受注している全てのダイバーからランダムで抽選が行われ、即席の五人チームを作って戦い合う、というのがこのミッションの趣旨である。

そして曲がりなりにも言葉がけだとかで連携が取れるフォース戦であるバトランダム・ミッションと違って、その性質は極めて野試合に近く、最初から五人パーティーを組んで参戦することが推奨されるほどに、連携面だとかには期待できないという事情を抱えていた。

だが、フリーバトルやフォース戦と違って、カジュアルにガンプラバトルを楽しみたいという層の需要に沿っているのもまた確かなのだ。

概要を読み終えたりリリカは、なるほど、とばかりに小さく拳を掌に打ち付ける。

完全ランダムである都合上、きつとGBNにおける有名人と鉢合わせる可能性も十分に考えられるが、ミワと一緒にバトルでの雪辱戦と意気込むならば、確かにこれは打ってつけた。

「リリカちゃん、ミッション受けたよお」

「あ、ありがとう、お姉ちゃん……その」

「ん……？」

「……が、頑張ろうねっ……！ 私、前衛頑張るから……！」

いかにも精一杯といった風情で頬を赤め、ふるふる震えながらもリリカは、自身の決意を余すところなく美羽へと伝えきった。

——クジヨウ・キョウヤには誰でもなれる。

あの日、チャンプ自ら起こしてくれた追い風は、リリカが張り出したボロボロの帆に確かな推進力を生み出して、仮想の海を往く力となる。

「うんうん……リリカちゃんが頑張るなら、ミワちゃんも頑張るよお……！」

そんな妹の勇姿に思わず涙ぐみながら仮想の躯体を抱きしめて、ミワもまた力強く、唇から言葉を紡ぎ出す。

先ほどイチャイチャしていたバカップルのように抱擁を交わした二人はそのまま格納庫エリアへと転送されて、愛機のコックピットに再構築されていく。

チイから教わった前衛のお仕事、そしてミワが保証してくれた自分の腕前と、そして——

今、コックピットに立ったりリリカが操縦桿を倒したことでカタパルトへと踏み出し、その双眸に光を灯したAGE―Iブランシユの気持ちを胸に抱いて、リリカは戦場へ向かうべくその姿勢を低くする。

「え、AGE―Iブランシユ……リリカ、頑張ります……っ！」

カタパルトに灯るスリーカウントがゼロになると同時に、白く染め上げられたAGE―Iは、ランダムに選定されたステージである森林地帯へと勢いよく飛び出していくのだった。



地面に着地したりリリカが真っ先に確認したのは、ミワ以外にランダム抽選されたことで結成された即席フォースのメンバーだった。

まずはダイバーランクが自身と変わらない二人組の青年が二人、青

色に染め上げれた【ジム・ドミナンス】と、白を基調として青を織り込んだ——要するにジム・ドミナンスの配色で塗り分けられた【ブルーデイスティニー1号機】に乗り込んで、リリカのすぐ後ろに着陸する。

そして遅れて、後ろに陣取る形でミワが、最後に飛び出してきた機体が最後尾に着地するのではなく、ふわりと優雅に爪先一つ分浮いた形で降臨する。

その機体は、ちらりと一瞥しただけのリリカでも一目で分かるほどによく作り込まれていた。

ウイングガンダムゼロ——そのエンドレスワルツ版を素体に、【ウイングガンダムプロトゼロ】の羽根を左側に寄せる形で二つ取り付け、開いた右側のジョイントには大剣をマウントするという独特な出で立ちからは、シンメトリーの機体をあえて崩してアシンメトリーにするという、ダイバーのこだわりが見て取れる。

そして、スラスターの配置が変わったことで推進器が大きな偏りをみせても、ふわりとバランスを崩すことなく浮遊しているのは、実力の高さがなせる業だといってもいい。

——Bランク。

自身より三つ上にして、GBNの中級者、或いは上級者へのきざしとも呼べるランクに達したそのダイバー、「カエデ」は何か語ることもなく、ふむ、と小さく考え込むように、細い顎に指をやっていた。

『そんじゃとりあえず行ってみますか！』

『よし、切り込み隊長は俺たちでよろしく！』

いかにも場慣れしていない、新兵丸出しな言葉を残して、森林地帯へと飛び込んでいくブルーデイスティニーコンビを、リリカは静止しようとしたのだが、彼らはスラスターがオーバーヒートするのも厭わずに、全速力で最前線へと突っ込んでしまう。

言葉をかける暇もなかったのだから仕方ないのではあるが、あちやー、とばかりに、AWACSデインから移植したレドームで周囲の索敵を行っていたミワは頭を抱える。

「お、お姉ちゃん……あの人たち、大丈夫かな……」

「えつとえつとく、残念だけど、だいじよばないと思うなあ」

味方の構成を見ることもなく、そして敵を警戒することなく突っ込んでいく兵士がどんな運命を辿るかなど、想像するに難くない。

一応分析の終わったデータを、リリカたち四機——あの、真っ先に突っ込んでいったブルーデイスティニーコンビにも共有していたものの、突出してオーバーヒートを起こした二つの青い点は、案の定とでもいうべきか、四つの赤い点に囲まれている。

南無三、と心の中で唱えながら、とりあえずはミワが狙撃しやすいポジションを確保すべく、そして一応は突っ込んでいった二人組をフォローすべく、リリカは敵機四機の背後へと回り込もうとした。

だが。

『お待ちなさいな』

それを制止するように、アシンメトリーのウイングゼロが大剣をすっ、とリリカの前に突き出して、透き通るような、しかし、凜と芯が通った声でそう告げる。

「……え、えつと……カエデ、さん……？」

『いかにもわたくしはカエデ。カエデ・リーリエですわ。無礼なのは承知、しかし自己紹介は後にさせていただきますよ。そして……リリカさんでしたわね。突撃前衛は、わたくしが請け負いますわ』

何か勝算があるのか、或いは作戦があるのか、短く告げるとカエデはアシンメトリーの翼を展開して、リリカがそうしようとしたように、敵機の背後へと回り込むようにブーストを噴かす。

リリカはただ困惑していたが、レーダーの動きを観察していたミワは、何故この場において恐らく最も実力があるのであろうカエデが、前線に突っ込んでいったのかを悟って、こめかみに嫌な汗を滲ませた。

戦場において突貫を行うケースは二つある。

一つは先ほどのブルーデイスティニーコンビのように、セオリーを知らずにがむしゃらに突っ込んでいく初心者 of 行動。

そして、もう一つは。

急接近してくる一つの赤い点を見据えて、ミワは覗き込んだレティ

クルにその姿が映らずとも、前者であることを期待した上で、ツダの対艦ライフルから事前に持ち替えていた「ガンダムデユナメス」のGNビームライフルに出力を集中させて、躊躇いなくトリガーを引く。GNビームにおいても、狙撃属性を持ったビームの弾速は凄まじいものに設定されている。

そして、敵がただ直進してくるだけなら——姿が見えずとも、当てること自体は容易いものだ。

——だが。

『しくじりましたわ、抜けられましたよ！　しばし其方で引き受けて貰えまして!?!』

既にレーダーから反応が消失していたブルーデイスティニーコンビに代わって、四体一という不利な条件を引き受けているカエデが、通信ウインドウ越しに切羽詰まった叫び声を上げる。

カエデが突っ込んだ理由は単純なものだった。

ただ、四機はともかく——「それ」を食い止めたかったからだ。

『斬ッ!』

突貫を行うもう一つの理由。それは己が誰よりも強いという自負のもとにラインを強引に引き上げる、突撃前衛——エースとしての役割を果たすべく、敢えて行うものに他ならない。

それを証明するように、凜とした言葉が走るよりも早く、音よりも速く放たれた狙撃ビームが、振るわれた一刀の下に「斬り裂かれた」。

「……ミワも大概、エンカ運腐ってるねえ」

「……お、お姉ちゃん……?」

「……『MS斬りの悪魔』、こんなところで会っちゃうなんて想定外だよお」

狙撃ビームを切り裂くという離れ業を披露してぐいぐいと距離を詰めてくるその機体が、やがて逡巡しつつも、ミワをいつでも庇えるように陣取った、リリカのAGE-1ブランシユの視界に映る。

その機体は質実だった。故に、剛健だった。

血霞や返り血を思わせる赤でSM入れが施された、ガンダム・バルバトス第二形態をベースとした、引き算の美学を体現するように太刀

一本のみを装備した改造ガンプラ。

従来はジャパン・エリアを本拠として、フリーバトルに明け暮れているはずの、ガンダム・バルバトス<sup>もののふ</sup>武、「MS斬りの悪魔」の二つ名を冠し、多くのダイバーに恐れられ、多くのダイバーを屠ってきたその機体は今、研ぎ澄まされた刃を振るうべく、リリカとミワの前に立ちはだかるのだった。

## 第十二話 「武士道狂想曲（カプリッツイオ）」

GBNにおける異名というのは、ある種ゲームにおける「ネームド」に等しいところがある。

それも当然そのはずだ。

アクティブユーザー二千万人という膨大な数を抱える中において、「こいつといえはこれ」と周知されているに等しい二つ名や通り名、通称というのは、例外こそあるが大体は強者の証明に他ならないのだから。

例えば「ビルドダイバーズのリク」がそうだ。

リク、という名前はありふれたものではあるが、そこに彼の率いるフォースであり、打ち立てた伝説の旗に刻まれる名前である「BUILD DIVERS」が記されたならば、それはチャンピオンに今最も近い男を指す、畏敬と羨望の籠ったただ一つの名前に変わる。

他にも色々、「智将」ロンメル、「獄炎のオーガ」、「FOEさん」とキョウスケなどなど、その実力が広く知られた一角のダイバーには少なからずそうした符丁じみた二つ名がつけられているのだ。

ならば、本人が返上したがつているとはいえ「赤砂」の二つ名を戴くミワが微妙に怯えの色を見せた、「MS斬りの悪魔」とは何か。

ソロモン七十二柱、その第八席に位階を置く「鉄血のオルフェンズ」における主人公機から徹底した引き算を施して、特注の太刀と極限まで軽量化を施しながらもパッシブスキルである、「ナノラミネートアーマー」の防御力を殺しきることのないその機体、ガンダム・バルバトス 武を駆る女性<sup>ものぶ</sup>は、張り詰めた闘志を隠すことなく、前衛を務めるリリカへと斬りかかった。

「……………！」

「リリカちゃん！」

その猛烈な殺意は、大和撫子を体現したような切れ長の瞳に長い黒髪という綺麗な容姿を飾り立てるものではない。

飽くなき闘争本能、そして強者との戦いを望み、明け暮れた返り血に染まったその機体こそが彼女の——「MS斬りの悪魔」、ダイバー

ネーム「アズキ」の苛烈にして美しい本性にして本能なのだ。

だが——それ故に、リリカは初撃を生き延びることができたといえる。

一切の無駄のない動作から放たれる熟練した剣術は、一種の「型」を感じさせるものであり、侍同士が問答無用のリスキルにログイン天誅ログボ天誅、なんでもありなああの幕末クッゲーでも十分に通用しうるものであった。

恐らくはリアルでも武道の経験があるのだろう。リリカは冷や汗を流しながら推察する。

そして、リリカのカバーとしてミワはレティクルにバルバトス・武の姿を捉えてスナイパーライフルを放つ。

だが、相変わらず何をやっているのか本人に解説されてもわからないような、超速の切り払いによって音超えの弾丸は叩き落とされてしまふ。

『ほう、この初撃を躲すとは……中々見所がある、だが！』

「……っ、お願い、ブランシユ……！」

演舞を披露するが如く、幾つもの型を繋げて連続で繰り出す「MS斬りの悪魔」は、どこか喜悦に口元を歪めながらも決して油断することなく、飛来するミワからの攻撃に対する防御と、リリカに対する攻撃を同時にこなすという離れ業を披露する。

基礎の型を極めてこそ、武は真髄へと辿り着く。

アズキはその双眸にAGE—1ブランシユを捉え、仕留めるべく一切の妥協と油断をせず、しかして緊張もせずに平常心を保って、自身が学んできた剣術における一つ一つの型を繋げてゆく。

演舞のようにループする剣術は、恐らく観戦する側であったのならば熱狂的にリリカもミワも見入っていたであろうほどに美しく、そして隙間なく繋がれていたが、ぶつけられる側としては単なるクソゲーだ。

それでも、リリカが反撃こそ叶わなくとも攻撃から逃げ続け、ミワにその剣先が向かないように立ち回っているのは、他でもないそのクソゲーからの経験が故だった。



あの侍同士による問答無用のバトルロワイヤルは、それはもう筆舌に尽くしがたいクソゲーだ。

ハードコアデイメンション・ヴァルガの方が幾分かマシだと言われめるかの無法地帯においては、あらゆる殺し方が許容される。

味方だと思っていたプレイヤーに背後から刺された程度では三流にも及ばない。

屋根の上から刀を抱えて飛びかかってきたり、花火職人の工房ごと相手を爆破したり、NPCとのやりとりをしている隙間を縫ってカチコミをかけてきたりする、武士道など燃えるゴミの日にでも捨ててきた、とでも言わんばかりの光景が日常化しているあのクソゲーにおいても、リリカはただ「狩られる」側であった。

だが、それは言い換えるなら、あらゆる、正攻法から外道戦術まで、一通りの「殺され方」をその身に刻みつけたということでもある。

そこにチャンプが目をつけるほどの臆病さ——端的に換言すれば、危険に対する察知力とでもいうべき天性の素質と、そして、AGE—1ブランシユが軽量化を施したビルドであることが合わさって、リリカは奇跡的に、二つ名持ちの強者から逃げおおせているのだ。

『その身のこなし、只者ではないな……しかし、ただ避けるだけではどうにもならんぞ！』

「……わ、わかつてます……ブランシユ！」

アズキはどこか物足りなさそうに、お前の力を見せてみよ、とばかりに、型を繋げる密度を増した斬撃をリリカのAGE—1ブランシユへと浴びせかける。

それは一流のスナイパーであるミワですら介入を躊躇うほどの嵐であり、無論、ビームサーベルを抜いて背後から斬りかかったところでテクスチャの塵に還されるというだけなものもわかっていた。

「リリカちゃん……」

故にこそ臍を噛んで、あるかどうかかわからない攻撃のチャンスに備えることしかミワにはできないのだ。

だが、一通り、猛烈に吹き荒れる剣撃の嵐から生き残ったことでリリカには見えてきたものがあつた。

それはどんなに美しく繋がろうとも、本質的には別の技である「型」における「継ぎ目」だ。

完全に、戦いの中でも美しき演舞を熟しているアズキは、一流の剣士であることに間違いはない。

だが、ここはGBNだ。

抜き身の刀を生身で振り回すのではなく、思考補助こそあれど操縦桿によるガンプラのコントロールを必要とするのならば、そこには僅かな、一秒にも満たない刹那の継ぎ目が浮き彫りになる。

柔軟に、相手の姿勢を固める型を凌ぎきり、待ち受けるのはトドメを刺すための剛体の型。

文字通り「飛ぶ」斬撃により相手の姿勢を打ち固め、守りの太刀を弾き飛ばしてから袈裟懸けに斬るその連携は理想的で、合理的で、理に適っている。

——故に。

故に、直接太刀で自身を剛体の型へと移行する瞬間こそ、一瞬の光明にして、乾坤を賭すべきその瞬間！

リリカは、あえて右腕を犠牲に連続した斬撃、その最後になる一発を受け止めると、バックラーを前に出す形で、全力のブーストと共にシールドバッシュを繰り出した。

「いつ、けええええ……っ……！」

『む……なんと！』

そして、AGE-1ブランシュの左手に接続されているバックラーは、元を辿ればガンダムAGE-3オービタルからコンバートしてきたパーツに当たるものだ。

AGE-3における特色を訊かれたならば、多くの人はシグマシスライフルであるとか、フォートレス形態の砂漠をガラス化させるほどの出力を伴った砲撃であるとか、オービタル形態の曲がるビーム……つまり射撃火力について答えるのだろうか、リリカが着目したのは、二種類の方法でビームサーベルを発振できる、という格闘戦における特色だった。

バックラーからビームサーベルを直接出力して、リリカはその目に

涙を溜めながらも、果敢に「MS斬りの悪魔」へと斬りかかってゆく。その一瞬に、乾坤を賭した一擲を成すべく。そして——チィから教わった、「前衛のお仕事」を全うすべく。



本来「MS斬りの悪魔」をターゲットに据えるはずだったカエデは、歯牙にもかけられなかった屈辱に怒りを煮えたぎらせながらも、チームとしての勝利を優先すべく、本来であればウイングバインダーが接続されていた場所にマウントしていた巨大な剣を振り回して、ワルツを踊るかのような軽快なステップを踏む。

四対一という戦況は、普通なら殆ど詰みに近いものである。

相手の構成は、ケルベロスバクウハウンドが一機、ガンダムヘビーアームズが一機、そして恐らくパーティーを組んで参戦してきたのか、イフリート改と、その色で染められたイフリート・ナハトという、シヤフランダム・ロワイヤルを体現するような闇鍋だった。

『クソツ、なんで当たらねえ?!』

戦いは数だよ兄貴、と、ジオン軍の勇将が零した通り、基本的に戦闘におけるアドバンテージというのは純粋な物量の差である。

だからこそ、それに加えて戦艦という巨大な戦力をも抱え込んでいる「GHC」は恐れられているのだし、彼らとの戦いを少数精鋭によって幾度も制してきたロンメルの手管は「智将」という二つ名を冠するほどの偉業として語り継がれているのだ。

ヘビーアームズを駆っていたダイバー、「ロワト」は、弾切れを気にする必要はないとばかりに、潤沢に弾丸をばら撒いて、カエデの愛機であるアシンメトリーのウイングゼロ（EW版）とプロトゼロのミキシングモデルである、「ガンダムウイングゼロヌーベル」を撃退しようとしていた。

だが、その偏った推進器の配置から繰り出される不規則な軌道は、ビーム兵器に比べて誘導が良く設定されているミサイルの弾幕砲火も、ビームガトリングの掃射も物ともせず、機体に傷一つ刻むことは

ない。

それどころかあのウイングゼロは、自身の弾幕砲火を捌きながら、同時にイフリートコンビを相手にするという芸当まで見せつけている。

ロワトの焦りが、じわりとこめかみに脂汗を滲ませる。

「ごめんあそばせ。悪いですけど……貴方がたと踊っている時間などないのでしてよー!」

カエデが叫んだその言葉は挑発でもなんでもない。

ただの事実であつたのだが、それはどうやらイフリートコンビの癪に障つたようだった。

『なんだと……? おい、アレをやるぞ、ムニバス!』

『うむ、クエリ!』

『馬鹿野郎、そんな見え見えの挑発に——!』

勝ちを焦るといふのは時に、優勢を保っていたのだとしても、そこから突き崩される致命の隙を生み出すこととなる。

盛大に跳躍し、太陽を背にしたクエリのイフリート・ナハトがワールドブレードを振りかざして、真上という死角からの急襲を試みれば、それを囷にする形で、ムニバスはセンサーの死角から両手のヒートサーベルを交差させて突っ込んでいく。

イフリートコンビがブルーデイスティニーコンビを瞬殺へと追い込んだ連携、どちらかを避けようとすればどちらかが突き刺さるその攻撃は、確かに並のダイバーであれば驚異に値するものだったのだろう。

だが——カエデが回避のマニューバを選択していたのは、ただ逃げ回るためだけではない。

最低限の動作で、ムニバスからの襲撃を予見していたカエデはウイングゼロヌーベルの身を翻すと、ロワトが放ったフルオープンアタックの射線に、ムニバスを誘導してみせる。

『何っ!? うおおおおっ!』

『馬鹿野郎、だから焦るなって——』

「遅いですわ」

そして、上空からの攻撃というのは、重力下において、回避されれば重大な後隙を生み出すものなのだ。

刀を思い切り地面に突き立てたクエリを放置すると、カエデは爆散しかけていたムニバスのイフリート改を踏み台にして、大剣の一撃でヘビーアームズを両断、そして一瞬のうちに、三機が戦線を構築していたことで割り込めず、まごまごとしていたケルベロスバクウハウンドをマシンキャノンの一斉射によってテクスチャの塵へと帰せしめる。

「これで一対一、ですわね」

『こ、このアマ……！ 上等だ、やってやろうじゃねえかよ！』

最早ジオン兵としてのロールプレイも忘れて、クエリは激昂に突き動かされるがまま、地面に突き刺さったコールドブレードを引き抜くと、いかにもといった直線的なマニューバで、カエデへと斬りかかる。

正直なところ、クエリがどんなダイバーであろうが相手にしている余裕がないことぐらいカエデもわかっている。

ここで理性的に振る舞われても、怒りと共に突っ込んできて、勝利のために描いたカエデの方程式と黄金律が崩れることはない。

チャートを順守することは確かに大事だが、想定外の事態が起きたときのリカバリ力もまた問われる資質である。

リーダーを見る限り、あのリリカとミワというよく似通った容姿をしている二人は、「MS斬りの悪魔」を相手になんとか持ち堪えているらしい。

ならば一秒でも早く眼前の敵を始末して、二人に合流すれば数の上での優位を確保することができるということだ。

カエデは本来であれば「MS斬りの悪魔」相手に温存しようとしていた隠し球を、躊躇いなく披露することを決めて操縦桿のトリガーを押し込む。

『なっ、剣が、開いて——』

「なんとかとハサミは……使いようなのでしてよー！」

振り下ろされたコールドブレードの刃ごと、大きく割れるように開かれたカエデの大剣——H G B C「ハイパーガンプラバトルウエポン

ズ」に付属しているシザーソードはイフリート・ナハトの胴体を両断して、爆散せしめる。

もつともこれが「MS斬りの悪魔」相手に通用していたかどうかについてもカエデは半信半疑といった風情であるのだが、とにかく、なるべくなら温存していたかったことは確かなのだ。

「首を洗って待っているのですわよ、MS斬りの悪魔……！」

そこにイベント戦闘で蘇生アイテムを浪費させられたような無情と落胆を抱きながらも、それに囚われることなく、カエデは闘志の炎が滾る自身の瞳にそのターゲットを映して、片翼の告死天使、ウイングゼロヌーベルを飛翔させるのだった。



『なるほど……確かに悪くはない、良い攻撃だ』

一瞬、何が起こっていたのかりリカは理解できなかった。

だが、今レツドアラートが鳴り響いているコックピットと、機体の状況を示しているコンソールに視線を向ければ、自身の身に降りかかってきたその災厄の正体に察しがつく。

相手は、「MS斬りの悪魔」は、「ビームサーベルの刃ごとバックラート、ブランチュの左腕を叩き斬る」という荒技を瞬時に披露していたのである。

ビームサーベルが折れる、というのも想像できない光景ではあるが、アズキが特注で拵えたその太刀の完成度は一流であり、質実剛健という言葉が体現するように、丁寧に作られたその刀身はエイハブ粒子を纏わずとも、並のビームサーベルであれば斬り飛ばせる完成度を誇っている。

それでも、リリカは——折れなかった。

目に溜めていた涙は零れ落ち、振りかざされる一太刀に仮想の死を予見しながらも、最後の一瞬までバルバトス・武をその目に捉えて、膝のニードルガンによる延命を図る。

悪あがきだ。ナノラミネートアーマーとやらがなんなのかはわか

らないが、相手に射撃が通じないということとはわかりきったことだ。  
だが——リリカは諦めてなどいない。

チイから教わった、そしてミワが認めてくれた「前衛のお仕事」は、膝をついて倒れるその瞬間まで、体力ゲージが一からゼロに変わるまで、能動的に続いている。

バルバトス・武が——「MS斬りの悪魔」が繰り出した大上段からの一撃は確かにリリカと、AGEーIブランチュを両断して、テクスチャの塵へと帰せしめたかもしれない。

だが、残心をいかに保とうと、僅か一瞬であろうとも、剛の型による一撃には後隙が生まれ出る。

そして、ミワが一流のスナイパーであるのならば、一秒にも満たないその瞬間が作られただけで、十分だった。

ミワが操るフリーダムルージュは、リリカのAGEーIブランチュが撃墜される寸前、手にしていたGNスナイパーライフルを放り投げて、腰部……原型機からオミットせず、アクティブスラストとして残っていた、クスフィアス・レールガンを構えて、その一瞬に、刹那に覗き込んだ照星へと「MS斬りの悪魔」の姿を捉えている。

「リリカちゃん、よく頑張ったね……！　なら、ミワが……お姉ちゃんが頑張らない道理はどこにもないんだからあッ！」

『くっ、抜かったか……っ!?!』

咆哮と共にフリーダムルージュの腰部から放たれた、電磁砲の弾丸を斬り裂こうと、アズキは太刀を構えなおそうとした。

だが、深々とAGEーIブランチュに食い込んだそれは、一瞬であつたとしても抜けるのにタイムラグを生じさせていた。

前衛のお仕事。それは数多いが、自分が火力を出せなくとも、ロツクをその身に集めることで後衛を守り切ること、後衛にゲームメイクのチャンスを作り出すこともその一つに他ならない。

しかし、アズキもまた、紛れもない強者だった。

避けられないと見るや否や、あくまでも太刀を引き抜くことを優先して、機体にダメージを負うそのリスクを許容する。

そして、あくまで彼女が晒した後隙は一瞬のものでしかない。

ナノラミネートアーマーへの対抗打となりうるレールガンの直撃を、リリカがそうしたようにあえて半身で受け止めて、アズキは右手に握った太刀で、本来であれば物理攻撃に対して強い耐性を持つVPS装甲の守りごと、ミワのフリーダムルージュを両断するのだった。

『君たちは強かった……尊敬に値する相手だ』

「……どうも、負けちゃったけどねえ」

爆散するその一瞬に、悔しさがなかったかといえば嘘になる。

だがミワは、それ以上にリリカが最後まで諦めることなく、前衛としての仕事を全うしたことが、二つ名を戴くまでの強者に牙を突き立てんとしていたことが、誇らしかったのだ。

まだ戦力としてはカエデが残ってこそいるものの、こうしてリリカとミワのシャフランダム・ロワイヤルは終わりを告げる。

「リリカちゃん」

「……つく、ぐすつ……なに、お姉ちゃん……？」

「頑張ったねえ……偉いよお、リリカちゃん。それとねそれとね……」

「……うん、大丈夫……楽しかった、よ……」

悔しさに涙を浮かべながらも、にへら、と口元を綻ばせてリリカは笑った。

確かに自分たちではあの「MS斬りの悪魔」に敵うことはなかったかもしれない。

それでも、確かにあの瞬間に、そしてこの戦いで、リリカとミワの心は触れ合い、繋がりがあっていたのだ。

ならば、こんなに嬉しいことはない。

リリカはごしごしとその瞳に浮かんだ涙を拭くと、モニターに映る、遅れて到着してきたカエデとアズキの激戦を一瞥する。

コンソールにポップした通信ウィンドウに映る妹の笑顔に、そして——奇しくも同じ考えに至っていたことに、感謝をしながら、まるで神にでも祈りを捧げるように、ミワもにへら、と口元を緩めて、姉妹は二人で微笑み合うのだった。



## 第十三話 「リバーズ・ジ・エッジ」

普段は孤高を是として強者との戦いを望むアズキがシャフランダムミッションを受けていたのには、一つの理由があった。

五体満足で四対一という戦力差を覆したウイングゼロヌーベルと斬り結びながら、一瞬生まれた思考の空白にその理由が溢れて落ちる。

——フォース戦なるものを、擬似的に体験してみたい。

確かに一対一での戦いは、武に生きる者の誉れであり、そこには大いなる喜びが伴っている。

だが、これは遊戯だ。遊戯であるからこそ、全力で興じる——「ガンプラは自由だ」と、自身を突き動かした言葉と共に電腦の海へと潜ったアズキだったが、戦いに明け暮れる内、いつしか「孤高の女武者」というイメージが纏わりついてしまったことと、何より自身が背中を預けるならば自身に匹敵する強者であることが望ましいというプライド故に、中々そういう申請が来たり、或いは敢えて申請を出したりしなかったのだ。

それ故に、即興でのフォース戦ともいえるシャフランダム・ロワイヤルはアズキにとって本来の目的に合致するものだったのである。

だが、現実としては連携を望めない、五人バラバラでの戦いになることが多く、今回もその通りだったのだが、存外得たものは大きかったと、アズキはそう振り返った。

あのリリカというダイバーは、確かに実力においては自分に及ぶところはないただろう。

だが、彼女は最後の瞬間まで、確かに生き残ってみせた。

継ぎ目なく振るわれる剣術の型に翻弄され、冷や汗を流しながらも自身を睨みつける、通信ウインドウに映る力エデを一瞥すると、アズキはふっ、と無意識に口元を綻ばせた。

強者との戦いこそがアズキの喜びであるのなら、例えそれが逃げ回るだけに腐心していたとしても——フリーダムルージュがレールガンによる狙撃を成功させるための一瞬、それを創り出すために全力を

懸けて自身に対峙してきたリリカは弱者でも、臆病者でも決してない。

彼女もまた、ダイバーだ。この世界における戦士なのだ。

声には出さず呟いて、アズキは新たなる挑戦者へと、その素質を確かめるように刀を振るう。

めくるめく西洋舞踏のような大剣と、日本舞踊にも似た刀の交錯はさながらダンスパーティーのような美しさをもつて見る者の目に映る。

重量で勝る大剣を軽々と振り回しているなら、膂力によるアドバンテージは、カエデとウイングゼロヌーベルにあるかのように思えるだろう。

しかし、追い込まれていたのはカエデの方だった。

「っ、一撃一撃が重い……！ 『MS斬りの悪魔』、その異名は伊達ではないということですね！」

『異名など、勝手に呼ばれているだけだ。私は……ただ強者との戦いを望むのみ！ 君はどうだ、この私に……その力を見せてみる！』

一撃の重さという観点で見たら、ウイングゼロヌーベルが装備しているシザーソードは、理屈の上では軽く作られた日本刀よりも重量という意味で上回っている。

だが、鍛え抜かれた技は、明らかにアズキの方が重い。

不規則に配置されたスラスターによるマニューバで位置取りを読ませないようにカエデは立ち回ってこそいるが、一瞬で距離を縮めてくる、縮地と呼ばれる歩法にも似たものを操るアズキの実力は、常識の埒外にある。

——だからこそ、これが狂気の沙汰であるからこそ、面白いのだ。

こめかみに、じわりと汗を滲ませながらも、カエデはアズキと同様に口元を綻ばせ、控えめながらも獰猛な、戦士としての笑みを覗かせる。

「ならば、切り札……切らせていただきますわ！」

『望むところだ、来るがいい！』

H G B C ハイパーガンプラバトルウエポンズ。

それは過去に行われたGPDの大会において、参加者にミッション内で配布されていた武器の詰め合わせのようなものであり、カエデがそこからシザーソードをチョイスした理由は極めて単純なものだ。

このシザーソードには、二種類もとい三種類の運用方法がある。

カエデが宣言するや否や、ハサミの中心でピン留めされていた部分が外れ、二振りのブロードソードが戦場に姿を現す。

そう、戦術の手札が多ければ多いほど、戦いにおいては有利に働くというのがカエデの信条であつたし、何よりも大剣からハサミへ、そして二刀流へと転じることができるロマンは、センチメンタルな乙女心を大きく揺さぶり、掴み取つたのだ。

二天一流、そして偏在する二刀流での流派を学んだわけではない以上、カエデのそれは喧嘩殺法に過ぎない。

だが、ウイングゼロヌーベルの変速機動がそこに合わさることで、喧嘩殺法はブラッシュアップされたカエデだけの技となる。

常に死角をつくように位置取り、「飛ぶ」斬撃にも対処してみせたカエデに対して一角の敬意を払いながらもアズキは、まだ足りない、と、そう結論づけた。

演舞を解除した居合の型によって、斜め後ろから斬りかかってくるウイングゼロヌーベルに返す刀を浴びせれば、二つに分けられたことでその剛性を失つた刃の片割れと共にウイングゼロヌーベルの左腕とウイングバインダーが斬り飛ばされて宙を舞う。

「な、ッ……………!?!」

『円舞……………それだけが私の太刀、その本質ではないぞ』

「ふ、ふふ……………あはは……………あーっはっは！」

『むっ?』

「流石ですわ、驚嘆に値しますわ、そして称賛に値しますわ! ですが……………まだ、勝負はついていなくつてよ!」

居合一閃、といった具合にウイングゼロヌーベルの機動力と左手を一瞬で奪い去ったバルバトス・武もののふに対して、カエデは恐ろしさを覚えながらも、強者に対しての敬意を損なうことなく、更に隠していた切り札を始動させる。

だがそれは、プレイングミスに他ならなかったと、誰でもないカエデ自身が何よりもよくわかっていた。

ベースの機体であるウイングガンダムゼロには、それがエンドレスワルツ版であったとしても、ゼロシステム……原作においては極めて危険な、「様々な未来を使用者の脳に叩き込むことでそこから勝利の可能性を導き出す」演算装置が搭載されている。

だが、GBNでそんなものを原作再現すれば脳が焼ききれかねない以上、それは大きく特性を異にする武装として実装されていた。

『む……う。』

左腕を奪ったところから円舞に復帰しようとしたバルバトス・武の太刀が空を切る。

そして強引に姿勢を立て直したウイングゼロヌーベルのツインアイが一際強く翡翠の光を放つと、「耳」にあたる部分が展開、そして胸部のサーチャイが露出する形で装甲が上下にスライドした。

「ゼロシステム……誘導切りというやつですわ！」

発動中は、システム上ほとんど全ての攻撃に設定された敵機への誘導を無効化するゼロシステムは、確かに斬撃を主体とするアズキとバルバトス・武にとっては天敵ともいえる存在だ。

——普通ならば。

そう、そこには普通ならば、という前置きがつく。

そして「普通」であるならば、アズキとバルバトス・武は「MS斬りの悪魔」などという二つ名をその頭上に冠してはいない。

『なるほど、誘導を切るか……そうとわかれば、その前提で間合いを詰めて対処するのみ。次は逃げられんぞ……！』

いや、その理屈はおかしい。

この場に青ダヌキもとい未来から来た猫型ロボットがいたなら即座にそう突っ込んでいそうな理屈を立てて、バルバトス・武はそのツインアイに獯猛な輝きを宿すと、縮地法によってスラストという最大の武器を失ったウイングゼロヌーベルへと一瞬で距離を詰める。

そうだ、関係ないのだ。

例えば倍速で動こうが誘導を切ろうが、そうであるとわかったならば

前提に織り込んだ上で間合いを図り、踏み倒す。

大和撫子のように可憐にして美しい「柔」の太刀ばかりがアズキの本質ではない。

どこまでも獰猛に、そして貪欲に、強引に相手を屠る「剛」の太刀もその身に修めているからこそ、「MS斬りの悪魔」は恐れられているのだ。

「な……ッ……!?!」

確かにスラスターが生きている内にゼロシステムを起動させなかったのは自分のミスだとカエデは認めている。

それにしたって、スラスターの補助もあるとはいえ、基本的には歩法だけで瞬時に距離を詰めてくるなど、常識の範囲じゃない。

あり得ないことだと、驚嘆にカエデの瞳が見開かれた。

そしてその一瞬は、致命に繋がる瑕疵となる。

『――斬ッ!』

短くも凜と響き渡るその言葉は、紛れもなくこのシャフランダム・ロワイヤルに幕引きを告げるものであり。

「きゃあああッ!」

カエデの敗北――リリカとミワが所属していた即席チームの敗退を意味する、絶対的な勝利の宣言だった。



「凄かったねえ……ミワもまだまだ、ってことかな」

カエデがアズキの前に敗れたことでロビーへと仮想の躯体が転送されたミワは、あの常識外れにして美しいアズキの剣術を思い出しながら、くあ、と小さく欠伸をする。

脳を使い過ぎた。

甘えるように、そして欠乏していたリリカ成分ことリリカニウム（命名者：ミワ）を補充するように、どこか茫然としていた妹をぎゅーっ、と抱きしめると、甘ったるい声でミワは、リリカの耳元でそう囁いた。

「うん……で、でも……お姉ちゃんも……凄かった、よ……」

あの一瞬は全てミワに託したものだっただけで、それこそ一キロ先にあるコインを撃ち抜くような、バルバトス・武に一撃を当てるといふ芸当は、一瞬という隙こそあったとしても並のダイバーにそうそうできるものではない。

敗れこそしたが、それは相性差によるもので、ミワもまた一流の狙撃手であることに違いはないのだ。

「いや……君も十分、称賛に値する相手だった」

しゅん、と鈴を鳴らしたような声音が、リリカとミワの耳朶に触れた。

声のする方向に振り返れば、そこには和装に身を包んだ黒髪の女性、先ほどまで剣を交えていた「MS斬りの悪魔」ことアズキが真っ直ぐに姿勢を伸ばして、しゅんしゅんと歩み寄ってくる姿がある。

「……わ、私、ですか?」

「ああ、あの奇襲……確かに悪くないものだった。期待していたものとは違っていたが……シヤフランダム・ロワイヤルというのも、存外得るものが多い」

これだからGBNは面白い、とでも言いたげに、アズキは口元を綻ばせた。

リリカとミワの實力は、まだアズキに及ぶものではない。

だが、あそこで確実に始末していなければ、カエデと合わせて戦いの趨勢がどうなっていたかについては、さしものアズキとて予想がつかないといったところである以上、二人の戦いは敢闘といって差し支えないものだった。

まあそれでも、勝つのは自分だと自負して憚らないが。

アズキはあえて無粋なことを口には出さず、果敢に食らいついてきた二人へと称賛の言葉だけを残して雑踏へと溶け込んでいく。

「そうだねえ……リリカちゃん、何か見つかった?」

その背中を見送るミワは踵を返して、リリカへと問いかける。

だけど、そんなことを敢えて聞かなくてもいいというのはもう既にわかっていた。

ゲームの中でも目の色を変えただけで双子コーデ、そしてリアルでは双子の姉妹として生まれてきたからわかる、というわけではない。だが、交錯したりリリカの視線の中には、言葉の外側で通じるものが、蓋をしようとも抑えきれないその想いが溢れていた。

「うん……負けちゃったのは、悔しいけど……GBNって、楽しい……お姉ちゃんと一緒に遊ぶの、楽しいから……えへへ」

にへら、と口元を綻ばせて笑顔を浮かべるリリカは世界一可愛い。ミワはシスコン全開な感想を脳裏に描くや否や、言葉ではなくボディランゲージでそれを示すように、あるいは更なるリリカニウムの摂取を試みるように最愛の妹を抱き寄せて、その真っ直ぐな髪の毛を優しく撫でた。

「うんうん、ミワもリリカちゃんと遊ぶの、楽しいよお。久しぶりだからね」

現実において、最後に遊んだのはいつだっただろうか。

ミワも、リリカも思い返せばそれは随分遠い記憶に行き当たる。

断絶しかけていた。

途絶えて、途切れて、きつとそのまま、いつか大人になった時には遠く離れた場所に置き去りにしてしまうのだろうと、そう思っていたものがある。

それでも、リリカが予想した通りになるはずだった運命は、何の因果か仮想の海で解けて消えて、新たな結び目となって心の中に見つけ出すことができているのだから、人生というのはわからない。

じわり、とりリリカの眦に涙が滲む。

だがそれは、悔しいからではない。悲しいからではない。

久しく忘れていた、そしてきつと思いつくこともないだろうと思っていたあたたかさに、嬉しさと楽しさに触れた喜びが、リリカの瞳から透明よりも透き通る、美しいプリズムをそっと零すのだ。

正直にいつてしまうなら、今でもわだかまりの全てを捨てられたわけではない。

リアルでミワと——美羽と部屋の中で鉢合わせてしまえばリリカは、梨々香は相応にパニックを起こしてしまうだろうし、GBNにお

ける実力に断絶が存在していることもまた確かだ。

それでも。

だからこそ、頑張れると思えるのはいつ以来だろうか。

思い出すことすらできない、遠く、遠くから始まった諦めに、リリカはそつと想いを馳せる。

それはきつと、仮想の海に浮かぶ理想の郷で、GBNで実現した、小規模な奇跡なのかもしれない。

あまりに取るに足らない、他人が見れば笑ってしまうような、そんな奇跡。

だとしても、その奇跡は確かにリリカの勇気と軌跡が手繰り寄せた、本物に違いない。

仮想の海に求めているものの全てが手に入ったわけではないけれど、ログアウトのボタンを押す瞬間まで、リリカの胸はそんな喜びに満たされていたし、それはミワも同じだった。

仮想郷に構築されていた意識が今度はどこまでも上に引っ張られていくような感覚と共に、「リリカ」は「梨々香」へと戻っていく。

普段は美羽と顔を合わせるのが気まずくて、そして両親と顔を合わせるのだって辛いから部屋で食事をしているけれど、ガンダムベースではなく自室からログインしたことを、梨々香はちよつとだけ後悔しているのだった。



AGE―1ブランシュにとって、二度目の対人戦は、確かに敗北で終わったかもしれない。

ゴーグル型のVR端末を外して、浮かんでいた涙をこしごと拭くと、梨々香はゆつくりとベッドに横たえていた身を起こして、机へと向かっていく。

だが、課題が見えてきた。

負けたことは当然悔しい。相手がいかに二つ名持ちの実力者であつたとしても当然だ。



それでも——暗中模索を繰り返し、霧の中を彷徨っているような感覚のまま仮想の海を揺蕩い続けるよりは、はつきりと、自分の視線で見える課題があった方がいいのは確かなのだ。

ミキシングの素材として利用したGバウンサーの箱を開けて、梨々香はおもむろに、机の上に置きつ放しになっていたニツパーに手をかける。

これはまだイメージに過ぎない。

形になるまでの、形を得るまでのモックアップだ。

だが、アズキとの戦いを経て見えてきたものは、着実にリリカの中で一つの形を成そうとしていた。

この世界に、生まれ出ようとしていたのだ。

机の上で、ダイバーギアに直立しているAGEEー1ブランシユのツインアイが、シーリングライトの僅かな光を拾ってきらりと煌めく。どこか涙のようにも映るその輝きは、きつと明日へと繋がっている。

「……次はもつと、頑張るからね……頑張つて、頑張つて、私……」

——今は、君と一緒に強くなりたいんだ。

静かに佇む愛機に向けて、梨々香はほつりと流れた涙と共にそう零した。

ガンダムAGEEー1。それは百年の物語の始まりとなった機体。

だからこそ、梨々香は一つのパーツを組み立てて、AGEEー1ブランシユの左手にそれを握らせると、ふんす、と気合と決意を込めてスマートフォンアプリを起動した。

GBNに簡易ログインをすれば、そこにはG—Tubeと呼ばれる映像のアーカイブが存在している。

そして、G—Tube内においては歴代のガンダム作品がアーカイブで配信されているのだ。

迷うことなく、梨々香は、「機動戦士ガンダムAGEE」の項目をタップすると、どこか、始まりを確かめるように、そして、明日へ生まれ出た希望を繋ぐように、第一話を再生するのだった。

## 第十四話 「リリカ・ハウレーカ」

感動していた。

機動戦士ガンダムAGE、その百年の物語を気付けば一気見していた梨々香の感情を率直に表すのならば、そういうことになる。

良いところと悪いところはどんな作品にも存在して、無論それは「AGE」にも、「1st」の通称で呼ばれる初代ガンダムにも当てはまる。

ただ、どこが「好き」かどうかについては受け取った者次第なのだ。そして梨々香は、一世代目の主人公にして、物語の最後までキーパーソンを務めた英雄……フリット・アスノの生き様にこそ、心を打ち震わせていた。

フリットの魅力をあれやこれやと語るならそれだけで小一時間は潰れそうな具合だったが、中でも梨々香の心を震わせたのは、少年時代における「命は……玩具じゃないぞ！」という台詞と、最終回付近において、そんな「英雄、救世主に憧れる少年」の心が虐殺を踏みとどまらせて、真の英雄へと導くシーンだ。

世代をテーマに扱った以上、そこには「老い」が必然的に描かれる。多感な青春時代をガンダムと、当時はUE、「アンノウン・エネミー」の名で呼ばれていた敵勢力……「ヴェイガン」との戦いに費やして、愛する人を喪いながらも軍部の重要なポストに就任し、和平の使者を送ってもその全てが帰らぬ人となり、挙げ句の果てに自らの恩師とでも呼ぶべき人たちも奪われた、という過酷な半生は、彼に頑なな憎悪を抱かせるのには十分だった。

だが——彼は、フリット・アスノは、最後の最後で憎悪に駆られ、老いに目を曇らせた虐殺者ではなく、あの日の誓いを抱いた少年の心を思い出し、新たな世代のために道を開く嚆矢として、天にプラズマダイバーミサイルを放ったのである。

「……つく、ぐすつ……良かったね……良かったね、フリット……」

梨々香はぼろぼろと、スマートフォンのブルーライトのみが照らす真っ暗い部屋のなかで涙を零す。

フリット・アスノの人生は、振り返れば、報われないものだったのかもしれない。

それを不幸だと断定する人間も多いだろう。

だが、梨々香は決してそう思わなかった。

確かにフリット・アスノの旅路を振り返れば、きっとそこには無数の後悔だとか慚愧だとか、そういったものが横たわっていることだろう。

英雄となった後も、ウェイガンが地球の奪還であり帰還を望んでいた原因たる風土病、マーズレイを根絶するためにそれと向き合い続けたフリットの人生は、一貫して他人のために捧げられたものだといっ  
ていい。

よく、ロールプレイングゲームにおける勇者の存在を呪いだと言  
て憚らない人間が存在するように、「誰かのために生きる」とは、一  
つの枷であり呪いであるのだという。パブリックイメージが一部で定  
着していることは事実である。

しかし、フリットは望んで……幼い頃に夢見た「救世主」に恥じな  
い人物として、その激動の百年を歩み、そして天に召されたのだ。

彼を快く思わない人物は作品の内外を問わずして多いだろう。

だが、梨々香にとって、いつだって「誰か」のために「何か」を成  
すことができるフリットの姿は、何よりも眩しく、高潔に映ったので  
ある。

泣き腫らした目を拭いながら、梨々香はベッドの上で、髪をゆるく  
結んでおくのも忘れて、その感慨に浸っていた。

元々梨々香が「ガンダムAGE」を観ようと思ったのは、自身の愛  
機であるガンダムAGEー1ブランシユのルーツを探るためでもあ  
る。

あの日、初心者狩りのPKerに怯えて立ち竦んでいた自分を救っ  
てくれたチャンプと、その愛機であるガンダムTRYAGEマグナ  
ム。

それと出典を同じくするAGEー1ブランシユだが、二度の対人戦  
で見えてきたものは、汎用機としては客観的に見ても及第点だが、特

定の状況下における決定打に欠ける、という深刻な弱点であった。

だからこそ、それを解決するヒントは出典となった作品に眠っているのではないかと目をつけたのだが、まさかそんなことが頭から追いやられて、物語でいっぱいになるとは思ってもいなかったのだ。

そんな具合に茫洋と目蓋を閉じて、物語の感慨に浸っていた梨々香を現実へと引き戻すように、充電器に繋ぎっぱなしにしていたスマートフォンがぼこん、と気の抜けた通知音を奏でる。

それは、メッセージアプリを通じて美羽から「お風呂上がったよ」という言伝を告げるものであり、スマートフォンに表示された時刻はとつくに零時を回っていた。

「あ、あわわ……完全に忘れてた……」

ぶつ通しで観続けていたのだから仕方ないのだが、あのまま寝落ちでしてしまえば、乙女としては一大事を招くところだった。

すんでのところで引き戻してくれた美羽に感謝を捧げつつ、梨々香は何かに弾かれたかのようにベッドから飛び起きる。

クローゼットからバスタオルと替えの下着、そしてパジャマを取り出して、弾かれたように一階にある風呂場へと駆け出していくのだった。



かぼーん、と、水音を響かせる浴槽の中で、正気に立ち返った梨々香は長い髪の毛をタオルで保護しながら、隅っこに収まるような体育座りで、もう一つの課題について考えていた。

確かにガンダムAGEは面白い作品で、感動したこと間違いはないのだが、AGEー1ブランシュが特定の状況下においての決定打に欠ける……つまり、あのゲルズゲーが持っていた陽電子リフレクターであるとか、アズキとバルバトス・武<sup>もののふ</sup>が用いていた太刀……というよりは本人の驚異的な動体視力によって成立する切り払いであるとか、とにかくそういったものが今のブランシュには足りていない、というのがリリカの見解であった。

両手で水を掬い取り、二卵性でありながら姉と同様に豊かに実ったことでぶかぶかと水面に浮かんでいる胸にかけるという何の生産性もない行為を繰り返しながら、梨々香は茫洋と考えを巡らせる。

まず、アズキの切り払いについてだが、例え本人から許可をもらって太刀を借りたとしても、あれを真似することは不可能だといっている。

ハードコアディメンション・ヴァルガの方が幾分かマシだと言わしめるクソゲーにおいて、正統派の殺され方から外道の殺され方まであらゆる方法でボコボコにされてきた梨々香であったが、ああいう人間災害じみた「正統派」の技は、真似しようと思っても一朝一夕でできるものではないのだ。

もしも見様見真似ができるのならば、それは最早一種の才能であるといっても良い。

そうになると、何か新しい特殊兵装を追加する、というのがAGE-1ブランシュ強化計画カッコカリの要になるのだろう。

一応、梨々香はGBNを始める折にまとめwikiに一通り目を通している。

立てられた項目において、陽電子リフレクターのような特殊兵装のカテゴリに分類される中で最も人気が高かったのは、映像作品「機動戦士ガンダム00」に登場するブーストアップ機構、トランザムシステムだったことは記憶に新しい。

ただし、トランザムをAGE-1ブランシュへと組み込むのは色々な意味でハードルが高かった。

と、いうのも、トランザムは太陽炉、GNドライブと呼ばれる「00」に登場する特有の推進機関をパーツとして組み込まなければ発動できないし、仮に発動したとしても、付け焼き刃の太陽炉では三十秒も持たずに機体が自壊するという旨が記されていたからだ。

梨々香のAGE-1ブランシュは、良くも悪くも今の姿で汎用機としては完結している。

Gバウンサーをミキシング、というよりはゲイジングの材料に選んだことで機体重量は軽く抑えられ、重量に対しての推進力の比率は高

機動機と呼んで差し支えない領域に到達していることは、はつきりと長所として挙げられるだろう。

だがそれは、その分軽くて脆い、という弱点と背中合わせであることと同義である。

もしも仮に梨々香がAGE-1ブランシユのメインスラスターを取り外して、雑に太陽炉をそこから生やせば、確かにトランザムは使えるようになるのかもしれないが、まず確実に、機体の剛性がその出力に耐えきれず、三十秒も持たない内に自壊<sup>ツダ</sup>することは火を見るより明らかだ。

ならば、答えは自ずと絞られてきそうなもののだが、最後のピースがカチリとハマってくれないような、そうでなければポリキャップの軸を潰してしまったような違和感が拭えない。

梨々香は水面に息を吹きかけてぶくぶくと泡立たせるという何の生産性もない行為をしながら、なんとか閃きが降りてきてくれないかと思ひ悩む。

——ならば、それは天啓に他ならなかった。

『命は……玩具じゃないんだぞ！』

脳裏をぐるぐると同時進行で駆け巡っていたガンダムAGEの記憶が、フリット・アスノの名台詞がはたと記憶の引き出しからこぼれて落ちたことで、その違和感は払拭されて、最後のピースがカチリと音を立てて嵌るような、ぬるつとした感触と共にプラスチックのパーツにポリキャップが収まるような錯覚に梨々香は浸る。

「これだ……！」

遙か古代の哲人も、風呂に入っていた時に閃きが降りてきたらしい。

ヘウレーカ、と叫んで全裸で駆け出す度胸も狂気も、梨々香は持ち合わせていない。

だが、ピタリと嵌ったそのアイデアを一秒でも早く実行に移したい、という意味では、その哲学者と同じ心境であった。

ざばあ、と、浴槽から飛び出ると、軽い目眩を感じながらも梨々香は一刻も早く就寝すべく、RTAじみた行動で、自分なりの最高速で

身支度を整えていくのだった。



小春日和という言葉は、本来冬に使うものだとは知ったのはいつだったか。

平日の真つ昼間、学生たちが学業に励んでいる時間に、梨々香は勇気を振り絞って他所行きの服ではなく、ラフなジャージ姿にリュックサックを背負う形で、ガンダムベースシーサイド店を訪れていた。

ガンダムベースに製作ブースが設立されているのは、塗装環境がない客にエアブラシと塗料を提供するという目的こそあるが、もう一つの目的は、買ったキットをその場で組み立てられるというメリットの提供に他ならない。

どこかのセンチメンタリズムな乙女座の人のように、買った瞬間から箱を開けるのを我慢できないお客様に組み立ての場を提供して、利用料をその分いただく。

それこそ、シヨーケースの中で今日も可憐な営業スマイルを振りまいているチイが喜びそうな、WIN—WINの関係というものだ。

そして梨々香がラフなジャージ姿という、年頃の乙女としては若干外に行くのが躊躇われる格好をしてガンダムベースを訪れたのは、その二つの目的を同時に果たすためだった。

「いらっしやいませっ。ガンダムベースシーサイド店へようこそ！」

「……………この前は……………あ、ありがとうございます……………チイ、ちゃん……………」

「いえいえ、チイも貴女のお役に立てたなら本望ですよっ！」

相変わらず猫を何重にも被った営業モードのチイに、GBNとの温度差を感じて風邪を引きそうになりながらも、梨々香は確かにお礼を告げて、ガンプラの販売ブースに足を運ぶ。

梨々香が目当てにしているのは、HG「ガンダムAGE—1 スパロー」だった。

一応、Gバウンサーを作った時に切り出してしまったのは盾の基部

で、シグルブレイドそれ自体は無事だったために組み立てて持たせてみたのだが、両手が塞がっているというのは梨々香にとってどうしても違和感が拭えなかったのだ。

そのため、何か片手で扱えて、かつマウントすることが容易な武装はないだろうか、というのが悩みだったのだが、まさかAGE―1系列の、基本ウエアにその解答があるなどとは思ってもいかなかった。

にへら、と口元を微かに綻ばせて、姉と同様に癖のかかった明るい茶髪をミディアムボブにしている店員から、無事に目当ての「HGガンダムAGE―1 スパロー」を購入すると、脇目も振らずに製作ブースへと駆け出していく。

「……あたしもあんな感じだったのかな」

今日はヘルプにどうしても入らざるを得ず、レジで対応をしていたアルバイトの店員――愛香は、駆け出していく梨々香の背中を見つめて、他の客には聞こえないようにぼそりと呟く。

熱意。愛。きつと色んな言葉が緋い交ぜになった情動に突き動かされるその姿を初々しい、と思えるようになったのは、きつと自分もそれなりの場数を踏んできた証なのだろう。

こほん、と咳払いをすると、愛香は営業スマイルを浮かべて、元の仕事に戻っていくのだった。



販売ブースで梨々香が購入していたのは、何もAGE―1スパローだけではない。

大きな紙袋からクリアプラ板とPカッターを取り出すと、それをカッティングマットに置いてから、梨々香はスパローに付いてくるシグルブレイドをぱちん、ぱちんと持参したニッパで組み立てる。

ガンダムAGE系列のキット、取り分け地球連邦系の機体は名キットとして名高いものが多く、このスパローも値段に対するギミックの再現度や稼働範囲という意味では非常に優れているのだが、惜しむらくは一つだけ重大な欠点を抱えていた。



それは、シングルブレイドの刃がクリアパーツではなく、白いプラスチックのパーツに専用のシールを貼る形で再現する、という、恐らくは値段から来る制約の皺寄せに他ならない。

だが、そこはそれ、電子の海を揺蕩う様々な情報は、そして先人たちの歩みは、いつだって後から道を歩む者にとつての標となる。

足跡を辿るように、一度組み上げてゲート処理まで施したシングルブレイドを分解すると、梨々香はその刃を型紙にして、クリアプラ板に大まかな形を描き出していく。

本来であればクリアレジンをを用いてパーツを置換することが望ましい工作ではあったが、一応この脳筋式解決法でもなんとかならなくはないことそれ自体は事前に調べがいつている。

梨々香は曲面に苦労しながらも、丁寧に、描き出したガイドに沿ってクリアプラ板を切り出す。

その作業はひたすらに虚無との戦いであり、ようやく試作一号が出来上がった後も、Pカッターが勢い余ってはみ出してしまつて傷がついたり、曲面出しが上手くいかなかったりと、色々散々だった。

じわり、と、梨々香の眦に涙が滲むが、そこで立ち止まるわけにはいかない。

スマートフォンから、「クオンの放送局」なるG—Tubeのチャンネルを開き、クリアプラ板を切り出している製作配信——手元を映した動画にアバターで後付け解説を行うそれを参照しつつ、梨々香が試作二号の切り出しにかかろうとした、その時だった。

「…………あの」

「…………ひ、ひあつ…………!? は、はい…………そ、その、ごめんなさい…………!」  
梨々香は突如として聞こえてきたその声に動揺して、手元を大きく狂わせてしまう。

イヤホンは繋いでいたはずだが、いつの間にか外れていたのだろうか。

大きな傷が残ったクリアプラ板と、そして自身の隣にいつの間にか陣取っていた薄手の鉄華団ジャケットに、透き通るような銀髪という、まるで画面の中から抜け出てきたかのような容姿をしている小柄

な少女を交互に見遣ると、梨々香は音量をミュートに指定して、ごめんなさい、と頭を下げる。

「あ、ううん……大丈夫。てか私の方がごめん……ただ、その切り出しだったら、テンプレート借りてやった方が上手く行きやすい、よ……」

「て、天ぷら……?」

「……テンプレート。曲線にも対応した定規みたいなものだよ」

ケンさんに言えば、貸してもらえると思うから。

それだけ告げると、銀髪の少女はふっ、と小さく笑って、元の席――梨々香の真ん前へと戻っていく。

少女が何故、アドバイスを送ってきたのか、梨々香当人にはわからない。

ただ、黙々とMGEXユニコーンガンダムの組み立てに戻る彼女――夜ノ森零の目には、初々しくも苦闘する梨々香の姿がかったの己に重なっていたのと、そして。

「……近くにいるなら、アドバイスを送った方が早い、のかな」

マツムラ店長からテンプレートを借りるために席を立った梨々香の背中を一瞥すると、零はどこか組み立て中のガンプラに語りかけるように、そう呟く。

まだ互いに、電子の海での姿とリアルの姿は結びついていないけれど、袖擦り合うも他生の縁、と人はいう。

ならばきつと――駆け出したばかりの彼女の背中を押すことは、間違っていないはずだ。

そんな、零が呟いた言葉を肯定するように、照明の光を反射して、予め部分塗装を施していたMGEXユニコーンガンダムの双眸は、力強く翡翠の輝きを放つのだった。

## 第十五話 「歩くような速さで」

謎の少女からのアドバイスもあって、梨々香のシングルブレイドクリアパーティ化計画は概ね順調に進んでいた。

アタリを丁寧にとつて、テンプレートを活用しながら決して焦らず、少しずつプラ板を削り出していくその手つきは、初心者にしては随分上手いところだ。

しかし、当たり前だがどんなことにも上には上がいる。

耳に挿したイヤホンから流れる音と、そしてスマートフォンに映る「クオン」の手つきと自身のそれを比較すれば、手際の良さもカットティングの精度も段違いで、梨々香は少しへこんでしまいそうになるが、世の中なんてそんなものだ。

(……私も、なれるのかな……)

そんなものだとはわかっていても、希望の灯は心の中で燻り続けている。

ただ薫る煙を、その期待を吸い込むように、梨々香は曲面の切り出しを終えると息を大きく吐き出して、プラ板の粉塵を吸い込まないように、マスク越しに深呼吸をした。

——なれるとも。クジヨウ・キヨウヤには誰でもなれる。

心が折れそうになった時、落ち込んでしまった時、いつだって思い返すのはあの時チャンプにかけてもらった言葉だ。

それを綺麗事だと嘲笑うことは簡単だろう。

誰でもなれるのなら、何故GBNの頂点はサービス開始以来不動であるのかと、不貞腐れることもできるだろう。

それでも、梨々香にとってチャンプの言葉は、希望に他ならなかった。

梨々香には、あまり褒めてもらった経験がない。

姉である美羽が常に優秀で、いつも両親や親戚からは比較され続けていたということもある。

頑張つて梨々香がテストで80点を取つても、美羽は96点を取る。

なんとか死にそんな思いで、徒競走で最下位は避けても、美羽は悠々とトップ争いに食い込んで色はまちまちだがメダルを貰う常連だったりと、姉の天才伝説は枚挙にいとまがない。

わかっている。

美羽と比べれば、自分は所詮凡人なのだ。

じわり、と、心に刻まれた傷口が開くかのように、梨々香の眦に涙が滲む。

それでも、だからこそ——あの時チャンプがそんな自分の臆病さを、弱さを強さだと言ってくれて、「自分のようになることができる」とも言ってくれたのは、例えおためごかしだとしても、お世辞だとしても、梨々香にとっては間違いなく救いに他ならなかったのだ。

その希望が自分だけのものじゃないことは、痛いほどよくわかっている。

シャフランダム・ロワイヤルで遭遇した「MS斬りの悪魔」ことアズキだとか、味方に来てくれたカエデだとか、彼女たちもまた、既に十分な実力者でありながらまだ遠いその頂点を目指しているからこそ、あの電脳の海に、仮想郷たるGBNにダイブしているのだ。

だとしても、弱さを強さだと言ってくれたあの言葉だけは、梨々香だけのものだった。

臆病で、泣き虫で、いつだって石を投げられる側にいる自分を救い出してくれた言葉を思い返しながら、梨々香は最後の直線を丁寧に切り出していく。

ちらりと顔を上げてみれば、梨々香がスクラッチであるとはいえずパーツ一つを組み上げる間に、先ほどアドバイスをくれた少女は、並行してゲート処理を行いつつも、MGEXユニコーンガンダムという化け物じみた組み立て難易度を誇るキットを完成させようとしていた。

比べている訳ではない。

ただ、黙々と丁寧に切り出したパーツにヤスリを当てて面出しを同時に行っているにも関わらずその驚異的な組み立て速度が落ちることのない手際の良さと集中力に、梨々香は見入っていたのだ。

「……ん、私の顔に何か？」

流石にじつと視線を注がれていたら気付かれるのだろう。足首フレームの面出しを行っていた少女はぴたりと作業の手を止めて、梨々香に視線を合わせる……。のではなく、どこかその目を覗き込むのを避けるかのように胸の辺りに視線を置いて、ぼそりと問いかけた。

「……あ、その……えっと……ごめんなさい……」

「……いや、その、怒ってるとかじゃないんだ、うん」

少女——夜ノ森零は感情表現があまり得意な方ではない。

今だって対面の少女こと梨々香がびくりと体を震わせてしまったのは、自身の声のトーンが幾分か低いことから来るものだろう。

あまりじろじろ見られていて気分がいいわけではないが、初対面の相手をここまで怯えさせてしまったのは、さしもの零とて気が引ける。

どこか梨々香の仕草にハムスターのような小動物じみたものを感じながらも、ささやかなフォローを入れて、零はヤスリをかけながら返答を待つ。

「……え、えっと……その、綺麗だなあ、って……そう思ったんです……」

「ふへっ!？」

それは偽らざる、本心からの言葉だった。

梨々香が綺麗だと感じたのは、その作業の手際もさながら、まるでGBNから抜け出てきたような銀髪や、何よりも丹精込めて一つのキットを作り出そうとしている職人的な姿勢、つまり彼女の在り方そのものだ。

そして、直球でぶつけられた褒め言葉に、梨々香と同じく褒められ慣れていない零は奇声を出力していたが、その手元が狂っていない辺りは流石だというべきなのだろう。

ふへっ、と気が抜けたような奇声を気にすることもなく、梨々香は純粋な尊敬と、少しの羨望が混じった視線を零に向けていた。

「……いや、うん……ヤスリがけは心が無になるから、じゃなくて、大

事な作業だから。やってみれば、できるようになるよ」

「……私でも、ですか……？」

「うん、皆……そうやって始まったから。私も特別なことは何もしてない……って、初対面の人相手に何説教くさいこと言ってるんだろかね、ごめん」

小さく梨々香に頭を下げるが、零が述べた言葉は紛れもなく本当のものだ。

誰もが最初はゲート跡だらけだったり、挟ってしまった素組みから始まって、ゲート処理だとかスミ入れだとか、そういった作業に少しずつステップアップしていく。

零だって——「クオン」だって、あの「ジャバウオックの怪物」を作り上げるのに至った道のりを眺めてみれば、始まりは随分遠いところまで来てしまったものの、それはいつだって変わることはない。

過去。思い出したくないことだって沢山あって、振り切れていないことだって山ほどある。

それでも歩んだ時間は、作り続けてきたガンプラたちは、いつだって後ろから行く道を照らしてくれているのだ。

慣れない憧憬の眼差しに頬を赤らめながらも、零は初々しくも、初心者にしては随分と難易度の高い作業に折れることなく挑んでいる梨々香の瞳にその始まりを想起していた。

だからこそ、なのだろうか。

つい、そんなお節介を焼きたくなくなってしまったのは。

自問するように、乱れた心を無にしてペーパーをかけるが、フレームパーツは何も答えてはくれない。

「……そ、その……」

「ん……？」

「……ごめんなさい、でも、その……ありがとうございます……」

「えっ。ちょっと待って、どうして泣いて……」

梨々香ははらはらと涙を零していたが、それは悲しいからではない。

少女の、零の言葉があの日貰ったチャンプからの言葉にオーバー

ラップして、言葉では表せない感情がそうさせたのだ。

「ごしごしと涙目を拭いながらもまだこぼれ落ちてくる涙に自己嫌悪を抱きながらも、梨々香は何度も、感謝を示すように頭を下げる。

「……わ、私……ごめん、なさい……ぐすつ、泣き虫で……弱虫で……ちよつとした、ことでも、えぐつ……泣いちゃう、ので……その……」  
「ああ……」

梨々香が抱えているものが何であるのかは、零にもわからない。

ただ一つだけ——たった一つだけれどわかるのは、そこに大きな傷を抱えているということだけだ。

だが、それがわかれば十分だった。

必要以上に他人の心に踏み込むというのは、傷口に手を突っ込んで拡げていくのと同じことだと、零はそう思っている。

だから、梨々香がどんな痛みを抱えていて、どうしてすぐ泣いてしまうのかについて問いかけることは決してしない。

「……でも、嬉しかったんです……」

梨々香は自分がダメダメな存在だということとは、誰よりもよくわかっている。

今だって本来行くべき高校に行かず、ガンダムベースの製作ブースにこもってプラ板を切り出しているのだから、そこを詰られれば何も答えることはできない。

だからこそ、そんな自分でもできると、背中を押してもらえることに慣れていなくて、でもそれが何よりも嬉しくて、泣いてしまうのだ。

「……そっか、うん。でも……君は上手い方だよ。自信持ってい」  
初心者にはわざわざシングルブレイドのパーツをクリア化しようなんて考えないし、考えていたとしても実行に移せるのは少数派だ。

自分にしては珍しく、慣れない直球の褒め言葉に頬を赤らめ、視線を逸らしてこそいたものの、零は梨々香に向けて、愛すべき後身たち、その一人に向けて確かな激励を送っていた。

「……ぐすつ……ありがとう、ごさい……ます……うえええ、んっ……」

どれだけ飢えていたのだろう。そしてどれだけ傷ついていたのだ

ろう。

割れてヒビが入った心を抱えながら、恐らくはきつとGBNという世界に向けてこの現実には爪を立てて、歩くのではなく、倒れ伏しながらも、這いずりながらも——確かに前を向いている梨々香は、弱虫などでは決してない。

零は、「クオン」は、梨々香の、「リリカ」のことを知らないけれど。面出しが終わったフレームパーツを組み付けながら、傷だらけの少女に、ひび割れた梨々香に言葉は送らずとも、いつかの自分を重ね合わせて、そして——仮想郷で巡り合った「リビルドガールズ」に所属しているある少女の面影を見出して、微かにその口元を綻ばせる。大丈夫だ。きつとこの子なら強くなれる。

そこまで言うのは、きつとお節介がすぎるのだらうけれど。

零は組み上げたフレームパーツに、あらかじめ切り出して面出しとゲート処理まで終わっていた装甲パーツを被せながら、そう微かに微笑むのだった。



江戸の仇を長崎で討つ、なんて言葉があるように、雪辱戦のつもりで選んだ戦いで敗れてしまった仇というより禊ぎはどこかで済ませておかなければいけない。

製作ブースでその後プラ板の切り出しとグリッパパーツへの組み込み、合わせ目処理、コンパウンドまで用いた表面処理と一つのパーツを作り込むだけでも地獄のような作業工程を完遂していたこともあって、開店と同時に突入したにも関わらず、時刻は既に美羽が学校から出たであろう放課後を回っていた。

だが、その甲斐もあって、擦り合わせだとかに苦労しながらも梨々香の——リリカの作り上げたシングルブレイドは、理想的な形で腰のマウントラッチに収まってきている。

製作ブースでの出費は工具類含めて手痛いものであったが、それも格納庫エリアで眺めていたAGE—1ブランシユの新たな勇姿



に、リリカは湧き上がる高揚感のようなものを覚えていた。

「……できたんだ、私にも……」

あの後、軽く自己紹介というよりは互いに名乗りを済ませて別れた零とリリカだったが、彼女の言葉は確かに現実となつて、見事に透き通るクリアのペールグリーンを纏ったシングルブレイドの刀身は、十八メートルクラスに拡大されても傷一つなく、美しく輝いている。

このまま眺めているだけでも一日を過ごせそうなものだったが、リリカがシングルブレイドを作り上げたのは、見えて嬉しいコレクションにするためではない。

はっ、と正気に立ち返ると、リリカは右手でコンソールを操作して、ロビーへの帰還を選ぶ。

格納庫エリアでは機体を眺める他にも様々な機能があると、まとめwikiには書いていなかったが、カラーパターンはこのブランシユから変えるつもりはなかったし、その他の機能についてはよくわからなかったから、これ以上の長居は無意味だと、そう判断してのことだった。

だが、それは功を奏してくれたらしい。

ロビーへと再構築されるリリカのアバターにして仮想の躯体——その視界に捉えたのは、ちようにど自身と同じようにロビーにその姿を現そうとしているミワの存在だった。

「おお、おお、リリカちゃんだ、奇遇だねえ」

「う、うん……お姉ちゃんも、今……その、帰り？」

「然り然り。ミワちゃんも今ちようにガンダムベースに来たばかりだよ」

完全に二人のアバターがロビーに固定されたのを機に、ミワはリリカの両手を取って、いつも通り眠たげな目をしながらもにへら、と笑う。

なんで古風な言い回しを選んだのかと問われればそれはその場のノリと勢いだとしか答えられないのだが、とにかく妹との再会にすっかり気を良くしたミワはリリカニウムを補充するように、優しくその身体を、仮想の躯体を抱きしめる。

「……お、お姉ちゃん……その……」

「んん、リリカちゃん的にはNGな感じかなあ」

「……いい、嫌じゃ、ない、よ……？　でも、その、視線が……」

客観的に見れば瓜二つの容姿をした姉妹が抱き合っている、という光景は人目を引くものであり、特定の趣味をしているダイバーからは目の保養になるものなのだろう。

ぎゅーっ、とリリカに抱きついて頬をすり寄せるミワと、今にも頭から煙を吹き出しそうなぐらい顔を真っ赤にしながらもそれを嫌がることなく受け入れているリリカ、という構図は、互いの豊満なバストが密着して変形していること含めて、無許可でのスクショを取れないことに絶望して膝をつくダイバーもいるほどだった。

「……ミワとリリカちゃんは見世物じゃないんだよお、帰った帰った」

そして、そんな不埒なダイバーたちを威圧するように冷たい声音で一蹴すると、ミワはリリカとの抱擁を解いて、くあ、と小さく欠伸をする。

なんだかんだ、リアルではまだ複雑な思いを捨て切れていないけれど、幼い頃によくそうしてもらったように、ミワに抱きしめてもらうのは、リリカとしても嫌いではないし、むしろ好ましいとさえ思っていた。

ショート寸前の思考回路でそんなことを考えながら、リリカはすっかり火照った頬を覚ますようにむにむにと両手でこね回す。

「んん、なんだか幸先いいんだか悪いんだかわからないねえ」

「う、うん……そうだね、お姉ちゃん……」

変なのとエンカウントするのは生まれた星が悪いのだろうかとりリカは若干落ち込んだように小さく肩を落とす。

そしてミワは、特に気にしてなさそうな顔をしながら水面下ではきつと怒りを煮えたぎらせていた。

全く、最近のダイバーはマナーがなくなってないから困る、と、自身も「最近のダイバー」であることを棚に上げてぶんすこと怒りを煽らせながらも、即座に思考回路を切り替えて、ミワはリリカへと問

いかける。

「ところでところでリリカちゃん、今日は何して遊ぼつか〜?」

ミワとしてはリリカと一緒に遊べるならば別に採取だろうが討伐だろうがレイド戦だろうがなんでも構わなかった。

だが、もしもじと何かを言いたがっているであろう妹の視線は明らかに何かを希求していることぐらいは、ずっと一緒にいた姉だからこそ理解できる。

「……え、えつと、その……私、挑戦して、みたいかな、つて……」

「挑戦、挑戦かあ……いいよお、それで、リリカちゃんは何したい〜?」

「……えつとね、私……もう一回、その……お姉ちゃんと一緒に、あの……しゃふらんだむ? つていうのに……挑んで、みたい……!」

しどろもどろになりながらも、ふるふるると震えながらも、リリカははつきりと自分の目標にして雪辱を晴らすという使命を、ミワへとはつきりと伝えるのだった。

## 第十六話 「涙の昨日にサヨナラ」

リリカが提案したのは、再びシャフランダム・ロワイヤルに挑むことだった。

勿論、完全ランダム抽選での即席チーム戦という都合上、乱数の女神様の気まぐれによって再びあの「MS斬りの悪魔」だとか、様々な二つ名持ちクラスのダイバーに出会す可能性も考えられる。

それでも、受けた敗北を、屈辱を注ぐのであれば江戸の仇は江戸で討つの精神で、リリカはミワにその提案を持ちかけたのだ。

そして、奇しくもミワもまた同じ心境だった。

最近では返上したいとはいえない二つ名を貰っていたことで浮かれていたところがあつたのかもしれない。

上には上がいる。当たり前前のごとが抜け落ちていたからこそ、今度は例えアズキとエンカウントしても正射必中の一撃で一矢報わんと、それが可能かどうかはともかくリリカに勝るとも劣らない闘志を燃やして、再びこの電子の海にミワは戻ってきたのだ。

「うんうん、いいねえいいねえ、ぐつどだよリリカちゃん。ミワもそう思ってたところだよ」

「……お姉ちゃん」

「今回はお姉ちゃん、いつもより気合入れちゃわないとねえ」

シャフランダム・ロワイヤルの都合でアズキと出会えなかったとしても、初めて挑んだ戦いの場で雪辱を晴らせるのであればそれに越したことはない。

意を決して、二人はミツシオンを受注するためにカウンターへと並んで、順番を待つのだった。



今回抽選で選ばれたステージはジャブロー、密林が広がり、水中地帯が存在している都合から多方向からの奇襲を常に想定して動かなければいけない、GBNでも屈指の難易度のステージだ。

リリカは僅かに設けられた出撃までの時間と、地下の格納庫から出撃したAGE-1ブランシュが大地へと降り立つ瞬間まで、その概要を確認していた。

シャフランダム・ロワイヤルであろうが正規のフォース戦であろうが、ジャブローというステージは基本的に侵攻側、原作ではジオン公国軍が担っていたポジションと、その反対である地球連邦軍が担っていた防衛側に割り振られることとなる。

そして、地下のハッチから出撃してきたということは、リリカたちは防衛側——つまり、上空からの攻撃に対処しなければいけない側であるということであった。

シャフランダム・ロワイヤルにおいて幸いなのは、地下基地までのハッチの防衛という原作を再現した要素がなく、侵攻側も防衛側も基地への攻撃と防御を無視して、あくまで敵機の撃墜のみが単純な目標となるところだ。

だが、それでは防衛側が不利すぎる——と、いうことで防衛側に所属する利点として、各所に設置されたトーチカやら砲台からの火力支援を受けられるように設定されているのだが、所詮はNPDが操っているものなので命中精度に関してはお察しといったところだろう。

僚機であるジム・スナイパーIIと量産型ガンキャノン、そしてジム・コマンドと見事に「ポケットの中の戦争」に出てくる量産機たちを一瞥して、微かな疎外感を覚えながらもリリカはミワが陣取った狙撃ポジションを、データリンクによって受け取る。

「……相手がわからないなら、慎重に行かなきゃ……」

シャフランダム・ロワイヤルにおいて厄介なのは、誰かが最初にエンゲージするまでの間まで、敵が五機であること以外は何もわからないところがある。

構成もわからないアンノウンとの交戦と言い換えれば、そこに燃える要素を見出すダイバーも少なからずいるのだろうが、リリカとしては、ミワのフリーダムルージュがAWACSデインのパーツを採用していることで索敵に優れているとはいえ、見えないことは不安でしかなかった。

先日のブルーデイスティニーコンビが早々に突っ込んで爆散していったのは対照的に、ポケットのの中の戦争トリオは量産型ガンキャノンを後衛に置いて、ジム・コマンドとジム・スナイパーIIが突撃前衛を務める形で慎重に戦線を押上げていく。

「この前のに比べたら、できるみたいだねえ」

「……え、えっと……うん……」

嘆息しつつ、狙撃ポジションに身を潜めていたミワからの通信にリリカは控えめな同意を返す。

とはいえ、あのコンビがプレイングミスをしていたとはいえそれをわざわざ掘り起こすのも気が引ける、ということで、その返事は曖昧なものとなっていた。

じりじりと、心臓を、そして胸の奥を焦がしていくような緊張感が、リリカが操縦桿を握る手に、じわりと汗を滲ませる。

「……ね、ねえ、お姉ちゃん……」

「ん、どしたのどしたの、リリカちゃん」

「……あ、あの……ジム・スナイパーIIって……」

「ああうん、それはねそれはね……割と複雑だから帰ってから話すよ」

どこか緊張を誤魔化すようにリリカはミワへとそう問いかけていた。

クリアリングを行った旨を通信で送ってきた突撃前衛コンビに従う形で、僚機の量産型ガンキャノンと共にゆっくりと戦線を押している最中に、思考を横道に逸らすのはあまり推奨されたことではないのだが、それにししたってやけに静かすぎて不安になってくるのだ。そして、ミワから返ってきた答えもまたあやふやなものであったのだが、これについてはジム・スナイパーIIという機体の特性がそうさせるものであるのだから仕方がない。

リリカは当然のように小首を傾げるが、一年戦争におけるジム・スナイパー系統の役割と開発経緯と名前に関しては、非常にややこしい事情が絡んでいるのだ。

ジムスナイパーとジム・スナイパーIIは開発経緯も技術系統も別

物だし、なんならそこにジム・スナイパーカスタムが絡んできた日には熟練のガンダムマニアでさえも説明に困るレベルでごちゃごちゃと、フリーバーテキストがタコ足配線のように絡み合う。

ただ、要するに覚えておけばいいのはジム・スナイパーIIは別にスナイパーとしてだけ活躍する機体ではない、ということだけだ。

ミワからのそんな補足に、納得こそしきれなかったもののリリカは突撃前衛を務めているということはそういうことなのだろうと割り切って、周囲の警戒と索敵に戻る。

そして、アラートが鳴り響いたのはその瞬間だった。

『こちらスカーレット1、敵機体に接敵！』

『スカーレット2、エンゲージ！ スカーレット3に合流と火力支援を求む！』

どうやら先行していた二機のジムは敵と接触したようだ。

通信ウィンドウに割り込んできた、地球連邦兵のコスチュームに身を包んだ青年が、リリカが随伴機を務めていた量産型ガンキャノンへと火力支援を要請する。

ここまではごく自然な流れだ。

遊撃手としてリリカもミワの狙撃ポジションを確保しながらも手伝いに向かった方がいいのだろうかと思案した、その瞬間だった。

『スカーレット3了解、合流のために呐喊する！』

「ちよ……っ!？」

オープン回線で通信を聞いていたミワが愕然とする程度に、スカーレット3を名乗るダイバーの行動は常軌を逸していた。

こともあろうに、機動力の低い量産型ガンキャノンで、肩部分のキャノン砲と手にしたプルパップ・マシンガンを斉射しながら前衛のジムコンビへと合流すべく、脇目も振らずに突っ込んでいったのである。

リリカも一瞬硬直し、思考回路が火花を吹き上げてショートしかけるが、動き出そうとした時には後の祭りだった。

『スカーレット隊全滅！ 貴官らの健闘を祈る！』

「……え、ええ……」

出会い頭に二秒も経たず三機を示す青い点はレーダーから消失する。

それが彼らの宿命だったのかロールプレイだったのかはわからない。

ただ、スカーレット隊を名乗っている以上その名前が厄ネタというか原作においても似たような感じで全滅していたものであるとリリカは知らないが、いつそ鮮やかなまでの全滅っぷりに、ミワは頭を抱えていた。

そして、開いた口が塞がらないといった風情のリリカを置き去りにして、戦線は徐々に押し戻されていく。

一応、レーダーを確認する限りではスカーレット隊の二人が敵の一機を撃破するというキルスコアは挙げてくれていたようで、明滅する赤い点は四つとなつているのが不幸中の幸いといったところだろう。

しかし、じりじりと戦線を押し返されているような感覚に包まれていながらも、明確に敵からの弾が飛んでこないというこの状況は、どこか異常でさえある。

敵には何かがあつて、そして何かがいる。

動いても動かなくてもまずいこの状況でどちらのリスクを取るか——リリカの答えは決まっていた。

「……お姉ちゃん、私……その、突っ込むから……!」

「背中には任せられたよお、リリカちゃん。そして多分だけ……: 気をつけてね、敵にもきつと狙撃手がいるみたいだから」

ミワからの激励を背中に受けると、リリカは一度深く息を吸い込んで、AGEEーブランチのスラストを全開にして敵陣へと呐喊をかける。

ミワの予測は、奇しくもリリカと合致していた。

敵が二機だけになったにも関わらず、弾幕砲火で密林を切り開いてこないのは、そしていかに鈍重であったとはいえ量産型ガンキャノンという装甲値の高い機体が一瞬で落とされたのには、きつとスナイパーの存在が絡んでいる。

モニターが捉えた敵は、ゴッグとハイゴッグという水陸両用コンビ



と、そして全身を光り輝く金メッキ調の塗装で覆ったハイペリオンガンダムというなんとも、いろんな意味でハイペリオンが浮いた構成だった。

『飛んで火に入るなんとやらだな、挟撃をかけるぞ！』

『了解！』

いつ、どこから隠れ潜んでいるスナイパーからの弾が飛んでくるかわからない状況で、三対一という不利な条件を捌けというのは中々の、否、かなりの無理難題であるといえた。

だが——リリカは決して、ビギナーズラックだけで生き残ってきた訳ではない。

恐らく水中戦を想定して用意したのであろうゴッグとハイゴッグだが、機体の特性としては奇しくも数秒で爆散した量産型ガンキャノンと似ている——というより、カテゴリ上機動力より装甲値の方が高い機体群に分類されている。

ならば、イニシアチブを握っているのはこちらの方だ。

ニードルガンを牽制射撃として放ちつつ、ゴッグがその腕で針のような弾丸を受け止めたのを確認すると、リリカは躊躇いなくメガ粒子砲の発射口を狙って、ドッズライフルのトリガーを引く。

『フハハハハ、バカめ、これぐらいゴッグならなんとも——うおおおああああっ!?!』

『カラサーっ!?!』

ゴッグの装甲圧は、確かに原作においてはガンダム・ハンマーを素手で受け止めるほどに分厚く頼り甲斐のあるものだ。

だが、ドッズライフルにはパッシブスキル——D・O・D・S・効果と呼ばれる、粒子に螺旋状の回転をかけて撃ち出すことで貫通力を強化する機構が付与されている。

そして、メガ粒子砲の砲口が、ゴッグの中でも脆い部分であったことも相まって、ゴッグを操っていたダイバー、「カラサ」はスカーレット3と同じ道を辿ることとなった。

『貴様、よくもカラサをやってくれたな!』

「……来る!」

頭に血が上ったのか、ハイゴッグを駆るダイバー、「カミンスカヤ」は凜とした叫び声をあげながら、腕部に装備されたメガ粒子砲を放つ。

そして、もはや何もいうまいと呆れているのか、全身を金色に包み込んだハイペリオンはリリカの死角を突こうと、ビームマシンガンを乱射しつつ背後へと回り込んでくる。

——ならば、これは使えるだろう。

瞬間、忌まわしきクソゲーの記憶が、リリカの中にリフレインした。あの金色のハイペリオンとやらがどんな攻撃を有しているかはわからないが、少なくともメガ粒子砲の射線は自分を挟む形でハイペリオンにも向いている。

だつたらあの侍同士のバトルロワイヤルでは常套手段と化していたフレンドリー・ファイアが狙えるというものだ。

「お願い、ブランシユ……い！」

——跳んで。

リリカの言葉に応えるかのように、わずか一瞬で腰部のスラスタ―による逆制動をかけたAGE―1ブランシユはそのまま地面を蹴ると、バク宙の要領で跳躍する。

しかしその迂闊な先飛びはいかにも、潜み、隠れているスナイパーからすれば狙ってくださいと言っているようなものだ。

案の定、コックピットに迫る警告音を聞いたリリカだったが、その瞳に焦りはなく、ただ冷静に迫りくる一発の弾丸を迎え入れようとしていた。

何かが碎けるような音と共に、一瞬でAGE―1ブランシユのコックピット内はコーションアラートを示す黄色の光に包まれる。

本来であれば、ブランシユは爆散していてもおかしくなかった。

だが、リリカは跳躍する寸前、バックラーで自身のコックピットを庇い立てていたのだ。

確かに狙撃手の弾丸は正射必中を体現するように、リリカのコックピットを捉えていたかもしれない。

攻撃によるノックバックでバランスを崩し、地面に背中から叩きつ

けられながらも、リリカは短く詰まった息を吐くと、その口許に控えめながらも寧猛な——ミワとよく似た、捕食者としての笑みを覗かせた。

確かに、スナイパーライフルという武装は装弾数が少なく、リロードも長めに設定されている。

だからこそ、絶好の機会が巡ってきたのなら、狙撃手がコックピットを狙うのはごく自然な流れだ。

逆にいえば、「その機会において、狙撃手が狙うのはコックピットに絞られる」ということでもある。

リリカは、それを読み切ったのだ。

勿論それを承知しているからこそ敢えて、次弾で確殺すべくメインカメラやスラストアームを狙ったりするスナイパーも数多くGBNには存在しているのだが、仮称スカレット隊を見事に自身の手管で全滅に追い込んだことで、きつと僅かな慢心がそこには存在していたのだろう。

「……お姉ちゃんー！」

「おっけ、おっけー……ありがと、リリカちゃん！ 狙いは……ついたよおー！」

そしてリリカが跳躍したのは、同じく狙撃手として陣取っているミワに、敵のスナイパーが展開した射線を伝えるためだ。

射線を読まれるというのはスナイパーにとって自らの居場所を晒すに等しい。故にリリカを狙撃したその機体——ザクイー・スナイパータイプは立ち上がり、ポジジョンを移そうとした。

だが——時は既に遅かった。

ミワが気合を入れて用意してきた狙撃銃は、もはや銃と呼べるほどの大きさに収まっていない、ひたすらにデカく、分厚く、大雑把な、砲台でも呼ぶべきものだ。

映像作品「機動戦士ガンダム00」のファーストシーズンにおいて、ガンダムデュナメスが高高度の狙撃に利用していた特注の狙撃銃は、ファーストガンダム、その外伝であるところのMSV群に出てくるバストライナーであるとか、或いは「機動戦士ガンダムZZ」に登場す

るメガライダーのような、サブフライトシステムに片足を突っ込んだ代物だった。

故にこそ、逃げようとしてもその範囲ごと刈り取られる。

ビームが駆け抜けた衝撃の余波で僅かにAGE―Iブランシユも装甲を溶かされながらも、逃げようと立ち上がったザクI・スナイパーティーはその狙撃、もとい砲撃に捕らえられて、テクスチャの塵に還っていく。

そして、地上では何が起こっていたのかといえば――

『お前……中々できるやつのようにだな』

冷淡な言葉が耳朶に触れると同時に、コーションアラートが鳴り響く。

ブランシユへと襲いかかるビームマシンガンの弾幕を、ハンドスプリングの要領で回避しながら、ぎり、とりリカは奥歯を噛み合わせた。フレンドリー・ファイアを利用して始末したはずのハイペリオンが立っていて、代わりに蒸発したのはハイゴッグという状況にリリカは一瞬小首を傾げるが、その答えは不幸なのが幸いなのかすぐにわかることになる。

無事な右手で放ったドッズライフルが、黄金のハイペリオンに直撃するが、その弾は装甲に吸い込まれたかと思うと着弾地点で再構成されて、放ったはずのリリカへと獐猛な牙を剥く。

「……ビームを、弾いて……!?!」

『そうとも！ このヤタノカガミを取り入れた……シユペールスーパーハイペリオンは無敵だア！』

――意味が被っている。

リリカは一瞬、気の抜けるその名前にがくりと肩を落としかけたが、それも恐らく相手の心理的なブラフなのだろうと気を引き締め、毅然と金色の敵機を睨みつけた。

相手が全てのビームを跳ね返すのなら、ミワがあの狙撃を行っても、それは丸々、砲手である彼女へ跳ね返るだけだ。

幸いなのは、状況を伝える余裕がなくとも、あの超巨大な狙撃銃のリキヤストには時間がかかることだろう。

リリカは瞬時に戦況を分析して、融解しかけている左腕を強引に引きちぎると、それをシュペールスーパーハイペリオンなる金色のハイペリオンに叩きつけようと大きく振りかぶる。

『無駄無駄無駄ア！ 言ったはずだ……このシュペールスーパーハイペリオンは無敵だとなア！』

金色のハイペリオンを駆るダイバー、「ホッシー」はやけにテンションの高い叫びを上げると、背負っていたバックパックから、多面体のバリアを形成して、機体の全身を包み込んだ。

そして、そのバリア——アルミューレ・リユミエールに触れたAG Eー1ブランシュの左腕は瞬時に融解し、爆散する。

「……似てる……」

リリカは、落胆するより早く思わずそう呟いていた。

確かにこのシュペールスーパーハイペリオンが披露したアルミューレ・リユミエールと、以前に交戦したチャラ男トリオのリーダー、ラチャーオが乗っていたゲルズゲーが持っていた陽電子リフレクターは、厳密にはその原理を異にしているものの、似たような武装であることは違いない。

——ならば。

「リリカちゃん、ミワの支援は!?!」

「……ううん、大丈夫……私、やれる……!」

「……そっか、そっかあ。なら、任せたよお、リリカちゃん!」

試し斬りの相手には、うってつけだということだ。

狙撃砲を放棄し、参戦への合流を試みるミワを制してリリカは、満を辞してといった風情でドッズライフルを放棄し、腰部にマウントしていたシグルブレイドを引き抜いた。

零が直々に教えてくれたこともあり、このクリアパーツ化されたシグルブレイドは、特注品といった具合に仕上がっている。

プラネットコーティング。

かつてGPDが全盛を迎えていた時代には必須とされていた、ガンブラを動かすための技術であり、そして主流であるビーム兵装に対抗するためのコーティング剤。

クリアパーツにオーバーコートされたそれは、ある種、シユペールスーパーハイペリオンにとつての劇毒に等しかった。

『無駄無駄、何をするつもりか知らないが、このシユペールスーパーハイペリオンは……』

「……お願いブランシユ、私と……翔んで……っ！」

リリカはアルミユール、リユミエールの裏側から撃ち放たれるビームマシンガンによる弾幕をアクロバティックな軌道で回避しつつ、シユペールスーパーハイペリオンの頭上を目掛けて跳躍する。

何を企んでいようが無駄なことだと、ホツシーは嘲笑に口許をそつと歪める。

ヤタノカガミとアルミユール・リユミエールという二重防御を施すという発想に至った時は、我ながら天才かと、そう思いたくなつたものだ。

ビームは跳ね返し、そして実弾などはアルミユール・リユミエールが弾き飛ばす。

——そして、シユペールスーパーハイペリオンは無敵になる！

頭上から自身に接敵するAGE-1の改造機ことAGE-1ブランシユを「わからせて」やるべく敢えてホツシーはその場で直立していた。

だが、一瞬の慢心はこのGBNにおいて致命の隙となる。

対ビームコーティングが施されたことで、アルミユール・リユミエールを貫通するに至ったシングルブレイドが、脳天から縦に両断する形でシユペールスーパーハイペリオンを斬り裂いていく。

『は……？』

「やった……！ 上手く、やれた……」

なんで？ なんでなんで？ アルミユール・リユミエールじゃん！

無敵のシユペールスーパーハイペリオンじゃん、チートでも使つてるのかこの女！

そんな具合に、爆散するまでの数秒間、ホツシーの内心は荒れに荒れていたのだが。

『まさか……ああああッ、対ビームコーティングかああアッ！』

「……え、えつと、はい……」

『こ、こんな結末……ぬうううああアッ!!』

一つの絶望的な見落<sup>ガ</sup>としに気付いて尚、最後まで独特なハイテンションを維持しながら、シユペールスーパーハイペリオンは、その光り輝く機体を爆炎と共にテクスチャの塵へと還して、戦場から消滅していく。

【Battle Ended!】

【Winner: Your Teams!】

そして、全ての敵機が撃墜されたことで鳴り響いた無機質なシステムの音声が、祝福もなく落胆もなく、淡々と、ただそこにある事実として、リリカたちの勝利を告げるのだった。

## 第十七話 「駆け出すぎざはし、それぞれの思惑」

二度目のシャフランダム・ロワイヤルを無事勝利で飾り、ロビーに帰還したりリカを一緒に出撃したミワより一足先に出迎えたのは、無機質な合成音声だった。

【C o n g r a t u l a t i o n s !】

【ダイバーネーム：リリカのランクがEからDに昇格しました】

ダイバーランク。

それはこのGBNにおいて、強さの指標を表す度合いであり、高ければ高いほど良いものだとされているのは、リリカもwikiやら何やらで確認していた。

特に、DランクとCランクからがGBNは本番である、という記述が正しいのであれば、リリカはそのぎざはしに立ったこととなる。

「おお、おお、リリカちゃん、昇格したんだねえ」

少し遅れてロビーに帰還してきたミワは、表示しっぱなしになっていたダイアログからその事実を確認すると、ぎゅーつ、とリリカを抱きしめて、その頭を慈しむように優しく撫でた。

「あ、う、うん……その、なんだか実感、湧かないけど……」

「最初はそんなもんだよ、ミワだって今Cランクだけど、別に一人前になったって感じはしないからねえ」

上を見れば、夜に浮かぶ満天の星々を仰ぐかのように、幾人もの英傑が、そして魔物が、神々が棲まうのがこのGBNという仮想郷にして、魔境でもあるのだ。

Cランクまで上がってようやく一人前とはいうものの、在野のダイバーの中にはランクの高さや低さに関わらず一定以上の実力を備えた、眠れる獅子とでもいべき者が潜んでいたりもする。

要するに、上がって嬉しいコレクション要素ではあれど、本腰を入れて戦いに明け暮れるのでなければそれは単なる飾りにすぎない、というのがミワの見解であった。

ただ、攻略サイトやまとめwikiに記された通り、DランクとCランクが新たな要素の解禁されるターニングポイントとして設定さ



れていることは紛れもない事実であり、そういう意味ではCランクまでさつさと上げてしまおう、という記述に関しても間違つてはいないといえる。

「え、えつと……Dランクからだど、フォース？　つてというのが解禁される、んだよね……お姉ちゃん……？」

「うむ、然り然り。まあでも、そんな焦つて考えることでもないよ？」

相変わらず豊かな胸元にリリカを抱きしめたまま、ミワは唇に人差し指を当てて、どこか考え込むような仕草を見せながらリリカへとそう囁く。

フォースというのは要するにチームのようなものだ。

ガチガチにランキングハックを進めていく武闘派もいれば、ただ放課後や退社後の時間を使って賑やかに遊んでいるだけのフォースもいる。

ただ、共通しているのは、その寄り合いに所属することに対して皆が何かしら共通した意識を抱いている——つまり、目的を同じにしたメンバーでなければ、フォースというのは成り立たないのが世の常なのだ。

緩く遊ぶつもりだけだったフォースが突如としてランク戦に名乗りを上げた結果空中分解を起こしたり、逆にランキングハックという無数のハードルを飛び越える戦いに疲れ果てて、そのまま解散したりといったトラブルもまた、枚挙に暇がないのである。

「……フォース、かあ」

その言葉を聞いてリリカが思い出すのは、自分にとつての始まりとなった再構築の名を掲げる少女たち——「リビルドガールズ」のことだ。

薄い唇が確かに紡ぎあげたその名前は、今日において様々な意味で有名なものとなっている。

それは彼女たちが「E.Lダイバー奪還戦」こと第三次有志連合戦（非公式）で大きく名を上げたというのもあれば、ガンスタグラム——GNB Nにおける写真共有サービスにおいて、濃厚にして芳醇な百合の花

を咲かせていることまで様々だ。

だが、リリカには漠然とした憧れこそ確かにあれど、あの「リビルドガールズ」と同じところに行けるかどうかについてはさっぱりわからない、といったところだった。

難しく考えなくても良い、とミワが言った通り、とりあえず今は忘れても良さそうだろう。

リリカはそう判断すると、抱きしめられている温もりを確かめるようにそつとミワの背中に手を伸ばして、自身もまた姉のことを抱擁する。

スナイパー対策として、というよりは過剰な気合を入れて持ってきたあの超大型狙撃銃がなければ、敗れていたのは自分たちだった。

特にあのシュペールスーパーハイペリオンという金色の機体は、ミワにとっては天敵のようなものだ。

そういう意味では早期にリリカの脅威となりうるスナイパーを排除してくれたミワこそが、あの戦いにおけるMVPであったのだろう。

「しかししかし、凄かったね、リリカちゃん」

「……えっ、と……私……？」

「うむむむ、だってあの金ピカが張ってたバリアごと切り裂いちやうなんて芸当、お姉ちゃんにはできっこないよお」

持ち込んでいたのが超大型狙撃銃ではなく、ツダの対艦ライフルであったなら、ABAPSFDSでバリアをぶち抜くことはできたのかもしれないが、格闘の間合いに持ち込まれれば一気に形勢は不利に傾く。

そう考えると、リリカがいつの間にか作り上げていたシングルブレイドの活躍は目覚ましい。

狙撃手であるミワにとって、ドッグファイトはなるべくなら避けたいものだ。

あのシュペールスーパーハイペリオンとタイマンを張ってくれと言われれば、ミワは即座に首を横に振っていたことだろう。

「……えっと、その……私、頑張れた、のかな……」

「うんうん、リリカちゃんは誰より頑張ってたしく、今でも誰より頑張ってるよお」

痛みを抱えたままGBNに流れ着いたりリリカの傷に触れてしまわない程度に妹の頑張りを肯定しながらも、ミワはその傷に触れられないことに、少しだけ胸の辺りをナイフで切り裂かれたような痛みを覚える。

自分が自分である、というのはどうやったって逃れることができない宿命のようなもので、だからこそそこに嫌悪や絶望を抱く人間だつて数知れないし、ミワだってその一人に当たるのだろう。

ぎゅっ、と、自身を抱きしめてくれるミワの腕に籠る力が少しだけ強くなったことを感じて、リリカはそこに微かな痛みと傷痕を見る。

自分が傷つき果てたように、そしていつもボロボロになってきたように、ミワもミワで、きつと何かしらの消えない傷を背負って生きているのだろう。

珍しく、言葉でこそなかったけれど、弱音を零した姉に何をしてくれるのか、自分に問いかけたつて、答えなんて出てこない。

それでも——傷だとか痛みだとか、そんなものを抱えていても、このGBNであれば笑い合えるような気がしたからこそ。

ぎゅっ、と、リリカも言葉に代えてミワを強く抱擁する。  
それが自分にとっての精一杯で、そして誠心誠意だから。

未だ、二人の間に横たわり続けているひび割れや断絶を埋めるように、そうでなければこのまま抱き合つて、溶け合うことを望むように、姉妹は言葉こそそこになくとも、同じ悲鳴をあげながら、長く長く抱き合い続ける。

「……ありがとねえ、リリカちゃん」

「……う、うん……それなら、お姉ちゃんも、その……ありがとう……」

「こりゃあ一本取られちゃったかなあ……うんうん、やつぱりリリカちゃんは世界で一番可愛くてキュートで素敵な、ミワの妹ちゃんだよ」

恥ずかしげもなくそんな身内自慢をするミワは堂々としていて、むしろ聞かされている側であるリリカが頬を赤らめ、耳まで真っ赤になるほどだったが、それだけ愛情を注がれているのだと考えれば、また違った鼓動が血液の流れに乗って、全身を駆け巡っていく。

とりあえずは雪辱戦も果たしてランクも上がって、苦勞して作ったシングルブレイドも活躍してくれた。

ショート寸前の思考回路を保護するように横道へと考えを逸らして、リリカは今日の戦いを思い返す。

ミワのアシストこそあったとはいえ、あの状況から逆転できたことも含めれば、十分合格点といったところじゃないだろうか。

自分を褒めたり、自分にバツじゃなくてマルをあげるのはまだ難しい。

それでも、そんな風に考えることができるようになったのは、ミワがいてくれたり、チイとの微かな繋がりがあったり、ガンダムベースの制作ブースで出会った少女に——夜ノ森零に、クリアプラ板の切り出し方や磨き方を教えてもらったりしたからで。

言い換えるのならば、GBNがあったから、ここまで来れたのだ。

満天を仰ぎ見るように、リリカは消し忘れていた、自身のダイバーランクを昇格通知を一瞥する。

ならばこの仮想郷で、自分は何をなすべきなのだろう。

始まりのきざしは、その入り口に足を踏み入れながら、リリカはただ胸に感じる温もりに、そんなことを想うのだった。



GBN総合スレ part. 1116

1：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ここはガン普拉バトル・ネクサス・オンライン、通称GBNに関する総合雑談スレッドです。

各種ミッションについてはWikiを参照した上で専門スレへ、フォーヌ勧誘、ビルド構築、クリエイトミッションの攻略に関する相

談も専用スレでお願いします。

【GBNまとめwiki】<http://>

【ミツシヨン攻略スレ】<http://>

【ビルド構築スレ】<http://>

【フォースメンバー募集スレ】<http://>



156：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

シャフランダム・ロワイヤル受けてきたけどあそこ魔境すぎない？

157：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

イマサラタウン

158：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あの魔境に飛び込みたがるのなんて闇鍋にチーズケーキぶち込まれても笑ってられるようなドMかもしれない。もしくは来世に向けて徳を積んでる修行僧かの二択みたいなものだぞ

159：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

「下がれ、私が全て倒す」できるダイバーなら別に気にならないんだろ  
うけどなあ

160：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そーいやこの前「MS斬りの悪魔」が出たんだっけか

161：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

幽霊とか妖怪の類みたいなお扱いで草

162：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

実際あの手の有名ダイバーと戦うとなるとやる気が途端に失せる  
からなあ……なんだよ狙撃ビーム切り払いって

163：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

解説されても絶対真似できる気がしねーわ

164：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>156

何がお前を魔境に駆り立てたのか知らんけど何があったんよ

165：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>164

いや、単にヤタノカガミとアルミユーレ・リユミエール組み合わせたら無敵じゃね？　って思って試運転しに行っただけだけど対ビームコーティングされたシングルブレイドに天誅されたわ

166：以下、名無しのダイバーがお送りいたします  
草

167：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

たまにあるよな、そういうシナジー見つけた気分で構築するけど組んでた時に気づかなかった穴を突かれて爆散するの

168：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>165

多分俺お前と組んでたかもしれないわ、こっちは砂やつてたら位置割られてクソデカ狙撃ビームに吞まれてお陀仏よ

169：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>168

初手で三機落とした時は勝ったと思っただがな

170：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

慢心ダメ絶対

171：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

とりあえずG—Tubeでアーカイブ漁ってみただけどこの試合か？　これに関しちや魔境がどうこうってよりあのAGE—1の子と赤いっつーかピンク色のフリーダムを読み勝ちってとこだろうな

【G—Tubeへのリンク】

172：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

なんだよ……結構まともな試合してんじゃねえか……

173：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

団長？　何突出してボコられてるんだよ団長！

174：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そういやあのフリーダムは見覚えあるな、確か赤砂とかそんな名前の子が乗ってた気がする

175：以下、名無しのダイバーがお送りいたします  
（・ω・） ロビーで百合百合した雰囲気醸し出して抱き合っ  
た子たちね

176：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>175

出荷、それはそれとしてお姉ちゃんとかいつてるけどこの子ら姉妹  
なのかな

177：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

よく見たらこの前PKされかかってた子じゃん、随分立派に育つた  
んだな……

178：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

どこを見て言ってるんですかね……

179：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

リリカにミワねえ、まあとりあえず覚えとくか

180：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

噂じゃガンプラの声聞ける奴もいるらしいし、有望株が最近は随分  
と多いんだな

181：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

何それ怖い、都市伝説か何か？

182：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ELダイバーはそういうもんじゃないけどな、俺はサラちゃんトリゼ  
と銭ゲバしか知らねーからなんとも言えんけど

183：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

当然のように銭ゲバ呼ばわりされてる銭ゲバで草生える

184：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

いやだつてあいつ銭ゲバじゃん？ この前ガンダムベース行った  
時、営業モードとこつちでの温度差で風邪引くところだったわ

185：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

えっ何？ 双子百合銭ゲバ姉妹のELダイバーが出たって？

186：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>185

お前は何を言ってるんだ



今も画面の中を流れていく文字列を、天蓋付きのベッドに身を横たえて見送りながら、少女は掲示板の中にリンクが貼られていた戦いを再生する。

そこにあつたのは、早々に味方三機が全滅するという憂き目を見て、決して諦めることなく戦い続け、見事な連携によつて劣勢を巻き返した、リリカとミワというダイバーの姿だった。

自慢の赤毛を掻き上げて、少女——楓・フロレンス・新見はその碧眼に、以前のシャフランダム・ロワイヤルで組んだことのあるその二人の名を刻み付ける。

「ふむ……確かに有望株、目をかけるだけの価値はありそうですね」あの時は「MS斬りの悪魔」にしてやられたが、それでも自分が到着するまでの間、アズキと渡り合っていたとは言わないまでも、時間稼ぎを完遂していた二人組だ。

まだダイバーランクこそ低いものの、あの動きを見る限りでは、近いうちに自分たちのいる場所まで辿り着くことができるはずだろう。

ならば、自分もどうかうかしてなどいられない。

楓はダイバーギアに自身の愛機であるウイングゼロヌーベルをセツトすると、ベッドから身を起こす。

そして、特注のVRゲーム機……ゲーミングチェアとゴーグルデバイスが一体化した、プロ御用達のそれに今度は背中を預けて、仮想郷たるGBNへと、電子の海へと潜っていくのだった。



## 第十八話 「消えない傷を抱えたままでも」

Dランクに昇格したといっても、特に感慨が何が湧くでもなかった——強いていうなら少しだけミワとの断絶が埋まったような気がした——リリカは、今日もGBNにダイブして、ミワが放課後に来るまでの時間を修練に費やしていた。

ちりちりと、相手がNPDであったとしても心の奥を焦がすような闘志と殺気が、リリカの脊髄を伝って、操縦桿を握る手に冷や汗を滲ませる。

映像作品「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」に登場したローエングリングート、ガルナハン基地を再現したステージから無数に湧き出てくる機体群は、原作通り、地球連合軍のもの——ではなかった。

ブレイズウイザードと呼ばれる巨大なブースターを背負った「ブレイズザクファントム」と、ザクファントム同様ファーストガンダムに出てきたモビルスーツのオマージュとしてデザインされた「グファイグナイツッド」が、全身をオレンジ色という派手な色に統一して、リリカの操るAGE-1ブランシユへと急襲をかける。

討伐ミッション、「イフ・コンクルーダー」。

それは、「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」においては敗れることとなったギルバート・デュランダル計画、「Destiny」プランが成功し、尚且つ同様に原作ではその命を散らしたハイネ・ヴェステンフルスが生きていたことで、「コンクルーダーズ構想」が実現した世界において、ザフト側のもものとして復元されたローエングリングートを破壊せよ、というフレーバーがつけられたミッションだ。

機体のコンソールに表示されるタイマーは、開始時には十五分だったものの、じりじりとその数字を減らし、残り約三分といった具合になっていた。

このミッションの最大の特徴は、迫りくるオレンジ色の部隊を撃破し、最奥に陣取っている、やはりオレンジ色の「Destiny」ガンダム（ハイネ機）を撃破するのに十五分をオーバーすれば、ローエング

リンが起動してミッション失敗になるという条件だ。

ローエンダリン。

原作においてはアークアンジェル級の艦首に搭載された陽電子砲であり、そしてこのガルナハン基地で、主人公であるシン・アスカもその破壊に手間取ったミッションを、今度はザフトに反攻をかける連合軍の立場で追体験するというのは中々に趣が深いものがあるだろう。

だが、そんなことを考えている余裕などリリカには全くなかった。

ドズライフルの三点射でブレイズザクファントムとグファイグナイテッドを叩き落とし、迫りくるアサルト・ウェーブを乗り切らんと、AGE-1ブランチュが全開でスラスターを噴かす。

「……はあ、は……あつ……」

このミッションは、本来であればパーティーないしフォースを組んで受けることが推奨されている。

とはいえGBNにおいてミワ以外に親交のある人間はいないし、なんならチャンプやマギーさんといったハイランカーに対してこのミッションへの協力を要請するのも気が引けるために、ソロでリリカは「イフ・コンクルーダー」を受けていたのだが、これが中々に難しい。

じわりと額に滲んだ汗を拭っている余裕もない。

ただゾロゾロと湧いてくるブレイズザクファントムやグファイグナイテッドの群れから放たれる弾幕砲火を、踊るような体捌きで回避しながら、リリカは一心に、このミッションのボスとして待ち受けているオレンジ色のデステイニーガンダムを睨みつけて、リリカはその下へと機体を加速させていく。

正直にいつてしまえば、ブレイズザクファントムもグファイグナイテッドも、それ単体では脅威になりうるものではない。

推奨ランクがDとなっているにも関わらず高等なAIが搭載され、包囲殲滅で確実にリリカを屠らんとしているのにも関わらず、リリカが下した評価は極めて辛辣なものだった。

と、いつてもそれは、あくまであの「MS斬りの悪魔」ことアズキ

と比較しての話だ。

彼女と比べてしまえばNPDの類など、何の脅威にもなりえない。だが厄介なのはやはり、数がまとまって揃っているということだ。

先日のシャフランダム・ロワイヤルではスカーレット隊三人組が秒速で全滅したことで数における不利を背負わされながらも逆転勝ちしたりリリカであったが、基本的に戦場でものをいうのは数的優位だ。

全てを相手にしていれば時間が足りず、かといって強引な回避に任せて数を残してしまえばそれはそれで、背後から来る弾幕砲火の密度が増して面倒くさいことになる。

パーティー推奨ミッションをソロでこなす時特有の悩みがリリカに僅かな逡巡を抱かせるものの、一瞬でも気を抜けばやられるのがこのGBNだということは嫌でもわかっている。

「この……っ……このっ、このおっ……！」

背後から迫るグフイグナイテッドを攻撃すべく、リリカはトリガーを引き絞るが、かちり、と、何かが引つかかったような音と共に攻撃は途中で断ち切られた。

——弾切れだ。

そして、グフイグナイテッドは今にも格闘戦の間合いに踏み込もうとしている。

ならば、とばかりにリリカは弾切れを起こしたドズライフルを振りかぶり、その銃床で無理やりグフイグナイテッドの頭部を粉碎すると、バックラーからビームサーベルを引き抜いて突撃していく。

「……この程度、大丈夫……大丈夫だよ、ね……ブランシユ……！」

リリカは今にも消え入りそうなほど小さくも、確かに気合のこもった叫びを上げて、あくまでも正面に立ちはだかるエネミーだけをなます切りにしていく形で、強引な包围網の突破を試みた。

敵の数は、極めて多い。

降り注ぐ弾幕砲火を全て掻い潜るというのはいまのリリカにとっては無理筋であり、じわり、じわりと機体にダメージが蓄積されていくが、まだ、装甲値はゼロになっていない。

Gバウンサー譲りの軽快な機動でリリカは損傷を最小限に留めつ

つ、とうとうローエングリーンが潜む砲台、丘陵に佇むオレンジ色のデステイニーガンダムと対峙する。

『あの包囲網を抜けてきたってか？ やるじゃないの！』

——ネームドのNPD。

コンソールにポップしてきた通信ウィンドウに映るそのオレンジ色の髪を持つ青年が、いつぞやオーダーしたノンアルコールカクテルの由来にもなっていたハイネ・ヴェステンフルスとやらなのだろう。

背後から放たれる弾幕砲火の密度は、フレンドリー・ファイアを警戒してか、大分緩くなつたように思える。

機体色と同様に、オレンジ色に瞬く光の翼を展開して強襲をかけてくるハイネ・ヴェステンフルスとデステイニーガンダムに対してリリカは先の先を取るのではなく、後の先を取ることを選択した。

対艦刀——ビームサーベルと実体剣、その両方の性質を備えた独特な武装を展開したデステイニーガンダムには、ボスエネミーらしくCランク相応のAIが搭載されている。

だが、遅い。

振り抜かれた対艦刀の一撃を最小限の動きで回避すると、リリカは手にしていたビームサーベルを投擲する。

バック宙の要領で後方に退きながらぶん投げたそれが命中することになど、最初から期待はしていない。

実際、投擲されたビームサーベルはデステイニーガンダム本体ではなく光の翼が作り出した残像を貫いただけで、本体は二撃目を加えようと、リリカの直上に陣取って攻勢をかけんとしていた。

『連合にもできるのがいるじゃないの！ だったらこいつで……ジ・エンドってなあ！』

「……終わらない……」

『何？』

「終わらない、終わらせない……私も、ブランシユも……！」

大上段に構えた一撃でAGE——ブランシユを一刀両断しようとしたオレンジ色のデステイニーだったが、悲しいかなそこはNPDだ。

クソゲーの地獄と、そして「MS斬りの悪魔」が有する圧倒的な技量に及ぶはずもない。

腰部のマウントラッチから引き抜いたシグルブレイドで繰り出したカウンターは対艦刀をへし折って、構えていたデステイニーの両腕を切断する。

残り時間は二分を切っている。

ここからデステイニーが逃げに徹したのであれば、リリカの勝ちの目はそこで潰えることとなる以上、先の先を取るのではなく、敢えて懐に飛び込ませた上で後の先を取る、という梨々香の戦術は、果たして間違ってはいなかった。

「てえええええ、いつ……！」

敵機が大きくのけぞった今こそ、その好機に他ならない。

リリカはオレンジ色のデステイニーに引導を渡すべくAGEー1ブランシュの全推力をもって機体を加速、物理攻撃に対して耐性を誇るパッシブスキル、VPS装甲を踏み倒すがごとく、そのコックピットへとシグルブレイドを突き立てた。

『うおおおおーっ!』

「っ、ふ、う……っ、はあっ……」

肺の辺りですつと滞留していた息を吐き出すように、リリカは荒い呼吸を整えて、デステイニーの双眸からその光が失われたことを、ミッションが成功したことを確認する。

【Mission Success!】

程なくしてコンソールから鳴り響く電子音声。

残り時間は約一分とギリギリのものでこそあったものの、リリカは見事に推奨ランク詐欺と呼ばれる高難易度ミッションをソロで踏破することに成功していた。

「やった……やった、よ……ブランシュ……えへへ」

にへら、と笑うリリカを責められる者などいるはずもない。

沈黙したデステイニーのコックピットへとシグルブレイドを突き立てているAGEー1ブランシュが、そしてリリカの仮想の躯体が解けていくまでに胸を満たしていた高揚感、それこそが勝利の美酒にし

て、勝者に与えられた特権なのだから。



とはいえ、戦うばかりがGBNの醍醐味ではない。

久しく聞いていなかった声が届いたのは、すっかり疲れ果ててしまったリリカがロビーの壁に背中を預けて、茫洋とその天井と行き交う人々を眺めていたその時だった。

「あら、リリカちゃんじゃない。すっかり立派な目になったわねえ」

「……あ、えつと……えへへ、ありがとう、ございます。マギーさん……」

何かのミッションを受けてきた帰りだったのか、鉢合わせたマギーは未だにどこか怯えを抱えていながらも、自身に対して言葉を返してくれたりリカの成長を噛み締めて、どこか満足げに小さく頷く。

「一人前のダイバーになったってところね。おめでどう。アタシもなんだか嬉しくなってきたわ」

「……そ、そんな……えへへ……」

「ふふ、そうそう。嬉しい時には笑うものよ。リリカちゃんの笑顔はキュートなんだから。乙女の特権よ」

褒められ慣れていないリリカが困惑しつつもふにやりと口許を綻ばせたのを見届けて、マギーはまるで愛娘を慈しむかのようにその髪をそつと撫でてみせた。

姉に、ミワ以外の相手にそうしてもらったのはいつ以来だろうか。

いつだって両親や親戚にミワと比較され続けてきた半生を振り返り、その古傷が開く痛みを涙を滲ませながらも、リリカは久しく味わっていなかったその温もりをただ受け入れる。

「……本当、出会った頃からアナタは強くなったわ。無理に強くなる必要なんてないと思うけれど……きつとアナタはアナタの使命に、ミッションに立ち向かって強くなった。嗚呼、本当にアタシとしても嬉しい限りだわ」

マギーはその職業柄、様々な人間をその瞳に映してきた。

訳ありの、脛や心に傷を抱えて一晩の夢に浸る彼ら彼女らの心に少しでも寄り添うことができたらと、バーを開いているマギーだからこそ、リリカの抱えている痛みがなんであるかはわからなくとも、その傷口の深さと痛みの強さ——前に進むことを阻害するネガティブな心がどれほどのものであるかは察しがついている。

だが、それでもリリカは前に進んでくれた。

このGBNという仮想郷で、きつと多くの人間が何かを求めているこの場所で。

だから、できることなら全てのダイバーが嫌な思いをせずに全力で遊んでほしいと、マギーは今日もミツシヨンの傍らに、初心者狩りやシャークトレードの取り締まりといった活動を行っているのだ。

「……そ、そう言ってくれると……その……」

「なあに？ ふふっ」

「……えっと、嬉しい、です……ぐすっ……」

嬉しいのに涙がこぼれてしまうのはどうしてだろうとリリカはいつも思っている。

悲しい時はいつだって泣いて、泣いて。

それでも癒されることなく、限界を迎えた心は破綻してしまった。だから、かつてのクラスメイトに、小学校や中学校でいつも泣いていたリリカは、「梨々香」は疎んじられていた。

すぐ泣くから。それが嬉しくても悲しくても、どうしても涙が溢れてしまうから、という理由だけで虐げられてきたからこそ、リリカはこの体質が嫌いで嫌いで仕方がなかったのだ。

再び暗い顔に戻ってしまったリリカが、痛みを苦しんでいることを察してか、マギーはそつと指先でその涙を拭くと、優しい抱擁と共に囁きかける。

「ねえ、リリカちゃん。もしかしてだけど……嬉しい時に泣いちゃうこと、気にしてた？」

「……ぐすっ、えぐっ……は、はい……うええええ、ん……っ……」

「大丈夫よ。それは自然なことなの。アタシだって、リリカちゃんがここまで立派になってくれたことで泣きそうになっちゃったのよ？」

だから、気にしないでいいの。

まるで母親のようにマギーはそう諭すと、抱擁を解いて、リリカの背に合わせる形でかがみ込んで、その瞳を覗き込む。

「……ぐすつ、ひぐつ……うう……」

「そうね、すぐ受け入れるのは難しいわ。アタシがリリカちゃんだったら諦めちゃうぐらいに。でも、アナタは諦めなかった。だからいつか、きつと……報われる日が来るわ」

例え今は信じていることができなくてもね、と、ウィンクを一つ残して、マギーはそれ以上は野暮だとばかりに立ち上がり、雑踏に溶け込んでいく。

当たり前のことがいつだって難しい。

嬉しい時は笑いたくて、楽しい時だっておんなじで。

リリカはごしごしと涙を拭うと、立ち上がってふらふらと、ミワが訪れるまでの時間を潰すべく、セントラル・エリア、そのロビーの外へとふらふらと足を運ぶ。

戦うばかりがGBNではない、とばかりにロビーの外には、人々が雑談に興じていたり、カフェで仮想の食事を楽しんでいたりと、とてもここが仮想の世界であるとは思えない光景が広がっていた。

唯一何かが違うとすれば、鳥の代わりに、あるいは飛行機の代わりに空中を行くものが、ガンプラであるぐらいか。

茫洋と眺めていた空を横切っていくストライクフリーダムやエンドレスワルツ版のウイングガンダムゼロを眺めて、リリカは手持ち無沙汰な感覚を慰めようとしていた。

戦いに次ぐ戦いのせいで忘れかけていたが、元々リリカはこういう繋がりを求めてこの仮想郷へとダイブしてきたのだ。

だがそれは——まだこの手に収まっていない。

だからこそ、リリカは。

リリカは、隅っこにぺたんと座り込んで、何をするでもなく時間を過ごそうと、教室でやっていたことと変わらない諦めと共にミワを待とうとしていた。

——だが。



「おお、いたいたあ、リリカちゃん」

どこまでも沈み込んでいく心を引つ張り上げるように、複雑な思いを抱いていれども愛おしい姉の、のんびりした声がリリカの耳朵を震わせる。

「…………お姉ちゃん…………」

「いつつもロビーにいるから、探すのにちよつと時間かかっちゃったよお、ごめんねえ…………」

ぎゅつと、マギーとはまた違った感覚で抱きしめられる温もりが、リリカの胸中で開いた古傷に染み入って、じわりと涙が滲んでくる。

「…………お、おねえちゃ…………わ、わたし…………」

「うんうん、最近は戦ってばかりだったからねえ…………ちよつと、疲れちやつたでしよ〜?」

やつぱり、ミワにはなんでもお見通しなのだろうか。

はらはらと、リリカは豊満な姉の胸に顔を埋めて、思い切り甘えるように涙を零す。

痛み。悩み。苦しみ。そして、喜び。

色んな感情が緋い交ぜになったそれを、どんな名前で呼んであげればいいのか、リリカにはまだわからない。

「リリカちゃんリリカちゃん、今日は何して遊ぼつか〜?」

そしてその傷は一生消えることがないとわかっているからこそ、ミワは微笑んで、せめて、隣で、一番傍でその痛みに寄り添おうと微笑むのだ。

そののどんなにありがたいことか。そののどんなに難しく、もどかしいことか。

近づいても、心が凍てついて、遠ざけても引き合って。血縁がリリカとミワを繋ぎ合わせたその想いの名はわからずとも、姉の勇気に応えるかのように、リリカはすつ、とある一点を指さした。

「…………え、えつと、ぐすつ…………あれ…………」

「おお、おお、カフェテリアかあ…………ミワもそういえば使ったことなかったね〜」

リリカが指した先には、ふわふわしたピンク色の髪を腰まで伸ば

し、更にお団子状に二つ髪の毛を纏め、アイドルのようなフリフリの衣装に身を包んだダイバールックの少女と、銀髪碧眼に、今自分が纏っているのと似た制服姿というダイバールックに身を包んだ少女が、二人で一つの飲み物を分け合っている光景がある。

それが、リリカにとってはただ羨ましかつたから。眩しかつたら。

縫るように姉の服の裾を掴んで、リリカはそっと俯く。

「いいよお、行こっか」

「……いい、いいの……？　ぐすつ、私……」

「ミワちゃんがいいって言ってるからいいんだよお、一緒にあれ、頼もっか」

きつと、今までずっと我慢してきたのだから。

続く言葉を欠伸と共に飲み込んで、ミワはリリカの手を優しく引いてカフェテリアへと歩みを進める。

甘えたがりで、泣き虫で。だけど誰よりも優しい、世界で一番可愛くて、大事な妹。

ミワにとつてリリカとは、そういう光に他ならなかった。

そして、リリカも。

ずっと比べられてきたコンプレックスと、それに伴って無数の傷が刻まれた心はまだ癒えていない。

それでも——リリカにとってのミワはたった一人の大事な姉に他ならないのだ。

未だにリリカとミワは、お互いに不理解を、断絶を抱えたままだ。だけど、それでも。

——隣にすることは、できる。

そうとばかりに、にへら、とよく似通った緩い微笑みを浮かべながら、二人はカフェテリアで一つのグラスに二つのストローが刺さっているアイスココアに口をつけ、GBNにおけるもう一つの醍醐味を味わうのだった。

## 第十九話 「僕らが望んだ戦争（レイドバトル）だ」

レイドバトル。

それは古式ゆかしいPVE……プレイヤーバーサスエネミーの構図を大規模化した、MMOにつきものなイベントであり、それはGBNにおいても例外ではない。

初心者から上級者、果ては超越者まで楽しむことができるようにと絶妙な調整が施されたこのレイド戦は、協力して強大な敵を撃破するという王道な楽しみ方もさながら、単騎で超絶難易度に設定されたエネミーに呐喊、殲滅までのタイムスコアを競うという、傍から見れば何をやっているのかわからない部門まで存在するという一種のお祭りなのだ。

ロビーにおいては、無数のダイバーたちがレイド戦の告知を読んでめいめいにリアクションをとっている姿があり、参加不参加の如何を問わずして、セントラル・エリアはいつになく浮き足立つような雰囲気にも包まれていた。

「今回のレイドはSEED DESTINYがベースか……まあ悪かねえな」

どことなく漫画作品「ガンダムEXA VS」に登場するヒロインの一人、セシア・アウエア・セストを思わせる、銀髪のダイバールツクの女性が、「レイドバトル『オペレーション・ヘブンズドア』」の概要を一瞥すると、言動とは裏腹に、たんたん、とどこか落ち着きのない仕草で踵を鳴らす。

ウォーモンガーとして一部で名を馳せているダイバーネーム「アリム」は、この手の大人数が入り乱れて戦うイベントをこそ本懐としていたし、かの幕末地獄なクソゲーと比較されるハードコアディメンション・ヴァルガの住人の一人でもある。

そして、ヴァルガとなれば黙っていないのが今、彼女の隣を通り過ぎていった、黒いロングコートに、男性としては長めに伸ばしている黒髪と黒曜石のような瞳というダイバールツクに身を包んだ黒尽くめの青年だろう。

「おうF O Eさん、今回もR T A部門に参加すんのか？」

「君は……アリムだったか。僕はそのつもりだが」

「けっ、相変わらずバケモンじみてやがる……でもいつか勝つのはアタシだからな、そこんとこ覚えとけよ」

「ああ、期待している。そろそろ妹にどやされそうだから僕はここらで失礼するよ」

淡々としているが、物腰そのものはどこか柔らかい、「F O Eさん」ことダイバーネーム「キョウスケ」は、ハードコアデイメンション・ヴァルガを中心に出没する二桁上位のハイランカーであり、こうしてレイドバトルが始まると、超絶難易度に指定されたボスをいかに単騎で屠るかという狂気じみた部門……というよりは勝手にレギュレーションを決めた縛りプレイを貫徹している人物だ。

戦いにおいては相当な場数を踏んできたアリムであれども、ダイバーランク39位を定位置としていた一年前から着実に成長し、今では愛機である「デイベインダブルオークアンタ」共々、14位という「神魔のきざし」にまで立った彼にタイマンで勝てる自信は正直なところあまりない。

ただ、目標やハードルというのは大きければ大きいほど越え甲斐があるというものなのだ。

キョウスケがどやされる、と半ば冗談のように苦笑していた通り、彼をリスペクトしたのか俗にいうお嬢様結びにした黒髪ロングに黒い和装という格好をした妹が頬を膨らませて彼へと詰め寄るのを一瞥して、アリムはレイドバトルへの参加を承諾し、格納庫エリアへと解けていく。

その様子をぼんやりと眺めていたミワもまた、くあ、と欠伸を一つ零しながらも、そわそわと浮き足だった様子で傍らのリリカへと語りかける。

「……って感じで、レイドバトルは一種のお祭りなんだよお」

「……う、うん、お姉ちゃん……でも、私みたいな初心者が参加して、大丈夫……なの、かな……」

ここにリリカの成長速度を知っている誰かがいれば、即座にお前の

ような初心者がいるかと突っ込まれそうな言葉を返すが、自身は至って本気なのだ。

リリカがプレイしていたクソゲーであったり或いはソーシャルゲームと呼ばれるスマートフォン向けのゲームでもそういうイベントはあるにはあったが、話のスタートラインは大体上級者になってからというのが通例だった。

心配そうにしゅん、とする妹を宥めるように、ミワはあっけらかんと緩んだ笑顔を見せながら、優しくリリカを抱擁する。

「大丈夫大丈夫、他のゲームじゃどうか知らないけど、GBNのレイド戦は皆が参加しやすいように作ってあるからねえ」

「た、例えば……？」

「んー……これはねこれはね、やってみればわかると思うんだけど……基本的にGBNのレイドバトルって総戦力ゲージ制なんだよ」  
どこか眠たげな声で宙を指して、ミワはリリカへと諭すように言った。

その言葉の通り、GBNがレイドバトルにおいて採用しているルールは極めてシンプルなものだ。

参加者に合わせて敵味方の総戦力をゲージ化し、敵の戦力ゲージを削り切ったら参加者側の勝ちということ。豪華な報酬が配られ、逆に、敵から戦力ゲージを全て削られてしまえば参加者の負け、ということになる。

極端な話、落ちるまでに取り巻きの一体を倒すだけでも貢献できるシステムが構築されており、そして先ほど剣呑な会話を交わしていたアリムやキヨウスケのように、熟練のダイバーが味方として参加してくれる以上、他力本願な感じはしてしまふものの、基本的に参加者側が負けることはない。

運が良ければチャンプが大人気なく大暴れする姿が見れるかもしれないし、そういったハイランカーたちの視点がアーカイブ化されてG-Tubeにアップロードされることで、後身たちはそれを参考にすることができる、と、まさにうまあじの塊なのである。

そんな具合のことを、豊かな胸を反らして、ミワはリリカに解説し

た。

「……や、やられちゃっても……迷惑にならないの……？」

「うんうん、その辺はどうしても他力本願になっちゃうけど、基本的に超越者の人たちは死なないからね」

GBNの運営チームが、そういった実力者を逐一把握していないはずがない。

ただ、超越者に合わせた難易度でコンテンツを作るとそれは途端に初心者から中級者といった、実力では彼らに劣れど、アクティブユーザー数が極めて多い層を切り捨てることに繋がるため、適度に超越者が苦戦しつつも倒せないような無理ゲーにはしない、という方向性で調整しているのだ。

だからこそ、キョウスケたちのようなハイランカーへおんぶに抱っこ、といえば聞こえこそ悪いかもしれないが、彼らを最大の戦力とした上で、前線における敵機の漸減を担当するのがリリカたちであるといえ、一番わかりやすい。

そんなものかと納得半分、まだできていない部分が半分といった調子でリリカは小首を傾げるが、イベントの趣旨はなんとか把握できていた。

「え、えつと……私たちは、前線の量産機とかを倒せばいいんだよね……？」

「然り然りだよお、リリカちゃん。これ以上は解説しても野暮だから実際にやってみよっか」

にへら、と口元を緩めて微笑むと、ミワもまたレイド戦への参加を承諾し、一足先に格納庫エリアへと解けていく。

不安があるかないかでいわれれば、まだ拭いきれないというのがリリカの正直なところではあったが、なるべく長く生き残って、一機でも多く敵を倒せばいい、というイベントの概要ぐらいは把握できている。

レイドバトル「オペレーション・ヘブンズドア」に登場する敵機の一覧を確認しながら、とりあえず「高難度」と書かれている機体以外の顔と名前を一瞥して、ゆっくりとリリカは深呼吸をした。

迷惑をかけてしまわないかという不安はある。

いかにそのハイランカーと呼ばれるダイバーたちが強かろうと、彼らに頼り切っていたり、撃墜されて戦力ゲージを減らしてしまえば後ろ指をさされるのではないかという懸念だつて拭えない。

それでも。

「すー……はー……え、えいつ……！」

——ミワと一緒になら、ミワの言葉を信じるなら、きつと楽しめる。

そして、意を決してリリカは、はじめてのレイドバトルへの参加を承認し、ミワに続いてロビーから格納庫エリアへと転送されていくのだった。



レイドバトル、「オペレーション・ヘブンスドア」。

それは映像作品「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」において、死の商人「ロゴス」の盟主であるロード・ジブリールを追い詰めるためにザフト軍が決行した、ヘブンスベース基地攻略戦をベースに作成されたレイドバトルだが、原作との違いを挙げるとするのであれば、レイド戦に最適化されたことで圧倒的にその数が増加した敵機もさながら、宇宙エリアにも敵が潜んでいる、ということだろう。

つまり、ヘブンスベース基地をいかに早く制圧してマスドライバーを奪還するか、或いは単独での大気圏突破能力を持った機体が宇宙に上がらない限り、戦いは終わらないということに他ならない。

そして、レイドバトルの戦地に降り立ったりリリカとAGE-1ブランシユを出迎えるかのように、ヘブンスベース基地からの砲撃や、大量に、それこそ空を埋め尽くす勢いで展開されたダガーLやウインダムといった地球連合軍側の量産機が怒涛の勢いで押し寄せてくる。

どこか、硝煙にむせる地獄の渡河作戦を思わせるその数にリリカは思わず圧倒されてしまいそうになるが、その時目の前を猛スピードで突っ切っていった機影を、確かにメインモニターは捉えていた。

『オラオラオラあ！ 死にたい奴からかかつてきな！』

ロビーでキョウスケなるハイランカーと言葉を交わしていたダイバー、「アリム」が駆るモンテローのカスタムモデル、「ウォーモンテロー」がジャベリンを振り回すことで、レイド戦仕様に調整されて、耐久値が引き上げられているはずのダガーLとウインダムを粉碎していく。

やればわかる、と、ミワは言っていたが、リリカはこの時心でそれを理解できたような気がした。

確かにハイランカーがいるならば、数的優位がどれぐらいかはわからなくとも、質的なイニシアチブはこちらが握っている、ということになる。

デフォルトで支給されているサブフライトシステム、「グウル」を巧みに操りながらリリカは、アリムのジャベリンから伸びたビーム・ワイヤーが打ち払い損ねた敵機に狙いをつけて、ドッズライフルのトリガーを引き絞った。

「お願い、当たって……！」

その願いと覗き込んだ照星にブレはなく、いかに耐久値が引き上げられていようとも、コックピット判定というGBN独特の要素によって、ピンポイントでその判定を撃ち抜かれたダガーLは爆散する。

「おお、おお……おめでとお、リリカちゃん。ミワも負けてられないねえ……！」

フリーダムガンダムのバックパックと交換する形で装備した、AW ACSデインのそれを起動させて周囲への索敵を行いつつ、ミワは今度は装弾数に優れているということでチョイスした、「機動戦士ガンダム THE ORIGIN」に登場する対艦ライフルで、リリカの後ろに回り込もうとしていたウインダムを撃ち落とす。

とはいえここは地獄の一丁目だ。

いかにアリムたちハイランカーの支援があるとはいえ、無事にこの地獄の海を渡った上でヘブンスベース基地に上陸できるか、というのは伊達に第一の関門として設定されている訳ではない。

上空で繰り広げられる射撃戦から一抜けしようと低空飛行を行った、名もなきダイバーが駆る、灰色と青というロービジのトゥートンカ



ラーにまとめられた「フォースインパルスガンダム」が、突如として水中から現れた機体に足を引っ込まれて引き摺り込まれ、そのまま水柱を立てて爆散、哀れテクスチャの塵へと還っていく。

「フォビドウンヴォーテクス……いるもんだねえ、やっぱり」

「ふおび……フォビ井……？」

「まあまあ、要は水中戦特化のガンダムだよお、危ないからリリカちゃんも低空飛行する時は気をつけてねえ」

早速微小な戦力ゲージの減少をもたらしたその機体を教訓に、あくまでミワとリリカはアリの愛機である、映像作品「ガンダム Gのレコンギスタ」に登場するモニターロを改修した機体、「ウォーモニターロ」の影に隠れてその撃ち漏らしを始末する形で、ヘブンスベース基地への上陸を試みていた。

他のダイバーたちも概ね似たような感じで、ハイランカーたちはあえて最高速でぶつちぎるのではなく、初心者から中級者の盾になるような形の進軍速度で、時には洋上に浮かぶ艦船を破壊し、立ちほだかる量産機は撃ち落として戦線を押上げていく。

フォビドウンヴォーテクスは確かに脅威となる機体だ。

だが、レイドバトルに参加するのは何も王道のガンダムタイプや主役機だけではない。

先ほどフォースインパルスを引き摺り込んで撃破したフォビドウンヴォーテクスに対して、水中からのエントリーを試みていたダイバーたちの「ズゴック」や「カプール」といった水陸両用型が挟撃をかける。

『水泳部にも出番があるステージで良かったってなあ！』

『この時のためにプレ値ついてたアメイジングズゴックのレプリカを買ったんだ！ そう簡単に落ちてくれんなよ！』

GBNには、ガンプラへの愛があふれている。

戦場の花形として君臨するガンダムタイプだけではなく、活躍の場こそ少ないものの、与えられれば八面六臂の奮戦を見せる水陸両用型をこよなく愛するダイバーたちも存在するのだ。

カプールが放ったミサイルの弾幕を回避しようと試みたフォビ

ドゥンヴオーテクスの背後に、いつの間にやら迫っていた「ゾゴック」がアームパンチで無理やり弾幕の中に青いガンダムを押し込む。

そして、トランスフェイズ装甲の効果でダメージこそ軽微であったものの、大きく体制を崩したフォビドゥンヴオーテクスへと、量産機カラーにリペイントされたアメイジングズゴックのアイアン・ネイルとゼロ距離から放たれるメガ粒子砲が放たれる。

ゼロ距離からコックピットを撃ち抜かれては、自慢のTP装甲も、そしてゲシユマイディツヒ・パンツァーも意味をなさない。

大きく噴き上がった水柱と、そして微妙に減少した敵側の戦力ゲージを視認して、リリカはほっと胸を撫で下ろす。

「……………これが、レイド戦……………」

「そうそう、そうやって他のダイバーたちと協力して進んでくんだよ」

確かに水泳部の彼らと交わした言葉こそなかったかもしれない。

だが、リリカはそこに微かな「繋がり」を感じていた。

打ち震える心が、心臓を高鳴らせる。

しかし、ここで気を抜けば自分が撃墜されかねない密度での弾幕砲火が飛び交っている以上、その余韻に浸っている暇はない。

ビームサーベルを引き抜いてすれ違い様に切り掛かってきたウインダムの一撃を、グウルから飛び上がる形で回避すると、リリカは空中でAGE―Iブランチシュに制動をかけて、その敵機を背後から撃ち抜く形で爆散せしめた。

そして、グウルに再び搭乗し、リリカはミワの位置をレーダーで確認しながら、先導するように矢面に立つてくれているアリムの後ろをついていく。

『ヒョッコにしちやあ中々やるな！ その調子でアタシについてこい！ 上陸までは保証してやる！』

そつから先は知らねえけどな、と付け加えて、アリムはビーム・ジャベリンを振るい、或いはビームライフルの弾幕砲火で敵機の数減らしながら、ルートの場合もありほぼ最速でヘブンスベース基地への上陸を果たそうとしていた。

『味方機へ通達する。今から指定する射線上から離れてくれ、一気に敵を漸減する……!』

そして、戦場の後ろに陣取っていたキョウスケからの通信が入ってきたかと思えば、コンソールにポップしたウインドウには、出鱈目な範囲が指定された、彼のキリングレンジが表示されている。

「お姉ちゃん……!」

「うんうん、三十六計なんとやらだねえ……!」

指定通りに、味方機が射線から退いてくれたのを確認すると、キョウスケはGNソードビットをバインダーから分離させる。

『GNディバインブラスター、マルチロック、セット……!』

そして、自身の愛機が装備している槍状の武装、GNロンゴミアドの先端に、両肩のバインダーに接続しているソードビットたちをまとわりつかせる形で砲身を形成、マルチロックをした範囲に向けて、セットしていた攻撃——GNディバインブラスターを遠慮なくぶっ放した。

「……ひか、り……!?!」

「相変わらず滅茶苦茶だね、ハイランカーはあ」

途中の一点、GNブレードファンネルが簡易的なパワーゲートを作成していた地点で一度収束したその砲撃は、その後無数に分かれてウインダムやダガーLといった航空戦力から、洋上に浮かぶ戦艦や駆逐艦、果ては水中に潜んだフォビドゥンヴォーテクスたちまでも巻き込んで猛り狂う。

拡散ビームというよりは拡散波動砲とも呼ぶべきその災害じみた威力にリリカたちは戦慄しながらも、敵の大半がテクスチャの塵へと還ったことで、上陸作戦そのものは無事に完遂されたといっている。

グウルを放棄して、ヘブンスベース基地の土を踏むと、リリカは気合を入れ直すように自身の頬をぴしやりと叩く。

そして、リリカに出来るかのようにその双眸を煌めかせるAGE-1ブランシユと共に、第二のウェーブに向けて挑みかかってゆくのだった。

## 第二十話 「ノツキン・オン・ヘブズ・ドア」

ヘブズベース基地に上陸したりリカたちを待ち受けていたのは、洋上での戦いなど前座にすぎないとばかりの猛攻だった。

海上戦力はキョウスケがわけのわからない一撃でその大半を消しとばしてくれたおかげで、背後からの攻撃は大分緩い……というよりはなれないに等しいものとなっているが、レイドバトルに合わせて原作より拡張されたヘブズベースから飛び出てくるのは何も、「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」を出典とした機体ばかりではない。

『畜生、これの元ネタって種じゃないのかよ!?!』

アリムに先導される形で運良く上陸を果たせた、陸戦型ジムを操るダイバーが、空中から降ってきたビームに焼かれる形で悪態をつき、爆散する。

「バイアランにメツサーラに……ナントカ大戦みたいだねえ」

「……よ、よくわからないけど、戦わなきゃ……!」

AGE以外のガンダムを見たことがないリカには正直なところ誤差だよ誤差、レベルの話ではあるのだが、空中に留まってメガ粒子砲を繰り出している、バイアランやメツサーラといった機体たちは本来「機動戦士Zガンダム」を出典とするモビルスーツであり、間違ってもガンダムSEED DESTINYに出演していたわけではない。

『こっちはGN-XIIIよ! しかもトランザムまで使ってくるなんて……撃たれた、わああああ!』

カプルの色違いとも思えるが、若干小柄になっている機体……【カプル】を操るダイバーが、断末魔と共に、赤熱化したかの如く紅蓮を纏ったGN-XIIIのGNランスに貫かれ、あえなく爆散する。

恐らくは地球側に属する敵性勢力から、出てくる機体は選出されているのだろう。

ミワはそう推察し、カプルを貫いていたGN-XIIIを自慢の対艦ライフルで屠ると、くあ、と小さく欠伸をする。

レイドバトルにおいては、何が出てくるかが問題なのではない。問われているのはあくまでもどう対処するか、それだけである。

空中から奇襲をかけ渡していたバイアランとメツサーラを、ドツズライフルによる三点射でリリカが綺麗に片付けてみせたのを一瞥して、んふふ、とミワは妹の活躍に口元を綻ばせる。

第二ウェーブのマスドライバー奪還フェイズ。

それは上陸自体には成功していた初心者から中級者が篩にかけられるボトルネックにして、彼らにとってはここからが本番となる強大な壁であった。

それを示すかのように、倒しても倒しても混在勢力は湧いてくるし、何より厄介なのは基地施設から出撃しているために、増援の停止を試みるのなら、雨後の筍のように湧いてくる敵機を掻い潜りながら、一つ一つハンガーを爆破していく他にないという点だ。

リリカはとりあえずとばかりに、バックラーから発振したビームサーベルで、自身に切りかかってきた「マラサイ」に天誅返しを決めると。手近な位置にある格納庫をレーダーで確認する。

AG Eー1ブランチは手持ち式の大火力兵装は持ち合わせていないため、誰かに代わりにやってもらう必要こそあるものの、戦力ゲージが続く限りは無限に湧き出てくる増援を止めるために、オープンチャンネルでその情報を無差別に、周囲にいる味方全員に向けて共有する。

「やるねやるねえ、リリカちゃん。とりあえずここらの基地を始末できれば楽になるからね〜」

「う、うん……私たちじゃできないかもしれないけど……」

リリカは控えめながらも芯の通った声で、ミワからの言葉に答えてみせる。

意思疎通もままならず、それぞれが違う方向を向いていることも多いシャフランダム・ロワイヤルと違って、これは参加したダイバーのほぼ全てが同じ方向を向いているレイド戦だ。

自分にできないことがあるのなら、誰かに頼るといっことは決して恥ずかしいことではない。

むしろ、勝利を掴むためなら、そしてその先にある美味しい報酬を手に入れて、夕飯にカツ丼を食べたいのなら、貪欲にそうした利害の一致は利用していくべきなのである。

最初の上陸フェイズは、それを教えるためにあつたのだろう。

リリカは送った通信が誰かに辿り着いてくれていることを信じて、格納庫から今も湧き出し続けている敵モブをドツズライフルで撃ち抜き、近づくものはバックラーから発振したサーベルで切り裂き、とおよそ初心者らしからぬ活躍を見せていた。

ソロでダイブしていたり、あの魔境であるシャフランダム・ロワイヤルを受けていた時は無我夢中で気付かなかったが、味方が背後や周囲にいるというのは存外頼りになるものなのだ。

エリアの奥地へと向かっていくアリムたち上級者はマスドライバーの奪還を試みているのだろう。

包囲網を物ともせず、数の優位を踏み倒し、薙ぎ払っていく彼女たちに畏敬の念を感じながら、リリカは誰かが通信を受け取ってくれていることを信じて、乱戦においては不利なミワを庇い立てるように、背中合わせになる形で無限湧きするモブとの消耗戦に徹していた。

どちらが生きるかくたばるか、といった風情の緊張感は、例え相手がNPDであつたとしてもちりちりと、胃袋を焦がすような感覚をリリカに抱かせる。

比較的リキキャストが短めなドツズライフルを持つているリリカでさえこうなのだ。

スナイパーライフルというあらゆる意味で「重い」武器を抱えているミワの心労はきつと自分の比ではないのだろう。

通常弾が詰まっていたマガジンを交換して、徹甲弾を発射しているミワを、フリーダムルージュを一瞥して、リリカはじりじりとリソースが削られていく感覚に焦燥を抱く。

だが、ここで焦って突出すればそれこそ敵の思う壺だろう。

実際に痺れを切らしたのか、一か八かで格納庫への呐喊を試みているガンプラたちは無惨にも包囲されて、なす術もなく爆散している。

「弾持ってこーい、って感じだねえ……」

「だ、大丈夫？ お姉ちゃん……」

「うむうむ、心配ないよりリリカちゃん。レイドバトルに備えて予備弾倉は多めに持ってきたから……って言いたいところだけど、この状況が続くとちよつとまずいかな」

戦線は鶴翼陣形を維持する形で展開され、少数の上級者がなんとか包囲網を突破して、基地施設の破壊やマスドライバーの奪還へ躍りになっているものの、上陸地点近くでの戦いは膠着状態どころか、じりじりと戦線は押し返されつつある。

特にリリカたちが上陸したポイントは、トーチカや固定砲台からの攻撃が少ない分、敵の湧くペースが異様に早く、浮き足立っていたはずの仲間である他のダイバーたちも額に汗を浮かべ、この消耗線をなんとか耐え抜こうとしているような状況だった。

チャンプがもしこのレイド戦に参加していたのならあのEXカリバーとかいう技で、この程度の敵ぐらい屠っていたのだろうが、不参加である以上それは期待できない。

『すまない、やられた！ あとは頼んだぞ！』

『こつちもだ！ 悪い！』

一人、一人と名前も知らないダイバーが倒れ、死屍累々と戦力ゲージの減少が積み重なっていくのもまた、リリカの焦燥を煽り立てる。超越者が参加している限り、彼ら一人でもレイドバトルは勝てる、と、事前にミワから教えられたことでその事実を頭で理解しているも、本物のガンダムにおける戦場のごとき臨場感が理解を覆い隠すように焦りを上から糊塗してくるのだ。

ダガーLやウインダム、そして105ダガーといったNPDの面々は、ほとんど無尽蔵に湧き出てくる分、パラメータこそ強化されていても、思考ルーチンなどには意図的な穴が設けられている。

だが、それはそれとして数が数だ。

いかに出現するNPDが単体で脅威になりうるものではないとしても、数的優位というアドバンテージを握られるというのは、戦場においては極めて致命的だった。

「……………う、ぐ……………」

「ミワも、ちよつち厳しいねえ……」

推定戦力比は四十対一、とまではいかなくともそれなりの数を相手取らねばならない現状、じりじりとAGEーブルーランシュとフリーダムルージュの耐久値と残弾、エネルギーは削られていく。

リリカがドツズライフルのトリガーを引いたその時、かちり、と、何かが引つかかって詰まったような音が鳴り響くと同時に、コックピットへと警告がポップする。

弾切れだ。

恐れていた事態がとうとう起こってしまったのだ。

このまま一足先に自由になっていったダイバーたちの後を追わねばならないのだろうか、そう思うと、例え自分がいなくても戦いは勝てるとしても——リリカにとっては言い表しようのない感情が、悔しさが、脳裏に閃き、ぴしり、と、何かが砕けたような音を立てる。

「……めない……」

「リリカちゃん？」

「諦めない……！ 私は、ブランシュは……絶対……！」

幸いなことに弾が切れただけだ。

エネルギーが尽きたのでないのならいくらでもやりようはある。

リリカは左腕のバックラーからビームサーベルを抜刀すると一息に跳躍、空中からの強襲をかけようと試みていたギャプランを一刀の元に斬り伏せて、着地を狙ってきたビームをバック宇宙の容量で回避、東部バルカンを牽制として放ちながら、仕掛けてきたダガーLを両断する。

ここで負けても死ぬわけではないのはリリカにもわかっていた。

だが、自分でもわからない衝動が、感情が、操縦桿を動かす手に伝わって、そして脊髄が燃えているような錯覚と共にリリカを突き動かしていたのだ。

その瞼には涙が滲んでいるものの、口元に浮かんだ引き立った笑みは不格好ながらも、「狩られる」側なものでは断じてない。

今、リリカはダイバーとして「狩る」側に立っているのだ。

脳裏に思い起こすは、あの日戦った「MS斬りの悪魔」ことアズキ



の姿。

彼女は太刀一本というあまりにもストイックな武装構成で戦場を駆け抜けていたのだ。

ならば、汎用機として作ったこのAGE―1ブランシュが、ライフを喪失しただけで行動不能になるという道理などどこにもない。

不可能だと結論づけていながらも、自身の遙か先を行くトレイルブレイザーの姿を己に重ね合わせてトレースするようなイメージで、リリカはミワに迫る敵を斬り伏せていく。

時には敵を味方の射線に誘導するようなマニユーバで攪乱を行いながらも、大した被弾のないその戦闘スタイルは、奇しくも回避盾と呼ばれるタンク役のそれと合致していた。

土壇場で追い込まれたことで秘められた力が覚醒したとか、そんな都合のいいものなど現実にはない。

ただ、あらゆる殺され方を理不尽なクソゲーでぶつけられてきた記憶が、アドレナリンを滾らせて、過集中状態にリリカを追い込んでいくだけだ。

しかしリリカは――それを、楽しいと感じていた。

AGE―1ブランシュと共に戦場を駆け回るのが、そして例え一人であっても敵を斬り伏せるのが、なによりも自身がヘイトを集めたことで撃ち漏らした敵を確実に射抜いてくれるミワが背後にいてくれるのが、楽しい。

力任せに湧き出てきたアヘッドのコックピットへとビームサーベルを突き立てると、リリカは一瞬、寧猛な笑みを覗かせる。

そんな獅子奮迅といった風情の活躍は、ミワを始めとした味方側にも大きく伝わり、下がりかけていた士気は一気にそのボルテージを引き上げていた。

『あのAGE―1がタゲとつてくれてるぞ、続け！』

『バカ、焦って突っ込むじゃねえ、俺たちはおこぼれ狙いだ！』

そんなハイボルテージが見せる熱狂に吞まれかけたダイバーの「ガンダムジェミナス01」を諫めるように、もう一人の相方と思しきダイバーの「ガンダムジェミナス02」が警告と同時にアクセラレート

ライフルを、リリカが討ち漏らした敵へと発射する。

「リリカちゃん……」

ミワは言い表せないようなその感覚に——凜猛かつ、喜悦を満面に押し出した笑みを浮かべていた。

そうだ。リリカちゃんはやればできる子で、そんな凜猛なりリカちゃんも世界で一番可愛くて——ミワは、そんなリリカちゃんのお姉ちゃんで！

空になった弾倉を交換すると、今度はA B A P S F D S——対ビームコーティング弾が詰まった弾倉を対艦ライフルに装填して、ミワはおそらくビームサーベルで斬り伏せるのが難しかったのであろう、増援のモビルアーマー、「ユークリッド」を陽電子リフレクターの上から粉碎する。

ヅダの対艦ライフルと比べて威力や命中精度では劣っているかもしれないが、このオリジン系ザクに付属してくる対艦ライフルは、ストックがない分他の長物と比べて取り回しやすいという長所があった。

そしてそれは、取りも直さず、乱戦で凸砂をするのに向いている、ということである。

リリカに歩調を合わせるように、ミワもまた凜猛な笑みを口元に浮かべながら、一つ、また一つと装甲が固い敵を正射必中を体現するよう一撃でぶち抜いていく。

そんな姉妹の敢闘が奇跡を手繰り寄せたのかどうかはわからない。

だが、フリーダムルージュのレーダーには、別な戦域から猛スピードで接近してくる青い点——味方を示すそれが明滅していた。

「よく耐えてくださりましたわ！ お味方は……ここに來たれり、ですのよ！」

いかにもお嬢様です、という言葉遣いをしたそのダイバー、カエデと、愛機であるウイングゼロノールベルがその手に連結させたツインバスターライフルを備えて、星屑輝くステージとは程遠く、屍山血河を築き上げている戦場に、飛び入り参戦を果たす。

——シエルターが万全であつてくれては困る。

リリカとミワの獅子奮迅の戦いを繰り広げてくれた事で、護衛が殆ど減ったのと、射線上に味方がいないのを確認した上で、カエデは格納庫へと狙いをつけて、ツインバスターライフルを放った。

駆け抜ける閃光は、僅かに残された護衛の敵機を巻き込みながら、確かに格納庫へと到達し、爆炎と響き渡る轟音が、その地点における増援の打ち止めを伝える。

戦力ゲージの天秤は相手側に傾いてこそいるものの、味方側のそれは、まだゼロになっていない。

そしてこの戦いが、互いの戦力ゲージがゼロになったその瞬間に決着を果たすのであれば、幸いにも、そして不幸にもまだ勝負はついていないということだ。

噴き上がる硝煙の中から、ゆらりと姿を表したその機影に、カエデはステージギミックかと、小さく溜息をつく。

ソードカラミティとブラウカラミティ……どちらもカラミティガンダムをその原型とする、格闘戦型と砲戦特化型が姿を表した理由は単純なものだ。

中ボスの降臨。

それを示すかのように、ブラウカラミティが放った無数の弾丸が、反応の遅れたダイバーたちを巻き込んでその屍山の一部とする。

リリカとミワはアドレナリンが与える衝動に任せてそれを回避していたものの、格が違う奴が現れた、と、一欠片残された冷静さがそれを脳裏に伝えていた。

「リリカちゃん、リリカちゃん」

「……うん、お姉ちゃん」

そこに余計な言葉はいらないとばかりに互い呼び合って、リリカはソードカラミティを、ミワはブラウカラミティをターゲットに定めて散開する。

「……リリカさんにミワさんでしたわね、ご武運を」

まだ敵の格納庫があと一つ残っている以上、ここでカエデに足を止めてもらおうわけにはいかないとはかりに突出した二人の意図を理解したのか、ウイングゼロヌーベルは戦士となった姉妹への激励を一つ

だけ残して、ヘブンズベース基地の奥に残された格納庫を目指して飛び去っていくのだった。

## 第二十一話 「ゲストロイ・ゲストロイヤー」

ブラウカラムיתיとソードカラムיתיのタッグは、当然リリカたちとは真逆の狙いで立ち回る思考ルーチンを有している。

遊撃手であるリリカをブラウカラムיתיが自慢の弾幕によって抑え、そして孤立したミワをソードカラムיתיが仕留めるという算段で、対艦刀「シユベルトゲベル」を抜き放った赤い機体——ソードカラムיתיは動き出す。

赤鬼と青鬼を思わせる災厄のタッグの思うがままにされては堪ったものではないと、リリカもまた抜き放ったシングルブレイドを構えてソードカラムיתיへと食らいつかんとブーストを噴かし、斬りかかっていく。

ブラウカラムיתיという機体を一言で表すのなら、それは「珍兵器」という単語に尽きる。

ただでさえ原作中においては過剰火力が指摘されたことで生産が停止されたカラムיתיガンダムの火力を二倍化することを目的に、胸部ビーム砲「スキュラ」と、背部バックパックに接続されているビーム砲「シユラーク」をそれぞれ二倍の数に増設し、増加した重量はホバー移動で補うというその設計思想はあまりにも極端で、大雑把だった。

登場する外伝作品では予算のほとんどを使い果たしたその金満を体現する機体は果たして駄作機なのかと問われれば、それは間違いなく否である。

ブラウカラムיתיが両腕に装備しているコンバインド・シールドからのガトリング掃射、そして二門のスキュラと四門のシユラークによる一斉射撃は、ミワの機体の原型であるフリーダムガンダムがその必殺技としていた、ハイマツト・フルバーストに勝るとも劣らない。

「……………」

「リリカちゃん！」

「……………だ、じょうぶ……………！ 避けられた、から……………」

ソードカラムיתיを追うのに集中していたあまり見落としていた

ブラウカラムィティの一斉射撃を紙一重で回避すると、巧みなスラスト一擲きで空中姿勢を立て直し、リリカは振り下ろされたシユベルトゲベルの一撃をシグルブレイドで受け止める。

幸か不幸か、アズキとのエンカウント、そして淡々と一人でミツシヨンをこなすというルーチンワークはリリカを大きく鍛える金床と鎚となっていた。

特に、アズキの色々人外じみたあの剣術を目の当たりにすれば、並のNPDが振るう剣などでは、その太刀筋が完全に見えてしまう。

神楽舞のような、継ぎ目のほとんど見当たらないアズキの剣術を脳裏に想起しながら、リリカはソードカラムィティの太刀筋を読み切る形で全て回避し、懐に飛び込んでシグルブレイドを突き立てようと試みた。

だが、ソードカラムィティも、腐つてもレイドバトルにおける中ボスポジションであることに違いはない。

敢えて右肩でリリカの攻撃を受けると、カウンターとしてシユベルトゲベルを放り投げて、脚部に装備されている対装甲ナイフ、「アーマーシユナイダー」でAGEー1ブランシユへの反撃を試みる。

そして、武装のリキャストが終わったブラウカラムィティがリリカの機体を照星に捉えた、その瞬間だった。

がうん、と、なにかが低く唸るような音とと共に四門のシユラークに風穴を開けて、誘爆を引き起こす。

「リリカちゃんは……やらせないよおっ！」

それはミワが放った特製の徹甲榴弾による攻撃だった。

後期GATシリーズ……カラムィティガンダムが属するそれは、エネルギーを節約するために、物理攻撃に耐性を持つフェイズシフト装甲をバイタルパート、つまりコックピット周辺にしか採用しておらず、それも衝撃を受けてからフェイズシフト現象が始動するという限定的なものだ。

だからこそ、それ以外の装甲に対しては実弾であっても大きなダメージが見込める。

ミワもまたスコープ越しにブラウカラムィティを覗き込み、リリカに

は指一本触れさせまいと、狙いが自身に向くリスクを呑み込んで、コンバインドシールド二枚による弾幕砲火を掻い潜っていく。

徹甲榴弾は今ので十分仕事をしてくれた。

まだ残弾の残っている弾倉を取り外してブラウカラムיתיに投擲すると、榴弾の火薬が炸裂して両者の視界を奪うその瞬間を見計らって、ミワは最後となる、通常弾が装填された弾倉を対艦ライフルへと装着する。

リリカの言葉を信じるなら、あれを——ブラウカラムיתיをなんとかして倒すのが自分の仕事だ。

だが、レイドボスとして強化されたトランスフェイズ装甲を打ち破れるかどうかについて、ミワは正直なところ全くといっていいほど自信がなかった。

それでも、やるしかないのだ。

他のダイバーが、打ち止めになったとはいえ、かなりの数が残っている量産機を相手にしてくれている間に、そしてリリカがソードカラムיתיを足止めしてくれている間に、あの火力の青鬼を倒し切らなければ勝利への道は遠ざかることになる。

「期待の人がミワたちならば……つてねえ……」

ネタが古いか、と、照星を覗き込む緊張感を誤魔化すように軽口を叩きながら、ミワはシユラク四門を失って尚、圧倒的な弾幕を展開しているブラウカラムיתי、そのコックピットに狙いを定めて、連続してトリガーを引く。

対艦ライフルとなればその反動も凄まじく、銃口は常にブレるものとして弾道を計算しなければならぬ。

ミワはそれを理解したうえで、すべてのブレを計算して——「同じ箇所に連続して弾丸を打ち込む」という脳筋式の、しかしながら極めて実現可能性が薄い方法で、TP装甲を打ち破ることを画策した。

鉄と火薬の唸りが獣の咆哮のように戦場へと響き渡り、ホバー移動でもカバーしきれないその重量過多という穴を突くように、ミワの放った弾丸が一発、二発と間髪入れず、そして一ミリのズレもなく同じところに着弾する。

### 三発、四発。

フェイズシフト装甲は、確かに装甲への傷を防いでくれるかもしれないが、衝撃に対しては弱いという弱点を抱えている。

純粹な、対戦艦用として生み出されたアンチマテリアルライフルの一撃だけならばいざ知らず、それが数発同じ箇所に着弾したとなれば――バイタルパートは大きく歪んで、へこんで、そして。

「とりあえずは、やったねえ」

――貫かれて、爆散する。

ミワはそれをさも当然の帰結かのようにあっけらかんと欠伸混じりに呟いてみせるが、内心では心臓が早鐘を打ち、そして胃の辺りがきりきりと締め付けられるような錯覚に襲われていた。

ピンホールショットを対艦ライフルでやってくれなんて、リリカのためじゃなければお断りだし、リリカのためでなければできなかっただろう。

口にこそ出さないが、ソードカラミティ相手に奮戦を続ける妹を見つめて、ミワはむにやむにやと欠伸を噛み殺す。

自身の才能と妹のそのの乖離。なんでもないようで大きなことが呪いになってしまって、妹を苛んでいる以上、迂闊な言葉はかけられない。

まして、幼い頃からずっと抱えてきた優しい気質故に、はみ出し子扱いされてとうとう部屋に籠ってしまうまでに至ったリリカだ。

本当なら褒めてあげたいし、飽き性で、すぐ眠たくなってしま自分分はリリカがいてくれたからこそ頑張ってきたのだとそう言いたいのだが、きつとその言葉だつてリリカを蝕む呪いになってしま。

「……頑張ってるねえ、リリカちゃん」

だからこそ、それがミワに語れる言葉の精一杯。

妹を、ありのままのリリカを肯定すること、それだけだ。

アーマーシュナイダーとシングルブレイドによる剣戟は、リリカの操るAGE―Iブランチシュの膂力によって、強引な決着を迎えようとしていた。

元々リリカはあの幕末地獄、文字通りなんでもありのバトルロワイ



ヤルで狩られ続けてきたからこそ、一つの教訓を得たところがある。  
——殺される前に殺せ。

それはシンプルかつプリミティブな結論であり、だからこそリリカは機動力と決定打になり得る兵装をそのアセンブリに組み込んでいるのだ。

「てええええ、い……っ……！」

ソードカラミティのアーマーシユナイダーをへし折って、悪あがきにスキュラを放とうとした胸部から、コックピットを袈裟懸けにリリカは斬り付ける。

TP装甲が造り込みの施されたシグルブレイドによって切り裂かれ、発射寸前だったスキュラのエネルギーが暴発したことで、ソードカラミティの紅の機体もまた、一足先に逝ったブラウカラミティの後を追うこととなった。

爆発から逃れるべく腰部のスラストを稼働させ、バックブーストを噴かしてリリカは全力で跳躍する。

「……は、あ……っ、はあっ……や、やった……私……」

「うんうん、リリカちゃん。ぐっどだったよお」

「……お姉ちゃん……」

「……次、行こっか」

「……うん」

ミワからの称賛の言葉をまだ素直には受け止めきれないけれど、胸が高鳴る感覚に任せてリリカは首を縦に振り、先ほどカエデが呐喊していたへブンズベース基地の奥にある格納庫を目指してスラストを噴射し、機体を走らせていくのだった。



カエデ・リーリエがGBNを始めた理由はただ一つだった。

格納庫を破壊したことで、こちらはロートフォビドゥンとフォビドゥンヴォーテクスというコンビが現れたのを一人で相手取りながら、カエデは在りし日のことを脳裏に浮かべる。

父がGBNにおいてプログラム班を統括する立場にいる、GMに程近いポストにいることは把握していたが、一年前——非公式の第三次有志連合戦が行われるまで、カエデはガンダムのガの字も知らず、また興味も持っていなかったのだ。

ロートフォビドウンが両刃になったニーズヘグを振るうのを予測していたかの如く回避し、カエデはそのコックピットへとビームサーベルを突き立てる。

そうだ。これではまだ遠い。

あの時、タチバナ商会という鼻持ちならない連中に一泡吹かせた運営班の努力と、そして桜宮家という巨大コングロマリットとかの「GHC」が手を組んでの政財界における大立ち回りはカエデの耳にも当然の如く入ってきたのだが、問題はそこではない。

(エリイちゃんのために……死ねえええッ!!)

——格好よかった。

色々と覚悟だとか決意だとかがキマった目で相手を打ち貫く、非公式第三次有志連合戦こと「ELダイバー争奪戦」の立役者となったフォース、「リビルドガールズ」の切り込み隊長であるダイバー、「アイカ」が、敵を屠るのは常に愛する誰か一人のためであり、その愛情が、そして愛に裏付けられた、苛烈なまでの闘志がカエデをGBNへと引き込んだのだ。

「ああ……程遠い、まだ足りない。貴方では、アイカ様には及ばない！」

カエデはロートフォビドウンを難なく屠り、そしてどう考えても他にバリエーションがなかったからという理由で陸に引き摺り出されてきたフォビドウンヴォーテクスも、自慢のシザーソードによる一撃でテクスチャの塵へと帰せしめて、天を仰ぐ。

だが、無粋にもそんな余韻に浸る時間すらこのレイド戦は与えてくれなかった。

ちょうど四つあるうちの全ての格納庫が破壊されたことで、ステージギミックが発動した旨の通知と、今までにないコーションが、ウイングゼロヌーベルのコックピットに響き渡る。

「なんですの、一体——ッ!？」

それは、突然に現れた。

それは、待っていたかのようにゆらりとその巨体を立ち上がらせた。

G F A S—A 1、デストロイガンダム。

設定された身長よりも遥かに大きな巨体が、制圧済みのマスドライバー区画と、そして今戦闘が行われている基地正面、そして宇宙空間に君臨する。

それは第三ウェーブであり、原作においてはシン・アスカをはじめとしたミネルバ隊の面々が活躍したシーンを再現したものに違いない。

だが、第二ウェーブという消耗戦を経てからぶつけてくる辺り、運営も中々いやらしいことをしてくれる。

カエデは放たれる弾幕のカーテンとでも呼ぶべきものを、偏らせた配置の推進器が生み出す変則的な機動で掻い潜りながらも、実に五機という、正面エリアに残された敵も含めてこちらを文字通り殲滅<sup>デストロイ</sup>すべく配置された最後の守り手に舌打ちをする。

原作においてはステイング・オークレーがその最後の乗機としたデストロイガンダムだったが、流星にこの局面でネームドのNPDをぶつけてくるような真似をするのはいくら運営班でも気が引けたのか、デストロイガンダム五機を動かしているのは非ネームドのNPDだ。それを不幸中の幸いと取るのか、焼け石に水と取るのかは受けて次第だろうが、デストロイが現れたことで一気に阿鼻叫喚に陥った戦場は、混沌を体現していた。

『ちよつと待って、無理無理無理、こんなの!』

「貴方、何をして——!」

『うわああああっ!』

デストロイの威容に恐れをなしたのか、全力でバックブーストを噴かして逃亡するVダッシュガンダムの足が着地したウイングゼロヌーベルのそれに引っかけかかって、カエデと逃亡者はもつれ合い、転倒してしまう。

いかに非ネームドのNPDであったとしても、当然そこを見逃すはずはない。

デストロイガンダムの双眸が怪しく光を放ったかと思えば、胸部に配置された巨大ビーム砲「スーパースキュラ」が、カエデのウイングゼロヌーベルとVダツシユガンダムを呑み込めんと閃光を放つ。

よもやこれまでかと、カエデが自身の屑運に諦めを抱きかけた、その時だった。

「間に合っ、てえええっ！」

一筋の光芒が、白い閃光がカエデの眼前に躍り出る。

それはリリカの操るAGE-1ブランシュであり、そして彼女は事もあるように、その高機動低耐久を体現するような機体で、カエデを庇いたてようとしているのだ。

「お待ちなさい！ 貴女、それは無謀というものですわ！」

カエデは慌てて静止するが、過集中状態に入っていたリリカの耳にそれは届かない。

程なくして放たれたスーパースキュラ、その光の束を前にリリカはただ、己の対峙した「MS狩りの悪魔」ことアズキのモーシヨンを想像する。

あの太刀に秘密があるのか動体視力に秘密があるのか、両方なのかはわからないが今はどうでもいい。

重要なのは、デストロイガンダムが放とうとしているのはビームで、そして自身が持っているシングルブレイドには、ヨノモリ塗料——高級だが、確かな品質を持つ老舗メーカーが発売している対ビームコーティングに対応したクリアコートが上掛けされているということだ。

そうして、押し寄せてくる光の奔流を、リリカはモーセが海を割るかのごとく、真つ二つに切り裂くのではなく——自身を起点として二股に分かれさせることでカエデたちを庇い立てるといふ奇策に打って出たのだ。

凄まじい衝撃のフィードバックが、握る操縦桿を重くする。

そして全力でスラストを噴かしていても、尚押し戻されそうなそ

の高出力にリリカは声にならない呻きを上げるが、操縦桿を握る手には裂帛の気合いを込めて、AGE―1ブランチュを踏みとどまらせる。

「貴女、何を――」

「……前に、助けて……貰いました……っ……っ……！」

リリカは覚えていた。

あのシャフランダム・ロワイヤルで、味方二機が早々に爆散しても、何とか戦線を立て直すのに成功したのは他でもないカエデの奮闘があつたことを。

確かに「MS斬りの悪魔」には敗れたかもしれない。

だが、それと、受けたと思っている恩を返すのは別だ。

人が聞けば嗤うような、それだけの理由。

ただ、リリカにとっては何よりも大きな理由が、歯を食いしばってでもAGE―1ブランチュを押し止まらせた。

そして――それは、奇しくも「アイカ」がフォー스戦で鮮烈なデビューを飾った時と同じ防御方法だった。

――光が、爆ぜる。

ドロドロに装甲やシグルブレイドの刀身を融解させ、機体のほとんどが使い物にならなくなっても――スーパースキュラの照射を防ぎ切って、確かにAGE―1ブランチュは直立していた。

「……っ、ミワさんと仰りましたわね、これを！」

そして、遅れて駆けつけてきたミワに向けて、カエデはバックパツクの右側にマウントしていたシザーソードを投擲する。

「確かに確かに受け取ったよお、これなら……殺し切れるねえ……！」

曲芸飛行のようなマニューバで、多種多様な弾幕を掻い潜りながら、シザーソードを受け取ったフリーダムルージュはそれをデストロイのコックピットに突き立てると、対艦ライフルを放棄して突撃をかける。

奇しくもそれはベルリン市街においてステラ・ルーシエが搭乗していた同機に、フリーダムがビームサーベルを突き立てた時のように、掻い潜った弾幕の先にあるコックピットへと、カエデのシザーソード

は深々と突き刺さっていく。

そして、目覚めた五体の内一体の巨人は膝から地面に頽れて——その機能を永遠に停止する。

ほとんど満身創痍だった。

リリカのAGE-1ブランシユは大破寸前で、ミワのフリーダムルージュは武装と呼べるものが残りはカエデから借りたシザーソードと足が止まるクスフィアスぐらいしがなく、カエデも格納庫を破壊するためにツインバスターライフルを何度も撃ったことでエネルギーに余裕がない。

だが——それだけで、今この瞬間まで、矢尽き刀折れるまで戦い続けただけで、十分だった。

ここまでかと、リリカが眦に涙を滲ませて、天を仰ぎ見たその瞬間だった。

『待たせたなあヒヨッコ共！ 超絶難度の攻略RTAなんざFOEさんにでもやらせとけ！ こっからは……アタシの戦場だあッ！』

原作と同様にリフレクターパックを装備した「G-セルフ」の力を借りて、宇宙エリアから帰還してきたアリムとウォーモンテローが、四機のデストロイガンダムを見据えて、その内の一機へとジャベリンを投擲する。

『ジャベリンはアツ、こう使うッ！』

『クク……ビームシールドでの大気圏突入、キンケドウに出来てこの私にできないはずがあるまい、行くぞー！』

そして、彼女に続く形で、クロスボーンガンダムX2改を筆頭とした数機の機影が流星となって、ヘブンスベース基地へと降下してくる。

戦力ゲージの減り方から、地上が劣勢であるを見て、宇宙の超絶難度レイドボスをキョウスケ一人に任せることで、ハイランカーたちが引き返してきたのだ。

アリムがビーム・ジャベリンの投擲でデストロイの一機を仕留めたことを皮切りに殺到し、突発的デストロイガンダム解体RTAが始まりを告げる。

その後はもう、一方的なものだった。

リリカとミワは、そしてカエデはただなす術もなくデストロイガンダムが解体されていく様を、ごりごりと敵の戦力ゲージが削れていくのを見送りながら、安堵に胸を撫で下ろす。

撃墜されることが責められるようなミッションではない。

ただ、それでも。

【Raid Battle Ended!】

【Winner: Prayer Teams!】

それでも——最後までこの難易度のレイド戦を生き抜いたという喜びは、確かにリリカの胸を満たしていたのであった。

## 第二十二話 「フォース・アナザーテイルズ！」

レイドバトル「オペレーション・ヘブンズドア」をクリアしてロビーへと帰還したりリカを待ち受けていたのは、事前に説明された通り、ウィンドウにポップアップする大量の報酬と、そして。

【Secret Success!】

【称号：『屍山血河の生還者』を獲得しました】

【称号：『最後の耐久値』を獲得しました】

【称号：『獅子奮迅の豪傑』を獲得しました】

【Congratulations!】

【ダイバーネーム：リリカのランクがCに上昇しました】

やたらめつたらとポップアップしてくる情報に、リリカの頭は洪水を起こしたようにキャパオーバーをしてしまいそうになる。

が、なんとということはない。

ただ単にリリカのレイド戦における立ち回りを評価した称号が手に入ったたり、普段からソロでマルチ向けのミッションをクリアしていたことで蓄積されていたダイバーポイントに、今回のフィニッシャーボーナスや生存ボーナスが重なって、一足飛びにランクが上がったというだけの話である。

「おお、凄いことになってるねえ、リリカちゃん」

「……な、何がなんだか……私……」

「まあまあ、昇格したってことだけ覚えておけば大丈夫だよリリカちゃん。とりあえず昇格おめでとう、ミワとしても鼻が高いね」

レイドバトルは確かに撃墜されても問題はないが、最後まで生存しているとフィニッシャーボーナスというものが貰えて、それがダイバーポイントを大量にくれるから、だとか、そういう事情があつてレイドバトルは大人気なのだとか、説明することは容易い。

ただそれは野暮だし、キャパオーバーを引き起こしているリリカに言葉の洪水を浴びせかけるのは追い討ちをかけているようだったから、ミワはあえてかいつまんだことだけを端的に話したのだ。

Cランク。



一息に駆け上がった自身のランキングを見遣ると、リリカは小首を傾げる。

先人曰く、GBNはCランクからが本番らしいとはリリカも事前にwikiを読んだことで把握している。

Dランクから解禁されるものがフォースの結成なら、Cランクから解禁されるのは主に対人戦で一発逆転の切り札となりうる自分だけのユニークスキルとでもいうべき「必殺技」だ。

それはシステムがダイバーの癖だとか動きの傾向だとかを鑑みて自動で設定されるらしいのだが、一応後からダイバー側が設定し直すことも可能となっている。

ただ、リリカにとつてはその辺りがよくわからない、というより呑み込めない状態で、一概にCランクだの必殺技だのいわれてもイメージが湧いてこない、というのが正確なところだった。

「……お、お姉ちゃんは……」

「なにになに〜?」

「……ど、どんな必殺技にしてるの……?」

そういえば気にしたことがなかったが、ミワはリリカより長くGBNをやり込んでいるはずなのだ。

ならば何かの参考にならないかと、縋るような気持ちで問いかけたのだが、ミワは困ったような笑みを浮かべていた。

「うーん……ミワは戦闘スタイルがリリカちゃんと真逆だから、あんまり参考にはならないと思うよお」

「そ、そうなんだ……ごめんさい、変なこと訊いて……」

「ううん、気にしてないよお。リリカちゃんの必殺技は、特に難しく考えなくてもシステム側が作ってくれるし、リリカちゃんのスタイルに合わせて最初は設定されるから、今は難しく考えなくてもいいんじゃないかな〜」

しゅん、と肩を落とした妹をフォローするように、ミワは使い果たしたことで機能が沈黙寸前の脳味噌から言葉を出力すると、くあ、と小さく欠伸をする。

自分だけのユニークスキルなのに、システムが最初は自動で決定す

るというのはいかなものか、というダイバーたちからの疑問は確かに噴き上がって、時折GMの元にお手紙と共に届いたりするのだが、運営としての回答は、今まさにリリカのように「すぐには決められない」人のために現行の仕様を維持している、ということだった。

「そうなんだ……あ、ありがとう、お姉ちゃん……」

「うん、どういたしましてだよ、リリカちゃん」

まだ姉との間にわずかなわだかまりがあることは、リリカもよくわかっている。

才能の違いだとか、比較され続けてきた過去だとかそういった事情が、このGBNに潜っている間はチャラになりますという都合のいい思考遮断もなければ、そんな過去に囚われずに振り切ってしまうなどと無責任にも公言して憚らない人間もいるだろう。

だからこそ、ミワとの差を考えた時、そこにあるのは絶望だ。

だが、どうしてかは分からないが、リリカは今確かにミワのことを、躊躇いなく「お姉ちゃん」と、そしてミワに対して「ありがとう」と、ごく自然に言葉を紡いでいた。

それがどうしてなのか、自分でも困惑するほどにリリカにはわからない。

或いは、レイドバトルを生き残ったという興奮が見せる一時的な高揚感の副作用のようなものなのかもしれない。

ただ——それだけではないような気がすることも、また確かだったのだ。

リリカは何か手応えのようなものを感じながら、どこか茫然と口を開いて、いつもは半分閉じられているような姉の瞳を真っ直ぐに見据える。

「……そ、その……えっと……」

「うん、ミワもびっくりしちやっただけだよ。でも……嬉しい」  
幼い頃。本当に記憶の引き出しを乱暴に開け放って、散らかして。

そうしてようやく出てくるような思い出の欠片、曖昧で、そんなことが本当にあつたかどうかすら疑わしくさえなってくる、けれど何よりも懐かしく胸に染み渡るその記憶を手に取り、抱きしめるかのよう

にミワはそつと目を伏せて、眦に涙を滲ませる。

小さい頃に神様がいたかどうかはわからないが、確かにほんの、物心付くような頃は誰かに比較されることもなく、リリカとミワは仲良しの姉妹として、一緒に遊んで、時には喧嘩して——そこに断絶を抱えることなく、泣いたり笑ったりしていたのだ。

そんな子供の頃に帰ったような一瞬のノスタルジーが、ミワの瞳を潤ませ、リリカもそれにつられて、どこか泣きそうな気分になってしまふ。

「……お姉ちゃん、ごめんね」

「……ミワだって……ごめんね、リリカちゃん」

全てが赦されたわけではない。全てを許せたわけでもない。

そして何かが変わったわけでも、わかったわけでもないが、二人はこの時心を通わせたのように互いに頭をペこり、と下げて、一語には表せない、愛憎がこもった「ごめんなさい」を互いに捧げる。

わからなくとも、理解できなくとも、そして、傷つけあっていたとしても、今隣にいるために、いてくれる人のためにそうすることが必要だと思った、それだけの話だ。

それでも、二人が踏み出した足は確かに——確かに、一步前へと進んでいた。

ごく自然に、流れるようにリリカへと抱きついて頬をすり寄せるミワのあたたかさへと縋るように、リリカもまた、擬似的にフィードバックされるその柔らかさや、三十六度の熱へと縋るように、ミワの細い腰に手を回して抱擁を返す。

そこに言葉は何もなかった。

何も要らなかった。

周囲の目さえも仮想の世界からは切り離されているかのような感覚に、或いは時間の流れという軌から、重力から解き放たれたような浮遊感に、リリカとミワは包まれる。

二千万人もいるアクティブユーザーの中でたった二人だけが残ったかのような錯覚と共に、リリカとミワはしばらく抱き合い、そして、涙をこぼしていた。

「えへへ、ありがとうねえリリカちゃん。リリカちゃん成分がたっぷり補充できたよ〜」

「……そ、そんな……私だって……」

「うんうん、そうだねえ、お互い様ってやつだねえ」

ぼんやりと眠いからなのだ、とばかりに眦に浮かんだ涙を人差し指で掬いながら、ミワは眠たげな声音でそう囁く。

それがミワ流の強がりだということはわかっていても、リリカはあえてそこに触れることはせず、擬似的なフィードバックであるとはいえ、仮想の躯体に未だ残る熱に心を委ねるのだった。

「あの、もし」

「んん、何か御用ですか〜?」

声が聞こえたのは、しばらく二人が抱擁の余韻に浸っていたその時だった。

ふわふわと癖がついた金髪をリリカと同じように腰まで伸ばして、舞踏会に赴く貴族の子女、といった風情のダイバールックに身を包んだ少女が、リリカたちを呼び止める。

「ごめんあそばせ、貴女たちがリリカさんとミワさんでよろしかったですわね? わたくしはカエデ。カエデ・リーリエ。ウイングゼロヌーベルに乗っていたダイバーですわ」

カエデは姉妹のやりとりに割り込んだ非礼を、スカートの裾を摘んで優雅に一礼することで詫びながら名乗りを上げた。

ウイングゼロヌーベル。リリカとミワは聞こえてきた言葉に顔を見合わせてから、自分たちに負けず劣らず豊かな胸を反らしてどこか得意げな、自信に満ち溢れた顔をしているカエデを見遣る。

シャフランダム・ロワイヤルの時は相手が相手だったために敗北を喫したものの、彼女は今回のレイド戦でも格納庫を潰して周るなど、確かにBランクという自分たちから一步抜きんでた実力を持つダイバーに違いはない。

そのカエデが自分たちに何の用があつて来たのだろうか和小首を傾げるミワだったが、当たり障りのない疑問を考えつくより先におずおずと手を挙げながら、リリカが控えめに問いを投げかけていた。

「……あ、あの……以前は、ありがとうございます……その、でも、どうして……カエデさんが……？」

リリカの唇から紡がれた疑問はド直球ストレートなものだったが、それさえ意に介すことはなく、カエデは得意げで勝気な態度を崩さず、その問いへと答えてみせる。

「その理由は二つですわ。一つは……貴女たち、特にリリカさんへのお礼が言いたかったこと。そしてもう一つは、単純に訊きたいことがあったからですよ」

おかげで命拾いしましたわ、と再びカエデはリリカに頭を下げる。リリカとしては至極当然のことをしたつもりだったのと、いつもは頭を下げる側だったから下げられることに慣れておらず、あわあわと言葉にならない声を発しながら、どうか頭を上げてくださいとジェスチャーでの意思表示を試みる。

ただ、それでは伝わらないだろうと、小さく、聞こえないように咳払いをしながら、ミワがキャパオーバーを起こしている妹のフォロウに入っていく。

「なになに、ミワたちに訊きたいこと？」

「ええ。こほん。不躰な質問で申し訳ない限りなのですが……貴女たちは、フォースを組んでいらつしやりました？」

「ふお、フォース、ですか……？ 組んで、ないです……」

「くあ……そういえばリリカちゃんが昇格した時に組んどけばよかったですね」

いつもはフレンドメニューを経由したパーティー申請でミツシヨンに挑んでいるために意識したことはミワもリリカもなかったが、確かにリリカのランクがそこに達したのなら、フォースを組んだ方が色々とメリットは多いはずだ。

カエデからの問いに、眠たげな声音でそう答えつつミワは思考の片隅でそんなことを考える。

「ならば、フォースを組む予定があるのなら……このわたくしを、仲間に入れていただけませんか？」

カエデは再びスカート裾を摘んで優雅に一礼する。

あの時、デストロイガンダムのスーパースキュラに呑み込まれかけた時、颯爽と現れて、ビームを切り払うのではなくシグルブレイドの刀身で防衛するリリカの姿に、カエデは憧れの人である「アイカ」のことを重ね合わせていた。

そして、あの時——過集中状態に陥っていたリリカの目は、アイカに負けず劣らず覚悟が決まっていたのだ。ならば、その目に——愛を宿して闘志を燃やすその瞳に惚れ込まないはずがない。

あわあわと小動物系なりアクションで姉の背中に隠れたり、時折小首を傾げ、唇に人差し指を当てながら考え込む愛らしさとのギャップだって、どことなく愛おしいものを感じられる。

こんなに心を震わされたのは「アイカ」の奮闘を見て以来だ。

どこか恍惚として、ぞくりと身体を震わせるカエデの姿にミワはどこか邪なものを感じながらも、呆れたような調子でリリカへと問いかける。

「ん〜、どうするどうする、リリカちゃん？ ミワとしてはどっちでも構わないよお」

リリカと二人きりになれないことに不満があるかないかでいえばあるのだが、あくまでも妹の意思を尊重してあげたい、というのがミワの持ち合わせていた姉心というものだし、実際大火力砲とそして大剣によるアグレッシブな戦闘スタイルで前衛を務めるカエデの存在は、ミワとリリカを一つのチームと考えた時に足りていないものを補ってくれる存在に他ならない。

だが、おそらく答えはもう決まっているのだろう。

ミワは小さく苦笑する。

眦に涙を滲ませるリリカは、初めての——それこそ身内であるミワ以外からのお誘いが来たことに、今にも舞い上がりそうな、そうでなければ今すぐにでも泣いてしまいそうなほどの嬉しさを抱いている。生まれて初めてだった。

ミワを除けば誰かに自分が必要とされているのは。

確かにチャンプやマギーといった大人物に目をかけてもらったことはある。

ただ、彼らとの間にはあまりにも実力に隔たりがあつてそういった実感が湧かなかつたものの、見たところほとんど同年代なダイバールックをしているカエデからのお誘いは、とてつもなく魅力的で、願つてもないことだったのだ。

「……え、えつと……それじゃあ、その……組んで、いいですか、フォース……」

リリカは控えめにミワとカエデへと問いかけ、二人がそれを首肯すると、コンソールからフォース決済の申請を出して、ミワとカエデがそれを承諾したのを確認すると、フォース名の入力フェイスへと、開いたタブは遷移する。

フォース名。正直何も考えていない行き当たりばつたりな結成だったものの、一つだけ、リリカの頭の中に思い描いているものがあった。

それは自身にとっての始まりとなった、非公式の第三次有志連合戦——その立役者として活躍していた、「リビルドガールズ」の存在だ。彼女たちをリスペクトして、スペルのどこかを小文字にすることも考えたのだが、それはそれでなんだか違う気がしたからこそ、リリカはその答えに辿り着いていたのである。

「……え、えつと……アナザーテイルズ、なんて……どうでしょう、えへへ……」

それはもう一つのフェアリー・テイル。

リビルドガールズが描いた小さな愛と勇気の物語に駆り立てられたからこそ思いついた、リリカにとっては渾身の名前だった。

「リリカちゃんが考えたものなら、ミワは何だつて受け入れるよお」「アナザーテイルズ……どこか『リビルドガールズ』に似たものを感じますわね。不束者ですが、よろしくお願いいたしますわ」

一礼するカエデと、眠たげにしながらも自身のの提案を否定することなく受け入れたミワに感謝を捧げるように涙を零しながら、リリカはコンソールにその名前を入力して、フォースの結成を完遂させる。

初めてだった。

姉妹であるミワを除けば、誰かに求められるという経験はリリカの

心に撃発しそうなまでの喜びであるとか不安であるとか、様々な感情が緋い交ぜになったものを抱かせる。

「えへへ……よろしく、お願いします……お姉ちゃん、カエデさん……」

だからこそ、口元を綻ばせて、にへら、と緩んだ微笑みを浮かべるリリカのことを誰が責められようか。

小さく頷くと、三つの掌を重ね合わせることをフォース結成の証として、リリカとミワ、そしてカエデは三者三様の笑みを浮かべるのだった。





635：以下、名無しのダイバーがお送りします  
ハンガー潰すまでモブが無限湧きしてくるとは思わなかった

636：以下、名無しのダイバーがお送りします

無限湧きもそうだけど微妙に思考ルーチン賢くなってるのが鬱陶しいんだよなー、上陸までは戦争屋とFOEさんとか両眼眼帯ザビーネの人がいたからまあぬるかった方だけど

637：以下、名無しのダイバーがお送りします

戦争屋ってアリムか、あの人レイド戦とか大戦争イベント大好きだからな

638：以下、名無しのダイバーがお送りします

この日のために気合入れてアメイジングズゴックのレプリカ買ったら上陸地点でバイアランに囲まれて乙ったわ、こんな事ある？

639：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>>638

進路上のクリアリングを怠るなどあれほど

640：以下、名無しのダイバーがお送りします

それ含めて今回のレイド、難易度は渋めに調整されてた感がなあ

641：以下、名無しのダイバーがお送りします

ハイランカー組が早々にマスドライバー制圧して宇宙行っちゃったのもなー、最後戻ってきてくれたけどそれまで生きた心地がしなかったわ

642：以下、名無しのダイバーがお送りします

その宇宙も宇宙で頭おかし難易度のギミック満載だったらしいな、全部FOEさんがソロで潰してたらしいけど

643：以下、名無しのダイバーがお送りします

草

644：以下、名無しのダイバーがお送りします

視点見てみたけど何やってるのかはわかるけど1f未満の回避とか何でできてんのかかわかんねえ、てか他のランカーに比べて話題にはならんけどFOEさんも大概だよな……

645：以下、名無しのダイバーがお送りします

ソロ専だからじゃない？ それにもう知ってたというかあの人わざわざ話題にしなくても一人で多分レイド戦クリアできそうだからな、本人は前にGBNジャーナルのインタビューかなんかで補給がないと無理とか言ってたけど

646：以下、名無しのダイバーがお送りします

補給あればできるのか……（困惑）

647：以下、名無しのダイバーがお送りします

人外の話はともかく、格納庫潰さないとモブが無限湧きしてくるってこと気づいた子は鋭かったな、あの通信のおかげで暴走お嬢様とか火力班が格納庫の制圧に乗り出したわけだし

648：以下、名無しのダイバーがお送りします

リリカちゃんか、いつもロビーで泣いてるから頼りないっていうかなんかいつもボコボコにされてそうな印象だったけど案外やるもんだな

649：以下、名無しのダイバーがお送りします

赤砂のミワの妹……なのかロールなのは知らんけどまあ実際妹だったら血筋やろなあ

650：以下、名無しのダイバーがお送りします

リリカちゃん視点の動画アーカイブ化されてたわ

【G-Tubeへのリンク】

651：以下、名無しのダイバーがお送りします

グウル使った曲芸飛行してたり滅茶苦茶すぎる

652：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>>650

この子マジで初心者？ グウルの曲芸もだけどデストロイのビームシングルブレイドで切り裂きながら耐えるって発想、どっから出てくんだよ

653：以下、名無しのダイバーがお送りします

「リビルドガールズ」のアイカがデビュー戦で似たようなことやってたしそれ真似したんじゃない？ 赤砂の妹なだけはあるな

654：以下、名無しのダイバーがお送りします

真似しようとしてできるもんじゃない定期、しかし暴走お嬢様もあそこで赤砂ちゃんにハサミソードぶん投げてたのも勘がいいわ、格上に喧嘩積極的に売りに行ってるだけのことはある

655：以下、名無しのダイバーがお送りします

上陸前に水中に引き摺り込まれて死んだワイ、低みの見物

656：以下、名無しのダイバーがお送りします

団長？ 何水中に引き摺り込まれてんだよ団長！

657：以下、名無しのダイバーがお送りします

他の奴らが止まんねえ限り、道は続く

658：以下、名無しのダイバーがお送りします

だからよ、レイド戦止まるんじゃねえぞ……

659：以下、名無しのダイバーがお送りします

ふざけているのかーっ！

660：以下、名無しのダイバーがお送りします

まあ実際俺ら初級者から中堅はハイランカー頼みだからな、足向けて寝れねーわ

661：以下、名無しのダイバーがお送りします

最後の最後にハイランカー組が気圏突入から復帰してきてデストロイ解体RTA始まったのはなんか感動的だった

662：以下、名無しのダイバーがお送りします

戦力ゲージがゼロになるまで負けじゃないからな、便乗してただけとはいえやっぱ生き残ってるだけでダイバーポイントとかうめえ報酬受け取れる辺りハイランカーは当然として無限湧きに気づいた子が隠れMVPだな

663：以下、名無しのダイバーがお送りします

リリカちゃんなあ、噂じゃあの後フォース組んだらしいしその後が未恐ろしいぜ

664：以下、名無しのダイバーがお送りします

最近話題のMS斬りの悪魔もフォースに入ったらしいしどんどん新進気鋭の連中が増えてく……てかお前らもフォース組んでたりするの？

665：以下、名無しのダイバーがお送りいたします  
(フォースを組むようなフレンドがい) ないです

666：以下、名無しのダイバーがお送りします  
悲しいなあ…… (諸行無常)

667：以下、名無しのダイバーがお送りします  
かといって野良募集でフォース組むとギスオンになりかねないし  
な、その辺難しいわ

668：以下、名無しのダイバーがお送りします  
例のMS斬りの悪魔は野良で勧誘されたんじゃないかなかった？

669：以下、名無しのダイバーがお送りします  
フォース名覚えてないけどガンプラの声聞けるとかいう奴がリー  
ダーやつてるとかそんな噂があるな

670：以下、名無しのダイバーがお送りします  
何それ怖い

671：以下、名無しのダイバーがお送りします  
「ビルドライジング」のケイだったか、マジなのか電波なのかわかん  
ねーけどフォースランクガンガン上がってるし実力があるのは確か  
みたいだな

672：以下、名無しのダイバーがお送りします  
「ビルドダイバーズのリク」からこっち、有望な新人が多すぎて一生中  
堅で燻ってる俺は嫉妬するしかないわ、狂いそう……！ (静かなる怒  
り)

673：以下、名無しのダイバーがお送りします  
言うてこのゲーム中間層が大半だし、脱中堅できる連中だってかな  
り限られてんだからあんま気にしない方がいいぞ

674：以下、名無しのダイバーがお送りします  
有望株って言われても英傑ひしめく魔境に行けるまで育つかどう  
かは別の話だからな

675：以下、名無しのダイバーがお送りします  
そーいや有望株といえば今回のレイドにはいなかっただけどテイ  
ターンズカラーのストライクか何か使ってる連中もめきめきフォー

スランキング上げてるらしいな

676：以下、名無しのダイバーがお送りします

はえーすっごい、まあ俺には縁のない話だしリリカちゃんもミワちゃんを後方腕組み彼氏面で見守っとくか

677：以下、名無しのダイバーがお送りします

もしもしガードフレイム？



季節はすっかり梅雨に両足を突っ込んだらしい。

重苦しい灰色に染まった曇り空から雨は降っていないなくとも、いつ降り出してもおかしくない。

そして、何よりも肌にまとわりつくような湿気が、外に出ることを億劫にさせるのだ。

フォースを組んだ帰り道、梨々香は湿気で肌にシャツや下着が吸い付くような不快感を覚えながらも、どこか軽やかな足取りで家を目指して歩いていった。

「ご機嫌だねえ、梨々香ちゃん」

「……そ、そうかな……えへへ」

「うんうん、嬉しいのはわかるよお。美羽も梨々香ちゃんが嬉しければそれだけで嬉しいからね」

にへら、と、梨々香が緩んだ笑顔をここまで浮かべていられるのもいつ以来のことだろうか。

そこまでするかかった足跡の数を数えれば途方もなく、そして幾度も途切れたそれが横たわっている。

美羽の言葉に嘘はない。

美羽としては梨々香が幸せでいてくれるなら他に何もいらないし、望むことはないのだから、GBNで頂戴している「赤砂」という二つ名だつて返上したがってたいたいのだ。

「……そ、そういえば、お姉ちゃん……」

「なになに、梨々香ちゃん？」

「……その、お姉ちゃんが呼ばれてる名前って、称号だったり……する、の?」

あの時は色々あって頭がパンクしそうだったものの、特定の条件を満たせばプロフィールカードにセットできる称号が手に入る、というのはGBNにおける大型アップデートの一環で、美羽が「赤砂のミワ」と呼ばれているのも、それに関係があるのかと、梨々香はそう思ったのだ。

「ん、それは違うかなあ……勝手に呼ばれてるだけだよお」

「か、勝手に……」

「美羽ちゃん、どうも目立ちすぎちゃったからねえ……」

梨々香が向けてくる、純粋な憧憬から目を逸らすように、美羽は曖昧に微笑んで己の過去を振り返る。

GBNは魔境だといわれているが、実際は天国でもなければ地獄でもない。

良くも悪くもただのVRMMOだ。

しかし、それ故に自分の行動次第で色々と面倒を呼び込んだり、或いは幸せが転がり込んできたりと、その辺りは現実とあまり変わらないところが厄介なのだ。

そんな、珍しく少し悲しげな表情を浮かべた美羽に、梨々香は地雷を踏んでしまったことを察して、ずきり、と胸が痛む。

「……ごめ」

「ねえねえ梨々香ちゃん」

「ひゃ、な、なに……お姉ちゃん……?」

「あそこのコッペパン屋さん、美味しいから食べて帰らない?」

美羽はそれを遮るように、或いは梨々香に悲しい顔をさせてしまったことを詫びるかのように、黄色のキツチンカーが停まっている一角を指差して、にへら、と笑いながらそう提案した。

そうだ。自分の過去など、二つ名など、どうでもいい。

「……え、えっと……その……」

「美羽ちゃんはねえ、梨々香ちゃんが幸せならそれでいいんだよお」  
「……」

「だからね、これは美羽のわがまま。せつかくフォー스組んだ帰りなんだから、お祝いしよお？」

どこまでが本当で、どこまでが演技なのか。

その境界線を悟らさないように、そして崩されないように立ち回ってきた美羽の中でもそれはいつしか曖昧になって、いつも眠たげな自分が出来上がっていたのだが、それだってどうでもいい。

いつだって、美羽にとっての「本当」は、梨々香の笑顔だけでいいのだから。

「……う、うん……！」

「えへへえ、ありがとお。梨々香ちゃん、大好きだよ〜」

そんな姉の覚悟を察したのか、意を決して頷いた梨々香を、美羽はぎゅつと、ぎゅつと抱きしめる。

喜びは流れていき、楽しみは泡のように弾けて、いつだって長く残るのは怒りの痣と、全身を、心を膜のように包み込む悲しみばかりなのかもしれない。

それでも、たったひとときでも、掌に掬い上げたそれを溢してしまわないように、美羽は梨々香の腰に手を回して、ぎゅうつ、と、どこか甘えるように自分の身体を押しつけて、頬をすり寄せる。

それが、美羽の呪いなのだろう。

梨々香もまた、姉の痛みを汲み取るように、だけど傷口には触らないように、言葉なく、ぎゅつと腰に手を回して抱きしめ合う。

たったひととき、傷を舐め合う道化芝居であったとしても。

横たわっていた断絶が少しだけ埋まったような錯覚に包まれながら、二人は踵を高らかに鳴らして、既に数人が列を作っているコッペパン屋に並ぶのだった。



## 第二十三話 「初陣、アナザーテイルズ！」

フォースを結成したりリリカたちが果たして何をしていたのかといえば、それは普段と変わらなかつたといっている。

昼間は学業に励んでいるミワと、多分同様に学校に通っているであろうカエデがいない間にリリカは淡々と討伐ミッションをソロで熟すという、半ば苦行じみたことをやっているのだが、これがまた楽しいのだ。

特製のシグルブレイドをモバイルアーマー「ザムザザー」が展開した陽電子リフレクターの上から突き刺すことで誅伐を下したことで、電子音声と共にミッションクリアの通知がダイアログにポップする。

【Mission Success!】

ダーダネルス海峡での戦いを基にしたこのミッションにおいて、基本的には空中を自在に飛行するだけの推進力を持つていないAGE-1ブランシユは不利な条件を背負った上でウインダムと、そしてボスとして設定されたザムザザーと戦わなければならなかつた。

だがそこはそれ、すっかりリリカも慣れた様子で、艦船を足場として八艘飛びのように駆け巡り、跳躍することをその解決として、ミッションをクリアしてみせたのだ。

「ふう……できた、かな……」

とはいえ、リリカもCランクまで上がってくるとNPD戦がいかに高難度化しようと、対人戦とはその本質を大きく異にするものであるということとは身をもって理解している。

高度なAIを詰め込んでいるからこそ、確かに動きは格段にDランク相応のミッションよりも圧倒的に良くなっていることは間違いない。

だが、仕様なのかそうでないのかはわからないが、どのような難易度であってもNPDには明確な「隙」が設定されていると、リリカはそう推察していた。

そしてそれは紛れもない事実である。

表面上はガンプラと同じに見えても実際はパラメータとAIがそ

の肝になっている以上、理論上はチャンプより強いNPDを作り出すことが可能か不可能かで問われれば可能である、というのが実際のところなのだろう。

だが、そんなものを作り出してどうなるというのか。

非難轟々、ただ「難しさ」というだけの一点にこだわって、やたらめつたら複雑なギミックと高いパラメータを詰め込んだ作られたエンドコンテンツなど、大半のユーザーからそっぽを向かれて終わるだけだ。

だからこそ、対人戦と対NPD戦は本質的には別物でありながらと上手く導線として敷いていく、というのがGBN運営班の基本的な姿勢だった。

そして対人戦と対NPD戦に本質的な違いがあるとすれば、それは呼吸のリズムだろう。

ミッションをクリアしてロビーへと戻ってきたりリリカは額に浮かんだ汗を拭いつつ、この前のレイドバトルで大量に獲得したビルドコインで仮想のスポーツドリנקを購入し、喉へと流し込んでいく。

あの時は理不尽なデスエンカそのものであったが、アズキとの戦いは、今振り返ってみれば得るものが非常に多かったといえる。

特にあの継ぎ目のほぼ見えない、神楽舞のような剣術——あの時は無我夢中だったものの、振り返ってみればあの時自分が読んで、カウンターで天誅を下されたものの攻勢に出られたのは、その呼吸が僅かに切れる一瞬を狙ったからに他ならない。

「……奥が深いなあ、GBNって……」

リリカは舌の上に擬似的に再現されたスポーツドリנקの味が広がるその作り込みであったり、古式ゆかしい対人戦のセオリーだとかに感嘆しながら、はあ、と小さく息をつく。

よくよく考えてみれば、自分がこの電脳の海に潜っている理由は戦いに明け暮れたいとかそういう理由ではないのだが、それはそれとしてAGE—1ブランチと駆け抜ける戦場は、決して悪くないものだ。

だがそろそろ、フォースも組んだことだし、色んなことに挑戦して

みたい——リリカがそう思っていた矢先のことだった。

「ごきげんよう、リリカさん」

「……あ、えつと……ここ、こんにちは、カエデさん……」

ロビーへと再構築されていく金髪碧眼のアバター、ダイバールックに身を包んだカエデが、スカートの裾を摘んで一礼する。

その所作に淀みがない辺り、本物のお嬢様なのだろうな、と、リリカはどこか気圧されたような風情で、しかしながら確かな尊敬の念を抱く。

そういえばミッションに明け暮れていたから忘れていたものの、そろそろ放課後を迎える時間だったはずだ。

コンソールから時刻を確認して、リリカは小さく頷く。

「リリカさんはミッションからの帰りですか？」

「……は、はい……でも、やっぱり対人戦とは、違うなって……」

「それはそうですね。見たところリリカさん、呼吸の読み方に長けているでしょう。NPDはその辺りがわかりやすいから些か退屈なのではなくって？」

そこまで見抜いているカエデの慧眼にも驚嘆させられるが、リリカは確かに対NPD戦では物足りないような領域に達しつつあるのも確かだった。

一応というかなんというか、そういう人間のために作られた「クリエイトミッション」と呼ばれる、ダイバー発のコンテンツもあるのだが、流石に屈指の推奨ランク詐欺と名高い「終末を喚ぶ竜」だとか、或いは「バエル・ラプチャー」といったものを受けるにはまだまだ実力不足であるとも、リリカは先日のレイド戦で痛感している。

AGGEEー1ブランシユの全てを自分はまだ引き出せているわけではない。

そして、そんなリリカの燦りを見抜いてか、カエデはくすり、と小さく微笑みながら提言する。

「でしたら……ミワさんにも訊かなければなりません、ここらで一っ、フォース戦を受けてみるのもおすすめてすわ」

「フォース戦……」

「バトランダム・ミッションを受けるのが一番手っ取り早いですけど、あれは闇鍋ですわ。最悪『AVALON』や『BUILD DIVERS』とぶち当たるなんてことも考えられる以上、野良募集が手っ取り早いのですが——」

「なになに、リリカちゃん、カエデさん〜？ ミワを置いて内緒話ですか？」

それはよくありませんなあ、と、どこか興奮気味に長広舌をぶちまけようとしたカエデの言葉を遮る形で、ログインしてきたミワが冗談めかして微笑みながら言葉を紡ぐ。

「あ、えっと……お姉ちゃん、今、その……フォース戦を受けないか、つて話してて……」

「ほうほう、フォース戦……そういえばミワたち、フォース組んでたからねえ」

フォース戦はGBNにおける花形のようなものだ。

志を同じくする者たちが集まって、自らのガンプラが一番強いんだと、自分たちが一番うまくこのGBNを遊べるのだとプライドをぶつけ合うそれは、ライブモニターに中継されることもあって、多くのダイバーたちから注目の的となる。

「ええ、わたくしたちは『アナザーテイルズ』。不肖このカエデ・リリエ、加入して日は浅いですが、リリカさんに抱く思慕は人一倍と自負しておりますよ」

「ふむふむ……それはミワへの宣戦布告かな？」

「いいえ、仲良くやっていきましようとお近づきの印、ですわ」  
一瞬ミワとの間に剣呑な空気が漂いかけたものの、それを踏み倒すように、豪胆ながらも透き通った、美しい笑い声をあげるカエデの姿勢は純粹なもので、当人であるリリカを置き去りにしながらも、そこに確かな信頼を生み出していた。

カエデが差し伸べた手をミワは取って握手を交わしたが、リリカへの想いについては譲るつもりはない、という強い意志がその笑顔の奥には潜んでいる。

それはカエデも同じなのだろう。

せつかく握手まで交わしたのに、再びバチバチと火花が散りかねない、空気が焦げ付いたような錯覚が二人を包み込む。

とにかく喧嘩にならないければいいと、話題の張本人であるリリカはあわあわと一人で忙しなく視線を往復させていた。

「……………な、喧嘩は……………その……………ダメ、です……………」

「ええ、承知しておりますわりリリカさん。これはあくまでご挨拶ですよ」

「そうだよ、ミワとしてもカエデさんは面白いからねえ」

一応、それも事実ではあった。

リリカにとってカエデという存在は、ミワ以外でできた初めての仲間のようなものだし、それについては諸手を挙げて歓迎したいところなのだ。

ただそれはそれとして世界で一番リリカのことを大好きなのは自分である、という強烈な自負がミワの中に存在しているというだけの話で。

やんややんやと女三人寄ればなんとやら、といった風情に、ロビーで雑談に興じていた「アナザーテイルズ」であったが、その三人を見据える影があったことには、誰も気付かなかった。

「よう、そこのお三方」

どこか馴れ馴れしい、そしてプライドが高そうな男の声が、リリカたちを呼び止める。

ラグーマンのような格好をしているダイバールックの厳つさにリリカは震え、思わずミワの背中に隠れてしまいそうになるが、名義上とはいえこの「アナザーテイルズ」のリーダーは自分なのだど踏みとどまって、今にも消え入りそうな声で問い返す。

「……………な、なんでしよう……………」

「そんなに警戒しなくてもいいぜ、俺は新進気鋭のフォース『ボルケーノ』のリーダーやってるヨシキってんだが……………フォース戦がどうこうとか言ってたから、一つ先達として胸を貸そうと思ってるな」

ボルケーノ、とやらがどんなフォースなのかは知らないが、どこか恩着せがましい台詞を吐きながら、ヨシキと名乗った男性は口元に笑

みを浮かべて、ぷるぷると震えているリリカを真っ直ぐに見据える。「んー……リリカちゃんに代わってミワが訊くけど、そっちのフォーヌって何人？　そしてどうしてミワたちな訳？」

ヨシキという男はどうにも怪しい、というのがミワとカエデの、そしてリリカの共通した見解だった。

フリーバトルをロビーで申し込むこと自体は別に珍しいものではない。

現に雑談から興が乗ってバトルしようぜ、という少年漫画さながらのノリでバトルが勃発することはよくあることだし、むしろ風物詩とさえいえるものもある。

ただ、結成したばかりのフォーヌである「アナザーテイルズ」に対して、ピンポイントで狙いを定めたが如く話しかけてきて、一方的に胸を貸すだのなんだのと言われれば、勘繰るなという方が無理な話だ。

「それはヨシキに代わって私が答えるわ。一つは私たちも三人組で、見たところあなたたちも三人組。そして私たちは新進気鋭のフォーヌにして先輩だから、後輩に胸を貸してあげたいと思うのは当然でしょう？」

どこか爬虫類を思わせる笑みを口元に浮かべる、「ボルケーノ」の紅一点である女性はそんなことを語ってみせたが、「ヨシキ」共々どことなく信頼できない雰囲気漂っているのは確かなことだ。

だが、「ボルケーノ」にどんな思惑があるかは、リリカたちは知らないし、知ったことでもない。

ただ、ちょうど三対三になるという構図はちょうどいいと、それが三人の見解だった。

「それでは、後身として胸を借りさせていただきますわ。リリカさん、よろしいですわね？」

「は、はい……よろしくお願ひします、『ボルケーノ』さん……」  
「ああ、よろしくな。いいゲームにしようぜ」

試合前の握手を交わすと、「ボルケーノ」から出されてきたフリーバトル申請を受諾して、リリカたちはブリーフィングフェイズへと移行

するために、格納庫エリアへと転送されていくのだった。



実際のところ、フォース「ボルケーノ」が新進気鋭を名乗っていたのは一年前が精々であり、それ以降は中堅で燻っているのが現状ではあった。

バトルフィールドに設定された、タクラマカン砂漠に降り立つAG E-1タイタスを駆る男——ヨシキは今までの屈辱や苦い思い出を振り返りながら、そこにあつた数々の慢心と、そして今も尚己の身を蝕み続ける焦燥に想いを馳せる。

（そうだ、俺たちは……「ボルケーノ」はここで終われねえ、なんとしても中堅を脱して、あの「ビルドダイバーズ」やら「リビルドガールズ」にリベンジを果たすまでは……!）

中堅の壁、と呼ばれるものがGBNには存在し、多くのダイバーがそこを超えられないからこそ、実際に一年前は態度こそ悪くとも有望株として見られていた「ボルケーノ」の面々も、そこで燻っているのだ。

そのためには、どんな手段を用いてもダイバーポイントを稼ぐしかない。

初手からAGE-1タイタスのリミッターを解除したヨシキは、全力で「アナザーテイルズ」を叩き潰すべく、まずは「赤砂」……「緋きスナイパー」の二つ名を頂戴しているミワを無力化せんと、紅一点の女性が駆るウィングダムに指示を下す。

マルチランチャーパックに装填された核ミサイルが、砂塵の彼方に陣取っているであろう「アナザーテイルズ」を目掛けて発射されようとした、その瞬間のことだった。

『何これ、チート!? きゃあああつ!』

『な……ッ……』

「やっぱ使いやすいのはこれなんだよねえ」

核ミサイルが放たれるまでのわずか一瞬、吹き荒れる砂塵に視界を

制限されながらも、ツダの対艦ライフルをその手に携えた、ミワのフリーダムルージュがこともなげにウインダムのコックピットをぶち抜いて、テクスチャの塵へと帰せしめる。

吹き荒れる砂嵐という悪天候をカモフラージュとして利用して、初手核ミサイルからの殲滅を試みていた「ボルケーノ」であったが、何も悪天候を利用していたのは彼らだけではない。

『こいつ、砂塵に紛れて奇襲を——』

「使えるものはなんでも使う、がわたくしのモットーですわ」

機動戦士ガンダムUCに登場するキャラクター、フル・フロンタルと同じような台詞を口にして、ミワのAWACSを頼りに敵の位置を把握していたカエデは背後に回り込み、シザーソードでもう一人の、ラガーマンのようなダイバークラックに身を包んでいる男が駆つていた「ズゴックE」を両断する。

そして、カエデが一人を始末したのなら。

腐ってもCランクよりは上にいるヨシキは、奇襲の気配を察知してリミッターを解除したタイタスの、ビームラリアットによってその一撃を防ごうと試みた。

だが、結論からいえばそれは悪手だった。

対ビームコーティングが施されたシングルブレイド——奇しくもヨシキと同じAGE-1をベースとしている、ブランシユの一撃は形成したビーム・リングごとタイタスの右腕を切り飛ばし、眼前まで肉薄したその双眸に力強く光が灯る。

——呼吸が、途切れた。

絶命したという意味ではないが、リリカの察したヨシキの動揺は極めてそれに近い。

攻めあぐねたことで姿勢を崩したタイタスに、リリカの操るブランシユは全身のバーニアを噴射する変則機動で斬りかかっっていく。手足をあっという間に解体され、そしてコックピットブロックに、シングルブレイドの刃は到達しようとしている。

『バカな、ボルケーノだぞ！ 俺たちは！ それが三分足らずで——』

「……………え、えいつ……………」



こんな屈辱、と、言わんばかりに表情を歪めたヨシキには気の毒な気持ちを抱きつつも、バトルで手を抜くのは逆に失礼だ。

だからこそ、リリカは「やられる前にやる」ために、徹底して反撃のチャンスを残さずに両手両足を落として、ブランシユの装甲厚でも防ぎ切れるバルカン砲のみを残した上で、コックピットへとシグルブレイドを突き立てたのだ。

「大勝ですわね」

「うんうん、夜ご飯はカツ丼かな」

「……か、カツ丼……？」

どこか放課後の寄り合いといった感じで他愛もない言葉を交わす三人の眼中に、最早「ボルケーノ」は映っていない。

何が敗因だったかと問われれば、あの「リビルドガールズ」との戦いと同じく、狙撃にだけ気を回して、偵察機を兼ねているミワのAW ACSを侮っていたことだろう。

「Battle Ended!」

【Winner：アナザーテイルズ】

ダイアログにポップしたその通知を、リリカはどこか愛おしげに見つめて目を伏せる。

気の毒でこそあったものの勝利は勝利で、そして初陣がこれだけの大勝で飾られたのだから、その美酒を味わうのは勝者だけの特権だ。いかに悔しくとも、怒りに塗れようとも、それを責めることなどできはしない。

屈辱に臍を噛みながらも、ヨシキはただ黙って己の敗北を受け入れて。

そしてリリカは、にへらと、口元を緩ませた笑みを浮かべるのだった。

## 第二十四話 「世界は広く、大海は深く」

時折わけもなく、明日の地球がどうのこうのと誰かが歌っていたことを思い出す。

梨々香はフォース「アナザーテイルズ」の初陣にしてフォース「ボルケーノ」との戦いを完全勝利で飾った翌日、いつものように昼間の電車に乗って、お台場から程近い場所にあるガンダムベースシーサイド店を目指していた。

お台場にはガンダムベースの本店があつて、そちらではファーストELダイバーこと、特定電子生命体第一号としてこの国から認定を受けたELダイバー、「サラ」がたまに接客をしていたり、噂によればあの「BUILD DIVERS」が拠点にしていたりするらしい。

だが、梨々香としては通い慣れたシーサイドベース店に腰を落ち着きたい——と、いうよりはたださえシーサイドベース店でも客が多くて落ち着かないのに、本店ともなれば尚更だろうと、そういう理由で避けているのだ。

がたん、ごとん、と電車に揺られながら、車窓をスクロールする景色を茫洋と見つめて、梨々香は昨日の、投げ出せなかった明日の残骸について考える。

梨々香たちに敗れた「ボルケーノ」の面々とはグッドゲームと互いに言葉は交わしたものの、彼らはすっかり意気消沈した様子でロビーの雑踏に紛れて、姿を消していった。

当たり前だが、勝利があればそこには必然的に敗北もある。

むしろ勝者が敗者に同情を寄せることこそ最大の侮辱であると、頭ではわかっているのだが、どうにもすすきりしないというか後味が悪いというか、そういう思いを梨々香は抱いてしまうのだ。

アナウンスが、目的の駅へと到着したことを告げると、梨々香は釈然としないものをその胸に抱えたまま、猫背気味に肩を竦めて、人並みに紛れて歩いていく。

勝ち続けること。負けないこと。

それがいつかあの憧れのクジヨウ・キョウヤに、チャンピオンに近

づくための道であるとかわかっていても、積み重ねた勝利の果てに何かあるのか、そして勝利を積み重ねていけるのか、と考えると途端に憂鬱になってしまう。

世界は広い。

仮想も現実も問わず、手を伸ばしたつてどこにも届かなくて、何かを掴もうとしたつてその指は空を切つて。

そして、この手には何が残るのだろうか。

梨々香は、シーサイドベース店のシンボルとなっている等身大エールストライクガンダム立像を見上げて、問いかけるようにその双眸を覗き込む。

もしもガンダムが——ガンプラが、AGE—1ブランシュが喋つたら、この疑問に答えてくれるのだろうか。

いくつもの「ハテナ」に頭の中を埋め尽くされながら、梨々香はどこか遠い耳鳴りが止まないような感覚を抱えて、シーサイドベース店へと足を運ぶのだった。



「そういうことでしたら、フォースで受けられる別なミッションを受注するというのも一つの手ですわ」

例によって、ソロで高難度ミッションを踏破するという練習に明け暮れた後、ミワがログインしてくるのを待っていたリリカを出迎えたのは、姉ではなくカエデの方だった。

ロビーの隅っこで体育座りをして、この世の終わりみたいなお顔をしていたリリカを見かねたのか、カエデが事情を問いただしてきたので、リリカは包み隠さず事情を話したのだが、帰ってきたのはそんな、どこかあつけらんかんとしたような答えだった。

「……え、えっと……いいんですか……？」

「何がですか？」

「……あ、あの……カエデさんは、戦いたいんじゃないかなって、そう思ったんです……」

自分から話題を振っておいて、というのはリリカも理解していたのだが、それはそれとしてカエデはそういう「勝利」を求め続けているのではないか、というのがリリカの見解だ。

事実として、Bランクからレイド戦を経たことでAランクへと昇格したカエデは、普段はバトルロワイアルミッションや、時には魔窟や地獄、蠱毒の壺、チンパンたちのラスト・リゾートと様々な蔑称で呼ばれる、悪名高き「ハードコアデイメンション・ヴァルガ」へと単独でダイブして修行を重ねていることを、フォース加入の後に姉妹へ公言していた。

それもひとえに憧れのアイカに近づく為に、そして今まで喧嘩を売って敗れてきた相手に雪辱を果たす為に他ならないのだが、そんなカエデが「別なミッションを受ければいい」と、あっさり言ってきたことが、リリカにとっては意外だったのだ。

「確かにわたくしは戦いを求めておりますわ、ですが戦いというのは何も正面から切った張ったをするだけではございませんもの」

「それって、どういう……」

「んつとねんつとね、要するにGBNには色んなレギュレーションの戦いがあるってことだよお、リリカちゃん」

カエデに遅れてロビーへとログインしてきたミワが、勝手に続きを補完する形でリリカへと眠たげな声でそう囁く。

「ええ、ミワさんの言う通りですわ。例えば、バンデット・レース……文字通りレース競技でありながらステージの破壊から他機の撃墜までなんでもありなものですわ」

生憎今日は木曜日だから開催されておりませんが、と、カエデが付け加えたその競技は、一年前に勃発した大規模レイドバトル「アルス」戦後に、一部のダイバーたちの間で非公式に行われていたイベントが公式に引き上げられたものだ。

デイメンション・シュバルツバルト。

擬似的に、外のカレンダーとリンクすることで四季を再現したGBNにおいて、一年を通して永遠の夜に包まれたそのデイメンションにおける中心部、「ハイウインド・エリア」のメガロポリスに設けられた

巨大高速道路を舞台として行われるそのレースは、毎週水曜と土日という三日間限定で開催されている。

その分賞金が出たりトトカルチョが開かれていたり、参加する方も見る方も刺激的な体験ができるということと、密かに人気を博しているそのイベントを主催……と、いうより公式にまで格上げしたのは、何の因果か、「リビルドガールズ」に所属するELダイバー「チィ」の手管によるものらしいと、カエデは語る。

「まあ、開催されてないイベントには参加できないのですけれど」「それはそうだねえ、でもでも、バンデット・レース以外にも色々あるから、リリカちゃんがやってみたいものを受付のNPDに聞いてみたらいいと思うよ」

ミワはくあ、と小さく欠伸をしながら、リリカが良ければそれでいいといった具合に眠たげな笑顔でそう言った。

「……やってみたいこと……」

あの「ボルケーノ」に対して同情をしてしまうというよりは、勝ち負けに対して抱く、モヤモヤしたこの感覚を振り切つてしまいたいというのがリリカの本音であることは、二人との対話を経て、腑に落ちていた。

勝ち負けが絡まないイベントで、尚且つ気分転換になりそうなものがあればそれに越したことはないのだが、果たしてそんなものがあるのだろうかと半信半疑で、しかし藁にも縋るような気持ちで、リリカは受付のNPDへとその条件を指定して問いかけてみる。

「お客様の〴〵提案された条件に沿ったミッションは、こちらとなっております」

だが、ここはGBNだ。

探せば大概なんでもあると言わしめる良くも悪くも混沌の坩堝なのだから、ダメ元でリリカが指定した「フォースで受けられて」「勝ち負けが絡まない」ミッションは、いくつもNPDの手によってソートされる。

端的に括ってしまうのなら、リリカの指定した条件に当てはまるミッション群は、「探索ミッション」と呼ばれるものだった。

序盤にリリカが受けていたヤナギランの納品も、一応はこのカテゴリーに当てはまるものだし、なんならダイヤモンドを散歩して、指定のシンボルをスクリーンショットに収めたものを提示する、というもつとゆるい難易度のもも存在している。

その中でリリカが目を引かれたのは、ミッション「眠り姫の財宝」と呼ばれるものだった。

「えっと、この『眠り姫の財宝』……って……?」

「宝探しミッションですわね」

NPDが答えるよりも早く、カエデがリリカの問いに答える。

宝探しミッション。

それは大体制限時間内に特定のエリアを探索して、置かれているコンテナに入っている報酬の獲得を目指すミッションのだが、最大の特徴としては複数のフォースで受注できるものの、戦闘行為の一切が基本的には禁止されているため、宝の奪い合いが起きないことだろう。

あとは単純に、箱を開けた時点で中身の抽選がランダムで行われる為、誰がどの箱を開けても運以外に差を分ける要素がないことも、穏やかに拍車をかけているのだ。

「まあまあ、中身には当たり外れがあるから、酷い時はミミックとして仕掛けられたエネミーと戦闘になつたりするんだけどねえ」

「な、なるほど……」

宝探し。

別にリリカは銭ゲバでもなんでもないものの、その三文字にはダイバーとして心撥られる不思議な魔力があった。

特に、フリーバーテキストが中々秀逸であり、「ミノフスキードライブ実験艦として作られたマザー・バンガードの二番艦、『エオス・ニユクス号』が地球圏付近で撃墜され沈没、ダイバーたちは宇宙海賊クロスボーン・バンガードの一員として、物資の回収に当たれ」という、ガンダムっぽい設定が付けられているのも、ファンからすればポイントが高いのだろう。

沈没船からの宝探しにそれだけの設定を付与することでガンダム

関係ないじゃん、というツツコミに対応しつつ報酬とそしてギスギスしない環境を作る運営の努力に舌を巻きつつ、リリカはそのミッションを受注しようと、コンソールのボタンに手を伸ばしていた。

「え、えっと……これ、受けてもいい……かな……」

「勿論だよお、リリカちゃんが受けたいミッションがミワの受けたいミッションだからね」

「わたくしも異存ありませんわ。さあ参りましょうー!」

——お金はいくら手元にあっても損はいたしませんことよ。

レイド戦で荒稼ぎしたにも関わらず、どこか庶民じみた言葉を口にして、カエデは逡巡していたリリカの背中をそつと押す。

「ありがとうございます……それじゃあ、その……このミッション、受注します……」

「フォース『アナザーテイルズ』からのミッション受注を承認いたしました。お客様の武運をお祈りしております」

ペこりと折り目正しくお辞儀をするNPDに見送られて、リリカたち「アナザーテイルズ」は、宝探しミッションに赴くべく、格納庫エリアへと転送されていくのだった。



水中は宇宙と微妙に似ているが、水圧の分だけ機体の制御が難しくなる。

慣れない水中機動に四苦八苦しながらも、リリカは「エオス・ニクス号」が沈んだことにされている海域を探索し、コンテナを片つ端から開け放っていた。

大体の中身は少額のビルドコインとか、ガンダムベースに備えられている高速射出整形機で作ることができるパーツデータとかなのだが、稀に大金だとか激レアアイテムが眠っているという都合上、リリカたちの他にもこのミッションを同時受注するダイバーは数多い。

『んぎゃー!!! 畜生、ミミックかよ! チイはステゴロの戦闘に向いてないってんだろ!!!』

噂をすればなんとやら、とは先人の言葉だがその通り、バンデット・レースを公式に引き上げた立役者にして「会いに行けるELダイバー」としてガンダムベースシーサイドベース店で、猫を何重にも被った接客をしていることもあるELダイバー、チイもこのミツシヨンに参加し、そして見事にミミック役として設定された「ガンダムF90M」と戦わされていた。

「……ミミックを引くと、ああなるんだ……」

沈んでいたコンテナを中心に半球のようなバトルフィールドが形成され、そこでは武装の使用が解禁される、というのがこの宝探しミツシヨンにおける特殊ルールだった。

「でもでも、倒せばいい報酬が貰えたりするんだよ〜?」

「そうですね、普通の宝箱からレア報酬を手に入れるよりはミミックと戦って勝った方が手に入りやすいとか」

それにしてもしけてやがりますわね、と、水中であるにも関わらず優雅にウイングゼロヌーベルを操り、フォースメンバーの中で一番宝箱を回収していたカエデが、手元に入った数百ビルドコインや使い道のなさそうなパーツデータとか、そんな報酬に嘆息する。

とはいえそれはリリカもミワも似たようなものだった。

リリカに至っては今まで引いた中で当たりと呼べるものが1000BCぐらいで、残りは端金としかいいようのないものだったし、ミワは一応レア枠に分類される「高速リペアキット」——要は復活アイテムを引き当てていたのだが、使う機会がそうそうない上に売却不能という点でなんとも残念な感じが拭えないものが最高の報酬だった。

『だーもうド畜生、チイ一人で最強クラスのレアエネミーに勝てるわきゃねーだろー！ てかそこで見てるねーちゃんたちも見世物じゃねーんだぞ、終いにや金取んぞー!』

狭いバトルフィールドの中を縦横無尽に駆け回り、F90Mの弾切れを待とうとしていた、SDCS陸戦型ガンダムをベースに改造を施した仮想の躯体、「ガンダムグラスランナー」を慌ただしく走り回らせながら、チイは口角泡を飛ばす勢いで捲し立てる。



「……え、えつと……ごめんなさい、頑張ってください……」

「助けたくても助けられないしねえ」

「貴女の健闘をお祈りしておりますわ、チィ」

『ちくしよーっ！ チィが何したってんだあああつ！』

七転八倒するチィを横目に、「アナザーテイルズ」の面々は残るコンテナを開封する作業に戻っていく。

ミミックの中でも最強クラスに当たるF90Mの思考ルーチンは、Sランクかそれ以上に設定されているらしい。

だが、その分引き当てて倒した時の報酬も破格なものとなっている。

リリカはそのことを知ってか知らずか、海中に半ば余っているような形で沈み込んでいたコンテナを開いた、その時だった。

【ENCOUNT！ 敵機出現！】

人を呪わば穴二つ、とはまた違うのだろうか、リリカの引き当てたそれもミミック入りのコンテナであり、形成されたバトルフィールドはギリギリ、ミワとカエデを巻き込まず、リリカ一人を隔離する。

そして、コンテナの中からツインアイを黄色に煌めかせて現れたのは、先程チィが戦っていたのと同じガンダムF90Mだった。

「あつ……」

「リリカちゃん!？」

「リリカさん!」

紫色に機体がペイントされているため、厳密には2号機なのだが、要は最悪なエンカウントを引き当ててしまったことに違いはない。

そういえば己のエンカウント運が腐っている部類に入ること忘れていた。

リリカはバトルフィールドへと心配げに手を伸ばしたミワとカエデを横目に、じわり、と眦に諦めと悲しみと開き直りその他諸々が入り混じった涙を滲ませる。

「えつと、その……うん……ごめんなさい……」

ハイドロジェットで、自在に海中を動き回るF90Mに対して、リリカが持てる有効打は極めて少ない。

ドズライフルは減衰率こそ普通のビームライフルより少なく設定されているもののゼロ距離でなければ無意味で、ビームサーベルも論外だ。

可能性があるとすれば、デストロイガンダムにぶちかましたように、シングルブレードによるカウンターを成立させることなのだが——宇宙空間と似ていながらも、水圧という独自の要素に不慣れで機体の姿勢を維持するので手一杯なりリカに、容赦なくF90Mは、Sランク相応の思考ルーチンをもって襲い掛かってくる。

そして、AIが上位クラスに設定されているなら、その戦い方は勝ち筋を押し付けるのではなく、負け筋を潰す傾向が強い。

諦めずにシングルブレードを抜き放ったAGE-1ブランシユの右腕に、F90Mは容赦なく六連装アローシューターを撃ち込んで、関節部を破壊する。

——あつ、これ無理なやつだ。

チイの気持ちを理解すると同時に、リリカの脳裏にそんな言葉がはたと零れ落ちる。

確かにNPDであれば、対策を積んでいれば何とかなるようには設定されているのだが、ほとんど初見に近い水中戦で格上を狩り取れるほど地形条件というのは甘いものではない。

そして、程なくしてリリカの機体は爆散し、1000BCとあとちよつとという端金を報酬に、はじめての宝探しミッションは終わりを告げるのだった。

## 第二十五話 「グランダイブ・チャレンジャー！」

負けはしたけれど、楽しかった。

リリカの気持ちを一言で表すのなら、そういうことに尽きる。

確かにあのミミックであるF90Mには、為す術もなくやられたかもしれない。

その代わり、次遭遇した時はどうやって倒そうかだとか、次はもつといい報酬を引いてみたいだとか、そういう前向きな意欲が全身を満たしていくのを、帰還したりリリカは感じていた。

「おっとおっと、その様子だとなんだか吹っ切れたみたいだね、リリカちゃん？」

その後、制限時間いっぱいまでコンテナを開け続けていたものの、同じように大した報酬を得られなかったミワが、どこか迷いが晴れたかのように、光を取り戻したりリリカの瞳を覗き込んで問いかける。

「えっと、うん……次が、あるんだなって……そう思ったの……」  
負けたらそれで終わりだと、心のどこかでは思い込んでいたのだろう。

だが、何万回挑戦して倒せないほど強大な敵や、聳え立つ壁が立ちはだかったとしても、何度でも「もう一回」とチャレンジできるのがGBNなのだ。

そういう意味では、ランキングといった要素にのめり込むあまりそこに囚われてしまっている「ボルケーノ」の面々は、軽々しくいえることではないが、不幸であるといえるのかもしれない。

無論本人たちが望んでその敗北の屈辱を受け入れてでも先に進むうとしているのなら、その言葉は最大の侮辱になる。

だからこそ、リリカは口には出さず、己の中にふつつつと湧き上がってくる感慨だけを意識してそこに浸るかのように、珍しく目を輝かせて、ミワの問いに、それだけ答えたのだ。

「然り然りだよお、リリカちゃん。ここは何回だってやり直せる……そういう場所だからねえ」

「ええ、ですからわたくしもいずれはあの『MS切りの悪魔』や『FO

『Eさん』へのリベンジマッチを試みているのですわ」

穏やかに頷くミワの傍で、ダイバールックとして設定しているブランドを優雅に掻き上げながら、カエデはしれっととんでもないことを発言する。

だが、カエデにとって目標というのは高ければ高いほどいいものなのだろう。

今はまだ、というよりこれからもしリリカはアズキや、レイドバトルの第一ウェーブで敵の八割近くを壊滅させたあの「キョウスケ」というダイバーに勝てる未来が来るのかどうかわからないが、諦めずにやっていたら、やがていつかは、と、臍気な希望ぐらいは見えてきた。それはまだ小さく、そして形を成していない。

だとしても、リリカにとって迷いであり心の傷でもあった、「一度の失敗も許されない」という一種の強迫観念は、あの宝探しミッションを通じて少しずつ、少しずつ氷解しかけているのだった。



宝探しミッションを経てリアルへと帰還した梨々香は、美羽と一緒に家へ帰るなり、身支度を整えるべく風呂に入っ、いつしかと同じように考えを巡らせていた。

あの後 Wiki だとかスレッドだとかで調べてみたのだが、水中戦というのはフォース戦の舞台としては比較的不人気な部類に入らしく、いわゆる環境構築とされている推奨ビルドも、宇宙空中地上と、汎用的に扱えるものが紹介されてこそいたが、そこに水中戦は考慮されていないものがほとんどだ。

ただ、それではなんとなく勿体ない——と、いうよりは、なんだか知らない子のように扱われている水中の境遇が自分のそれと重なり合っ見えるというのと、単純に雪辱戦を果たしたいのもあつて梨々香は、次に戦う場があるならそれは水中にしようと思つていたのである。

ぶかぶかと湯船に浮かんだ豊かな双丘にお湯を掬ってはかけると

いう無為な行為を繰り返しながら、梨々香はぼんやりと水中戦についてのヴィジョンを頭の中に描いていた。

AGE―Iブランシュを、梨々香は戦う場所を選ばない汎用機として作り上げている。

だからこそあの水圧の独特な感じに慣れれば、そして水中でも通用するだけの武装を持たせれば、水陸両用機という専門家には及ばずとも、それなりの活躍は期待できるはずなのだ。

またF90Mと戦ってくれと言われたら困ってしまうのだが、それはそれとしていつかあのレアエネミーを討ち果たしてレアな報酬――はともかく、負けたままでは終わらないという気持ちは、梨々香の中で確かに燻っていた。

「梨々香ちゃん、いる〜？ 入るよお」  
「っ!？」

完全に思考の沼へと沈み込んでいたこともあって、脱衣所から聞こえてきたその声は梨々香の脳天を内側から殴りつけるような衝撃を持って、耳朵を震わせていた。

「けほっ、こほっ……!？」

「おお、おお……なんだかタイミング悪かったみたいだねえ」

ぶくぶくと半分だけ顔を湯船に沈めて泡を吐き出していた気管にお湯が入り込んで盛大にむせ返った梨々香に、いつもと変わらず眠たげな表情を浮かべてそんなことを宣うと、一糸もまとうことのない、生まれたままの姿の姉が浴室へとエントリーしてくる。

なんでお姉ちゃんが、と、訊きたくてもむせ返る気管がそれを許してくれない。

ただ、美羽にも美羽の言い分があつて、妹がいることがわかつている風呂に入ってきたことは確かだった。

梨々香に友達と呼べる存在が出来たことは確かに喜ばしいものだ。だが、それはそれとしてここ最近梨々香ニウムが補充できていない。シスコンとしてそれは重篤なインシデントであり、今すぐ梨々香と触れ合いたいという気持ちはカエデと火花を散らす内に増幅されて、美羽の脳細胞を桃色に染め上げてしまったのである。

身体と髪を丁寧に洗っている姉を横目で眺めながら、梨々香は再びぶくぶくと顔を半分だけ湯船に沈めて泡を吐き出していた。

父親に似た癖っ毛でこそあるものの、天然のウエーブがかかったセミロングの髪は鼻眉目を抜きにしても綺麗だし、プロポーシヨンだつてモデルだといわれれば信じるぐらい、美羽は抜群に整っている。

特に腰周りの引き締まった感じは、体育の授業だとかで嗜む程度であるとはいえ運動を欠かしていない証だろう。

対して、ちよつと余分なお肉が最近つき始めてきた自身の腰周りやら脚周りを比較して、梨々香は暗澹とした気分になる。

「……はー、外が蒸し暑いから、シャワー浴びるとさっぱりするねえ」「……う、うん……その……私、お風呂出よっか?」

「それはダメ」  
「……う……ど、どうして……」

「美羽お姉ちゃんは梨々香ちゃん成分に飢えてるからです。それはそれとしてまあ、久しぶりに姉妹水入らず、ってやつだからね」

どこまでが本心で、どこまでが道化芝居なのか、美羽の態度にはつかみどころがない。

ただ、真剣な口調で梨々香ちゃん成分の欠如がどうのと言っていた辺りは、梨々香でもわかるくらい「本気」を感じさせた。

そんな具合にどこか据わった目で、有無を言わさずすらりと伸びた脚から美羽は浴槽にその身を浸してゆく。

狭い浴槽に身を縮めるようにして二人の姉妹が収まる様は、入浴というよりは洗濯機に詰められているような感じで窮屈だったが、それでもどこか、感じたのがいつ以来かわからない不思議な温もりは、梨々香にとつて「嫌」ではなかった。

消えない傷。癒えることのない痛み。  
それは梨々香も、美羽も、互いに分かっていた。

常に比べられてきたからこそ梨々香は自罰的な性格になって、美羽としてはただ普通に生きているつもりなのに、梨々香との間に開いた差が、大好きな妹を抱きしめることさえ許してくれなくなるほどの断絶を生み出してしまう。

だからこそ、GBNには感謝してもしきれない。

ぎゅっと、互いの身体を寄り合わせて、美羽と梨々香は互いの傷口を舐め合うように、しばし言葉なく、湯船に浸かっていた。

「……えっと、お姉ちゃん」

「なになに、梨々香ちゃん？」

「……その……次のミッション、す、水中戦……やってみたくないって……」

梨々香の薄く、形の良い唇から紡ぎ出された言葉に、美羽は一瞬目を丸くしたものの、すぐに笑顔に戻って、タオルに覆われた髪の毛の代わりに妹の頬をそっと撫でる。

梨々香も随分立派に、そして前を向けるようになった。

部屋に閉じこもってしまったと聞いた時は気が気でなかったし、学業も手がつかなければ、友人にカラオケに誘われても断っていたり一日中上の空だったりしたものの、気付けば梨々香はGBNというきっかけこそあれど、自分の足で立ち上がって歩き始めている。

「……いいよお。美羽のやりたいミッションは、梨々香ちゃんのやりたいミッションだからねえ」

そうだ。自分がGBNに残る理由があるとするなら、それは梨々香のために他ならない。

口元を綻ばせながら美羽は梨々香の願いを肯定して、脳裏に浮かんだ一つの選択肢を提示する。

「水中戦水中戦……なら、『グランダイブ・チャレンジ』とかどうかな〜?」

「ぐ、グランダイブ……?」

「然り然り、水中戦が大好きな人が作ったクリエイティブミッションだよお」

グランダイブ・チャレンジ。

それはかのシークレットミッション、「エルドラ」関連のクリアを果たしたもう一つのビルドダイバーズこと「BUILD DIVER S」もお世話になったとされる水中戦の登竜門であり、「マイヨール」というダイバーが作り上げたクリエイティブミッションのことだ。

ルールはシンプルで、水深五百メートルもある特注プールの底に沈んでいる「ハロ」を手にして地上へと再浮上したなら挑戦者の勝利で、逆に撃墜されれば挑戦者の敗北、というものとなっているのだが、これがまた曲者なのである。

水中戦に長けた、百戦錬磨のダイバーの妨害を掻い潜りながら、という前提は、想像しているよりも遙かに厳しい。

一躍時の人となった「ヒロト」は何か奇策でもってその戦いを制したらしいのだが、梨々香も美羽も、今のところ受けるとして何か策があるかと問われれば首を横に振らざるを得ない段階なのである。

だがそれは、逆にいえば、これから考えればいい、ということにも違いない。

「うん、受けてみる……ありがとう、お姉ちゃん……えへへ」

「うむむむ、梨々香ちゃんの役に立てたみたいで美羽も嬉しいよお」

狭い浴槽の中で姉妹はいつ以来かわからない、一糸纏わぬ姿での抱擁をきつく結ぶ。

小さい頃はいつだって一緒に、いつだってこんなふうに抱き合ったり、手を繋いだりしていたのに、いつからそれができなくなったのだろうか。

梨々香の心でひび割れ続けている傷がぴしり、と軋みを立てる。

それはきつと一生消えないし、癒えないのかもしれない。

それでも――

その先からは恥ずかしくなって、梨々香は思考を遮断するように、ただ何も考えずに、徐々に、直に感じる姉の温もりに縋り付くのだった。



翌日、メッセーリアアプリを通じて連絡したカエデからも承諾を得たことで、グランダイブ・チャレンジに向けて梨々香が用意したものはシンプルだった。

ガンダムベースシーサイド店の制作ブース、その一角に陣取った



梨々香は早速、前日に購入して、ある程度の工作を済ませていた「HGガンダムAGE-1 タイタス」の手足を、AGE-1ブランシユへとゲイジングしていく。

ガンダムベースシーサイド店の製作ブースは、平日の昼間ということもあり、客もほとんどいかなかったため、梨々香は緊張もせず、悠々とその工作を進めることができた。

水中戦に当たって梨々香が考えたプランは二つあった。

一つは、AGE-1ブランシユの性能そのままに手持ちの武器をバズーカやマシンガンといった実弾類に変えること。

その利点は製作難易度の低さだろう。

武器さえ作り込んでしまえば、あとはどうとでもなるとまでは言わないものの、持ち替えるだけという手軽さは大きな利点だ。

だが、あの宝探しミッションのリプレイを恥ずかしい気持ちを抑えて見返せば、AGE-1ブランシユが敗北を喫したのは梨々香が水中戦に慣れていないこともさながら、ブランシユの手足のバランスではそもそも水中におけるAMBACが難しい、ということが大きいように見えたのである。

故にこそそのプランB。財布から削れたお金は今回は最小限で済んだものの、それはそれとして手痛いことには変わり無いが、梨々香はそれ以上に、期待に胸を高鳴らせて、タイタスのパーツを改造していく。

「おお、今日も来てたんだね、梨々香ちゃん……」

「れ、零さん……こんには……」

「それ、光波推進システム？ だとしたら……よくできてる」

以前にシグルブレイドを作った時に色々と教えてもらったことで、すっかり頼れる先輩としてのポジションに収まった零は、梨々香が改造を施しているタイタスのパーツを一瞥するなりその正体を見抜いて称賛の言葉を送る。

実際、零が言う通り、梨々香が目をつけたのはヴェイガン系の推進システムである光波推進システムであり、着想を得たのは出番こそ短かったものの印象に残った「ウロツゾ」からだった。

タイタスに搭載されている磁気穿孔システムを改造して推進器とすること及び、手足の換装により水中でのAMBACを安定させ、持ち手の類は通常のを流用することで武装類は別途水中戦に対応したものを用意する。

それこそが梨々香の用意したプランBだった。

今回は製作ブースで借りられる3Dプリンターから、この前の宝探しミッションで獲得していたタイタスの前腕パーツをクリアレジンによって出力して、それに通常のパーツを被せたり、あとは本来ビームスパイクが出る膝の部分にサブマリンユニットを取り付けて、と、やることが多い改造だが、梨々香は慌てることなく淡々と一つ一つをこなしていく。

零の目から見ても、梨々香のビルダーとしての腕前は、着実に上達しているとわかった。

ヤスリの掛け方から何から何まで——そして指に巻かれている絆創膏はきつとデザインナイフを滑らせてしまった、一種の勲章だ。

「それだけできるなら……うん、何をしようとしてるかはわからないけど、きつとできるよ」

零にとつて、その一心不乱にパーツを改造して自分だけのガンプラを組み上げようとする姿は己にも重なるものがあつたし、なによりも

意図的に記憶を遮断して、零はぎこちなさを残しながらも着実に思い描いた形へとAGE—1ブランシュを改造していく梨々香の瞳をそつと覗き込む。

痛み。嘆き。悔やみ。  
抱えてきたからこそわかる、そんな小さくも大きく、重い個人だけの問題。

何のために涙を流してきたのか。そして何のために、諦めたり、投げ出したりしてきたのか。

その答えは人によって様々だが、答えなければいけないのは常に自分だけだ。

最終解答を終わらせたかどうかはまだ零にも——そして、梨々香に

もわからない。

だが、二人とも時が未来に進んでいくのに乗り遅れないように、必死にしがみついて、足を動かしているのもまた確かだった。

「……え、えつと……その……」

「ん、何……?」

「あ、えつと、ううん、今日も零さんは綺麗だな、つて……そう思っただけ、です……」

「ふへっ」

相変わらず距離感が不安定だからこそ飛び出てくる直球な褒め言葉に顔を赤らめながら、零は自分で言ったことなのに頬を桜色に染めている梨々香を見据えて、引きつった、だけど気まずさから来るものではない笑みを浮かべる。

きつとこの空の下で、いつも、どこかで何かが繋がりが合っている。

それは些細で、小さくて、見落としてしまうようなものなのかもしれない。

零は工具箱を取り出して、新たなる「ジャバウオツクの怪物」をアップデートすべく無言で表面処理をしながら、そして梨々香は「グラブ・チャレンジ」に向けて愛機を水中戦仕様に調整するためにヤスリをかける。

そこに言葉はなかった。それでもただ、そんな小さな——ひとひらの繋がりが生まれていたことに、違いはなかったのだ。

## 第二十六話 「水底五百米（メートル）」

グランダイブ・チャレンジ。

それは数多のダイバーたちが不得手とするが故に、その魅力を知ってもらおうと、フォース「グラナダ・ブルー」が主催して作り上げたクリエイトミッションなのだが、彼らの水中という環境への愛ゆえに、その挑戦へのハードルは極めて高いものとなってしまっていた。

基本的な合わせ目処理といった工作もさながら、五百メートルという水底に潜航するだけの強度と推進力、そしてそこから離脱する帰りのことまで考えてのエネルギー配分を、戦場の中で求められる。

だからこそ、避けて通るダイバーが多い自身ら渾身の作であるクリエイトミッションを受けにきたダイバーたちに、「グラナダ・ブルー」を率いる男、マイヨールは極めて親切だった。

「ようこそ若人たちよ！ このグランダイブ・チャレンジを受けてくれるとはな、盛大に歓迎しよう！」

豪快な笑い声を上げる壮年の男性——マイヨールの威圧感に気圧されながらも、リリカはフォース「アナザーテイルズ」の代表として彼に歩み寄り、差し伸べられた手を取る。

ごつごつと骨張った感触と力強い筋肉の密度が感じられるその指先は、仮想世界であったとしても忠実に、リリカに自身のそれとの違いを感じさせた。

きつとリアルでも潜水をやっていたりするのだろう。

「あ、ありがとうございます……私たち、その……『アナザーテイルズ』です……わ、私は……リリカ。リリカです……」

「ミワはミワだよお、よろしくね〜」

「同じく『アナザーテイルズ』のカエデ・リーリエ。今日は存分に胸をお借りする気持ちで挑ませていただきませわ、マイヨール卿」

くあ、と小さな欠伸混じりにミワが名乗りを済ませたのとは対照的に、カエデはスカート裾を掴んで優雅に一礼する。

おどおどと言葉をつまらせながらも自己紹介を済ませたりリリカたちに対してマイヨールが抱く印象は、決して悪いものではなかった。

むしろ、この水中戦というGBNでは比較的人気の薄いミッションに若者たちが挑みかかってくれることこそが、マイヨールにとつては何よりの喜びであり、その記憶はいつしか戦った「BUILD DiVERS」とオーバーラップする。

「うむ、気合い十分、といった風情だな。我々としても極めて喜ばしい。ところで『アナザーテイルズ』諸君。グランダイブ・チャレンジのルールは把握しているかな？」

「くあ……うむうむ、把握してますよ、確か水深五百メートルの地点にあるハ口を持ち帰ればいいんでしたよねえ」

「その通りだ、ミワくん！　だが、我々は容赦なくガーディアンとして立ちほだからせてもらおう。諸君らが水中戦を堪能できることを心より願っているぞ！」

上機嫌なマイヨール卿の背中を見送りながら、リリカは考える。

あの時、ガンダムベースで作った「秘策」とも言える新たなウエアであったが、それは確かに水中戦に対応したかもしれないが、汎用性という点では大きく従来のAGE―Iブランシユから劣つたものとなっていた。

一応、グランダイブ・チャレンジを受けると聞いてミワも急増でハープーン・ライフルを拵えたり、カエデもツインバスターライフルは水中で使えないから、という理由でガンダムナタクが持っているビームトライデントを実体刃に置き換えたものを装備している。

それでも、勝てるかどうかは微妙なところだ。

怖気づく自分の背中を蹴飛ばすように、リリカは俯いていた顔を上げれば、そこには笑顔で佇んでいる――水着姿にダイバールックを変えたミワとカエデの姿があった。

「み、水着……？」

「然り然り、こういうのは気分だよおりリカちゃん」

「ええ、ミワさんの仰る通りですわ。負ければ悔しいかもしれませんがそれだけ、そしてわたくしたちは負けるつもりは毛頭ありません」とよ

赤いビキニタイプの水着に着替えた姉と、エメラルドグリーン基調

としたそれにパレオを巻き付けることで、優雅さと気品を醸し出すカエデ。それぞれの機体色に合わせたコーデなのだろう。

リリカもそこは着替えるべきなのだろうかと逡巡するが、幸いなことにチャレンジまでの時間にはまだ余裕があった。

フォースネストも兼ねているリゾートホテルのフロントに駆け込むと、リリカはミワとカエデに合わせて、AGEー1ブランシュをイメージした白いビキニにパレオを巻き付け。更に上からパーカーを羽織るといふ、水辺にしては重装備で、プールサイドへと帰還する。

「……お、お待たせしました……ど、どうかな、お姉ちゃん、カエデさん……」

「ぐっどぐっどだよリリカちゃん、欲を言えばパーカーは羽織らないほうがミワの好みかなあ」

「わたくしもそれには同意いたしますが、あまり肌を出すというのも悩ましいことなのでしょう。ここはリリカさんの意思を尊重すべきですわ」

「それもまた然りだねえ」

自身の水着をめぐつてばちばちと火花を散らしているミワとカエデにリリカが困惑している間にも、時間は無情に過ぎ去っていき、チャレンジ開始のホイッスルが鳴り響く。

ガンプラであれば準備運動は必要ないだろう。

リリカたちはそれぞれ愛機のコックピットに乗り込むと、五百メートルの底に沈んだ栄光という宝をその手にすべく、グランダイブ・チャレンジに挑みかかる。

「り、リリカ……AGEー1ブランシュで、頑張ります……!」

「くあ……ミワはフリーダムルージュで行くよお」

「カエデ・リーリエ。ウイングゼロヌーベルで推して参りますわ!」  
定番の名乗りを済ませて、三人は勢いよくガーディアンの待ち受けるグランダイブ・プールに、機体を潜航させていく。

ミワのフリーダムルージュはウイングユニットをAWACSディーンのものに換装していることが大きな特徴だ。

だが、今回背負っているものは早期警戒用のレーダーではなく、水

中戦に対応したアクティブソナーだ。

百メートル、二百メートルと沈み込んでいくうちに、汎用機としての限界なのか、機体に微小なダメージが走っていることにカエデは眉を潜めるが、こんなところで泣き言を言っている場合ではない。

「ミワさん、どうですか?」

「ソナーに感あり……そろそろ、仕掛けてくるねえ」

アクティブソナーが感知した、「グラナダ・ブルー」のメンバーは水深三百メートルに差し掛かろうとしていた「アナザーテイルズ」を迎え撃つべく、宣戦布告の合図の代わりにロケット弾を撃ち込む。

「来ましたわ! ……ここはわたくしとミワさんで引き受けますわ、リリカさんはその間に潜航を!」

「……は、はい……!」

『ほう、少しはできるようだな! ……だが……そう簡単にことが運ぶかな!』

接敵してきた機体はいずれも、色こそ違えどジオン公国軍の水陸両用モビルスーツ、「アツガイ」であることには変わりなかった。

だがそれは、この水中という環境において取りも直さず汎用機であるフリーダムルージュと、そして推進力に偏りを持っているウイングゼロヌーベルよりも運動性と機動性に優れている。

ロケット弾を回避し、潜航を続けるリリカの「ガンダムAGE-1 ブランシュ・ティターニア」を支援すべく、カエデのウイングゼロヌーベルが三機のアツガイから注意を引くようにトライデントを振るう。

「わかっちゃいましたが……動きが重いですわね……!」

『そうだと! ……それこそが宇宙と似て異なる水中の特性!』

トライデントによる一撃を回避したアツガイがカエデのウイングゼロヌーベルへと迫るアツガイのアイアン・ネイルを、水中においてもその偏った推進力を活かした身のこなしでいなしつつ、カエデは展開したマシンキャノンを掃射する。

だが、地上ならいざ知らずここは水中だ。

水圧による減速は実弾にも作用し、また、流線型の装甲が弾丸を弾き返すことでカエデの反撃は無力化される。

だが――

攻撃を当てるばかりが前衛ではない。

背後から急襲をかけてくるアツガイを一瞥し、カエデは不敵な笑みをその口元に湛える。

『む、まさか……!?』

「まさかまさか、そのまさかだよお！」

この戦いにおいてカエデは自身の役割をアタッカーではなく、ひたすらに敵からの注意と攻撃を引きつける、タンク役だと規定していた。

アツガイ三機の弾幕砲火を掻い潜りつつ、ポジションについたミワがハーブーン・ガンを狙いにブレなく撃ち放つ。

放たれた銚は確かに一機のアツガイ、その土手っ腹をぶち抜いて爆散せしめていた。

『ははは、中々やりおるわ!』

「お褒めの言葉、ありがとうねえ。でも……リリカちゃん以外から褒められても、ミワは別に嬉しくもなんともないよお！」

ハーブーン・ガンは確かに水中戦では強力な武装だ。

だが、足を止めて撃たなければならぬ都合上、遮蔽物もなく、下からの攻撃も警戒しなければならぬこのバトルフィールドにおいて、機動性を一時でも損なえば、それはどうなるか。

頭部バルカンとロケット砲による攻撃が、水圧に絡めとられたフリーダムルージュへと直撃する。

「うう……っ……!」

「ミワさん!」

フェイズシフト装甲の効果によって直撃しても致命傷は免れていたものの、ミワはフィードバックされる擬似的な衝撃と、そして崩れた姿勢の立て直しに苦闘するが、その隙を見逃すものかとばかりに、二機のアツガイはカエデのウイングゼロヌーベルを置き去りにして、アクティブソナーを持つミワの撃墜を試みた。

しかしカエデもそれを黙って見逃すほど益暗ではない。

手にしていたトライデントを、二機のアツガイが上下からの挟撃を



試みていたその中間点、ミワの足元すれすれのところに放り投げて牽制を繰り出すと、バックパックスの右側にマウントしていたシザーソードをその手にとつて突貫していく。

ウイングゼロヌーベルは、かつてGPDの世界で名を馳せたファイターへのリスペクトを以てカエデが作り上げた努力の結晶だ。

あえて偏らせた推進器の配置は確かに機体制御を難しくしているかもしれない。

だが、その癖を全て把握するまで乗り込んだことで、ウイングゼロヌーベルは独自の強みを遺憾なく発揮することができるようになっていた。

「ミワさんは……やらせませんことよー！」

『なんとっ！』

全身を独楽のように回転させて、カエデはアッガイの一機へと、不利な条件である水中であるにも関わらず果敢に斬りかかっていたのだ。



水深四百メートルを超えて、五百メートル地点。

突貫工事であったとしても零からの丁寧なアドバイスを受けたことで最低限の作り込みが施された、リリカのAGEー1ブランシュティーターニアは、関節部を軋ませることもなく水底へと到達していた。

厄介なことに、五百メートル地点の水深にばら撒かれている球状の物体は、クリア条件である「ハロ」だけではない。

ハズレのザクレロボールが大量に散らばっている中からそれを見つけてさねばいけないのだ。

だが、一つ一つ吟味をしている暇などない。

リリカは消去法で「ザクレロボールではないもの」を選び取るべく意識を集中させて、ザクレロの特徴である顔がプリントされているボールを思考の外へと追いやって、端っこの方にぽつりと佇んでいた

「ハロ」を掴み上げる。

まだマイヨールが姿を見せていないことは気がかりだが、とにかくここからは水上まで一気に駆け上がり、ハロを持ち帰れば「アナザーテイルズ」の勝利は確定することになる——のだが。

「……機体が重い……思った通り……」

水深五百メートルという水圧が、推進剤だけで上昇しようと試みるAGE―1ブランチユティターニアを蝕むが、むしろこれは想定通りだ。

リリカは武装スロットから新たに増設されたシステムの解放を選択し、ハイドロジェットが搭載されたサブマリンユニットに、磁気穿孔システムから置き換える形で搭載した光波推進装置を起動させて、一気に五百メートル地点から駆け上がっていく。

AGE―1ブランチユティターニアに組み込んだタイトスのパーツは腕と脚部だけだが、特に腕部をクリアレジンに置き換えたことで、搭載した光波推進システムは並のヴェイガン機に匹敵するほどの高い効果と、水中という過酷な環境においても宇宙と同様の感覚で戦えるようにいいアシストをしてかれている。

アクティブソナーを持つミワと離れてしまったことで、上がどうなっているかはわからない。

だが、この戦いでリリカに求められている役割はフィニッシャーだ。

時には味方を見捨ててでも生還を試みる。

だからこそ——AGE―1ブランチユティターニアは、腰のシングルブレイド以外に一切の装備を持たずにグランダイブ・チャレンジに挑んでいたのだが。

『懐かしいな、諸君の戦術……かの「ビルドダイバーズ」を思い出す！』

水深四百メートル地点に、マイヨールの声が響く。

ハロを手にしたことで油断をしているダイバーを狩り取るべく、水中迷彩が施された、前後左右が対称という独特な形をしている水陸両用モバイルスーツ、ゾックを自分好みにカスタマイズした「ゾック・マイヨール」は、光波推進システムを搭載したAGE―1ブランチユ

テイターニアに匹敵する速度で接敵し、頭頂部に備え付けられているビーム砲を放つ。

最初に会敵しなかったのは、「ハロ」を守りながら戦わなければならないという不利な条件下での決着を試みるためだったのだろう。

「……ず、ずるい……です……」

『大人の知恵というものだよ、リリカ君！』

フォノンメーカー砲による弾幕を、光波推進によって回避しつつも体勢を崩したAGEーイブランシユテイターニアを仕留めるべく、マイヨールは機体の頭頂部をリリカに向ける形で再びビーム砲を放つた。

ここでリリカに与えられている選択肢は二つある。

一つはこのままマイヨールを連れてとにかく逃亡を試みること。

もう一つは、「ハロ」を抱えたままここでマイヨールを仕留めてから、地上への帰還を試みることに迷っている時間はない。

ビームを回避し、左手に「ハロ」が握られていることを確認した上で、リリカは——二つ目の選択肢をその手に選び取った。

「ブランシユアクセル……！」

『何を！』

「……ダブルブースト！」

GBNにおいては、Cランクから解禁されるユニーク要素が存在する。

それはダイバーの戦い方であったり思考の癖に合わせてアジャストされるユニークスキル、「必殺技」と呼ばれるものであり、リリカが起動したその技は、水中、しかも水深四百メートルという地点にいる汎用機とは思えない速度を付与していた。

ゾック・マイヨールに深海というフィールドを与えてしまえば、それは確かに文字通り、水を得た魚のような恐怖を対峙するものに齎すのかもしれない。

必殺技の発動により、負荷がかかっていた関節部が軋みを上げる。だが、まだまだ。まだ——耐久値がゼロになっていない限り負けでは

ない。

軋む機体の手綱を必死に握りながら、リリカはゾック・マイヨールへと己の愛機を肉薄させる。

ゾック・マイヨール……ひいては原型機であるゾックに弱点があるとしたら、それは格闘戦における手札の乏しさだろう。

申し訳程度につけられた短い腕から繰り出されるアイアン・ネイルの一撃は、確かにカウンターとしては申し分ないのかもしれない。

だが、一撃のリーチが短すぎるのだ。

だからこそ、ゾック・マイヨールはフォノンメーザー砲の連射によってA G E—1ブランシュティターニアを近づけないようにしていたのだが、「ブランシュアクセル・ダブルブースト」を起動したリリカの愛機は、水陸両用機に負けないほどの機動力をその手に収めていた。

ならば——真つ向勝負で負ける道理などそこにはない。

「……っ、てええええ、いつ……!」

『なるほど、これが若き心のなせる技か……!』

リリカはゾック・マイヨールにシグルブレイドを突き立ててその巨体を蹴り飛ばすと、脇目も振らずにスラストを全開にして水上へと急速上昇していく。

途中ですれ違っただけだから詳しくはわからなかったが、ミワのアクティブソナーが捉えた敵機からの信号もなく、リリカとA G E—1ブランシュティターニアを祝福するウイニングランのように、やがて浅くなってきた水中を、仮想の太陽がその光でもって照らし出す。

ブランシュアクセルの起動終了までは残り十二秒。

そして必殺技の反動と水圧で機体は軋み、ひび割れ、満身創痕といった風情であった。

だが——リリカは最後の最後までスロットルを緩めることなく、ブランシュアクセルが切れるその瞬間まで、アクセルを踏み続けた。

「いつ、けええええ……っ!」

精一杯の勇気を披露したりリリカへと応えるがごとく、勢いよく水飛

沫というには生温い、水柱を上げて水中から帰還したAGE―1ブラ  
ンシユテイターニアの双眸が力強い黄金の輝きを放つ。

着地の瞬間に、限界を迎えた右手の関節はスパークして爆ぜていた  
ものの、無事に守りきった左腕には見事に勝利条件である「ハロ」が  
収まっていた。

【Mission Success!】

【Winner：アナザーテイルズ】

そして、ファンファーレというにはぶつきらぼうで無機質な機械音  
声が、リリカたちの勝利を告げる。

胸を満たす喜びに浸るかのように目を伏せて——リリカはその、舞  
台は違えど、水中戦での借りを返したことを、そしてマイヨールたち  
と繰り広げた激闘の軌跡と、その果てに掴み取ったもののことを、思  
い返すのだった。

## 第二十七話 「福音との邂逅」

「すごいよすごいよおリリカちゃん、あれ、必殺技なの〜?」

プールサイドに帰還したりリリカの手を取って、ミワがどこか興奮した様子でそう問いかける。

「う、うん……ブランチュアクセル、っていうんだ……えへへ」

ブランチュアクセル。

それは確かにリリカが設定した、というよりはシステムがアジャストしてくれた必殺技であり、段階を調節しての強化が可能なそれは理屈だけでいえば三倍速、四倍速……と、機動力とモーション速度を引き上げることが可能になっている……らしい。

らしい、というのはリリカも使ったのが初めてで、正直なところどこまでやれるのかわかっていないからだ。

頬をすり寄せてくる姉からの問いかけを肯定しながら、その辺りの検証もそのうちやってみようとリリカは考えていた。

「驚嘆に値しますわね、わたくしもリリカさんがそのような隠し球を持っているとは思いませんでしたもの」

しれっと不安定な機体で水中戦に適応し、撃墜スコアを挙げてみせたカエデも大概なのだが、それはそれとしてリリカの奮闘を称えているのは本心からで間違いない。

欲をいえばミワがそうしているようにリリカへと熱い抱擁を交わしたりスキンシップを試してみたいというのはあるのだがそこはそれ、姉妹水入らず時間を邪魔するのも無粋であろうと、淑女の嗜みとして一步身を引いて腕を組み、カエデはリリカを見守っているのだ。

「うむ、リリカ君の奇策には我々も度肝を抜かれた。素晴らしかったよ」

「マイヨール卿。こちらこそ、グッドゲームでしたわ」

「ありがとう、カエデ君。さて……『アナザーテイルズ』の諸君、水中戦は楽しんでいただけたかな?」

「は、はい……私、楽しかったです……!」

「うむ。ならば我々としても幸いだ。どうしてもGBNで水中戦とい

うのは日の目を見ないからな」

フォース「アナザーテイルズ」は、自ら困難に挑み、水中戦を楽しみ、尚且つ渾身のギミックや妨害を跳ね除けて試練を突破してくれた。

なら、マイヨールとしてもいうことは何もなかった。

一人でも多くその魅力を知ってもらいたいという願いはまだまだ叶ったとはいえないものの、「アナザーテイルズ」がどこか幸せそうにミッションを終えてくれたことこそ、その挑戦を作った側としては最大の喜びに値するのだ。

確かにGBNの主戦場は地上や宇宙、次いで空中で、水中戦は何かのイベントであるとか、あるいはマイヨールたちのように同好の士がクリエイトミッションの舞台とするかぐらいしかないかもしれない。

だが、文字通りに奥深いそのめくるめく魅力は底知れないのだ。

今度はグランダイブプールを一千メートルの水深に改良してみようか、などということを考えつつ、マイヨールは踵を返して去っていく。

「独特な人だったねえ、ミワが言えたことでもないのかもしれないけど」

「それだけ好きなものがある、というのは素晴らしいことですわ。そうですね、リリカさん？」

「は、はい……きつと、あの人も私たちと同じ……」

「ダイバー、ってことだねえ……それじゃ、ちよつと遊んで帰りますか」

グランダイブ・チャレンジの副賞として与えられた、「グラナダ・ブルー」のフォースネストに完備されているプールやバスが一日中使い放題になるという特権を満喫すべく、三人はフォースネストのロビーへと歩いてゆくのだった。



リリカはある種吹っ切れていたといってもいい。

迷いなく、そして淀みなく回避盾を務めながら数々のミッションであつたり、時には挑まれたフォース戦をこなしてきたことで、その技量は着々と高まっていた。

そして、それとなく自身の率いる、というよりは寄り合い所帯で作りに上げられたフォース、「アナザーテイルズ」もそこはかとなく話題を呼んでいる——ことをリリカは知らない。

だが、最近、ロビーを歩いている時にリリカへと視線が注がれることも増えてきたのがちよつとした悩みの種であつた。

ミワ曰く有名税つてやつだよ、とのことらしいのだが、正直なところ何か特別なことをしたわけでもなく、安穩としてこのGBNで遊んでいるだけな自分たちが誰かに目をつけられている、というのはどうにも収まりが悪いというよりは落ち着かない。

ライブモニターに中継されるフォース合同ミッションと呼ばれる小規模レイドバトルの様子を体育座りで観察しながら、リリカはその画面に映っている「MS斬りの悪魔」ことアズキの動きに嘆息する。「すごいなあ、アズキさん……」

太刀一本というあまりにも潔い装備で戦場を駆け抜ける彼女のマニューバはリリカも参考として取り入れてこそいるのだが、それを完璧にトレースできていくわけではないし、仮にできる人間がいたらほとんど化け物の類だろう。

ただ、使えるところは使い、先達に倣うという後身の掟に忠実に、ビームの切り払いであるとかは、狙えそうな部分で狙っている。

「ええ、凄まじいですわね……いつかわたくしも越えねばならぬ大きな壁ですわ」

「カエデさん……」

いつの間にかログインしてきたらしいカエデはリリカの隣に腰掛けて、羨望と嫉妬、そして闘争心が緋い交ぜになった複雑な瞳を、画面に映るアズキとその愛機であるガンダム・バルバトス<sup>もののふ</sup>武へと向けていた。

その瞳が宿しているものは憧れというにはあまりにも苛烈で、鋭く、触れる者全てを切り裂き、或いは呑み込み焼き尽くすかのような



強烈な動機で満ち溢れている。

何がカエデをそうさせるのか。どうしてカエデは、「MS斬りの悪魔」へと挑みかかろうとするのか。

リリカは問いを投げかける。それが気になったからだった。

「……そ、その……」

「なんですよ、リリカさん？」

「……え、えつと……変な質問だったらごめんなさい、その……どうしてカエデさんは、GBNを……始めたんですか……？」

人の心に踏み入るには相応の資格がいる。

だが、それをわかつていたとしても、リリカは問わずにはいられなかった。

フォースという形を組んでいるのなら、その繋がりがあるのならば、出来る限りお互いの動機は、やりたいことは尊重したい。

リリカはフォースを組んだことでそれがほとんど達成されかかっていたものの、時折カエデは未だに何かに飢えているような、そんな乾きを感じるのだ。

「どうして、ですの？ ふむ……強いていうなら、アイカ様のように強く、凛々しくなりたいからというところですね」

アイカ、という名前を口にした瞬間、綻んだ口元と光を宿したカエデの赤い瞳には、アズキへと向ける感情とはまた違った輝きが宿っていた。

アイカ。自分の推測が恐らく間違っなければ、その名前は「リビルドガールズ」を率いるリーダーにして切り込み隊長として名高いあのアイカのことを指しているのだろう。

リリカは、奇しくも自身と同じ始まりを抱えていることに目を見開き、驚嘆していたが、よくよく考えれば「リビルドガールズ」はそれなりに有名なフォースに成り上がったのだ。

それを鑑みれば、同じ憧れを抱くダイバーはカエデ以外にも数多く存在していることだろう。

ただ、こうして一つ屋根の下に、同じ旗の下に集ったカエデが同じ始まりを抱いている、ということはリリカにとって何か奇跡じみた、

といえば大袈裟だが、奇妙な運命の悪戯じみたものを感じさせる。

「……リビルドガールズ」

「ええ、一つの伝説を打ち立てたフォース……そして先ほどからわたしたちを見つめていらつしやる貴女たちは何者でして？」

考えの沼に沈み込もうとしていたリリカの意識を引つ張り上げるように、カエデの強張った声音が耳朶を震わせた。

リリカが顔を上げてみればそこにあるのは、自分たちを見下ろすように見つめている女性ダイバーたちが四人ほどたむろしている姿に他ならない。

用がないとか間違いだとか、そういうものでないことぐらいは四人組の内、一番前に立っている赤毛の女性の瞳がなによりも雄弁に物語っている。

「ん、ああ……リビルドガールズがどうこうって話が聞こえたから見てただけど、ごめん。あたしはアンジェ。そんで……貴女たちが『アナザーテイルズ』で間違いないんだよね？」

女性にしてはハスキーな声音で確認を求めてきた、アンジェと名乗るダイバーの問いを、リリカは小さく頷くことで肯定する。

カエデは未だに警戒を解いていないものの、口ぶりを見る限りアンジェというダイバーが何か腹に黒いものを抱えているとは思えないのだ。

「は、はい……私たちと、あと一人、今はいないんですけど……お姉ちゃん『アナザーテイルズ』で間違いない、です……」

「お姉ちゃん？ ああ、『朱いスナイパー』のことか。つてことは……まあいいや、詮索なんて野暮だし。あたしたちがここに立つてるつてことは……その理由も多分わかるつてことでいいよね」

「……フォース戦、ですの？」

沈黙を保っていたカエデもアンジェに何か裏に隠した意図があるわけではないと踏んだのか、そう問い返す。

「そういうこと。最近話題の『アナザーテイルズ』とあたしたちの『エヴァンジェルミ』で一戦交えてみたかったからその……見終わるのを待ってたんだけど」

あたしの目付きが悪いもんだからごめん、と、フォース「エヴァンジェルミ」を率いているのであろうアンジエはぺこりと頭を下げる。「いえ、此方こそ疑って申し訳ない限りですわ。しかし今はミワさんがいないので、フォース戦について承諾できるかどうかは……」

「んう？ ああうん、フォース戦するならミワは大丈夫だよお」

「……お姉ちゃん、いつの間に……」

いつログインして、そして自分たちの背後に潜んでいたのかわからないミワはにゅっ、と姿を表すなり、しれっとフォース戦の提案にOKを出す。

正確には先ほどログインしたばかりで、ちょうど取り込み中だったリリカたちを見てそれが終わるまで待つていようと息を潜めていたのだが、自身の意見が求められたことで姿を現したといった具合なのだ、別にそれ自体はどうでもいいからと、ミワはついさっきだよお、とだけ答えてアンジエへと向き直る。

「……いや、心臓に悪い……まあいいや、とりあえずリリカ。貴女はこのフォース戦、受けてくれるってことでいい？」

流れとしては受けるのが筋なのだろう。

カエデは強さを欲していて、ミワも戦うことに異存がないのなら尚更だ。

リリカも、グランダイブ・チャレンジで鍛えた自身の腕前がどこまで通用するのか、そしてブラッシュアクセルがどれだけ使えるのか、という検証もしてみたかったために、アンジエからの提案を受け入れる。

「は、はい……よろしく、お願いします……」

「ありがとう、『アナザーテイルズ』。いい試合にしようね」

アンジエはリリカと握手を交わすと、他のメンバーたちと共に一足先に格納庫エリアへと転送され、ロビーから解けて消えていく。

「さてさて……ミワたちも有名になっちゃったねえ」

「名を上げるのは悪いことではありませんわ、それに……リリカさんもなんだかんだで楽しみにしているのでしょうか？」

カエデはふっ、と柔らかな笑みを浮かべてリリカへとそう問いかけ

る。

「はい……カエデさんは、なんでもわかつちやうんですね」

「わかることしかわかりませんわ」

「むむむう……帰ったらリリカちゃん成分を補充しなきゃ……」

やはりなんでもお見通しなのだろうかとリリカは苦笑を浮かべつつそれを首肯して、「アナザーテイルズ」三人もまた、三つの心の一つにとはいかなくとも「エヴァンジェルミ」を追いかけるように、格納庫エリアへと解けていくのだった。



戦場として選ばれたのは、奇しくも地球近郊の衛星軌道上だった。

デブリ帯が主戦場となる軌道の脇に広がっている分、そこに相手を追い込むのもよし、そこに隠れるもよしといった具合の比較的オーソドックスなステージだったが、それは相手にとってもいえることだ。

フォース「エヴァンジェルミ」は、その名の通り天使をモチーフにした機体を主軸に運用しているフォースらしい。

らしい、というのは掲示板を見る限りでの情報しか拾えなかったからだが、平均ランクはB以上と、少数精鋭のフォースとして話題になる程度には実力があるということでもある。

「そんなわけで、気合入れてかからないとちよつとまずそうかなあ」

「上等ですわ、相手にとって不足なし、どこからでもかかってきいていらして問題ありませんことよ」

「おお、おお……カエデさんは頼りになるねえ、リリカちゃんは大丈夫？」

「う、うん……大丈夫……」

平均ランクがB以上で、リーダーのアンジェに至ってはカエデと互角なAランクであると聞いた時には軽い絶望感が襲ってきたものの、今更試合を取りやめますなんてことはできないし、なによりもやりたくない。

ぶるぶると震えてこそいるが、リリカの瞳にはそんな、確かな覚悟

が宿っていた。

AGE―1ブランシュティターニアは、水中戦のために拵えたウェアであるために今回は元の乗機である、ただのブランシュにアセンブリを変えているものの、グランダイブ・チャレンジと比べれば水圧がかからない分、上下左右からの攻撃を気にしなければいけないとはいえまだ、動かすだけなら楽な方だ。

リリカは操縦桿を握りしめ、ミワのAWACSで敵の情報を確認しつつ、いつもの回避盾として戦線に躍り出ようとした、その時だった。「……っ、まずいねえ……敵さんにジャマー持ちがいるみたいだよお」フリーダムルージユからのデータリンクが途切れ、そしてAGE―1ブランシュのレーダーもモノクロの砂嵐のようなエフェクトに包まれて、使い物にならなくなる。

『そういうこと！　そして私は……その隙を見逃さない！』  
「……ッ!?!」

恐らくは最初に全力でブーストを噴かした慣性で移動してきたのだろう。

戦場に突如として姿を現した、エンドレスワルツ版のガンダムデスサイズヘルを白く塗り替えて、同じくエンドレスワルツ版のウイングゼロの翼を移植した機体……【ガンダムデスサイズルーセットII】は、そう叫ぶと共にビームサイズを振りかぶってリリカのAGE―1ブランシュに襲いかかった。

しかし、間一髪のところでありリリカはその攻撃を回避して、追撃で放たれた切り返しを、バックラーから発振したビームサーベルで受け止める。

『やるじゃない、「アナザーテイルズ」！　ここまで生き残ってきたのは伊達じゃないってわけね！』

「リリカさん！」

『おっと、させないよ！』

デスサイズルーセットIIを駆るダイバー、「ライザ」は渾身の奇襲から無事に逃げ果せたリリカを手放しで称賛するが、ジャマーが効いている以上、それだけが「エヴァンジェルミ」の仕掛けた手ではない

ということだ。

早速とばかりに大量のミサイルやビームガトリングによる弾幕砲火が、リリカのカバーに入ろうとしたカエデとの間に射線を形成して、合流を妨害する。

姿こそ見えないが、恐らく撃ってきたのはヘビーアームズなのだろう。

ミワは完全にしてやられたことを悔やむように小さく舌打ちをすると、射線が形成された距離と、そして相手が逃げそうな暗礁地帯に狙いを定めて、ツダの対艦ライフルによる超長距離狙撃を試みた。

リリカはデスサイズルーセットIIを相手に持ち堪えている。

そして今、前に出るのではなく後退を選んだ以上、推定ヘビーアームズはデブリ帯に籠って弾幕を送ることを前提としているのだろう。ならば次に予測できる戦力は近接機。カエデとリリカで相手ができる——刹那の間に様々な考えを巡らせて、ミワは予測を含めてこそのいるものの、一か八かに等しい賭けに出るかのようトリガーを引いた。

弾速の減衰が少ない宇宙空間において、徹甲弾というのは無類の強さを誇る。

そして、ガンダムヘビーアームズは歩く火薬庫と呼ばれるほど、全身に火器を詰め込んでいる。

そこから導き出される答えは何か。

それは自明の理であるとはかりに、デブリの隙間を縫うように突き進んだ徹甲弾は、レーダーもセンサーも使えないという状況下においても、ヘビーアームズのコックピットブロックを貫いて、全身に詰め込んだマイクロミサイルの誘爆を引き起こしていた。

『こ、こんなのでアリ!? ギャーっ!』

『ベルヌーイ! くっ、流星は「緋きスナイパー」……!』

戦線に合流しようとした、全身を赤く染めたトールギスFのコックピットから、アンジェはその恐るべき予測精度と狙撃の腕に戦慄しつつも、二体一になりかけているライザを助けるために全力でブーストを噴かす。

そして、ミワの凄まじい狙撃を宣戦の号砲として、「アナザーテイルズ」と、「エヴァンジェルミ」のフォース戦は幕を開けるのだった。

## 第二十八話 「戦場の天使たち」

——強い。

アンジェがこの時「アナザーテイルズ」に抱いていた感想と、リリカが「エヴァンジェルミ」へ向けていたそれは奇しくも同じ言葉に収斂される。

戦線に合流したアンジェの赤いトールギスFはその翼を広げ、ウイングゼロヌーベルとAGE-1ブランシユを合流させないように自らを盾とする形で、カエデからの注意を引きつけていた。

『あたしじゃ不足かもしれないけど、踊ってもらおうよ、お嬢様!』  
「役者不足などともんでもない……わたくしの前に立ちはだかるからには全てが好敵手、つまりはそういうことですわ!」

バックパックとその素体の改造機という意味で因縁の結ばれた、ウイングゼロヌーベルとトールギスFは、携えたシザーソードとランスで打ち合い、漆黒の宇宙に新たな星座を刻むかのように複雑なマニューバでその剣戟を繰り返す。

さながら終わらない舞踏会といった具合に、アンジェとカエデの打ち合いはほぼ拮抗しているかのように見えた。

だが、互いにそれを楽しむ余裕がないということはわかっている。アンジェからすれば、今リリカと戦っているライザが奇襲に失敗したことと、そしてあの「緋いスナイパー」がフリーになっているという状況が不安材料で、カエデからすればリリカのAGE-1ブランシユと、ライザのデスサイズルーセットIIがどこまで打ち合い続けられるかがわからないのが懸念だった。

シザーソードとランスがぶつかり合う甲高い金属音はさながら悲鳴にも聞こえて、二人の焦燥を煽り立てていく。

『追いつくだけで精一杯……なんて、泣き言言ってらんないか!』  
「よもやここまで追いつがられるとは……わたくしも随分と手こずらされる!」

トールギスFと激突するウイングゼロヌーベルのコックピットで、カエデは自らに対する怒りからそう叫んだ。



ウイングガンダムゼロの翼パーツは、GBN内においては極めて慣性が高い、調整されているため、それを制御できているという意味では、アンジェたちもまた一流のダイバーであることに違いはない。

だが、一流で止まっているはどうしようもないのがこの魔境であり、そしてカエデが目指している場所なのだ。

なんとかランスによる高速の衝突を変則的なマニューバで回避して、牽制としてウイングバインダーの裏に装備していたツインバスターライフルを放つと、カエデはぎり、と歯噛みする。

リビルドガールズのアイカ。

それはカエデにとっての憧れの名であり、そして目指すべき頂——一流を超え、魔境と呼ばれる五桁から四桁の壁を越えたその先にこそ名を刻む、三桁の英傑という栄誉をその手に収めなければ並ぶことのできない、大いなる壁でもあった。

だからこそ、こんなところで立ち止まっているわけにはいかない。カエデも当然の如く切り札というものは持ち合わせている。

しかし、切り札というのは切り時を誤れば、敗北に直結しかねないものだ。

そしてこのアンジェというダイバーもまた、膠着状態から攻めあぐねているものの、まだ切り札は温存しておきたい——と、いうよりは、カエデのそれとぶつけることで相殺したいという意図が伺える。

GBNにおいて、例えばトランザムシステムは強力な切り札として認知されている。

事実、機体スペックを大幅に引き上げるそれは自壊のリスクや速度を制御し切ることができず壁の染みになるかもしれないというリスクを抱えてこそいるものの、多くのダイバーが愛機の奥の手として仕込んでいる、いわゆる「環境構築」の一つであることに間違いはない。だからこそ、トランザムを持つ機体同士が相対した時、そこには駆け引きが生まれることになる。

トランザムをいつ使うか。

それは概ね三択であり、開幕にぶつけて相手の氣勢を削ぐか、もし

くは温存することで相手からの攻撃に対してのカウンターとするか、或いは——今のカエデとアンジェがそうしているように、互いに同時に起動させることで、アドバンテージを相殺という形で消失させるからだ。

戦況を見るのなら、まだハイパージャマーの効果時間が残ってこそいるものの、ミワが相変わらず化け物じみた一撃で敵の砲撃手を落としてくれたことで、数の上では互角といった風情だろう。

だが、相手が隠している最後の一機が何をしてくるかかわからず、そしてハイパージャマーを起動させているデスサイズルーセットIIがまだ生存している以上、油断は即座に死を招く。

「リリカさん……」

カエデはリリカの実力を疑っているわけではない。

あのライザというダイバーも相当な手練れだが、追い込まれてからの爆発力という意味ではリリカのダイバーとしての腕前も決して侮れるものではないだろう。

故にこそ、格上相手のジャイアントキリングが成立する可能性をカエデは疑ってこそいないものの、それはそれとして独特な慣性の乗り方であったり、それを制御するマニュアルにリリカが翻弄されつつあるのもまた、事実ではあった。

そして、ミワがリリカのカバーに入れていない以上、彼女の側でも何か問題が起きていくこともまた察せられる。

距離を離してのチャージをさながらマタドールのようにひらりといなしつつ、カエデは今、自分がすべきことを考えるのだった。



ガンダムデスサイズルーセットIIの強みは、その変則的な機動とそして携えている大鎌——ビームシザーによるリーチの長い攻撃だろう。

リリカはレーダーやセンサーの類を潰されたことで守勢に回るので手一杯になりながらも、なんとかその猛攻を凌いでいたものの、決

定打がなくじわじわと削られているような焦燥が、心臓をちりちりと焦がすような錯覚に蝕まれていた。

『やるね、リリカちゃん！ 私の攻撃をここまで受け止めるなんて……！』

「……っ、来る……死角！」

目視だけが頼りという状況で、自機の斜め下からの奇襲を選択したデスサイズルーセットIIをドツズライフルの三点射で牽制しながら、リリカはどうかカウンターを、できればシングルブレイドによる一撃を叩き込めないものかと思案する。

だが、ライザもBランクという格上のダイバーであることに間違いはない。

一撃離脱という戦法を徹底することで、近距離をそのキリングレンジとしているAGEーIブランシユの手札を封殺し、特にシングルブレイドによるカウンターを受けないように、ビームシザースの刃が届くギリギリの位置から格闘戦を仕掛けてくる辺りが、いい意味で嫌らしい。

『だけど……デスサイズの武器はこれだけじゃないよ！』

膠着を続けつつ機会を伺っていたアンジェとは異なり、ライザは早期決着を試みるつもりであるようだ。

バスターシールドーガンダムデスサイズ及びテレビ版のデスサイズヘルに装備されている攻防一体の武装を腕から切り離して射出すると、その回避運動によって牽制射撃が途絶えたりリカを仕留めるべく、ライザは渾身の一撃を見舞おうと、ブーストを全開まで噴かして呐喊する。

「ブランシユアクセル……ダブルブースト！」

だが、リリカもまた奥の手を切ることを決めていた。

全開まで噴かしたブーストにより、ビームシザースの一撃は確かにその瞬間までリリカがいた位置を捉えていたかもしれない。

しかしその瞬間、文字通りリリカのAGEーIブランシユはそのモーションを倍速化させることで緊急離脱を遂げると、無防備な背中を晒したデスサイズルーセットIIに対して再びドツズライフルの

三点バーストをお見舞いする。

『えっ、何!?! 何が起こったの!?!』

ライザは思わず驚愕こそしていたが、なんとか本体への直撃だけは避けるべく、ウイングゼロの羽でドツズライフルの一撃を受け切っていた。

だが、得体の知れない絡繰を相手が使ってきたことは確かだ。

相変わらず高速化されている速度とモーションで自身に肉薄してくるAGEーIブランチュを舐めつけて、デスサイズルーセットIIは再びビームシザーによる一撃を見舞おうと、豪快に機体に捻りをつけることで小さなビームの乱流とでも呼ぶべき「壁」を作る。

それは迂闊に攻めを許さない、自らを一つのビームシールドとした守りの型だったのだが、生憎相手が悪かったとしか言いようがない。

呐喊をかけてくるAGEーIブランチュに対してカウンターが決まるだろうと予測していたライザの期待——言い換えるのであれば慢心は、左腕が断ち切られるという形で踏み砕かれる。

『まさかこの子……ビームを、斬って!?!』

「はあ……っ、は、あっ……」

リリカが二倍速で起動させたブランチュアクセルによる一撃は、確かにデスサイズルーセットIIの左腕と、ビームシザーを断ち切っていた。

だが、誰かが言っていたように、生きている限り負けではない。

ここで動揺に引っ張られることなく立て直しを選んだライザのクレーバーさもまた、褒めるべきものなのだろう。

エンドレスワルツ版のウイングゼロからバックパックをコンバートしていたことで、全ての武装を喪失するという憂き目を見ずに済んだライザは、高鳴る胸の鼓動を鎮めるように深く息を吐く。

ハイパージャマーの効果時間はまだ残っている。

そして、急に倍速で動き出したAGEーIブランチュのそれが、原作においてどのような機能が一番近いかわれればそれはFXバーストになるのだろう。

さつきまでの意趣返しとばかりに倍速での急襲をかけてくるリリ

カとAGE-1ブランシュによる攻撃をなんとか回避し、傷つきながらも損傷は最低限といった風情に抑え込みつつ、ライザは巡らせた考えの果てに一つの結論へと辿り着いていた。

——あれは、必殺技だ。

自身もランクが上がったことで保有しているそれは、残念なことにハイパージャマーの効果延長とステルス効果の付与という形で既に発動してしまっているため、ほぼ相殺は望めないものの、モーションや機動力の倍速化といった強力なそれがなんのリスクも代償もなく繰り出せるわけではない。

事実、ブランシュアクセルは終了時にその倍率と稼働時間に応じたデバフとダメージを受けることとなっている。

だからこそリリカはここで、ブランシュアクセルが続いている内に、なんとかデスサイズルーセットIIを、ライザを仕留めてしまいたかったのだ。

焦燥が心臓を駆り立てて、理性を蝕んでいく。

操縦桿を握りしめる手に嫌な汗が滲む感覚の擬似的なフィードバックにリリカは眉を潜めながらも、ここでデスサイズルーセットIIを確実に仕留めるべく、更なる手札を切ることを決める。

「ブランシュアクセル……トリプルブースト！」

『何を……っ!?!』

恐らくこの戦いがどのような形で決着しても、ブランシュには大きな痛みが残ることになるだろう。

リリカはその事実に関心を痛め、涙を眦に滲ませながらも、感情をトリガーから引き離して、ガチャガチャと操縦桿を動かす、思考補助機能もフル活用した上で、三倍に引き上げられた機動力とモーションの速度を制御して、デスサイズルーセットIIを仕留めにかかる。

倍速までならなんとか対処できたライザであっても、三倍となれば流石に反応することは難しかった。

さながらガンダムAGEの劇中において、フリット・アスノがAGE-1スパローによってゼダスを解体した時のように、金色の双眸に光を灯して襲ってくるAGE-1ブランシュに、ライザはなすすべもな

くその右腕を、頭部を、そして脚部を切り刻まれて、最後に残されたコックピットブロックへと、リリカは無慈悲にシングルブレイドを突き立てる。

「これで……終わり、です……っ……!」

『そ、そんな……って、まあ仕方ないか。後は任せたわ、アンジエ……』  
妙に割り切った、そうでなければリーダーに全幅の信頼を寄せた言葉を辞世の句として、ガンダムデスサイズブルーセットIIとライザの仮想の躯体はテクスチャの塵へと解け、そして戦場から消失していく。

リリカはそれを確認すると、ブランシユアクセルを即座に解いて、復活したリーダーを見る。

カエデは近くで戦っていたからその様子は目視で伺えたが、どうやらミワは敵が残していたもう一機に懐へと飛び込まれて噛みつかれたらしい。

急いで救援に向かうべく、リリカがAGEーIブランシユのスラスタを噴かそうとした、その瞬間だった。

「……きや、っ……!?!」

か細いリリカの叫び声をかき消すかのように小規模な爆発とスパークが走って、AGEーIブランシユの関節部とスラスタに無視できない、レッドアラートが鳴り響くレベルのダメージを残す。

だが、それも無理もなかった。

ダブルブースト、二倍速でまでならば確かに戦闘行動を継続できたかもしれない。だが、トリプルブースト……三倍速まで起動させてしまえば、途中で切ったとはいえ、機体にかかるダメージフィードバックも相応のものとなる。

結論からいってしまえば、AGEーIブランシユはほぼ戦闘不能に近い状態に陥ってしまった、ということだ。

コンソールを一瞥して、リリカははらりと一筋の涙を零す。

それでもきつと、ミワとカエデならばなんとかしてくれるという信頼は確かに抱いているし、二人の実力に対して疑いを持っているわけではない。

だが、この状況下で動かないことが、そして予想以上のダメージがAGE-1ブランシユへと蓄積されたことにショックを受けて、リリカは呆然としてしまっていたのだ。

「……ごめんね、ブランシユ……」

あの状況ではそうするしかなかったと、頭の中ではわかっている。そしてきつと、機体が動くのならこの感情も指先から切り離してAGE-1ブランシユと共に戦うこともリリカにはできるだろう。

だが——それはそれとして、わかっているとしても割り切れないことなど世の中にくらでも、巷に雨が降る如く存在している。

それにまだ、耐久値がゼロになったわけではない。

破損したメインスラスターの代わりにサブスラスターや各部のアポジモーターからブーストを噴射して、せめて盾がわりにはなろうと、リリカはミワが苦戦を強いられているであろう戦場へと向かっていくのだった。



ミワを追い詰めていたのは、偏差射撃をも物ともせず、それこそ猪突猛進とでもいうべき勢いで迫ってくるガンダムナタク……アルトロンガンダムのエンドレスワルツ版に、例によって同じ作品を出典とするバージョンのウイングゼロのバックパックを移植した「ガンダムアルトロンピンイン」だった。

「こうもひらりひらりと避けられるとはねえ……」

『わはははは！　うちにできないことはそんなにないぞ！』

ミワが視力と予測の化け物であるなら、アルトロンピンインを駆るダイバー、「トウコ」は反射神経の化け物とでもいうべき存在だった。

正確に狙いをつけて放った徹甲弾をフレーム単位で回避し、時にはビームトライデントを高速回転させることで防御するという荒技を狙ってこなせる彼女がなぜAランクという位置で止まっているかは、ミワにはわからなかったものの、ランクがどうであろうが厄介な仇敵であることに違いなどない。

弾倉に残っている数と、そして通常弾が装填されている予備のマガジンの存在を確認した上でミワは、何発で仕留め切れるのかを頭の中に思い描く。

しかし、そんな時間すら与えるものかと、トウコはさながら「機動戦士ガンダムUC」に登場した「シナンジュ」と、それを操る「フル・フロンタル」のごとく、漂うデブリを足場として、大量の障害物に掠ることもない緻密なマニューバで、デブリ帯に身を潜めたミワを仕留めるべく、強襲をかけるのだった。



## 第二十九話 「デッドヒート／バーニング・レイジ」

『待て待て待てーっ！　うちから逃げられるとか思わんといて、「緋いスナイパー」！』

「うむむ……追いかけてこは苦手なんだけどお、止まれと言われて止まる人なんてそうそういないよ〜」

ミワを暗礁宙域から露骨に追い立て、追い出そうとしているアルトロンピンインと、そのダイバーである「トウコ」に秘密があるとするならば、その操縦技能もさながら最大の特徴であるドラゴンハングを半オート化した破碎兵装に置き換えて、デブリを即席の散弾に変えていることも挙げられるだろう。

両腕に装備されていたはずのドラゴンハングはちょうど、ユニコーンガンダム3号機「フェネクス」のようにバックパックへと移設され、本来副翼が生えている部分に主翼が後退しているというのが、アルトロンピンインのアセンブリだった。

ミワは念のためにと持ってきた、水鉄砲のような形状をしたサブマシンガン——現実におけるキャリコム950Aをモチーフとしてプラ板でフルスクラッチしたそれを左手に持ち、牽制射撃として放つことで、トウコを遠ざけようと試みる。

だが、アルトロンガンダムのドラゴンハングの厄介なところは盾としても機能する一面を持ち合わせているところに他ならない。

撃った弾が片っ端から弾かれていくのを視認して、ミワは眉根にシワを寄せ、どこか怒り半分呆れ半分といった風情の笑顔を、困ったように浮かべる。

打つ手がない。

スナイパーを見つけたら親の仇の如く追い回せ、というのはGBNに語り継がれる金言であり、実際にその通りなのだが、こうして追い詰められる側に回るとミワは極端に、というほどではないがスナイパーらしく、弱体化するところがある。

凸砂というスタイルが成り立つのはあくまでも敵味方が入り混じる乱戦が前提であって、擬似タイマンと呼ぶべき今の状況において、

そうした能動的な突撃戦法は成立しない。

それにこのトウコというダイバーも中々出来るダイバーだ。

仲間が先読みの置き撃ちでやられたことの意趣返しとばかりにそこから射線と潜伏地点を読んで、ミワが放ってきた徹甲弾を全て回避した上でこうして自身に肉薄しているのだから、Aランクは伊達ではないといった風情だろう。

サブマシンガンの残弾を数えながら、最悪接近戦をやらなければ、ならない覚悟を決めるかのように、ミワは深く息を吸い込む。

「……っ、ふう——」

『諦めた？ いや、油断はしない！ このまま突っ切ってドカンだ！』  
「……悪いけど、そうはさせないよおー！」

ミワはそう叫ぶと、手近にあったモビルスーツの残骸——オブジェクトとして配置されている「ジム改」の残骸を思い切り蹴り飛ばし、ドラゴンハングの半自動迎撃がそれに向いたのを確認した上で、サブマシンガンの弾を全弾発射する。

『なっ、オブジェクトを盾に?!』

「悪いけど悪いけど、意趣返しってやつだよ」

先ほどから散々追い詰められてきたことで、ミワも鬱憤が溜まって  
いるのだ。

サブマシンガンの弾幕を防ぐためにコックピットを庇い立てたアルトロンピンインは完全に足を止めている。

ならば——好機はここしかない！

ミワはサブマシンガンを投げ捨てて、温存していた対艦ライフルの一撃を見舞わんと構え直したその照星を覗き込む。

中心に見据えるのは敵機の姿。

先ほどまでは随分と好き勝手してくれたが、両腕によるガードで防げるほど、この徹甲弾の威力は甘いものではない。

そして、必滅の一撃を放つべく——ミワはアルトロンピンインをロックオンして、躊躇いなくトリガーを引き絞るのだった。



アンジエは焦っていた。

ツールギスFの機動力について来られるだけではなく、一度懐に潜り込まれれば勝機は意図もたやすく潰えるというプレッシャーがひりひりと心臓を焦がし、血管を痺れさせる錯覚に苛まれながらも、操縦桿捌きだけは歴戦の経験がいつも通りに動かさせる。

このカエデというダイバーが、一部においては「暴走お嬢様」と呼ばれるほど、格上相手のフリーバトルを無差別に挑んだ上でAランクまで上がってきた有望株であるということはアンジエも知っていた。だが、それにしたって打開できる糸口があまりにも見つからないのだ。

レーダーから、ライザの反応を示す点はベルヌーイのそれと同じく消失している。

相手のリリカというダイバーがどうなったのかはわからないものの、ライザを仕留めた以上、その実力は侮れないに違いない。

ならば、数的不利を背負っている状況でいつまでも片翼の告死天使と踊っている暇などない——その焦燥が、迷いに迷って二の足を踏んでいたアンジエに、相殺覚悟で必殺技の発動を決意させた。

『ここで切り札、切らせてもらおうよ……！　いくよ、フリーユージュル！』  
「面白いですわね！　是非ともきていただきたいものですわ、アンジエさん！」

ここでゼロシステムを温存することに成功すれば、この戦いはほとんど勝ったといっても差し支えないだろう。

だが、アンジエは自分と打ち合えるほどの実力者で、そんな彼女が必殺技を起動したというのに、悠長に構えている余裕などカエデにも存在しなかった。

アンジエの必殺技——本来であればツールギスに搭載されている「スーパードバーニア」を機動力の強化という形で再現したそれは、Gの仮想フィードバックが安全装置に抵触して、強制ログアウトが施される寸前まで推進力を高めるものだ。

ゼロシステムを発動しようとしたカエデが一瞬足を止めた隙を突

く形で、ランスを携えた赤いトールギスFがその右腕を貫き、発生した衝撃波がウイングゼロヌーベルの右足をも抉り取っていく。

「ッ、抜かりましたわ……!」

『まだまだあッ!』

Gのフィードバックによって胃の中身をぶちまけそうになりながらも、アンジエは機体を強引にターンさせて、二撃目の突貫攻撃をウイングゼロヌーベルにぶち当てるべく、全力で機体を加速させる。

だが、ゼロシステムの発動そのものは成功していた。

トールギスFからの誘導を切りつつ、最低限の動きで攻撃を回避したカエデは、仕返しだとばかりに引き抜いたビームサーベルでアンジエの翼を切り裂いて、その機動力を削ぎ落とす。

『……っ、やるね、流星は暴走お嬢様つてとこかな!』

「その不名誉な二つ名でわたくしを呼ぶのはおやめなさいな!」

カエデは暴走しているどころか、極めて理性的に格上相手に喧嘩を売ってきただけだ。

それをいかにも頭のネジが外れているからだと言われるなど、侮辱にも程がある。

羽根を一枚削ぎ落として尚、半減した機動力で尚視界に捉えるのが困難な程の速度を誇るトールギスFへ、反射神経だけで斬りかかりながら、カエデはそう憤慨した。

主にそういう、力こそパワーとでも言わしめる強引なムーブがカエデを暴走お嬢様呼ばわりされている原因なのだが——噂や風評というのは大体が誇張されるものだから、宿命とでもいふべきものなのかもしれない。

だが、それはカエデの強さに対する畏敬から来ていることには間違いがなかった。

トールギスFとウイングゼロヌーベル、双方共に中破クラスの傷を受けながらも、一方はゼロシステムによる誘導切りを範囲で巻き込むような槍術で、もう一方はゼロシステムによる誘導切りがあれど、その槍術を華麗に舞い踊るマタドールのように、そうでなければプリマ・ガールのような捌き切るといふ戦いは、観ている者からすれば手

に汗握る死闘に違いない。

だとしても、戦っている側からすれば生きた心地がしない——仮想の遊戯であるとはいえ、そこに確かな冷たい肌触りを感じさせる、「死」と背中合わせになりながら繰り広げるデッドヒートだ。

一瞬が永遠にも引き延ばされていくような感覚の中で、針に糸を通すかのような緊張感がカエデとアンジエを包み込み、じわり、とこめかみに汗の雫を滲ませる。

この舞踏会を続けるのも悪くはない。

だが、刻限がくれば馬車は南瓜に、ドレスは檻樓にと、魔法は覚めることが宿命づけられているから魔法なのだ。

ゼロシステムとスーパーバーニアの起動時間は、ほとんどその刻限に近づきつつあった。

それでも、ただ一つ残された、硝子の靴を掴み取るべく少女たちは声にならない雄叫びをあげて、目の前に立ちはだかる難関を突破しようと、敢然と立ち向かっていく。

『っ、でやあああああっ!!』

「裂帛の気合！　そしてここまで心躍る戦い！　見事という他にありませんわアンジエさん！　ならばわたくしも、全力でそれに応えるのみ！　ちえええええすとおおおおおっ!!」

瞬間、出鱈目な星座を描きながら、二つの光が交錯した。

新星が生まれるかのように爆ぜる光の中で、ツールギスFが突き出した槍は確かにウイングゼロヌーベルのボディを、胴体を捉えて貫いていた。

だが、それはコックピットの判定から微妙にズレた——一撃で仕留めるには足りないシステム側が判断するに至った位置だった。

悔やんでも悔やみきれないミスなのか、カエデの技量が上回っていたのか。

アンジエは大破状態になりながらも左手のビームサーベルを死守し、そして頭部からコックピットを串刺しにしようとするウイングゼロヌーベルを一瞥して静かに瞑目する。

『……ああ、両方か……』

「……貴女の全力、しかと受け止めさせていただきましたわ」

カエデはどこか、懺悔に対して赦しを与えるかのように呟く。

それだけで、不思議と悲しいというより、怒りの炎が身を焦がすというより、どこか晴々とした気持ちを抱かせるのだから、このお嬢様は憎めない。

トールギスFは爆散し、最後の足掻きとばかりにその破片と爆風が大破状態にあるウイングゼロヌーベルを巻き込んで、頭部や残された左半身にヒビを穿ち、そして砕いていく。

アンジエは確かに敗北こそしたものの、カエデがミワに合流するという最悪のシナリオはなんとかその意地と矜持で阻止していたのだ。

ランスに貫かれた胴体部分と、そして二の腕だけが残るといふ凄惨な状態にありながらも、ウイングゼロヌーベルは撃墜を免れ、宙域を漂っていた。

カエデはその結末にふっ、と小さく口元を歪めて自嘲する。

「わたくしも……まだまだということですわね」

残る戦力は二つ。スラストを失い、関節部にも重篤なダメージを追っているリリカのAGEーブランシュと、そして。

今も尚、暗礁宙域での死線を掻い潜らんとしているミワのフリーダムルージュだけだった。



ミワに落ち度があったとしたならばそれは、一つだけ記憶から抜け落ちていたこと、それだけだろう。

ドラゴンハングは盾としても機能する。

トウコはその瞬間、とっさに機体を振り向かせて右半身の背面を晒すと、左足までぶち抜かれながらもでなんとか徹甲弾の弾道を直撃コースから逸らすことに、そして左側のドラゴンハングを守り切ることに成功していた。

そして、敵を見据えた双頭の龍——その片割れは確かに迎撃としてミワが構えていた対艦ライフルへと噛み付き、ねじ切り、漂うデブリ

の一部に変えていく。

「しまっ……」

『ふいー……死ぬかと思ったよ、けど……ウチはまだ負けとらん!』

サブマシンガンは喪失。

クスファイアスは足が止まる。

ミワは半身を失いながらも尚果敢に挑みかかってくるアルトロンピンインへとビームサーベルによる迎撃を試みるが、流石にクロスレンジまで飛び込まれてしまえば相手の土俵というものだ。

左手で回収していたビームトライデントが突き出され、アンビテクストラスハルバードモード……要するに二本のビームサーベルを連結することで一本の槍としたミワのそれを弾き飛ばし、胴体に絡みついたドラゴンハングがギリギリとコックピットを締め上げる。

フェイズシフト装甲は衝撃や打撃に強いとされているが、それはあくまで「点」に対しての話であることは意外と知られていない。

例えば、万力のような「面」……継続的な攻撃を一箇所を受け続けられ、それが物理的な攻撃であつたとしても強引にフェイズシフト装甲をねじ切ることが可能だとされている。

現に、外伝であるMSV群においては大真面目にそういった思想の元に設計された武装、「インパクトバイス」を持つ「グフクラッシャー」という機体が存在しているのだ。

今ミワが置かれている状況は、そのグフクラッシャーによって締め付けられているのに極めて近い。

ドラゴンハングに絡めとられたフリーダムルージュは漂うデブリ帯に叩きつけられ、衝撃のフィードバックが、かは、と、乾いた息をミワに吐き出させる。

そして相手のビームトライデントが無事である以上、そこから逃れることはほとんど不可能に近いだろう。

悪足掻きのように、腰部から展開したクスファイアスレールガンを放つが、当然の如くそれはトウゴに避けられて、仮想の死が自らに迫りくることをミワは予見する。

「……ごめんねえ、リリカちゃん。ミワ、しくじっちゃった」

「…………うん、まだ…………まだ、終わってないよ、お姉ちゃん…………！」

『何ね?』

「ブランチュアクセル…………スクエアブースト！」

諦めに近い言葉を零したミワを否定するように、まだ終わっていないとばかりに、サブスラスターと慣性移動だけで暗礁宙域へと迫っていたリリカのAGE―1ブランチュが、最後の足掻きとして四倍速の必殺技を起動する。

メインスラスターを失っているため、四倍速まで加速してようやく普段のブランチュの機動力かそれよりちよつと上、といった風情ではあったが、シングルブレイドを突き出して駆け抜けるAGE―1ブランチュは、まさに突如として戦場を駆け抜けた流星の如く、ミワを絡めとっていたドラゴンハングを断ち切った。

だが——二倍速、三倍速と起動して破損したAGE―1ブランチュが、四倍速の反動に耐え切れるはずなどない。

魔法が解けるように、或いは流星が燃え尽きるように、AGE―1ブランチュの五体は内側から砕け散り、涙のように、砕けたツインアイの破片が戦場に差し込む星明かりを映して煌めいた。

「…………リリカちゃん…………」

そうだ。

何を諦めていたのだ、自分は。

リリカは蹲っていつもおどおどしながら、そしていつもびーびーと泣いているばかりだった女の子ではもうない。

GBNは確かに愛する妹に寄り添い、その足を前に踏み出させていたのだ。

ドラゴンハングの拘束が解けて尚、もうほとんど動くこともできないと見たミワとフリーダムルージュを仕留めるべく、アルトロンピンインはスラスターを全開にして、ビームトライデントを構え、最後の突撃をかけてくる。

乾坤一擲、この一撃を外せば後はないとばかりに、通信ウィンドウにポップしたトウコは怒りともまた違う、戦士の、闘志をむき出しにした表情をして、声にならない叫びをあげていた。



GBNには、奇々怪界、攻略班の頭をいつも悩ませる要素がいくつも存在している。

頭の中に冷却材をぶち込まれたかのように、過熱していたミワの思考回路は強制的にその冷静さを取り戻し、打つべき一手に対して操縦桿を動かさせていた。

その仕様の一つは、ダイバーが撃墜された際に保持していた武装は武装として撃墜時に強制的に回収されるが、もし被撃墜時に手放していた場合は、オブジェクトとして判定されて戦場に残る、というものだ。

四倍速まで加速したAGEEー1ブランシュは、まさに粉々といった風情に碎け、飛び散っていた。

それは、シグルブレイドを保持していたマニユピレータも例外ではない。

『これで……決まりだあああッ!!』

『勝手に……決めないでよ……!』

それはミワが、リリカちゃんが決めることだ。

ドスの効いた声でそう呟くと、ミワは意趣返しのように半身でビームトライデントによる突撃を受け止めながらも、コックピット判定からは微妙にずれる位置でそれを留めて、相手を釘付けにする。

『な……っ……!?!』

「……リリカちゃんの頑張りのために……ミワたちの前から消えなよ……」

そしてミワは、宙域を漂っていたシグルブレイドをその手に掴むと、アジャストまでの数秒間、決してアルトロンピンインを流さないように脚部を絡ませて、動きを封じていた。

ならば、戦いの趨勢は決まったようなものだ。

『こ、これが……「緋きスナイパー」の力……』

「……勝手に呼ばれてるだけだよ……」

ざくり、と、コックピットをめぐり取るように、アジャストを終えたシグルブレイドでトウコのアルトロンピンインをミワは淡々と撃墜してみせる。

そこには喜びもない。悲しみもない。楽しみもない。

ただ、怒りが——久しく抱いていかなかった感情がミワの中で燻っていたところに、トウコが放った余計な一言によって火がついて、燃え盛っているだけだ。

【Battle Ended!】

【Winner:アナザーテイルズ】

システムが告げる勝利の宣言すらもどこか遠く、ミワは茫洋と宙を眺めて——ロビーまで解けていく時間、その意識を手放すようにそつと、目を伏せるのだった。

### 第三十話 「最速への招待状」

フォース「エヴァンジェルミ」は確かな強敵だった。

紙一重の勝利とその栄光を手にしてロビーへと帰還したりリリカはどつと疲れた様子で肩を落として、どことなく剣呑な空気を漂わせているミワへと心配そうに視線を向ける。

普段であれば眠たげなミワの表情は、それさえもどこか遠くに置き忘れてしまったようにうつろで、ぼんやりと虚空を見つめているその顔には、何も映ってはいないように見えた。

「いやー……負けちゃった。あたしたちの完封負け。流石は最近噂の『アナザーテイルズ』ってところだね」

同じようにロビーへと帰還してきた「エヴァンジェルミ」四人組を代表して、赤毛の女性——リーダーであるアンジェが、コンソールを開きつつとん、とつま先から優雅に降り立ったカエデへと握手を求めらる。

「わたくしたちこそいい試合をさせていただきましたわ。でも『アナザーテイルズ』のリーダーはリリカさんでしょよ」

「そうなんだ？ てつきり貴女がリーダーかと思ってたけど……気を悪くしたならごめん。リリカさん、改めてグッドゲーム」

「……ぐ、グッドゲーム、です……」

あまりに覇気がなさすぎるせいなのかぐったりと疲れた様子を見せているせいなのかはわからないが、気まずそうに苦笑するアンジェの手を取って、リリカはぎこちなく微笑み返した。

リーダーといっても、成り行きでフォースを結成した時に名前を決めたのが自分だっただけで、実力的にはカエデかミワの方が牽引役としては相応しいのだろう。

死線を掻い潜ったことで大破したAGE——ブランシユのことを想い、そこにずきり、と胸の奥を切りつけられたような痛みを覚えながら、リリカはアンジェから提唱された報酬を受け取って、「エヴァンジェルミ」の四人が去っていくその背中を見送る。

ブランシユアクセルは、確かに強力な必殺技だ。

スラストターが健在の状態では四倍速までは使えなかったが、五体満足な状態から四倍速を起動したならば、可能性としてはあの「MS斬りの悪魔」の一撃にカウンターを加えることもできるかもしれない。

だが、その反動はあまりに強烈だった。

三倍速でもメインスラストターが壊れて、関節部に深刻なダメージが残るそれは、システム側の制約もさながら、AGE-1ブランチュ自体が必殺技に耐え切るだけの完成度を有していない、ということでもある。

だからこそ——リリカはそこに胸を痛めて、じわり、と眦に涙を滲ませるのだ。

それに、先程から虚空を見つめているミワのことも気になる。

小さい頃、ミワがああいう表情をすることはあまり珍しくなかった。

幼稚園の段階から勉強させられていた簡単な英語のテストだとか、そんなもので満点を叩き出してもミワは喜び一つ見せることなく、何かタスクが終わったかのように淡々と、その目に虚無を湛えていたのだが、今の姉は、根拠こそないがそれともどこか違うような気がしたのだ。

「ちよつとミワさん、大丈夫ですか?」

「……ん、んん? こほんこほん……大丈夫だよお、頭使いすぎちゃつて眠くなっただけ、だよ」

リリカが言葉をかけるよりも先に、茫洋としていたミワの肩を揺すつて、カエデが問いかける。

ミワは小さく咳払いをすると、にへら、と緩んだ笑みを浮かべて、スナイパーは追っかけ回されるとつらいんだよお、と、注釈を加えるかのようにそう語った。

「……その、お姉ちゃん……」

「なになに、リリカちゃん?」

「……本当に、大丈夫?」

本人がそう主張しているのだから大丈夫なのだろう、とはリリカも思っている。

ただ、ミワのあの瞳は疲れているから、というよりは虚空に何かを映し出して、それを眺めているかのように見えて、だけどリリカにはかける言葉が見当たらずに、そんな平凡な心配に落ち着いてしまうのだ。

「リリカちゃんは優しいねえ、ミワお姉ちゃんは嬉しいよお」

「わわ……」

「お姉ちゃん、ちょっとリリカちゃん成分が欠乏してたみたいだからねえ」

にへら、と緩んだ笑顔を見せると、問答無用とばかりにミワは豊かな胸元にリリカの頭を抱き寄せて、そつと、自分とは違って真っ直ぐな髪の毛を傷つけてしまわないように優しく撫でる。

「公衆の面前でしてよ」

「わかってるけど姉妹水入らずってやつだよお」

本当に聡い子だ、と、カエデのどこか非難というよりは嫉妬が混じった視線を受け止めながら、今も言葉を探しているようなりリリカの体温と柔らかな感触の擬似的なフィードバックに身を任せて、ミワは静かに目を伏せる。

こうしてカエデと軽口を叩き合ったり、リリカと触れ合っている時間こそが、ミワにとっての本物だった。

それはGBNでもリアルでも変わることはない。

リリカ。世界でたった一人の愛しい妹。

そこに横たわっている断絶と不理解、そしてどれだけ近付いても互いの中に凍て付いた部分を抱えている心のことを想い、それを溶かすようにぎゅーつ、と、ミワはリリカを抱きしめるのだ。

それがミワにとっての癒しになるのなら悪くはないのかな、と、リリカはそこに熱を持った言葉をかけてあげられないことを悔やみながらも、されるがままにそんなことを思う。

ミワがどこを見つめているのか、リリカにはわからない。

それは隣で呆れたような顔をしているカエデも同じなのだろう。

姉妹である自分たちでさえ完全には通じ合えない、通じ合えば互いの痛みに触れ合って、傷口を広げるだけに終わってしまうとわかって

いる。

だからこそ、昼飯時に寄り合つて、一緒にお弁当を食べるだけの集まり——リリカにとって、今の「アナザーテイルズ」は、自分が経験することのできない昼休みだとか放課後の延長線上にある存在のようなものなのだ。

抱きしめられるがままにされていたリリカはミワの腰に手を回して、ぎゅつ、と、自分の胸を押し付けるように抱擁を返す。

多分、それでいい。

それ以上のことなんて、求めないから。

それでもどこか、戦いのことを思うと、必殺技を発動するだけで碎けてしまうブランシユの痛みだとか、カエデが追いかけている「アイカ」が持っている強さだとかのことを考えると、胸がひりひりと痛むのだ。

しばらく抱き合ってから抱擁を解くと、ミワは満足したかのようにうむうむ、と小さく頷いて、気が抜けたようなため息をついた。

「ふいー……やっぱやっぱ、追っかけまわされるのはきつついね〜」

「スナイパーを見たら親の仇の如く追い詰めるのは基本ですよ？」

「まあまあ、それはそうだねえ。ミワも同じ立場ならおんなじことするし……でもでも、精神衛生に良くないんだよお」

さりげなく相手の砲撃手を初手でスナイプするという離れ業を見せたミワだったが、まさかそこから野生の勘で射線から自分の位置を割り出されるとは思っていなかったのだ。

思えば八つ当たりに近いとはいえ、トウゴには悪いことをしたとミワは内省する。

「……わ、私も……今回の戦い、疲れちゃって……」

「紙一重の勝利でしたわ、だから無理もありませんことよ」

ささ、わたくしの胸で羽根を休めてくださいまし、と、リリカを背中から、いわゆるあすなろ抱きという形で抱擁してカエデは目を伏せる。

リリカニウムに飢えているのはなにもミワばかりではないのだ。

自分のどこにそんな癒し成分があるのかとは思っているが、姉とも

また違った温もりに、リリカの中でひび割れた痛みは確かに癒されていくように、そう錯覚してしまう。

ただ、根本的な解決に至っていないのは確かなのだ。

AGE―ブルーランシユと必殺技。

降って湧いてきた新たな課題と痛み視線を向けながらも、リリカはそこに答えを見出せず、霧の中に迷い込んだかのように、温もりの中でただもがき続けるのだった。



その戦いがライブモニターで中継されていたのはただの偶然に過ぎなかった。

GBNのセントラル・エリア、そのメインターミナルにあるロビーの中心へ、大々的に据え付けられたモニターには、ダイバーたちの戦いを無作為に選んで抽出し、再生する機能が設けられている。

それは多くの人間の目に戦いが触れる機会でもあり、目覚ましい活躍を見せたフォースがあれば、次の日に対戦の申し込みが殺到することもそう珍しくない。

だからこそ、彼女たちがその戦いを見ていたのもまた、偶然の中の必然であった。

「……ミワ」

郷愁。怒り。悲しみ。絶望。複雑な想いをコンクリートミキサ―にかけてぶちまけたような表情を浮かべて、その少女は、モニターの中に映る、シングルブレイドの一撃によって敵機のコックピットを抉り取っていたミワの活躍を眺めていた。

「……二つ名持ちに恥じない実力ね。それと、過去に囚われるのはやめなさいと言ったはずよ」

「……ええ、わかっています。貴女をリーダーに据えたその時から」  
「なら、そういう顔をするのはやめなさい。私たちは……『エーデルローゼ』は、些細なことでもつまづいている暇などないの」

ミワの活躍を、様々な感情が緋い交ぜになった視線で眺めていた少

女「サーヤ」に対して、フォース「エーデルローゼ」を率いる銀髪の少女——ダイバーネーム「ユキ」は小さくそう告げると、モニターの中での戦いが決着を迎えるや否や、それ以上の用事はないとばかりに、踵を返してロビーを行き来する雑踏の中に紛れていく。

確か、「アナザーテイルズ」といったか。

ユキはその名前を頭の中で思い描き、記憶の中に押し留める。

フォース「エヴァンジェルミ」は、決して弱い集まりではない。

むしろ新進気鋭のフォースとして掲示板でも話題になる程度には高い実力を誇っていることは、ユキも記憶している。

そんなフォースに紙一重とはいえ勝利を遂げた「アナザーテイルズ」もまた、油断ならない存在だということなのだろう。

映像が切り替わったライブモニターには、「もう一つのビルドダイバース」と、何やら最近様々な意味で話題になっていくフォースが合同でミツシオンに挑んでいる姿が映し出される。

この世界で頂点を目指すのであれば、倒さなければならぬ敵は、乗り越えなければいけない壁はあまりにも多い。

だからこそ、ユキがその黄金の瞳で見据えているのは常に未来だけ。

己が思い描く勝利、そしてその果てにたどり着く栄光だけなのだ。稼働から数年が経っても未だに、ただ一度の例外を除いて不敗の伝説を築き上げているチャンピオン——クジョウ・キョウヤの姿を脳裏に描きながら、ユキはメインターミナルを後にするのだった。



その後リアルへと解けて帰還したりリリカたちだったが、翌日GBNへとログインした時、簡易的に与えられたフォースネストのメッセージボックスには、一通の招待状じみたものが届けられていた。

気付いたのは、三人で難易度のゆるい採取ミツシオンや討伐ミツシオンといった対NPD戦で息抜きと肩慣らしを行った後のことであつたが、その内容を端的に表すのなら、文面の段階で既にうるさい、



といった風情である。

【To：アナザーテイルズ】

【From：パロツツ・パーティー】

【Message：ハハハハハ！「アナザーテイルズ」の諸君！先日の「エヴァンジェルミ」との一戦、我々もライブモニターから見守っていたが、実に勇気あふれる見事な戦いであつた！そこに惜しみなき称賛を送ろう！だが、我々がメッセージを送つた理由はそれだけではない！リリカ君、といったな。君が見せたあの技——「ブランシユアクセル」といったか！あの最速を体現するような煌めきに、我々のセンチメンタリズムなハートは奪われてしまったといつていい！そこでだ、一つ我々から提案があるのだが……君たち「アナザーテイルズ」もまた、我々と共に最速の世界を体感してはみないだろうか？明日の土曜日もしくは明後日の日曜日、我々はデイメンション・シユバルツバルトのハイウィンド・エリアにて待っているぞ！是非とも良き返事を期待している！フハハハハハハ！】

なんだかもうメッセージの段階でお腹いっぱいだというか開封した直後からゴミ箱に叩き込みそうになるカロリーの高い文面で、「パロツツ・パーティー」なるフォースから「最速の世界」へのお誘いが届いていたわけなのだが、GBNにさほど明るくないリリカにとつてそれは幾つものクエスチョンマークで脳裏を埋め尽くされるようなものだった。

「パロツツ・パーティー……？」

「確か、わたくしの記憶が正しければ『バンデット・レース』の王者にして胴元を務めているフォースだったはずですわ」

小首を傾げて、ぷすぷすと頭から黒煙を噴き上げそうになっていたリリカの疑問を汲むように、カエデが答えてみせる。

バンデット・レース。

それはGBNで主宰されるレースイベントと大きく異なり、端的にいうならばバーリ・トワード（なんでもあり）の一言に尽きる魔境じみたレース競技の名前に他ならない。

コース外からの攻撃以外の全てを認めているそのレースは、極端な

話アトミックバズーカやマルチランチャーパックから発射される核弾頭によつてコースを破壊することさえレギュレーションの中で認められており、飛行もしくは走行中の相手を何らかの手段で攻撃する、通常のレースミツシヨンのレギュレーションであれば即座にアウトで一発退場となる危険行為も「あり」として認められた、刺激的という言葉で済ませるには些か過激な競技だ。

だが、ただ単に機体の速度だけを競うのではなく、度重なる妨害を切り抜けたり、逆に相手を破壊してゴールするという荒唐無稽な戦術も成立しうるその戦いは通常のレースとはまた違った駆け引きが生まれるために、以前からマニアックな愛好者が多かつたとされている。

そして、その代表者こそが「パロツツ・パーティー」というフォースののだ……と、いうところまでが、カエデの知る範囲だった。

「以前は野試合で行われていましたけれど、公式化されたことで毎週の水曜と土日に試合が行われているのですわ」

「公式化ねえ……まあ何があつたのかは大体想像つくけど」

「ええ、かねてより騒音が問題視されていたところを、『リビルドガールズ』のチイによつて運営へと騒音対策と公式化の提言がなされたらしいですわ……と、それはともかく。リリカさん、これは結構名誉なことですよ」

リリカの手を取つてカエデは目を輝かせるが、「バンデット・レース」とやらのレギュレーションも危険なら、その「パロツツ・パーティー」とやらが何なのかも知らないリリカにとってはちんぷんかんぷんだ。

小首を傾げたまま、リリカはきらきらと子供のような眼差しを向けているカエデへと問いかける。

「え、えつと……その、『パロツツ・パーティー』って、有名な方なんですか……?」

「ええ、色々な意味で有名ですが……まあそちらの方は会えばわかりますわ。ただ、この『バンデット・レース』における絶対王者が彼らだということは確かですわね」

確か、敗北した経験はチャンピオンと組まれたエキシビジョンマッチそれだけだとか。

カエデが捕捉したその言葉にリリカは目を丸くする。

チャンピオンはチャンピオンだから例外の枠に置いておくとしても、そんな危険極まりないレースを幾度となく制してきた集団からの因果かブランシユの必殺技が評価されてお誘いを受ける、というのはカエデが言う通り確かに名誉なことなのだろう。

だが——それはそれとして、ブランシユアクセルには課題が多い。特に自壊してしまうところは明確な欠点だ。

それも含めて、彼らは自分たちに誘いをかけたのだろうか、リリカは小さく頭を抱える。

「リリカちゃんリリカちゃん」

「……お姉ちゃん？」

「迷ってるなら、一度飛び込んでみるのも一つの手だよお」

少なくとも、スピードに関してはあの人たちはスペシャリストだからねえ、と、ミワは付け加えて小さく一つ欠伸をする。

パロツツ・パーティー。バンデット・レース。

そこに不安がないかと問われて首を縦に振るかと言われれば答えは否だ。

それでも、自身の奥底に眠っている不安を照らし出すようなミワからの提案に、リリカはどこか天啓を得たような気分になっていた。

確かに、彼らが最速を追求するスピードに関してのスペシャリストであるならば、ブランシユアクセルとその欠点について尋ねるいい機会だろう。

困ったように彷徨うリリカの視線を肯定するようにミワとカエデが頷いたのを見ると、リリカは意を決して、その挑戦状を受け取ることを決めるのだった。

### 第三十一話「ハイウェイ・スター狂詩曲（ラプソディ）」

それはあらゆる意味で、この広大なGBNに遍く名を知らしめていた。

曰く、最速の世界を真に見た王者たる不死鳥。

曰く、数々の伝説を作り上げて尚チャレンジャーであることを忘れない紳士たち。

曰く、約千六百八十万色に輝く変態の編隊。

フォース「パロツツ・パーティー」を巡る噂は、電腦の海を潜れば枚挙にいとまがない。

それは彼らの人徳もさながら、あまりにも個性的すぎる見た目と、そして個性的すぎるガンプラが無法地帯そのものなレースを繰り広げているという奇行が理由の八割を占めており、「パロツツ・パーティー」といえば変態の編隊である、というのがGBNにおける一種の共通認識であることはいうまでもない。

カエデが「会えばわかる」と言っていた通り、今リリカの目の前にいる人物は、鳩の頭をデフォルメしたような被り物に全身タイトという、現実で遭遇したなら二秒でエマーゼンシーコールに指が伸びかねない出で立ちをしていたものの、その物腰は極めて柔らかいものであった。

「ハハハハハ！ フォース『アナザーテイルズ』の諸君！ 今日私の誘いに応じてくれたこと、なによりも光栄に思うと同時に深く感謝を申し上げます！」

そのダイバールックからは想像もできないほど真摯で丁寧な姿勢にリリカは温度差から風邪をひきそうな感覚に陥るものの、求められた握手に応じてその手を取る。

ごつごつと骨張った感触はやはり、それが疑似的なフィードバックであるとわかっていても、ミワやカエデと違う、男の人特有のものであるのだな、と、半ば現実逃避のようにリリカはそんなことを思っていた。

「い、いえ……私たちも、その……お誘いいただいて、ありがとうございます」

います……」

天才と何とかは紙一重だというが、この変態じみた格好をしているダイバー、「ハート」も正にそれを体現しているのだろう。

相変わらず、自分の何に惹かれたのかよくわからないままに握手を交わして、リリカは引きつった愛想笑いを浮かべて彼の言葉にそう答える。

「ハハハハハ！ 緊張しているのだな、だが気持ちにはわかる！ この『バンデット・レース』……愛機を危険の中に晒すことに違いはない！ しかし、しかしだ！ 君たちはレースを終えた時、その中に一筋の輝きを見出せると見て、私は招待状を送らせて頂いたのだ……是非ともその、秘めた情熱をサーキットで開花させてもらいたい！ 私が望むのはそれだけだ！ ハハハハハ！」

やたらとテンションの高い笑い声をあげるハートにびくびくと怯えながらも、リリカはその彼をして「危険」だと言わしめる「バンデット・レース」へと想いを馳せる。

GBNにおいて、各種ディメンションが擬似的に四季を再現して暦とリンクさせている中で、このディメンション・シユバルツバルトは常闇に覆われた、極圏をイメージした設計がなされている。

そしてその中心に聳える「ハイウインド・エリア」が人工の星々を湛えるメガロポリスであるのは、開発者の趣味であるという他にない。

眠らない街に、永遠に輝き続ける百万ドルの夜景。

当初はその光景を楽しんでもらうために設計された「ハイウインド・エリア」であったが、今は紆余曲折を経た末に、「走り屋たちのペリシア」と呼ばれる、最速の世界に夢を見る者たちの聖地ともなっているのだ。

「さあ、張った張った！ 今宵の対戦カードはちよいと特別だぜい、にーちゃんねーちゃんたち！ なんとあの絶対王者『パロツツ・パーティー』が直々に対戦相手として指名した新進気鋭のガールズフォース、『アナザーテイルズ』との戦いだ！ 実力は未知数、故にオッズも未知数だ！ さあ堅実に行くか、夢を見るか！ ベットは試合の五分

前まで受け付けてつかんね！ 『アナザーテイルズ』のデビュー戦に花を添えるって意味でも、じゃんじゃん賭けてってねい！」

そして、集合場所に指定されたハイウィンド・エリアの一等地に聳え立つバーの一角で、いつぞやは宝探しミッシェンで盛大に爆死を遂げて、いつぞやはリリカが直々にアドバイスを貰ったことのあるELダイバー、チイが巧みな弁舌でトトカルチヨの機運を煽り立てていた。

以前は非公式の野試合であった「バンデット・レース」を公式化するにあたって、胴元の代理人として「リビルドガールズ」がトトカルチヨの賭け金における一割を受け取るという約束をGMへと取り付けた故にこんなことになっているのだが、そこは銭ゲバ、流石に口が上手いものだともミワとカエデは嘆息する。

今日は珍しく、「リビルドガールズ」の他の面々は姿を見せていなかったものの、リリカにとってはそれが日常茶飯事なので気にはしていなかった。

その代わりといつてはなんだが、テーブルにそのガタイのいい身体を押し込めるように腰掛けている偉丈夫——「BUILD DIVER RS」のカザミたちを始めとした面々が、面白そうだとばかりにコンソールを開いて、賭け金をレイズする。

「噂にや聞いてたけど、こいつがバンデット・レースか！ しっかしあのチイって子は口が上手いぜ」

「……確かに。シーサイドベース店で営業してる時もメツキのキットとかをうまく他の人に売り捌いてるし」

『『会いに行けるELダイバー』でしたよね、ヒロトさん、メイさん！』  
「ああ、パル……まあ出自を考えれば私の姉か妹のどちらかになるのだろうか」

ノンアルコールカクテルに口をつけながら、「もう一つのビルドダイバーズ」の面々はそれぞれに言葉を交わしながら、せっかくだからとばかりにカザミの後に続いて、小額ではあるものの一口ほど、賭け金を積み上げていく。

「くあ……なんだかなんだか、ミワたち、期待されちゃってるみたいだ

ねえ」

「レギュレーションこそ違えど絶対王者から指名を直々に受けているのですわ、これぐらい当然でしょう。そして……こうも期待されれば、俄然やる気が出てくるというものですわ」

ミワは欠伸交じりにそう呟いたが、カエデが言う通りここ最近「パロツツ・パーティー」へと挑戦上を叩きつけるダイバーたちは数多かれど、彼らが直々に挑戦状を叩きつけてくるというのは異例の事態なのだ。

慣れない好奇の視線に肩を竦めながらも、リリカは今日に向けて調整していたAGEEーブランシュ……の、水中専用として作った装備であるテイターニア装備に想いを馳せていた。

ブランシュアクセルが機体に負担をかけている理由がもしもGバウンサーの、軽量化された手足を使っていることが問題であるのならテイターニア装備を標準化すればいいし、それでも問題があるなら――と、いった具合に焦りと不安を表情に滲ませたりリリカを、ミワが背後から抱きしめる。

「どしたのどしたの、リリカちゃん？」

「あ、お姉ちゃん……えっと、その……大丈夫、今回のレース……負けたくない、って」

「だよねだよねえ……ミワたちは初心者もいいとこだけど、だからって負けること前提で戦っても面白くないからね」

「あら、珍しく意見が合いますわねミワさん。そしてリリカさん……わたたくしも心は同じですわ、そろそろ参りましょうか」

観客たちがどんだんチイの口車に乗せられて、一万だの五万だの、どんだん賭け金の総額が釣り上がっていく様を横目に見ながら、リリカたちは決戦の舞台となるメガロポリスの大動脈、「ストレイ・ハイウェイ」に向かって歩き出す。

バンデット・レース。山賊たちのように無法こそを法とする、しかしそこには純然たる駆け引きが存在する野蛮なレース。

そのワイルドさに惹かれているのかそうでないのか、賭け金を積み上げていく層にはどこかヤンキーじみたリーゼントに特攻服といっ

た出で立ちのダイバーもいれば、そんな世界とは無縁な、キラキラしたコーデで自らを飾り立てているダイバーもいる。

改めてGBNというゲームの奥深さというよりは底知らなさを噛みしめながら、リリカはどこか祈るように、小さくきゅっ、と拳を胸に抱き寄せるのだった。



ストレイ・ハイウェイはその名の通りこのメガロポリスを一周する都合で、各所にヘアピンカーブが設けられているだけでなくルートもわかりづらいという特徴を抱えたコースだった。

恐らくは普通にレースを行うだけでも手に汗握る決戦が拝めそうなこのハイウェイは今、「アナザーテイルズ」の三人と、そして「パロット・パーティー」から選抜された三人組以外を拒むかのように、ビームロープに閉ざされている。

スタートを切ってから即座に駆け抜けていく、ホットスクランブルガンダムの改造機——スタビライザーにあたる部分にプッチガイの頭部を改造した、鳥の頭を模したオブジェを増設し、更にマジョーラカラーをフル活用し、光の反射で約1680万色に輝く機体である「パロットスクランブルガンダム」は、最初からアクセル全開といった風情で、リリカたちを追い抜かんとしていた。

『ハハハハハ！ 心地よい風だ！ そうは思わぬかね、「アナザーテイルズ」の諸姉たちよ！』

かつて「リビルドガールズ」と戦った時のことを思い返ししながら、ハートは出遅れたといえども自分たちの背後に位置取って、付かず離れずといった距離感を保っている三人へと問いかける。

「どうだろうねえ……でもこのレース、なんでもあり、なんでしょく？」

『ムツハハハハ！ その通りだミワくん！ 梃子でも核でもなんでもありだ！ さあ、君たちの本気を見せてくれたまえ！』

白鳥の被り物に、例によって真っ白な全身タイツという通報待った



なしな出で立ちをしているダイバー、「チョウ」が、リーダーであるハートに代わって、ミワの問いへとそう答える。

ならば、遠慮などする必要はない。

ミワは腰部からキャリコム950Aを模したサブマシンガンを左手で抜き放つと、容赦なく先行するパロットスクランブル三機に向けて撃ち放った。

だが、それを予見していたかの如くハートたちは最低限の動きで弾幕砲火から逃れて、ストレートをぶつちぎっていく。

「やっぱり足止め程度にもならないねえ」

「百戦錬磨のレーサーとは聞いていましたが、これほどとは……」

「……で、でも……なんでもありませんよ、このレース……」

口惜しげに親指の爪を噛んで怒りを滲ませるカエデを制するかのように、リリカは再度レギュレーションを確認し、そしてこの先にあるコースをコンソールに映し出す。

今は長いストレートが続いているが、この先に待ち受けているのはヘアピンカーブが連続するコーナーだ。

必然的に減速を要求されるそこに今の速度を維持したままハートたちが突っ込んだのであれば、普通ならば壁のシミになってもおかしくない。

そして、このレースは基本的になんでもありだ。

リリカが言わんとしていることを察して、ミワははっと目を見開くと、足を止めて、ツダのものではなくオリジンザク系のキットからコンバートしてきた対艦ライフルを構える。

「なるほどなるほど……ミワも頭に血が上ってたみたいだねえ、リリカちゃん、流石だよ」

「なら、どうするつもりですか?」

「作戦は一つだけだよお、ミワたちの中であの奇妙なガンプラに速度で勝てそうなのはリリカちゃんのブランシュだけ、ならミワたちはそのサポートに徹すればいいんだよお」

ミワが素早くコンソールを操作して、表示されたマップの中でヘアピンカーブに差し掛かる第一コーナーに、赤い点を一つ打つてみせ

る。

「このカーブをカエデさんのツインバスターライフルで撃ち抜いて。その後は……ミワがやってみるから」

いつになく淡々と、スコープを覗き込みながらミワは語った。

そして、カエデもリリカが脳内に描いていたロードマップをなぞるかのよう、その作戦の趣旨を理解する。

要するに、ヘアピンカーブのコーナー、その壁を撃ち抜くことで即席の散弾として三機のパロツトスクランブルにダメージを与えたところを、リリカがブランシユアクセルによってぶつちぎる。

組み立てられた勝利への方程式は、まさに山賊の名を冠するに相応しい野蛮で粗野なものでこそあったが、このレースはそういう外道の戦術さえもちゃんと容認しているのだ。

よって、リリカもミワもカエデも罪に問われる筋合いはない。

ぐんぐんと距離を離そうとしているパロツツ・パーティーの面々から少し出遅れつつもリリカとカエデはその背後について、そしてミワは外壁が崩れればピンポイントでの狙撃ができそうなポジションに機体を寝そべらせて、スコープ越しにその未来が訪れるのを、息を潜めて待ち続ける。

『さてさて、奇妙なことになってきたぜい！ 「アナザーテイルズ」の一人が完全に足を止めたあ！ さあさあ今宵はどんな作戦が飛び出るのか、そしてどんどんオツズの倍率は変動していく！ 戦いの行方からは一秒だって目が離せないぜい、にーちゃんねーちゃんたち！』  
『なんとというかお前はブレないな、チイ。しかし……ここで彼女たちが何かを仕掛けてくるのは確実と見ていいだろう』

E.L.ダイバーのよしみで、ということとで解説を務めることになったメイが、チイの実況に対して淡々と補足するが、その声さえも今のリリカたちの意識からは遠く切り離されていた。

ヘアピンカーブへと突入するまでは残り少ない。

ぴたり、とカエデもまた足を止めて、そしてリリカも立ち止まって、「パロツツ・パーティー」が先行していくのを棒立ちになって見送っていく。

『おつと!? こいつは捨てゲーか!? そりゃあちよいとただけないねい……さあどう見る、解説のメイねーちゃん!』

『彼女たちは何か狙いをつけている。勝負を放棄したとは考えづらい』

レモンスカッシュを淡々とすすりながら、メイはぶつきらぼうにチイが煽り立てた言葉を否定する。

そうだ。メイが呟いた通り、「アナザーテイルズ」は、リリカたちは、決して勝利を諦めたわけではない。

五、四、三、二——カウントダウンと同時に先行するパロットスクランブルたちが射程圏に入ったのを、そしてヘアピンカーブでの事故を防ぐために減速をかけたのを確認した上で、カエデはツインバスターライフルのトリガーを引く。

「今ですわ、リリカさん!」

『ぬううううおおあああつ!』

完全に不意を突かれた形となったパロット・パーティーの三機は大きく飛行姿勢を崩していたものの、ツインバスターライフルからの直撃は免れていた辺り、そこは絶対王者と呼ぶべき所以なのだろう。

だが、第二波として待ち構えている瓦礫の散弾を避けることは、飛行形態に移行しているパロットスクランブルでは極めて難しい。

機体の姿勢を乱しながらもなんとかヘアピンカーブであつた場所を駆け抜けんとしているハートたちはしかして、ミワのキリングレンジにも収まっていた。

「……そこ、そこだよお! リリカちゃん!」

けたたましい金属と火薬の咆吼と共に打ち出された徹甲榴弾は、運悪く最後尾を飛行していた、カラスの被り物に黒い全身タイツというダイバー……「カーラ」が操るパロットスクランブルに直撃し、その誘爆は「チョウ」の機体をも巻き込んで炸裂する。

——好機があるならば、ここしかない。

ミワとカエデに託された可能性を形にすべく、リリカは迷いなく必殺技の発動を選択して、スロットルを全開にした。

「……ブランチュアクセル、ダブルブースト!」

ヘアピンカーブはツインバスターライフルの一撃でその壁を撃ち抜かれたことで、隙間というにはあまりにも大きすぎる空洞が穿たれている。

基本的に、バンデット・レースにおいてコース外と見なされているのはビームロープの外側であって、その内側であれば壁を飛び越えようが穴が空いたところから駆け抜けようが、何一つ問題はないのだ。『おつと!?』こいつは偶然だがチイたちが狙ってたのとおんなじことをやったぜ、「アナザーテイルズ」！ あんときや火力が足りなかったから負けちまったが、今はハートの旦那もダメージを負っている！ さあ、さあ、この試合の行く末はどうなると思う、解説のメイねーちゃん！』

『やるな、彼らも……なんでもありというルールを逆手にとつて、そしてトランザムシステムを搭載しているわけでもない機体が加速装置という切り札を発動させる。まさに隙のない作戦だ。だが』

『だが、つてのは一体どういうこつたいメイねーちゃん!?』

『……これで止まるなら、彼らは王者と呼ばれていない』

メイが淡々と解説した通りに、爆炎の中から駆け抜ける機影はAG Eー1ブランシュティーターニアだけではない。

『ハハハハハ！ やるではないか、少女たちよ！ だがこの私も全力を出させてもらうと言った！ これは……彗星だッ！』

全身をトランザムシステムのような紅蓮に染めたパロットスクランブルガンダムが、一足先にヘアピンカーブだった場所を駆け抜けたリリカに追いつがらんと、猛スピードで追隨してくる。

紅の彗星。彼ら在必殺技として搭載しているそのシステムは、トランザムシステムと極めて外見こそ近いものの、その本質を異にするものだ。

あくまでも「紅の彗星」が重んじているものはスピード。そしてそれは、二倍速になった程度では足りないとはかりに、先行するAG Eー1ブランシュティーターニアへと見る見るうちに食らいついてくる。

「……………」

リフレインしたのは、リリカの中の苦い記憶だ。

あの時、ミワを助けるためとはいえ四倍速を起動したことで、AGE―1ブランシユは粉々に砕け散ってしまった。

確かに今、光波推進システムと四倍速を組み合わせたなら勝機は見出せるかもしれない。

ラストの直線、交じり気なしのストレートに勝負は差し掛かっている、そしてハートが操るパロットスクランブルは、すぐ後ろに迫っている。

——なら、判断している時間はない。

「……ごめんなさい、ブランシユ……」

リリカは眦にじわり、と涙を滲ませて、その発動を承認した。

——ブランシユアクセル、スクエアブースト。

薄く形がいいリリカの唇が紡ぎ出した言葉と共に、二倍速で動いていた機体が更に二倍、四倍速まで高速化される。

『なんとッ!?!』

突如として距離を突き放したAGE―1ブランシユテイターニアへと向けて、ハートが操るパロットスクランブルは首をぐるぐると回転させながら、目に当たる部分に設けたメガ粒子砲での妨害を試みたが、それさえ振り切って、放たれた銀の弾丸となって、AGE―1ブランシユテイターニアは、リリカはゴールに向けて駆け抜けていく。

「……っ、やあああああッ!」

『……ッ、ゴオオオオオオル! ゴールだ! ゴールしたのは、「アナザーテイクルズ」! そしてダイバー「リリカ」ねーちゃんが操るガンダムAGE―1ブランシユテイターニアだあああッ!』

ゴールの白線を通り過ぎて、自壊していく機体に涙を零しながらも、リリカは確実に、フォースとしての栄光をその手につかみ取っていた。

勢い余って二周目に突入しようとしたAGE―1ブランシユテイターニアは、必殺技という魔法が解けたことで内側から爆ぜるように砕けて、テクスチャの塵へと還っていく。

悲喜交交といった風情の観客たちは、チケットを破り捨てて地面に叩きつけたり、隣人と抱き合ったりとその様子は様々だ。

そして、機体が破損したことでぽつりとストレイ・ハイウェイに佇むリリカは、まるで世界が終わったかのように、いつまでも浮かび続ける電子の月を見上げて、はらはらと、喜びと悲しみ、そして愛機への申し訳なさが縦糸と横糸を織りなす、ないまぜの涙を零し続けるのだった。

### 第三十二話 「緋き狙撃手（スナイパー）」

王者「パロツツ・パーティー」敗れる。

そのニュースは多かれ少なかれ衝撃をもって、GBNの中に伝播していた。

かの無法地帯、何でもありなルールにおいてチャンプ以外の相手には敗北を喫したことがほとんどない絶対王者にして変態の編隊が、無名のフォースに敗北を喫したというジャイアントキリングに、ある者は歓喜とともに大量のビルドコインを手に入れて、ある者は破りちぎったチケツトを床に叩きつけて——またある者は、ライブモニターからその様子を眺めていた。

「まあ……あの鳥さんたちが敗れるとは、わからないものですね、お兄様？」

「……常日頃から言っているだろう、ユユ。彼らが慢心していたとは思わないが、耐久値が削りきれられない限りGBNでは負けじゃない。いつだって逆転のチャンスがそこにあるからこそ……僕らは臆病なぐらいでちょうどいいのさ」

ハードコアデイメンション・ヴァルガでいつもの修練を終えた「F O Eさん」の二つ名を戴くダイバー、キョウスケは、長い黒髪をいわゆるお嬢様結びに括った、黒い和装に黒いリボンという、自身と同じ黒尽くめの出で立ちをしている妹——ダイバーネーム「ユユ」へとそう語る。

事実、「パロツツ・パーティー」が一種の切り札としているキモい、もとい独特なセンスをしている、ゲルズゲーとグラブプロとベアツガイⅢをミキシングしたモビルアーマー、「ドードラブローズゲー」は投入していなかったものの、ハートたちの走りは一切手を抜いていない、全力のそれだった。

コースをぶち抜くという外道にして、あの何でもありなレースにおいては王道な戦術を成功させた要因はいくつかあるが、ツインバスターライフルの威力、そして狂った狙撃精度で徹甲榴弾を当てた狙撃手の実力、最後にあの、機体の速度を四倍まで加速させた白いガンダ

ムことAGE―1ブランシユテイターニアの必殺技。

どれ一つ欠けたとしても、そこに「アナザーテイルズ」の勝利はなかったといってもいいだろう。

誰が詠んだか知らないが、「敢えて行く者が勝つ」という格言じみたものがGBNには存在している。

ユユはその格言を地で行くかのように、一か八かの賭けを成功させて勝利を掴み取った「アナザーテイルズ」の、そして機体を全壊させてでも乾坤一擲を成したりリカ存在に、ぞくりと背筋を震わせる。

「嬉しそうだね、ユユ」

「ええ、お兄様……ユユは確かに心打ち震えております、あの勇氣ある戦い、そして覚悟……並大抵のダイバーにできることではありません。故に……ユユは少し、『アナザーテイルズ』に興味が湧いてまいりました」

ユユは基本的に、キョウスケと同じくソロを専門として活動するダイバーだ。

戯れに傭兵を試してみたり、各<sub>各</sub>テイメンションを回って、有望そうな相手にはフリーバトルを申し込んだりしているが、基本的にその在り方は孤高を貫くかのようなものであり、そんな妹が誰かに興味を持つこと自体が珍しく、そしてキョウスケにとつては喜ばしいことだった。

キョウスケがソロを専業にしているのは一種の縛りプレイ、というよりGBNの黎明期からそうしていたことを貫いている、ある種の習慣のようなものであったが、ユユのそれは自身を真似ている側面の方が強い。

今更になってプレイスタイルを変える、というのも性に合わないと思っているキョウスケがユユに対していえた義理ではないのだが、歳の離れた妹はまだまだ若いものだから、GBNにおける多様な楽しみ方を味わってほしいのだ。

そういう意味ではユユもキョウスケも互いにブラコンでありシスコンであるともいえた。それも、重度のものである。

「アナザーテイルズ、か」



かつて自身が遭遇した「リビルドガールズ」とどこか似たような響きを持つ名前を誦じて、キョウスケは顎へと指をやつて、何かを考へ込む。

ユユが兄以外のことまでここまで心惹かれたのもまた珍しく、それが何故なのかという答えは自問しても出てこない。

だからこそなのだろう。兄と同じように頭の中でその感情をもたらしたフォースの名前を浮かべながら、ユユはしばらく歓喜と落胆に湧くライブモニターを見上げるのだった。



「フハハハハハ！ よもや我々が敗北しようとはな！」

「ハハハハハハ！ だが、良いゲームであつたぞ、『アナザーテイルズ』。目眩く最速の世界を、君たちも楽しめていたなら何よりだ」

敗北したのにも関わらず嬉しそうな高笑いを上げて、ハートはリリカに対してグッドゲーム、と、手を差し伸べる。

確かに内容を鑑みてみれば、グッドゲームといつても差し支えのないジャイアントキリングであつたし、あの時の作戦が上手くいったから勝利できたという嬉しさも、リリカの中に確かに存在していた。

だが——それはそれとして、AGE—1ブランチユが根本的に抱えている問題が浮き彫りになってしまったことで、リリカはどちらかといえば喜びよりも悲しみに感情の針が振れていたのだ。

「…………、こちらこそ、グッドゲームでした…………」

「む？ リリカ君、少しばかり浮かない顔をしているな。最速の世界はお気に召さなかつたかな？」

「あ、いえ、そんなことは…………ただ、その」

「ふむ、何か問題を抱えているのだな。我々で良ければ相談に乗ろう」  
ダイバールック以外は至極真つ当な思考回路をしているハートたちは、リリカが微かに表情を曇らせたのを見逃さず、そう提言する。

リリカにとっては、願つてもないことだった。

ただ、なんだか催促してしまつたようでも申し訳なさこそあれど、勝

敗関係なしにこの戦いが終わったら、彼らに訊きたいことがあったのはまた確かだ。

そんなリリカの様子を察してか、ミワとカエデは黙してハートたちへの「相談」へと聞き耳を立てていた。

「……その、私の必殺技……ブランチュアクセル、っていうんですけど、発動が終わっちゃうと……ブランチュが壊れちゃって……それで、速さを、その……追求してる、ハートさんたちなら、何か原因がわかるのかな、っ……て……」

すー、はー、と深呼吸をすると、ぼそぼそと最後の方は途切れ途切れになっていたものの、リリカは勇気を振り絞って自身の相談を、ハートたちへと持ちかける。

ブランチュアクセル自体は強力な必殺技に違いないし、リリカもそれがハズレだとは思っていない。

だが、使った後にいつも自壊していたのでは話にならないし、何よりも心が痛む。

だからこそ、何か解決の糸口になるものがあればと、リリカはハートたちにその相談を持ちかけたのだ。

「ふむ……それならば、一つだけ考えられることがある」

「……ほ、本当ですか……!?!」

「ああ、本当だとも。我々のパロットスクランブルも機体を高速化させる必殺技を持っているが、それでも機体が自壊しないのは過剰な出力を逃すための機構を設けているからだ。リリカ君、見たところ君のAGE―Iブランチュにはそれが足りていない……故に、自壊してしまうのではないだろうか？」

システム側の問題だといわれてしまえばそれまでではあるが、と付け加えてハートは静かに瞑目する。

GBNにおいて、ガンプラの造り込みがどこまで反映されて、どこまでがシステムの補助であるのか、その境界線は非常に曖昧であり、今日においても検証班の頭を悩ませていた。

ブランチュアクセルそれ自体に機能として自壊が組み込まれているのならば、割り切ってそういう技として使う他にない。

ただ、試せる方法としては機体に足りていない機能を足したり、余剰だったり過剰になっていいる部分を引いたりといった、ガンプラに対する加工が一つの解決策となる可能性は確かに存在しているのだ。

投げかけられた答えに思い当たる節を見つけ出したのか、はっ、と顔を上げて、リリカはAGE-1ブランシユの構成について考えを巡らせる。

AGE-1ブランシユは、ティターニアウェアという追加装備こそあれど基本的にはガンダムAGE-1ノーマルと、Gバウンサーのミキシングビルドだ。

そしてパロットスクランブルは珍妙な外見こそしていれども、元がホットスクランブルガンダムということで、各部の放熱であったり、「紅の彗星」発動時の過剰出力の処理が最適化されている。

いつてしまえば、時限強化を持たない機体に無理やり時限強化を持たせたことによってその反動で自壊している、という可能性は大いに考えられるのだ。

しかし——それを認めてしまうのなら。

リリカは息を呑んで、視線をうつむかせる。

「……ありがとうございます……ハートさん……」

「うむ、少女たちよ。君たちの役に立てたのであれば我々もまた本望というものだ。もしもまた、最速の世界を見たくなかったのであれば、再びここを訪れてくれたまえ。我々はいついかなる時も、チャレンジを受け付けているからな！ ハハハハハハ！」

豪快な笑い声を上げて、ハートは踵を返して去っていく。

バーの中では大荒れしたトトカルチョの結果自体に嘆いているダイバーたちは多かれど、誰も「アナザーテイルズ」と「パロット・パーティー」を責めることをしなかったのは、きっと彼の徳がそうさせるのだろうか。

見た目と中身のギャップと温度差で風邪をひきそうな感覚に陥りながらも、リリカたちは「最速の世界」に憧れる一人の紳士に、尊敬と憧憬、そして、改めてそのダイバーリックはもう少しどうにかならなかったのかという感想を抱くのだった。



——孤独と孤高に違いがあるとしたら。

どんなに味方を犠牲にしても、勝利を得る者がいるとしたら。それは赤い返り血の象徴。

味方が帰らずとも、その機体だけは帰還する悪夢の象徴。

何も、モニターに中継されていた「バンデット・レース」を観戦していたのはキヨウスケとユユだけではない。

相変わらず狂った精度で叩き込まれるピンポイント射撃に、アツシユブラウンの髪をポニーテールに結えたダイバー「サーヤ」はぎりと歯噛みする。

あの後、「バンデット・レースの王者である「パロッツ・パーティー」が無名のフォースに敗れたという噂は瞬く間にGBN、その中でも匿名での語り場として設置されている掲示板を駆け巡ったことで、サーヤが所属し、今ロビーで腕を組んでいる小柄な銀髪のダイバー、「ユキ」はそのジャイアントキリングを成し遂げたフォースへと挑戦状を叩きつけるべく、ロビーの中心でわざわざ出待ちをしているのだ。

挑戦状を送るだけならメッセージ機能を利用すればいいものの、妙に古風なりーダーの癖というよりはこだわりにも呆れを見せながらも、サーヤの内心には怒りと憎しみが渦を巻いていた。

何故未だにのうのうとあの女は、狙撃手はGBNを続けているのか。

かつて、「緋きスナイパー」……略して赤砂と呼ばれていたダイバーが、GBNには存在していたし、なんなら今も存在している。

だが、始めたのはほんの最近だが、瞬く間にBランクという有望株まで駆け上がった彼女が——ミワが何故「赤砂」と呼ばれているのか、その所以を知るダイバーは少ない。

それでも、ミワは確かにそう呼ばれ、そして恐れられてきた。

敵からも、味方からも。

何事かを喋りながら「アナザーテイルズ」の面々がロビーへと帰還してきたのを確認すると、ユキはサーヤに「ついてきなさい」と短くつけて、彼女たちの元へと歩み寄っていく。

本当なら会いたくもなければ、顔も見たくなかった。

だが、今のフォース……サーヤが所属している「エーデルローゼ」を率いているのはユキだし、彼女がリーダーとしてこのフォースを牽引することに同意したのは他でもないサーヤだ。

だからこそ、サーヤはサブリーダーとしての役割を果たすべく、「アナザーテイルズ」の元へとつかつかと踵を鳴らして歩み寄る。

「貴女たちが『アナザーテイルズ』ね」

ぶつきらぼう、単刀直入を地で行くユキの問いかけに、ロビーへと帰還してきたリリカはびくりと肩を震わせて、ぎぎぎ、と軋みを上げるようにぎこちない動きで声のしたの方へと振り返る。

「然り然り、ミワたちは『アナザーテイルズ』だけど、そういう貴女はどちら様かなあ？」

硬直しているリリカをフォローするように、ミワは小首を傾げて問いかけるが、その質問に答えたのはユキではなく、遅れてやってきたサーヤだった。

「まさか、この顔を忘れたとは……『エーデルローゼ』を忘れたとは言わないわよね、ミワ！」

「……ッ……!?!」

「……やめなさい、サーヤ」

「私たちのフォースを滅茶苦茶にしておいて……それでもまだGBNを続けているなんてどういうつもり!? それとも何、今度はその『アナザーテイルズ』を犠牲にしても勝ち星を手にしたいわけ!?!」

サーヤはユキの静止も振り切って、口角泡を飛ばす剣幕でミワへと怒鳴り立てる。

だが、二人の間に横たわっている亀裂だとか因縁だとかそういうものに縁がない、というか全くもって知らないリリカとカエデは困惑するばかりだ。

「お待ちなさいな、サーヤさん、でしたわね」

「ええ、そうよ！ 何、あんたもそいつを庇い立てるわけ!？」

「ですからお待ちなさいと言っているのですわ、わたくしはカエデ。カエデ・リーリエ。そして……今わたくしの隣にいるのがフオース『アナザーテイルズ』を率いるリリカさんですわ。それで……庇うだのなんだの仰られておりますが、一体どういうことですか?」

クールダウンしてもらおうべく、カエデは簡単な自己紹介を済ませると、ミワの側に立っているわけではないと、あくまで中立であることをわかってもらおうべく、サーヤが一方的にぶつけてきた怒りへの理解を求めて問いかける。

「……そいつが、『緋きスナイパー』って呼ばれてるのは知ってるでしょ?」

「ええ、そう呼ばれているのを何度か聞いた覚えはありますわ。ですわよね、リリカさん?」

「……え、えっと……その……は、はい……」

「じゃあ話は早いわ。そいつはね、味方を巻き込んででも相手を撃ち抜いて勝ち星を手にしてきたから『緋きスナイパー』なんて大層な名前前で呼ばれてるのよ! 私たちは……『エーデルローゼ』は、そいつのせいで滅茶苦茶になったのよ!」

感情的に言葉をぶちまけているサーヤの説明には被害者意識が強いため、全てを真に受けることはカエデも、そしてその剣幕に怯えているリリカもそうしなかったものの、彼女が言っていることが本当なら、ミワが「緋きスナイパー」と、「赤砂」と呼ばれている理由は、それこそ射線上に味方がいてもお構いなしに撃つことで、いつてしまえば味方を勝利のための駒として使い潰してきたということになる。

だが、今のミワにはそんなプレイングの片鱗は見られない。

だとすれば、このサーヤという少女が嘘をついている、ということになるが——リリカとカエデは顔を見合わせて、俯いているミワへと視線を送る。

「……事実だよお、ミワは……そうやって勝ってきたから、変な名前で呼ばれるようになったんだ」

にへら、と、いつも通りに笑おうとして失敗した、笑顔の残骸を口

元に引き攀らせながら、ミワは絞り出すような声で、リリカとカエデの視線による問いかけへとそう答える。

フォース戦というのは、勝ちを至上命題にするものだと、かつてミワはそう思っていた。

だからこそ、どんな手を使っても、それこそサーヤが言う通り味方を味方と思わず射線に誘導するための駒として利用してでも、「エーデルローゼ」を勝利に導き、そのフォースランキングをぐいぐいと上昇させてきたのだ。

だが——当然のように、その時「エーデルローゼ」に所属していたメンバーたちは、ミワがそうやって勝ちを拾うことを快く思っておらず、中にはGBNを去っていく者もいるほどに、空中分解しかけていた。

そこをなんとか立て直すべくサーヤが決定したのが、ミワの追放であり、そしてユキを代わりのリーダーとして迎え入れることだったのだ。

「やめなさいと言ったでしょう、サーヤ。私に二度も同じことを言わせないで」

「……………ユキ……………」

「サーヤに代わって私が謝るわ。ごめんなさい。そして……………こんな空気で提案するものもなんだけれど、私たち『エーデルローゼ』は、『アナザーテイルズ』にフォース戦を申し込みに来たの。勿論嫌なら蹴ってもらって構わないわ」

ユキは銀髪をさらりと掻き上げながら、サーヤの代わりにそう告げると、コンソールを開いてフォース戦の提案を「アナザーテイルズ」へと持ちかける。

だが、ユキ本人が言った通りに、こんな空気で提案を受け入れるかどうかなど、考えている場合ではないのも確かだった。

過去の痛みを抱えて俯くミワと、何かを考え込むカエデ。

そして、二人の間でリリカは視線を彷徨わせるが——

「……………わ、わかりました……………」

「リリカさん？」

「……リリカちゃん……」

「……わ、私たち『アナザーテイルズ』は、『エーデルローゼ』からの挑戦を受け入れます」

精一杯の勇気を振り絞って、ユキが持つ金色の瞳を覗き込みながら、確かに強い意志を言葉に込めて、「エーデルローゼ」からの挑戦を受け入れるのだった。



### 第三十三話 「過去の残滓、未来への欠片」

リリカがその挑戦を受けたのに対して、サーヤは正気か、という目線で相對する小柄な少女の瞳を覗き込んでいた。

「……………どういうつもり？ 貴女もまさかそうまでして勝ちたいの？」

「……………ち、違います……………！ 違うんです……………！ お姉ちゃんが……………お

姉ちゃんが、昔……………何やってたのかななんてわかりません……………でも！

でも、今のお姉ちゃんはそういうことなんてしてません！ だから

……………ぐすつ……………えぐつ……………おねえちゃんを、わるくいわないで……………う

ええええ、ん……………つ……………」

最後の方は耐え切れずに泣いてしまったものの、それはリリカの本心からの言葉に相違ない。

確かにミワには人の心がわからないようなところがある。

それはテストや模試で何事もなく満点を取っても大して喜ぶでもなく誇るでもなく戻ってきた答案を家に帰るなりゴミ箱に捨てたり、胸が大きいというハンデを背負っていても運動会で優秀な成績を収めてみせても、それに何かしらの感情を抱くでもなく、両親が玄関前に飾っているトロフィーには触れようもしない。

きつと、そんなミワだったからこそ「勝ちたい」という要望を受けて、その通りになるように、手段を問わず実行してきただけなのだろう。

リリカは涙をはらはらと零し、嗚咽を上げながらも頭の中で推測する。

それは事実だった。

ミワが味方を犠牲にしてもただ一人生き残ってきたことも、そしてそれが、「エーデルローゼ」というフォースが勝利を至上命題とするガチガチな集団であったからこそ、味方を駒の代わりにして自分がゲームメイクをすることで勝利を収めてきたのも、何もかもが事実だった。

お姉ちゃんを悪く言わないで、というリリカの言葉に気圧されながらも、サーヤは怒りに身を任せて、用事は済んだとばかりにつかつか

と踵を鳴らして去って行ってしまおう。

「……過去にこだわると、あれほどそう言ったのに。ただ私は、挑戦を受け入れたからには本気で戦わせてもらうわ。それで構わない？」  
「ええ、構いませんわ。そしてリリカさんの言葉はわたくしたちの総意だと受け取ってくれて結構ですわ」

カエデとしてもそれは同じことだった。

確かに何の断りもなくフレンドリー・ファイアをしてもキルスコアを獲得するという自分をやられていたなら、サーヤ同様に怒りを抱いていたのかもしれない。

だが、今のミワがそういう戦術を選んでいるわけではない以上、背中を預けるのには何の問題もないといえたし、むしろ「アナザーティルズ」は偵察と斥候がない、火力偏重のフォースであるからこそAWACSを持つミワにはいてもらわないと困るのだ。

「……リリカちゃん、カエデさん」

「なんですの、珍しくしおらしくなっちゃってしまっ

た」

「あのねあのね、サーヤが言ってたことは本当なんだよ？ ミワが……味方を犠牲にしても生き残ってきた、意図的なフレンドリー・ファイアを戦術に組み込んでいたのもね、全部全部……」

ミワは珍しく消沈しながら、淡々と自分の罪を懺悔する。

確かにそれは、善意から始まったことかもしれない。

魔境と呼ばれ、強豪がひしめくフォース戦を勝ち上がりたいと「エーデルローゼ」が願ったからこそミワはその願いを叶えるために、いかなる手段を用いても「エーデルローゼ」に勝利をもたらしてきた。

だが、そこに——メンバーたちの気持ちを勘定に入れたことはただの一度もなかったのもまた事実だ。

勝ちたい。だからこそ、その願いに応えるためだけに、犠牲を積み上げ、すれ違いを繰り返した末にかつての「エーデルローゼ」は摩耗して、そして空中分解を果たしてしまった。

それでも彼女たちが立て直しを図れたのは、サーヤが奮闘し、なん

とかユキをリーダーとして勧誘することに成功したからに他ならぬい。

それほど誰かにとつて思い入れが強かったフォースを壊してしまったという事実は、「緋きスナイパー」、「赤砂」と呼ばれる不名誉であり忌むべき二つ名としてミワに尚も付き纏い——否、それをミワは背負い続けているのだ。

できる。できてしまう。

天賦の才に恵まれたからこそ、「できない」人の気持ちが変わらないからこそミワはそんな蹉跌を経験しているのだし、リリカとの間に横たわっている軋轢も、元を正せば全てはそこに繋がっている。

「だからなんですかの？」

「……えっ……う？」

「だからなんだと申し上げているのですわ、わたくしがこれ以上言うのも野暮でしょうから……リリカさん。貴女が言いたいことを言うてあげなさいな」

バカじゃないのか、とでも言いたげにカエデは嘆息すると、金髪を掻き上げながら、押し黙ってはらはらと涙を零していたリリカにバトンを渡す。

「……あのね、お姉ちゃん……お姉ちゃんは、それで、その……反省して、いるんだよね……？」

「……リリカちゃん」

「……なら、ね、いいって、思う……私、何も知らないけど、何もわからないけど……今のお姉ちゃんに……それは……関係ないって……それぐらいは、ぐすっ……わかる、って……うええええ、ん……っ……」

途中からは嗚咽が混じり、最後には泣き出してしまったものの、リリカがぶつめたその言葉は嘘偽りのない、混じり気のない本音であることに違いはなかった。

恨みだとか憎しみだとか、コンプレックスだとか、そういうものが今のリリカにもないかと問われて首を横に振るのは嘘となる。

だが、そんなリリカだからこそ——ここがGBNであるが故に立ち

直れたリリカと、ここがGBNだったから怒りを抱いているサーヤとの違いはわかっているけど、ミワが抱えているものがなんであるのかぐらいは、理解できた。

なんということはない。

孤独だったのだ。ミワもまた、ずっと——長い間。

リリカが勇気を振り絞って出力した言葉に、はらりとミワの瞳から一雫の涙がこぼれ落ちていく。

ミワがこのGBNで思い知らされたのは、自分がいかにリリカを傷つけてきたのかと、そういうことだった。

できてしまうが故にできない人間の気持ちが変わらず、ただわかったようなふりをして寄り添っていたからこそ、それが爆発してしまったのだらうと、自分をいつも責め続けてきたのがミワの今までだった。

だが、そんなものは今までの話だとリリカは、そしてカエデは語る。確かにミワが行ったことは責められるべきことなのかもしれない。

その襖は終わっていないのかもしれない。

それでも、「アナザーテイルズ」として、ミワが決して味方を犠牲にしても勝ちを拾いにいく戦法を取っていない以上、それは反省をしているという認識で間違い無いはずだ。

ならば、それを責める権利などリリカにもカエデにもない。

つまりは、そういうことだった。

「……ありがとうお、リリカちゃん、カエデさん……」

これを知られてしまったら、居場所が今度こそなくなると思っただけに思っていた。

だからこそミワは積極的にリリカとフォースを組もうとせず、あくまでもパーティーとしてGBNを続けていくつもりだったのだ。

それが、カエデという仲間を得たことでフォースとなったことは少なからずミワにとっては不本意な出来事だったのには違いない。

しかし、今ミワが「アナザーテイルズ」というフォースを組んでいくからこそ見えてくるものがあって、そしてそんな自分に手を差し伸べてくれたのは、リリカがフォースの代表者として成長して、カエデ

が仲間としていてくれたからなのだ。

そこに奇妙な巡り合わせを、因果を感じながら、ミワは涙を零しつぬ二人の手を取って立ち上がる。

「……話はまとまったようね。私たちのメンバーが迷惑をかけて申し訳ない限りだわ」

「その件に関してはもう終わりにいたしましたし。リリカさんがとてもお話できる状態ではないから、わたくしが勝手ながら代理として申し上げますが——その挑戦、受けて立ちますわ、『エーデルローゼ』」「ええ、『アナザーテイルズ』。貴女たちの全力が見れることを期待しているわ」

カエデからの承認を受け取ると、踵を返してユキは雑踏に紛れていく。

リリカは相変わらず涙を零し、そしてミワもまた泣いているのなら、代表者は消去法で自分になるという理由で交渉役を引き受けたカエデだったが、その一番の理由は、抱き合い、涙を零す二人の間に割って入るのは野暮だと感じたからである。

そう。淑女たるもの野暮な行いはタブーなのだ。

だからこそ、この場はクールに去るのですわ、とばかりにカエデもまた踵を返すと、ログアウトを選択して、リアルへと解けていくのだった。



フォース「エーデルローゼ」を一言で表すのであれば、それは「強豪」の一言に尽きる。

先日戦った「エヴァンジェルミ」も一角の強敵に違いはなかったが、指揮官を引き継いでリーダーとなったユキの実力は凄まじく、個人ランク148位という、「三桁の英傑」、その上位帯に食い込んでいることが何よりもその証明だろう。

明らかな格上との戦いであつたが、敵が強ければ強いほど燃えるカエデは俄然やる気になつていたし、ミワもある種の禊をするつもりで

本気で挑もうとしている。

そんな中でリリカは一人、悶々とした感情を抱えていた。

確かにミワの過去という問題は、自分たちの中では解決を見たのかもしれない。

だが——あの「バンデット・レース」においてハートからの指摘を受けた通り、AGE―ブランチュが、ブランチュアクセルという必殺技が自壊というリスクを負っていて、そのためには放熱機構や余剰出力を逃してやるための装置が必要になるという問題は解決を見ていないのだ。

それでも、やるしかないということにはリリカにもわかっている。

決戦の場に指定されたステージは、双方に有利不利が生じない、比較的建物の少ないコロニーであるサイド7の連邦軍工廠——奇しくもミツシヨン「ガンプラ大地に立つ」と同じ舞台であった。

「わかっていると思いますけれど、あの『エーデルローゼ』は紛れもない強敵ですわ」

作戦開始前のブリーフィングフェイズ、愛機であるウイングゼロヌーベルに乗り込んだカエデが、コンソールを操作していくつかのウインドウを開きながらそう語る。

そこにはリーダーである「ユキ」をはじめとした、「エーデルローゼ」のメンバー構成だとか噂話をカエデなりにまとめたものが記されており、それはともすれば今のリリカたちにとっては絶望的でさえあった。

個人ランク148位という「英傑」にその名を連ねるユキの存在もさながら、「エーデルローゼ」における最大の特徴は、常に数的優位を保持するためにユキが遊撃手を務めて戦場を攪乱したところを、他のフォースメンバーがツーマンセルになって各個撃破するというその戦術にこそある。

以前に戦ったフォース「ボルケーノ」も似たようなことをやっていたが、ボルケーノとエーデルローゼを分かっものがあるのならばやはりそれは、「三桁の英傑」に食い込んだ絶対的エースの存在だろう。

攪乱されるなどいっても無理がある以上、乱戦は覚悟する必要がある。

カエデの後ろについてバックアップを担当する役割を任されていたリリカはごくり、と固唾を呑み込んで、その絶望を直視していた。「わたくしでもフォローできないかもしれませんわ、リリカさん。それでも……よろしくて?」

「……は、はい……頑張つて、ついてきます……!」

「その意気ですわ。ミワさんも、敵機の漸減を頼みましたわよ!」

「おっけーおっけー、任されたよお」

勝てるか勝てないかでいえば、圧倒的に後者である可能性が高い無謀な闘いだ。

それでも、ただ黙つて死を受け入れるよりは少しでも足掻いて、「三桁の英傑」と呼ばれる存在に爪痕を刻んでやらんと、三人は意識を一つにする。

やがて出撃フェイズに移行したことで、搬入口からリフトアップしていくAGEー1ブランシュの操縦桿を握りしめて、リリカはサイド7を再現した架空の空を仰ぎ見た。

「……頑張ろうね、ブランシュ……」

今はまだ、問題だらけかもしれない。

それでもいつか——一つずつ、少しずつ解決していけばいい。

カウン트가ゼロになると同時に加速し、射出されるGに歯を食いしぱりながらリリカは、そしてAGEー1ブランシュは仮想の海に再構築されたサイド7へと射出されていく。

ずしん、と重苦しい響きを立てて、逆制動をかけたスラストによって着地を決めたリリカは、早速機体をロックオンするアラートが鳴り響いたのに気付くと、操縦桿を倒して敵弾を回避する。

恐らくスナイパーが潜んでいたのだろう。

そして、リリカへの攻撃を察知したミワが射線と回避先を読んで、ツダの対艦ライフルによる偏差射撃で敵のスナイパーを撃墜する。

『噂には聞いていた通りね、「アナザーテイルズ」……だけど、こちらとしてもそう簡単に負けるつもりはない!』

ストライクガンダムをベースに、ウイングダムの要素を組み込んで、全身をいわゆるティターンズカラーに染め上げた機体——【ガンダムストライクセカンド】を駆るユキは、ミワの腕前を称賛しつつも、「三桁の英傑」に相応しい踏み込みで、リリカを屠らんと急襲をかけた。「させませんわ！」

だが、それを読んでいたカエデが二人の間に割って入り、シザーソードを振り回したことでその目論見は御破算と相成った……かのようには思えた。

しかし、ユキもまたカエデが割り込んでくることを予期していなかったわけではない。

「……後ろ……！」

敵意から位置を察知したりリリカは、ドッズライフルの三点射によって、背後から迫りくる「見えない敵」へと牽制を放つ。

そして、その「見えない敵」の奇襲を当てにしていたのであろうハイペリオンガンダム2号機に、バックラーから発振したビームサーベルをリリカは思い切り横薙ぎに振るう。

『……っ、まさかミラージユコロイドの奇襲を読むなんて！』

そのハイペリオン2号機を操っていたのは他でもないサーヤであった。

とはいえ咄嗟の切り返しに対応できる辺りは実力者と呼ぶべきなのだろう。

ハイペリオン2号機が抜き放ったロムテクニカビームナイフと、AGE-1ブランシユのビームサーベルが激突して火花を散らす。

そして、攻撃動作を行ったことでミラージユコロイドが解けた、白と紫のプリッター迷彩が施されたブリッツガンダムが戦場に姿を表した、その隙をミワは見逃さなかった。

「逃さないよお……！」

対艦ライフルによるピンホールショット。

フェイズシフト装甲がいかに物理攻撃に対する耐性を持っているとはいえ、戦艦を撃ち抜くために作られたアンチマテリアルライフルを一箇所を受ければ、流石のフェイズシフト装甲であったとしても、



「点」に集中する衝撃を完全に防ぎ切ることはできない。

『嘘でしょ、きやあああつ！』

『ミリィ！ くつ、流石は「緋いスナイパー」ってところね、まだ腕は鈍ってないと……！』

「……その二つ名は今日ここで返上するつもりだよお、リリカちゃん！」

「……油断を、してえつ！」

『くっ！』

ミワの曲芸じみたピンホールショットに意識を完全に奪われていたサーヤは、不意に背後からの急襲をかけてくるリリカの攻撃に腕部のアルミユール・リュミエールを展開することで対応しようとしたが、流石に相手が悪かった。

対ビームコーティングが施されたシグルブレイドが、展開された光の盾ごとハイペリオン2号機の右腕を斬り飛ばして、地に落とす。

『落ち着きなさい、サーヤ。貴女はこちらのバックアップ。リーシャ、ランシエ、貴女たちはあのスナイパーへの攻撃を。A G E — 1 とウイングゼロは、私が殺る……！』

そこで動揺しないのが、ユキを「三桁の英傑」たらしめている理由なのだろう。

前線から突出していたサーヤを呼び戻し、ウイングゼロヌーベルが初手からアドバンテージを確保するべく起動していたゼロシステムによる乱撃を全て回避しながら、ユキは淡々と味方に指示を下す。

ストライクセカンドの双眸が翡翠の光を宿し、ビームサーベルが誘導を切ってから仕掛けているはずのシザーソードを受け流して、ユキは体勢を崩したカエデを蹴り飛ばす。

『戦いはこれからよ……！』

そして、アンチビームシールドを前面に構えたストライクセカンド、黒いストライクは白いA G E — 1……A G E — 1 ブランシユトリリカを仕留めんと、その双眸に殺意と闘志を滾らせて、斬りかかってくるのだった。

## 第三十四話 「三桁の英傑」

ユキはただ、腰部から引き抜いたビームサーベルを振るっただけだった。

その攻撃動作自体は大したものではない。だが、三桁クラスまでのし上がったユキの実力と、そしてストライクセカンドの造り込みは推して知るべしといった風情であり、なんとかシングルブレイドによって一撃を食い止めることのできたものの、リリカはそこに「MS斬りの悪魔」の——アズスキの面影を重ねる。

対ビームコーティングが施されているにも関わらず、斬ることのできない光の刀身、そして迷いなく自分の体幹を突き崩そうと果敢に、しかしながら油断なく慎重に斬りかかってくるユキは、もはや一人の剣士と呼んで差し支えない。

ガンダムストライクセカンドは、奇しくもリリカがAGE—1ブラシユに託したコンセプトと同様に、どんな戦場でも一定以上の働きをする汎用機としての改修が突き詰められている。

それは本体にビームサーベルやアーマーシユナイダーといった固定武装を持たせ、今はエールストライカーの発展形——「エクレールストライカー」を背負っているが、必要とあればコアユニットから装備を組み替えることでソードやランチャーの機能を再現することもできるといふ、設計思想としてはかの「コアガンダム」と似たコンセプトをストライカーパックに持たせたものだった。

汎用形態であるエクレールストライクセカンドは、これといった強みや特長を持っているわけではない。

リリカのカバーリングに入ったカエデからのシザーソードによる攻撃も受け止めて、ストライクセカンドはその翡翠の双眸を煌めかせる。

だが、全ての能力が平均以上どころか特化機にも迫る完成度であるならば、それは十分に特長であり、相手に押し付け、ぶつけることが可能な強みであることに他ならない。

『サーヤ、カバーリングを。あのウイングゼロは思ったよりやるわ。』

私はAGE―1を叩く、お願いできるわね?』

『了解、私はウイングゼロの牽制に回るわ』

獅子は兎を狩るのにも全力を尽くすという。

正にその言葉を体現するが如く、ユキはリリカと合流したカエデを引き離すように指示を下して、自身は最速でAGE―1ブランチュを仕留めるといった気概で、シザーソードが振り下ろされた隙についてウイングゼロヌーベルを蹴り飛ばす。

「きゃああああっ!」

「……………、カエデさん……………」

『よそ見をしている余裕が貴女にあるの?』

意識を一瞬でも手放してしまったのが仇になってしまった。

気付けばユキは、リリカの懐まで切り込んできている。

ここで何か手を打たなければ死ぬ。

その本能が、臆病さが、リリカに一つの手を選ばせる。

「ブランチュアクセル……………ダブルブースト!」

『なっ……………!?!』

どうやら三桁クラスになったとしても、モーション自体が高速化する必殺技というのはレアなものだったらしい。

リリカは迷うことなく必殺技の発動を選択して、倍速化した機体进行を思いきり反らすことによつて、ストライクセカンドの斬撃を回避、そのままハンドスプリングの要領で距離をとつて、腰にマウントしていたドツズライフルを連射した。

だが、そこは流石に相手も「三桁の英傑」といふべきなのだろう。

初撃を外したことに驚きながらも、ドツズライフルによる三点射をリズミカルに回避すると、付かず離れずといった間合いでじりじりと、頭部バルカン砲である「イーゲルシュテルン」を放ちながらリリカを牽制する。

ダブルブースト、二倍速までならば機体にかかる負担は少ない。

発動時間を示すタイマーを一瞥すると、リリカは次の一手を組み立てるべく、ドツズライフルを連射モードから収束モードに切り替えて、高出力の一撃を目眩しに、左手に持たせたシグルブレイドで切り

掛かっていく。

『なるほど、それが貴女の必殺技というわけね』

「……ブランシュ、お願い！」

『けれど——倍速で動くとかわかっていいるなら、それを鑑みた上で間合  
いを取ればいい。二度目はないわ』

淡々と事実だけを読み上げるようにユキは語ると、目眩しである  
ドツズライフルの照射を受け止めて、その背後から切り掛かってくる  
リリカとAGE—1ブランシュの一撃を回し蹴りによつていなして  
みせる。

「が……っ……い！」

二倍速という条件は、そのまま弱点ともなりうるものだ。

人間であれば鳩尾にあたる部分、コックピットを的確に蹴り飛ばさ  
れたりリリカとAGE—1ブランシュは盛大に吹き飛んで、軍工廠のハ  
ンガーに叩きつけられる。

高い機動力というのは、確かに相手に対して大きく有利をとれる。  
だが、速度が乗っている状態というのは何かにつかつた時、その  
衝撃もまた大きくなるということに他ならない。

それでも、二倍に高速化されたリリカのモーションを完全に見切つ  
て、回し蹴りによるカウンターを叩き込んだできた辺りが、ユキを「三  
桁の英傑」たらしめている理由なのだろう。

一度ブランシュアクセルを切った上でリリカは、乱れた呼吸を整え  
ながら自身に迫り来るユキの機体と、そしてカエデの足止めを担って  
いるハイペリオン2号機を睨みつけた。

リーダーを見る限り、ミワは今回固定のポジションからの狙撃を試  
みるのではなく、相手と追いかけてこをしながらの狙撃戦に仕方なく  
切り替えたようで、リーシャとランシエと呼ばれていた二人を相手  
に、懐には飛び込ませないような距離感を保っている。

ならば自分が何をすべきかは、ただ一つ。答えは決まっている。

倍速で動くということを前提に置いた間合いの詰め方で切り掛  
かってくるストライクセカンドの一撃を受けきり、そしてユキを倒す  
ことは不可能だ。

それでも——時間を稼ぐこと自体はできる。

フォース「エーデルローゼ」の中核を担っているのがユキなら、リリカは全力で彼女を引きつけて、なんとかカエデとミワが敵をやり過ぎしてくれることを期待する他にない。

それ以外に勝利の方程式を組み立てるのならば、そこに犠牲はどうしても前提となるし、そのチャートを採用しても勝てる確率は極めて薄い。

ならば却下だと、リリカは機体に負担がかかるのを承知で、再びブランシユアクセルを、ダブルブースト——二倍速で起動する。

『言ったはずよ、倍速で動くとかわかってるなら——』

「……ブランシユアクセル、トリプルブースト！」

『何……？』

引きつける。それもギリギリまで、斬り付けられる寸前まで。

幸か不幸かは知らないが、斬られる間合いについてはリリカは各種クソゲー遍歴及びあのアズキとの戦いで、嫌というほどその身に刻み付けられている。

今度は三倍に加速したことで、AGE——ブランシユの関節が軋みを上げて、機体全体にヒビが入っていくような感覚をリリカは操縦桿から感じ取りながらも、カウンターとして放った一撃でストライクセカンドのアンチビームシールドを両断した。

三倍速による奇襲を受けるのは、「三桁の英傑」であろうともそう慣れたことではない。

そう踏んだ上での博打であったが、どうにかなんとか上手くはいってくれたようだった。

リリカは荒い息を整えながら、ストライクセカンドから高速で間合いを引き離すと、ブランシユアクセルの発動時間を一瞥し、三倍速を解除する。

「ごめんね、ブランシユ……」

結果として受けたダメージフィードバックは既に黄色信号を発しており、ブランシユアクセルもあと一回二倍速を起動させればそれで終わりだろう。

そして三倍速という切り札を使って尚、盾を喪失しただけに留まるユキの実力と、「三桁の英傑」と呼ばれる世界の凄絶さにリリカは戦慄する。

恐らくは目が慣れていないだけで、長時間ブランチュアクセルを稼働させ続けたなら、ユキは三倍速だろうが四倍速だろうが、問答無用で順応してみせるのだろう。

意識を今度は手放すことなく、最後の賭けに出るべくリリカは操縦桿をきつく握りしめる。

カエデとミワ、二人ならば——否。

二人と一緒にここまで歩いてこれた自分も含めて、「アナザーティルズ」なら、きつとその「もしも」を引き当てることができる。

例えばそれが不可能に近い確率だとしても、砂漠の粒に紛れ込んだダイヤモンドを探し当てるような行いであるとしても。

今度は三倍速を考慮して自身に踏み込んでくるユキを一瞥すると、リリカは文字通り最後の切り札を切ることを決めた。

「……ブランチュアクセル……スクエアブースト！」

四倍速。どうあがいても機体が耐えることのできない最後の手段。

それでも、これ以外にあの「三桁の英傑」を相手取る、そして時間を稼ぐ手段があるかと問われれば他にない。

『四倍速……!? 出鱈目ね、未恐ろしいわ……!』

リリカが高速化を極めたモーションで振ったシングルブレイドが、ストライクセカンドを掠めてそのVPS装甲を穿ち、抉り取る。

しかし、それとて致命には至らない。

機体が見る見る内に悲鳴を上げていくのが、だんだんと重くなつていく操縦桿からのフィードバックからそして絶え間なく明滅するレッドアラートから、リリカの指先を伝って脊髄へとひしひしと伝わってきた。

ああ、ごめんね。

ブランチュに何度も無理をさせてしまっている自分を呪いながらも、リリカは過去ではなく未来だけを一心に見据えて、機体が許す限り、その限界稼働時間が許す限り、ストライクセカンドへ向けて間合

いを読ませない覚悟で、シングルブレイドを振るうのだった。



わかってはいたが、以前から名を馳せていた「エーデルローゼ」に三桁の英傑が加わったのであれば、一筋縄で行くはずもない。

徹底的に叩き込まれたのであろう連携で、二機の「ハイペリオンG」、ハイペリオンガンダム の量産型はミワを壁際へと追い詰めるようにビームマシンガンを連射しつつ、狙撃の間合いに入らないことを徹底していた。

ツダの対艦ライフルを持ってきたのは、戦術ミスだった。

ミワは微かに後悔する。

もしもこれが比較的銃身が短く、近距離での取り回しがいいデュナメスのGNスナイパーライフルであったならば、追っ手との戦いは比較的楽なものになっていただろう。

だがそれでは開幕のピンホールショットを成功させられたかどうかに疑問が残ると、あちらを立てればこちらが立たず、といったジレンマに足首を掴まれたような気分で、ミワは小さく溜息をつく。

「……これじゃあ、どうしようもないねえ」

迎撃と自衛をこなしているように見えて、確実に狙撃手が苦手としている壁際への追い詰めと、そしてハイペリオンGという機体が有している特性、アルミューレ・リュミエールは、ABAPFSDFS——対ビームコーティング徹甲弾があれど、基本的に射撃を中心とする機体を詰ませるには十分なものだ。

『距離を詰めた！……ここから仕掛けるよ、リーシャー！』

『待って、ランシエー！』

「……貫つたよお……！」

恐らくミワが完全にステージの限界ラインを背にしたことで勝機を焦つたのだろう。

アルミューレ・リュミエールを展開したランシエのハイペリオンGが、ロムテクニカビームナイフを抜き放ちながらミワのフリーダム

ルージユへと迫る。

だが、真正面からの突撃などおやつにしてくださいと言っているようなものだ。

ミワはA B A P F S D F Sが装填されている弾倉に切り替えると、無敵を誇る「アルテミス之傘」を小型化した、アルミューレ・リュミエールごとランシエのハイペリオンGをぶち抜いて、爆散せしめた。

『そんな、アルミューレ・リュミエールが……!?!』

『対ビームコーティング……まさかそんなものまで持つてるなんて……』

残されたリーシャは、最大限に警戒しつつランシエが戦場に残していったビームマシンガンを拾うと、二丁拳銃でフリーダムルージユではなく、その回避先にはみ出た対艦ライフルの銃身を狙い撃つ。

流石にミワといえども、不可抗力として取り回しの悪さからくる被弾を阻止できるはずはない。

リーシャの咄嗟の機転によって対艦ライフルを喪失したミワに、アルミューレ・リュミエールを破る手段はもう残されていなかった。

それでも、ヤケを起こしたように、或いは最後の最後まで倒れるものかと諦めないように——ミワはビームサーベルを引き抜いて、リーシャのハイペリオンGへと相対する。

「……ごめんねえ、リリカちゃん……」

『これで終わりです、「緋いスナイパー」!』

「……でも、足掻けるだけ足掻いて……それで終わらせないぐらいの意地は、ミワにもあるんだよお……!」

ハイペリオンGがアルミューレ・リュミエールを展開できるのは、前面に限られている。

全身を包み込むことができるのは原型機であるハイペリオンガンダムだけであり、ミワにもし付け入る隙があるのならそこだけだろう。

だが、リーシャとてAランクダイバーだ。

それをわかっているからこそ、格闘戦に不慣れなミワに、機体の背後へと回らせないように立ち回っている。



ミワは最後の瞬間まで、リーシャの背後を取ろうと敢闘していたが——接近戦の経験値で優っていたのは、相手の方だった。

コックピットへとビームナイフが突き立てられる感覚と、そしてレッドアラートすらも途絶えて、「Signal Lost」の表示がコックピットを埋め尽くす。

全力は尽くした。死力も尽くした。

もし——リリカを犠牲にしても、ユキを仕留めることがこの戦闘の最適解であったとしてもだ。

ミワはそう呟くかのように静かに瞑目して、コックピットの中で宙を仰ぎ見るのだった。



いかにAランクダイバーであったとしても、深傷を負っていたサーヤでは、カエデの足止めをすることで精一杯であった。

だが、それでいい。自分は戦略のために使い捨てられるのではなく、役割を果たしているという自覚と、そして。

ブランチュアクセルを四倍速まで始動させたのにも関わらず、その動きに順応して、タイムリミットが訪れる遙か前にAGE—1ブランシュのコックピットを貫いていたユキを一瞥して、サーヤはゼロシステムを始動して切り掛かってくるカエデからの自衛をすべく、アルミューレ・リユミエールを展開する。

「アルミューレ・リユミエールとは……くっ、そこをお退きなさいな！」

『いいえ、退くのは貴女の方よ』

リリカを撃破したことで戦線に復帰してきたユキが、カエデの隙を突く形で左手を斬り飛ばして、戦場へとエントリーを決め込んでくる。

残っているのはダメージを負っているリーシャ、サーヤ、そして自分だけだが、それでも勝利には問題がない。

誘導を切り続けることで逃げに転じようとしていたカエデであつ

だが、機体にダメージを負ったことでゼロシステムは強制的に中断されている。

「これが『三桁の英傑』……いえ、貴女たち『エーデルローゼ』の力というわけなのですわね」

『その通りよ、私たちが見据えているのはこのGBNの頂へと至る未来だけ。だから、過去も何も関係なく……ただ一つのフォースとして、ここで貴女たちを討つ』

それは予告ではなく、宣言だった。

ここで命運は潰えたということなのだろう。

レーダーを一瞥すれば、ミワを仕留めたダイバーであるリーシャが、そして眼前にはアルミューレ・リュミエールを展開したサーヤが、今にもビームサーベルを振りかぶっているユキがいる。

しかし、諦めるのは自分の流儀に反することだ。

カエデは迷いなくコンソールを操作すると、四桁の数字を打ち込んでそのコマンドを承認する。

「リリカさん、ミワさん、このカエデ・リーリエ……力及ばずして申し訳ございませんわ、ですが！　ここで一矢報わねば女が廃るというもの！」

『っ、まさか……！』

「これが文字通り最後の手段、自爆ですわあああッ！」

カエデは断腸の思いで、愛機であるウイングゼロヌーベルを自爆させることを選んでいた。

アルミューレ・リュミエールに覆われているハイペリオンは無理だとしても、せめてこの「三桁の英傑」には一矢報いて死すべくと、クロスレンジに飛び込まれ、機体を切り裂かれても尚、ユキの一撃はコックピットを微妙に外れていたことで、自爆は恙無く遂行される。

だが——それでも、最後に立っていたのは、ユキとストライクセカンドだった。

VPS装甲と造り込みによって、自爆を防ぎ切っていたとはいえ、ユキの内心は決して穏やかなものではない。

だが——ここまで機体を傷つけられたのはいつ以来だろうか。

『スクエアブーストなら……お願い、ブランシユ！』

最後に自爆によつての反撃を試みてきたカエデもさながら、必殺技によるアシストがあつたとはいえ、自分に傷をつけて渡り合つてきたリリカというダイバー。

まだまだメンタル面をはじめとして抱えている課題は多かれど、その将来性は悪くない。

『……私も、まだまだというわけね』

天を仰ぎ、勝利という結果を手にながらも、それに驕ることなく、そして満足することなく——飽くなき夢と、未来への萌芽、その微かな予感を胸に抱いて、ユキはそう、静かに呟くのだつた。

## 幕間その三「美羽と梨々香の蹉跎と再生」

GBN総合スレpart. 1146

1：以下、名無しのダイバーがお送りいたします  
ここはガンプラバトル・ネクサス・オンライン、通称GBNに関する総合雑談スレッドです。

各種ミッションについてはwikiを参照した上で専門スレへ、フォース勧誘、ビルド構築、クリエイトミッションの攻略に関する相談も専用スレでお願いします。

【GBNまとめwiki】<https://www.wikiwand.com/ja/wiki/GBN>

【ミッション攻略スレ】<https://www.wikiwand.com/ja/wiki/GBN/ミッション攻略>

【ビルド構築スレ】<https://www.wikiwand.com/ja/wiki/GBN/ビルド構築>

【フォースメンバー募集スレ】<https://www.wikiwand.com/ja/wiki/GBN/フォースメンバー募集>



128：以下、名無しのダイバーがお送りします  
暇だったからバンデット・レース観てたけど今夜のオツズ頭おかし  
いことになってない？

129：以下、名無しのダイバーがお送りします  
流石に無名の新人フォース相手に「パロッツ・パーティー」が負け  
たとなりや多少はね？

130：以下、名無しのダイバーがお送りします  
あれは見てて興奮したなあ、安定取ってパロッツ・パーティーに賭  
けたから金額的には大損もいいとこだけど

131：以下、名無しのダイバーがお送りします  
すまん、何か逆張りで「アナザーテイルズ」に賭けてたら大勝ちし  
てしまった

132：以下、名無しのダイバーがお送りします  
(嫉妬で) 狂いそう……！ (静かなる怒り)

133：以下、名無しのダイバーがお送りします

いやーでも、「アナザーテイルズ」ってフォースも中々やるじゃん、あの状況で壁ショットガンにして誘爆狙いでスナイプとか中々できることじゃねーわ

134：以下、名無しのダイバーがお送りします

ゴールしてから盛大にぶっ壊れたけどなんか突然倍速化したAG E-1の改造機も凄まじかったな、色んな意味で

135：以下、名無しのダイバーがお送りします

あのレースの後に涙目になってたりリリカちゃん可哀想かわいい

136：以下、名無しのダイバーがお送りします

リリカって大分前のスレでも話題になってた初心者狩りされてた赤砂の妹か、随分立派になったもんだな……

137：以下、名無しのダイバーがお送りします

メンタル面に課題はあるけど素質はあることぐらい僕は最初から見抜いてましたよ

138：以下、名無しのダイバーがお送りします

ガンダムローズアイコン兄貴まで出役して草生える

139：以下、名無しのダイバーがお送りします

まあでもなんかいつも泣いてたりおどおどしてたりして可哀想な雰囲気は醸し出してるよなりリリカちゃん、「リビルドガールズ」のエリちゃんを思い出すぜ

140：以下、名無しのダイバーがお送りします

最近エリちゃんも明るい笑顔を見せるようになってきて嬉しいようで複雑だったからな

141：以下、名無しのダイバーがお送りします

所持金全部スったわ畜生、あんなありかよ

142：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>141

コース外からの攻撃以外ならなんでもありだぞ

143：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>141

お前バンデット・レースは初めてか？ 力抜けよ

144：以下、名無しのダイバーがお送りします

開幕で使っても出遅れるだけとはいえ核とかサテライトキャノンとかなんでもありなこのレース改めてレギュレーションが頭おかしいなって

145：以下、名無しのダイバーがお送りします

そんなレースでチャンプ以外に勝ち続けてきたあの変態紳士が倒されたとなりやそりゃ話題にもしたくなるしオッズも狂ったことになるわな

146：以下、名無しのダイバーがお送りします

当然のように例外に含まれるチャンプはさあ……

147：以下、名無しのダイバーがお送りします

コーナリングのテクニクもだけどTRYAGEマグナムのビームマント使って強化効果なしでストレートぶちぎってたからな

148：以下、名無しのダイバーがお送りします

強化効果ありとはいえあの紅の彗星をぶちぎったりリリカちゃん、実はガチ勢だったりすんのかな

149：以下、名無しのダイバーがお送りします

私にもわからん

150：以下、名無しのダイバーがお送りします

何にしても「アナザーテイルズ」か、「リビルドガールズ」みたいなことになったりすんのかな

151：以下、名無しのダイバーがお送りします

その「リビルドガールズ」もここ一年でめきめきランク上げてったからなあ、今じゃすつかりガチ勢フォースの一角だよ

152：以下、名無しのダイバーがお送りします

リーダーやってるアイカ曰く放課後の集まりみたいなのもらしいけどな

153：以下、名無しのダイバーがお送りします

あんな血生臭い放課後があつてたまるか

154：以下、名無しのダイバーがお送りします

そーいや疑問なんだけどなんでリリカちゃんの姉貴は「赤砂」とか

呼ばれてんの？

155：以下、名無しのダイバーがお送りします

コレガワカラナイ

156：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>154

(駆け出しの頃になんか色々あって二つ名持ちになったらしいけどそれ以上のことはわから) ないです

157：以下、名無しのダイバーがお送りします

確か絶対生き残って帰ってくるのかそんな感じの理由だった気がする

158：以下、名無しのダイバーがお送りします

まあ二つ名なんて別に符丁みたいなもんだからな……

159：以下、名無しのダイバーがお送りします

由来はわからないけど通じてるからヨシ！

160：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>159

マジでこれだから困る



728：以下、名無しのダイバーがお送りします

当然のように強かったな、エーデルローゼの連中

729：以下、名無しのダイバーがお送りします

開幕対艦ライフルピンホールショット決めてるミワちゃんも「三桁の英傑」にバフ込みとはいえ喰らいついてたりリカちゃんとカエデちゃんも十分すぎる、カエデちゃんなんか最後自爆してまで一矢報いんとしたしアナザーテイルズも頑張った方だよ

730：以下、名無しのダイバーがお送りします

なんか「エーデルローゼ」の奴がやたらぴりぴりしてたけどこれはあれかね、ミワちゃんと過去になんかあったパターンかね

731：以下、名無しのダイバーがお送りします

あー、思い出したわ

732：以下、名無しのダイバーがお送りします  
何をだよ

733：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>732

赤砂って通称だとピンと来なかったけど「緋きスナイパー」って呼ばれてるの見て思い出したわ、元々ミワちゃん「エーデルローゼ」出身で味方を犠牲にしても勝ちをもぎ取ってきたからそう呼ばれてたんだわ

734：以下、名無しのダイバーがお送りします

ええ……（困惑）

735：以下、名無しのダイバーがお送りします  
いやまあ戦術的にはアリなのかもしれないけどさ

736：以下、名無しのダイバーがお送りします

「エーデルローゼ」自体元々勝ちたくて集まった奴らだからそれ込みでミワちゃん雇ってたんじゃないの？今は現に「セルピエンテ・クー」で傭兵やってたユキにリーダー権渡してるし

737：以下、名無しのダイバーがお送りします

ゆるふわ眠たげお姉ちゃんがそんな外道戦術取ってたのが想像できないな、人は見た目によらないってか

738：以下、名無しのダイバーがお送りします

でも今日の試合、ぶっちゃけリリカちゃんごとユキをぶち抜いてればワンチャンあったよね

739：以下、名無しのダイバーがお送りします

それをしないってことは本人にも思うところがあったんやろなあ

740：以下、名無しのダイバーがお送りします

まあこれで禊は済んだんじゃないやねえの？知らんけど

741：以下、名無しのダイバーがお送りします

やっぱり泣いてるリリカちゃん可哀想かわいい

742：以下、名無しのダイバーがお送りします

リリカちゃんの泣き顔もいいけど時折ふにやつと笑う顔もいいぞ



ジョーイ……

743：以下、名無しのダイバーがお送りします

もしもしガードフレーム？

744：以下、名無しのダイバーがお送りします

なんだかんだここ数日で固定のファンが現れるぐらいには話題になってるんだな「アナザーテイルズ」、色々あるんだろうけど頑張ってるほしい

745：以下、名無しのダイバーがお送りします

あの変態の編隊を撃破してからこつち注目の的だしな、似たような「ビルドライジング」は専スレ立ちやっかし

746：以下、名無しのダイバーがお送りします

(・ω・) 百合の波動を感じるアナザーテイルズもスレ立つのかしら

747：以下、名無しのダイバーがお送りします

立つかもしれないけどその前に出荷

748：以下、名無しのダイバーがお送りします

(・ω・) そんなー



「負けちゃったねえ、ごめんねえ……」

フォース「エーデルローゼ」との一戦を終えた後、ガンダムベースシーサイド店を出て家路についていた美羽は、それまで押し黙っていたのが嘘のようにふにやりと緩んだ笑顔を浮かべたかと思えば、再び消沈したように眉を八の字に歪めてぼつりとそう零した。

元々フォースを組むのにもどちらかといえば反対だったのは、自身の過去を特に梨々香には知られたくなかったというのが大きい。

知られてしまった以上はこのままフォースとして続けていいのだろうか、そういう内省が美羽の中に存在しているのだ。

梨々香に謝ったのは、ただ試合に負けたからだけではない。

元々美羽は、他人の心があまりわからなかったのだ。

スカウトされて「エーデルローゼ」にいた頃も、彼女たちが「勝ちたい」と望んだからこそその結果をただ善意でもたらしていたつもりが実際はあんなことになっていて、そして。

ようやく美羽は気付いたのだ。

自分が何かを当たり前のようにやってみせてもそれに反発する人もいればそれができない人もいる。

そして、その事実を何よりも間近で見えてきたのが梨々香なのだ。突き詰めてしまえば、梨々香が部屋に籠るようになった責任の一端を担っているのは美羽自身なのだ。

妹としていくら愛しいと思っても、どれほど自分が「普通」に振る舞っているつもりでも、存在そのものが梨々香を傷つける。

その上で、善意からとはいえ人を傷つけてきた過去があると知れば、梨々香はきつと自分を軽蔑するだろう。

そうとばかりに美羽は思っていたのだが。

「……ううん、お姉ちゃんは……悪くない……悪くなくは、ないかもしれないけど……」

「梨々香ちゃん？」

「……で、でも……お姉ちゃんは、ちゃんと……今日だって、そういうことしなかったから、だから……」

だから、なんだというのだろう。

続く言葉が見つからずに梨々香は押し黙ってしまうが、それでも美羽がそこまで落ち込む必要はないし、気にする必要はないとただ伝えただけなのだ。

皆が当たり前のようにできていることが難しい。

嬉しい時に笑って、好きな時に好きなことをしたい。

そうじゃなくなったら、悲しくもないのに涙を流したりだとか、省みているはずの過去に囚われたりだとか、いつも梨々香を取り巻く環境は「皆」と違って、当たり前のように「皆」の中へと溶け込める美羽を羨ましく思っていたところが、今だっていないとはいえないのだ。

「……ありがとう。ありがとねえ、梨々香ちゃん……」

いつもとは反対に、ぽすり、と力なく梨々香の胸に顔を埋めて、美羽は小さく啜り泣くような声でそう呟いた。

美羽が涙を流しているのなんて、玉葱を切っている時ぐらいしか見たことがなかったけれど、考えてみれば当然なのだ。

いつだって完璧に見える姉だって人間で、そして人間である以上、笑っているだけじゃなく、泣きたくなることだってある。

ならば今、誰かに問われた時、どう答えるだろうか。

頼りなく、自分もつられて泣きそうになりながらも梨々香は考える。

「……あのね、お姉ちゃん……」

「……ぐすつ、なになに、梨々香ちゃん」

「……私ね、お姉ちゃんのこと……全部が全部好きだって、その……言えない……」

「……うん、わかってるよお」

「……で、でも……その、今のお姉ちゃんは、その……好きで……GBNで……一緒に遊ぶの、楽しいから、その……」

——やめないで。

それだけぼつりと零すと、梨々香はどうとう耐えきれなくなつて、一頻り泣いた。

はらはらと落涙は止まらず、嗚咽は喉から滑り落ちていく。

それでも、伝えたいことは伝え切つたと、少しだけ前を向けたような気がするの、美羽と、そしてカエデと一緒にGBNで遊んでいた

——その遊びを通して、色々なことを梨々香に学ばせていたからに他ならない。

「……ありがとう、ありがとねえ、梨々香ちゃん……次は、絶対負けないから、だから……」

——美羽も、一緒に泣かせて。

それだけ呟くと、二人は示し合わせたように互いに繋ぎ合わせた手から折り重なるように、梨々香もまた美羽に体を預けるかのように抱き合つて、巷に雨が降るように、一頻り涙を零し続けるのだった。

### 第三十五話 「私に何か足りてない」

あの後、一度二人で泣くまで泣いた梨々香が家に帰って導き出した結論は、ブランシユアクセルの構造欠陥についてだった。

姉とのわだかまりが完全に解けたとは言い難いものの、長い間言葉にできなかった思いを口にできたという事実は、梨々香を少しだけ前に進めてくれたような、そんな気がしたからこそ、それ以上互いの傷に触れることはせず、ただ慰めの代わりに、幼い頃よくしていたように互いの額に口づけを落としただけだ。

それはともかくとして、ブランシユアクセルについて考えた時、そこに梨々香の感情を抜きにして、損得だけで考えた場合、必殺技としてそれが他の面々に劣るものであるかと考えれば、答えはノーである。

GBNにおける「環境構築」と呼ばれるものは往々にして汎用型を突き詰めた、全能機といった風情の趣が強い。

それはチャンプが愛機として駆っているガンダムTRYAGEマグナムであったり、或いは「ビルドダイバースのリク」の新たな剣である「ガンダムダブルオースカイメビウス」も、原型機となったダブルオースカイからよりブラッシュアップを図りつつも、その方向性は汎用化に寄せられていることからすぐにわかる。

だが、彼らの機体が「特長がないのが特徴」であるのかと訊かれて、その通りだと答えるダイバーが一人もいないように、彼らの場合はその全能性、全てにおいて尖り切ったことがその特徴となるのだ。

つまるところ、「何か一つにおいて尖り切っている」というピーキーさは、確かに全領域で尖り切った全能性には敵わないものの、確実に機体の個性として挙げられる項目であり、そして、そういう意味ではキンキンにエッジが尖ったブランシユアクセルという必殺技は、最高に個性的で先鋭的なそれに違いない。

違いないのだが、それはわかっているのだが、どうしても納得がいかないというのがセンチメンタリズムな乙女心というものなのだ。

梨々香はスマートフォンから簡易的にログインし、最近見始めるよ

うになった、GBN内の動画配信サービスコンテンツ……G—Tubeを起動、その上でトレンドが上がっていた配信者、「クオン」の制作動画を何ともなしに見つめていた。

画面の中では、テキパキと細やかに手元を動かしていく作業を、さながら半竜半人といったダイバールックに身を包んだ少女が、今何を作るためのどんな工程をしていて、この作業はこうするといい、といった具合のことを解説している。

教え方も非常に丁寧であり、恐らく彼女ともう少しレベルが近いビルダーであるのなら確実に参考にあるであろうその動画だが、ただ、梨々香が見てもちんぷんかんぷんといった風情だった。

何をしているのかはわかるし何を言っているのかもわかるのだが、どうしてそれができているのか、どうすればいいのかわからない。

奇しくもそれは、梨々香とAGE—1ブランシユを取り巻く環境に酷似していた。

「……放熱……エネルギーの行き先……」

フォース「パロツツ・パーティー」を治めている主たる男、ハートの言葉を信じるのであれば、AGE—1ブランシユに足りていないものはその機構であり、恐らく手足の交換だとか或いは胸ダクトを削り込むだとかで対応できるのだろうが、梨々香の工作では放熱が追いつかないことは、AGE—1ブランシユテイターニアでも四倍速に耐えられなかったことが証明している。

ならば他の作品のガンダムはどうなのだろうと調べてみようにも数が膨大で、尚且つ特定の機構を持つガンダムとなると検索するのも難しいために八方塞がり、といったところなのだが。

「……いいのかな、このままで……」

梨々香の中で引つかかっているのは、もっと別な何かではないか。

AGE—1ブランシユがブランシユアクセルを発動した時点で自壊してしまうのは確かに由々しき問題で、改善すべきことに違いはない。

だが、先日の「エーデルローゼ」戦を、そして「エヴァンジェルミ」戦を振り返った時に、梨々香は前衛として役割を果たせていたのだら

うか、という疑問もまたそこに付随してくるのだ。

一人で考えていてもしようがないことぐらいは梨々香にもわかる。だが、直感的に導き出した答えもまた受け入れがたいもので——要するに、自分が納得できる答えに辿り着けないことが、ジレンマとして焦燥を煽り立てているのだ。

梨々香は困ったように細い眉を八の字に歪めて、机の上にくつろぐような姿勢で飾ったAGE—1ブランシユを人差し指でそつとつづく。

「……いいのかな、私、わかんないや……」

これ以上考えたところで、時間の無駄だ。

姉譲りの思考回路はとつくに答えを導き出し、そしてどこか虚空を見つめるように足を投げ出して机に飾られたAGE—1ブランシユも、同じことを言っているような気がしてならなかった。

そして突然に、ぴろん、と間の抜けた電子音が暗い部屋に響き渡る。

それはメッセージアプリからの通知であり、発信者は例によって美羽だった。

『お風呂上がったよ』

スタンプと共に送信されてきたそんな文面を一瞥すると、梨々香は着替えとバスタオル、そして髪に巻くタオルをセットにまとめていたものをベッドの上から手に取って、考えを文字通り洗い直すかのよう  
に風呂へと向かうのだった。



「ふむ、それでわたくしに相談というわけですね」

「……は、はい……その……お姉ちゃんとは、戦闘スタイルが、その……違うので……」

結論からいえば、自分で考えてもダメなら他人に頼れというのがリカの答えだった。

休日の昼間、いつも通りのシーサイドベース店から……ではなく、部屋の中からGBNへとログインしたりリカは、どうやら自分より早

くログインしていたらしいカエデへと、その相談を持ちかけていた。  
「……その、カエデさんから見て……私の戦い方とか、あの……ブラン  
シュの必殺技とか、どうなのかなって……私、皆の足を引っ張ってな  
いのかなって……」

リリカとしては藁にも縋る、といえは失礼だが、他に頼れそうなダ  
イバーが、それこそ何をやってるのかはわかるけど何でできているの  
かわからないを地で行くチャンプであるとか、色々多忙そうなマギー  
であるのと、何より戦闘スタイルが同じ格闘寄りの前衛ということ  
で、カエデに訊くことを決めたのである。

「ふむ……単刀直入に申し上げることしかできませんけれど、それ  
もよろしくて？」

「……は、はい……参考にするので、なんでも……」

「では、こほん……失礼ながら今のリリカさんには、『決意』が足りて  
おりませんわ！」

びしっ、と真っ直ぐに差し向けられた人差し指に宿っているもの  
は、恐らく今カエデが口にしていたそれなのだろう。

ふんす、と得意げに鼻を鳴らして、いわゆるドヤ顔で彼女が投げて  
きた言霊のボールは、リリカが予想だにしていなかったところから飛  
んできて、脳天に直撃を食らってしまったという風情だった。

「……け、決意……ですか……？」

「そうですね。『決意』とは、一度こうすると決めたら貫き通す究極の  
わがまま……しかしそれは頑迷でありながらもこの地上で最も強く、  
自由であることの証明に他なりませんことよ」

さらさらとした金髪に微かなウエーブをかけたそれを掻き上げな  
がら、カエデは独特な自論を滔々と、リリカに語って聞かせる。

「そうですね、わかりやすく換言するなら……『覚悟』ですわ」

覚悟とは、暗闇の荒野に道を切り拓く黄金の意志だとかの有名な漫  
画でも言っておりますわ、と付け加えて、カエデは少しだけ気恥ず  
かしそうに咳払いをする。

全巻コンプリートしているその漫画からもろに影響を受けている  
台詞であることが気恥ずかしかったというのもあるが、正直なところ

「エーデルローゼ」戦で大して役割を果たせなかったのは自分も同じであり、そんな自分が他人に説教をできる身分なのかと我に帰ったところもあった。

そんなカエデの内心はいざ知らず、リリカは突きつけられた「覚悟」と「決意」について考える。

確かに考えてみればいつも自分は優柔不断で、正解が分からないなら誰かが答えるのを待って、解答者に指名されることに怯え、震えていた。

だが、カエデが言ったのはリリカに決意が「足りていない」であつて、「ない」とは言っていない。

そこに何か鍵があるのではないだろうか、どうしても眦に滲んでしまう涙を拭いながら、リリカはカエデへと更なる問いを投げかける。

「え、えっと……その、カエデさん……」

「どうしまして、リリカさん？」

「……その、私に……カエデさんは、『決意が足りていない』って、言いましたよね……?」

「ええ、今のわたくしの目から見れば、リリカさんはそう映りますわ」  
「……えっと、その……なら、足りてたこと、あつたんですか……?」

私、優柔不断で何事も決められないできましたから。

リリカは肩をがくりと落としながらも、まだ細く伸びる希望の糸に、或いは嵐の海に浮かんだ舟板に縋り付くようにカエデへと尋ねる。

「勿論ですわ!」

「ひうっ」

「あら、ごめんあそばせ。ですがわたくしがこの『アナザーテイルズ』に入ったのは、リリカさんの『決意』に惹かれたからに他ならないのですわ!」

当然興奮したカエデに両手を掴まれたことで、リリカは何とも間の抜けた叫び声を上げてしまったが、そこには確かな熱量がこもっていて、嘘だとかおべっかだとか、そういう打算を一切抜きにした純粹



な、カエデ自身の心を映したとでもいうべき真つ直ぐな言葉があった。

まるで光あれ、とでもいうように、カエデはリリカの目を真つ直ぐに見据えて、あのレイドバトルを思い返す。

「リリカさん、貴女……あのレイドバトルの時、わたくしをデストロイのビームから護ってくださいましたわね？　あの瞬間、シングルブレイドでビームを切り裂くという発想を即座に実行に移したその勇気と決断こそ、リリカさんの中に眠っている『決意』の力に他ならないのですわ」

愛と勇気の御伽噺は人類のほとんどが大好きでも、愛と勇気のその前に、「決意」がなければ始まらないと、カエデは受け売りでこそあるものの、そう思っている。

例え何かを失ってでも、何かに食らいつく黄金の意志。

或いは失敗し、滑落する可能性に怯えながらも、空に聳える細い道へと一步を踏み出すような勇気を人が出したのは、「そうしたい」と強く思い込んだからなのだ。

そうしたい、そうであってほしい。

溜め込むだけではただの願望で、いずれ呪いと成り果ててしまいかねないその願いを決断によって行動へと移すことが「決意」の真骨頂であり、「リビルドガールズ」のアイカは、或いは、あの時のリリカは紛れもなくその感情に満ち溢れていたからこそ、カエデは惚れ込んだのだ。

「リリカさん、わたくしはそんなに軽い女じゃありませんことよ。貴女に並外れた『決意』があったからこそわたくしは今こうして、『アナザーテイルズ』に所属しているのですわ。ですからどうか自信を持つてくださいまし。貴女の決断であれば……その強い意志で決めたことならば、きつとそれは過つことなどありはしませんわ」

リリカの両手を優しく包み込み、胸元に引き寄せながらカエデは優雅にはにかんで、自分にできる最大限の激励の言葉を口にする。

確かにAGEE―1ブランシユと、ブランシユアクセルには問題がある。

だけど、その問題を解決するために必要な感情のところでは踏みどまっていたからこそ、自分は前に進めていない。

カエデの言い分は痛いほど胸に突き刺さるし、正論であることにも違いない。

ならば、決めなければいけない課題とは何なのか。

何を失うリスクを鑑みて、それでもその先にあるはずの希望をどのように見出すのか。

一つ疑問が解決したと思ったら、次々と降って湧いてくるいくつもの「ハテナ」に首を傾げながらも、リリカは考える。

「まあ、考えるより体を動かした方が早い、ということも往々にしてありますわ」

「……………ふえ……………」

「リリカさん、一度このGBNを見て回るのも悪くはないと思いますよ。ここには多くのビルダーがいる。多くのファイターがいる。それらを括って、わたくしたちはダイバーと呼ばれているのですから、さながら沈没船のお宝探しみたいなものですよ」

宝探しミッションは散々な結果だったのですけれど。

と、冗談交じりに激励を飛ばすカエデだったが、確かに言われてみれば、知らない誰かの何かを参考にする、というのはリリカ一人では導き出すことのできない答えであり、選択肢だった。

「……………ぐすつ、カエデさん……………」

「リリカさん？ どうして泣いておりますの？」

「……………ち、違うんです……………ぐすつ、えつと……………私なんかのために、ここまでしてくれるのが、嬉しくて、私……………」

嬉しい時は泣くものではなく笑うものだというのは、リリカにもわかっている。

それでも生来、どうしても涙がこぼれてしまうのだ。

はらはらと落涙しながらリリカはカエデが握ってくれている自身の小さな手を握り返して、そこにある温もりが消えてしまわないように、或いはマッチを燃やして暖を取る少女のように、カエデの優しさに身を寄せる。

「リリカさん。なんか、などではありませんわ。あの時わたくしに見せていただいた決意があるのなら、きつとリリカさんは……今より高く、どこまでだって飛んでゆけますわ」

「……カエデさん……」

ひし、と、握り返された手に優しく力を込めてカエデは熱弁した。

実際のところ、何の解決にもなっていない精神論であることは確かなのだが、誰かの視点を取り入れるという意味で、リリカがGBNを探訪するというのはそう悪くない選択肢だ。

このまま「頑張れ」だけを放り投げるのも失礼どころか無責任だと、カエデは指先でコンソールを操作すると、GBNまとめwikiのタブをいくつか開いて、選択肢を提示する。

「リリカさん」

「……か、カエデさん……？ これって……」

「探訪するといっても具体的にどこで何をすればいいのかがわからなくてはお話になりませんわ。だから……取り敢えずは定番のおすすめスポットを検索してみました」

そこには、アジアン・サーバーの「タイガーウルフ道場」がどうのこうののだの、ミラーミッション「四季を越えて」がどうのこうののだの、長く暗い道で迷ったドライバーに対するアドバイスの項目がいくつも並んでいる。

「……あ、ありがとうございます……えへへ……」

「なんの、リリカさんのお役に立てたのならわたくしとしてはそれだけで十分なのですわ。それに今日はミワさんもないみたいですし」「なにになにく？ ミワちゃんを呼んだかなあ？」

「なっ、いつの間に!？」

にゅっ、と生えてくるかのように、カエデの背後で密かに息を潜めていたミワは立ち上がって、少しだけ不満げに頬を膨らませると、いつも通りに捉え所のない笑みを浮かべてそう言った。

本当にいつの間にもログインしていたのやら、カエデだけではなくリリカも驚愕に目を見開く中で、ミワはカエデが開いたコンソールのタブから一つ、リリカに最も合っていそうだと思ったものを引っ張って

提示する。

「このタイガーウルフ道場……フォース『虎武龍』のフォースネストは迷えるダイバーにはおすすめのスポットらしいよお」

なんでもあの「ビルドダイバーズのリック」とか、「リビルドガールズのアイカ」もお世話になったとかなってないとか。

ミワは白紙の地図に線を引くかのようにリリカへとその選択肢を提示して、いつも通り、眠たげにくあ、と一つ欠伸をする。

「タイガーウルフ道場……えっと、ありがとう……カエデさん、お姉ちゃん……私、行ってみる……！」

なんだか怖そうな字面だし、知らない誰かにいきなり教えを乞いに行くのは失礼に当たるんじゃないかと、いくつもの懸念に足を引き止められそうになりながらも、リリカは確かに「決意」してその選択肢を選んだ。

「どういたしました、ですわ。その間わたくしは少しお暇を貰ってフリーバトルに行っておりますので、何かあったらメッセージ経由で連絡をくださいまし」

「ん、ならなら、ミワも一緒に行きたいとこだけど、これはリリカちゃんの問題だからねえ……ミワは涙を呑んでお宝探しでもするこににしたよお」

その前に欠乏したりリリカニウムを補充させてねえ、と、カエデに抱きついていたりリリカを後ろから抱きしめると、ミワはどこか残念そうに肩を落として、ミツシヨンカウンターへと並ぶ列へと溶け込んでいく。

そしてカエデもフリーバトルを求めて何処へと転移していった今、ロビーに残されたのは自分だけだ。

何が正解で、間違いなのかはわからない。

わかってしまうことが怖い。でも、それでも知りたくて。

リリカは小さく拳を握りしめる。

そして、己の中から「決意」が抜け出してしまわないように唇を引き結ぶと、件の「タイガーウルフ道場」があるエスタニア・エリアへと転移してゆくのだった。

### 第三十六話 「拳は悲しく、道のりは遠く」

裂帛の気合いを込めて振るわれた拳が、タイガーウルフ道場ことフォース「虎武龍」のフォースネストに、しゃん、と鈴を鳴らしたような音を奏でるのを、リリカは聞いた気がした。

アジアンサーバーを拠点としている名うてのランカーである男、「タイガーウルフ」が操る機体——【ガンダムジーエンアルトロン】は、果たして、目の前に相對する【ブルーフレームセカンドG】を相手に、防勢へと回らされている。

その状況が示すものも、そして「タイガーウルフ」ともあろう男を守勢に回らせている、「武器を何一つ持っていない」ブルーフレームセカンドGも、目の前にある何もかもが、タイガーウルフの弟子に案内されて、寺院の奥に設けられた闘技場の観客席に座っているリリカには理解できなかつた。

『師範は今、ちょうど練習試合をされていますので、その後ということでしょう』

丁寧に應對してくれた弟子の一人がそう言ったように、目の前で展開されているプラクティスモードのフリーバトルは、リリカと同じように、タイガーウルフへと何かしらの教えを乞いにきたダイバーか、或いは道場破りかのどちらかなのだろう。

あの後GBNまとめwikiを軽く閲覧してみたりリリカであったが、タイガーウルフ道場にはかつてテキィラガンダムを操る道場破りが度々訪れていたとか、そんな逸話が記されていたので、こういったことは割と日常茶飯事なのだろうと、リリカは推察する。

それはそれとして、武器も持たず、背中に二本刺さっているビームサーベルも抜かずに彼へと挑んでいるブルーフレームのダイバーもまた凄腕には違いない。

思わず、息を呑むほどにリリカが圧倒されていたのはその実力もさながら、ブルーフレームセカンドGを操るダイバーが使っている拳法が、我流でありながらも、どこか神楽舞を踊るように優雅で、型の切れ目を感じさせないところに、あの「MS斬りの悪魔」ことアズキの

面影を見出していたからだった。

『神楽舞・孤月、神楽舞・弦月、神楽舞・満月……！』

「……ッ、こいつア初めて相對するタイプの拳法だな……！　ベースは次元霸王流か？　いや、違うな……！」

『そう、これは次元霸王流と私の家に伝わっている神楽舞の複合拳術、私だけの拳、私だけの戦い方』

タイガーウルフのこめかみに冷や汗を滲ませるブルーフレームのダイバー、ダイバーネーム「アカリ」はただ事実を淡々と述べるかのようにそう語る。

そして、月にまつわる名前がつけられた型を一繋ぎにして、一分の隙も、そして呼吸をする間も与えずに、タイガーウルフを壁際、プラクティスモードが設定したバトルフィールドの端へと追い詰めていく。

一連の流れるような動作は水が滴り落ちていくかのように自然で、かつ激しいものだ。

だからこそ、その隙間がない拳法によって先の先を取られたことで、タイガーウルフは今、追い詰められているのだろう。

だが——恐らくは、彼も気付いていないはずはない。

アカリが操る神楽舞と拳法の複合術を見て、リリカが抱いていたのは確かにリスペクトと尊敬だったし、それに偽りはない。

それでも、アカリの戦い方にはどうしてか心のどこかに引っかかりを覚えるような違和感があるのだ。

ビームサーベルを抜かないだとか、そもそもブルーフレームという機体を選んでいるのに戦い方はレッドフレームに近い徒手空拳だとか、そういうことは些末な問題で、もつと別な、何か根本的なところに不協和音があるのではないだろうか。

そんなリリカの不安げな視線を受け止めた弟子の一人が、静かに頷く。

タイガーウルフは今、耳を澄ましている。

その微かな不協和音に、いかに研ぎ澄まされていようとも、いかに凄腕と呼んで差し支えない拳法家であったとしても、拳から伝わって

くる思いというものは、誤魔化しようがない。

だからこそ、彼の教えは全て言葉ではなく拳によつて語られるのだ。

神楽舞、朔月を起点として満月から望月へ、そして新月へと還る月の満ち欠けをモチーフとした形象拳は確かに美しく、そして恐るべきものだった。

なにせ、次元霸王流を極めた人間のように、そこには「呼吸」がほとんど存在しない。

GBNという仮想空間において何を今更、という話ではあるのだが、ここで指している「呼吸」というものは、言い換えるならば「思考の隙間」ということでもある。

人間は何かをする際に、多かれ少なかれ手順を脳内で構築してから実行に移す。

リリカの場合は、敵が遠距離にいたならまず二発の射撃を牽制として放ち、三発目の射線に追い込むことでドツズライフルを当てる、といった一連の動作にも、敵との距離感だとか機動力だとか、そもそも懐に飛び込まれそうかもしれないだとか、様々な判断がそこに伴っている。

だが、あのアカリの型は全てにおいて相手の存在を無視して——いつてしまえば、強制的に自分が踊っている舞台に引き込むことで、その判断を必要とする思考の隙間をなくし、ただ連続して型を繋げることでそれ自体を必殺の手段とするタイプのものだった。

タイガーウルフが、彼女の神楽舞を次元霸王流と似ていると評した所以はここにある。

次元霸王流という拳法もまた、特定の奥義を持たず、ただ一つ一つの型を丹念に磨き上げたその「極意」こそが必殺となるのだから。

無論リリカはそんなことなど知る由もない。

ただ、アカリの戦い方がアスキのそれと酷似している——だからこそ、浮き彫りになった違和感に気付いたというべきだろう。

瞬間、くるり、と背を向けて、露骨な隙を晒したと見たタイガーウルフの機体に、ブルーフレームセカンドGはつま先のアーマーシユナ

イダーを展開して仕留めにかかった。

——だが。

「悪いな、お嬢さん……ガンプラバトルにおいては全ての行動に意味がある！」

『まさか、背中 of 盾で受け止め……っ!?』

「そういうことだ、ここからは俺の拳で語らせてもらうぜ！」

その名の通り、縦に弧を描くかのような型、「神楽舞・孤月」を背中に装備していた盾で受け止めたタイガーウルフは、反撃の機会だとはかりに食い込んだアーマーシユナイダーの刃を、体を捻らせることで引き抜いて、バランスを崩したブルーフレームセカンドGへと強烈な正拳突きを叩き込んだ。

『か……はっ……！ 流石はあのタイガーウルフ……一筋縄では行かないと思っていたけれど……！』

「そういうこった、悪いがここからは俺の舞台に上がってもらおうか！」

『縮地、ならばもう一度……っ!?』

縮地法と呼ばれる足捌きで再びジーエンアルトロン of 懐に潜り込もうとしたブルーフレームセカンドGに、アカリに対して、タイガーウルフは敢えて彼女を懐に飛び込ませることでその腕を捻りあげるというカウンターを叩き込んだ。

「やっぱりな。お前の拳は悪くねえ……だが、間合い of 測り方が妙だと思ってたんだ」

縮地法 of 使い方も、拳 of 使い方も全てが洗練されているからこそ気が付きにくかったものの、アカリ of 拳法にタイガーウルフとリリカが抱いていた違和感は、彼が指摘した通りその間合い of 測り方にこそある。

いつてしまえば身も蓋もないことなのであるが——要するに、「この間合い of 詰め方は拳法 of それではない」ということだ。

『まさか、そこまで見抜かれるなんて……』

「お前さんの神楽舞、本来は祭具を持って踊んなきゃいけないやつだろ。だからこそ、その祭具 of 分のリーチが身体に染みついちまつてる



……言っちゃまえば癖ってやつだが、これ以上言葉で語るのも野暮だな！  
受けてもらうぜ、俺の必殺！ 龍虎……狼道！」

『……ッ、神楽舞・朔月！』

捻り上げた腕を起点に空中へと放り投げたブルーフレームセカンドGに向かつて、全身を金色に発光させたジーエンアルトロンが、その肩に纏う狼と虎をモチーフとしたナツクルガードを拳に持たせ、エネルギーの奔流とでも呼ぶべきものを叩きつけようとする。

そして、片腕が千切れていながらも、アカリもまた諦めずに技の氣勢を削ぐ型である「朔月」を舞おうとしたのだが、不安定な空中姿勢と、腕を一本失ったことによる機体の重心の変化がそれを許さない。

『……っ、力及ばずね……』

「悪くねえ戦いだっただぜ、その癖を直せば、自ずと道は見えてくる」

『……負けた相手に言うのもなんだけれど、ありがとう。タイガーウルフ師範』

「そりやあどうもな」

衝撃を受け流しきれず、エネルギーの奔流に呑まれたブルーフレームセカンドGはあえなく爆散してしまっただが、機体を駆るアカリの表情はどこか清々しいものだった。

素晴らしく、清々しいものを見た。

リリカは、そんなアカリの在り方や強さにも、そしてタイガーウルフの武人として相手を常にリスペクトする姿勢にも何か心に染み入るものを感じて、自然に、じわりと涙が眦に滲むのを感じる。

拳による対話など、一人でいたなら考えもつかないことだったが、確かにそこには言葉で語るよりも伝わる熱のようなものがあって、逆にいえば、拳でしか語ることでできないメッセージがアカリに伝わっていたからこそ、敗北して尚彼女は清々しい表情を浮かべていたのだろう。

【Battle Ended!】

【Winner:タイガーウルフ】

無機質な機械音声が彼の勝利を告げると同時に、プラクティスモードとして展開されていた青白い防護壁が解かれて、爆散したはずのブ

ルーフレームセカンドGもまた、その形を取り戻していく。

プラクティスモード。それは読んで字の如く練習のために設けられたモード設定であり、フリーバトルにおいて機体の損傷やランクの差を考慮しなくて良いものとする代わりにダイバーポイントや報酬は得られない、というものになっている。

極端な話、ブランシユアクセル・スクエアブーストを使ってAGE―I―ブランシユがバラバラになっても、プラクティスモード中ならば一瞬で元に戻るということだ。

アカリが機体から降りて、タイガーウルフに一礼して去っていくのを見送った後に、リリカはその、狼の獣人とでもいうべきダイバーリックに身を包んだ男へと、ぎこちない動作でぺこりと頭を下げた。

「……そ、その……タイガーウルフ、さん、ですよね……？」

「後にも先にもここでタイガーウルフを名乗ってんのは俺ぐらいたが……嬢ちゃんも稽古をつけてもらいたいのか？」

「……は、はい……その、私、リリカ……リリカっていいです。その、私、迷ってて……」

「迷い、ねえ……俺はシャフリの奴ほど優しかねえから拳でしか教えられねえ。リリカだったか、それでもいいか？」

「……お、お願いします……その、師範……！」

ぺこりと何度も腰を折って頭を下げるリリカに、いつかとは違えど、かつて己の道場を訪れた際に自分のことを「師範」と呼んでいた少女――アイカの影を重ね合わせながら、ふつ、と、タイガーウルフは小さく笑う。

あの後、アイカはめきめきと腕を上げて、今では実力派フォースとして「リビルドガールズ」も鳴らしているらしいとは聞いている。

あのアイカと、目の前にいるリリカは正反対といってもいいような性格をしているのに、その瞳からはどこか似たようなものが感じられるのだから、人間というのは奇妙なものだ。

そんな風情に、ニヒルに笑いながらも尻尾を左右に振るのを隠しきれないタイガーウルフに案内されて、リリカは先ほどアカリが立っていた闘技場に足を踏み入れた。

「手加減はいらねえ、全力で来い、リリカ！ 俺は全てを受け止めて拳で全てを語るぜ！」

「……わ、わかりました、師範……！」

リリカから出されたプラクティスフリーバトルの申請をタイガーウルフが承認すると同時に、再び青白い光の障壁が闘技場を包み込む。

そのバトルフィールドにおいて、AGEー1ブランチとジーエンアルトロンは、機体一機分の距離を開けて相對していた。

「やあああ……っ……！」

試合開始と同時にリリカが選んだのは、バックブーストによる牽制射撃だった。

いきなりブランチュアクセルを起動して懐に飛び込むのも手段としては考えられる。

だが、あのアカリという少女がやっていた縮地法を身につけてもいないのにそれをしたところで容易く迎撃されるだけだろう。

そう踏んでの牽制射撃であったのだが、先ほどと同様に狼と虎を象ったナツクルガードを装着したジーエンアルトロンは、D・O・D・S効果によって強化されているにも関わらず、放たれたビームを噛み砕いくという荒技を披露してみせる。

「悪いが生つちよろい射撃は通らねえぜ！ そして、様子を伺う必要もねえ！」

リリカの中では確かにロジックを組んで判断したが故の行動であつた。

だが、それはタイガーウルフの目から見れば、アカリの時と同じように、リリカの「手癖」にしか映らなかつたのだ。

とりあえずは牽制を加えることで安全を確保し、あわよくば三射目によって仕留めようとするのは、射撃の理論としては極めて正しい行動だ。

それがいつも通じるとは限らないのが、戦場の常であるということを除けばだが。

アカリのそれよりも数段洗練された縮地法で距離を詰めてきたタ

イガーウルフは、ナツクルガードを装着したまま、拳法家というよりはボクサーのように素早いジヤブを繰り出して、AGE―1ブランシユをフィールドの端まで追い込んでいく。

それは、一度距離感を見誤れば飛び道具という格闘技に対する明確なアドバンテージを有していても、容易にそれはひっくり返されるという証明だった。

ワン・ツ―のリズムで繰り出されるジヤブを捌けるほど、リリカは格闘戦、というより拳での戦いに手慣れているわけではない。

「ブランシユアクセル……ダブルブースト！」

「ッ、こいつあまた珍しいもんと出逢っちゃったな！」

今度は迷いなく、本能が導くままに、直感に従うがままに必殺技の発動を選択して、リリカは機体を大きく屈ませる。

そして、スライディングの要領で闘技場の床を滑り、ジーエンアルトロンから距離を取ったのを確認すると、今度は牽制ではなく全てを当てるつもりでドツズライフルを連射しながら、倍速と高速化されたモーシヨンによって、リリカはタイガーウルフを急襲した。

「なるほど……理屈はちよいと違うがトランザムみてえなものか、そして倍速で動く……となりやそれ込みで立ち回らせてもらうぜ！」

ドツズライフルによる攻撃を全て回避すると、タイガーウルフはリリカが抜き放ったシングルブレイドによる剣撃を、その手首を跳ね返すという形で受け止めて、捌いてみせる。

ブランシユアクセルは、決して必殺技として悪いものではない。

そしてリリカが作ったAGE―1ブランシユとシングルブレイドも同様だ。

だからこそタイガーウルフは、白刃取りや回避ではなく手首部分での受け流しという離れ業でもってその一撃を防いでいるのだ。

焦燥に思考を蝕まれながら、理屈では分かかっていても、通用しないそのもどかしさにリリカはじわり、と、眦に涙を、こめかみには冷や汗を滲ませる。

「……ブランシユアクセル……スクエアブースト！」

「なッ……!?!」

突如として倍速化されたモーションがさらに倍速をかけられたことに不意を突かれ、ジーエンアルトローンの左手首がシングルブレイドの歯牙にかけられて宙を舞う。

これも恐らく思考の悪癖なのだろう。

ダブルブーストでは通じず、トリプルブーストでも対抗される可能性があるから、リスクを承知してスクエアブーストを使っているはずなのに、機体が自壊するリスクを受け入れられない。

みしみしと軋みを立てて、何もしていないのにダメージを負っている自身の機体と、ヤケクソ気味に振るっている剣捌きを俯瞰して、リリカはそんな自己嫌悪に陥る。

「なるほどな……そいつぁ大問題だ、だからよ！」

「っ、来る……！」

「龍虎……狼道！ こいつが俺からやれる答えの一つだ！」

アカリを葬ったエネルギーの奔流が、AGEー1ブランシュを呑み込まんと、怒涛の勢いで迫り来るのを予見して、リリカはシングルブレイドを真正面に構えさせた。

あのデストロイのビーム砲を防いだ時と同じように、竜虎道を切り裂くことで防ごうと試みたのだが、スクエアブーストの限界時間と関節への負荷、そして単純な、片手を失っても尚凄まじい威力を持つて襲いかかってくるタイガーウルフの必殺技が、それを咎めて許さない。

「……ごめんね、ブランシュ……」

「……俺こそ悪いな。こいつは多分……リリカ、お前自身がどうにかしなきゃいけない問題だ」

AGEー1ブランシュがエネルギーの奔流に呑み込まれ、砕けていく中で、ばつが悪そうにタイガーウルフはそう語る。

アイカの時とはまた違った問題——それこそ、拳を通して見えてきたリリカの「行き詰まり」に、安易な答えは出すべきではないと判断したからこそ、タイガーウルフはその立ち回りと拳でのみ現状の問題点を伝えるに留めたのだ。

リリカの拳は悲しく、そして目の前の道のりは遠く。

それを示すかのように、涙のように砕けたAGE—1ブランシユの  
ツインアイが光を反射して、微かに煌くのだった。

### 第三十七話 「天地神明、決意の表裏」

タイガーウルフとの戦いを経て浮き彫りになってきたものは、AGE―1ブランシュという機体の限界に他ならなかった。

無論、リリカが直近に戦ってきた相手が全て格上であり、地力で及んでいないことを考慮したとしてもだ。

ブランシュアクセルは、欠陥こそ抱えていても強力な必殺技であることに違いはない。

だが、リリカがタイガーウルフとの戦いを通じて見えてきたのは、自分が能動的に選択しているつもりでも、状況によってそうせざるを得ないように追い込まれているという状態の知覚と、そして、思考の癖であり、固定化された水路付けだった。

ブランシュアクセルを使うのではなく使わされて、かつ、使わされた状況においても今のAGE―1ブランシュの基礎性能では格上を相手取るのには極めて厳しい。

本能ではそれをどこかで理解していたからこそ、リリカは見えてきた課題そのものはすんと、と胸の奥底に落ちるかのように理解できた。

だが――それを認めてしまうのならば、ブランシュに残された選択肢は二つしかなくなってしまう。

アジアン・エリアを駆け巡りながら、リリカは長く長く、思考の海に揺られるかのように、そうでなければ水面を漂うかのように、己に課された二つの選択肢と向き合っていた。

一つは、AGE―1ブランシュに、原形を留めないレベルでの改造を施すこと。

基本的にはウエア交換という共通規格を利用すればミキシングそのものは容易なように作られている、ハイグレードのAGEシリーズだが、そこから更にステップアップして、一度施した塗装を落として放熱用の機構を自作したり、或いはフィンを極薄化したりといった工作を施せば、ブランシュアクセルを四倍速で起動しても生き延びられる時間は増えるだろう。

だが、この方法にも欠点は存在する。

それは、ブランシユアアクセルがブランシユアアクセルである限り、稼働限界と隣り合わせになっているということだった。

いつてしまえば、水道管から水を出しっぱなしにした状態でホースの先端に無理やり蓋をするのがブランシユアアクセルという時限強化の本質じみたものなのだ。

ホースをいくら強靱な素材に変えようと、その根幹が変わらないのではない。圧壊するという事実にもまた変わりはない。

だからこそ、もう一つは――

腑に落ちないけれど、それしかないという選択肢を頭に浮かべながら、エリアとエリアの境目にあたるゲートをリリカが潜ったその時だった。

「な、なに……？　なにが起きて――」

転移の感覚がいつもと違う――満月だけが照らす荒野に開いたエリアとエリアの境目に呑み込まれていくような感覚とともに、リリカは引くこともなく、ログインしている時の感覚がどこまでも引き延ばされていくような錯覚と共に沈み込んでいく。

それが、突発的に発生したバグであるのか、一種のユニークイベントとして用意されていた現象なのかはわからない。

だが、巻き込まれたリリカにとってはどっちであつても大差なかった。

どこまでも落ちていくように、そうでなければゲームの中で再度ログインし直すように、AGE―Iブランシユと、そしてこのGBNにおける己である「リリカ」という躯体は解けて、解けて――やがて、パズルの欠片同士が繋がるように、どこかへと放り出されてゆくのだった。



そこは静かで、厳かな雰囲気に包まれていた。

月明かりのみが照らす洞窟の最奥といった風情のエリアは、デイメ



ンションに生じた綻びのようなものであり、ある種のイースターエッグとしてこのGBNにぼつりと置かれているようなものだ。

ある特定の日に特定の状況で特定の行動をする——そんな、検証するのにも気が遠くなりそうな条件を含めて、様々なシークレットがGBNには存在している以上、このイースターエッグが果たして意図して生まれたものなのか、それとも意図の埒外にあるものが見落とされた結果としてここに佇んでいるのかは、飛ばされてきたリリカにも——そして、その仮想の岸辺に佇んでいる、巫女のような衣装に狐耳のダイバルックといった装いに身を包んでいる先客にも知るところではない。

ただ、こういうエリアの綻びに存在する、「幻の場所」とでも呼ぶべきものは確かに、過程はどうあれこのGBNにイースターエッグとして存在している。

ならばそれがバグなのか一つの偶然なのかを問うことそのものが野暮なのではないだろうか——そうとでも言いたげに、先客は脚先を澄んだ湖面に微かに浸らせて、凧いだ水面に波紋を生み出す。

「こんなところで人と会うのもいつ以来かの」

困惑するリリカをよそに、脳が溶けそうな、そうでなければ砂糖菓子で出来たような声音をした狐耳の少女はその外見に似合わないような口調で語る。

先客である少女にとってこの場所はある種「同類」のようなものであり、デイメンションの裏側、テクスチャの裂け目に潜んでいるような秘密基地か、そうでなければ見捨てられた場所であるからこそ、何かを考え込むのにはちょうど良かったのだが、運がいいのか悪いのか、今日はここに久方ぶりの来訪者が訪れた。

考えといっても、別に大したことでもなければ大層なことでもない。

ただ過ぎゆく時間の中で人が無為に生の意味を問いたくなるように、少女もまた、そうした月日の中に埋もれる旅人たちの屍のような問いかけであり、ある種の願いを抱いて物思いに耽っていただけだ。

「…………え、えつと…………ここは…………？ その、すみません…………私、突然迷

子になっちゃって……」

「見ればわかる。娘っ子。お主はあらゆる意味で迷うておるな」

捻れに捻れて、拗れに拗れ、そうしてここに迷い込んできた。

別に、ダイバーの迷いがこのイースターエッグを手に掴む条件などでは断じてない。

そんなものは精々ミラーミッションの中に示唆という形で反映されるぐらいだ。

だが、人の縁というものはどうにも複雑奇怪で、だからこそどこか愛おしくさえ感じられる。

超然と佇んでいる少女は、それだけで何か一つの信仰とでもいうべきものが芽生えてきそうなほどに神々しく、そして夜の闇に包まれた仮想の海でも、やはり照らすには頼りない月明かりの下でもくつきりとその輪郭が浮かび上がっているように、リリカの目にはそう映っていた。

夜は好きでも嫌いでもない。

ただ、自分の輪郭がどこかに溶けて消えてしまったような、だからこそ自分と名前も知らない誰かが、そして地図に示された名も読めないどこかが繋がりにあるような気がして、一つそこに赦しを得たような気分になれる。

だからこそ、リリカにとって夜というのは仮想と現実、存在と不在が曖昧になって、己の輪郭もどこかブレて、融けて消えていくような時間だったのだが、目の前にいるダイバーは、そんな曖昧な時の中にもはつきりと存在の形を保っていた。

それが凄いことなのかどうかはわからない。

だが、異質である、というのはリリカにもすぐに理解できた。

異質なものを見た時、人はどうしても受け入れ難く、排除する傾向にあるというのは今までの半生で、嫌というほど思い知らされている。

それでも——神々しく目の前に佇む少女を前にしてリリカが抱いた想いはリジェクトとは遥かに遠い、リスペクトに近いものであった。

届かないものを掴むように、湖面の月を掬いとるように、気づけばリリカは少女へと手を伸ばしていた。

「……あ、えつと……ごめんなさい。私……」

「よいよい。お主のように決意が固い者と会うのも久しいことじゃ。我はテンコ——そう名乗れば、通じるかの？」

テンコと名乗った少女は、どこかリリカを試すようにそう問いかける。

テンコ。その名を知らないダイバーは、このGBNにおいて少数派だ。

一桁ランカー……「現人神」と例えられる九柱のダイバーたちに匹敵する実力を持ちながらも、あえて10位という位置に留まり、己という存在を超えていく存在が現れることを何よりの楽しみとしている、どこか神々しい雰囲気を纏った少女。

かつては、チャンピオンとのフリーバトルでかのハードコアディメンション・ヴァルガを半壊させたとか、有名な終末系G—Tuberにして個人ランキング13位という「二桁の魔物」を象徴するような半人半竜のダイバー、「クオン」の憧れの人だとか、その他様々な伝説を勲章としてその身に飾った、誰が呼んだか「半神半魔」と呼ばれるダイバー、それがテンコという存在に他ならない。

だが、残念なことにリリカはその少数派だった。

G—Tuberを見始めたのもつい最近のことだし、見ているジャンルはもっぱら制作配信である。

時折トップランカーのバトル配信も見てはいるが、テンコ自身はG—Tuberとして活動しているわけではないため、名乗られたとしても名前以上の情報がわからないのだ。

「え、えつと……すみません……その、ごめんなさい……有名な方、なんですか……？」

もじもじと俯き、おずおずと控えめに手を挙げて問いかけられたその答えに、テンコは思わず足を滑らせて躓きそうになりながらも、いつぞやの出来事をそこに重ね合わせて、小さく嘖き出していた。

「ぶっ……ははは！ お主、本当に面白いのう！ 本当に我を知らぬ

ダイバーと会ったのもいつ以来だったか、いや……つい最近か。まあ良い。合縁奇縁と人がいうのも領けるといふものじゃな」

「え、えつと……つまり……？」

「一応ではあるがの、我は個人ランキング10位におる。故に名を知っているかと思つたのじゃが、娘つ子。お主はそういつたことに興味がないとは思わなんだ」

ダイバーというのは多かれ少なかれ強さを求めていて、己の立ち位置を示すその数字と頂点に並ぶ面子のことはだいたい覚えているものだとはかりテンコは思つていたのだが、リリカはどうやら例外らしい。

例外といつても、リリカだつて一応は自分のダイバーランクだとかは気にしているし、それこそある種の「強さ」を求めて今も彷徨つているのだ。

ただ、上位の名前を覚えていても、そこに挑めるのなんてきつと遙か遠く、時間をかけた末のことだろうから覚えていなかっただけの話で。

「……あ、あの……えつと、すみません……」

「よいと申しておるではないか。しかし、お主が抱えているその頑迷さは、決して強さと無関係なものではないじやろう」

リリカとしては穴があつたら入りたい気分だったのだが、テンコはどこかそれを気にした様子もなく、笑いすぎて眦に浮かんだ涙を指先で拭いながら、しかしてその威厳を崩すこともなくそう囁く。

強さ。求め続ければ果てのないそれをどうして求めているのか、リリカには正直なところわからなかった。

元々GBNを始めたのだから、あの「リビルドガールズ」のように誰かと繋がりあつて、そしてあわよくばそこで仲良くなつて、と、己が失つてしまった放課後の時間の代替とするような理由での話だ。

それなのに今は、AGEEーブルーランシュという愛機が抱えている問題と、そしてフォース「エーデルローゼ」に敗北を喫したという事実がどこかささくれのように心へちくりと痛みと違和感をもたらしている。

そんな自分が不思議でもあったのだが、思えばいつもと同じように考えなければ済むことなのだろう。

そうして目を瞑り、俯いて、嵐が過ぎ去るのを静かに待つ。

でも、その選択肢をどうしてか選びたくない、リリカはそう思っている。

故にこそ、テンコはリリカのことを頑迷だと評したのだろう。

「……わかるん、ですか……？」

「はて、のう……ただ、お主とよく似た目をしている童と以前会ったことがあつての」

その童も頑迷で、決意に満ち溢れた目をしておったよ。

臃な微笑みを浮かべて、テンコは心底愉快げにそう語った。

「……決意……」

決意。それはカエデが見つけてくれた自分の強みのような何か。

まだまだ、自分の中にそれが宿っていることを自覚できていなくとも、自信がなくとも、リリカをここまで導いてきた証。

テンコという少女は、まるで悠久の時を生きているかのようにどこか超然と、リリカの中に存在するものを見抜いて、孫を見守る祖父母のように笑っている。

もしかしたら、ここに答えがあるのだろうか。

どこか縋るような気持ちで、いつになく深刻な面持ちで、助けを求めるように、リリカは問いかける。

「……わ、私……その……迷ってるんです……どうしても、どうしても、AG E—1 ブランシユから乗り換えないと、問題が解決できなくて……でも、ブランシユから降りちゃったら、私、ブランシユに対してひどいことをしてるみたいで……だから、その……」

「答えが欲しい、かの？」

「……はい……」

リリカの悩みというのは、突き詰めてしまえばそこに行き着くものだった。

ブランシユアクセルに機体側がどうやっただって耐えられないのなら、最初から耐えうるように設計した機体へと乗り換えるほかにな

い。

シンプルで、簡単な解決策だ。

だがそれは、今まで、ここまで自分を導いてくれたAGE―Iブランシュという相棒を見捨てるという不義理なのではないかと、リリカはずっと迷っていて、だからこそ、ブランシュがブランシュのままに必殺技の問題を解決できる方法を探していたのだ。

しかし、タイガーウルフ道場で突きつけられた答えは残酷なものだった。

AGE―Iブランシュでは、今の時点で殆ど限界が来ている。

リリカの反応速度や操縦の技量に問題はない。むしろ着実にそれを伸ばしているからこそ、四倍速込みとはいえ「三桁の英傑」に手傷を負わせるまでに至ったのだ。

だが、機体がそれについてこれないのだ。

元々AGE―Iブランシュは、自分なりに見つけた、チャンピオンが操るガンダムTRYAGEマグナムに憧れて作ったものだ。

その多機能性ではなく汎用性と機動力に重点を置いたアセンブリもコンセプトも、決して悪いものではない。

ただ、これからの考えた時、「エーデルローゼ」のようなフォースと戦っていかなければならない時、ブランシュの性能では格上相手のジヤイアントキリングを果たすことは、そしてリリカの望むような立ち回りをすることは事実上不可能であるといった宣告に、どうしても納得できなかつたのだ。

気付けば、リリカははらはらと涙を零しながら、テンコへと必死に思いの丈をぶちまけていた。

それは要領を得ず、しどろもどろになってのことだったが、それでもリリカにとつては重要なことには違いなく、だからこそ縋り付くように問いかけたのだ。

僅かな沈黙。一瞬が一秒に、一秒がどこまでも引き延ばされていくような感覚の中で、リリカは両肩に鉛の手が触れたような錯覚とともに黙り込んでいた。

どれほどの時が経っただろうか。

一瞬か、一秒か。

そんなリリカの重苦しい心情を汲むように。テンコは超然とした微笑みを崩さずに、リリカへとどこかその髪を撫でるような口調でそっと語る。

「物には想いが宿るといふ考え方があつての」

「……はい……」

「付喪神……この国で信仰されてきた考えじゃな。じゃが、我が申したいのはそういうことではない。お主は……お主と共に駆け抜けてきたその機体は、きつとお主に感謝しておるのではないか？」

「……感謝……ですか……？」

「うむ。例えどのような結末を辿ろうともじゃ。お主はさぞかしその機体を、ガンプラを大事にしておつたのじやろう。もつとも——我は最近会つた童と違って直接的に聞いたわけではないがの」

洞窟の中で身をかがめているAGE―1ブランシユに歩み寄ると、テンコは優しく、今までの戦いを労るかのようにそつとその装甲を指先でなぞつた。

「ならば、お主がどう決めたのであれ、それは失われるものではなければ、背くことでもないのではないかと、我はそう思うのじゃ」

あとはお主の問題じゃがの、と、そう語るとテンコは光が消えたAGE―1ブランシユの双眸を覗き込んで、微かにそう笑つた。

感謝されている。

テンコの言葉に正直なところ、リリカはそこまでの実感を抱かなかつたものの、それでも——どこか心の中を覆っていた靄が晴れていくような、赦しを得たような感覚を抱いていた。

「……テンコ、さん……その、ありがとう、ございます……」

「何。礼を言うべきは我ではない。さつきからそこに佇んでおるではないか」

——お主の愛する相棒が、ガンプラがの。

テンコが悪戯っぽくそう呟いたかと思えば、目の前の景色が次第に揺らいで、その輪郭を次第に失っていく。

「もうすぐ夜明けか、お主にも訪れると良いの」

「ま、待ってください、私——」

「我はテンコ。フォース『天地神明』の主にして——二桁最後の壁として立ちほだかる者じゃ。高見にて待っておるぞ、娘っ子、いや……リリカよ」

テンコがその言葉を言い切ると同時に、イースターエッグとして隠されていたテクスチャの綻びは修繕され、そして仮装の海に太陽が昇ったことで、リリカは元の荒野ではなく、いつか採取ミッションの時に訪れた、ヤナギランが咲き乱れる花畑へと、愛機と共に放り出されていた。

「わわ……っ……」

あれが夢だったのか現実だったのか。

それはリリカにもわからない。ただ。

雫を浴びたかのように、差し込む日差しにその双眸を煌めかせるAGE—1ブランシユを見上げて、リリカはごくり、と息を呑む。そして。

「……ありがとう、ブランシユ……ここまで私を連れてきてくれて……そして、私と一緒にいてくれて……」

これが今生の別れではないことはわかっている。

適材適所という言葉がある通り、新たな機体に乗り換えたとしても、シチュエーション次第ではブランシユに再び乗り込むことだったありえるだろう。

それでもこれは、襖のようなものだ。

リリカは眦に涙を滲ませて、ぺこりと頭を下げると、今までずっと自分と共に戦ってくれたガンプラに、「大好き」を自分なりに形にした結晶に、そつと頬を擦り寄せて、悲しみと喜びが縦糸と横糸になって織り成した涙を、静かに、朝露のように溢れさせるのだった。



### 第三十八話 「カエデのヴァルガ探訪録」

カエデ・リーリエはただ悔しかった。

リリカが自分探しの旅に出た直後、向かった先で噛み締めているのは唇であり、リアルであったならそれこそ血が出かねない勢いでそうしているのは、ひとえに己の中に燃え滾るような負の感情をモチベーションに変換して火力発電じみたことを行っているからだ。

このGBNにはどうにもならないことがいくつもあると、偉大なる先達たちは悟ったように口を揃えてそう言った。

曰く、四桁までが人間の行ける常識的な範囲で、三桁まで行けばそれは最早選りすぐられた、或いは天から与えられた素質に恵まれた英傑たちであると。

曰く、そこから先は人外魔境、フレーム単位での先行入力や回避、そして気配を読み取っての「先の後の先」を取るというわけのわからない曲芸じみたことを当たり前に行える人間の領域からはみ出した怪物にして魔物たちが跋扈する、「二桁の魔物」たちに戦場で出会ったのなら諦めろ。

曰く、そこから更に更に先——アクティブユーザー二千万人という膨大な中から、たった九つしか席が用意されていないGBNの果ての果て、人間性を捨て去った魔物たちですら容易にたどり着くことは叶わないからこそ、到達した九名——正確には八名なのだが——を称えて、「現人神」と人は言う。

そして、八柱の神々をなぎ倒し、GBNが黎明期の混沌、生まれたて故に今では考えられないような魔境であった頃から一桁ランクにその名を刻み、いつしか無敗の伝説を屍山血河と共に築き上げてきた二千万人の頂点に、英傑すらも、魔物すらも、神々すらも踏み倒してあのチャンピオン、クジヨウ・キヨウヤが今も尚、変わることもなく君臨し続けている。

もしもこの、広すぎるが故に真つ新で何をしたら良いのかわからない世界にロードマップを描くのなら、終着駅は恐らくそこになるのだろう。

しかし、誰しもそれを描きながらも諦めた。

当たり前前に決まっている。そんなものは夢物語であり、実現したのはただ一人しかいないのだから。

そして、当の本人たるチャンピオンは頂点に君臨し続けながらも己の白地図に、自分しか知り得ないであろうものを今も書き加え続けているのだから、まともに考えてしまえばもれなく気が狂うこととなる。

故にこそ人々は、ダイバーたちは恐れていた。そして畏れていた。

三桁の英傑を、二桁の魔物を、一桁の現人神を。そして、それら全てを纏めて薙ぎ払う唯一無二の王者たる男を。

だが——カエデは、そう考えてなどいなかった。

四方八方から弾幕砲火が飛び交い、ログイン直後の無敵時間が切れればまずは初手での回避が推奨される、猿山にしてチンパンたちのラスト・リゾート、蠱毒の壺、地獄と様々な悪名が轟くハードコアディメンション・ヴァルガ。

カエデがリリカと別れた後に向かった先は、そんな英傑たちか、どこかで何かが焼き切れた連中でもなければ誰もが引き返せと公言して憚らないような地獄であった。

ログインした直後に開かれるゲートを狙撃するため、都市部に佇むビルの残骸に身を潜めた、都市迷彩を施されたケルデムガンダム——「回収屋」と悪名高いダイバー、「ピーター」が操る機体の狙撃を優雅に回避し、射線を読まれたからとポジションを変えようとした彼を、ツインバスターライフルの一撃で周囲にいるおこぼれ狙いのダイバーたちと共にテクスチャの塵へと帰せしめながら、カエデはそれを挨拶がわりに荒れ狂う。

「足りませんわ足りませんわ足りませんわ！ 貴方の射線は生つちよろい！ ミワさんの足元にも及ばない！ そして殺意も生つちよろい！ わたくしが尊敬してやまないアイカ様には程遠い！」

文字通り全てを愛しい人<sup>エリイちゃん</sup>のために捧げきったことでケツイがカンストしている、フアンアートの差分が高確率で血飛沫に塗れ、ドスを持っているであろうピンク髪の少女を脳裏に浮かべながら、やり場の

ない怒りと共に叫びを上げる。

カエデの怒りは、主に自分に対して向けられていた。

なればこそ、これは八つ当たりだ。

ハードコアデイモンシオン・ヴァルガ。

何故このデイモンシオンにそんな悪名が轟いているのかといえ、  
ひとえにそれは、「この場所においては無制限のフリーバトルが解禁  
されているから」に他ならない。

本来であればダイバー同士が合意しあつた上で行うフリーバトル  
が無制限に解禁されているとなれば、そこに集まるのは頭のネジが外  
れたような戦闘狂、そしていかなる外道戦術も厭わずに、いかなる悪  
名が響こうとも気にせず、ダイバーポイントを稼ぎ続けるスポーン  
キラーや初心者狩り、そしてそのおこぼれを狙うハゲタカたちだ。

なればこそ、そこにまともなバトルなど望むべくはなく、大半のダ  
イバーはヴァルガに向かうことを、有名な漫画に出てくるフレーズに  
擬えて「絶界行」と呼ぶのだが、カエデがそんな場所にエントリーし  
た理由は騙されたからだとかなどでは断じてない。

左側に偏重した推進力を利用した独特のマニューバで、ワルツを踊  
るかのよう四方八方から雨霰のように降り注ぐ弾幕砲火を回避し  
て、カエデの操るウイングゼロヌーベルは空を飛ぶことを咎めるかの  
ように地を這うダイバーたちの機体を次々に薙ぎ払っていく。

「遅いですわ、遅いですわ遅いですわ！ わたくしも！ 貴方も！」  
自分に向けた苛立ちに唇を噛み、操縦桿を握る手に力を込めなが  
ら、血を吐くようにカエデは叫ぶ。

——あの戦いは、決して負け確のそれではなかった。

脳裏に「エーデルローゼ」に屈した惜敗を浮かべながら、カエデは  
寄せては返す人波のごとく己に殺到してくるガンプラ群をシザー  
ソードの一撃で両断し、或いはマシンキャノンで蜂の巣にしなが  
ら、ただ後悔と共に振り返る。

あの状況で自分に足りていなかったのは判断力だ。

もっと早く決意をキメて、コンマ一秒の判断を下せていたのであれ  
ばあの戦いの趨勢は確実に変わっていた。

三桁の英傑がなんだ。

ミラージュコロイドを解除して背後から襲いかかってくるNダガーNを、カエデはノールックで逆手持ちしたシザーソードで貫く。

二桁の魔物がなんだ。一桁の現人神がなんだ。

いずれ自分が行くべき道を、畏れるのは構わないにしても、どうして恐れる必要があるというのか？

カエデが見据えているものは、己がそこに辿り着くという確信に他ならない。

自分の意思を信じていれば辿り着けるなどという生易しいものではないことぐらいは理解している。

それが血反吐を吐きながら、突き立てた爪が剥がれて血を流すように天高く聳え立つ壁へと挑むような行いであることもわかっている。

だが——あのアイカの目を見た時に、リビルドガールズの戦いを見た時に、そして。

果敢として照射ビームをシングルブレードで切り裂くという荒業で己を守りきってくれたリリカの瞳を覗き込んだ時に、カエデは決心したのだ。

あの決意があれば、いかに血を吐こうが爪が剥がれようが、そこは行くべき道となる。

キル数を稼いでいることでヘイトを買ったカエデのウイングゼロヌーベルへと向けて、地平線の彼方からサテライトキャノンとダインスレイヴの弾幕砲火が放たれた。

だが、カエデは燃え盛るような激情を抱きながらも思考は務めて冷静に、己が串刺しにした「グレイズ改」をダインスレイヴの射線に放り投げて、サテライトキャノンには左手で保持しているツインバスターライフルの一撃で相殺を試みる。

どれだけ怒り狂っていても、思考は常にクレバーでならなければならない。

人間の怒りが持続するピークは六秒だけだどこかで耳にしたことがあるが、ならばその六秒間で殺して殺して、全てを、塵殺すれば解決するのだから。

『マジかよこいつ、イカれてやがる——』

「イカれてなければこんなところにダイブなんてしませんことよ！」  
サテライトキャノンを防ぎきったことで、その射線を読み解いたカエデは、相も変わらず己に向けられたものと、そうでないものが入り乱れる弾幕砲火の雨霰を掻い潜りながら、その黒いガンダムX——恐らくアンダー・ザ・ムーンライトに出てきたそれをオマーージュしたのであろうカラーリングの機体を串刺しにして、戦場のど真ん中へと放り投げた。

ヴァルガを生き残るためのコツはいくつかあるが、そのうちの一つは徹底したヘイト管理だ。

大部分を損傷した黒いガンダムXに向けて、我先にと殺到しているようではまだまだ三流だ。

ダガーLやギャン・クリーガー、そしてジムカスタムと様々な作品から抜け出てきたような夢の競演、もとい、手負いの獣を仕留めるための狂宴が繰り広げられようとした矢先に、突如として降り注いだ閃光が、おこぼれ狙いの彼等ごと黒いガンダムXをテクスチャの塵へと帰せしめる。

遠距離から微かに顔を覗かせたのは、あのゲート付近で出待ちしていた「回収屋」ピーターが操るケルデイルガンダムと酷似した都市迷彩が施されたケルデイルガンダムサーガ……「ジャンクメイカー」の二つ名で知られるピーターの弟、ペーターが操るそれだ。

『あいつ、一瞬で射線を!? うわあああつー!』

単射、狙撃モードに切り替えたツインバスターライフルでペーターのコックピットを撃ち抜くと、カエデは東の間だけできた戦場の空白で、己の思考をクールダウンさせる。

八つ当たりは終わった。

ならばこれからは判断力をもっと、研ぎ澄まさねばならない。

一瞬一秒一コマ、果ては1fの判断が試合の明暗を分けるGBNにおいて、判断が遅いというのは致命的だと、カエデは身をもって知らされた。

特にあの三桁の英傑——ユキはブレていなかった。

自分よりもランクでいえば遙かに下であり、四倍速という規格外の領域にある速さでもって自らに手傷を負わせたリリカと対峙していても、ゼロシステムを発動していた自分と戦っていても、それは揺らぐことなく冷静に、チームのための勝ち筋を掴み、負け筋を潰そうと  
していた。

なればこそ、自分が目指すのはそこでなければならぬ。  
安穩としていられる時間は数秒が精々だ。

どこからともなく、上空という死角を利用してカエデに天誅を下さんとしていたシナンジュ・スタインを貫いて、カエデはハードコア  
デイメンション・ヴァルガ、その中でも一際戦闘が過酷な北部都市残骸地帯の中心へと踏み入っていく。

そこにあつたものを一言で表すならそれは、世紀末だった。

『ヒヤッハー！』

『新鮮な獲物だぜ、お前らア！』

「くっ、抜かりましたか……！」

全身のありとあらゆるところからニードルスパイクを生やし、そしてバイク型のサポートメカに搭乗した集団がざつと八十ほど、左腕を損傷したハイペリオンGを取り囲んでいる姿がカエデの視界に映る。

最早説明不要とでも言いたくなるような初心者狩りであり典型的なおこぼれ狙いであるモヒカンたちの集団だ。

噂によればあのアイカも初心者の頃に騙されてここに飛ばされてきて、彼等の餌食になりかけたところを返り討ちにしたとかいう話もあるが、眉唾物だろう。

よく見ればあのハイペリオンGも、先日戦った「エーデルローゼ」の一員——確かりーシャとかいったか、が乗っていた機体に違いない。「判断を誤るところなる、という訳ですわね」

正直なところ、カエデにりーシャを助ける義理も義務もない。

むしろ、手負いのりーシャを中心に形成される乱戦エリアを巻き込んだ方が自身にとってはメリットが大きいということも理解している。

だが、人間というのは得てして不合理な生き物だ。

カエデは完全にリーシャを囲むことに夢中で、背後に迫る自身に気付いていないモヒカンたちを両断しながら、包囲網の中心へと駆け抜けていく。

『エーデルローゼ』のリーシャさんでしたわね。特に義理も縁もありませんが、助太刀させていただきますわ！」

「貴女は、先日の……感謝します、しかし何故……」

「わたくし今ブチ切れております、ちょうど八つ当たりの相手が欲しかったのですわ。そして——あの初心者や手負いのダイバーを囲んで狙うような卑劣漢が相手となれば八つ当たりには十分ですわ！」  
——さぞかし、良い声で啼いてくれるでしょうから。

カエデはそれこそ乙女ゲーの中に出てくる悪役令嬢そのものな言葉を口にして、膝をついていたリーシャと背中合わせになる形で、モヒカンの蜂球に相対する。

『ヒヤッハー、こいつはいいぜ！ 飛んで火にいるなんとやらってなア！』

しかし、カエデが勇ましく切つてみせた啖呵に負けず劣らず、その天まで聳え立つ勢いのモヒカン頭が特徴的なダイバー、「モヒー・カーン」は、己の愛機であるザクⅢへ世紀末カスタムを施した機体の肩に、ジャイアント・ヒートホークを担がせると、舌舐めずりと共に言い放った。

「まだ行けますわよね、リーシャさん？」

「ええ、貴女が救援に来ていただいたおかげでなんとか」

『俺様を無視して乳繰り合っただじゃねエぞ！ 野郎共、やつちまいなア！』

『ヒヤッハー！』

判断力を鍛えるためにヴァルガへと潜ったはずなのに、気づけば非合理極まりない人助けをしている。

そんな己の現状に苦笑を浮かべながらも、一対多数の練習相手にはちょうどいいと、カエデは前面から迫り来る敵機を、相手が反応するよりも早く斬り捨てていく。

リーシャの目から見てもそれは凄まじい行いであり、改めて先日の

戦いで勝敗を分けたのは、紙一重の判断の差であったのだと思い知らされる。

アルミューレ・リュミエールを展開し、前面からの攻撃を防ぎながら、ビームマシンガンによる弾幕で一機一機を確実にしとめていくリーシャも、決してカエデと比較して勝るとも劣らないダイバーであることには違いない。

戦力比四十対一という絶望を、密集陣形を取っていることを逆手にとつて、フレンドリー・ファイアの誘発や、或いは誘爆を狙いながら堅実に、そして確実にカエデとリーシャは、即席のタッグであるにも関わらずモヒカンたちを漸減していく。

『し、信じられねエ……八十だぞ、これだけの数を揃えて……』

「頭数だけできずにかなるならチャンピオンはチャンピオンなどとしておりませんことよ！」

困んで殴るのはいつだって戦術における常道だが、それはそれとして有効活用できるかどうかは別の話だ。

モヒカンたちの操る世紀末カスタムなガンプラ群はどれも火力に偏重していて、密集陣形を取っていれば誘爆の危険性が極めて高いズサだとかそういうMSも紛れている以上、カエデたちも無傷とはいかなくとも切り抜けることそのものは可能だった。

最後に残ったカーンのザクⅢを、カエデはその執拗なまでに強化された正面装甲ごと無理やり、開いたシザーソードの刃に挟み込んで両断していく。

『こ、こんなところで……ぐおおおおッ！』

「おやっらばでいいますわ」

かくして、八十という数のモヒカンたちは主にカエデが見せた変幻自在のマニューバと、そしてツインバスターライフルの火力、シザーソードの斬れ味——そのいずれかのサビとなって消えていった。

ヴァルガに安全地帯が現れるのは東の間の話だ。

戦場に生まれた空白地帯に、背中合わせに佇むウイングゼロヌーベルとハイペリオンGも、イエローコーションがコックピットを埋め尽くす程度には細かな損傷を積み重ねていた。



だが、カエデたちは勝利した。その事実には相違はない。

「……凄まじい腕前でした、カエデさん」

「貴女もたった一人で持ち堪えていたのでしょうか、謙遜する必要などありませんわ」

「ありがとうございます、その……先日は私たちのメンバーが大変失礼を」

「その話でしたらもう済んだことですよ、次は……わたくしたちが勝つ。それだけですわ。だから首を洗って待っているとお伝えくださいますし」

「あはは……わかりました。ユキさんにはそう伝えておきますね」

他愛もない言葉を、約束を交わして、二人は再び形成され始めた乱戦エリアへと分かれていく。

人間というのは非合理的な生き物だ。

損傷したウイングゼロヌーベルの動きは、リーシャを助ける前よりも明らかに良くなっている——自分の思考回路が大分鮮明さを取り戻してきたことへ、密かにリーシャへと感謝をしながら、カエデはふっ、と小さく笑う。

イエローコーションが鳴り響くコックピットに、更なる警告を連れて、遙か上空から蒼い極光が降り注いでくる。

エンカウント運が腐っていたとしか言いようがないのだろう。

咄嗟にゼロシステムを起動させてカエデはなんとかその範囲攻撃から逃れつつ、余波であっても警告がレッドアラートになるまでウイングゼロヌーベルを損傷せしめたその機体を睨みつける。

白を基調として、蒼がアクセントとして散りばめられたダブルオーガンダムの改造機——このハードコアディメンション・ヴァルガを拠点として日々修練に励んでいる「FOEさん」の通称で恐れられているダイバーの新たな剣を一瞥して、カエデは大破寸前の機体を跳躍させた。

「二桁の魔物……その首、貰い受けるのですわあああッ！」

『撃ち漏らしたか……ただで譲るわけにはいかない！』

そして、シザーソードとGN粒子を纏った実体剣、GNダイバイン

ブレイドがぶつかり合い、ヴァルガの上空に火花を散らす。

無論、カエデとしても勝てるとは思っていない。

剣戟が続いたのは一瞬であり、元々大破寸前だったウイングゼロ  
ヌーベルは圧倒的な速さとしなやかさで振るわれるその剣に切り裂  
かれて、ロビーへと強制送還されていく。

遠い。追いかければ追いかけるほど逃げていくような、近づけば近  
づくほど解けていくような、そんな恋焦がれる感覚にも似たような悔  
しさと、そして充足がカエデの心を満たしていた。

「……いつか行く道、学ばせていただきますわ」

だが、ここはGBNだ。

戦いで一度敗れたとしても、「次」に活かすことができる。

それは素晴らしいことであり、だからこそ今もカエデがアイカの背  
中を追いかけて、GBNを続けている理由たりうるのだ。

そうわかっていても、悔しいものは悔しい。

だからこそ、今ここにリリカとミワがいないことに感謝しつつ、カ  
エデはその眦に涙を密かに滲ませるのだった。

### 第三十九話 「リビルドガール／ライジングガイ」

意図せずして飛ばされた秘境から帰還したリリカを出迎えたのは、  
またも意図しない偶然だった。

AGE―1ブランチに乗りに込んで、そろそろログアウトしようかとリリカがセントラル・エリアへの帰還を選ぼうとしたその時に、機体に伝わる凄まじい衝撃を伴って轟音が耳朵を震わせる。

「な、何……？　何が、あつたの……？」

震える唇は考えるよりも先にそんな言葉を紡ぎ出していたが、その答えはすぐ眼前に薄い青色を伴った障壁が展開されることで示された。

それは取りも直さず、目と目があつた瞬間に起こるかどうかはともかくGBNでは日常茶飯事なフリーバトル、ただしプラクティスモードでそれが始まったか、戦線の拡大に伴ってエリアが再構築された証である。

薄い壁を一枚隔てた向こう側に舞い降りたのは、ちょうど姉の機体よりも若干濃いピンク色のアーマーを纏い、本体部分がウォームホワイトで塗装されているコアガンダム——から微妙に各部の形状が変化しているそれは、コアガンダムIIと呼ばれる機体を核にしたガンブラだった。

リリカはそのカラーリングと、背中から伸びるSDCSウイングガンダムゼロ（エンドレスワルツ版）の羽根という意匠にはっと息を呑む。

自分が知っている姿は今より大分小柄だったが、手足にアーマーを纏ったことでグロリアップを果たしている以外は記憶の中にある姿とほとんど一致するその機体は、リリカにとつての——そしてここにはないものの、カエデにとつても始まりのようなものだった。

『まさか全部避けられるなんて……噂は伊達じゃないってこと』

『聞いた通り、凄まじい気迫だ……俺の切れる手札は全部切つたのにまだ立ってるなんて』

その機体——【フェアアライズガンダム】を操るダイバーである、長

くふわふわとウェーブがかかった桃色のロングヘアに、頭頂部にはお団子のように結わえた髪束が二つ、そしてアイドル風のひらひらとした衣装を身に纏っている少女、アイカは苦々しげに顔をしかめてそう呟く。

アイカが相対している青年とのフリーバトルを承諾したのは、丁度以前よりもグローアップした機体の操作感覚に慣れるためにデイモンシオン内を遊覧飛行していたところ、声をかけられたからだだった。

本来であればハードコアデイモンシオン・ヴァルガ辺りで練習するつもりであつたのだが、一対一のプラクティスモード、そして相対している相手が、今色んな意味でこのGBNを賑わせている「ビルドレイジングのケイ」ということもあって、手合わせを承諾したのだ。

アイカはこの一年を通して、めきめきと個人ランキングを上昇させていったダイバーの一人であり、故にこそぶち当たった壁を打破するべく、己の核となる動機である「可愛い」から、より「カッコ可愛い」に機体を寄せることでその解決を図ろうとしていたのだが、相手がやりにもよつてケイであつたことは幸運でもあり、不幸でもあつた。

切れる手札は全部切つたと豪語する通り、ほとんど素手の状態でファイティングポーズを取つて、アイカが次に振るつてくる一撃ヘカウンターを備えようとしている青年、ケイの「ギヤラクシーバーストガンダム」は静かに佇んでいる。

明鏡止水の境地とでもいうべきなのだろうか。

高鳴る心臓の鼓動を抑えるかのように、アイカはそこそこ自信のあつた踏み込みを躲され、互いに損傷こそ負つていても仕留め切るこのできない千日手のような戦いに焦燥を募らせる。

だが、戦いというのは得てして焦つた方が負けるのだ。

相手がカウンターを狙ってくるのなら、こちらとしても策はある。フェアアライズガンダムの前身である「フェアアライズガンダム」、そしてそのまた前身である「コメットコアガンダム」から脈々と受け継がれてきた大剣である「ビルドボルグ」を正眼の構えで携えて、アイカは自機の時限強化システム——システム・フェアリィ・テイルを起動させる。

素材としてガンダムAGE―FXを組み込んだことで実現したその時限強化は、偶然戦いの傍観者となったりリリカの目から見ても、十分に完成度が高いものだった。

余剰出力を攻撃判定を伴うブーストエフェクトとして各部のスラストから逃すことで自壊のリスクを排除して、純粋な機動力の向上と、そして下手に格闘戦を挑めば火傷しかねないビームの鎧を身に纏うその必殺技は、確かに速度こそブランチユアクセルの四倍速に及ばないものの、より洗練されたものとしてリリカの瞳に映る。

ガンプラの声を聞くことができる。それが、ケイというダイバーについて回る噂話であり、そして事実だった。

ギヤラクシーバーストガンダムを操る青年、ケイは生まれつき、ガンプラに限らずそういった「物」に宿る声を聞くことができる。

特異な共感覚――シナスタジアを持つて生まれしてきたからこそ、フェアライズガンダムが次に何をしたいのか、ということが手に取るようにわかっていた。

――カウンターを封殺して、奇襲と正面突破の三枚看板で仕留めるよ、アイカちゃん。

フェアライズガンダムは、アイカに向けてそんな言葉を発していた。

殺意の領域にまで滲み出てきたアイカの決意は、彼女の瞳からハイライトを消失させて、ただ単純に勝利をもぎ取るためだけに、静かに、しかしギラギラと滾るように輝いている。

奇しくもケイが修行によって体得した明鏡止水の境地と似たような場所に落ち着いた、ヴァルガに幾度も潜って生還してきた闘争本能が導き出す無我の境地から、アイカの挙動を読み取るとはケイであつたとしても難しい。

だが、ガンプラがどうしたいのか教えてくれるからこそ、ハイランカーと呼ばれる領域に足を踏み入れたアイカと、ケイはここまで渡り合うことができていたのだ。

『エリイちゃんはここにはいないけど……それはそれとして！』

『……来るか！』

システム・フェアリー・テイルを起動させたアイカのフェアリーライズガンダムが、ブランチュアクセルにも匹敵する神速の踏み込みでギヤラクシーバーストガンダムの眼前に迫る。

次元霸王流を学んだことで、相手の近接戦におけるキリングレンジをギリギリまで見定めたケイはそのリスクを許容しながらも、確実にアイカを、妖精の女王を仕留めるべくしてそのシンプルな答えを叩きつけんとしていた。

『これでえええええッ！』

ギラギラと滲み出る殺意のこもった一撃は、ガンプラの声を聞けたとしてもそれを込みで対処できない攻撃をぶち当てればいい、という気迫に満ち溢れたものであり、ケイが「次元霸王流・正拳突き」をカウンターとしてフェアリーライズガンダムに、アイカに叩き込めたのはほとんど偶然と紙一重のものだったといってもいい。

だが、懐に飛び込むことでリスクが生じるのはアイカの方もまた折り込み済みだった。

粒子を纏った拳は僅かにコックピット判定から逸れていたものの、アーマーを纏うことで守られているとはいえ機体を圧壊させるには十分なほどの威力を誇っている。

それでも、アイカは闇雲に突っ込んでやられにきたわけではない。ふつ、と、通信ウィンドウにポップするアイカの口元が獰猛な笑みを浮かべたことにケイが気付いたその瞬間だった。

——ケイ、避ける！

ギヤラクシーバーストガンダムが本気で警告するが、その拳はフェアリーライズガンダムにめり込んだままで、正拳突きの後隙を、言ってしまうば人間である以上どうしても生じる思考のラグを残していた無防備な背中に——いつの間にかビルドボルグから分離していた二つの刃が突き刺さる。

『まさか、ドラグーンシステム?!』

『大当たり……っていかあたしも大概満身創痍なだけどね』

ビルドボルグは、紆余曲折を経て組み込まれたプラグインである「ドラグーンシステム・ファクトリーカスタム」によって遠隔操作が可

能なようにカスタマイズが施されていた。

だが、アイカは基本的に無線兵器の操作を苦手とするため、戦場でそれを減多に使うことはない。

故にフェアリライズガンダムもまた口を閉ざしていたのだが、こういうシチュエーションにおける奇襲の手札として残しておく程度の技量を備えているのもまた確かだった。

無論、ファンネル捌きにおいて、アイカは恋人であるエリイに及ぶところは全くないといつていいのだが、正面からの突撃を隠れ蓑に、背後から仕留めるといふ戦術はファンネル操作が苦手だろうがオートだろうが成立する単純で古典的な戦法だからこそ、こうして己の手札としているのだ。

しかし、単純な奇襲にただやられてしまうようであれば、ケイトと、そして「ビルドライジング」の名前がこのGBNに瞬く間に轟くことはなかっただろう。

拳が機体を破壊するのが先か。刃が機体を貫くのが先か。

両者が唇を噛む沈黙の中で漂う、あの一秒がどこまでも薄く引き延ばされていく重苦しい感覚は傍観者であるリリカにもまた、ひしひしと伝わってきた。

そして、迸る閃光が駆け抜け、バトルフィールドが霧散していく中にリリカが見たものは。

【Battle Ended!】

【Result: Draw!】

無機質な機械音声が両者の勝利であり両者の敗北、天秤の上でその均衡が保たれた引き分けであるという結果と、ヤナギランが咲き乱れる中でコックピットに拳を叩き込まれながらも膝をつくことのない、かかった妖精の女王と、そして彼女に挑みながらも同様に屈せず、戦い抜いた超新星の姿だった。

——美しいものを見た。

リリカがその時感じたものを言語化するのなら、そういうことになるのだろう。

見えたようで見えなかった光明をその手に掴んだように、あるいは

パズルの欠片がピタリと嵌り合うように、こころの中で生まれていたその感覚は、一つの答えへとリリカを導こうとしていた。

「あはは……グッドゲーム、あたしもまだまだだつてことだよね」

「いえ、俺も……最後の奇襲を、ギャラクシーバーストから警告されたのに対応できなかつた。グッドゲームでした」

花畑の中で、先ほどまでは熾烈な戦いを繰り広げていたはずのアイカとケイは互いの手を取り合つて、健闘を称え合う。

そこに悔しさであるとか至らなさであるとか、そういったものが滲んでいないとまでは言わなくとも、戦いが終わったならばその感情は終わりに持ち込むのではなく、次に向けて活かす糧とすべきものだ。

だからこそアイカもケイも、思うところは互いにあれど手を取り合っているのだろう。

リリカはそこに、少し事情は違えど、自分とミワの影を重ね合わせる。

もしも人類が、ガンダムの中で示されたニュータイプという定義の通り、誤解なくわかり合うことができたとして、それこそ、カミーユ・ビダンとハマーン・カーンのように、或いは刹那・F・セイエイとアラー・アル・サーシエスのように、わかり合った結果共存できないという結論に至ることもあるだろう。

だが、逆に、理解ができなくたつて、わかりあえなくたつて、隣に立つこともできるのが人類なのだ。

まだまだ、ミワに対するわだかまりを全て捨て切れたわけではない。

リリカは俯き、脳裏をよぎる己の過去と今のコンフリクトに頭を抱えながらも、このGBNにいる間に抱いた感情は確かなことだったという確信を得る。

そして、アイカのフェアライズガンダムを、正確に言えばシステム・フェアリー・テイルの発動を見たことによつて、リリカの中で「次に活かすべき答えは有る程度見当がついていた」。

アイカの目をちらりと一瞥すれば、そこにはカエデが評したように確かな「決意」が宿つていて、彼女が憧れていたのも、そして自分が



このGBNに微かな希望を見出したのも肯けた。

決意。自分の中にもあるといつてくれた、小さなようで大きなもの。

戦いの余韻を胸に抱きながら、リリカはセントラル・エリアへと、中央ロビーへの帰還を選択する。

今はまだ、弱く、幼く——辿り着けるかどうかもわからない。

けれど、あの場所は、頂点はいっだって自分を待っていてくれる。そこにいくつもの試練があったとしても、数え切れないほどの壁があつたとしても、少しずつ、少しずつ、一足飛びでは無理だとしても、歩くような速さで乗り越えていけばいい。

誰かにやめておけと言われても、そして自分の臆病な心が震え、戦う心が悲しみに挫けたとしても、この想いがあればいつかは、どこかに辿り着くことができるはずだ。

リリカの躯体が解けて消えていくその瞬間に、戦っていた両機におけるプラクティスモードからのダメージフィードバックが回復する刹那、パシヤリと一つシャッター音が響く。

何も戦いを見ていたのはリリカばかりではなかったということなのだろう。

ケルデイルガンダムをベースとしたその機体は、リリカが完全にロビーへと解けて消えていく瞬間、最高の一枚を撮り終えて満足したのか、アイカたちへメッセージを送りつけると、何処へと飛び去っていく。

合縁奇縁、出会いが織りなす一つの奇妙な縦糸と横糸の軌跡に気付かないまま、リリカも、アイカも、ケイも、そしてケルデイルガンダムの改造機である「ガンダムフアインダー」を操る少女、ハルも、それぞれの描く物語へと帰るように、別々な道へと散らばっていくのだった。



宝探しミッションはいくつか種類があっても、基本的に何かしら物騒な要素と隣り合わせになっていることが多い。

それでもなんとかレアドロップ品を拾って、這々の体といった様子でミワがロビーへと帰還したのと、リリカがロビーに仮想の躯体を再構築したのは、全く同じ瞬間だった。

「わわ、お姉ちゃん……」

「おお、リリカちゃんリリカちゃん。その様子だと、探し物は見つかったのかな？」

どことなく満足したような目をしている妹の碧眼を覗き込んで、ミワもまた、充足を感じながらそう問いかける。

「……う、うん……だから、その……新しいガンブラ、買いに行こっか  
なつて……」

「そつかそつかあ……リリカちゃんならきつと、素敵な機体が作れるよお」

AG E—1ブランシユは今までよく戦ってくれた。

だからこそ、ミワが頭を撫でてくるのに身を任せながらも、リリカは自分が「次」に活かす機体へ、乗り換えるといつても可能な限りブランシユのパーツを流用できないかを脳裏に描く。

ミワが背中を押してくれたのは、正直なところ複雑といえば複雑なのだが、嬉しいという感情がそこには含まれていた。

久しぶりに姉の身体へと自分の体重を預けて、頬をぎこちなくすり寄せながら、幼い頃の残影に触れるかのようにリリカは、少しだけ姉の愛情に甘えてみせる。

「散々ですわ、もう！」

そしてカエデが帰還してきたのは姉妹が身を寄せ合うのに遅れたことだった。

あの後も「高速リペアキット」を活用してハードコアデイメンション・ヴァルガで練習がてらにFOEさんことキヨウスケへのお礼参りに向かっていたカエデだったが、戦績としては数十戦の全てが黒星に終わったという、当然ではあるが惨憺たるものだ。

ハイランカーの世界は遠いとその身に刻みながらも決して闘志を

挫けさせることのないカエデの瞳もまた「決意」に満ち溢れていて、リリカは自分が本当に、出会いに恵まれたのだと感謝をする。

「あら、リリカさん、ミワさん、ごきげんよう」

「おはよおはよお、カエデさん、その様子だと散々だったみたいだねえ」

「……お、おはようございます……」

「散々も散々ですわ、個人ランキング14位は伊達ではないということとですわね……あら、リリカさん」

「な、なんですか、カエデさん……?」

「いえ、瞳に決意が戻ってらしたので。何があつたかは存じ上げませんが、それなら何よりですわー!」

まるで自分のことのように、豊かな胸を支えるように腕を組んで、カエデはリリカの決意が固まった喜びに、首を何度か縦に振った。

タイガーウルフ道場での経験も、そして秘境ディメンションで出会ったテンコと交わした言葉も、そして見届けたアイカの戦いも、全ての糸を辿るならば、それはカエデに、否、フォース「アナザーティルズ」へと行き着く。

「……わ、私……新しい機体、作ります……」

このフォースに、そしてブランシュに少しでも恩返しできるような。

その決意を込めて、リリカは退路を塞ぐようにそう宣言する。

「わーわーぱちぱち……リリカちゃんの新機体、楽しみにしてるからねえ」

「そうでしたの……ならばわたくしも、楽しみにさせていただきますわ!」

完全に徹夜明けのテンションで、リリカたちは三者三様の笑みを浮かべながら、ごく自然にその手を重ね合わせていた。

フォース・アナザーティルズがここからもう一度飛び立つために、そしてもう一度自分たちの明日を信じるために、三人はせーの、と声を掛け合って、一斉に、おー、と、意気込みを口にする。

まず必要なのは、ガンダムAGE―FX。そして。

リリカは未来に託す脳裏の白地図へと己の愛機の新たな姿を描いて、どつと押し寄せてきた眠気に身を任せるように、カエデとミワに続いてGBNからログアウトしていくのだった。

## 第四十話 「グラン・サマー・フェスティバル！」

GBNにおける楽しみ方は何も熱い戦いの世界に身を投じることだけではない。

それは常識というまでに広まった考え方ではあるが、その普及に腐心してきたのがGPDからの移行組がその八割を占めていた黎明期から続く運営の経営努力であり、そして今、リリカたちが臨もうとしている「フォースフェス」における夏季限定イベント、「グラン・サマー・フェスティバル」だった。

フォースフェス自体は、その名前とは裏腹にフォースを組んでないソロ専のダイバーであつても一部コンテンツに対する間口が設けられている、初心者から上級者まで広く浅くをモットーとして楽しむためのイベントだ。

季節ごとによつてそのテーマは大きく変わるものの、基本的には共通して上位報酬で貰えるものに貴重なプラグインだとかパーツデーだとかかそういったものは含まれておらず、参加賞も含めてアバターのコーデに使えるアイテムだとかフォースネストに置ける家具だとか、そういうものに限定されているのが通例である。

と、いうのもそれはたまには殺伐とした戦いの世界から離れて、ゆるく楽しむイベントがあつてもいいのではないか——という運営の計らいであることに違いはないのだが、競争要素等が完全に排除されているというわけでもない。

コレクターたちは上位報酬やアイテムの獲得に躍起になったり、この「グラン・サマー・フェスティバル」であれば午後の部に設けられているコンテストやエキシビジョンマッチ等にばちばちと火花を散らすダイバーたちもまた多いことには違いないのだ。

以前の「グランダイブ・チャレンジ」で水着を購入していたリリカたちはダイバルツクの装いを改めて、特設会場である「シーサイド・エリア」のビーチを歩いていた。

「こうして、フォースで何かしようというのをリリカさんから言い出していただけるのは嬉しいですね」

機体に取り入れたのと同じエメラルドグリーンに近い、淡い色合いのビキニタイプに黒い紐状のアンダーウェアという夏の装いに身を包んだカエデが、行き交う人波を見送りながらそう語る。

カエデが言った通り、この「グラン・サマー・フェスティバル」に「アナザーテイルズ」が参加しようとしたのはリリカの鶴の一声であった。

と、いうのもそれは、スランプから抜け出した記念という意味合いもあれば、GBNについて調べている最中、偶然フォースフェスの項目に行きついて、本来というかなんというか、こういう楽しみ方をしてみたいとリリカが強く希求していたのもある。

「……え、えへへ……その……フォースフェス、皆でこんな風にお祭りに参加するの、憧れてたんです……」

これまた機体に取り入れたのと同じ白いビキニに同じ色のパレオを巻いているリリカは、頬を桜色に染めてはにかみながら、カエデの言葉にそう答えた。

自慢にも何にもならないが、リリカは生まれてこの方誰かと一緒にお祭りに出かけるだとかそういういった経験をした相手は、家族であるミワと両親を除けば一人もいない。

幼い頃は両親に手を引かれて、歩くのが早いミワの後ろをとてとてと必死について歩いていったが、中学に上がったからは原則的に双子はクラスが分けられるという都合上、ミワとお祭りに出かけることもなく、ただ一人で窓辺から打ち上げ花火を眺めていたという、誇るものではないものの徹底したぼっち歴を貫いていたのがリリカだ。

だからこそ、カエデが一も二もなく提案に賛成してくれたのは、リリカにとつてとてつもない喜びであった。

今ももじもじと恥ずかしそうに俯きながら、右の手をカエデと繋ぎ、左の手をミワと繋いで身を寄せ合い歩くリリカはその多幸福感に浮ついた意識が、どこか遠くに行ってしまうのではないかと心配になる。

「うんうん、ミワもリリカちゃんと久しぶりにお祭りに参加できて嬉しいよお」

「……え、えへへ……何年ぶりかな、お姉ちゃん……」

「何年ぶりだつていいよお、今こうしてリリカちゃんと一緒にいられるんだから、それが一番大事だよお」

左の肩にしなだれかかってくるミワもまた、愛機と同様に桜色に近い赤色のビキニと同じ色のパレオという夏の装い、そして同じ双子で双子コーデに身を包んでいる辺り、気合の入れ方が尋常ではなかった。

特別に設定されている空腹パラメータが減少していくようないい匂いに包まれている出店が立ち並ぶエリアは、リリカたちと同じようにフォースフェスを満喫せんとしているダイバーたちで溢れ返っている。

「さあらっしやいらっしやい！ 海の家空いてるよ！」

「かき氷、かき氷いかがつすかー！ 暑い夏にはやっぱこれっしょー」

立ち並んでいる屋台や出店の本番は、ある意味ではこのイベントが午前、午後の部ともに終了し、打ち上げの花火大会までに設定された自由時間にあるのだが、そんなことなど関係ない、今が祭りを楽しむチャンスだとばかりに、出店を経営する側のダイバーも、そして行列を作るダイバーも、どこか浮かれた熱気に身を任せて序盤からアクセルをベタ踏みしていた。

「あの屋台、確か『GHC』がほとんど経営してるものでしたわね」

「然り然り、その通りだよお、カエデさん。おっきな企業にとってはこれだけアクティブユーザーが多いGBNでは名前を売るチャンスなんだつてね〜」

大人の事情はよくわからないけど、とおどけてみせながら、たとえば姉であっても負けるものかとリリカの右肩にしなだれかかかって腕を絡めるカエデに、ミワはWikiに書いてあったことをそのまま諷する。

GHC——「グローリー・ホークス・カンパニー」は、現実に存在する大企業と名前を同じくする巨大なフォース同盟、アライアンスの名前だった。

その構成員は末端組織まで含めれば実に二万人、このゲームにおけ

るアクティヴユーザーの千分の一を占めているとされている。

勿論、大企業と名前が同じであることは偶然でもなんでもなく、本当に現実における「GHC」を経営している社長——この世界では「アトミラール」と名乗っている男が、GBNでその名を更に売り込むべく、というのは大義名分と実利目的で、妻子と共に仮想郷を楽しみたい、というのが本音で設立したアライアンスなのだ。

そして莫大な構成員を抱えているアトミラールたちのフォースは、その物量作戦でいわゆるGVGイベント、「大戦争」イベントで恐れられていたり、今回のように運営と協力してフォースフェスの細々とした準備や施設の経営というものを代理で担っていることが多い。

——と、リリカは両手に花といった状態から、動かしづらい右手の人差し指でGBNまとめwikiにおける「GHC」のページを開いて、その概要を流し読みしていた。

「……ほ、本当に……おつきな企業なんだね……」

「うむむむ、とはいってもそんな企業にも目をつけられるGBNも大概おつきいんだけどね」

「当たり前ですわ。第四世界、と呼ばれているのは伊達ではないということですもの」

GBNの知名度に目をつけて様々な形でコラボレーションを図る企業は後を断たないが、その草分けとなったのが「GHC」であることには疑いはない。

「時は来た……」

ただ、例えば今リリカたちがすれ違い、何事かを呟いた、筋骨隆々とした猫、といった具合のガンダムとは別な作品のキャラクターを再現したものに身を包んだダイバーのダイバルックもまたコラボの産物であり、現実におけるブランドショップとも提携していたりするからこそ、GBNにおけるキャラメイクや楽しみ方の幅は凄まじいことになっているのだ。

「……と、時は来たって……何が……?」

「あれはロールプレイですわ、気にすることはありませんことよ、リリカさん」



「ロールプレイ……」

カエデは密かにリリカの耳元に唇を近づけて頬をすり寄せながらそう語る。

ロールプレイ、という言葉が意味するところはリリカにもわかっていたが、あまりにも奇怪なそのダイバールックのインパクトとそして、自分がそういったことには縁がないという事情から、頭に浮かべていたものはぐるぐると「の」の字形に巻かれたケーキの方だった。「なりきりでも濃い人はあちこちにいるからねえ」

ミワがぐると周囲を一望しただけでも、ガンダムに出てくる原作のキャラクターを再現したダイバールックに身を包んでいたり、或いはコラボ記念の他版権アバターを己の外見と定めているダイバーは多い。

「ひゃっははは！ ダメじゃないかキンケドウ！ 海で泳ぐ前には準備体操をしなきゃあー！」

「準備体操しなかったのは悪かったよ！ だけど俺はキンケドウじゃないって言ってるだろう！」

遊泳が解禁されている区域では、夏の気温を再現しているのにも関わらず、漫画作品「機動戦士クロスボーン・ガンダム」に出てくるキャラクターである、「ザビーネ・シャル」の衣装に身を包み、原作では右目だけになっている眼帯を両目にしたダイバーが、同じ作品を出典とするキンケドウ・ナウそっくりにアバターを設定したダイバーを追いかけ回している姿がある。

流石にそこまで突き抜けているとどうなんだろうねえ、と、ミワは声には出さずそう呟いて、遊泳区域で競泳を始めた二人を一瞥した。「おねーちゃん、お父さんとお母さんがやってるコンテストってどこ……？」

「ちよつち待つて、確か……おつ出た出た。セントラル・ビーチのほとんど真ん中だね。危ないからしつかりあーしと手、繋いどいてよ、ユニ」

「うん、テトラおねーちゃん……！」

色々と濃い楽しみ方をしているダイバーもいれば、真っ当に、とい

うよりは運営の想定どおりにこのお祭りを全力でエンジョイしようとしているドライバーがいるのもまた必然に他ならない。

何を買おうかと、リリカが出店のラインナップを見て考え込んでいた時にすれ違った二人のドライバー、ユニとテトラというらしい——は仲睦まじく手を繋いで、何かが始まっているらしいセントラル・ビーチへと向かっていく。

「あ、あの……お姉ちゃん、その……」

「ん？ なになにに、リリカちゃん？」

「……せ、セントラル・ビーチって、何かやってるの……？」

確か午前と午後でそれぞれ催し物があったのがこの「グラン・サマー・フェスティバル」だったかと、リリカは思い至ってミワに尋ねる。

「んー、確か確か、ミスコンみたいなことやってるって話だねえ、カエデさんは知ってる？」

「ええ、それで合ってますわよ」

いつの間にか三人分のかき氷をその手に抱えていたカエデは、ミワからの問いを肯定しつつ、リリカには練乳味のそれを、ミワには苺味を、そして自身はメロン味のそれにストローを斜めに切ったスプーンがわりのものを突き立てて配った。

「午前の部はミスター・シーサイドとミス・シーサイドを決める『グラン・サマー・コンテスト』が目玉になってるはずですわ。興味はなくても確か投票すれば海の家か屋台で使える引換券が一枚もらえると聞いてましてよ」

「なるほどなるほど、ミワはリリカちゃんがいればそれでいいけどねえ」

「……く、くすぐりたいよ、お姉ちゃん……!」

ミワがぎゅつ、と身を寄せてきたことで姉の髪が肌をくすぐる感覚にリリカはむずむずと背筋を震わせながら、しゃくり、と、カエデが買ってきてくれたかき氷に突き立っていたストローを小さくかき回す。

GBNにおける利点は、良くも悪くも全ての感覚が疑似的に代替さ

れている以上、かき氷やアイスクリームも長時間炎天下に放つておいても溶けずに新鮮なまま楽しむこともその一つだろう。

だが、少し溶けたかき氷を味わうためにはこうしてわざわざかき混ぜるとい一手間を加えなければならぬのが難点だろう。

リリカは少しだけシャーベット状になったそれを口元に運びながら、仮想郷の夏を舌先で転がすように、練乳の濃い味が氷で微かに薄められたその擬似的な味わいを堪能する。

ミスコンに興味がないのはリリカも同じではあったが、料理引換券が貰えるのはそう悪くない。

この「シーサイド・エリア」においてはフォースフェス時限定で独自に設定されている空腹パラメータがどんどん減少していきそうなほど、屋台や出店から漂ってくる香りは暴力的なまでに魅力的だ。

終日参加を決め込んでいるから、先程五つも焼きそばを買い込んで行った赤毛のダイバーは飛ばしすぎだとしても、昼に海の家で小腹を満たすのはそう悪いことではない。

そんな目論見と共に、リリカは控えめに、セントラル・ビーチの方へと視線を向ける。

「あら、リリカさん。ミスコンに興味ありますか？」

「……え、えつと……食べ物と引き換えられるなら、いいかなって……」

「なるほど、確かにこのままここを歩いていてもお腹が空くだけですものね、わかりましたわ、わたくしたちもセントラル・ビーチへ向かいませんこと、ミワさん？」

「んつとねんつとね、ミワはリリカちゃんが良いければそれで良いよお」「え、えへへ……ありがとうございます、カエデさん、お姉ちゃん……」

花より団子とはいったものだが、仮想の空間であったとしても腹が減るのであればそつちを優先するのはそう間違っていることでもない。

三人はかき氷を、きーんと響く頭痛のフィードバックに苦戦しながらもなんとか早足で消化して、先程、テトラとユニが向かっていたセントラル・ビーチ……このリゾート島を三分割した中での中心、リリ

カたちがいる右側の出店エリアからちよつと歩いたところへと向かっていく。

そこにあつたものは、出店エリアに負けず劣らず、凄まじいものだった。

「バエルだ！ アグニカ・カイエルの魂！」

「美しい……」

「宗教画だこれ……」

人混みをかき分けながら辿り着いたセントラル・ビーチには、無数のステージとそして、そこに訪れた夏を彩るガン普拉たちが並んでいた。

目を惹くような美男美女がめいめいにそれぞれのガン普拉と共に被写体として並んで、GBN内に設けられている写真共有サービス「ガンスタグラム」でついた「いいね！」の数を競うことがレギュレーションである「グラン・サマー・コンテスト」は、投票の終了が終わる正午を控えて、最盛期を迎えていたといってもいい。

中でもリリカたちの目を引いたのは、セントラル・ビーチの中心……文字通りの一等地にそのステージを構えて、原形が関節以外何もないと人目でわかるほど徹底的な改修が施されている「ガンダム・バエル」の掌に乗って、扇情的でありながらもどこか厳かな、聖女の君臨といった雰囲気醸し出しているダイバー、「アリア」の存在だった。

前年度の「グラン・サマー・コンテスト」において優勝を飾ったとされるそのポージング技術とそしてバエルの出来栄は一年を経ても衰えることなく、攻めたポーズをしながらも、堂々たる威厳を見せつけるその姿勢の真つ直ぐさは、リリカたちにも魅力的に映る。

「Hey, Show your guts, Guys! 去年は惜敗したからこそ、今年は『GHC』の本気を見せつけるのデース！」  
「が、がんばって……おかしさん……！」

そして、アリアに負けず劣らず人々の耳目を集めているのは、彼女と向かい合うような立地のステージで、「スーパーザクカスタムF2000」をベースに改造を施したガン普拉と、ノーズアート風のポー

ズをとって並んでいる巫女の意匠を取り込んだ夏の装いに身を包む  
ドライバー、「コンゴウ」の存在だった。

GHCを率いる男、アトミラールの愛妻にしてそしてユニの母親で  
ある彼女も、その後ろ盾ばかりが武器ではないとばかりに、ミリタリ  
チックなポーズとそして表情を浮かべること、大衆から絶え間  
なくスクリーンショットを撮るシャッター音が向けられている。

「アイカちゃん、私よー、蔑んだ目で見てー！ ぶっ刺してー！ お  
ほー！」

「毎回思うんだけどお前本当にそれでいいのか……？」

「エリイちゃんいいよね……」

「いい……」

「ファンネルで手玉に取られて破壊されたい……」

そして、ステージの配置こそ、若干奥の方という恵まれない位置に  
ありながらも、色んな意味で濃いファン層を取り込んでいる「リビル  
ドガールズ」のアイカとエリイもまた、意匠こそお揃いでありながら  
もそれぞれ色が違う白と黒のビキニタイプという水着に身を包み、愛  
機であるフェアライズガンダムと、そしてリビルドウォートと共に  
この「グラン・サマー・コンテスト」に出場しているのだった。

「アイカ様!? アイカ様がいらっしやいますの!?! ならわたくしが投  
票するのは『リビルドガールズ』一択ですわ！」

どこか興奮した様子でコンソールを開くなり、立ち上げたガンスタ  
グラムから、アイカとエリイを一番魅力的に写していると判断したス  
クシヨに秒速で「いいね！」を付けながら、カエデは早口で捲し立て  
る。

「なんだかんだ楽しんでるねえ……じゃあじゃあ、ミワは実弾使いの  
よしみでコンゴウさんに投票しちやおつかあ。リリカちゃんはく？」

「え、えつと……私は、アリアさんに……」

「うんうん、あの人も魅力的だよねえ」

見事に三人とも投票先がバラバラだったことに苦笑しつつも、あえ  
て足並みを揃えることもせず、感情の赴くままに三人はそれぞれが  
「いいね！」と思ったドライバーたちに票を入れる。

現在時刻は午前十一時五十分。投票の締め切り五分前という時間  
にありながらも熱気を失うことなく盛り上がるダイバーたちの一部  
となって、リリカたちもまた「グラン・サマー・フェスティバル」午  
前の部を満喫するのだった。

## 第四十一話 「真夏のお宝奇想曲」

「さあ始まりました『グラン・サマー・コンテスト』結果発表会！ 司会はご存知窓辺のモクシユンギク、ミスターMSとお！」

「おう、チイはチイだぜ。解説頼まれたんでいっちょよろろー」

『会いに行ける』ELダイバーにしてご存知『リビルドガールズ』の銭勘定に財布の紐の勘定奉行、三度の戦いより金が好き、でお送りする銭ゲバのチイはんを解説に迎えてお送りしまっせ！」

「ギャラ貰ってなかったらはっ倒してつかんね、モクシユンギクのにーちゃん」

フォースフェス「グラン・サマー・フェスティバル」午前の部が終了してから約三十分、厳正な投票審査が終わったということもあって、百花が咲き乱れていたステージは完全に撤去、セントラル・ビーチには表彰台とそして、イベントの実況と解説を務める二人組のために席が設けられていた。

リリカたちが最前列近くに座れたのは、一種の幸運だったといっぺいいい。

会場に満ち溢れるボルテージは爆発寸前といった調子で、鼓膜をつんざき兼ねない怒号と歓声が、実況役を務めているミスターMSなる男のマイクパフォーマンスに煽られて、臨界まで高められていく。

「……み、耳がきんきんする……」

「然り然り……ミワちゃんもこれはちよいときつついねえ」

「真ん中の席とかじゃなくて助かりましたわ」

午前の部の目玉イベントである「グラン・サマー・コンテスト」にリリカたちはそれほど興味はなかったものの、結果発表までの間は出店エリアや海の家もメニューの提供が止まり、遊泳区域も封鎖される、ということからなんともなしにこの発表会に並んでいたのだが、周りはどうやら事情が違うらしい。

「まあ、ある種当然ですわね。『グラン・サマー・コンテスト』といえどGBNが誇るフォースフェスの中でも目玉コンテンツですし、わたくしたちのように興味があまりない方が少数派なのですわ」

カエデは金の糸で作られたような髪の毛を搔き上げながら、さもありなんといった調子でそんなことを語っていたが、なんだかんだでダイバーとしての血が騒ぐのだろう。

先ほどから落ち着きなく、どことなしにそわそわしているカエデの様子を一瞥したりリリカとミワは、そこにあたたかい笑みを送りながら、実況席に座っているミスターMSと、そして「リビルドガールズ」の財布番にして銭ゲバロリのあだ名で呼ばれているチイへと視線を移す。

「いやー、会場のボルテージも、参加者も前年に負けない盛り上がりでワイラも実況が捗るっでもんですわ！ 特に新進気鋭のダイバーたちもこぞってエントリーしてくれた中、誰が『ミスター・シーサイド』と『ミス・シーサイド』の称号を手に入れると予想しはりますか、解説のチイはん！」

「んー、いや正直誰がとつてもおかしくないんだけど……そうだねい、強いていうなら前年圧倒的な票数で一位を取ったアリアお嬢様と、もうチイが解説することもないチャンプ辺りが鉄板なんじゃない？」

「おおっとこれは手堅く来ましたわ！ しかし数多の戦場を潜り抜けたその観察眼は伊達じゃないっちゅーことですわな！ 果てさてチイはんの予想通りに事が進むのか！ それともんだ大番狂わせが起こるのか！ まずは第三位からの発表で行きまっせー！」

ミスターMSがトークを終えるならマイクを会場に向けたことで、割れんばかりの歓声を増幅させる。

リアルだったら軽い地震と勘違いしそうなほどに高まった熱気はなんだかんだでリリカとミワをも呑み込んで、その熱狂の一部にする程度に、彼は実況として口が上手い。

どこか耳鳴りが聞こえてきそうな感覚をフィードバックされながらも、周りと比べれば小さいものの、リリカはボルテージを煽り立てる一員となって声を張り上げた。

「最高の声援ありがとうございます！ そんなじゃ早速第三位！ まずは『ミス・シーサイド』……おおっと、これは!?!」

「お、番狂わせでも起こったか？」



「仰る通りいきなりの番狂わせ！ ミス・シーサイド第三位はなんと……終末系G―Tuberの『クオン』はんと同票で『リビルドガールズ』より『アイカとエリイ』のズツ友コンビ！ いやー、やっぱり覇者たる者は最高に強い！ そしてそこに割って入ってくる新鋭も同じってことですよな、どう見ます解説のチイはん！」

「マジで？ クオンのねーちゃんが入ってるのは予想通りだったけどあいつらも予想外に健闘してんだねい」

「率直な感想、身内であっても鼻屑目で見ない姿勢は解説の鑑ってとこですよな！ それじゃあ栄えある第三位に選ばれたお三方は表彰台へどうぞ！ 続いてミスター・シーサイドは……おおっとこれも中々予想外！ 前年とは打って変わってニューカマーが登場ですよ！ ご存知『BUILD DIVERS』より、今やスターダムをのし上がり、大人気のG―Tuber、キャプテン・カザミのエントリでっせえええっ！」

キャプテン・カザミなる人物の名を呼ばれた瞬間、会場のボルテージは臨界を超えんばかりに黄色い声援と、野太い怒号にも似たエールが送られる。

彼が誰で何をしたのか、というのにはリリカには正直なところよくわかっていなかったものの、ニューカマーと言いながら妥当なラインですわね、と豊かな胸を支えるように腕を組んだカエデが零している辺り、結果としては番狂わせというより順当なものだったのだろう。

脳が疲れたのか、くあ、とミワが一つ大きな欠伸をする。

リリカはそれにつられそうになりながらも、大声援に応えて手を振りながら表彰台に登っていく、筋骨隆々とした体躯をマゼンタの布地に、光を象った黄色の十字がプリントされたシャツと白ズボンで包んだという出で立ちのダイバーを一瞥した。

フォース「BUILD DIVERS」。

同名だが表記が微妙に異なる「BUILD DIVERS」とは微妙に異なるものの、正式に第三回有志連合戦と認定されたレイドバトル、「アルス」戦において、そこに連なるストーリーミッションをクリアしてきた英傑である彼らの中で、カザミが残した功績は極めて大き

なものだったといえる。

正確には微妙に事情が異なるのだが——様々な理由によって表向きはそのような形に落ち着いている彼らの戦いを考えれば、その評価は妥当なものであるといっても差し支えない。

とはいえそれすら知らないリリカは熱狂に巻かれるまま声援を送っていただけなのだ。

そんな事情を他所に、臨界を乗り越して爆発を起こしかねない勢いまで高まった会場のボルテージを更にぶち上げるがごとく、立ち上がってマイクを掴んだミスターMSは更に言葉を続けていく。

「さあさあ皆はん、本番はまだまだでっせ！ 最後の最後まで第一位はわからない！ ということで第二位の発表に行かせてもらいましょか！ まずはミス・シーサイド……これは!?!」

「なんやかんやで番狂わせは起きるもんだねい……そんでどーしたのさモクシュンギクのにーちゃん」

「信じられるかこの結果！ 地上最強、前年の覇者であったバエリングお嬢様！ アリアはんが惜しくも第二位！ 王座は陥落してもうたけど、これはこれで大健闘！ 続いてミスター・シーサイド第二位は……やはり根強い人気は衰えない！ 今チャンプに最も近い男、『ビルドダイバーズのリク』が前年同様入賞でっせ！」

「おう……こいつはちよいとチイも驚いたな、でも二位でも名誉は名誉、栄えあるお二人は表彰台までどうぞってねい！」

前年度は華々しいジャイアントキリングを果たしたアリアだったが、今年は惜しくも第二位に落ち着いてしまったようだ。

リリカも票を入れていただけに微妙に複雑な心境ではあるのだがそこはそれ、エントリーしていたダイバーの数を数えれば二位でも十分すぎるどころではない話なのだ。

まるで自分のことのように、微妙に肩を落としたリリカを氣遣ってか、ミワの手がそつとその背中に差し伸べられて、肩に体重が預けられる。

「……お姉ちゃん……」

「仕方ないよお、こーいうのは時の運もあるからねえ」

なんだかんだで興味がないと嘯きながらもすつかりのめり込んで  
いる姉妹に、今度はカエデがあたたかな視線を向けて小さく微笑む。  
とはいえ、この結果もある種順当なものであったとはいえるだろ  
う。

前年覇者であったとして、必ずしもその肩書には連覇が約束されて  
いるわけではない。

栄冠は勝ち取ることも難しいが、また同様に、下手をすればそれ以  
上に防衛することも難しいものだど、相場が決まっている。

そういう意味では順位を一つしか落とさなかつたアリアの健闘は  
相当なものだろう。

事実としてカエデの、そしてリリカたちの瞳には、王座から陥落し  
ても尚堂々たる佇まいで表彰台を登っていくアリアの姿は、そんなプ  
ライドと気品が伺える、実に高貴なものに映っていた。

「さあまさかまさかの番狂わせ！ あり得ないと思っていたことが起  
きてしまう、それこそが夏の魔物の仕業なのかもしれませんわな！  
そんな魔物を退けて、第一位の座をその手に取った猛者のご紹介に参  
りたいと思いまっせ！ まずはミス・シーサイド第一位……『GHC』  
はその雪辱を果たした！ 真夏に輝くダイヤモンドダスト、一度は砕  
けど王座に返り咲いたのは、比翼連理のコンゴウはんでっせえええ  
！」

「おー、やるじゃん大資本。そんでやっぱりミスター・シーサイドは」  
「チイはんがお察しの通りご存知の通り！ どんな場所でも常在戦  
場、常に手を抜くということを知らない男、そして皆ご存じGBNの  
頂点に立つ男！ ミスター・シーサイド第一位はチャンピオン、ク  
ジョウ・キョウヤはんが堂々の連覇を果たしましたあああああっ！」  
「チャンピオンの名前が呼ばれた瞬間に、今度は鼓膜が破れそうなほ  
どに甲高く響き渡る黄色い声援が、リリカたちの耳朶を震わせる。

クジョウ・キョウヤ。それはリリカにとつても、きつと誰にとつて  
も憧れの名前であり、こうした「被写体の存在」だけではなく「一緒  
に撮られるガンブラ」の完成度や出来栄えも問われるコンテストにも  
全力を出しているからこそ、認められたものなのだろう。

リリカもまた熱狂の渦に加わりながら、その栄冠を祝福する。

結果だけを見れば、第三位が一番大番狂わせといったところだったのだろうが、夏の魔物が見せる幻影とそして熱狂は、もはや大衆の心に消えない火を灯し切った後だ。

地響きにも似た声援が、そして鳴り止まない拍手が、表彰台に立つて夏の栄冠をその頭上に戴いた英傑たちへと向けられる。

きつと人はそれを祝福と呼ぶのだろう。

そして——リリカはそこに、目には見えなくとも確かな「繋がりを感じていた。

言葉を交わしたわけでもなく、そして何度も顔を合わせるような間柄にもいないダイバーたちと、祝福を分かち合うその喜びに揺蕩いながらリリカは、錯覚にすぎないと理解していても、そこに確かに存在していた、蜃気楼のような夢の欠片に触れた感覚に、じわりと、眦に涙を滲ませるのだった。



フォースフェス「グラン・サマー・フェスティバル」午前の部の目玉がこのミスターアンドミス・シーサイドコンテストであるならば、午後の部の目玉は様々な形で用意されたエキシビジョンマッチであるといってもいい。

前年は「キャノンボール・バリボー」なるガンプラエクストリームスポーツがその枠に定められていたのだが、今年はどうも趣を異にするらしく、「海中宝探し大会」がその枠のひとつに収まっていた。

G-Tuberたちを解説の席に据えて、簡易的なインタビュートそしてお宝探しの実況をミスターMSがボタンタッチした女性へと引き継ぐことで、午後の部の開始が宣言される。

ただ、実況解説に関してはG-Tuberライブ配信枠とアーカイブ枠で分けられているのため、ミスターMSとそしてチイの仕事がなくなった、というわけではなかった。

「さあやって参りました午後の部エキシビジョンマッチ！ 去年は

『キャノンボール・バリボー』でしたが今年の一発目はなんと豪華に海中お宝探し！ ガンプラの版元、そしてカードゲーム『ガンダムトライエイジ』がチャンプとのコラボ記念に発売する「トライエイジガンダム」の入手権を賭けて熱い戦いが始まるうとしてまつせ、解説のチイはん！」

「んー、そうだね、トライエイジガンダムに関しては不平等が出ねーように後日ガンダムベースと直販サイトでの再販が決まってるから、手にできなかったにーちゃんねーちゃんたちは是非買ってってねい」

「露骨な販促ありがとうございましたあ！ そんな訳で始まる海中お宝探し大会、参加するダイバーたちの気合いと殺意はアーカイブ用実況席までビリビリと伝わってきまつせ！」

ミスターMSとチイの掛け合いを背にして、リリカはなんとなく準備運動を終えた後に水中用装備——ティターニアウェアに換装した、ガンダムAGE—1ブランシユのコックピットへ乗り込んでいく。

宝探しに参加しようと思ったのは、半ば天啓のようなものだ。

次なるミキシングの土台となったガンダムAGE—FXを改良するため何素材とすべきか迷っていたときに、あのチャンプが乗っていたガンダムTRYAGEマグナムのバリエーションが大々的に画面へと映し出されたあの瞬間、リリカはこれだ、という確信を抱いたのである。

ガンダムTRYAGEマグナム自体は、レプリカモデルがガンプラの版元からコラボレーション品として発売されているため、あの「F OEさん」をはじめとしたダイバーたちも購入し、各々ミキシングに使ったり、或いはそのまま組み立てたりしているのだが、トライエイジガンダムの売りは、素組みでもパーフェクトレア報酬である「トライエイジシステム」の一部が解禁された設定でパラメータが設定されていることだろう。

そんな性能面の話とはかく、リリカがマグナムではなくトライエイジガンダムへと目をつけた理由は単純だった。

クリアパーツの色である。

TRYAGEマグナムではサイコフレームやGN粒子に似たブ

ルーググリーンで成形されているそのパーツを赤く染めたいのなら、メタリック塗装を施すしかないのだが、トライエイジガンダムであれば最初からクリアパーツの質感を保った上で鮮やかな赤を取り入れることができる。

だからこそ、梨々香は気合を入れて海中お宝探し大会へと臨んだのであるが——結果からいってしまえば、それは惨憺たるものだった。まず、フォース「ビルドライジング」の「ケイ」というダイバーが、僅か十五分という短時間にして当たりの入った箱を引き当てたのはいい。

通常のお宝探しミッションと違って、そこからの奪い合いを含めてこのエキシビジョンマッチは組まれているからだ。

「……負けられない、頑張ろう、ブランシユ……！」

磁気穿孔システムから光波推進システムへと転換したタイタスの手足から光のヒレとでもいうべきものを形成して、リリカのAGE-1ブランシユはケイが操るガンダムギヤラクシーバーストを猛追するが、それが良くなかったのかどうかはわからない。

ミワも、愛機であるフリーダムガンダムルージユのAWACSを利用してケイを仕留めようとハーブーン・ガンを構え、そしてカエデもお宝を取り返すためにウイングゼロヌーベルによる強襲をかけようとした、正にその時だった。

——理外の存在が降臨した。

理の王と名乗りながらもその圧倒的な自己主張力とパワーを誇る、リーオーを改造したガンプラが、海中でも減衰しない巨大なビームソードを振り回し、チャンプが応戦するその光景は正に地獄絵図と呼ぶに相応しい。

「……お姉ちゃん、あれ、なに……？」

「……怖いねえ、リリカちゃん」

守ってあげるよお、とは口にしたものの、正直なところあれと、そしてあれと渡り合っているチャンプの戦いに割って入るなど自殺行為にすぎない。

ミワは冷や汗をこめかみに滲ませながらも、手にしたハーブーン・

ガンでその機体——【オーマ・リ・オー】と、ガンダムTRYAGE  
マグナムが交戦する隙間からケイを仕留めんと狙いをつけてトリ  
ガーを引く。

しかし、それも二機が交戦し、激突する余波でかき消されてしまう。  
「こうなったら仕方ありませんわ、飛んで火に入るなんとやらだとし  
ても、チャンピオンとあのめちやくちやなりーオーをどうにか——」  
「っ!？」

「リリカちゃん?」

リリカが圧倒的かつ根源的な恐怖に身を震わせたのは、痺れを切ら  
したカエデが、ゼロシステムを起動させて強行突破を図ろうとしたそ  
の瞬間だった。

何かが来る。自分が辿ってきた各種クソゲー遍歴とそして防衛本  
能が、びりびりと脊髄を伝って、リリカの脳裏に警告を出す。

だが——その瞬間にはもう遅かったといってもいい。

オーマ・リ・オーの必殺技と、チャンピオンのEXカリバーがぶつ  
かり合ったその瞬間——起こったのは海の蒸発という前代未聞の事  
態にして、そしてそれをテイメンション全体の崩壊に繋がらせないた  
めに相殺を試みた三機のガンプラの必殺技の衝突により、地殻がめく  
れあがるという大惨事だった。

いくら本能が警戒していたとしても、そしてリリカが持ち合わせて  
いる「危機」に対する察知能力が、ミワの狙撃に使っている感知能力  
同様に他のダイバーから頭抜けていたとしても、一瞬で着弾する、暴  
力的なまでの範囲攻撃から逃れることは不可能に近い。

唾然として実況と解説の席すらも沈黙に口をつぐんでいる最中、リ  
リカはやっぱりか、と、眦に涙を滲ませながら、後日ガンダムベース  
で再販されるそれを買おうと固く心に誓って、巻き込まれたその他大  
勢共々、テクスチャの塵へと還っていくのだった。

## 第四十二話 「灼熱ビーチサイド・ガールズ」

午後の部のトップバッターを飾るエキシビジョンマッチは、海の蒸発という惨憺たる事態を招いて終わったものの、幸いなことに「グラン・サマー・フェスティバル」の開催それ自体には支障が出ない範囲だった。

部分的に海のフィールドに対するロールバックを施すことで引き続き遊泳を解禁しつつ、灼熱の如く高まったバイブスを臨界まで引き上げるように、エキシビジョンマッチの部は続いていた。

「さてさて先程は海が蒸発するとかいうとんでもないことになってもうたこの『グラン・サマー・フェスティバル』、引き続き午後の五時までは様々なエキシビジョンマッチが会場を網羅してしまっせ、解説のチイはん！」

「お、おう……あんなんヴァルガでやってくれよなマジで……あー、それでエキシビジョンマッチだっけ？ それなら去年に引き続きチイたちがやってた『キャノンボール・バリボー』やら、『灼熱バーニングフラッグ』やら『ピンホール・チャレンジ』やら色々やってるから参加したいダイバー諸君はどんどんエントリーしてってねい！」

海中宝探し大会が予想外に早く終わったということも手伝って、次の報酬——といっても、「GHC」が出した協賛金と運営から贈られるトロフィー程度のものでしかないのだが、とにかくあのままで夏は終わらせないという決意を宿したダイバーたちは、次々に各種競技へとエントリーしていく。

部分的に施されたロールバック措置によって、先ほど海と共に蒸発していたリリカたちのガンプラもその耐久値は全快状態まで復帰している。

ならば三種競技のうちどれを受けたものかと、「アナザーテイルズ」の三人はエントリー人数とエントリー終了までの時間が表示されている電光掲示板を睨み付けて、めいめいに考えを巡らせていた。

「このピンホール・チャレンジはどっちかかっていうとミワ向きだねえ」「キロ先のコインを撃ち抜いて、その精度を競う競技ですか？ 多



分夏祭りの射的が原型なんでしょうけれど、随分とまあ無茶な企画を思いつきますわね」

「……え、えつと……この『灼熱バーニングフラッグ』っていうのは……」

「個人競技だよお、リリカちゃん。簡単に言うと、ガンプラでやるビーチフラッグみたいなものだねえ」

キャノンボール・バリボーについては何となく予想がついていたのと前年度にも開催されていたこともあったため、ニューフェイスとして浮かんできた競技を指してリリカはミワへと問いかける。

ミワが言った通りに、「灼熱バーニングフラッグ」はガンプラによるビーチフラッグ競技のようなもので、例によってルールにはバーリ・トウードな魔改造が施されているものだ。

砂浜に突き立てられた旗を入手したら勝ち。できなかつたら負け、というルールは本家と同様であるものの、ここは魔境と名高いGBNだ。それだけで済むはずはない。

それを示すように、旗を入手するまでの間は相手への攻撃が認められる、というルールが付け足されているのが、「灼熱バーニングフラッグ」の最大の特徴だった。

出足で遅れても最速で旗にたどり着こうとするスピード型を撃墜する妨害型、そんな妨害型の攻撃を振り切ってひたすらに旗の獲得を目指すスピード型、そして両者が潰しあっている間に攻撃を耐えて最後に漁夫の利を手にしようとする防御型が三竦みになっているそれは、最早ビーチフラッグとは一線を画しているといってもいい。

キャノンボール・バリボーですら相手のコックピットを故意に狙つてのスマッシュが禁じられているのに、それを解禁しているとあらばその壮絶さは最早語るまでもないだろう。

リリカはミワの口から飛び出てきた言葉に、ごくりと生唾を呑み込んだ。

「でもこの競技、案外リリカさん向けではありませんの?」

「……わ、私向け……ですか?」

「ええ、AGEー1ブランシュはスピード特化型に近いのなら、ブース

トゲージが制限されるキャノンボール・バリボーよりは色々と無制限なこちらの方が合っているかと思ひましてよ」

自信ありげに微笑みながらカエデはそう語るが、実際のところ砂浜という悪条件も相まって、AGE―1ブランシユが活躍できるかどうかについては未知数といったところである。

だが、それでもリリカならやれる、という確かな信頼がそこには託されていた。

ブランシユから、受け継ぐためのパーツは決まっている。

それでも――持っていく思い出が一つでも多いに越したことはないだろう。

カエデの微笑みに背中を押されて、リリカはコンソールからタブを開くと、「灼熱バーニングフラッグ」へのエントリー登録を決意する。

簡素な項目、ダイバーネームとID、そしてガンプラの登録を済ませるだけで、「灼熱バーニングフラッグ」への出場は決定された。

「カエデさん……私、がんばります……!」

「ええ、わたくしは全力で応援しておりますわよ、リリカさん!」

ひし、と手を取り合う二人の姿にどことなく安心したような、しかしながらもどこか不満を隠せずに、ミワは頬を膨らませる。

「むむむむ……リリカちゃん成分が急速に失われていくよお」

「なんですのそれ……」

「あのねあのねカエデさん、リリカちゃん成分はDNAに素早く届いていずれ万病に効くようになるんだよお、だからミワから欠如すると大変なことになるよ」

「喋れているのですから余裕はありますわね、それでミワさんは『ピンホール・チャレンジ』にエントリーしますの?」

海風が吹き抜ける砂浜で、1キロ先のコインをいかに正確に撃ち抜くかという並どころか、凄腕のスナイパーだつて悲鳴を上げそうなレギュレーションが設定されている競技を指して、カエデはどこか勝ち誇るように、リリカを抱き寄せながら肩をすくめた。

リリカとしては複雑な心こそまだあれどミワのことも好きだし、カエデだつて好きだから別にこんな自分の身体なんて好きにしてくれ

ればいいとは思っているのだが、争いが起きるのは正直困る。

あわあわとカエデに抱き寄せられたまま表情をくるくると変えて慌てた様子を見せるリリカの姿に、これはこれでありかなあ、と呑気なことを宣いながら、ミワは言葉は不要とばかりに「ピンホール・チャレンジ」へとエントリーを果たす。

「一応スナイパーとしては狙ってみたいからねえ」

「お姉ちゃん……できるの?」

「ふふふ……できるできる、つていいたいけど、リリカちゃんが応援してくれるならミワちゃんも頑張つてなんとかするつて感じかな」

心配げに上目遣いで自分のことを見上げてくる双子の妹の眼差しに、格好良く応えてみせたいところではあったが、一キロ先、そして海風と砂浜という条件が加わった状態でコインを撃ち抜けるかどうかについては、リリカのAGE―ブランチュが灼熱バーニングフラッグで活躍できるかどうかと同じ――つまり、全くの未知数といったところだった。

それでも、リリカが応援してくれるならできる気がする。

ミワにとつての原動力は、良くも悪くもそんな具合にシンプルなものであった。

「あら、わたくしの応援は不要なのでして?」

「もちろんもちろん、カエデさんだって応援してくれるならそれはミワの力になるんだよお」

「言い出しっぺのわたくしがいうのもなんですよけれど……ミワさん、それでいいんですの?」

「然り然り、いいんだよお。だって……今のミワは『アナザーテイルズ』だからねえ」

大っぴらに口に出したことはなければ、今後もそうするつもりもないのだが、「エーデルローゼ」を追放されたときにミワが感じていたものは、リリカと同じ孤独であった。

それがいかに許されない過ちであるかは、ミワもわかっている。

だから二つ名の返上に躍起になっているわけだし、今、「アナザーテイルズ」では味方の犠牲をコラテラルダメージとするような戦術は

取っていないのだ。

それでも、彷徨うようにGBNをソロプレイしていた時にミワが感じていたものは寂しさであり、そして、リリカと同じ「繋がり」に飢えていたことも確かだった。

自分の存在は思ったよりもこのフォースに影響を与えているらしい、と、普段のミワらしからぬ湿っぽい言動を耳にしたカエデは、少しだけ困ったようにブロンドをふわりと掻き上げる。

リリカも、ミワが抱いていたものの正体が果たして自分と近いものであったことに面食らいながらも、不可能を可能にすべく戦場へと旅立っていく姉の背中に、何か言葉をかけようと手を伸ばし、息を小さく整えていく。

「……そ、その……お姉ちゃん……」

「なになに、リリカちゃん？」

「……が、頑張つて……！ 私も、カエデさんも、応援してるから……」「うんうん……ありがたうだよお、リリカちゃん、カエデさん。それじゃあミワは不可能を可能にしに行つてくるねえ」

「……それ死亡フラグじゃありませんの？」

カエデとしてはミワのことは嫌いではなかったし、その、どこか掴みどころのない性格も猫のようで好感を抱いていたのだが、人間というのは得てして一面的なものではなく、そして彼女は紛れもなくリリカの姉なのだ、と、そんな感情を呆れたような言葉に覆い隠す。

リリカもミワも、性格こそ違うけれどどこか人恋しさがあって、リリカは人見知りでこそあるが、根本的にはミワと同じように人懐っこくて。

そこにある「血筋」の妙を思いながら、カエデはリリカの応援に向かうべく、観客席のチケットをコンソールから購入して、「灼熱バーニングフラッグ」の会場へと向かっていくのだった。



少女が携えたカメラに映し出されている映像は、概ね地獄絵図か、

そうでなければ砂浜ではなくコロッセウムに駆り出されたカリギユラの剣闘士を映し出していたものだといってもいい。

灼熱バーニングフラッグ。キャノンボール・バリボーと並んで真夏のエクストリームガンプラスポーツとして数えられているそれを少女——ダイバーネーム「ハル」が撮影するのは初めてのことだったが、怒号と悲鳴、そして歓声が縋い交ぜになったこの光景は、被写体としてはなかなか前衛的なものだ。

「なんでいうか、それでいいの？ ハル」

「なにがき、ナツキ」

そんなハルの隣に腰掛けていた少女、ナツキは一心不乱にファインダーを覗き込み、弾幕砲火を掻い潜り、あるいはその装甲で受け止めて、あるいは花火のように爆散していくエクストリームな光景を撮影している親友へとそう問いかける。

言ったところでそれが何か意味を持つのかといわれれば、レンズ越しにハルがその景色を覗き込んでいる、ということが全ての答えなのだろうが、ちよつとした手持ち無沙汰を埋め合わせるような、そうでなければ少しだけ嫉妬をしているような具合に、ナツキは唇を尖らせていた。

「うんまあ、絵面としては中々斬新だし」

「まあなに考えてたらこんなスポーツ思いつくのかって話だからね」

「それはわたしもそう思う……って、あのAGEEーだっけ、やるみたいだね」

ハルの向けたファインダーが映し出す白亜の機体は、砂浜という悪条件と、そして飛び交う弾幕砲火を突如として倍速化することで潜り抜けながら、バトルフィールドの中心に聳え立つ旗を掻っ攫っている。

「んー、確か『アナザーテイルズ』のリリカって子が乗ってるやつだね」「知ってるの？」

「知ってるといえば知ってるし知らないといえば知らないの？」

「結局どっちなんだそれは……」

曖昧なナツキの言葉に小首を傾げつつも、シャッターチャンスは見

逃さない。

かしやり、と、勝者を映し出すウィンドウに浮かんだリリカがふにやりと柔らかく頬を緩めた笑みを浮かべた瞬間を狙って、今も躍動的にビーチフラッグを手にしているAGEーブルーランシユと彼女が同じ画面に収まるような角度からシャッターを切る。

自分があの地獄絵図を体現した場に居合わせたといは欠片も思わないものの、やっぱり何かを手にするというのは一つの達成感を与えてくれるのだろう。

ハルはナツキと、そして応援席で鉢巻きを巻いてチアガール風の衣装にダイバルツクを改め、声援に声を張り上げている金髪の少女――カエデを交互に見遣ると、そこにある温度差を感じながら、リリカという少女が慕われているのだと、茫洋とそんなことを考える。

「なんだなんだ、もしかして妬いてる？」

「どうだろ、あの子とわたしは……似てる気がするっていうか、でも違う、のかな。よくわかんない」

「そりや違うでしょ」

「じゃあ妬いてないってことで」

わたしにはナツキがいるからね、と付け足して、ハルは再び、第三回戦、準々決勝へと進んでいく戦いを写真に収めるためにレンズを覗き込むのだった。



GBNにおいても、アバター用の銃器や武器というのはフレージャー程度とはいえ設定されている。

とはいえ、それを使って故意にプレイヤーを攻撃すれば重大なペナルティが課されるし、ガンプラ相手にはほとんど効果がない以上、やはりフレージャーアイテムにすぎない武器類が活かされる場面はほとんどないと言ってもいい。

だが、それが活かされる場面、それが今この瞬間であることに疑いはない。

浜辺に出現した物見櫓、そこから一キロ先にあるコインを撃ちぬくべく、我こそはとこぞつて現れた有志たちが奮闘していたのだが、超絶難易度として設定されているこのエキシビジョンマッチは、例え腕に覚えがあつたとしても挫折するほどのものである。

多くのダイバーたちがニアピンにすら寄せられずに去っていく中で、一角の注目を集めている人物がいた。

があん、と、擬似的にフィードバックされたりコイルの衝撃を肩に受けながら、ミワは一キロ先の台に固定されたコイン、その中心を寸分の狂いもなく撃ち抜いてみせる。

ほんのりと桃色に寄せられた赤い水着に身を包みながらも、今はそれが戦装束であるがごとくその瞳には苛烈な闘志を宿して、ミワは残弾を確認する。

この「ピンホール・チャレンジ」において、ダイバーに支給される弾丸は全部で五発、そして銃に関しては支給品を持ち込んでも、普段使っているものを持ち込んでも構わないとされていたが、ミワはアバター用の銃器を持っていないため、支給品であるボルトアクション式のスナイパーライフルを使っていた。

だが――

じわり、とこめかみに冷や汗が滲むと同時に、イヤーマフ越しにも聞こえてくる銃声は、決して遠い射程を外したものではない。

セミオートマチック式の、「機動戦士ガンダム00」において登場人物「ロックオン・ストラトス」が使っていたスナイパーライフル型のデバイスを模した、特注品であろうそれを構える金色のビキニタイプの水着へと身を包んだダイバー、「ミシエル」もまたミワと同様にコインの中心を寸分変わらず射抜いているのだ。

「おっとおっと！ こいつはとんでもない展開になってまいりましたあ！ 二人のダイバーがほとんど同時にコインの中心を射抜く！

どう見ますか解説のチイはん！」

「んー、そうだねい、ピンホールチャレンジの名前通り、こっからが本番だからミワのねーちゃんもミシエルのねーちゃんも油断できないんじゃない？」

いやもう今の段階で凄すぎてなにやってんのかわかんないけどさ、と付け加えて呆れ半分驚き半分といった調子で、ニヒルに肩を竦めながらチイはそう語る。

だが、ピンホール・チャレンジの名の通り、この競技の真骨頂は、コインに穿たれた孔を寸分違わず通し続けることにあるのだ。

当てるだけでも気が狂いそうな難易度であるのに、そんなレギュレーションを設定した運営班はなにを考えているのかと突っ込みたくなるような難易度だが、それでもミワとミシエルは第二射も、正確無比に穿たれた孔を射抜いてみせる。

三発、四発——ランダムに設定された条件としての海風を勘定に入れないながら、ミワとミシエルは正確無比にコインを射抜いていくが、セミオートマッチク式とボルトアクション式ではリロードに時間差が生じる。

そしてこの競技にもし同時に五発のピンホール・ショットを成功させた場合——優勝者と判断されるのは、先にそれを成功させたダイバーのみだ。

ミシエルは今、五発目を放とうとしている。

ミワは焦りを心の内に秘めながらも冷静にボルトアクションによつて五発目の弾を装填して、狙撃姿勢を取り、照星を覗き込む。

だが——もしも、二人を分かつものがあつたとするならばそれは、運だったという他にない。

弾丸を先に放つたのはミシエルだったが、突如としてイレギュラーステータスとされた突風が吹いたことで、その弾道は大きく逸れて、コインの中心を外してしまう。

「……貫つたよおー」

チャンスがあるとするなら、それは今この瞬間だけだ。

この一瞬に乾坤を賭して一擲と成す。

その精神を秘めたミワが放つた弾丸は、出足で遅れたが故に吹き荒れた風を計算に入れることが可能となっていた。

いってしまえば運ゲーで、ミワが勝利を手にしたのはたまたまだつたのかもしれない。



それでも、一キロ先のコインに五発の弾丸。狂気のピンホール・シヨットを完遂したのがミワであったことに違いはない。

「ッ、決めたああああッ！ この狂気のピンホール・チャレンジ！ 寸分違わずアクシデントをも制したのは、奇しくも『灼熱バーニングフラッグ』を制したのと同じ、『アナザーテイルズ』のミワはんだああああッ！」

「いやあ……神業ってもんを拝ませてもらったねい！ 会場のにーちゃんねーちゃん、優勝者にどうぞ盛大な拍手をよろしくねい！」

実況席から湧き起こる歓声もどこか遠く、黄昏の色に染まる砂浜で一人、ミワは喜びと、そして少しの罪悪感を覚えて支給品のライフルを抱き寄せる。

「グッドゲームでしたわ、ミワさん」

「どもどもく、ミシエルさんだったかなあ、最後は運ゲーだったけどねえ」

「ええ、しかし運も実力の内と申しますわ。功を焦ったことこそがわたくしの敗因。それを気に病む必要などどこにもありませんことよ」  
「……まさか、励まされちゃうなんてねえ、どうもどうもだよお、ミシエルさん」

ミシエルとミワは互いの健闘を称え合い、がっしりと握手を交わす。

奇しくも今新進気鋭のフォースとして話題になっているミシエルの「ビルドライジング」とミワの「アナザーテイルズ」だが、そんな立場も関係ないとばかりに垣根を超えて交わされた熱い両手の抱擁に、万雷の拍手が鳴り響く。

そして全てのエキシビジョンマッチが終わりを告げた海岸に、怒号のように、この時間との惜別を悔やむように——しかしながら清々しい声援が、高らかに響き渡るのだった。

## 第四十三話 「はじめてのたからもの」

ミワがピンホール・チャレンジを成功させた時点から、時はリリカが「灼熱バーニングフラッグ」の準決勝戦まで時は遡る。

結論からいってしまえば、リリカとそしてAGE―1ブランシユがこの競技に対して持ち合わせている適正は、最高水準のものといっても過言ではなかった。

カエデが応援してくれていることも手伝って、リリカのモチベーションが高まっているというのもあれば、スパローウエアをもとにしたGバウンサーの手足は、踏ん張る力こそ確かにティターニアウエアと比較して劣っているが、この競技で重要なのは何よりも瞬発力だ。確かに、この「灼熱バーニングフラッグ」はスピード型と攻撃型と防御型が三竦みになっているように見えるかもしれない。

だが、実態を鑑みてみれば、いかに早く旗を入手できるか、が勝利の前提条件として設定されていて、そしてリスポーンが不可能なように設定されている以上、自滅覚悟での範囲攻撃で巻き込むのはノーコメントで再試合となるために、自ずと攻撃型の取れる手段は限られてくる。

即ち範囲攻撃といっても核ミサイルやサテライトキャノンなどではなく、ダインスレイヴ或いはミサイル一斉射のように自機を巻き込まないタイプでかつ弾速や面制圧力に優れた武装を使うのが、攻撃型の常道であった。

だが――机上の空論に過ぎないとはいえ、それが来ると分かっているのなら、立てる対策は簡単なものだ。

弾幕砲火や狙撃を回避して、誰よりも早くビーチフラッグに辿り着けばいい。

奇しくもそれは、リリカがブランシユアクセルを発動したとしても敵わなかった猛者たちと同じ結論であった。

そしてリリカは、今までのゲーム遍歴が惨憺たるクソゲーの歴史となつている以上、不名誉なことではあるが、「殺され方」については誰よりもその身に刻まれていたといってもいい。

しかし怪我の功名、災い転じて福と成すというように、バトルフィールドの範囲が限られている中で、「自分を殺すにはどうすればいいのか」という条件は、リリカの中である程度予測がついていた。「……お願い、ブランシユ……！」　ブランシユアクセル、ダブルブースト！」

だからこそ、目の前にどつしりと構えているフルアーマーΖΖガンダムハイパー・メガ・カノンと全身のマイクロミサイル一斉射、そしてV2アサルトバスターガンダムの全砲門同時射撃、ストライクフリーダムガンダムのドラグーン・フルバーストという、悪夢のような弾幕砲火のコラボレーションを躲し、擦り抜け、リリカは加速したAGE-1ブランシユとともに、その栄光の御旗を掴み取る。

『決まったああああーッ！　並み居る弾幕砲火のスペシャリストたちによる攻撃を全てすり抜けた「アナザーテイルズ」のリリカはん！　今回も華麗にフラッグを奪取して決勝戦進出となりましたわ！　どないでつか解説のチイはん！』

『んー、そだね、あのトランザムみたいな時限強化技は中々珍しいねい』

『と、言いますと？』

『機体が高速化するってんならそれこそ「ビルドダイバースのリク」が使ってる「トランザムインフィニティ」だとか、チャンプの「FXプローション」だとか色々あるけど、モーションの速度まで上がってるってなると中々レアなもんだなって、少なくともチイは他に見たことないよ』

『なるほど、新進気鋭にして実にユニークな必殺技を引っ提げてエントリーしたりリリカはん、その活躍は魔境を勝ち抜いた猛者たちが集う決勝戦でも発揮されるかに要注目ってわけですわな！　さあ、インターバルを挟んでからの決勝戦も目が離せない展開になること間違いないでっせ！　お手元のポップコーンとコーラの補充はお早めに！』

実況解説を務めているミスターMSとチイが評した通り、リリカが持ち合わせているブランシユアクセルはGBNの中でもレアな部類

の必殺技に入る。

とはいえその絡繰が、ホースの出口を無理やり留めて、流れる水を堰き止めているようなものである以上、ブランシユもまた度重なる戦いで、ダブルアクセル以上は使っていないくとも細かなダメージが蓄積している。

「お疲れ様ですわ、リリカさん。ブランシユは持ちそうでした？」

「……は、はい。あと一回ぐらいならなんとか……」

すっかりセコンド役に収まったカエデが、売店で買ってきたジュースをリリカに手渡しながら問いかける。

ブランシユアクセルを使い続けた訳ではなく、ここぞという瞬間を見計らったのダブルブースト、というパターンで勝ちを掴み続けてきたこともあって、あと一回——それこそ、スクエアブーストを起動すること自体は可能だろうというのがリリカの見立てだった。

だが、既にコックピットにはイエローコーションが瞬いている。

実際のところどうなるかについては五分五分といったところだが、それでもダブルブーストを発動するだけならば支障がない、ということに間違いはない。

カエデからの激励と気遣いと共に受け取ったトロピカルジュースで、仮想空間だというのに乾いた感覚がする喉を潤しながら、リリカはブランシユのコックピットへと戻っていく。

インターバルの時間が終わると同時に、ざわざわと賑わっていたはずの観客席は水を打ったように静まり返っていた。

決勝戦とあらば、生き残ってきた面子もまた、錚々たる猛者であることに違いはない。

誰かがごくり、と呑み込んだ生唾が波紋を広げるように、ざわざわと、沈黙していたはずの観客席はにわかに、誰が勝つのかといった期待や不安が入り混じった喧騒を取り戻していく。

『さあ、始まりませ「灼熱バーニングフラッグ」決勝戦！ これまでの戦いを生き抜いてきた猛者が四人！ 新進気鋭の新星から、渚の王者たる古豪までが一堂に会するこの光景は中々見れるもんじや面白いですわ！』

『そだねー、去年はやってなかったとはいえ一昨年優勝した「浜辺の王者」も順当に勝ち残ってきた以上、誰に賭けるかは慎重に行かないとねい』

『こんな時にも銭勘定！ ある意味流石ですわ「リビルドガールズ」の金庫番！ さあて会場が程よくあつたまつてきたところで、選手紹介と参りまつせ！ Aブロック！ 渚において敵はない、「灼熱バーニングフラッグ」三冠という記録を持ち合わせる王者「ミスミ」はんと「ガンダムサンドダイバー」でつせ！』

ミスターMSの紹介に答えるかのように、その機体——陸戦型ガンダムをベースに砂地での活動に特化した足回りと、そして姿勢制御とスピードを出すために増設されたスラスタ類が目を惹く。「ガンダムサンドダイバー」は手を振ってみせる。

『続いてBブロック！ このレースにおいてこいつは怖い！ バーリ・トウードの申し子にして唯一生き残ったクレイジーアタッカー、「ジャン」はんと「スターパンジャン」のエントリーや！』

その機体は正しく、異様にして奇妙といった出で立ちであった。

砲塔を取り払ったボールを中心にして、車輪のようにスターゲイザーが持ち合わせているヴォアチュール・リユミエール発生器であるリングを装着したその外見は、かつての大戦で某国が試作して、試作段階に留まった兵器である「パンジャンドラム」を思わせるものとなっている。

しかしてそれはこけおどしでもなんでもなく、光の帆を展開して猛スピードで直進し、唯一ボールから残されたクローアームでフラッグをもぎ取ってきた実力は伊達ではない。

ただし、クレイジーアタッカーと評された通り、スタートダッシュであらぬ方向にすつ飛んで自爆、そのままノーコンテストに持ち込むという珍事も引つ提げているのだが——そんな事情はさておくとばかりに、ミスターMSはマイクパフォーマンスを続行する。

『Cブロック！ スピードといえば我にあり！ 今年も王者に挑戦上を突きつける無冠の帝王にして、古武術を応用したその足捌きはスラスターすら置き去りにする！ ダイバー「ホノカ」はんの「ガンダム

シユネーアストレイ』、堂々入場！』

その機体は、ターンレッドがレッドフレームの配色を逆にしたのであれば、ブルーフレームのカラーリングを反転したかのようなカラーリングに彩られながらも、それ以外はその「アカリ」同様、本体に大きな改造を施していないものだった。

アストレイの接地性とグリップ力に全てを託し、縮地法によって確実に敵の動きを捌きながらフラッグを奪還するという正統派にして、スラスターを活用するガンダムサンドダイバーとは真逆の戦い方をすることもあり、「ミスミ」と「ホノカ」はライバル関係である、と見られていることが多いのだ。

そして、錚々たる三人がエントリーしたのに遅れて、背筋を震わせ、操縦桿を握る手に汗を滲ませながらも、決勝戦まで駒を進めることができたリリカが会場たるバトルフィールドに入場する。

『そして大トリを飾るのは新進気鋭、全く無名でありながらここまでのし上がってきたダークホース、フォース「アナザーテイルズ」を率いる「リリカ」はんとそして「ガンダムAGE―ブランチユ」！この夏奇跡を見せてくれるのか、それともどうなるのか、いろんな意味で目が離せない決勝戦、間もなく開幕となりまっせ！』

割れんばかりの歓声はどこか怒号にも似ていて、リリカはそれに気圧されそうになってしまいが、観客席の一番いい場所に陣取って、チアガール姿で応援してくれているカエデのことを、そして「ピンホール・チャレンジ」に挑んでいるミワのことを思えば、負けるわけにはいかない。

リリカはすー、はー、と、大きく息を整えながら、決勝に残ったダイバーたちを俯瞰する。

「……純粋な直線加速力なら、Bブロックの人……でも、妨害なしで突っ込んでいくならCブロックの人、Aブロックの人は何をしてくるかかわからない……」

情報を集めた訳ではないが、機体の外観やミスターMSのマイクパフォーマンスを信頼するのであれば、自分が残る三人の猛者たちを出し抜いて勝つ方法は一つしか残されていない。

そうだ。なんだかんだで、アクシデントを引っ提げてきたパンジヤンドラムもどきみたいな機体はいるけれど、上位まで残ってきた四人はどれも速度と立ち回りによってフラッグを確保する、王道のスピード型だといっても良い。

ならば——切り札を切るのはここしかないだろう。

実況と解説が高らかにカウントダウンをするのに合わせて、リリカは操縦桿のトリガーに指をかける。

五。四、三、にい、いち——

「ブランシユアクセル、スクエアブースト！」

ゼロ、と宣言されたその瞬間をぴたりと狙い撃つかのように、リリカは機体に負担がかかることを承知で、開幕から勝利を全力で掴みにかかった。

貫くように、撃ち抜くように、誰よりも早く、奴よりも速く——あのパンジヤンドラムもどきが光の帆を展開するよりも、あのターンプルーとでも呼ぶべきアストレイが縮地の足を踏み出すよりも、そして、王者たるガンダムサンドダイバーがスラスターを噴かすよりも疾く！

果たしてリリカの試みは、他三人の度肝を抜いたという意味では成功していた。

この戦いでリリカが開示してきた手札がダブルブーストだとすれば、それ以上の倍率への強化が可能となっている、ということについては決勝戦まで頑なに伏せ続けてきたものだ。

ブランシユはリリカの叫びに応えるかのように、その琥珀の双眸に力強い輝きを放ち、悪条件の砂浜を物ともせず、リリカが願ったように、誰よりも疾く、速く、早く——駆け抜けていく。

その後は一方的な展開だった。

スターパンジヤンが自爆による妨害を試みたものの、吹き飛んでくる機体の破片を擦り抜けて、一瞬だけ生まれた猛者たちの間隙を突くように、四倍まで高速化されたAGE-1ブランシユは、関節部からスパークと火花を噴き出しながらも、見事に突き立てられた旗を搔つ攫ってみせる。

『き……決まったアアアアーツ！ なんとということでしょう！ こんなことがあってええんですかいな解説のチイはん！ なんと試合開始から三分も、一分も経たずに、新進気鋭のチャレンジャー、「リリカ」はんが優勝旗となるフラッグを搔っ攫ってしまいましたわ！』

『あの必殺技……機体も相当ダメージ受けるみたいだけど、ここまで倍率加算を伏せてきたのは作戦勝ちだねい……んつつつ、チイと会ったばっかの頃から信じらんねーぐらいせいちよーしてるね、リリカのねーちゃん』

『なんと！ チイはんとも因縁があつたチャレンジャー、浜辺の王者を下して優勝！ 優勝を決めました！ 「灼熱バーニングフラッグ」優勝者はDブロック、ダイバーネーム「リリカ」はんと「ガンダムAGE―Iブランシュ」！ 観客席の皆様、盛大な拍手をお願いしまああすっ！』

ミスターMSが思わず立ち上がり、熱く叫んでいたのに応えるように、ちらほらと怒号や悲鳴が混ざりながらも、大いなる拍手と喝采がリリカと、そしてレッドアラートをコックピットに出力しながらも、自壊することなく優勝旗を手にしたAGE―Iブランシュへと向けられる。

トトカルチョの倍率は大荒れ、そして予想屋も匙を投げるか白目を剥くような偉業を成し遂げたりリリカは、じわり、と、どうしてか眦に滲んでくる涙をこしこしと拭いながら、勝ち取った優勝旗を天に掲げて、観客席へと手を振ってみせた。

「……やりました、私……できました、カエデさん……ブランシュ……お姉ちゃん……」

一際喜び勇んで飛び跳ねてポンポンを振るっているカエデに視線を向けて、流れるままに涙をこぼしながらリリカは感極まった優勝の実感に浸るのだった。



全てのエキシビジョンマッチが終了し、シーサイド・エリアが黄昏



から夜の帳に包まれたフリータイムこそ、この「グラン・サマー・フェスティバル」の真骨頂と呼ぶダイバーたちも多いように、出店エリアは盛況を見せて、気が早いダイバーたちに至っては、ファイナーとなる花火大会の席取りに向かっている者もいる。

そんな中でリリカたちが何をしていったのかといえば——それは、彼らに混ざって一足先に確保していた花火大会の席で、他愛もない話に花を咲かせていたのだった。

「まさか姉妹揃って優勝してしまうとは凄まじいですわね！」

「ミワは運に助けられただけだけどねえ……でもでも、リリカちゃんは凄いいよお、実力で勝ち取っちゃったんだから」

「……そ、そんな……えへへ、ありがとう、お姉ちゃん、カエデさん……」

それがフレーザーアイテムにすぎないとはいえ、初めてある意味では自分の力で勝ち取った優勝商品である金のトロフィーを豊かな胸元に抱き寄せながら、リリカはにへら、と頬を綻ばせて微笑んだ。

とはいえ、カエデが応援してくれたり、ミワが別な競技に勤しんでいたとはいえ、同じように頑張ってくれたからこそこの結果があるということは、リリカもまた理解している。

「……私、ダメダメだけど……カエデさんが、お姉ちゃんがいてくれたから、頑張れた、よ……えへへ……どうしてだろう、ぐすつ……嬉しいのに、なみだ、が……」

「嬉しいからこそ、ですわ。さあリリカさん、わたくしの胸で良ければいくらでもお貸しいたしますわ、今は好きなだけ涙を流してもよろしくてよー！」

「抜け駆けはいただけないねえカエデさん……リリカちゃんリリカちゃん、お風呂入った時みたいにミワに抱きついてくれてもいいんだよお」

今がその時だとばかりに、ミワよりは小ぶりながらも十分に豊かな胸元を反らしたカエデに対抗して、ミワはさらりと爆弾発言を残しながら同じように胸を張ってみせた。

どっちがどっちでも正直なところリリカとしては構わなかった、

と、いうより考える余裕がなかったため、トロフィーをインベントリに仕舞い込むと、ばちばちと火花を散らしている二人を抱き抱えるように、カエデとミワの細い腰に腕を伸ばして、二人の胸に顔を埋めてリリカは一頻り泣きじゃくる。

自分を巡って喧嘩して欲しくなかった、というのもあれば、あのトロフィーはカエデがいなくても、ミワがいなくてもきつと獲得するとはできなかったからこそ——リリカは両方を選ぶ、という形で、祭りの空気に当てられたかのように、素直にその愛情へと寄り添い、甘えていた。

「今日のところは引き分けということですね」

「んー……じゃあじゃあ、リリカちゃんに免じてそういうことで」

「……け、喧嘩しないで……お姉ちゃん……カエデさん……」

リリカたちはそんなやりとりを繰り返すと、示し合わせたように破顔して、今度は一頻り——誰が最初に嘖き出してしまったのか、そして何がおかしいのかもわからないまま、一頻り笑い合う。

確かに、欲しかったトライエイジガンダムの引換券は手に入らなかったかもしれない。

だが、あれはガンダムベースと直販サイトでの再販が決定されている。

トライエイジガンダムもお宝なのに違いはないが、それより何より、今この瞬間に笑い合い、そして午前の部で手に入れた引換券で交換した、いかにも屋台の焼きそばらしい焼きそばをもそもそと頬張るこの瞬間こそが、リリカにとっては何よりの宝物で、そして。

他愛もない話をしている内に、一発目の火花が打ち上がる。

楽しかった宴もたけなわ、終わりを告げようとしていた。

『たーまやー！』

仮想の海で誰かが叫んだのに合わせ、口を揃えてリリカたちもその一部となる。そんな屋号に応えるように、二発、三発——中にはガンダムの顔を模した柄のものも交えて、シーサイド・エリアに光の花が咲く。

そうだ。何よりこの時間が、この瞬間が——リリカにとっては、は

じめての。

誰かと一緒にお祭りに参加して、他愛もない時間を過ごすという夢が叶った瞬間であり、白紙だったアルバムに、思い出が記された瞬間に、他ならないのだった。

## 第四十四話 「白き魂の御座」

フォースフェス「グラン・サマー・フェスティバル」は一部阿鼻叫喚の地獄となったものの、その終わりを迎えてしばらく、世間は学生たちが夏休みを謳歌するような季節となっていた。

外を歩けば湿気の混じった蒸し暑さと、ヒートアイランド現象による照り返しでじりじりと身を焦がされるかのような熱気が都市を覆っており、ガンダムベースシーサイドベース店近くは、海沿いであるにもかかわらず涼しきなど欠片も期待できないようなかんかん照りだ。

そんな、誰もがとまではいかなくとも大方の人間がクーラーをつけた部屋に引きこもって何もせず一日を過ごしたくなるような猛暑日の中、梨々香は朝の四時に起きるといふ暴挙を成し遂げて、半袖のパーカーに少し丈の短いプリーツスカートといった出で立ちに巨大なりユツクサックを背負って、シーサイドベース店にできた行列の先頭付近に並んでいた。

開始十五分で「ビルドライジングのケイ」に掻つ攫われたことで色々話題になった「HG トライエイジガンダム」だが、再販の期日が決まったために、リリカはわざわざ朝っぱらからこの暑さの中、行列に並んでいるのだが、それでも先頭が取れない辺り、ガチ勢の中のガチ勢はきつと泊まり込みでもしているのだろう。

「くあ……あつつい、あつついねえ、リリカちゃん……」

そして梨々香が張り切って外出するとあつては姉として喜ばしく、何よりGBNではここ最近カエデがぐいぐいアピールしているということもあつて、美羽もまた朝四時に起きてこの行列の一部となっているのだが、普段から眠たげにしている彼女にはやはり酷なのだろう。

口元を手で覆って小さく欠伸をすると、美羽は眦に滲んできた涙を指先で拭って、その最後尾がどこまで続いているのかもわからない行列を一望する。

「……う、うん、お姉ちゃん……でも、早めにきてよかった、かも……」

「それは確かにねえ……」

美羽も足繁くガンダムベースシーサイドベース店に通っているが、ここまでの行列ができたのは見たことがない。

だいぶ前にEG……エントリーグレードの初代ガンダムが発売された時はこれと同じような行列が本店の前にできたという噂は聞いているのだが、何せ昔の話だから眉唾物だし、実際そうだったとしても、美羽個人が思うことはそこに巻き込まれなくて良かった、の一言に尽きる。

だが、梨々香と一緒にあれば話は別だ。

時刻はシーサイドベース店の開店まであと十分ほど前を指しており、それまでの実に七時間にもわたる間、手持ち無沙汰な時間を埋めるように美羽は梨々香と語らっていたのだから、リリカニウムの欠乏も十分すぎるほどに補えている。

そんな姉の心境はいざ知らず、梨々香は来るべき争奪戦に向けて、武者震いのように背筋をぞくり、と震わせていた。

トライエイジガンダムは、何としても確保しなければならぬ。

それは、あの「リビルドガールズ」のアイカというドライバーが自身の愛機に組み込んでいたガンダムAGE―FXと同様に、梨々香が思い描く新たなブラッシュに必要キットだからだ。

一応、チャンプが使用しているガンダムTRYAGEマグナムのレプリカでも形状自体は同じだから代替できなくもない。

だが、クリアレットのTRYファンネルというパーツは、クリアグリーンから塗装で表現するにはどうしてもその透明性を潰してメタリック塗装を施す他になく、一応先に確保して、そして持参していたAGE―FXのCFファンネルも同じである。

それでも、あのトライエイジガンダムを見た瞬間からそれはそれとして出来ることならそのパーツを使いたい、というモデラー特有のこだわりか、そうでなければ天啓のようなものが芽生えていたがために、梨々香は朝の四時近くからシーサイドベース店に並んでいたのだ。

降り注ぐ蝉時雨が体感温度の上昇に拍車をかける中、梨々香たちを

はじめとしてガンダムベースに並ぶ客たちのボルテージは今か今かと、炸裂するその時を待っているように思えた。

実際は並んだ順から整理券が配布されている為に押し合いへし合い、という事態にこそならないものの、目当ての商品が発売される前とあつて気持ち昂らないはずもない。

梨々香もその一部となつて、配布された「14番」と書かれた整理券を握り締めながら、開店までのカウントダウンを心の中で刻み続ける。

きつとあのELダイバーのチイは今頃ほくそ笑んでいたりするのだろうか。

神が笑つて悪魔が踊るように、物欲に心奪われた囚人たちはその目をギラつかせ、あるいは列の最後尾に並んでいた者はどこか途方に暮れたような表情をして、その瞬間をただ待ちわびる。

「お待たせしました、ガンダムベースシーサイドベース店、開店します！ HGトライエイジガンダムをお買い求めのお客様は整理券の順番から、焦らず、急がず、ゆつくりとこちらへご入場ください！」

簡易的な仕切りが設けられて限定品売り場へと繋がるような道を作っている辺り、店側も本気ということなのだろう。

朝村、と名札に記された店員が開店を告げると同時に、整理券の一桁番号を所持している客たちはゆつくりと——しかしどこか勇み足で、専用の通路へと誘導されていく。

「じゃあじゃあ、美羽と梨々香ちゃんは一旦ここでお別れだねえ」

「うん、お姉ちゃん……トライエイジガンダム買ったら、その……」

「制作ブース、でしょ？ 大丈夫大丈夫だよ」

半分はこれが今生の別れでもあるまいし、とばかりに、そして半分は私利私欲で梨々香の細い身体をぎゅつと抱き寄せると、美羽はまばらな一般列へと溶け込んで、一足先に店内の雑踏に紛れていく。

大きなリュックを背負ってきた理由は飲み物や塩飴が必要だから、というのもあるが、美羽と約束した通り、トライエイジガンダムを無事に購入できたら、その瞬間に新たなブランシユを作り上げるための荷物を運ぶ為、というのが大きい。

梨々香も特設販売会場へ向かう列に流されながら、山と積まれたトライエイジガンダムの箱を一瞥する。

これだけあっても足りるかどうかわからない勢いで、行列は続いていた。

それにしたって、GBNのアクティブユーザーが二千万人もいるというのは梨々香にとっては中々信じがたいことではあったのだが、こうして先日のエキシビジョンマッチの結果に臍を噛んだのであろう。ダイバーたちが、あるいは新商品だからと店頭に並んだコレクターがいるというのはそれだけ、あのゲームが及ぼす影響が大きいことをなによりも雄弁に物語っている。

幸いなことに、我先にと駆け出していくような悪質な客はいなかった。

梨々香も順番通りに滞りなく、山積みになったトライエイジガンダムの箱から「お一人様一点まで」という立て看板の記載に従って、その一つを手にとって、会計列に並んでいく。

その箱を手にとったのは、恐らく偶然だった。

集荷や陳列という作業の間に傷付いたのであろう、角の辺りが微妙にへこんでいるトライエイジガンダムの箱はなんだか自分のようで、もしかしたら美品を求めている客からは見向きもされなかったのだろうか、会計列が捌けるのを待ちながら、梨々香はそんなことを考える。

どこか自分と似ている。

世界のすみっこにはみ出してしまつて、そこで息を潜めて生きるよくな、或いはどこかしらが傷ついてしまつて元には戻らないまま、日常を過ごすような哀愁。

そんなものが微かに滲み出ている箱を、世界のすみっこで暮らしている自分が手に取ったのはきつと運命か何かなのだろう。

梨々香は、トライエイジガンダムと心がぐつと近づいたような錯覚を感じながら、会計カウンターのその箱を置いていた。

定価分と消費税が合わさった金額をきつちりとトレーの上に乗せ、店員がその勘定を終えると同時に、手渡された商品とレシートを受け

取って、息が詰まりそうになる人混みからの脱出を無事に果たす。

「……………やった……………やった、よ……………！ えへへ……………」

一人で朝から買い物に並ぶなんて、GBNをやる前にはきつと考えられなかったような快挙だ。

梨々香は無事に購入することができたトライエイジガンダムの箱に頬をすり寄せながら、そのちよつとだけ傷んでしまった箱の角を、そつと優しく、慈しむように人差し指の先でなぞった。

「おめでとおめでとお、梨々香ちゃん」

「あ、お姉ちゃん……………お姉ちゃんの買い物、その……………」

「然り然り、美羽の買い物も無事に終わったよお」

こつちは人が並んでなかったから楽だったけどねえ、と、美羽は購入済みを示すテープが貼られている、「HGUC トーリスリッター クリアカラーバージョン」の箱を梨々香に向けて掲げてみせる。

トーリスリッターとやらが何なのか、そしてどんなガンダムに出てきたのかを梨々香は知らない。

ただ、美羽がそれを買ったということは、きつと梨々香と同様に何か新しいピースを己に嵌め込むためなんじゃないか、ということだけは辛うじてわかっていた。

「色々あるんだけどねえ、やつぱりスナイパーやるなら今のままだと足りないかなって思うんだ」

「……………お姉ちゃんでも、そう思うの?」

「然り然り、美羽ちゃんも何だって出来るわけじゃないんだよ、梨々香ちゃん。できることしかできないから……………こうやってガンプラに手伝ってもらうんだよお」

美羽が何を思っ、そして何を願って、トーリスリッターとやらに託しているのかは、梨々香にはわからない。

梨々香の目から見た美羽はいつだって完璧で、一点の曇りもなく、て。

そんな姉だって人間なのだからできないことがある、というのは頭でわかっていたとしても、納得はできなかつたけれど、自分がトライエイジガンダムという答えに辿り着いたように、美羽もまたトーリス



リッターという答えに導かれたのなら、その根底にあるものは同じなのだろう。

ガンプラに手伝ってもらおう、という姉の言葉を反芻しながら、梨々香はこれから自分がトライエイジガンダムへと託そうとしている願いのことを思い返す。

ガンダムA G E Eー1ブランシユ。

長いようで短く、短いようで長い間、自分を支えてくれて、そして、つい先日にはきつと今まででは考えられなかった、エキシビジョンマッチの優勝という場所まで導いてくれた、大切なガンプラの名前だ。

今から作るものは、その魂を継ぐ為の器にして、そして自分が背中を預ける新たな相棒。

梨々香と美羽は、互いに少しだけぎこちなく伸ばした手を繋いで、何人かの利用客が早速トライエイジガンダムを組み立てている制作ブースを一瞥する。

白と赤、二つの魂を生まれ変わらせる新たな器を、今は頭の中に思い描く空想の白地図にしか描かれていないその姿を、このリアルに出力する為に、二人は歩き出すのだった。



トライエイジガンダムの組み立て自体に、難しいところはあまりない。

H Gというフォーマットがそもそもの作りやすさを重視している以上、M GやP Gといった大型キットのような内部フレームは少なく、簡易的で、大体一時間から二時間もあれば組み上がる、というのが最大の売りではあるのだから当然である。

だが、ゲート処理だとか合わせ目処理だとかそういう細々とした作業と並行しながらやっていくとなると相応に時間を食われるために、

梨々香は紫色の蓋をした「流し込み、速乾タイプ」の接着剤で腕の合わせ目を消しながら、先にAGE―FXの方は家で処理を終えていてよかった、と、心の底からほっと息をつくのだった。

結論からいってしまえば、トライエイジガンダムから純粹にコンバートできたパーツは腕と肩、そしてそこに接続されている赤いTRYファンネルだけだ。

梨々香がミキシングのベースと定めたのは殆どがガンダムAGE―FXだった。

と、いうのも、それはひとえにFXバーストモードという原作における必殺技の存在に尽きる。

アイカのフェアライズガンダムは、AGE―FXの肩を腰部のアーマーに接着することでその放熱機構兼余剰出力の処理を解決していたのだが、AGE―FXのパーツをベースとして多く残せば、ブランチュアクセルの問題点であるそれらが解決するのではないかと踏んだ為だ。

ぱちぱちと、パーツを切り出し、そしてデザインナイフを僅かに残したゲート跡に沿わせて丁寧にその処理を行っている美羽を横目に見ながら、梨々香はごそごそと、リュックに入れていたクリアファイルから一枚の紙を取り出した。

それはAGE―FXをスキキャンして線画としたものにペイントツールで着色した、カラーパターンの決定稿であり、そしてこれから本塗装に入る際に配色を間違えない為の保険だった。

「うん？」

そして、美羽が首を傾げたのは小袋から取り出したパーツを恐る恐るといった調子で梨々香が分解していた時のことだった。

「ど、どうしたの、お姉ちゃん……？」

「いやいや、ただ頭部パーツはオリジナルなんだねえ、つて思っただけだよお」

美羽が指摘した通り、新たなるブランチュに組み込む為の頭部パーツは別系統のガンダムから持ってきた、スタンダードなガンダムフェイスにV字アンテナというものだったが、これには一応理由がある。

「……う、うん……最初は、トライエイジガンダムの頭を使おうと思っただけ……せつかくだからその、挑戦してみたいな、つて……えへへ」

「梨々香ちゃん……いつの間にか立派になったねえ、お姉ちゃんとして鼻が高いよ」

デザインナイフにキャップを閉めて机の上に置くと、美羽は自信なさげに俯いた梨々香に抱きついて、頬をすり寄せた。

小さい頃はこうして姉妹でスキンシップを取るのには珍しくないことだったが、一体いつからそれができなくなって、そして。

——いつから、それをまた始められるようになったのだろう。

梨々香も頬をすり寄せ返しながら、奇しくも美羽と同じことを考えていた。

そして、AGE―1ブランシユから組み込めた関節パーツと、そしてドッズライフルを除いた部分を塗装するべく、梨々香はトライエイジガンダムの腕とAGE―FX、そしてオリジナルの頭部を持って、塗装ブースに腰を落ち着けた。

塗らなくていいパーツこそあるものの、新造したAGE―FXはその八割がたを塗装しなければならなかったために、やっぱりその作業を始める前は挫けそうになってしまうのだが。

サーフェイサーと関節の色を兼ねたダークグレーの塗料を関節パーツへと吹き付けながら、梨々香は思う。

——楽しい。

きつとめんどくさくて、つらくて、投げ出したくなるような作業の連続が、ガンプラを組み立てるといことなのだろうけれど、こうして踏み出してみれば案外楽しいところだっていくつもある。

関節パーツを塗り終えれば、次は本体の下地となる、ホワイトサーフェイサーに普通のグレーサフを少しだけ混ぜた色を吹き付けて、関節と入れ替える形でドライブースの中で乾くのを待つ。

初めての時は手間取った作業も、少しは手際良くできるようになっていることに梨々香はちよつとした感慨を覚えながら、早速買ってきたトリスリッターのパーツを自分の色に染め上げている美羽を一

瞥する。

謙遜こそしていたけれど、やっぱり美羽の手付きは器用で、手際が良くて。

そこに嫉妬を抱かないかと問われて、首を横に振るのは嘘になる。それでも——ずっと追いかけてきた背中だから、そしてずっと隣で見続けてきた笑顔だからこそ、梨々香は自分の舌に探り当てた言葉が「それ」ではないことに、小さく安堵した。

そして、乾いたホワイトグレーサーフェイスが吹き付けられたパーツに白とライトグレーを、並行して乾かしていたピンクサーフェイスが塗られていたパーツには明るめの赤を吹き付けて、梨々香は三度ドライブースに乾いていないパーツを放り込み、新たな魂の——ブランシユの魂が宿る御座が出来上がるのを待つ。

ELダイバーは、ガンプラの声が聞けるという。

ショーケースの中で今日も元気に猫をかぶりながら接客しているチイの姿を脳裏に描きながら、今まさに生まれるその時を待っている、新たなブランシユに、梨々香は懸想する。

もしも自分にもその声が聞けたなら——この子は、何というのだろう。

「……ガンダムAGE——F B」  
フルブランシユ

それはわからなくなつて、私は。この世界は。きっと、君を待っているんだよ。

そう祝福するように、慈しむように、梨々香は今この世に生まれ落ちようとしている、新たな愛機の名前をそつと、唇から紡ぐのだった。



263：名無しのお祭りダイバーさん  
よくわからんけど水着が拝めたからヨシ！

264：名無しのお祭りダイバーさん  
煩惱をオブラートに包むことをしないダイバーの鑑

265：名無しのお祭りダイバーさん  
鑑なんですかねそれは

266：名無しのお祭りダイバーさん

しかしアイエリがコンビ組んでたとはいえ同標同率でクオンちやんと並んで三位だったのも中々の大番狂わせだったな

267：名無しのお祭りダイバーさん

アイエリはねー、あれだけ派手にやらかせば注目されるというか

268：名無しのお祭りダイバーさん

今年はエリイちゃんがいかに合わせてパレオ巻いてなかったのが攻めてるなって思いました

269：名無しのお祭りダイバーさん

もしもしガードフレーム？

270：名無しのお祭りダイバーさん

>>>268

気持ちわかる、わかるから一緒にガードフレームに出頭しような  
271：名無しのお祭りダイバーさん

ガードフレームがすっ飛んでくる前にアイカがドスでブツ刺すからへーきへーき

272：名無しのお祭りダイバーさん

ナチュラルにドスが標準装備になってるアイカに草生えますよ

273：名無しのお祭りダイバーさん

ファンアートの差分の血塗れ率が八割を誇る女は格が違った

274：名無しのお祭りダイバーさん

本人曰く放課後の集まりみたいなのもんらしいけどな

275：名無しのお祭りダイバーさん

あんな物騒な放課後があつてたまるか定期

276：名無しのお祭りダイバーさん

午後の部も午後の部で開幕から頭おかしかったな

277：名無しのお祭りダイバーさん

>>>276

ビルドライジングのケイだっけ？ あいつチートでも使ってたんじゃないかってぐらい早くお宝確保してたな

278：名無しのお祭りダイバーさん

(嫉妬で) 狂いそう……！ (静かなる怒り)

279：名無しのお祭りダイバーさん

>>>277

本人と周りのダイバー曰くチートじゃないらしいけどな

280：名無しのお祭りダイバーさん

どっちでも同じようなもんだろって言いたいけどまあ黒ならガードフレームすっ飛んでくるし豪運チャートを走れる走者ってことなんだろうな

281：名無しのお祭りダイバーさん

俺もガンプラをホットプレートであつたためれば宝探しRTAでW

R取れる可能性が……？

282：名無しのお祭りダイバーさん

ないです (無慈悲)

283：名無しのお祭りダイバーさん

申し訳ないがわけのわからないバグり方をするレトロゲームの話はNG、というかケイがお宝確保したことよりチャンプと打ち合ってたリーオーの方が個人的には滅茶苦茶だったよ

284：名無しのお祭りダイバーさん

海がなくなっちゃったのだわ……

285：名無しのお祭りダイバーさん

ヴァルガでやれ

286：名無しのお祭りダイバーさん

フェス中なのに一部ロールバック入ったとかアスタロス生えますよ

287：名無しのお祭りダイバーさん

そんなヤバいものを軽率に生やすな

288：名無しのお祭りダイバーさん

アスタロスすら駆逐しそうだよなあ、の必殺技同士のぶつかり合い

289：名無しのお祭りダイバーさん

GPD勢はやべーのしかないのか

290：名無しのお祭りダイバーさん

期待の新星μちゃんがいるだろ！

291：名無しのお祭りダイバーさん

元GPDの亡霊か、最近はずつと活躍してるみたいだけど

292：名無しのお祭りダイバーさん

絶壁の防御という名の弾幕砲火で敵を寄せ付けない姿はGPD勢の鑑

293：名無しのお祭りダイバーさん

>>>292

μちゃんが絶壁とか誤字にしても悪意がすぎる

294：名無しのお祭りダイバーさん

屋上へ行こうぜ……久しぶりに……きれちまったよ……

295：名無しのお祭りダイバーさん

午後のエキシビジョンマッチといえばリリカちゃん

296：名無しのお祭りダイバーさん

>>>295

でかい(確信)

297：名無しのお祭りダイバーさん

そっち方面の話はともかく「灼熱バーニングフラッグ」でミスミ相手に優勝かつさらってつたのは中々ヤバいな、新人だろ？

298：名無しのお祭りダイバーさん

>>>297

リリカちゃんはガチの新人だったはず、最近ランキングめきめき上げてるから「アナザーテイルズ」の連中共々そんな感じはしないけど

299：名無しのお祭りダイバーさん

「アナザーテイルズ」といえばミワちゃんが頭おかしいことやってま



したね……

300：名無しのお祭りダイバーさん

一キロ先のコインにピンホールショット決めるとか人外か何か？

(畏怖)

301：名無しのお祭りダイバーさん

「ビルドライジング」のミシエルもいいとこまで行ってたけど使った銃の違いが勝敗を分けたな

302：名無しのお祭りダイバーさん

だからピンホールショットでできる奴らが当たり前のようにいる時点でもう何かがおかしいんだよなあ

303：名無しのお祭りダイバーさん

>>302

お前GBNは初めてか？ 力抜けよ

304：名無しのお祭りダイバーさん

ヴアルガとか潜ってるってあの手の人外に当たり前のように遭遇するから困る

305：名無しのお祭りダイバーさん

人外かどうかは知らんけど「灼熱バーニングフラッグ」にいたパンジャンドラムみたいな奴も中々紅茶キマってたな

306：名無しのお祭りダイバーさん

開幕から明後日の方向に吹っ飛んでって全機爆散とかいう珍事を引き起こしたあれか、パンジャンの魂継いでんなお前な

307：名無しのお祭りダイバーさん

スタゲのリングを車輪に使うとかいう発想の時点で頭がおかしい

308：名無しのお祭りダイバーさん

いや確かに丸いけどさあ……

309：名無しのお祭りダイバーさん

本人曰く八割はスタートダッシュ成功するらしいぞ

310：名無しのお祭りダイバーさん

残り二割でツダるってことじゃないですかやだー！

311：名無しのお祭りダイバーさん

パンジヤンドラムはともかく「緋きスナイパー」ならまあピンホールショットぐらいやるだろうな

312：名無しのお祭りダイバーさん

味方を犠牲にしても絶対に勝ちをもぎ取ってくるスナイパーだっけ

313：名無しのお祭りダイバーさん

ミワちゃんそれで荒れてた時期があるっぽいからなあ、本人の前で言ったらハイライト消えるぞ

314：名無しのお祭りダイバーさん

てかミワちゃんトリリカちゃんって双子姉妹なのか？ ダイバールック揃えてるだけとかなら珍しくないけど言動的にガチの姉妹っぽいし

315：名無しのお祭りダイバーさん

多分そうじゃねーかな、まあリアルについて詮索するのはやめとけよ

316：名無しのお祭りダイバーさん

姉妹揃ってエキシビジョンマッチで優勝を勝ち取るとか有望株ですねクオレハ

317：名無しのお祭りダイバーさん

海中宝探し大会ではエンカ運腐ってたから蒸発してたけど「アナザーテイルズ」といえばあの暴走お嬢様ことカエデちゃんもいぞ

318：名無しのお祭りダイバーさん

かつてのバエルお嬢様と同じく色んな格上に積極的にフリバしに行ってるんだっけか

319：名無しのお祭りダイバーさん

そのバエルお嬢様と当たってたこともあったな、まあやられてたけど

320：名無しのお祭りダイバーさん

そのせいかは知らんけどカエデちゃんの攻めるプレイング絶妙に上手いんだよな、同格戦なら七割勝ってるし

321：名無しのお祭りダイバーさん

表の主役がビルドライジングなら裏の主役がアナザーテイルズってか、有望な新人が多すぎて嫉妬で狂いそうになる

322：名無しのお祭りダイバーさん

カエデちゃんのウイングゼロヌーベル、あれμちゃんと同じくイタリアの伊達男をリスペクトしてるっぽいんだよな

323：名無しのお祭りダイバーさん

色んな奴から好かれてんなイタリアの伊達男

324：名無しのお祭りダイバーさん

元ユーロチャンプも参戦してたしあいつもGBNにいたりすのかな……

325：名無しのお祭りダイバーさん

うみみ……（哀愁）

326：名無しのお祭りダイバーさん

サニー○兄貴また湧いてて草

327：名無しのお祭りダイバーさん

まあ海に関する話題だからな

328：名無しのお祭りダイバーさん

アイエリ、テトユニ、リリミワ、リリカエ……圧倒的な水着百合カプの供給過多で呼吸困難になって死んだゾ

329：名無しのお祭りダイバーさん

>>>328

成仏して

330：名無しのお祭りダイバーさん

何にせよ今年も盛り上がってて楽しかったな



デイメンション・シユバルツバルト。

極圏をモチーフとして作られた、一日中夜の帳に閉ざされたそのデイメンションの傍にひっそりと佇む、廃城のような個人用フォース

ネストで、その少女は掲示板に流れる文字列を、その口元に喜悦を湛えながら見送っていた。

「楽しそうだね、ユユ」

「ええ、お兄様……」

ユユと呼ばれた、ゴシックな黒和装に身を包み、濡れ羽色の髪の毛を俗にいうお嬢様結びに結えた少女は、声のした方へと振り返ると、どこか囁きかけるような甘い声音でそう答える。

お兄様とユユから呼ばれていた青年——「FOEさん」ことキョウスケは妹が自分以外の事柄に興味を持つていることに、内心では喜びながらもその仏頂面に出すことはせず、妹の隣で今もリアルタイムに増え続けている掲示板の文字列を眺めていた。

「やつぱり、『アナザーテイルズ』かい？」

「ええ、ユユはあのお方たちに……大変興味を抱きました」

「ふむ……確かに見るべきところは多いね。僕も『アナザーテイルズ』のカエデ君から何度か勝負を挑まれてるけど、彼女もめきめきと腕を上げている」

エキシビジョンマッチでこそ裏方に回っていたものの、以前にハードコアディメンション・ヴアルガで幾度も剣を交えた少女のことを脳裏に描きながら、キョウスケはユユへとそう語った。

「また他の女のお話ですか？」

「勘弁してくれ、『アナザーテイルズ』を引き合いに出したのは君だろう、ユユ」

「ふふ……そうですね、なら今回は特別に例外ということだ」

「……それは僕の台詞なんだけどね、まあいい。ユユはどこに興味を持ったんだい？」

キョウスケからの問いかけに、ユユはしばし細い顎に指をやって、考え込むような仕草を見せる。

確かに「アナザーテイルズ」が自分にとって心惹かれる何かを持ち合わせていることは事実であり、彼女たちと一度相見えてみたいと思っているのもそうなのだが、そこから何か一つだけ理由を選べ、と言われると、ユユは途端に困惑してしまう。

例えばあの「パロツツ・パーティー」を破ったこともさながら、今回のエキシビジョンマッチでの優勝であったり、輝かしい戦績を残しているという点から考えれば、それも一つの理由になるだろう。

だが、華々しさや話題性を考えるのであれば、それこそ「ビルドライジング」や「GPDの亡霊」——を今は脱却したムを始めとした、新進気鋭のダイバーたちは数多く、GBNで鎬を削っている。

その中で何故「アナザーテイルズ」がユユの興味を惹いたのかについては、正直なところユユ自身言語化できない部分が多いのだ。

「そう言われると、難しいですね……」

「ふむ」

「お兄様？」

「……ならば、彼女たちと一度戦ってみたらどうか、と思つてね」

勿論クリエイトミッションという形になるのだろうけれど、と付け加えて、キョウスケもまた新進気鋭のフォースである「アナザーテイルズ」の面々に想いを馳せる。

超が付くほどのブラコンであるユユがここまで興味を持つ相手とこののも珍しい。

あの「緋きスナイパー」の超絶技巧であるとか、カエデのセンスであったり、リリカの話題性であったり——何を見てユユが興味深いと思ったのかについては、キョウスケもまた気になるところだったのだ。

「流石はお兄様です、ユユは考えもよりませんでした……ふふふ」

「経験談き、僕も彼女と……『クオン』と戦っていないければ、そしてきつとあの人に出会っていないければ、14位までは上がれなかった」

理由は分からなくとも、情動が動かした結果が何かにつながることは往々にして珍しくない。

他の女の名前を出しても不機嫌になる様子を見せないユユに、兄離れとはこういうものかどこか寂しさのようなものを感じながらも、キョウスケは、新たな道へと踏み出そうとしている妹の門出を内心で祝福する。

「さて、『アナザーテイルズ』……どんな戦いにしましょうか、ふふ

……」

そんな複雑な兄心はいざ知らず、妹であるユユは、自分とアナザー  
テイルズが矛を交えるのに相応しい舞台へと、その想いを馳せるの  
だった。

## 第四十五話 「呼ばれて飛び出て御主人様（あなた）のために」

AGE―1ブランシユ改め、新たなガンプラである「ガンダムAフルブランシユGE―F B」を完成させた梨々香は、夜も眠れないといった具合に浮かれていた。

目の前に立っている、AGE―FXをベースとしながらも腕部をトライエイジガンダムに、そして何より頭部を全く違う系統のガンダムから引つ張ってきたことでよりオリジナリティが際立っているそのガンプラは、今の梨々香にできること全てを費やして作り上げたものだ。

グレー系統だからと油断していたら意外に隠蔽力が低くて悩まされたライトグレーの扱いや、主張しすぎない程度に織り交ぜた赤色もムラが出ないように気を付けたりと色々と気を回さなければならぬことはあったものの、おかげで思い描いていた形と相違なく、フルブランシユはこの世に生まれ落ちてくれた。

自分で作り上げたものだというのに、それはどこか奇跡のようにも感じられて、シーサイドベース店内の制作ブースで吹き付けたトップコートが乾いて、全てのパーツを組み上げたときの高揚感など、忘れられるはずもない。

梨々香はシーサイドベース店から帰還してしばらく、机の上にフルブランシユを直立姿勢で飾らせて、小一時間ほど見入っていた。

だが、これを作り上げた目的は、飾って嬉しいコレクションにするためではない。

思い出したように梨々香はベッドから跳ね起きて、ダイバーギアとVR端末を机の引き出しから取り出す。

「わわ、ぼーっとしちやっつた……」

フルブランシユがどんな気持ちを抱いているかについては、ELダイバーでもなければ共感覚——シナスタジアを持っているわけではない梨々香には知る由もないものの、それでも、戦うために、「アナ

「ザーティルズ」の皆と一緒に飛ぶために生まれてきたこのガンプラであれば、きっとあの仮想の空を飛びたがっているんじゃないかと、梨々香はまだもやのかかった思考の片隅でそんなことを考える。

シーサイドベース店の工作スペースによく出没する零にもこの機体を見てもらいたかったのだが、何の偶然か作ってる最中にはエンカウントしなかったのだから仕方ない。

梨々香は茫洋とした感覚が抜けきれないままゴーグル型の端末を被って、ダイバーギアにフルブランシユをセットする。

美羽も今頃、新しい装備を試すためにGBNへとログインしているのだろうか。

あのトーリスリッターなる機体のバックパックに何やら熱心に加工を施していた姉の姿を思い描きながら、梨々香はシステムに導かれるがままにその思考を電子の海へと溶け込ませ、「リリカ」へと変じていく。

その答えはログインしてみればわかることだ。

GP EXシステムが起動する音声とともに、どこまでも降っていくエレベーターに乗せられたような、そうじゃなければ意識が下へ、下へと引つ張られていくような感覚と共に、蔵前梨々香はダイバー「リリカ」へと解けて、再び仮想郷で結ばれていく。

とん、と踵を鳴らして着地したセントラル・エリアのロビーは、夜であるにも関わらず、というよりは夜だからこそ相変わらず人でごった返っていて、この中からミワとカエデを探すのは骨が折れそうだと、リリカがそう思った瞬間だった。

「よっ……とお、やつほやつほー、リリカちゃん」

「今日はお二人とも少しばかり遅めのログインですね、何かありましたの？」

突如として、探していたはずのミワとカエデが、まるで瞬間移動でもしたかのようにリリカの眼前にテクスチャの揺らぎと共に現れて、何事もなかったかのようにそんなことを宣っている。

目を白黒させて困惑するリリカだったが、これはGBNに備え付けられている機能の一つであり、フレンドワープと呼ばれるものだ。



フレンドもしくはフォースメンバーがログインしたことを検知するとログイン地点に集合できると作られた機能なのだが、説明書の類を読んだわけではないリリカにとっては、ただ驚く他になかったのである。

「……え、えつと、こんばんは……？ えつと、お姉ちゃん、カエデさん、どうして……？」

「ああ、フレンドワープですか？ フレンド登録やフォースメンバーとして登録しているとログインした相手のところに飛べますのよ」

「然り然り、その通りだよお」

「……便利なんだね、GBN……」

初めて文明の利器を手にしたかのように梨々香はぼつりとそんなことを呟いていたが、何はともあれ広大なロビーを歩き回って探す手間が省けたことは確かなのだ。

システムの便利さや文明の利器には感謝をする他にない。

リリカが眼を白黒させている間に、カエデはしばらくフリーズからの復帰に時間がかかりそうだと踏んで、ミワへと問いかける。

「それで、リリカさんと何かありましたの？ ミワさん」

「ん……あつたあつた、色々あつたよお」

「ふむ……何はともあれ今日はどういたしますの？ ここ最近色々ばたばたしておりましたから、肩慣らしにミッションを受けたりいたしました？」

「ミワとしてはそれで構わないけど……リリカちゃん次第だねえ」

GBNにログインしたミワではあつたが、あのトリスリッターを基にした装備に関しては正直なところまだ完成したとは言い難かった。

それに、本体についての検証もできることならやっておきたいというのも本音なのだが、ミワの理由は全てリリカに優先するものだ。

やっとフリーズから復帰したりリリカは、カエデの言葉に小さく何度も頷きつつ、相変わらず小さいものの、確かな意思がこもった声での提案に追従する。

「え、えつと……わたしも、何か戦ってみたいなって……」

「戦い、となると……ふむ、そういうことですね。リリカさん。でしたら、『バトランドム・ミッション』を受けてみるのはいかががでして？」  
バトランドム・ミッション。

それは以前にリリカとミワが受けた「シャフランダム・ロワイヤル」の上位互換——というより、元々バトランドム・ミッションを基にしてそれが作られたのだから当然なのだが——的なミッションであり、一つのフォースとして組んだメンバーが、ランドムでマッチングされて対戦を行うという、よくいえばカジュアルな、悪くいえば闇鍋なフォース戦、といった風情のものであった。

無事フォースを結成した以上、「アナザーテイルズ」は三人しかいないとはいえ、あのシャフランダムの闇鍋に飛び込むよりは、意思疎通や連携が最初から見込めるバトランドム・ミッションの方がいくらかいい、ということ、カエデはそう提案したのである。

「バトランドム・ミッション……確か闇鍋フォース戦だったねえ」

「闇鍋……」

「ですがメンバーは固定ですから、全滅RTAだとか開幕突撃で爆散だとかそんな憂き目を見る心配はありませんわ」

全滅RTAと聞いてリリカの脳裏をよぎったのは、あのスカートレット隊のロールプレイングを徹底していたダイバーたちなのだが、良くも悪くも、というよりは悪い方に遊び心が働いてしまうダイバーと鉢合わせるのもまたシャフランダム・ロワイヤルが闇鍋呼ばわりされる所以であり、そしてその心配がないなら、申し分ないということでもある。

「な、なら……バトランドム・ミッションを……」

「お困りですか、御主人様☆」

飴玉の鈴を鳴らしたような声が聞こえたのは、リリカがカエデの提案を承認してカウンターに向かおうとしたまさにその時だった。

声が出した方に振り向けば、袖やスカート丈の長いクラシカルなメイド服に身を包んだ金髪の少女たちが、リリカたちを取り囲むようにして、整然と並んでいる姿がある。

その絵面は中々強烈なものであったが、それでもコラボ記念の他版

権アバターやピキリエンタポールのようなダイバーリックが跋扈しているGBNにおいてはそこまで珍しいものではない。

「わたくしは誰かを雇った覚えはありませんけれど……貴女たち、何者ですか?」

「よくぞ聞いてくださいました! 私はスティア。スティア・プラチナムです、御主人様っ☆」

「ミワたちは御主人様でも雇用主でもないんだけどねえ」

「そこは気にしないでください☆ ロールプレイですからっ!

それはそうとして、呼ばれて飛び出て御主人様のために。私たち、フォース『チェック・メイド』は傭兵稼業からミッションのお手伝いまで、悩める御主人様たちのお力になるべく作られたフォースなんです。お困りのようでしたから、お声をかけさせていただきましました☆」

ぶい、と、ピースサインを作って、スティアと名乗ったダイバーは右目の横に掲げてみせる。

ロールプレイだとぶっちゃけてしまうのはいいのだろうかとりり力は逡巡するが、それはそれとしてフォース戦をやりたいのは確かだ、だからバトランダム・ミッションを受けようとしていたのだから渡りに船といった風情であることもまた確かなのだ。

だが、問題があるとすればそれは数の一言に尽きるだろう。

フォース「チェック・メイド」を名乗っている集団は見た限りでは実に十二人という、単純換算で戦力比は四倍の集団だ。

それがそのままぶつかつたとなれば、火力どうこうよりも、数の暴力で圧殺されることなど火を見るよりも明らかだろう。

「んー……気持ちはありがたいんだけどねえ、それはそれとして数が数だからちよつとミワたちが不利なんじゃないかなあ」

「そういうことなら心配ごいけません! 一般的なフォース戦の形式に則つて、五人から、御主人様たち『アナザーテイルズ』に合わせて三人まで、色んなオーダーに 대응することが私たち『チェック・メイド』のモットーですから☆」

なんだかんだその辺りで抜かりはないようだ。

どうする、と言わんばかりに視線で問いを投げかけてくるミワとカエデに対して、リリカはごくり、と生唾を飲み込みながらも小さく首を振って、「チェック・メイド」たちからの提案に乗ることを承諾した。「え、えつと……それなら、お願いしても……」

「はいっ☆ 承りました、御主人様！」

リリカが承諾すると同時に、慣れた手つきでスティアはコンソールを操作して、フォース戦における条件を手早く入力し、「アナザーテイルズ」三人組へと提示する。

フォース戦「アナザーテイルズ」対「チェック・メイド」、バトルフィールドは遮蔽物に乏しい地球衛星軌道上——つまり宇宙空間で、チェック・メイド側からは三人が選抜して選ばれる、というのが彼女たちからのオーダーだった。

「ふむふむ……これなら互角なんじゃないかなあ」

「ええ、わたくしはこの条件で問題ありませんわ」

「……え、えつと……私も、問題ないので……お願いしてもいいですか……？」

「それでは契約成立ですねっ！ お互いに良い戦いになることを祈っております、御主人様っ☆」

スティアはピースサインを再び右目の横に掲げると、選抜したメンバー二人を連れて、格納庫エリアへと転送されていく。

何だか色んな意味で濃いスティアのキャラクターに気圧されながらも、リリカは改めて、フルブランシユの初陣に向けて、ふんす、と、気合を入れ直すのだった。



フォース「チェック・メイド」。

それはGBNにおいて数多い「傭兵メイド」たちが集うフォースの一つであり、フォースランキングとしては中堅どころといった風情であったが、その分、有名な「セルピエンテ・クー」のように高い料

金は取らない、ということに定評があるそれだった。

反面、「レイヴンズネスト」のように他の傭兵に対する仲介事業は行っていないものの、サービスを受けたダイバーたちからは概ね好評を博している——というのが、事前にミワが調べた彼女たちの評判と概要だった。

「中堅どころっていつでも、層が広いのがGBNなんだけどねえ」

二千万人という膨大なアクティブユーザーを抱えている都合、このゲームにおけるいわゆる中間層は、それこそピンからキリまでといった具合に存在している。

だからこそ、一口に中堅といっても、それが下位なのか上位なのかによって実力の差には大きな開きがあり、中でも、ダイバーランク7000位以上のダイバーたちは、中堅上位の中でも一際抜けた英傑の候補生とでもいうべき存在だ。

フォース「セルピエンテ・クー」が入隊条件に掲げているように、そこが一定の線引きとなっていてところは確かにある。

そういう意味で「チェック・メイド」のステイアたちは「英傑の候補生」には名乗りをあげていないものの、彼女のプロフィールカードに記載されていたワールドランキングの数字を信用するのであれば、紛れもない実力者であることは確かだった。

フルブランシュのコックピットで、ミワから送られてきた情報を何度も反芻するように確認しながら、リリカはその初陣に臨むべく、仮想の空間であるにもかかわらず高鳴る鼓動を抑えるように左胸の下辺りをきゅつ、と握りしめる。

フルブランシュにとつて初めての戦いで、相手は格上。

箔がつくといってしまうほどリリカは豪胆ではないものの、それでも決めたのが自分である以上、今更やっぱりなしにしてくださいとは言えるはずもない。

「大丈夫、大丈夫だよおリリカちゃん」

「お姉ちゃん……」

「機体を新造されたのですね、でしたら納得ですわ。この不肖カエデ・リリーエ、リリカさんと新たなる剣の初陣に花を添えさせていただき

ますわ」

そんな不安に囚われたリリカの背中を押すように、通信ウィンドウに浮かぶミワとカエデは穏やかな笑顔を浮かべながら言った。

——大丈夫。

何度も繰り返し返すようにして、リリカは操縦桿に手をかける。

ガンダムAGE―FXをベースとしながらも、自分だけのガンプラとして作りあげたフルブランシュ。

そして、背中を押してくれるミワとカエデがいるのなら、ただでやられてやるつもりはない。

「……リリカ、ガンダムAGE―FB、頑張ります……！」

「それじゃあミワも……フリーダムルージュティラユールで出るよお！」

「カエデ・リーリエ、ガンダムウイングゼロヌーベルで出撃致しますわ！」

声を揃えた三人は、カタパルトから一斉に射出され、漆黒の無重力空間に放り出されていく。

フルブランシュにおける機体の慣性モーメントであるとかバーニアの制動であるとか、そういった細かい要素は当たり前だがAGE―1ブランシュとは大分勝手が違う。

フリーダムガンダムのバックパックをAWACSデインのものからトリスリッターのものに置き換えて、相変わらずストライクルージュと同じカラーパターンに染め上げているミワの愛機と、そしてカエデのウイングゼロヌーベルの姿を視認して、リリカは宇宙に機体を慣らすように、何度かその場で回転してみたり、バク宙のような機動を取ってみたりした。

吸い付くように動いてくれるフルブランシュの挙動は、完全に物にできたとは口が裂けても言えないものの、それでもブランシュから魂を引き継いだかのように、素直に指先に馴染んでくれる。

リリカが機体の制御を一通り指先に慣熟させたその時だった。

「……来るよお！」

通信ウィンドウにポップするミワの表情が一際険しいものになる。

いつの間にやら伸ばしていた、トリスリッターのインコムを偵察用のドローンに置き換えた兵装が、「チエック・メイド」から選抜された三人組を捉えていたのだ。

「ならば開幕に……大きな花火を打ち上げるといたしますわ、リリカさん！」

「は、はい、カエデさん……！」

さながら予告ホームランのようにツインバスターライフルを虚空に掲げてみせたカエデが何をしようとしているのかを理解して、リリカはコンソールに映る無線兵装——メタリックレッドに染め上げて、シングルブレイドの時同様にヨノモリ塗料から発売されている対ビームコーティングトップコートを吹き付けたそれを制御する。

「号砲一閃、これがわたくしなりの白手袋ですわあああつ！」

そして、カエデは決闘の合図に代えて、ミワからデータリンクによって送られてきた座標を基に、ツインバスターライフルを躊躇いなく、そして景気良く最大出力で発射するのだった。

## 第四十六話 「白輝の支配者」

いわゆる「開幕ぶっぱ」と呼ばれる戦術の有効性は、フォー스戦においては相手が熟練していればいるほど大きく薄れていくことになる。

不慣れな相手であったのならば、もしくは明確な隙を見出したのであれば、確かにマニユーバの方向性を読んでレンジ外へと攻撃を「置いておく」ことは有効に作用するかもしれない。

だが、こと開幕というシチュエーションにおいて足を止め、戦線を維持することを放棄してまでもそのまぐれ当たりによりターンを求め、行為は、いかに浪漫を求めるファイターであったとしても愚策であると断定できるだろう。

ならば、カエデがその愚策を断行したのは何故か。

その答えは、「あえて」の三文字に他ならない。

ミワが開幕で飛ばしていた有線の準サイコミュ兵器——トーラスリッターに搭載されている「インコム」は、彼女が以前に受注していた宝探しミッションで獲得したプラグインによって、有線無線を切り替えられるようになっていただけでなく、偵察用のドローンとしての機能も持たせている。

購入したのがトーリスリッターのクリア版であることから、殊更丁寧にゲート処理が行われ、コンパウンドで磨くことで透明度を保っているそれは視認性が低く、「チェック・メイド」から選ばれた三人組が、どのような機体を使っているのかというのが、ミワには丸わかりだったのだ。

そして、データリンクによってカエデとリリカにその情報を共有したことでカエデが思いついた奇策こそ、「あえての開幕ぶっぱ」なのだ  
が——

『ふっふっふ、甘いですよ、ご主人様!』

整然と並べられた十九の炎が並行となって照射された一撃が、カエデのツインバスターライフルによる一撃とぶつかり合って火花を散らす。



フォース「チェック・メイド」の三人組に選ばれた一人である、茶髪をツインテールに括った少女、ダイバーネーム「ドロシー・ザ・デヴィル」は、HGAWガンダムXディバイダーを原型機とし、トライバーニングガンダムのパーツを組み込んだ「ガンダムGXバーニング」のディバイダーを、照射ビーム砲ではなく高密度の火炎放射器とすることで、ビームと打ち合えるまでにその密度を高めていた。

全身のクリアパーツをクリアレジンによって複製し、オレンジ系統に塗り上げることでバーニングバーストシステムの完成度を向上させる、手堅くも難しい工作を行っている辺り、ドロシーもまた優れたビルダーにしてダイバーであることに違いはないだろう。

だが――

『きやあっ!?!』

『落ち着きなさい、ドロシー。これは……』

次の瞬間、ガンダムGXバーニングが火炎放射器と化したディバイダーを構えていた左腕は関節部分から断ち切られ、スパークを上げて爆散する。

ドロシーの隣に控えていた女性――黒髪をギブソントックに結い上げて、ベレー帽のようなものを被ったダイバー、「クラウディア・ストレンジス」は驚愕に目を見開きながらも、ドロシーの機体、その左腕を断ち切っていた絡線を決して見逃しはしなかった。

その辺りは、流石というべきなのだろう。

カエデは中堅――つまり一角の実力をその手に収めているクラウディアに嘆息しつつ、肩を竦める。

『Cファンネル、そういうことですか』

「あら、バれてしまいましたわねリリカさん、ですが!」

「……はい、カエデさん……私、切り込みます!」

リリカはぐつ、と気合を入れ直すように操縦桿を握りしめ、フルブランシュを戦場の中心地へ、後衛が動けるエリアを押し上げるように突撃させていく。

カエデの用意した策というのは極めて単純なもので、愚策と悪手の中に毒を仕込むという、ある種性格の悪い、いつてしまえばセオリー

を知る人間ほど引つかりやすいものだった。

照射ビームという視界的にも眩しいものの背後にリリカが飛ばしたCファンネルを潜ませることで、目眩しからの奇襲を行う。

単純であるからこそわかりづらいその攻撃に、クラウディアもまた敬意を払いながらも、喰らいっぱなしでは終わらないとばかりに、己の愛機である、マスターガンダムとガンダムAGE-1タイタスのミキシングモデル——【ガンダムマスタータス】の磁気穿孔システムを起動させる。

『さあ、試合はここからです。スティアはあのウイングゼロと「緋きスナイパー」を、そしてドロシーはそのカバーに』

『はいはいっ☆』

『了解、クラウディア！』

ここできなし崩し的に攪乱され、戦線を崩されることこそが負けに繋がるとは、「チエック・メイド」の三人にもよくわかっていた。

だからこそディバイダー本体は破損していかないドロシーにそれを拾わせてバックアップ役に、そして何やら全身にクリアパーツを纏っているHiiellガンダムの改造機——【Hiiellガンダムギヤラクシア】を駆るスティアが遊撃役に、そしてクラウディア自身はタンク役として前線に飛び出てきたリリカを抑えるために、その鉄腕で殴りかかっていく。

だが、リリカにはその動きが全て見えていた。

もしもこの状況から立て直しを図って、相手を殲滅するとするなら、手段はそれぐらいしかない。

「お願い……ファンネル！」

TRYファンネルとCファンネルを分離させ、「チエック・メイド」の三人を分断するように、その死角から回り込ませたファンネルたちで装甲を切断しようとはけしかける。

しかしながら、事がそう上手く運んでくれないのもまた戦場の種というものだ。

スティアは分断されながらもTRYファンネル四基による攻撃を全て見切った上で、リリカのすぐ脇を横切って、後詰めとして控えて

いたカエデへと、スタービームライフルの一撃で強襲をかける。

「見えていますよ、ステイアさん！」

『それはこちらも同じです、御主人様☆』

確かにステイアはリリカのファンネル攻撃を巧みなマニューバで避けていたものの、カエデへと畳みかけていくようなそれは愚直なまでに直線的で、言い換えるなら、真正面から飛び込んでいく自殺行為のようなものだ。

だが、ステイアもまた「チェック・メイド」のリーダーを務めるダイバーであるならばその軽妙なテンションの裏側にも何か鋭い刃を潜ませているに違いない。

ツインバスターライフルのトリガーを再び引いたカエデの脊髄を、ぞくりと悪寒が伝って、本能がその意趣返しを、隠し球への警告を発する。

結果的には機体を旋回させるようなマニューバを取りながらツインバスターライフルを撃っていたのはある種の正解だったといえよう。

その光の奔流の中を泳ぐように、或いは無理にかき分けてでも押し通るように、ヒールガンダムギャラクシアのツインアイが煌めくと同時に、全身に配置されたクリアパーツもまたその煌めきを一層強いものへと変えていく。

星座が瞬くように、清らかな星光を放つように。

そしてカエデは、ステイアの機体が無傷で迫ってくることに驚愕しながらも、記憶の中から符合するものを探し出し、一つの結論に辿り着いた。

「まさか……アブソープシステムですの!?!」

『正解ですつ、御主人様☆ と、いうわけで……ここからは容赦なくいかせていただきますよっ! ギャラクシーレゾナンスシステム、ブーストアップ!』

アブソープシステム。

それは過去、GPDが最盛期を迎えていた時代に名を馳せたファイターが考案したものであり、端的にいつてしまえば、相手からのビー

ム攻撃をそのまま吸収して自機のエネルギーに変換するという、対ビームコーティングが最早常識とまでいわれていたかの競技を象徴するようなシステムだった。

完成度が低ければ吸収しきれずに自壊するという弱点を抱えていながらも、機動戦士ガンダムシリーズにおいて登場しない作品の方が珍しいレベルで普及している、ビーム兵器に対するほぼ完全な耐性を持つそのシステムは多くのダイバーに恐れられ、だからこそ考案者も実弾やビームサーベルによる切断属性の攻撃でそのシステムを搭載した盾を真っ先に破壊されていたのだが、それでもしばらくアブソブシステムや対ビームコーティングの強化がいわゆる「環境構築」に名を連ねていたことからその脅威が伺えるだろう。

しかし、模倣するのも容易なことではない。

アブソブシステムは確かに強力な機能だ。

カエデはツインバスターライフルを投げ捨てて、マシンキャノンを斉射しながら、バックパックの右側に搭載されているシザーソードを引き抜いた。

だが、アブソブシステムがいかに強力な機能であったとしても、世界大会でその実績を残していたのだとしてもそれは、ビルダーの実力ありきである、ということが知れ渡るのにそう時間はかからなかった。

結果として対ビームコーティングを強化した方がより簡単で、上限値こそ低いものの手軽に強みを引き出せる、と多くのファイターたちがその結論に至ったことでアブソブシステムは廃れ、そしてGPDの時代と共に、ひっそりとその姿を戦場から消していったのだ。

だからこそ、ステイアがHiirガンダムギラクシアにそれを搭載しているのは、ひとえにGPDという先の時代に強い思い入れを持っているか、或いは今も伝説と共にその名を称えられるファイターをリスペクトしてのことに違いはない。

ビームが効かないのなら実弾で、とばかりに放たれたマシンキャノンの雨霰を掻い潜り、ギラクシーレゾナスシステムを作動させたことよって大幅に機動力が強化されたステイアの機体と、それに素

の機動力のみで喰らいつくカエデのウイングゼロヌーベルが激突する。

奇しくも——同じ所から始まっていた。

その瞬間に、ステイアも、カエデも、浮かべていたものは笑顔だった。

未だにベストバウトとして名高いその戦いを再現するように、片翼のウイングゼロと、アブソープシステムを積み込んだヒーローガンダムが剣戟の乱舞を舞い踊る。

その中でリリカは二人を、そしてデブリ帯に紛れ込むことで狙撃の機会を伺っているミワをも俯瞰するように、クラウディアの機体を相手取りながら、戦場全体をリーダーの動向から観察していた。

『驚きましたね、御主人様』

「……な、何を……」

『奇しくも同じ作品をルーツとする機体でございます』

わたくしのは手足のみですが、と、畳み掛けるように放たれたTR YファンネルやCファンネルの乱舞によって、完全に足を止めながらも、クラウディアは不敵に、その口元を三日月型に吊り上げる。

格闘機であるガンダムマスタイタスと、無線兵器を持つガンダムAGE—FBの相性は最悪クラスだといっても良い。

それでもステイアにリリカの対処を押し付けず、クラウディアが足止めを担っているのはひとえに、その瞳に勝利の光明を見出しているからだ。

この状況でも決して諦めないクラウディアに、リリカは敬意を払いながらも、片腕だけになりながらも改造ディバイダーによる火炎放射を虎視眈々と狙っているドロシーへと、ブランシユから引き継いだドズライフルによる牽制射撃を放つ。

諦めていないのは、リリカも同じだった。

一機は手傷を負っているとはいえ、二対一という不利な状況下にあってもここまで食い下がり、持ち堪えているのはフルブランシユの特性が、ブランシユとは違って一対多数を得意としているのとあれば、初めての戦いを敗北で終わらせたくはないという、いわば執念の

ようなものがリリカを突き動かしているのもまた確かである。

『クラウドディア、受け取って!』

『ええ、ドロシー……格闘機というのは、いえ、メイドというのは……』  
「来る……っ……!?!」

『その身を盾にしても御主人様を護り抜き、そして一撃の元に相手を屠る。それこそが本懐でございます』

ドロシーに何やら合図を送ったかと思えば、クラウドディアは自機に火炎放射をぶつけるという狂気的な行動に走っていた。

だがそれが、自滅狙いの捨てゲーなどであるはずは断じてない。

その証拠に、今もクラウドディアの瞳は爛々と勝利を見据えて輝いている。

そして、何かが来る、それも自分を一撃で殺し得るものが、と、びりびりと痺れる脊髄と脳幹が、リリカに本能として警告を発する。

アブソーブシステムを積み込んでいるわけではないクラウドディアのガンダムマスタイタスは、ドロシーの火炎放射によって大きくその装甲値を削られていたのだが——何をするかとリリカが警戒しながらドツズライフルを放った、その瞬間だった。

『破っ!』

ばしいん、と、まるで羽虫をはたき落とすかのように、ガンダムマスタイタスの掌底が、ドツズライフルから放たれたビームを弾き飛ばす。

ドロシーの火炎放射を耐え切ったことにより、全身を黄金に煌めかせているガンダムマスタイタスは、CファンネルとTRYファンネルによる包囲を振り切って、先ほどまでの動きが嘘のように素早く、リリカの懐へと飛び込もうとしていた。

明鏡止水。

機動武闘伝Gガンダムに登場する、武術であり武闘家の境地をシステムとして再現したそれは、一定の装甲値を下回らなければ発動することができないという強烈な制約がかけられているものの、一度発動すれば機体の機動力と、そして格闘能力に強力なバフをかけるという圧倒的なリターンをもたらしてくれることを保証したものだ。

とはいえ、機体が低耐久になつてから発動する都合、万能というわけでは断じてなく、迎撃による撃墜の恐れもあるもの——少なくともクラウドディアにとって、そんなことは些末な問題でしかなかった。宣言通りに、耐えて、耐えて、耐え抜いて、最後の1撃によつて引導を渡せば良い。

だからこそ、「力」。大アルカナをメンバーのファミリーネームとしている「チェック・メイド」たちの中でも、端的にその性質を表しているクラウドディアは、まさしく Strength、その化身だといえた。

それでも、ここで終わるようならリリカも、そして「アナザーティルズ」もまた、曲がりなりにもこのGBNにおいてある程度の位置までその駒を進めていない。

「ファンネル！」

リリカは全身全霊で叫び、攻撃のために展開していたCファンネルを防御へと一点集中させる。

正面には盾を作り出し、そして数基は赤い残光を描きながら機体の周囲を周回することで簡易的なバリアとするその二段重ねの戦法は、「機動戦士ガンダムAGE」において、ガンダムAGE—FXを駆っていたパイロット——キオ・アスノが使っていた戦法に等しい。

『流石です、御主人様。しかし長き歴史の間、矛と盾がぶつかり合ったとき——常に勝利を収めてきたのは、矛の方にございます』

どんなものをも防ぐと謳われた盾と、どんなものをも貫き通すと謳われた矛、その二つがぶつかり合った時にどうなるのか。

そんな問答が古代の中国においてあったとされ、「矛盾」の由来になつたとされているが、史実における戦いにおけるその答えは、クラウドディアが言う通り多くの場合矛の側に軍配が上がってきた。

守る側と攻める側、どちらが有利かと問われれば、何かを背後に抱えていなければいけない防衛側が不利である、というのは戦術における常でもある。

言葉通りに、Cファンネルが作り出した盾をクラウドディアの鉄腕が破壊して、赤い破片が血飛沫か、そうでなければ血涙のように戦場となつた虚空へと飛び散っていく。

それでも——だとしても、リリカは決して諦めてなどいなかった。通信ウインドウにポップしたりリリカの口許には、ぎこちないとはいえず姉とよく似た、獰猛な捕食者としての色を宿した笑みが浮かんでいる。

それは、この戦場における支配者が誰であるのか、と問いかけているかのように、クラウディアに対して一つの答えとして叩きつけられる。

『ッ、クラウディア！』

ドロシーがそれに、リリカの意図に気づいた時にはもう遅かった。火炎放射器によって即座に援護を試みるが、それもまたリリカにとっては計算の内だったのだ。

「…………お姉ちゃん！」

「うんうん、ぐつどだよお、リリカちゃん！」

刹那、デブリ帯に身を潜めていたミワが、待っていましたとばかりにズダの対艦ライフルによってドロシーのガンダムGXバーニング、その頭部を撃ち抜く。

そして、クラウディアの鉄腕がフルブランシュへと到達しようとしていたその瞬間——二条の閃光が、満身創痍のガンダムマスタイタス、その鉄腕を正確無比に撃ち貫いていた。

『な、馬鹿な……………これは……………？』

「トライバード……………ありがとう、応えてくれて……………」

クラウディアを貫いた閃光の正体は、密かにTRYファンネルを回収していたことよって起動が可能となった、トライエイジガンダムから引き継がれた機能である、肩の一部を分離させることで自立支援機とする武装であった。

トライバードと呼ばれるそれは、所謂照射系ファンネルに分類されるものだ。

TRYファンネルを主翼とする都合上、その射出は二者択一にこそなるものの、見えていない状況において死角から照射ビームを放つそれは極めて凶悪な武装であるといっている。

鉄腕を破壊され、動きを止めたガンダムマスタイタスに、脚部のス



リットへと接続したCファンネルによる斬撃属性を持たせた蹴りを放つフルブランシユのツインアイと、そして肩に刻印された「A」のスリットが煌めきを放つ。

この戦場におけるゲームメイカー、白輝の支配者であることを示すかのように、そしてリリカの内に秘められた苛烈な闘志の炎が爆ぜる雄叫びのように――、或いは「繋がり」を武器とするように、リリカの新たな剣であるガンダムAGE―FBは、再び反攻へと転じるのであった。

## 第四十七話 「繋がり合うことで生まれるキセキ」

リリカのAGE―FBは、破竹の勢いを保持して止まることはなかった。

振り下ろされた右の拳を破壊されても尚食い下がろうとするガンダムマスタイタスとクラウディアを、残ったCファンネルの一撃で攪乱しながら確実に追い詰めていくその様は、普段のリリカからは信じられないほどに獯猛にして苛烈な戦闘姿勢だった。

そして、剣戟を繰り広げていたスティアは、クラウディアとドロシーに動きがないことを確認して、己の失策を痛感する。

だがそれは、カエデが予想以上に奮闘していたからであり、そんなカエデにリリカもまた全幅の信頼を置いていたからこそその話でもあった。

漆黒の宇宙に星座を刻み込むように、カエデとスティアは互いに満身創痍になりながらも、シザーソードとスタービームサーベルによる剣戟の輪舞を演じ続ける。

さながら灼けた赤い靴を履いているかのようには、しかし一度その靴を脱いで舞台から降りてしまえば、敗北が確定するのがわかっているかのようには、ゼロシステムによる誘導切りを物ともせず、或いはギヤラクシーレゾナンスシステムによる強化すらも跳ね除けるように、互いの得物が破損しても、スティアとカエデは一步も退くことはないとはばかりに、今度は互いの拳を武器にして殴り合っていた。

「やりますわね、貴女……流石Aランクは伊達ではないということですよのね！」

『御主人様こそ……このスティア、苛烈なまでの闘志に感服しました☆』

ここは作り上げては壊して、また作ってを繰り返す、GPDの戦場ではない。

このGBNにおいては、機体が破損したとしても、時間を経るか、高速リペアキットと呼ばれる課金アイテムを使えばすぐにその損傷は修復されて、そしてリアルガンプラにダメージがフィードバックさ

れることは絶対にあり得ない。

だからこそ、GPDと共に去っていったファイターたちの中には、この戦場を偽物だと詰っていた者も多いという。

それでも、戦いに、互いのプライドと尊厳をかけたぶつかり合いに本物と偽物の区別など、現実と仮想の区別など、あるのだろうか。

いや、ない。

その答えが分かっているからこそ、ステイアも、カエデも愚直なまでに殴り合っているのだし、それを視認しているはずのミワもまた、舐めているのではなく、ステイアという一人の戦士に対して敬意を払って、横槍を挟むことはしないのだ。

戦術としては愚策もいいところで、勝利を求め続けるのであればその選択は、はつきりいつてしまえば下の下の下、論外だということはミワにもわかっている。

だが、フォース戦というのは個人戦ではない。

そして今自分たちが懸けているものがダイバーとしてのプライドだけであるのなら、そこに横槍を挟むことほど無粋なこともまたない。

かつてのミワにはそれがわからなかった。

メインカメラを破壊したことで射線を割り出される心配がないと踏んだミワは、狙撃を警戒してクラウディアの援護に向かえずにいるドロシーを仕留めるべく、照星をその瞳で覗き込む。

相変わらず展開しているクリアインコムからも、敵機の位置情報は正確に転送されてきている。

フリーダムガンダムルージュ・ティラユール。

狙撃兵の名を冠して機体をカスタムした通り、ミワがリリカと共に導き出した答えは、二人で戦場の目となって、手を取り合って戦うということだった。

クリアインコムを切り離し可能なドローンにすることで、ミワは「アナザーテイルズ」に欠けていた斥候と偵察役を、そしてリリカは機体にファンネルを搭載することで戦場の中心から全てを掌握するゲームメイカーとなることで、遊撃手とタンク役を兼ねていたカエデ

の負担を軽減する。

奇しくも姉妹揃って導き出した結論は一致し、そしてその効果もまた「チエック・メイド」を相手に、十全に発揮されていたといっている。

スナイパーの勝利というのは往々にして冷酷なものだ。

詰め寄られる前に、位置取りを上手くして超長距離からコックピットを狙って撃ち抜くという性質は当然ヘイトを買うものであり、だからこそGBNにおいても、「スナイパーを見たら親の仇のごとく追い詰めろ」というのが鉄則となっている。

それは裏を返すのならば、スナイパーに自由を与えてしまった時点でそのゲームにおけるアドバンテージは実質的に放棄されたに等しい、ということでもある。

その弾丸が見えないからこそ恐れ、そして理不尽でありながらも超絶的な技巧がなければできないその芸当を畏れて、多くのダイバーたちは今日もスナイパーを追い詰めようとしているのだ。

赤熱の悪魔、その二つ名或いはファミリネームを冠しているドロシーもまた一角のダイバーであることに疑いの余地はない。

しかし、開幕でカエデが打って出た奇策とそしてリリカの感知能力によって氣勢が削がれ、片腕を失ったことで戦闘能力が半減していたのが、彼女にとつては恐らく最大の不幸であったといってもいいだろう。

そして今、メインカメラの喪失によって大きく視界が制限されたその機体を——ミワの瞳は確かに捉え、トリガーにかけられた指は死角からの牙となつてドロシーの喉元を食い破らんとしていた。

「ごめんねえ、でもでも、逃さないよお……！」

かちり、と、操縦桿のトリガーを押し込むことで、砲身のブレまで含めて計算された徹甲弾の軌道が、宙域を漂うかのように力なく、そして困惑を隠しきれずにいたドロシーのガンダムGXバーニング、そのコックピットを正確に貫いて、テクスチャの塵へと帰せしめる。

『きゃああああつ！ そんな、ドロシーのガンダムが……！』

『ドロシー……とはいえわたくしも満身創痍の身体、どこまで食い下

がれるか』

相方のシグナルロストを受けたクラウディアは、その鉄面皮に珍しく苦々しい表情を浮かべて、胴体と左腕と右足を残して、ほとんど大破状態であるガンダムマスタイタスを、フルブランシユの懐へと再び飛び込ませようと試みる。

だが、五体満足であった時ならばいざ知らず、AMBACのバランスも大きく欠いて、スラスタも焼かれている今のマスタイタスでは、残っていたCファンネルの嵐を避け切ることなど不可能であった。

例え全身にバリアを纏っていたとしても、キャンディ塗装とヨノモリ塗料の対ビームコーティングトップコートという二段構えの対策が備えられているリリカのファンネルは、もはや空飛ぶシングルブレイドと言っても過言ではない。

その斬れ味が相手を選ばず、そして方位を選ばずに襲いかかる恐ろしさというのは、今のマスタイタスが、撃墜されてしまったドロシーのGXバーニングが物語っているといっているだろうか。

「これで……終わりにします……！」

Cファンネルによる挟撃でマスタイタスの四肢を切り落とすと、リリカは腕部のガントレットからビームサーベルを発振させて、残されたコックピットをX字に斬り裂いた。

『御見事です、盾と矛のぶつかり合いではなく矛と矛のぶつかり合い……読みきれなかったわたくしの完敗でございます、御主人様』

「……え、えつと、その……」

『自信を持つてください。貴女は、わたくしという壁を打ち破ったのですから』

ふっ、ときこちなく微笑んで、クラウディアの機体は漆黒の宇宙からそのシグナルを喪失させる。

良い戦いだった。まだ全てが終わったわけではないものの、リリカもまた、彼女と同じくきこちないながらもその口元に笑みを湛えて、互いの健闘を称え合うかのように爆炎が晴れた虚空を見つめていた。

戦いの趨勢は、最早決したといっても過言ではない。

とはいえ、最後まで何があるのかわからないのがガンプラバトルというものだ。

「が、頑張ってください……カエデさん……!」

カエデとステイアが終わらないワルツを踊っている戦場を見つめて、リリカはそこに一つ、祈りを託すかのように激励の言葉を送る。

ステイアのHiールガンダムギヤラクシア、そしてカエデのガンダムウイングゼロヌーベル。

互いに最早満身創痍といった風情で、各所が砕け、メインカメラが破壊されても殴り合い続けているその光景はある種異様なものだといってもよかった。

だが、ステイアとカエデが脳裏に想起しているものはただ一つだ。

自分が一番ガンプラバトルが上手いのだと、ガンプラが大好きなのだと呼びたい。

それは、GPDの世界大会における一幕であり、GBNの中でもいっただって叫ばれている言葉だった。

だからこそ、退くことはしない。

だからこそ、諦めることはしない。

勝利が確定するその瞬間まで、相手が地に倒れ伏すその瞬間まで、ガンプラバトルは続いている。

ステイアは、コンソールに映るギヤラクシーレゾナンスシステムの稼働時間を一瞥して、その限界が近いことを悟ると、右の拳に全てのエネルギーを集中させて、カエデのコックピットを打ち貫かんと、裂帛の気合いを込めて叫ぶ。

『これが私の必殺技です、御主人様！ ギヤラクシア……ナツクル!』  
「なんとかとハサミは使いようなのでしてよ！ 例え……折れていたとしても！ わたくしは決して諦めない!」

カエデのウイングゼロヌーベルには、内部出力系を増幅させる必殺技は設定されていない。

それでも、だからといってブーストアップ機構を持たないガンプラが、他のガンプラに大きく劣っているのかと問われれば、その答えは間違いなく否である。

カエデはシザーソードが砕けた欠片を握りしめると、それをステイアのコックピットを突き立てんと、残された左腕を振りかぶる。

『これでええええっ！』

『この一撃でええええっ！』

その先に、この試合における勝利の光明が見出せないとしても、或いは戦いの趨勢は決していたとしても、ダイバーとダイバーの矜恃をかけたこの勝負に手を抜いていい理由などどこにもない。

ステイアもロールプレイを忘れて、そしてカエデも闘志を剥き出しにして、互いのコックピットを貫いて破壊しようと咆哮する。

自分が一番ガンプラバトルが上手いんだ。

自分の機体が一番強くて格好いいんだ。

そんなプリミティブな衝動が齎した結末は、極めてシンプルなものだった。

ステイアの拳は確かにカエデのコックピットを貫き通し。

そしてカエデが握り締めていたシザーソードの破片はステイアのコックピットを穿っていた。

つまるところ——引き分けという形で、「勝負」に幕は下ろされた。

【Battle Ended!】

【Winner:アナザーテイルズ】

だが、試合の勝利者が「アナザーテイルズ」であることに間違いはない。

曲がりなりにも一角の実力派である「チェック・メイド」を相手にして、リリカはフルブランシュの初陣を、ミワはティラユールの初陣を、勝利で飾ることに、成功していたのだった。



「流石は噂の『アナザーテイルズ』ですねっ、負けちゃいましたけど……グッドゲームでしたっ☆」

ロビーに帰還したステイアは、先ほどまで癡猛な叫びを上げていた

とは思えないほど明るく感情豊かなロールプレイに戻り、瞳の右脇にピースサインを掲げてから、リリカへと握手を求めてきた。

「……わ、私たちも……グッドゲーム、でした……えへへ」

ぎこちなく、リリカもその手を取って互いに健闘を称え合う。

この戦いの勝因が何で敗因が何であるかを分析するよりも先に、勝負における互いの戦いを称え合うこの瞬間は、ある種GBNにおける名物であり、敗北に悔しきこそあったとしても、何回だってやり直すことができるという特性を持つこのゲーム故の光景だろう。

「私たち『チエック・メイド』、何か御主人様のご用があれば、呼ばれて飛び出て即参上しますので、これからも何かありましたらよろしく願いますねっ、御主人様☆」

「宣伝も欠かさない辺りは流石傭兵メイドってところだねえ」

「はい！　なんでか知らないですけど、GBNには同業他社が多いので☆」

傭兵をやるメイド、というロールプレイにそこまで需要があるのかどうかはわからないが、スティアがどこことなく切実な調子で語ったように、GBNにおいて傭兵メイドというジャンルが確立されている程度には同業他社、というより同業他フォースは存在している。

そして更に傭兵派遣業となれば、更に広く存在している都合から、多少強引であったとしても自分たちを売り込まなければいけない、というのは彼女たち「チエック・メイド」にとっては切実な都合なのだろう。

しつかり宣伝をしてロビーの雑踏に紛れていくスティアたちを見送りながら、ミワはそんなことを茫洋と考えていた。

「色々濃い人たちだったねえ」

「ええ、ですが腕前でいえば確かな実力者に違いありませんわ。今度は他のメンバーの方とも戦ってみたいですわね」

傭兵にしては随分と物腰が丁寧なものも好感度が高いですわ、とカエデが嘆息したように、このゲームにおける傭兵プレイヤーというのはピンからキリまで、良くも悪くも様々な層が広がっている。

その中でも巨頭といえる「セルピエンテ・クー」は腕前も性格も確



かな分利用料は莫大なものであり、「レイブズネスト」は利用料金こそリーズナブルだが、あくまで料金に応じた傭兵を紹介してくれる、というだけなど、一長一短である中で、「チェック・メイド」の面々の性格やアフターサービスの良さというのは一種の売りになるのだろう。

「……つ、疲れた……ね……」

「然り然り……カエデさんは機体もダメージ負ってるし、今日は解散にしよつかあ」

「ですわね、それではお先に失礼いたしますわ」

「お疲れお疲れ、くあ……ミワも眠くなってきたからログアウトするねえ、リリカちゃん……」

「う、うん……ありがとう、お姉ちゃん……」

現実へと一足先に解けていくカエデとミワを見送りながら、リリカは遅れてどつと押し寄せてきた疲労感と、そして、どこか温めた蜂蜜に浸した綿で心臓を優しく包み込まれるような感覚に身を委ねて、静かに目を伏せる。

フルブランシユの初陣は確かに勝利で飾られたが、それは自分だけの力ではない。

奇策を提案してくれたカエデの奮闘と、そして偵察と斥候を担ってくれたミワのティラユールのバックアップ。それなくして、きつと「チェック・メイド」に対して「アナザーテイルズ」が、そしてリリカとフルブランシユが勝つことはなかっただろう。

それは当たり前のことなのかもしれない。当たり前すぎて、近くにありすぎていつの間にか忘れているようなことなのかもしれない。

「……えへへ、GBN……楽しい、ね……ブランシユ……」

それでも——このゲームを、GBNを「楽しい」と思えるのは、勝ち負けよりも先に、フォースとして、「アナザーテイルズ」として、リリカが培っていた繋がりが、そこにあったからに他ならない。

ミワたちがログアウトしたのを見送った後、リリカは格納庫エリアに佇むフルブランシユを見上げて、眦に涙を滲ませながらそう語る。

ツインアイから光は消えて、肩の「A」字型スリットも同じように

沈黙しているフルブランシユだが、交錯した視線には、その瞳にはリカの顔に、春に蕾が綻ぶような笑みが浮かんでいることを克明に映し出している。

それはきつと、フルブランシユの答えなのだろう。

リリカにガンプラの声は聞こえない。

だが、ELダイバーでなくとも、特殊な共感覚を、シナスタジアを持たなくとも、わかることは、通じ合えることは確かにあるのだとばかりに、その白輝に紅を――姉のモチーフを取り込んだ機体は悠然と佇み、ログアウトしていくリリカを静かに見守り、そして見送るのだった。

## 第四十八話 「二桁からのお誘い」

GBN総合スレpart. 1162

1：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ここはガンプラバトル・ネクサス・オンライン、通称GBNに関する総合雑談スレッドです。

各種ミッションについてはwikiを参照した上で専門スレへ、フォース勧誘、ビルド構築、クリエイトミッションの攻略に関する相談も専用スレでお願いします。

【GBNまとめwiki】<https://www.gbn-tokyo.com/wiki/>

【ミッション攻略スレ】<https://www.gbn-tokyo.com/mission/>

【ビルド構築スレ】<https://www.gbn-tokyo.com/build/>

【フォースメンバー募集スレ】<https://www.gbn-tokyo.com/force/>



255：以下、名無しのダイバーがお送りします

リプレイモニター見てたら傭兵メイドと噂の「アナザーテイルズ」が戦ってたわ

256：以下、名無しのダイバーがお送りします

どの傭兵メイドだよ

257：以下、名無しのダイバーがお送りします

傭兵メイドってジャンルが確立されてる時点で草生えるんだよなあ

258：以下、名無しのダイバーがお送りします

「GHC」お抱えとか噂のルヴィーラとか、あとはまあ色々いるけど「ゴシックカトラリー」とか「グリムメイデン」辺りもメイド服で統一したフォースってことで結構話題にはなってたはず

259：以下、名無しのダイバーがお送りします

ルヴィーラ姉貴みたいに個人で活動してるの含めたらかなり数いるし傭兵メイドって属性はメジャーなものだった……？

260：以下、名無しのダイバーがお送りします  
そりや皆ロングスカートの中に手榴弾とかサブマシンガン隠し  
持つてるメイドさんは好物だから当たり前だよなあ？

261：以下、名無しのダイバーがお送りします

メイドといえばバイオレンスアクションみたいなどこあるからな

262：以下、名無しのダイバーがお送りします

お前ら例の漫画好きすぎだろ、でも俺もソーナノ

263：以下、名無しのダイバーがお送りします

話が明後日の方向に吹っ飛びすぎだろ、どこの傭兵メイドだよ

264：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>263

ステイアがリーダーやってる「チェック・メイド」だった気がする

265：以下、名無しのダイバーがお送りします

あー、最近売り出し中の方か、前昇格戦で世話になったけど悪くな  
かった気がする

266：以下、名無しのダイバーがお送りします

「チェック・メイド」の連中、他の傭兵と違って料金以上にサービスし  
てくれるからなあ、負けたら半額とはいえ返金してくれるし

267：以下、名無しのダイバーがお送りします

ダイバーつつかりーダーのロールプレイは若干クセあるけどそ  
れでもアブソープシステム再現してたり腕は悪くないんだよな

268：以下、名無しのダイバーがお送りします

クラウディアちゃんの鉄腕粉碎スタイルはいぞジョージイ……

269：以下、名無しのダイバーがお送りします

排水溝ピエロまで湧いてて草

270：以下、名無しのダイバーがお送りします

次元霸王流とか色々トントンデモ格闘術やトントンモ剣術が跋扈する中  
でクラウディアちゃんの格闘術は耐えて耐えて耐えて吹っ飛ばすステゴロ  
スタイルそのものだから好感持てるんだよな

271：以下、名無しのダイバーがお送りします

まだまだフォースとしては売り出し中とはいえ四桁フォースを撃

破したのか、「アナザーテイルズ」の連中

272：以下、名無しのダイバーがお送りします  
リリカちゃんの機体がAGE-1からFXベースになってたな、腕は悪くないけど機体がイマイチパワー不足だったところあるからそういう意味では悪くないチヨイスだと思う

273：以下、名無しのダイバーがお送りします  
ブランシユアクセルだっけ？ あの試合では使ってなかったけどどうなるんだろうな

274：以下、名無しのダイバーがお送りします  
そこら辺はビルド構築スレの領域だな、GBNにマスクデータ多すぎんよ

275：以下、名無しのダイバーがお送りします  
地味にミワちゃんの機体もバックパックが新しくなってたな、あのインコムみたいなやつってトリスリッターのだっけ？

276：以下、名無しのダイバーがお送りします  
トリスリッターので合ってるけど「リビルドガールズ」の銭ゲバロリみたいに観測機兼偵察機として飛ばしてるっぽいな

277：以下、名無しのダイバーがお送りします  
あの辺のランク帯になってくるとマジで偵察と斥候は軽視できないからなー、一人で凸砂やるならともかくチームで砂やるなら戦場の把握は必須だよ

278：以下、名無しのダイバーがお送りします  
ジャミング焚いときますね

279：以下、名無しのダイバーがお送りします  
やめろオ！

280：以下、名無しのダイバーがお送りします  
つつても赤砂のミワちゃんだし観測機無力化されても肉眼で超長距離からのヘッドショットやらピンホールショット決めてきそうぞ怖い

281：以下、名無しのダイバーがお送りします  
実際あれ保険以上の意味ないんじゃないかな

282：以下、名無しのダイバーがお送りします

一応観測機飛ばして撃ち落とされなければデータリンクで敵の情報とか共有できるし仲間のためなんじゃない？

283：以下、名無しのダイバーがお送りします

あの赤砂が仲間の為にビルド構築してるとか信じられねえ……

284：以下、名無しのダイバーがお送りします

一時期傭兵やってた頃もフレンドリーファイアこそしなかったけど自分が生き残って自分が決めるみたいな立ち回りで完結してたからなあミワちゃん

285：以下、名無しのダイバーがお送りします

個人的なMVPはアブソープ積んだヒーローと片側にウイング寄せたゼロの殴り合い宇宙だったな、GPDの世界大会思い出したわ

286：以下、名無しのダイバーがお送りします

例の人リスペクトしてるんだろ、あの暴走お嬢様

287：以下、名無しのダイバーがお送りします

μちゃんもそんな感じじゃなかったっけ

288：以下、名無しのダイバーがお送りします

推しをリスペクトしたカスタマイズを施すのはGPD以前からの伝統だからな

289：以下、名無しのダイバーがお送りします

ガン普拉バトル自体が夢物語だった時期を考えれば良い時代になっただけ

290：以下、名無しのダイバーがお送りします

てか何気に「アナザーテイルズ」のフォースランキング凄いいことになってんな、伸び幅が桃○みたいだわ

291：以下、名無しのダイバーがお送りします

新進気鋭のフォースだと割とよくある、昔だとSD縛りしてた「シヤノワール」辺りなんかは伸び幅ヤバかったからな

292：以下、名無しのダイバーがお送りします

まあそこから上に行くとなると魔境だからなあ……

293：以下、名無しのダイバーがお送りします

SDに対するメタ戦術が流行ったのってそういやシヤノワールが台頭してきた頃だったな、そういう意味では四桁ランクの閻鍋は地獄の釜よ

294：以下、名無しのダイバーがお送りします  
リリカちゃんなら……それでもリリカちゃんなら……

295：以下、名無しのダイバーがお送りします

リリカちゃんファンクラブ会員ここにもいたのか

296：以下、名無しのダイバーがお送りします

なんだそれ

297：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>296

文字通り健気で可哀想可愛いリリカちゃんを後方腕組み先輩面で見守る集団のことだぞ

298：以下、名無しのダイバーがお送りします

事案ですか？

299：以下、名無しのダイバーがお送りします

もしもガードフレーム？

300：以下、名無しのダイバーがお送りします

ガードフレームくん「また変質者が壊れるなあ」

301：以下、名無しのダイバーがお送りします

またってことはそんなにいるんですかね……いたわ……

302：以下、名無しのダイバーがお送りします

GBNは魔境だからな



スレッドの中を、自分たちを取り扱った文字列が駆け抜けているのもいざ知らず、リリカたちは「チェック・メイド」との戦いが終わってから、いくつかメッセージボックスに放り込まれていたフォース戦という名の果たし状を消化することに勤しんでいた。

『最早俺をあの頃の俺だと思わない方がいい……リジエネレイトガン

ダムを取り込むことでより強靱で圧倒的な無限のパワーを得たこのスーパーシユペールスーパーハイペリオンはぶべらッ!?』

「名前長いねえ……」

ミワも人のこと言えないんだけど。

そう付け加えて、ミワは小さく嘆息する。

何やらリジエネリートガンダムとハイペリオンガンダムをミキシングした上で徹底的な、執拗なまでの表面処理と金メッキ風の塗装を施すことで、映像作品「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」に登場する、ビーム反射機構「ヤタノカガミ」を再現したという触れ込みの、「スーパーシユペールスーパーハイペリオンガンダム」であったが、リジエネリートを取り込むことでよりの大きくなったのと、単純に対ビームコーティングされた実弾兵器相手に無力であるという弱点は変わらなかった。

むしろ、超長距離から放たれるABAPSFDSにとってはおやつのようなものであり、やりたいことはわかるけれど努力の方向性が明日の方向に向かっている「ホッシー」に同情するような気持ちで、ミワはテクスチャの塵に還ったスーパーシユペールスーパーハイペリオンを一瞥する。

「あーっはっは！ よもやわたくしを捉えようとは……その心意気は良し！ ですがわたくしとてそう簡単に取りられてあげられるほど軽い女ではありませんことよ！」

『くっ、速い！』

『ゼロシステムの誘導切りとそのマニュアルバ……只者ではないということだ！ ユニバアアアス！』

そしてミワの傍で、カエデは【百式】と【ゴールドスモーク】というこれまた金ピカな二機を変則的なマニュアルバをゼロシステムと織り交ぜることで、輪舞のような機動でその軌跡を漆黒の宇宙へと刻んでいた。

フォース「ゴールドデン・ドリーム」。

文字通り黄金の夢を掲げる彼らの機体は全てが金色で統一されており、戦闘宙域に転がっているリボーンズガンダムであるとか、ダブ



ルオーライザーであるとか、テレビではトリコロールだった機体も百式の配色を参考にして、鏡面仕上げの黄金色に彩られている。

いつぞや閻鍋こと「シャフランダム・ロワイヤル」で遭遇したダイバーであるスーペルシユペールスーパーハイペリオンを駆る男、「ホツシー」の断末魔を耳にしてリリカは、切り込み役がいなくなつたと即座に判断を下し、ミワからのデータリンクによれば廃コロニーの中に潜んでいるフラッグ機を討ち取るべく、フルブランシユを加速させた。

フラッグ戦。

それはフォース戦における一つの形式であり、文字通り旗印である「フラッグ機」設定された機体を倒せば、例え相手が何人残つていようと問答無用で勝利が確定するというルールのことだった。

野試合のフォース戦においては基本的には殲滅戦がルールとして選択されやすいのだが、律儀にも「ゴールデン・ドリーム」の彼らは数的不利が「アナザーテイルズ」にあるということから、このフラッグ戦をルールとして制定していたのだが——結果としては死屍累々、例えルールが殲滅戦であつたとしても大差ないといった風情だ。

だからといって、試合を途中で放棄するという行為は断じて褒められたものではなく、唾棄すべきものだ。

故にこそ、戦いの趨勢が「アナザーテイルズ」に傾いていることを知っていても、「ゴールデン・ドリーム」の面々は決して諦めることなく、リリカたちに食い下がっているのだ。

『流石だな、「アナザーテイルズ」！』

そして、廃コロニーの影に身を潜めていたその黄金のシルエツトが、ゆらりと戦場に姿を現して、急襲するフルブランシユへと牽制の一撃を放つ。

「ビームが広がって……？　ディバイダー……違う……」

『そうとも、これはクジャク！　そしておれがフォース「ゴールデン・ドリーム」のリーダーにしてフラッグ機を務めている「ルドン」と「クロスボーンガンダムXG」だ！』

その機体にリリカは見覚えがあるわけではない。

だが、律儀にきつちりと名乗りを上げてくれた通り、ルドンという青年が駆る「クロスボーンガンダムXG」は、原作においては銀色の塗装が施されていたクロスボーンガンダムX0フルクロスを金メッキとダークブルーのツートンカラーに染め上げたカスタマイズモデルであり、「ゴールデン・ドリーム」のメンバーたち同様に「ヤタノカガミ」と同じ効果をその装甲には宿している。

最初にドツズライフルを放った時、それがそのまま自分に跳ね返ってきたのはリリカも驚かされたが、タネが割れてしまえばなんということはない。

一見ビーム兵器に対して無敵に見える「ヤタノカガミ」だが、格闘属性を持つビームサーベルは弾き返さないのだ。

——それに。

『ふむ、格闘術の心得、ですか……』

『は、はい……』

『それは躊躇わないことです、御主人様。行けると思った瞬間に己を疑わないこと、そして誤っていたとしても踏み倒して攻撃を倒すという力こそがパワーなのでございます』

フォース「チェック・メイド」との一戦後、リリカは密かにクラウドディアに対して格闘術の心得を尋ねていた。

それはこのフルブランシュが、ビームサーベルを引き抜くタイプの機体ではなく、ガントレットと一体化したものを装備しているために、格闘戦における間合いがガラリと変わったからに他ならない。

剣術というよりは格闘術に近いそれは、同じAGE系の機体をミキシングの材料に選んでいるクラウドディアであれば知っているだろうと当たりをつけてのことだったが、果たしてそれは間違いではなかった。

「お願い、Cファンネル……!」

『斬撃属性か! そいつはちよつと……分が悪い、な!』

リリカはルドンの懐に飛び込むための布石として、残存しているCファンネルで全方向からの包囲、突撃させることを試みたが、ルドンとして手練れのダイバーである。

原作である「機動戦士クロスボーン・ガンダム 鋼鉄の7人」においてトビア・アロナクスがそうしたように、シザーアンカーにクジャクを挟み込むことで即席の鞭を作り上げ、全方位から迫りくるCファンネルを全て叩き落としてみせた。

だが——リリカの狙いはそこにこそあったといってもいい。

鞭が振るわれた後隙、僅かな硬直を狙って差し込まれるように放たれたTRYファンネルがまずはクロスボーンガンダムXGからカウンターという選択肢を奪い取り、それが相殺されたとしても。

「フルブランシュ……お願い、全力で……！」

今この瞬間こそが、クラウドディアから授けてもらった教えを実践する時だったとばかりに、リリカは間一髪でコックピットへの直撃を回避するも、大きく体勢を崩したクロスボーンガンダムXGに、ブーストの勢いを乗せて、腕部ガントレットから発振したビームサーベルを突き立てた。

『三段構えとはな……やるじゃないか……』

「……こ、こちらこそ……その……いい戦い、でした……」

『はは、そうだよな。楽しかったなら……おれも何よりだ』

負ければ悔しい、そんなのは当たり前だと承知していても、いい試合だったと相手を称えることができる。

それが例え悔しさを包み込んでいたとしても、綺麗事であったとしても。

やらないよりはやった方が圧倒的にいい。

そうだろう、と、ばかりに、爆散するクロスボーンガンダムXGのコックピットで、最後まで通信ウィンドウに移るルドンは微笑んでいたのだった。



「これで……来た依頼は全部……かな」

「うむうむ、今の人たちで最後だったねえ」

「全員がビームに対して対策を施しているフォース……GPD上がり

だった可能性もありますわね」

フォース戦を終えて、「アナザーテイルズ」の面々はセントラル・エリアのカフェベースに陣取って、他愛もない話に花を咲かせていた。リリカが確認した通り、「アナザーテイルズ」宛に送られてきた、フォース戦を申し込むメッセージボックスの中身は全て既読かつ、さっきの「ゴールデン・ドリーム」で最後になっている。

結構まとまった数が送られてきたのもあって、達成感もひとしお、といったところであつたが、リリカの視線はどうしてか茫洋と宙を彷徨っていた。

「どうしましたの、リリカさん？ ぼーっとして……」

「……えっと、なんだか実感湧かないなって……」

カエデは心配して問いかけたが、なんということはない。

何がきっかけになつたのかは知らないが、「アナザーテイルズ」は急激にフォースランキングが上がつたり周囲の耳目を集めていたらしく、そこに実感が伴っていない、というだけだつた。

「急に有名になつちやつたからねえ……案外今も、お誘いとか来ちやつたり〜？」

「ふふ……まさかまさかの、その通りです」

机の上にごでーつ、と突つ伏して、ミワが妄想とはいえ熱つた身体を沈めるようにお冷やを頬に当てたその瞬間のことだ。

飴玉で作つた鈴を鳴らしたような声が、リリカたちの耳朵に触れる。

声のした方に振り返れば、そこにはゴシックな黒い和装に、腰まで届く黒髪をいわゆるお嬢様結びにしたダイバーが、しずしずと佇んでいた。

「……え、えっと……？ 貴女は……？」

「お初にお目にかかりますね、『アナザーテイルズ』の皆さん。ふふ……ユユはユユと申します、言つてしまえば、貴女たちの姿に心惹かれた内の一人、といったところですよ」

ユユと名乗つた少女はくすくす、と妖艶に笑いながら、艶やかな手つきでコンソールを操作すると、自身のプロフィールカードを表示し

てみせる。

そして、カエデも、先ほどまでは机に突っ伏していたミワも顔を上げて、ごしごしと目を擦りながらそこに記載されていた数字を二度見していた。

——個人ランキング64位。俗にいう、「二桁の魔物」が、このユユという可憐な少女の苛烈な正体だということだ。

それは、リリカたちが目を疑うのには十分すぎるものだった。

「ですから、ユユは……貴女がたと遊びたくて、お声をかけさせていたのだのです、ふふ」

愕然としているリリカたちを他所に、事もなげにそんなことを言うてのけるユユだったが、だからこそ、戯れにとんでもないことをするからこそ、彼女は人々から「黒髪黒和装災害系妹」呼ばわりされているのだ。

そんな「遊び」という名の挑戦状を持参してきた怪物を相手に、どんな顔をすればいいのか。

笑えばいいと思うとか、そんな騒ぎの話ではない。

「では皆さん、お手柔らかによろしくお願いしますね、ふふ……」

啞然とするリリカたちを置き去りにして、ユユは妖艶に、囁くような蠱惑的な声で微笑み、そう告げ——「アナザーテイルズ」へのお誘いを叩きつけるのだった。

## 第四十九話 「ハンズクラップ・オン・ユア・マークス」

「ユユさんと仰いましたね、貴女」

リリカがフリーズを起こして、ミワがどうしたものかと首を捻っている最中、僅かな沈黙を破って口火を切ったのはカエデだった。

どこか試すように、そして言い方こそ悪いものの、値踏みするような視線をユユへと向けながら、決して「二桁の魔物」を前にしても臆することなく、すらすらとカエデは言葉を紡いでみせる。

それこそがきつと、彼女の魅力であり美点なのだろう。

リリカははつとしたような心地で、一步前に踏み出て対外折衝を引き受けるカエデの横顔を見る。

そこにあるのは、凜と研ぎ澄まされた刃のような鋭さと美しさで、きつとカエデがいてくれなければ自分たちは今頃ここにはいないし、こうしてユユが興味を持つてくれることもなかったのだろうな、と、リリカは思考を整理する傍らで、そんなことを考えていた。

「ええ、ユユはユユです、カエデさん……何か訊きたいことがあるようですね……?」

「あるものにも大有りですわ、端的に申し上げれば三つ。なぜ、いつ、どのような。これを明かしてくれない限りわたくしから言えることもなければ、リーダーであるリリカさんからの承認も得られませんことよ」

カエデはふんす、と豊かな胸を張ると、一つ、二つ、三つ、と、親指から中指までを立てる形で、ユユへとその疑問を提示する。

現状を整理するのであれば、ユユが一方的に絡んできただけで、その動機らしきものは彼女の口から語られていたものの、二桁だろうが一桁だろうがチャンプだろうが、他人に何かを申し入れる時はその条件を欠いていたのでは話にならない。

「そうだね、そうだねえ……ミワもその辺聞いとかなないと納得できないかなあ、リリカちゃん?」

このまま蹲っておずおずとしているだけでも、カエデとミワは話を上手くまとめられるだろう。

それでもカエデは「アナザーテイルズ」のリーダーを自分だといつてくれたし、ミワだって薄々とその意図を察して今、助け舟を出してくれている。

リリカは押し寄せてくるプレッシャーに、ごくり、と生唾を呑み込む。

——それでも。

それでも、二人が期待してくれているのなら、どんなに下手でも、伝わらなくても、交渉の最終決定権を持つ者として、この舞台上に上がらなければ女が廃るというものだ。

リリカの、か弱くブレて、揺れていた瞳が焦点を結んで、真っ直ぐに、カエデの言葉を受けて尚、試すのは自分であるとばかりに余裕を崩していないユユへとその視線が向けられる。

いつだったか、自分の内側にある強さの根源は「決意が固い」ことだと言ってくれた、テンコというダイバーのことをリリカは思い返す。

もしもそれが本当ならば、もしも自分の中に一欠片であつても強さがあるのなら。

ふるふると身体を震わせながらも、リリカは「二桁の魔物」を真っ直ぐに見据えて問いかける。

「……わ、私も……同じですっ。どうして私たちなのか、どんな風に、いつ戦うのか……それがわからないと、その……フォース戦、できませんから……」

「ふふ……ユユが見込んだ通りのお方ですね？　リリカさん……」

「見込んだ……？」

にわかにかエデとミワの間に緊張が走るのを他所に、意図してかそうでないのかはわからないが、蠱惑的に、そしてどこか情熱的に、ユユの垂れ気味の瞳から向けられる視線が熱を帯びていく。

「ええ、まずは『何故』……ユユは貴女たち、『アナザーテイルズ』にどうしてかはわからないのですが、心惹かれたのです……ふふ、それ以上の理由はないですよ……？　そして、『いつ、どのよう』ですが、そちらに関してはユユの作ったクリエイトミッションを見てくれ

ば早いかと……」

カエデからの三つの問いかけ、そしてリリカから向けられた視線を真っ直ぐに受け止めて、ユユは手元のコンソールを操作すると、自身が発注してその承認が届けられたクリエイトミッションを、「アナザーテイルズ」の三人組へと提示してみせた。

クリエイトミッション。

それは読んで字の如く、運営側が用意したミッションではなく、ダイバー自身が考案したミッションを受注するもののだが、あまりにも理不尽な高難易度化などを防ぐために、まず承認を求める際に、ダイバー自身が作成したミッションをクリアしていなければならぬという前提がつく。

中には開発者にしかわからないような裏口を使つての理不尽難易度のミッションも存在しているのだが、そういったミッションは大概バックドアが露骨にわかりやすいためにあえて裏口からクリアする報酬狙いにカモにされるか、通報されてリストから消えるかのいずれかだ。

そしてユユは曲がりなりにも二桁ランカーである以上、そういう不正はしないだろうとリリカたちは踏んでいるのだが、ハイランカーが作る、ハイランカーしかクリアできないようなミッションが出される可能性は否定できない。

緊張した面持ちで提示されたタブに記された情報をつらつらと読み流すと、そこに書いてある文面は極めてシンプルなものだった。

「極圏……鬼ごっこ、ですか？」

「ふふ……ええ、そうですリリカさん。ユユは、貴女たちと鬼ごっこをしようかと思っっているのです……」

クリエイトミッション、極圏鬼ごっこ。

その開始地点はデイメンション・トワイライトの北欧エリアであり、都市部の複雑な地形を利用した鬼ごっこを制限時間内に完遂する——ユユの機体に一撃でも触れられたら「アナザーテイルズ」の勝ち、制限時間いっぱいまで逃げ切られたならユユの勝ち、といった極めてシンプルなものだ。



とはいえ、ユユが二桁ランカーである以上、そう簡単に捕まってくれるはずもない。

それを示すように、この鬼ごっこにおいては武器の使用に一切の制限がかかっていないのだ。

「このルール……貴女にとって不利ではありませんこと？」

「ふふ……そこはそれ、ユユも全力で捕まらないように逃げるつもりなので、ご心配なく……」

極論、Cファンネルの先つちよが掠っただけでも負けになるという意味ではこのクリエイトミッションにおいて不利を被っているのは、カエデの言葉通りにユユの側であるように見える。

だが、相手は二桁ランカーだ。

それが妥協せず、そして全力で逃げ回ることを選んだのであれば、捕まえるための労苦は想像を超えるものになることは火を見るより明らかである。

受けるか、受けないか。

試すように、リリカへとミワの、カエデの、そしてユユの視線が向けられる。

だが——リリカにとってそのミッションは、願ってもないような提案だった。

元々放課後の延長線上として始めたGBNだ。

何せぼっち歴の長いリリカにとって、放課後に友達と鬼ごっこや缶蹴りをして遊んだりといったことは長らく縁がなく、一人で家に帰っていつもテレビを見ていたか、スマートフォンを弄っていたのが日常だった。

だから、形は違うとはいえ、実力に開きがあるとはいえ、こういうミッションを受注して全力で遊ぶというのも悪くはないんじゃないかと、そんなことを思ってしまうのだ。

「……わ、私……」

「リリカちゃん？」

「……私、このミッションを受けようかな、って、そう思うんです……」  
身勝手かもしれない。そして、リアルと切り分けられて考えられる

仮想郷に現実での都合を持ち込むことほど無粋なことはないのかもしれない。

それでもリリカは、自分の経験したことのない甘酸っぱくも愛おしい時間を求めずにはいられなかったのだ。

おずおずと小さく手を挙げて宣言するリリカは、がくがくと怯えていた。

だが——リリカの判断に、異を唱える人間は、ここに誰一人として存在していなかった。

「リリカさんが決めたことであれば、わたくしはそれを尊重いたしますわ」

「然り然り、ミワちゃんも右に同じだよお」

「お姉ちゃん……カエデさん……」

元々ミワにとつても、そしてカエデにとつても、リリカが決めたことであるのならよっぽど無茶なことでない限りは異論を挟むつもりはなかったし、何よりこのフォースのリーダーはリリカだと決めている、そんな彼女が下した決断であれば、ついていくのが筋というものだろう。

あたたかい視線をリリカに送る二人から背中を押してもらった心地で、リリカはユユに提示されたクリエイトミッシヨンの受注を承諾する。

「……よ、よろしくお願いします……ユユさん……」

「ふふ……こちらこそ、互いに全力で楽しみましょう、リリカさん……」

——絶対王者「パロツツ・パーティー」を破った時のあの輝き、期待しています。

それだけ言い残すと、ユユは踵を返してしずしずと雑踏に溶け込んで消えていく。

二桁ランカーとの鬼ごっこ。

考えてみれば正気の沙汰ではないのかもしれないが、そんなめっちゃくちやであったとしても全力で楽しみたいというのが、ユユにとつても、そしてリリカにとつても偽らざる本音である以上、それは遊びで

ありながら、一つの戦いになる。

「なんだか、童心に帰った心地ですわね」

「うむうむ、小学校以来だねえ」

遊びだというのにプライドをかけて戦っていた時代のことをミワとカエデは思い出し、そしてリリカは初めて臨むその戦いと、初めて胸の内に芽生えてきた言い表せないような高揚感に包まれた心地で——三者三様に、その顔に笑みを綻ばせるのだった。



ユユから指定された「鬼ごっこ」の日時にはだいぶ余裕があった。と、いうのも、流石に二桁ランカーを相手にしていきなりぶっつけ本番で鬼ごっこを始めましょうというのも気が咎めると、その言動の不思議ちゃん加減や普段の行動からは想像がつかないほど筋が通った理由でユユは期日を長めに設定していたのだが、それについて「アナザーテイルズ」三人組が知る余地はないので割愛するとしても、練習が必要だ、というのはリリカたち三人の間で一致する意見に違いない。

追う側と追われる側、そしてデイメンション・トワイライトという普段は行き交うダイバーたちから名前も出されないような不人気デイメンションの地形について把握する時間が欲しいということ、リリカたちは練習も兼ねて、いくつかのミツションに挑んでいた。

上空からのビームライフルによる攻撃が、護衛対象である装甲車と、そして随伴機としてNPDが操縦しているジェガンD型（護衛隊仕様）に向けて放たれ、その光が地面を穿つ。

今リリカたちが挑んでいるミツションは「不死鳥狩り狩り」——映像作品「機動戦士ガンダムNT」の序盤で、マーサ・ビスト・カーバインが搭乗している装甲車を護衛するというものだ。

本来であれば主人公であるヨナ・バシユタたちがマーサを捕まえてフェネクスについての情報を引き出すのが正史である場面だが、こう

いう歴史にイフという形で介入することができるのも、GBNにおける強みや面白さの一因だろう。

だが、このミッションがそうしたミッションの数々と一味違うのは、自分たちの乗機もデータが用意されたジエガンD型（護衛隊仕様）に固定されるというものだった。

「おおー、始まつちやったねえ……」

「スラスターの感覚が違うだけで、こうも操作に手こずらされるとは……！」

「わ、わわ……姿勢制御、姿勢制御……！」

このミッション、推奨ランクがA以上とされていることもあって、敵対しているルオ商会のデিজエ三機に設定された思考ルーチンは原作に近いか、もしくはプレイヤーが介入するためにそれ以上に設定されている。

あつという間に有利であるはずの空中戦で、ジエガンとアツシマーの子ともいえる機体、「アंकシヤ」を解体した灰色のデিজエは、次はお前たちだとばかりに地上へと降下して、ビームライフルを放った。

原作ではマーサに死なれては困るために装甲車が直接狙われることはないのだが、そこはそれ、これはあくまでミッションであるために、勝利条件であるマーサの装甲車が作戦エリアへと到達することを防ぐために、NPDのヨナやミシエルが搭乗しているデিজエは割と容赦ない攻撃を仕掛けてくる。

「リリカちゃんリリカちゃん、とりあえずは密林に誘導するよお、装甲車が逃げやすい地形に入れないとやられちゃう……！」

「う、うん、お姉ちゃん……！」

リリカたちが追う側ではなく追われる側のミッションを受注しているのは、追われる側がどのように考えて動くかをシミュレートするためだ。

実際のところ効果があるかどうかは微妙なのだが、単純に「鬼ごっこ」のようなミッション自体がGBNを探しても珍しかったのと、逃げるNPDを撃墜するミッションはこの「不死鳥狩り狩り」の前に、

「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」の第二次オーブ攻防戦のシチュエーションを再現した「さだめの翼」で経験しているためでもある。

それでもないよりはマシだとばかりに、真っ先にジェガンD型の操作に慣熟したミワが、囷になるように敢えて突出して、三機雁首を揃えたデイジエの連携を分断するように保持しているサブマシンガンを連射する。

普段はサイドアームとして利用していたサブマシンガンではあるが、流石にメインの得物として使っているスナイパーライフルとは別物である以上、流石のミワでも正射必中とはいかない。

だが、攪乱ができているならそれで十分だ。

一人で受けるならクソゲーと名高いこの「不死鳥狩り狩り」だが、三人のチームで受けるのならば、その分やられるだけの味方NPDが少なくなるためにとっかかりやすい。

それを示すかのように、操作に慣れてきたカエデがミワの射撃を受けたデイジエの一機へと斬りかかり、更にカエデを囷とする形でその背後に回り込んだリリカがコックピットへとビームサーベルを突き立てることで、スリーマンセルによる確実な撃破を試みる。

『味方がやられた!? くっ……』

『待ちなさい、ヨナ!』

三機いた内のデイジエが沈黙させられたことよって焦りを見せた、ヨナ・バシユタの思考を再現したとされるNPDは焦ったかのようになり、後退していくリリカたちを追って、標準的なMSの武装では取り回しが悪い密林へと飛び込んでいく。

それをまずいと、ミシエル・ルオの思考を再現したとされているNPDもまたヨナを追いかける形で密林へと踏み込んでいくが、装甲車をそこまで逃がせていた時点で、このミッションにおけるリリカたちの勝利は決まったようなものだった。

デイジエの武装はビームライフルとビームナギナタという、迂闊に密林という地形で使用したのであれば周囲に被害を及ぼしかねないものだ。

かつナギナタに関しては元々の取り回しの悪さも相まって、密林戦で使えるものではないのだが、それでも焦りを優先して密林へと単騎で突出してきた辺りはNPDとはいえ人間らしい思考ルーチンが設定されているといえるだろう。

しかし、いつてしまえば台無しなのではあるが、スリーマンセルを組んでの各個撃破という選択肢をNPDが選ばなかったのは致命的なミスだったといえよう。

装甲車の進行速度は決して速いものではない。

その間にリリカたちを片付けてから全力で追いかければ間に合う範囲のもののだが、ヨナのNPDは焦りによってそこまで考えが至らなかったようだ。

機体が違ってもやることそのものは同じだ。

「えいつ……！」

ビームナギナタを引き抜こうとするヨナ機の一瞬の隙を突く形でリリカはフラッシュ・グレネードを投擲して目眩しとする。

『なっ……目眩しか、クソッ！』

『ごめんねごめんねえ、悪いけど……終わらせてもらおうよお！』

『ヨナー！』

「貴女の相手はわたくしでしてよ、ミシエル嬢！」

そして、救援に入ろうとしたミシエルのデイジエの眼前にカエデが相打ち覚悟で躍り出た時点で、このミッションにおける趨勢は完全に決定されたといってもいい。

ミワのジェガンD型が目眩しの直撃を受けたことでガラ空きになったメインカメラとコックピットを兼ねたヨナ機の頭部をビームサーベルで突き刺して、カエデはミシエルにナギナタで右腕を切り捨てられたものの、後に控えていたリリカが全力で機体を跳躍させて、死角からサブマシンガンを連射する形で、左肩にサーチライトをつけたミシエル機も撃墜していく。

「か、勝った……？」

敵の全滅は勝利条件に含まれていないため、装甲車が作戦エリアから離脱するのを待たなければならないのだが、リリカは小さく息をつ

く。

「今回みたいに追われる側に有利な地形に逃げ込まれたらまずい、つてことだねえ」

「そうですね、あとはスリーマンセル……わたくしたちが唯一保持している数の優位を活かさなければ、『二桁の魔物』を捕まえることなど夢のまた夢、ということですね」

装甲車を示すレーダー上の青い点が作戦エリアの端に重なったのを確認しつつ、カエデは損傷した機体を立て直して、今回のミッションを総括した。

確かにこれは鬼ごっことは違うものの、得られるものはあったということだ。

【Mission Success!】

リリカは久しぶりに聞いた気がするミッション成功を示す電子音声を聞き届けながら目を伏せる。

確かに準備は万端、とはいえないかもしれない。

それでも、よかった、と、脳裏にミワとカエデの笑顔を浮かべ、リリカは静かに、微かにそう呟くのだった。

## 第五十話 「バース・オブ・ニユークイーン（前）」

ユユから提案された「鬼ごっこ」の期日は確実に迫り、その間にもリリカたちは鬼ごっこそのものではなくとも、チエイスフェーズが入る護衛ミッションや侵攻ミッションを数多くこなすことで、その予行演習としていた。

「とりあえずわかったことといたしましては、デイメンション・トワイライトの極圏ドームポリスエリアで鬼ごっこをする場合、厄介なのは建物の数ですわね」

ロイヤルミルクティーを啜りながら、今までこなしてきたミッションや、下見の結果を総括してカエデは静かに肩を竦める。

護衛ミッションがあまり好まれていない理由は、今はある程度改善されてこそいるものの、NPDの思考ルーチンがあまり賢くなかった時代に、追っ手を掻い潜りながら更に頭がよろしくないNPDを護衛しなければならぬ、という、どこぞの日曜日のたわけを彷彿とさせる状況が頻発していたからに他ならない。

ただそれは、裏返してみるなら、プレイヤー同士の戦いと同一視はできないものの、チエイスフェーズにおけるアドバンテージは、何かを守りながら、つまり制約を抱えながら立ち回らなければいけない逃げる側にあるのではなく、むしろ追う側にある、ということだ。

「うんうん、そうだねえ……っていつても、相手は『二桁の魔物』なんだから、そう上手く事が運ぶわけではないって、ミワは思うかなあ」「ええ、その辺りは重々承知しておりますわ」

そこでカエデが考案したのが、ローリングバスターライフルによって都市部を焼け野原に変えてから追いかけてくるといって、開幕ぶっぱに近い戦術だったのだが、提案したカエデ自身もミワからの意見に渋い顔をしている通り、これは一か八かの賭けでしかない。

ユユが提示してきたクリエイティブミッションにおいて一番厄介なところは、逃げる側であるユユの発砲もまた禁じられていないということだ。

彼女についての情報は幸い、掲示板を漁れば嫌というほど出てきた



のだが、そのどれもが絶望的に感じられるほどに「二桁の魔物」は伊達ではないといった風情であり、例えどれほど追う側が有利であつても、勝てる気がしないというのがリリカたちにとって正直なところだった。

「……で、でも……開幕の一発を防げるなら……」

「そうですね、リリカさんのフルブランシュ……Cファンネルをわたくしの護衛に回してしまうという痛手はありますけれど、想定する作戦の遂行に光明は見えてきますわね」

そこでリリカが考えたのは、ローリングバスターライフル作戦を成功させるために、開幕で全てのCファンネルをカエデの護衛へと回して、想定されるユユからのカウンターを防ぐことで一発狙いと、そして少なくとも都市圏の建物を薙ぎ倒すことだけは完遂させるという作戦だ。

ユユが操る機体——G—セルフを基に大幅な改良が施された「G—イデア」は、ミワのように狙撃に特化していたり、カエデのように極端な大火力兵装を持っているわけではない。

奇しくも白と黒というツガンダムをイメージさせる、リリカのフルブランシュと真逆の配色でありながらも、その機体コンセプトは大きく似通っている。

即ち、単機でできることの幅を広げた汎用機。

コンセプトが被っているともいえるが、どちらかといえば前線の中衛を務めることが多いリリカのスタイルとは異なつて、ゴリゴリと前衛を務めていくのがユユというダイバーの特徴らしい。

少なくとも、こと「鬼ごっこ」において真正面からぶつかり合うのよりは幾分かマシ、といったところだろう。

「うんうん、リリカちゃん、それはぐつどだよお」

「ほ、本当、お姉ちゃん……」

「この戦いでミワたちに勝ちの目があるなら、機動力勝負に持ち込むこと……つまりカエデさんとリリカちゃんが追っかけて、ミワが出来るならその隙を突いてずどーん……って感じになるかなあ」

勿論それが理想論であるということはミワも理解している。

ただ、消極的だったりリリカが自発的に作戦を考えてくれたという事実が嬉しいやら、ちよつとだけ複雑なのやらで、胸の奥をあたたかな綿でそつと締め付けられるような気持ちになるだけだ。

きつと人はそれを成長と呼んだりするのだろうか、と、思考の片隅にそんな言葉を描いて、ミワは喜びの裏にちよつとだけ隠れている痛みを覆い隠すかのように、にへら、と頬を緩める。

「確かに相手は二桁の魔物、わたくしたちが一撃触れるだけでいいとはいえ、勝てる可能性は薄いといつていいですわ、ですが」

「で、ですが……？」

「目一杯楽しむのですわ、結局のところこの精神がなければ何事もつまらなくなつてしまいますもの！」

さらりと金髪を掻き上げながら、カエデはあーっはっは、と豪胆に笑つてみせる。

命知らずなのか、或いはそういう不利な状況でこそ燃える性分なのか、リリカとミワには測りかねる部分こそあつても、カエデの言葉は紛うことなき正論だ。

リリカが今まで辿つてきた各種クソゲー遍歴を思えば、そこにあるのは涙涙の屍山血河であつたが、逆にいえばそのクソゲー歴があつたからこそ、GBNでその殺された回数分の経験が生きていて、今があるのだ。

ならば、勝つたとしても負けたとしても、「二桁の魔物」に挑んだ経験というのは決して無駄になるものではない。

カエデの言葉に背中を押されたように、リリカもまたミワと同じようににへら、と口元を綻ばせつつ、鬼ごつこの舞台となるデイメンション・トワイライト、極圏ドームポリスエリアのマップを確認する。

極圏ドームポリスエリアは、元々このGBNにデフォルトで存在していたものではない。

ある事件を経て、白夜が彩るデイメンション・トワイライトと対になるデイメンション……決して夜が明けることのない、デイメンション・シユバルツバルトにおいて行われていた非法のレースイベント、「バンデット・レース」が公式化されたことによつて、その練習場

兼、元々野試合として行われていたそれを楽しみたい人々のために、舞台となつたハイウインド・エリアをコピペしたものがそれなのだ。

だからこそ、ドームポリスの中は沈まない太陽が照らすディメンション・トワイライトにあつて唯一例外的に真夜中に設定され、人工の光が瞬き続けているし、都市の構造もそっくりそのまま、以前に「パロツツ・パーティー」と戦つた時と同じなのである。

恐らく勝負は、高速道路で展開される可能性も考えられるだろう。

ユユは「パロツツ・パーティー」との戦いを見て、「アナザーテイルズ」に興味を持ったと言つていた。

ならば、その再現として都市部からのスタートではなくハイウェイで純粹な鬼ごっことなる、という読みも考慮しておかなければいけない。

考える事が多すぎて頭がパンクしそうになるが、リリカのやるべきことは一つだ。

「……私は、近接支援として、その……カエデさんの護衛と……ユユさんを追いかけて……」

「わたくしは開幕が都市部ならローリングバスターライフルで薙ぎ払ってから、リリカさんと協力してユユさんを追い詰めて」

「最後の最後に隙を突いてミワがずどーん、って感じだねえ」

最終的に辿り着いた結論は同じでも、考えを深めるために話し合つた価値はある。

飴玉でできた鈴を鳴らしたような声が聞こえたのは、リリカたちがカフェブースの代金支払いを終えて、そのままディメンション・トワイライトへの転移を行おうとしたその瞬間だった。

「ごきげんよう、ふふ……『アナザーテイルズ』の皆さん」

「……ご、ごきげんよう、です……ユユさん……？」

「ええ、ユユはユユです……ふふ、始まるまでちよつとだけお散歩をしていたのですけれど、奇遇ですね……」

ユユは口元を振り袖で覆いながら妖艶に笑う。

魔女、という言葉が一瞬リリカの脳裏をよぎつたが、恐らくユユの年頃は、ダイバールックがそのままリアルでの外見を元になっているの

であれば自分と同じぐらいだろう。

それにしても蠱惑的な、思わずくらりとしてしまうような艶やかさをその所作から醸し出しているのも、彼女が謎めいた存在として一部のファンから熱狂的な支持を得ている証なのかもしれない。

「その様子だと……作戦会議は終わったといったところですね、ふふ」「ええ、これから貴女に勝つための作戦を考え終えたところですよわ!」「まあ、勇ましい……ふふ、黙して語らないのもまた作戦、あえて宣言するのもまた作戦……ユユにどんなものを見せてくれるのか、楽しみにしていますね……」

くすくすと、最後まで余裕の感じられる笑みを崩さないまま、ユユは一足先にクリエイトミツシヨンの舞台となる、デイメンシヨン・トワイライトへと転移していく。

余裕綽々といった風情だが、馬鹿にしているというよりは、純粋な好奇心がそうさせているのだろう。

その妖艶さに惑わされてしまいそうになるが、ユユが持つ黒曜石の瞳の奥にある輝きはどこまでも純粋で、プリミティブなものであると、リリカにはそう感じられた。

理由はない直感が根拠ではあるのだが、恐らくユユもまた、「楽しみたいくて」この鬼ごっこを提案してきたのだろう。

それを信じるのであれば、リリカの胸に憂いは残らなかった。

「リリカちゃん?」

「……え、えつと……私たちも、全力で、楽しもうね、って……えへへ」

「……そっかそっかあ、ミワも、張り切って楽しまないとねえ」

ふにやりとはにかんでそう提案してくるリリカの姿は、以前の妹からは想像もつかないほど前向きで、ポジティブな感情に満たされている。

別にネガティブである事が悪い事だとはミワも思っていない。

だが、親の見ぬ間に子は育つ、という先人の言葉がある通り、姉の見ていない間にも、妹は成長して——少しずつ、俯いていたその視線が上がついていったのだろう。

充足と、背反する一抹の寂しさを感じながら、ミワもまたユユの後

を追うようにして、デイメンション・トワイライトへと転移していく。「リリカさんとミワさんの言う通りですわ！ さて……わたくしも頑張りましたよ！」

「お、おーっ……！」

ミワに続く形で転移していくカエデの意気込みに追従する形で、控えめな鬨の声を上げ、リリカも決戦の舞台へと飛び込んでいく。相手は「二桁の魔物」と呼ばれる恐ろしい存在かもしれない。

それでも、ミワとカエデが一緒なら楽しめる。

そんな確信を抱きながら、リリカの躯体と意識は解けて、一日中太陽が照らし続ける極圏にあつて、終わらない夜に閉ざされている地へと再構築されていくのだった。



白夜のデイメンションにコピーアンドペーストで作成されたメガロポリスの虚飾は、毒々しいほどに極彩色の輝きを仮想の都市に映している。

クリエイトミッション、「極圏鬼ごっこ」。

ユユが提示したそのミッションは予想に違わず、この極圏ドームポリスエリア全域を作戦区域として、制限時間三十分以内にユユへと攻撃を一発でも当てれば「アナザーテイルズ」の勝利、逆に捕まえられないか全滅させられるかすればユユの勝利という、極めてわかりやすいものだった。

『では、追跡側の貴女たちは……三十カウントが終わった後にお願いたしますね、ふふ……』

「わ、わかりました……」

その辺りはどうやら普通の鬼ごっこと大差ないらしい。

三十秒もあれば、ユユの機体はステルス系を積んでいるシーカー構築ではないとはいえ、この乱立するビル群や或いは高速道路のどこかを盾にして隠れるか、隠れないにしても大きく距離を離すことはできるだろう。

最初の三十秒間は、ユユも攻撃が禁じられる。

高鳴る鼓動を抑えつつ、リリカは想定した作戦を思い描く。

「大丈夫、やれる……頑張ろう、フルブランシュ……！」

開幕ぶっぱは一般的には愚策だとされているが、それでも戦術として多くの人間がその存在を頭に入れていのように、有用に働く場面もあるということだ。

残り十、九、八、七——カウントダウンを刻むと同時に操縦桿のトリガーを操作して、リリカは武装のカーソルをCファンネルへと合わせて、開幕を待つ。

『五、四、三、にい、いち——』

「リリカさん！」

「……わ、わかりました、お願いします、カエデさん！」

カウントがゼロになると同時に、リリカは全てのCファンネルをパージして、カエデのウイングゼロヌーベルを包み込むように射出する。

結論からいってしまえば、リリカの読みは的確なものだった。

ユユは自分が潜伏している位置がバレるのも厭わずに姿を現し、愛機であるG—イデアが手にしていたビームライフルのトリガーを引く。

「な……ッ、IFBRですの!?!」

「ふふ……よく、気付きましたね……貴女の言う通り、ユユのライフルはifsシステムを組み込んでいます……うふふ」

迸る閃光は、最早ビームという領域に止まるものではなかった。

IFフィールドを共振させて、力場そのものを指向性のエネルギーとして射出する——IFBDと呼ばれる、∀ガンダムに出てくる技術を応用して搭載したそれは、ビームでありながらビームではない、というんだか頭がこんがらかってきそうな属性わけがなされているが、要はビームコートやナノラミネートアーマーでは防げない、ということだ。

——だが。

リリカの射出したCファンネルは、飛来するIFフィールドの奔流を

全て切断するように受け止めていた。

『防がれる……う？　ふふ、うふふ……それでこそです、「アナザーティルズ」……!』

Cファンネルは元より、バリア属性を自機だけでなく僚機にも付与することができる特性を持っている。

それにリリカが施した、シングルブレイドと同様の加工——ヨノモリ塗料というメーカーから発売されている対ビームコーティングトップコート吹き付け、それを番手の細かいペーパーで均して更にオーバークートする、いわゆる「研ぎ出し」と呼ばれる工作がなされていることで、力場やビームの類に対する耐性が、素組みのそれと比べて圧倒的に上昇しているのだ。

「自分から位置をバラしてくれるのはありがたいねえ……カエデさん！」

「了解ですわ、ミワさん、リリカさん！　さあ……このカエデ・リーリエ、全て薙ぎ払ってみせるのですわああああっ！」

裂帛の気合を込めて叫ぶと同時に、IFBRの一撃をCファンネルのガードがあるとはいえもろに浴びながら、カエデは両手に保持していたツインバスターライフルを最大出力で照射し、そして、ファイギュアスケートの選手が如く、爪先立ちになつて機体をくるくると回転させる。

子供がよく花火を持った手を振り回して怒られるのと同じように、高い火力を持つ武器を持ったまま機体を回転させれば、周囲はどうなるのか。

その問いに対して答えを求める必要はない。

メガロポリスを構築しているビル群が砕けて、崩れて、壊れていく——穿たれた破壊の爪痕こそが、なによりも雄弁に全てを物語っているのだから。

ユユは間一髪で機体を上昇させることでローリングバスターライフルの一撃から逃れ、そして隙を見てミワが放っていた銃弾を、左手に装備していたシングルシールド・レプリカで弾き返すという芸当を見せていた。

『隠れる場所を全て薙ぎ払う……ふふ、確かに理に適った攻撃です、ふふ……』

——最初から、面白いものを見せてくれる。

アナザーテイルズの打った一手に驚愕と、そして喜悦を隠せず、ユユはCファンネルのほぼ全てを融解させながらも、毅然として自身を見据えている白輝のガンダム、リリカのフルブランシユを見据えて、くすくすと、妖艶な笑みを浮かべるのだった。



## 第五十一話 「バース・オブ・ニュークイーン（後）」

先手を切ったりリリカたちであったが、隠れる場所がなくなるというのはそれ即ち、二桁ランカーを相手にガチでの勝負を挑まなければならないということであり、状況そのものが好転しているわけではない。

ただ、逃げ隠れをしながらじわじわとやられるぐらいなら、相手に一撃当てれば良いのだから超短期決戦で片をつけてしまおう、というのがリリカたちの魂胆であり、最初から持久戦を挑もうという選択肢は排除しているのだ。

『ふふ……手の鳴る方へ、と楽しみたいところでしたが、これも一つの戦術……』

「感謝いたしますわりリリカさん！ あとは……一撃当てるだけなのですわー！」

『まあ、勇ましい……ですがそう簡単にやられたとあつてはユユも一角の戦士としての名が廃ります……なので』

——全力で攻撃しながら逃げさせていただきます。

ユユは妖艶に微笑みながらそう宣言すると、バックパックに装備されている青いクリアパーツ、フォトン・ファンネルを分離させ、突出したカエデの機体を切り刻むべく、全方位からその機体を取り囲んだ。

「なんの……っ！」

紙一重でこそあつたものの、恐ろしい攻撃の精度とファンネルの操作に驚愕しながら、カエデはなんとか、偏った推力による変則的なマニューバと、そしてリリカが残っていたCファンネルによって、間一髪といったところで危機を逃れていた。

だが、フォトン・ファンネルをユユが射出したのは、それ単体を必殺としているためではない。

G―セルフをベースとしながら、ビギニング30ガンダムと、そしてリリカと同じガンダムAGE―FXをミキシングしたことによって、G―イデアが獲得したものは、突き詰めた汎用性だけではない。

「カエデさん……！」

リリカは攻撃が来ることを前提にした上で、両機の間割り込むようにドツズライフルを連射したが、結果から言ってしまうとそれはあまり意味をなさなかった。

『i f s プロロージョン、フルドライブ……！』

ユユが切った手札は極めて単純明快なものだ。

時限強化、リリカのフルブランチュに搭載されているのと同様のシステムもGーイデアは詰め込んでいる。

それはi f s ユニットを全力稼働させることによって、Iフィールドの乱流とでもいうべきものを機体に纏わせるだけではなく、I F B Dによる推進力も強化することで、攻撃、防御、速度、その全てを高次元に押し上げるといふ必殺技だった。

大人気ない、とりりカたちが眩く間もなく、ユユはIフィールドの乱流による攻撃判定を利用して、カエデのウイングゼロヌーベルを破壊させるべく、急接近する。

「ゼロシステム！ わたくしに力を貸しなさいな！」

だが、ここで二桁の魔物が相手であろうと食い下がり、決して諦めることはないのが、カエデという女傑だった。

ゼロシステムをフィールドが接触する数秒前に起動し、突撃からの誘導を切って、カエデは機体に搭載されているマシンキャノンを連射する。

ガンダムについてはカエデもまたリリカと同じようにそこまで詳しくはなかったものの、Iフィールドがビームを弾く装備であることは知っていた。

故にこそ実弾兵装の連射による迎撃を選んだのだが、I F B Dによつて生成されるIフィールドは、最早斥力場といつてもいいほどのエネルギー密度を保っている。

この戦いの勝敗を決める「被弾」の定義はあくまでも機体に対してダメージ判定が入ったかどうかだけで決まるものだ。

並のガンプラであったなら、重装甲の上からであったとしてもズタズタに引き裂くことができるウイングゼロヌーベルのマシンキャノ

ンを全てIフィールドの乱流によって弾き返しながら、ユユはその口元に妖艶な、しかし捕食者としての獰猛な気配を覗かせる笑みを浮かべて、肘部分のユニットから「何か」を分離させる。

「……っ、リリカちゃん、カエデさん、何か来るよぉ！」

——危ない。

どこまでもシンプルに、GBNという魔境を戦い抜いてきた経験がミワに直感としてその脅威を伝える。

観測機として飛ばしていたインコムから「それ」が分離した地点をデータとして受けとると、位置が割れることも覚悟した上でミワは、徹甲弾によってG-イデアから分離したユニットの一つを撃ち落とす。

だが、一つだけだ。

機体の肘部分から分離したユニットの正体は、果たして対刃式のビームサーベルであり、そしてユユがビギニング30ガンダムをミキシングの素材として組み込んだことにより、ファンネルとして操作できる特性を持ったものだった。

『イブリース……！』

全てを引き裂く鉄棘の生えた車輪が回るか、そうでなければ終末をもたらす剣が回るか、そのどちらであつても違いなどそこにはない。

ユユが狙っていたのは誘導を切っているカエデではなく、そのバツクアツプに回っているリリカの方だった。

避けられるものなら避けてみるとばかりに、ランダムな軌道を描いて襲い掛かってくる暁の車輪を、リリカは歯を食いしばりながらもなんとか展開した腕部のビームサーベルで斜めに受け止め、衝撃を逸らすという方向でその危機を切り抜ける。

ミワが一基を撃ち落としてくれていなければ死んでいた。

その確信がぞくり、と恐怖となつてリリカの背筋を伝う。

そしてユユからすれば、真正面から馬鹿正直に戦つてやるメリットなどどこにもない。

ひらりひらりと、風に舞う蝶が羽ばたくがごとく、距離を詰めようと爆進するカエデを近付かせないように牽制し、そして射線から位置

を読んだミワに対してはIFBRによる攻撃を加え、弾き返されただけでまだ生きているサーベル・ファンネルには再びリリカを強襲させる。

羅列しているだけで頭の痛くなってくるようなタスクを、さも当然のようにこなしている辺りが、やはりユユをこの二千万人という膨大なアクティブユーザーを抱える中で、その二桁という順位に留まらせている所以なのだろう。

瓦礫の廃墟と化したドームポリスの空を銀盤にして、Gの形象はどこまでも美しく、そして苛烈に挑戦者を翻弄しながら舞い続ける。

短期決戦で片をつけようとしていた「アナザーテイルズ」を嘲笑うのではなく、もつと本気を見せてみるとばかりにユユもまた逃げ回りながらも、ゼロシステムと推進力の複合により誘導を切って突撃してくるカエデをいなし、クリアインコムを展開しているミワの狙撃を神がかった察知によって回避、そして一番連携の要となるリリカへと、無慈悲にIFBRの閃光を放つ。

「……………う……………つ……………」

残存しているCファンネルを集合させて、なんとかIFBRからの一撃から機体を守り切ったリリカではあったが、その状況は依然として好転しているわけではない。

じわり、と滲む冷や汗は恐れが故なのか、焦りが故なのか。

それさえも曖昧になるほど、いや——そのどちらもが正解となるからこそ、目の前にいるユユは、「二桁の魔物」として恐れられているのだ。

全ての攻撃が必殺技級の脅威を持つて降り注ぐのであれば、耐久戦という状況に追い込まれている時点で、リリカたちはじりじりと敗北に向けて押しやられている。

IFBRは防ぎ切ったとしてもその余波だけで機体に大きくダメージを与えているし、何よりミワが厄介だと踏んだのか、再び生成されたフォトン・ファンネルは得物であるツダの対艦ライフルを守りきらなければいけないというハンデを背負っているミワを露骨に狙って、狙撃を事実上封印させていた。

詰め、という言葉が不意にリリカの脳裏を過ぎる。

だけど、ダメだ。ここで諦めてしまつては、ミワに、カエデに、そしてフルブランシュに申し訳が立たない！

リリカはじわり、と眦に滲む涙を拭うと、次の策に打つて出るべく操縦桿を操作して、武装スロットの欄から「それ」にカーソルを合わせた。

『ふふ……ユユは追う側ではなく追われる側、しかし、窮鼠猫を噛むという通り……一筋縄で捕まる訳にはいかないのです』

それでもどこか自分が捕まることを期待しているかのように、ユユは妖艶な微笑みを崩さずに、しかしその眼光にはどこまでも鋭く研ぎ澄まされた剣のような覇気を宿して、リリカたちへと語りかけてくる。

ならば、お望みどおりにしてやろう。

リリカの中に微かに芽生えていた反骨心がそう嘯く。

だが、それにただ身を委ねてしまうのではなんの意味もない。

心はどれだけ熱く滾っていたとしても、頭脳だけは冷静でいなければならぬ。

それはドライバーとしての詠み人知らずな心得であり、あらゆる出来事におけるプレイヤーとしての定石であったが、土壇場で思い出せるかどうか勝敗を分かつといてもいいだろう。

切り札を切ることができるならば、一欠片のチャンスは手にする機会が巡ってくる。

しかし、雑に切つてしまつては、エースカードであつたとしても、それは並の手札と変わらないものに成り下がる。

通信ウィンドウにポップしたカエデの横顔が微かな陰しさを帯びたかと思えば、リリカの瞳に映り込んだ「決意」を察して、その細くしなやかな指先を操縦桿へとそつと這わせていく。

「リリカさん」

「……カエデさん……？」

「貴女の決意、確かに受け取りましたわ！ ならば、水先案内人はこのわたくしが務めさせて頂きますわ！」

カエデの機体構成は、いつてしまえば純アタッカーでしかない。

リリカがブランシユを使っていた頃は、タンク役を担うために前に出ることも多かったが、ウイングゼロヌーベルの本質は、トリツキーマニニューバを活かして敵との距離を詰めた上で必殺の一撃を叩き込むというものだ。

だが、だからこそ、こういったチェイスシーンにおいて、これといった役割を持ってないからこそ、多芸をビルド構築の方針に掲げたリリカが作り出そうとしているチャンスへの水先案内人となるには最適なのだ。

どこまでも合理的な判断を、勝利のためではなく、決意を固めた瞳を持つ、いうなれば自分が惚れ込んだリリカのため、という非合理的な理由で下す己の矛盾に苦笑しながらも、カエデはウイングゼロヌーベルのスラスターを全開にして、その手札を——必殺技を切ることを選ぶ。

「さあ、っ照覧あれといったところですよわね！　これがわたくしの必殺技……『シユーツィング・ミーティア』なのですわ！」

シユーツィング・ミーティア。

それはどこまでも単純で、そしてGBNにおいてはメジャーな、突撃系の必殺技に他ならない。

ゼロシステムの残光を纏いながら、地上に新たなる星座を刻み込むような急速マニニューバでカエデはユユのGーイデアへと向けてシザーソードを構え、一心不乱に突撃していく。

この突撃系の必殺技は、それこそ「リビルドガールズ」のアイカであるとか、「FOEさん」ことキョウスケであるとか有名なダイバーが使っているそれと特徴をほとんど同じとするが、一つだけ違うことがあるとすれば、ゼロシステムと併用できることだろう。

真正面から突っ込み、そして突っ切っていく都合上、誘導を切っていたとしても正面方向からの迎撃に弱いという弱点は抱えてこそいるものの、接近するまでの間に、ミサイル類程度の誘導であれば切つて、容易く張り切れることこそが、「シユーツィング・ミーティア」の最大の強みであるといつていい。

そして、カエデは i f s プロージョン・フルドライブという強固な鎧に守られているGーイデアが相手では、自分の一撃が通用しないということなど全て承知の上だった。

シザーソードを構えて一心不乱に突撃するカエデに対して、ユユが何を思ったのかはわからない。

侮蔑なのか喜悦なのか、失望なのか歓喜なのか——妖艶な微笑みからそれを窺い知ることはできなくとも、カエデは、そして、ポップした通信ウインドウに映っているユユは、双方ともに不敵な笑みを浮かべ、そして両者の必殺技が激突する。

矛と盾がぶつかり合った場合、大きく優位を取るのは矛の方であると、時代の流れはそれを幾度も突きつけてきた。

それでも、盾が勝っていた事例があつたように、高密度で吹き荒れるIフィールドの乱流を一点に収束させたその盾に、カエデが繰り出した渾身の一撃は防御され、シザーソードの刃はあえなくへし折れていた。

二桁の魔物と呼ばれるだけあつて、その実力は本物だということだろう。

カエデは思わず滲んできた悔しさに歯噛みするものの、この戦いはただ、相手を倒せばいいというものではない。

時間にして十数秒という僅かな時間だったかもしれない。

Gーイデアの頭部から放たれるフォトン・バルカンによって機体を引き裂かれながらも、カエデは「ごしごしと眈に浮かんできた涙を拭いて、その瞬間を、ずっと待っていたその一欠片を手につかんだことを見届ける。

「……頼みましたわ、リリカさん！ ミワさん！」

「……ブランチユアクセル、フルブースト！」

「了解了解だよお！ これでえ……っ！」

フォトンの光弾によって機体をズタズタに引き裂かれ、地面へと落下していきながらも、カエデは確かにその役割を全うして、勝利へと続く光明を、そのバトンをリリカたちへと繋いでいた。

文字通り、ここで目論見が潰えたのならば負けになる。

リリカは小さく深呼吸をして、荒らいだ息を整えながら、フルブランシユに生まれ変わったことによってその特性を大きく変えた必殺技を始動させた。

今までは余剰出力と排熱の処理が課題であったものの、AGE―FXをベースとして、FXバーストを組み込むことによって、ブランシユにおいては行き場がなかった余剰出力と、熱を外に逃がすことに成功したものの、モーションの倍速化という特徴はあくまでも二倍速までに制限されるのが、新たなるブランシユアクセルの姿だった。

だがその分、余剰出力はビームへと転換されて、FXバーストと全く同じ特性を纏い、そして機体の加速という点においては余剰出力の処理という課題を解決することによって、強制ログアウト措置が取られる寸前までそのスピードを引き上げることが可能となっている。

四倍速。

かつての限界であった速度にいと也容易く到達したフルブランシユは駆け抜ける閃光の矢となって、ユユが駆るG―イデアへと肉薄していく。

だが、ユユもそれがわかっているからこそ、カエデをあしらった時と同じようにIフィールドを一点に収束させて、リリカの攻撃を防ごうと試みた、その瞬間だった。

『——っ!?!』

「この土壇場で読んでくるなんてねえ……まさかまさか、だよお」

既に射出されていたフォトン・ファンネルによって機体を大破状態寸前まで切り刻まれながらも、対艦ライフルだけは死守していたミワが、最後の悪あがきとばかりに放った一撃が、ユユの注意を引き付けて、一点に収束させたIフィールドの防護を狙撃に向ける。

ユユの戦闘経験、そして勘の良さを逆手に取った三段構えの作戦——それはカエデが欠けていても、ミワが欠けていても成り立たないものだった。

その作戦全てを賭したりリリカは、その白と黒というツートンカラーに黄色と赤をアクセントとして加えた、ッガンダムを彷彿とさせる色合いの機体へと一撃を叩き込むために、倍速化したモーションによる



腕部ビームサーベルの一撃を叩き込まんと試みる。

『ふ……ふふ……ふふふ……まさか、ここまでとは……』

「……っ、く……」

ユユはこの事態にあっても尚、ぞくりと押し寄せてくる恍惚に身を震わせて、リリカはただ、四倍速のスピードと倍速化されたモーションでも届くことがなかった、という事実には、自身のコックピットに突き立てられたビームサーベルによる敗北に涙を流しかけていた、その時だった。

【Mission Successful!】

【Winner:アナザーテイルズ】

システム音声ダイアログに告げたのは、ユユの勝利ではなく、「アナザーテイルズ」の勝利だった。

コックピットを串刺しにされ、シグナルロストしていたためにわからなかったものの、リリカはあの瞬間、確かに腕部ビームサーベルをユユのG―アイデアに、その張り出した形状の肩に掠めさせることに成功していたのだ。

『約束通り、私の負けですね……ふふ、良い勝負でした、「アナザーテイルズ」……そして、リリカさん』

確かに一撃を加えられたかのように抉れている右肩をなぞりながら、ユユはどこかこうなることを予見していたかのように、柏手を打ちながら「アナザーテイルズ」を称賛する。

ただ一撃を加えた、それだけかもしれない。

だが、敗北は敗北だ。

コックピットを貫かれ、矢尽き、刀折れようとも戦い抜いた新たな女王たちを称えるかのように、ユユは、まるで年相応の子供のようによくすすくと微笑みながら、己の至らなさにも苦笑を浮かべる。

「……か、勝った、の……？ そっか、勝ったんだ……私たち……」

『ええ、おめでとうございます、リリカさん。貴女たちの絆が、ユユに膝をつかせたのですよ、ふふ……』

そして——リリカもまた、遅れて押し寄せてきた疲労感と感動、改めて感じさせられた二桁という世界の壁の高さと分厚さに対する実

感など、様々なものが縋い交ぜになった笑みと共に、静かに眦にしわり、と涙を滲ませるのだった。

## 第五十二話 「わたしの目線で行けること」

地獄のクリエイトミッションを完遂してロビーに帰還したりリカたちを包み込んでいるのは、達成感と疲労感が半々といった具合の重苦しい感覚だった。

一か八かの賭け、それも上手くいったとはいえない、擦り抜けのよくな勝利であったこともまた疲労感に拍車をかけているのだが、もしも全てが自分たちの想定通りに進んだなら、ユユは個人ランキング64位というような場所に収まっただけではないのだろうか。

「……わかってるけど、疲れたね……」

「然り然り……ミワちゃんちよつと頭使いすぎちやつたなあ」

「ですが勝利は勝利ですわ、そう思えばこの疲れも……少しわたくしも休憩したいですわね」

ミッション自体の時間は短かったとはいえ、針の穴を通すような極限の緊張を強いられる修羅場に放り込まれていたのもあって、さすがのカエデであっても音を上げてしまったようだった。

ロビーの壁に設けられた手すりに背中を預けて、はあ、と息をつくカエデの姿は今の、満身創痍な「アナザーテイルズ」を象徴しているようで、リリカもがくがくと震える脚がそうさせるがままに、ロビーの床へぺたんと座り込む。

立っているのは寄りかかっているとはいえカエデと、そして手すりに体重を預けてそのまま寝落ちしてしまいそうなミワの二人だけといった具合の自分たちに、何があつたのやらと奇異の視線を向けるダイバーたちは多かつたものの、つかつかと踵を鳴らしてロビーの向こう側からやってきた人影を見て、合点がいったかのように、そうであれば同情をするように目を見開いては去っていく。

「ふふ……楽しい時間でした、リリカさん、ミワさん、カエデさん……」

高らかに踵を鳴らしてロビーを歩むその、黒髪にゴシックで丈の短い黒い和装という出で立ちの人物こそ、疲労の元凶にして、あの地獄のような鬼ごっこを提案してきた、ユユ本人に他ならなかった。

「……え、えへへ……その、私、ちよつと足に力が……」

「ふふ、愛いですね……リリカさん。でも、一撃とはいえユユに一撃を喰らわせたのですから、もつと誇ってもいいんですよ……?」

「でもでも、誇る前に精魂尽き果てたからねえ……」

「全くですわ、生きた心地がしませんもの」

楽しそうに微笑んでいるユユと違って、死屍累々といった調子のリリカたちは、一様に滲む疲労を隠すことなくユユの言葉にそう返す。

勝てるとは思っていなかったにしろ、二桁という世界の壁を、その実力を、この身をもつて教えられたことに対する、挫折感と紙一重のその感覚は、GBNをやっていたれば避けられないものであるとしても、それにしたつて一足飛びが過ぎると、カエデは小さく肩を竦めるのだった。

ただ、リリカはユユに言われた通り、ほんのりと、一雫が心の水面に落ちて波紋を生むように、微かな達成感じみたものが顔を出してくるのを感じていた。

たった一発、されど一発。

GBNで恐れられている「二桁の魔物」に自分たちが食い下がって、なんとか、一発当てるだけ、クリエイトミッションという形とはいえ勝利を収めたことは、確かに自信を持っていいことなのかもしれない。

おずおずと俯く顔を上げるリリカの心の内にある疑問を肯定するかのように。ユユは変わらず、淡く妖艶な微笑みを浮かべたまま、小さく首を縦に振る。

「ふふ……ユユ、負けちゃいました。お兄様にどう言ったものでしょう」

「かのFOEさんにお礼参りとかされたら堪ったもんじやないけどねえ」

「まあ、ミワさんはお兄様のことをご存知でしたか……『緋きスナイパー』の二つ名は伊達ではない、ということですか、ふふ……」

「あのねあのね、その二つ名は絶賛返上中だよお……というか、GBNやっててFOEさんのことを知らない人の方が少ないってミワは思うなあ」

FOEさん。

それはハードコアディメンション・ヴァルガにおいて一種の災厄と絶望を意味する符丁であり、あるダイバーに付けられた二つ名なのだが、ミワが言った通りに彼を知らないダイバーは恐らくGBNの中でも少数派か、ライトな層のどちらかになるのだろう。

そして何を隠そう、そのFOEさん——ダイバーネーム「キョウスケ」の実妹にして、「黒髪黒和装災害系妹」なる物騒な二つ名を持っているのが目の前にいるユユ本人に他ならない、というのもまた、GBNにおいては有名な話である。

「あのキョウスケさんのことならよく存じ上げておりますわ、いつかリベンジを果たすその時まで絶対に忘れませんもの」

「ふふ……最近ヴァルガで突っかかってくるダイバーがいるとは、お兄様から聞いていましたが……カエデさんのことでしたか」

「え、えふおーいーさん……？ ヴァルガ……？」

何やら合点がいったように肯くユユと、そしてため息混じりにハンカチを噛みながらあの白亜のダブルオーガンダムを操るダイバーの冷徹にして完徹を貫き通すどこか死んだような目を想起しているカエデとの間で視線を彷徨わせながら、リリカはそう問いかける。

「えつとねえつとね、まあ有名なランカーの人だよお」

「そ、そうなんだ……」

ミワから教えてもらったのはありがたいが、悲しいことにリリカはその少数派だった。

その人がとんでもない、ユユ以上の強さを持っていてそんなダイバーがお礼参りに来ましたとなれば確かに自分たちは数秒程度で蒸発するのだろうけれど、その実感が湧かないというのもなんだか寂しい話だと、リリカはしよんぼりと肩を落とす。

「よろしければ今度、お兄様にお会いになりますか……？ ふふ、きつと皆さんのことを気に入ってくれれると思いますよ……」

ああ見えて、お兄様は結構な寂しがりですから。

そんな兄からすれば爆弾発言を投下して、ユユはくすくすと、口元を指先で覆い隠しながら妖艶に微笑む。

孤高の天才にして天災として知られているキョウスケことFOEさんがFOEさん呼ばわりされるようになったのは、元を辿れば「強くなつてからフォースに入ろう」と考えていてソロでの攻略を続けていたら、いつの間にか強くなりすぎたのと一人に慣れてしまったせいでもフォースに入れずにいる、という事情がある。

ただ、そこまで言つてしまえばさしものユユとて怒られることは目に見えているから、心の中で敬愛する兄のそんなドジでお茶目な一面を思い浮かべて、はにかむのに留めているのだ。

「御目通りが叶うのならば、それはリベンジを果たしてからでないわたくしの気が済みませんわ。して、ユユさん。グッドゲームの挨拶にしては随分と長いですけど、わたくしたちに何か？」

お喋りをしたいというだけでも構いませんけれど、と、どこか勿体つけているようなユユの態度に秘められているものを鋭く見抜いて、カエデはそう問いかける。

確かに、言われてみればユユの態度は不自然なものだ。

グッドゲームの挨拶に來ただけであれば兄の話など口にしないうろうし、どこか煙に巻くような掴み所のなさはいつも通りだとしても、本題を隠して話をしているような雰囲気があることは、リリカにもなんとなく感じられた。

「ふふ……カエデさんはせっかちさんですね、ユユはもう少しお話しを楽しみたかったですけど……本題に入りましょう」

カエデの、どこか試すような視線に臆することもなく、少しだけ残念そうに肩を竦めながら、ユユはくすくすと口元に笑みを浮かべたまま、リリカを見据えてその言葉を紡ぎ出す。

「ふふ……リリカさん、『アナザーテイルズ』のリーダーは貴女で良かったですね？」

「……あ、えつと、はい……一応……」

リーダーと言われてもそんな自覚などどこにもないし実感も湧かないのだが、一応フォース設立申請の時に、リリカが申請を出したこともあって、名義的には自分がその立場にいることぐらいは把握していた。

とはいえ、リリカに実感が無いだけで「アナザーテイルズ」は、彼女を柱として成り立っているフォースである、というのがユユの見解だったし、カエデもミワもそれは同じだ。

自覚がまだないままに頷いたリリカへ、自信を持っていいのだとばかりに目線を合わせて微笑みかけると、訪れた微かな沈黙を破ってユユは口火を切る。

「ユユは、貴女たちとの勝負に負けてしまいました……」

「……え、えっと、その……でも、私も、最後に撃墜されちゃったから……」

「ふふ、それ自体を責めている訳ではないのです……ただ、ユユはもしも負けたら、心に一つだけ決めていたことがありました」

カエデやリリカたちと比べればやや小ぶりであるものの、十分に豊かな胸元に手を当てて、ユユはどこか芝居がかった大仰な仕草で天を仰ぐ。

まるで歌劇のワンシーンを切り取ったようなその美しさは衆目にもどこか神聖に映ったのか、足を止めて「アナザーテイルズ」に視線を向けているダイバーは数多い。

それも手伝って押し寄せてくる緊張感にリリカはごくり、と生唾を呑み込むが、ユユはそれさえ意に介した様子もなく、台詞を諳んじるかのように、或いは言う機会をずっと待っていたかのように、薄い唇から続く言葉を紡ぎ出す。

「ユユを……どうか貴女たちのフォースに入れていただけませんか？」

ユユからすれば、その感情は不可解なものだった。

だが、リリカが「パロツツ・パーティー」を相手に見せた奇跡の大逆転であったり、或いはレイドバトルにおける、カエデを助けた一幕であったり、そこに感じたものは、奇しくも兄であるキョウスケが、強敵に挑む時と似た、凄まじい「決意」の力に他ならない。

ユユは、自分の何かがどこかで欠けているような、そんな感覚をずっと抱きながらこのGBNをソロで放浪してきた少女である。

誰にも話したことはないし、これからも話すことはきつとないのだ

ろうが、戯れに傭兵を試してみたり、或いはハードコアデイメンション・ヴァルガを遊び場にしてみたりと色々な楽しみ方をしてきたつもりだが、ここまで胸が高鳴るのはいつも、兄と死合を果たす時だけだった。

そんな自分が不可思議な感覚で満たされているというのは、ユユにとつて意外なことであつたし、そして、掲示板やら何やらで情報を調べる内にわかつてきたのは、この「アナザーテイルズ」というフォース自体がそもそも奇跡的なバランスで成り立っている、ということだった。

そして、その中心となっている存在こそが、他でもないリリカなのだ。

今もどこか戸惑った様子で、本人にその自覚はないのかもしれないが、リリカが見せた「決意」は、そして臆病であるが故に強かである判断力や優しさは、どこかで瓦解しそうなミワとカエデの間を取り持つて、そして絆へと変えることに寄与している。

ならば、そんな「アナザーテイルズ」であれば、自分の胸の内側にぽっかりと一つだけ穿たれた穴を埋めてくれるのだろうか。

それが、ユユの抱えていた疑問にして、そして今日、リリカを前にして確信を得た答えでもあつた。

「え、えつと……その、いいん、ですか……？」

「ふふ……ユユは一向に構いません、むしろこうしてお願いさせてもらっているのです」

「……え、えつと、私たち、そんな、ランキングとか、そういうのにはあんまり、つていうか、全然縁がなくて……」

「それはユユも同じです……ふふ、確かに三桁がどうの、二桁がどうのと言われている渡世なのは否定しませんが、GBNにおける本質はそこにはない……ユユはそう考えているのです」

それは確かに綺麗事で、理想論に聞こえるかもしれない。

だが、ユユが二桁まで上り詰めた理由は兄と一緒に遊びたいから、というものに他ならなかつたし、傭兵稼業だとかデイメンション探訪だとかをやっているのも、心に空いた穴を埋め合わせるためでしか



い。

その結果、なんだかいたずらにどこかに現れては気まぐれに戦場をしつちやかめっちゃかにしていく災害系妹などという呼び名を頂戴してしまったものの、ユユが求めているものは闘争ではない。

奇しくもそれは、「繋がり」だったのかもしれないと、ユユはリリカの求めているものを知らずとも、その答えに辿り着いていた。

既にもう完成されているのかもしれない「アナザーテイルズ」に自分が割り込むのは無粋だと、そういう向きもあるかもしれない。

だからこそユユはペこりと、丁寧に腰を折ってリリカに頼み込んでいるのだ。

「……………え、えっと……………その……………」

二桁ランカーが頭を下げてまで自分のフォースに入ろうとしている。

その事態がそもそもリリカには呑み込まずに脳味噌はキャパオーバーを起こしかけていた。

思わずミワやカエデに助けを求めたくなったものの、ユユが頼み込んでいるのはあくまで自分であることぐらいは、今のリリカにも理解できる。

どうするのが正解なのか、思わずそれを誰かに委ねたくなってしまふものの、一瞬だけ交錯し視線の中に滲んだものを思い出して、リリカはぐっと固めた拳を胸に当てて踏みとどまった。

あれは、孤独だ。

決めつけてしまうのはきつと失礼に当たるとはだろうし、「貴女は孤独なんです」なんて、相手がユユであろうがそうでなかろうが出会い頭に一発もらってもおかしくないような言葉だ。言えるはずもない。

ただ、ほんの刹那の間に覗き込んだユユの瞳が孤独を抱えていると確信できたのは、リリカの中にもかつて同じものが存在していたからだった。

思い出すのは、中学生までの日々。

いつも教室の隅っこで、何をしてもなくただぼんやりと本を読ん

だり、ただ座って昼休みを過ごす傍に、窓辺から眺める上級生、同級生、下級生を問わずに仲の良い者たちが固まって楽しそうに上げている叫び声のこと。

リリカは——「梨々香」はずっとそこに混ざりたかった。

誰かと一緒に他愛もない時間を過ごして、他愛もない言葉を交わして。

そんな、皆が当たり前にできていることができない自分が嫌で嫌で仕方がなくて、教室の隅ついで唇を噛んで、時には誰もいない空き教室で、先生に心配されないように涙をこぼしていたこともある。

リリカは、言ってしまうえば弱いからこそ孤独だった。

ドッジボールでボールがぶつかった時、あまりの痛みに泣いてしまつてからは露骨に誘われなくなつたし、体育の授業で球技をする時だつて、リリカはどこかいけないものとして扱われ、パスが回ってくることは基本的になかつた。

そんな弱さが嫌で、嫌で仕方なくて、そんな弱さに臍を噛んで蹲っているのが嫌だつたからこそ、高校では変わろうとして——そして、失敗したのだ。

ユユの孤独はきつと、リリカとは真逆のものだ。

強すぎるが故に、孤高であると思われているが故に、誰もが一緒に手を取ってほしいという同じ目線で向き合ってくれることなく、畏敬であつたり、或いは恐怖であつたり、そういう感情の中で取り残されてきたのだろう。

ならば、自分にできることは何か。

問いかける。自分の意味を。

どうやって生きていくのかなんてわからない、だけど、どうしたって生きていかなければいけないこの世界で今、リリカに——「蔵前梨々香」という一人の人間に求められていることは何か。

刹那が永遠に引き延ばされていくような重い沈黙の中で、リリカは何度も深呼吸をして、高鳴る心臓の鼓動を抑えるように、そして不正解を恐れてぴたりと閉じようとしている唇を引き上げるように、その言葉を発するのだった。

「……え、えつと……私たちでよければ、その……一緒に、GBN……  
しませんか……？」

二桁の魔物を引き入れるのに自分たちのフォースがふさわしい存在であるとはリリカも思っていない。

だが、そんな事情は二の次三の次だ。

今日の前で、自分と同じ理由で苦しんでいる誰かがいる。

——ならば、弱い自分だって、そこに手を差し伸べることぐらいはできるはずだから。

そんな、リリカの優しい決断にカエデはどこか満足げに微笑んで、ミワもまた、妹の成長に、そして、少しずつ自分から離れていってしまふような感覚に、涙を滲ませる。

「ふふ……ありがとうございます、リリカさん。ミワさん、カエデさん。これからも……ユユをよろしくお願いしますね……？」

妖艶に微笑むユユだったが、その眦には涙の雫が滲んでいた。

きつと、初めて流した等身大の涙。

差し伸べられた手にぱたり、と落ちる、色のない血液に、その痛みに寄り添うようにリリカは、四人目のフォースメンバーを、「アナザーテイルズ」へと、笑顔で迎え入れるのだった。

## 第五十三話 「胎動する闘い」

GBN総合スレpart. 1178

1：以下、名無しのダイバーがお送りいたします  
ここはガンプラバトル・ネクサス・オンライン、通称GBNに関する総合雑談スレッドです。

各種ミッションについてはwikiを参照した上で専門スレへ、フォース勧誘、ビルド構築、クリエイトミッションの攻略に関する相談も専用スレでお願いします。

【GBNまとめwiki】<https://>

【ミッション攻略スレ】<https://>

【ビルド構築スレ】<https://>

【フォースメンバー募集スレ】<https://>



283：以下、名無しのダイバーがお送りします  
今年もこの季節がやってきたか

284：以下、名無しのダイバーがお送りします  
何の季節だよ

285：以下、名無しのダイバーがお送りします  
大戦争だろ

286：以下、名無しのダイバーがお送りします  
>>>284

お前大戦争は初めてか？ 力抜けよ

287：以下、名無しのダイバーがお送りします

大戦争って確かセントラル・エリア以外の全サーバー巻き込んだGGだっけ？ 参加したことないからわかんね

288：以下、名無しのダイバーがお送りします

大体それで合ってるな、主権が「GHC」で相手の総戦力が二万だからこっちも傭兵やってる奴らとかを対象に二万人集めた勢力戦

289：以下、名無しのダイバーがお送りします

この季節になるとアトミラルがノリノリで「GHCは君たちを求めている！」ってポスターのパロディやる画像が電光掲示板に流れてくるから草生えるんだよな

290：以下、名無しのダイバーがお送りします

夏フェスのコンゴウさんのノーズアート風写真流用した求人広告とかも出してるから今回はGHC側につくダイバーもいるだろうな

291：以下、名無しのダイバーがお送りします

てか大戦争イベってイマイチルールがわかりづらいんだよなあ、参加したことはあるけど逃げ回ってる間にチャンプが戦場しっちゃかめっちゃかにしていつの間にか勝ってたみたいなこと多かつたし

292：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>>291

基本的には陣取りゲームみたいなもんだな、「GHC」の勝利条件は陣地の七割以上を失うか、六割以上失った上で本拠地のヨコスカ基地の陥落で、俺らっていうか敵対側の敗北条件は時間内にそれが達成できなかつたら負けって感じ

293：以下、名無しのダイバーがお送りします

最初は五割領土取れば勝ちだったんだけどチャンプがあんまりにも暴れたもんだから難易度上がったんだっけ

294：以下、名無しのダイバーがお送りします

寡兵でアトミラルが用意した戦艦群ズタズタにしてそのまま大気圏直上からヨコスカ基地にエントリーとかやってるチャンプが悪いんだよ

295：以下、名無しのダイバーがお送りします

チャンプはさあ……（定型文）

296：以下、名無しのダイバーがお送りします

まあどつちにしろ「GHC」vs俺らみたいな実質企業コラボイベだし参加報酬も旨いから今のうちに参加申請出しとくといいかもな

297：以下、名無しのダイバーがお送りします

第四世界とか言われるようになったGBNに真っ先に目をつけた

アトミラールは有能経営者だった……？

298：以下、名無しのダイバーがお送りします

それもあるとは思うけど絶対半分は趣味だゾ

299：以下、名無しのダイバーがお送りします

GHCとかいう巨大コングロマリットが参入してきてからこっち、企業コラボ案件飛びまくってるからなあ、まあ趣味かどうかはともかく有能で間違いないんじゃないかね？

300：以下、名無しのダイバーがお送りします

その上美人の嫁さんもいるとか（嫉妬で）狂いそう……！（静かなる怒り）

301：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>>300

その怒りを大戦争にぶつけるんだ、俺たち傭兵連合もお前の参加を待ってるからよ……

302：以下、名無しのダイバーがお送りします

傭兵といえば一年前はこっち側だったルヴィーラネキがGHCに拾われたんだっけ

303：以下、名無しのダイバーがお送りします

確かそんな感じだった気がする

304：以下、名無しのダイバーがお送りします

超精度スナイパーが敵に回るとかやめてくれよ……（絶望）

305：以下、名無しのダイバーがお送りします

陣取り合戦で七割取るのはきつい上にヨコスカ基地にはテトラちゃんとユニちゃんがいるから無理っぽいところにルヴィーラネキまで敵に回ったからなあ、今年の大戦争はマジで荒れるかもしれない

306：以下、名無しのダイバーがお送りします

それでもチャンプとロンメル大佐なら……チャンプとロンメル大佐なら何とかしてくれる……！

307：以下、名無しのダイバーがお送りします

他力本願で草

308：以下、名無しのダイバーがお送りします

実際個人ランキング4位のテトラちゃん相手に俺らが戦つてもおやつになるだけだからなあ、お前どう？

309：以下、名無しのダイバーがお送りします  
(勝てる気がし) ないです

310：以下、名無しのダイバーがお送りします  
ユニちゃんもしれっと小型ダインスレイヴを連射するガトリングガンとか作ってるらしいしマジで今年俺らが勝てんのか怪しくなってきたな

311：以下、名無しのダイバーがお送りします  
アトミラールもアトミラールでこの前の配信で気合入れて戦艦作ってたからなあ、この前チャンプにEXカリバーとタイタスパンチで艦隊破壊されて相当堪えたらしい

312：以下、名無しのダイバーがお送りします  
「GBNでは戦艦が冷遇されている、だからこの大戦争イベントを企画したのさ」だっけ、いや戦艦とか作れないし持ち込めないんだよなあ

313：以下、名無しのダイバーがお送りします  
「セルピエンテ・クー」の連中が早速申し込み終わらせてたな、「チエツク・メイド」も参加してくれるっぽい

314：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>>312

世の中にはフルスクラッチ1/144ガデラーザとか作ってる狂人もいるから多少はね？

315：以下、名無しのダイバーがお送りします  
お、リビルドガールズも参加すんのか今回、ガンスタグラムに写真付きで上がってたわ

316：以下、名無しのダイバーがお送りします  
そーいや銭ゲバロリが傭兵やってたから参加資格自体はあるんだなあいつら

317：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>>315

アイエリの新素材供給たすかる

318：以下、名無しのダイバーがお送りします

ミリタリ迷彩服で頬を寄せ合う百合カップルとか情報量が多すぎる

319：以下、名無しのダイバーがお送りします

【速報】黒髪黒和装災害系妹敗れる

320：以下、名無しのダイバーがお送りします

フアツ!?

321：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>>319

ユユちゃんに勝てるダイバーとか結構顔割れてそうなもんだけど誰よ

322：以下、名無しのダイバーがお送りします

「アナザーテイルズ」らしい、つつてもユユちゃんに攻撃が掠ったとかそういうクリエイトミツシヨンの話だけど

323：以下、名無しのダイバーがお送りします

またあいつらか、「ビルドライジング」といい今年は随分と有望な新人が多いな

324：以下、名無しのダイバーがお送りします

アーカイブがG-Tubeに上がったからリンク貼っとくわ

【G-Tubeへのリンク】

325：以下、名無しのダイバーがお送りします

うみみ……（理解不可能）

326：以下、名無しのダイバーがお送りします

ロリバスで建物消しとぼしてから超短期決戦でケリつけようとしたのか、博打だけどころいうの嫌いじゃないわ！

327：以下、名無しのダイバーがお送りします

その後ユユちゃんが「アナザーテイルズ」に入ったらしい

328：以下、名無しのダイバーがお送りします

フアーwwwwww

329：以下、名無しのダイバーがお送りします



草生やすな

330：以下、名無しのダイバーがお送りします

つつてもマジか、あのユウちゃんがフォースに入るって近々槍でも降ってくるの？

331：以下、名無しのダイバーがお送りします

俺300万BC積んでもフォースに入ってくれなかったのに何したんだリリカちゃん……？

332：以下、名無しのダイバーがお送りします

リリカちゃんも随分立派になったもんだなあ

333：以下、名無しのダイバーがお送りします

そろそろ専スレ立てた方が良さそうだな

334：以下、名無しのダイバーがお送りします

せやな

335：以下、名無しのダイバーがお送りします

それな

336：以下、名無しのダイバーがお送りします

あれな

337：以下、名無しのダイバーがお送りします

わかる（天下無双）

338：以下、名無しのダイバーがお送りします

何の話してたんだっけか

339：以下、名無しのダイバーがお送りします

私にもわからん

340：以下、名無しのダイバーがお送りします

いや大戦争イベの話だよ



GBNのセントラル・エリアに聳え立つロビーの中枢、普段はリプレイなどが再生されているモニターには、大々的に「GHG W a n t i n g Y o u ! 」という文字をバックに人差し指をさしている金

髪の男性が映し出されていた。

大戦争。

それは「GHC」が企画した大規模なGVGイベントにして陣取り合戦のようなものであり、参加人数二万人という、他のレイドバトルとも一線を画している一種のお祭りのようなものであった。

にわかには湧き立つロビーの中枢で、セシア・アウエア・セストの衣装をアレンジしたダイバーブルックに身を包んだ少女、アリムは、この瞬間を待っていたんだとばかりに歓喜の声を上げる。

「っしやあ！ 戦争の季節だ、この時をアタシはずっと待ってたんだ！」

「大戦争ですか？ むむ……わたくしも寡兵の側に回りたいのですけれど、大人の事情が絡んでいるならやむを得ませんわね、アグニ力的ではありませんけれど」

そんなアリムの隣で、豊かな胸を支えるようにして腕を組んでいる、ハニーブロンドをツインテールに結えた女性——「バエルお嬢様」「頭マクギリス」「マクギリスの生まれ変わり」など様々な二つ名を頂いているダイバー、アリアは苦虫を噛み潰したような顔でそう呟く。

以前に、GBNを一時騒然とさせた事件があった。

ELダイバー奪還戦。

非公式の第三次有志連合戦とも呼ばれるその戦いの裏側で奔走していた立役者にして、「GHC」と手を組んで黒幕であるコングロマリットを蹴落とした都合もあって、今回の大戦争においてアリアは——桜宮凜音は、「GHC」の側に回らざるをえないのであった。

「へっ、そんなときやアタシが引導渡してやるから覚悟しとくんだな」

「ええ、強者と戦うのは誉れにして実にアグニ力的な行いですわ、貴女も首を洗って待っていることですから、アリムさん！ あーっはっはっはゲホッゴホッゴホッ!!!」

「お嬢様あああっ!!!」

盛大にむせ返ったアリアの背中を、すぐ側に控えていた燕尾服に身を包んだ少年——ダイバーネーム「ミツルギ」が叫びと共に優しく撫でる。

このアリアという女性、とにかく病弱で、今もその反動で気管系にちよつとした発作を抱えているのだが、どういうわけか医者もサジを投げたその体質は咳き込みやすい以外に半ば改善されているらしい——と、アリムはそう聞いていたが、どちらにしても自分には関係のない話だ、と、すつかり「大戦争」ムードに染まったロビーを一望する。

「いいねえ、こうヒリヒリした緊張感があるってのは……最高に生きてるって感じだ」

「君はいつもそうだな、アリム」

「おう、F O Eさんか……そりやそうさ、アタシにとつちや戦いこそが生きがいだからな！」

刹那の内にプライドをかけてぶつかり合うのならば、ただ一対一のフリーバトルでもいいのだが、レイドバトルや大戦争といったイベントは様々な場所で様々な人々がその輝きを見せてくれるからこそ、アリムは他にも理由はあれど大戦争を好んでいるのだが、話しかけてきた青年——F O Eさんの渾名を頂いているダイバー、キョウスケにとってはそうでもないらしい。

だが、人間なんてそんなものだ。好きなこともあれば嫌いなこともあって、泣くも笑うも自由であるべきなのだから。

それがわかっていいるからこそ、互いに深入りすることなく、アリムはなんだかんだで乗り気ではあるキョウスケの背中を見送るのだった。

「戦いが好きって点じゃアタシと大して変わらねえけどな」

「そうそう、戦いはともかく大戦争イベントは報酬が旨いからねい……金持ちの懐から金抜き取っても心なんざ痛まねーよ、けけけ」

「銭ゲバロリも相変わらずだな」

大戦争イベントへの参加エントリーを済ませてきたチイも、いつもの調子でアリムへとそう語りかける。

実際、報酬の全部はG H Cのポケットマネーから出されるということとで、チイのような金が欲しくて仕方がないダイバーではなくとも、大資本に対するやつかみから傭兵側に参加することも多いのだ。

とはいえ、アリムがエントリーを済ませて掲示板を眺めていたのはそんなやつかみだとか、己の趣味であり生きがいを満たすためだとか、そういう話ではない。

「……ルヴィーラの奴が敵に回って、そんであのユユが『アナザーティルズ』入りか。今回の戦争は荒れそうで最高にワクワクするぜ」

テーマパークに来た時みたいにな、と、早速銭勘定と作戦の立案を進めて思案顔になっているチィを横目に、アリムはそう不敵に笑う。

アナザーティルズ。

つい最近話題に上ることが多くなってきた、新進気鋭の実力派フォースだということはアリムも知っていたし、チィも掲示板で曲がりなりにその動向を確認していたものの、二桁ランカーを身内に引き込んだとあつては、良くも悪くも注目を集めるのは避けられないだろう。

そして——どこかで、そして自分たちの預かり知らないところで歯車が回り出していることにも気付かず、当の本人であるリリカたちは、カフェブースでアイスココアを啜っていた。

「大戦争……ですか……？」

「ええ、簡単に言えばGVG……二つのチームに分かれた紅白戦のようなものです、ふふ」

だが、その話題は当然のように、ロビーを席卷している大戦争イベントについてのものだ。

大戦争への参加を持ちかけてきたのはユユだったが、一応カエデもミワもそれなりに興味はあつたために、こうして四人に増えた「アナザーティルズ」もまた、それを話の肴にして、放課後の教室で語らうかのように駄弁っていたのである。

「然り然り……前に参加したレイドバトルがあつたでしょ？ あれの親戚みたいな感じだよお」

「もつとも、デスペナルティは少しばかり重いものになっていますけれど」

「……そ、そうなんですか……」

大戦争の特徴は、陣取りゲームというだけあつて基本的には戦力

ゲージが可視化されているわけではなく、侵攻側は拠点を制圧していかねばならない都合上、ただ生存しているだけでは戦いに寄与しないというのが最大の特徴だった。

セントラル・エリアを除いた全サーバーをレイドバトルモードにして行われるその戦いには、マゼラン大陸と呼ばれる、凄腕のSDガンダム使いたちが鎬を削る修羅の地からの来訪者も参戦すれば、個人ランキングには名を連ねていないものの、気ままにGBNをエンジョイしている無冠の帝王までもが参加すると、リリカが開いていたGBNまとめwikiには、そんなことが書かれている。

それほどまでに凄まじい戦いに自分たちが参加しても邪魔にならないのだろうか、リリカは不安に駆られるものの、逆にいうならば、いつか「エーデルローゼ」へのリベンジを果たすのなら、自分たちの実力を試すにはある種打ってつけだということだ。

恐怖はある。緊張もある。

それでも、リリカはユユたちが乗り気であるように、その戦いへと一つの目標を定めると、静かに首を縦に振った。

「……え、えっと……それじゃあ、私も……その、参加してみようかな、って……」

「うんうん、参加するだけならタダだからねえ……それに大分先の話だから、練習期間はたっぷりあるよお」

勇気を出して参加を宣言したりリリカをぎゅっと抱き寄せると、ミワはその真っ直ぐな栗毛を優しく撫でながらそう語る。

実際、彼女が言う通り、二万人を募集するという都合もあって、大戦争イベントまでの準備期間はかなり長めに取られているのだ。

「でしたら……ふふ」

「どうしまして、ユユさん？」

「ふふ……大戦争へ向けての練習なら、ユユはとっておきの場所を知っているのです……うふふ」

そして、参加を決めたリリカの瞳に毅然と輝く決意を試すかのよう  
に、或いは自らの秘密基地に友人を招くかのよう  
に、妖艶に、しかしあどけなさを残した微笑みを浮かべて、ユユはその「練習」をリリカ

たちへと提言するのだった。

## 第五十四話 「戦闘狂のラスト・リゾート」

ユユが提案した「練習」として唇から滑り出てきたその場所を、リリカは知っていた。

否、このGBNにある程度浸かっている者であればその名を、轟く悪名を知らないダイバーの方が少数派である。

特に、始めたばかりのダイバーはそういった都合やら悪名、しがらみに縛られていないため、かつてのリリカがそうであったように、「そこ」を根城にしている悪質なダイバーたちの毒牙にかかることも珍しくはない。

「ハードコアデイメンション・ヴァルガ……ふふ、説明はいりませんね？ ユユにとつてはお庭のような場所です……」

ハードコアデイメンション・ヴァルガ。

そこでは従来、ダイバー同士の合意がなければ始めることができないうフリーバトルが「無制限」そして「無差別」に解禁されていることが最大の特徴であり、その都合上、背中からの不意打ちやステルス暗殺など日常茶飯事、飛び交う戦略兵器に焼かれて蒸発するのもまたありふれた光景となっている、世紀末もかくやという地獄が広がっている。

本来、様々な理由があつてハードルが高く設定されているフリーバトルをやりやすい場所を作つてほしい、というダイバーたちの要望から生まれたのがハードコアデイメンション・ヴァルガなのだが、そんな純粋な願いからはかけ離れた形となつてしまったというのが実情なのだ。

しかし、その特異性故に惹きつけられた悪質なダイバーや、或いは死をも恐れずに飛び込んでいき、戦いの屍山血河を生湯としたようなダイバーたちをある種隔離しておけるといふ利点も生まれたことで、幾つもの苦情が寄せられて尚、運営はその惨状を黙認していた。

ただ、初心者狩りは論外だとしても、デイメンション全体で無制限のフリーバトルが解禁されているというところで、普段のフォース戦やフリーバトルでは味わうことのできない緊張感を味わえるというこ

とから、ユユや彼女の兄であるキョウスケのように、修練の場として、真つ当に活用しているダイバーが数多いこともまた事実なのである。

活用できるようになるまでが果てしないとしても、ヴァルガの無制限フリーバトル、己以外の全てが敵となる環境はある意味「大戦争」の雰囲気に近いことはまた確かである。

故に、ユユの提案はある種真つ当なものであったのだが、先入観からか、リリカが少しばかり抵抗を抱くのもまた事実であった。

「ヴァルガですか？ わたくしはたまに通っておりますけれど……確かに大戦争の練習にはなりますわね」

「うむむむ、練習にはなるかもしれないけど、積極的に行きたいところじゃないねえ……」

カエデはその戦闘狂側に片足を突っ込んでいるから気にならなかったものの、ミワはどちらかといえば反対、少なくとも諸手を挙げて賛成だとはいえない立場を表明する。

「ふふ……スナイパーは親の仇のように追い詰められますからね、でも、それも含めて練習になりますよ……？」

「そうなんだよねえ……リリカちゃんやカエデさん、ユユさんにいつも護ってもらえるとは限らないから、ミワも自衛の練習はしなきゃいけないだけだねえ……むむむ……」

スナイパーを見つけたら親の仇のように追い詰めろ、というのはGNBにおけるある種の鉄則だが、ハードコアディメンション・ヴァルガにおいてその趣は殊更強い。

それは主にスポン地点近くに陣取って、無敵時間が切れた瞬間を狙ってログイン天誅という名の横暴を下している「回収屋」ピーターであったり、あの激戦区にあつて完全に己の姿や気配を消して、乱戦区域を丸ごとダイバーポイントに変えてしまうようなスナイパーの存在が大きいのだろう。

カエデはなんだか気まずそうにしているミワの表情から、それが誰であるかを臆気ながら察して、小さく肩を竦める。

「……え、えつと……今の私たち、その……通用、するのかな……」

ミワが「エーデルローゼ」を追放され、傭兵として荒れ狂っていた



時代の記憶に顔をしかめているのを横目に、リリカは己の中から生まれ出た純粹な疑問を、ユユとカエデの賛成組へと投げかけた。

スポンキルへの対策はともかくとしても、そこを抜けて待っているのが全方面全方位から押し寄せてくる敵の波だとなれば、その対処ができるかどうかは純粹な立ち回りの腕、プレイヤースキルに関わることだ。

リリカは詳しくは知らないものの、一般的にヴァルガでは三分生き残れば一人前、というのがある種の共通認識となっている。

全方位から弾幕の雨霰、そしてそれを隠蓑にしたシーカーやアサシン、スナイパーか跋扈する地獄は初心者を脱して、中級者となったダイバーたちですらその全てを捌くことは難しい。

逆にいえばヴァルガで三分生き残ることができれば、一角のダイバーと認められるということだが、聞けば聞くほどリリカは自信がなくなってくるのだ。

「ふふ、リリカさん……」

「え、えつと……ユユさん……?」

「それも含めての練習、そして……リリカさんはこのユユに一撃喰らわせたのですよ? ふふ……」

風前の灯火となっていたリリカの決意に油をぶち込むように、どこか挑発的にくすくすと笑いながらユユは耳元でそつとそう囁いた。

どの道、ヴァルガで三分生き残れる腕がなければ、言い換えるのならば「即座に、千変万化の戦況を分析してそれに対応していく力」が備わっていないければ、陣取りゲームとフォース戦が合体したあの「大戦争」で生き残ることは難しい。

負けたからといって、撃墜されたからといって何か大規模なペナルティが課せられるわけではない、というのがGBNの、VRMMOとしての特異性ではあるのだが、それでも悔しいものは悔しいし、気が引けるといいうのも理解できる。

だが、一度立ち止まって考えてみるといい。

負けて悔しいだけなら、次勝てばいいだけだ。

「そうですね、ユユさんの仰る通り、今回負けたら次回でリベンジを果

たせばそれで済む話なのですわ！」

あーっはっは、と、ハイテンションな高笑いをあげながらカエデは己の戦歴を振り返り、そこに数多の敗北が刻まれていることも意に介した様子もなく、そんなことを言っただけのける。

だがそれは、シンプルにしてプリミティブな、このゲームにおけるある種の真理のようなものであった。

一度負けたら終わり、というようなトーナメント制でない以上、ヴァルガに潜る度に次は絶対にぶちのめしてやる、という闘志をへし折れることなく抱き続ける者こそが、あの戦闘狂のラスト・リゾートにおける強者であり、そしてその暗黒面じみたものに魅入られた証明でもある。

それがいいことなのか悪いことなのかはともかくとして、カエデの言葉は、リリカの胸に支えていた忌避感を拭うのには十分なものだった。

「え、えっと……それなら、私……ううん、私たち……お姉ちゃん、その……」

「むむむ……他でもないリリカちゃんが行くって言うなら、ミワはそれに従うよお」

多数決なら審議拒否してるけどねえ、と付け加えつつも、なんだかんだで、上目遣いで問いかけてくる妹の視線には抗いきれずに、ミワは渋々といった調子でそつと頷く。

「ふふ……では、決まりですね……？　それでは早速……善は急げと言いますから……ふふふ……」

「これが善なのかどうかは甚だ疑問ではありますがすけれどね」

どことなく嬉しそうにしているユユを横目に、カエデはやれやれといった具合に肩を竦めてみせるが、その視線に宿っているのは紛れもない闘志そのものであった。

ハードコアテイメンション・ヴァルガ。

それは一度は騙されて飛ばされかけたものの、マギーに助けもなかったことで一難を逃れた災厄の地にして、リリカはそれを知る由もないものの、自分が憧れた「リビルドガールズ」にとつての始まりの

地。

巡礼というにはあまりにも物騒であるものの、どこか聖地を巡るピルグリムのように、リリカはごくり、と生唾を呑み込むと、決意と共にその戦闘狂のラスト・リゾート、チンパン隔離場、蠱毒の壺と押搦される地獄への片道切符を購入するのだった。



降り注いだものは、極光であったのか旭光であったのか。

一年を通して晴れていることが珍しい、暗雲に覆われた災厄の地を切り裂いたのは、サテライトキャノンやダインスレイヴといった戦略兵器もかくやといった具合の砲撃らしき何かであった。

リリカたちはハードコアデイメンション・ヴァルガへとログインした直後、例によって出待ちを行っていた都市迷彩が施されたケルデムガンダム——「回収屋」ピーターの機体をミワが携えていたGNスナイパーライフルIIで撃墜すると、襲い来る無数のダイバーたちを蹴散らしながら進んでいたのだが、突如としてその光は降り注ぎ、無数のダイバーたちを巻き添えにしながら、形成されていた乱戦エリアを丸ごと吹き飛ばしていた。

「まあ、お兄様……今日は一段と激しいのですね……？　ふふ……」

「お、お兄様……？」

なんとかその余波から逃れることに成功していたリリカは、ユユがどこか喜悦に頬を赤らめながら呟いたその言葉に首を傾げるが、そんな悠長なことをしている暇ではないことぐらい、目の前の状況を見れば理解できる。

『思えば貴方と死合うのもいつ以来……少しばかり私の鬱憤晴らしに付き合ってもらおう！』

『ジャバウオックの怪物……クオンか！』

その極光を切り裂いて現れたものを一言で表すのであれば、「怪物」というその二文字に尽きた。

恐らくはMGEXユニコーンガンダムをベースとしていながらも、

複数のキットを複雑怪奇にミキシングすることで、規格外の巨体は人型を逸脱して、ファンタジー作品に出てくる竜のような姿に変貌している。

そして惜しみなく手間と暇を費やして作られたのであろうデイベニダドの翼からこれまた一枚一枚をフルスクラッチするという狂気の所業で作りに出されたフェザーファンネルが、一時的に曇天を晴らした白亜のダブルオーガンダムへと襲い掛かっていく。

無数の羽根をフレーム単位で回避しながらその巨体に、二挺で一对となつているユユのそれとよく似たりフューザーライフル……共振粒子砲を放つと、その白亜のダブルオーガンダム……【セイクリッドダブルオーガンダム・シルト】は、「ジャバウオックの怪物」と距離を詰めるべく、粒子のマントを翻して突撃を敢行する。

「これは……少々わたくしでも躊躇いますわね」

「ふふ、ユユも普段なら混ぜてもらいたいところですけど……今回はあくまでも『大戦争』の練習ですからね……」

好戦的な二人組が介入を躊躇うような化け物同士の衝突、その正体は奇しくも個人ランキング13位のダイバーにして、終末系G―Tu berとして配信を行なっている「クオン」と、その一個下まで上り詰めたヴァルガの主人にして降り注ぐ天雷、災厄の化身たるFOEさんこと個人ランキング14位、「キョウスケ」のフリーバトルだった。

ジャバウオックの巨体はただ前進するだけでも周囲に災厄を撒き散らすほどの威容を誇っており、それとタイマンで渡り合おうとする白亜のダブルオーガンダムも十分に何かがおかしいのだが、絵面の全てが常識と理解を振り切っているそのスケールに戦慄しながらも、リリカたちはあくまでも冷静に、そして全力で二人のフリーバトルから遠ざかっていく。

さつさとそうしなければどうなるかなど、「ジャバウオックの怪物」が振るったテイルブレードによる一撃で文字通り有象無象として薙ぎ払われていく無数のガンプラ、その残骸を見ればわかることだ。

「……これが、ヴァルガ……」

「然り然りだよお、リリカちゃん、だからなるべくなら関わらない方が

良いんだけどねえ……つと！」

どさくさに紛れて自分を狙っていたスナイパーの気配を察知して、ミワはリリカへと溜息混じりにヴアルガの恐ろしさを語りながら、先行入力によって、都市迷彩を施すことで息を潜めて隠れ潜んでいたザクI・スナイパータイプを撃墜する。

姉も大概人外じみていると、相変わらず冴えに冴えているその狙撃の技を見て嘆息しながらも、そのリリカ自身もまた、ミラージココロイドを解除して背後から襲いかかってきたNダガーNを、Cファンネルによる先行入力で解体、爆散せしめていた。

良くも悪くも極限までインフレしたような環境に叩き込まれてきたリリカの腕前は、本人の自覚を置き去りにして、彼女という一振りの剣を鍛えるに至っていたのである。

しかしそんな、リリカ個人の事情や自覚を置き去りにして、ヴアルガの戦況は目まぐるしく変わっていく。

このデイメンションにおいて、安全地帯というものは存在しない。『ピヤッハー！』

突如として前方から迫ってくる、八十という数の集団にリリカは一瞬戦慄を覚え、展開していたCファンネルを全てバリアに回すことで、特徴的というにはあまりにも異様な、全身からスパイクを生やし、二輪型のサポートメカに搭乗している集団から放たれた弾幕砲火から身を守る。

「出たねえ……」

「誰かと思えばこの前のモヒカン集団ですの、懲りもせずによくやっていますわね」

「ふふ……どうしようもない方というのはこの世に存在するものです……」

ミワたちは見覚えのあるその集団に対して、一様に苦言を呈した。酷い言われようであったが、彼ら——ダイバーネーム「モヒー・カーン」が率いる初心者狩りの集団はこのGBNにおいて嫌な名物の一つであり、数年前から飽きもせず、ヴアルガで初心者や手負いの機体を多勢に無勢といった具合で圧殺してきたその悪名は、巷に轟いて憚ら

ない。

『ヒヤア！ いきなり出会い頭に無礼なこと言ってくるじゃねえか小娘共！ 野郎共、囲め囲め！ 数で圧殺すればなんてこたあねえんだ！』

とはいえ、どれだけ悪名が轟いていたとしても、カーンがこのヴァルガを根城として生き残ってきたダイバーであることは確かだ。

クオンとキョウスケが繰り広げていた死闘から逃れることができてこそいたものの、その機体が完全に無傷のままではないということを見抜いて、弾幕砲火による圧殺を試みる辺りはクレバーだといつていいだろう。

「ふふ……邪魔ですね」

しかし、そんな戦術が通用するのであれば「二桁の魔物」などやっていないとばかりにユウは冷徹な笑みを口元に浮かべて、IFBRのトリガーを引いて、ざっと半数のモヒカンテクスチャの塵へと還していく。

『ぬああああー！』

『うわらばー！』

『ひでぶっー！』

聴くに堪えない悲鳴が通信ウィンドウから雪崩れ込んでくるが、そんなことを気にしていたのではおやつにされるのがこのヴァルガだという場所であることはリリカも理解していた。

ユウに続いてカエデがツインバスターライフルでモヒカンの群れを漸減したのを確認すると、残党をミワが容赦のない狙撃ビームの連射によって殲滅にかかったのを合図に、リリカはカーンの機体——ザクⅢの全身からスパイクやリベットを生やしたような、通称モヒカンカスタムを目掛けてブーストを噴かして突撃する。

『は、八十の部下が壊滅だ?! 三秒でか?! だが飛んで火に入るなんとやらだア、大した火力もねエその機体で俺様のザクⅢスーパーバルバロイカスタムF3000の装甲を抜けると思うんじゃねえぞオ！』

カーンが豪語した通り、モヒカンカスタムのガンプラたちは基本的

に装甲を重点的に強化している。

それは、用途が初心者狩りという情けないものでなければ降り注ぐ天雷や極光に対して少しでも生存率を上げるためという理に適ったビルドだった。

そして、カーンが指摘した通り、リリカのフルブランシユは機動性とファンネル制御に重点を置いた機体で、一撃の火力に関しては何デヤユコ、そしてミワには劣るというのも、半分は事実には他ならない。

——そう、半分は。

リリカはコンソールから武装スロットを操作して、「チェック・メイド」やユコとの戦いでは試す余地がなかったそれを躊躇いなく選択した。

元々、HGトライエイジガンダムには、限定ガンプラとしての特典として、本来であればGBNにおいて最高難易度のミッションをクリアした際にパーフェクトレア報酬として手に入る「トライエイジシステム」が、機能を限定した状態で搭載されているという特徴がある。

どこまでが限定されているのか、またどこまでが行使可能な範囲なのかはまだ検証中であるものの、少なくともリリカが今行おうとしている用途に関しては問題がない、というのは、検証スレッドにおいて証明されていた。

「リミテッドコール……トライブラッシュブレイド！」

リリカが叫ぶと同時に、フルブランシユから放出される余剰エネルギーが一枚のカードを精製したかと思えば、次の瞬間にはそれが虚空に解け、一振りの剣を顕現させる。

それは思い出の剣。そして、始まりにして憧れの証明。

赤く煌々と輝く巨大なビームの刃を発して、リリカが呼び出した武装——トライブラッシュブレイドによる斬撃は、モヒー・カーンの機体をその重装甲ごと押し切らんと振り下ろされる。

『ば、バカな……この俺様がアアアアア！』

「これで、終わりです……！」

リリカは別段、カーン個人に対して恨みがあるわけでもなんでもない。

ただそこにいたから。そして、新たな武装を試すのにちょうど良さそうだったから。

そんな具合に、すっかりヴアルガに染まった思考回路はリミテッドコールの発動を承認し、顕現したトライスラッシュブレイドは、ザクⅢのモヒカンカスタムを、彼らの部下が蒸発したのとそう大差ない速度でテクスチャの塵へと帰せしめる。

「それがリリカちゃんの新たな剣、ってことだねえ」

「うん、お姉ちゃん……これが私が、トライエイジガンダムが欲しかった理由……えへへ」

そして、僅かに生まれた戦場の空白に佇むフルブランシユのコックピットで、リリカは新たな剣を地面へと突き立てながら、ミワの言葉に、少しだけ照れ臭そうにはにかんで、フルブランシユを構成する機体の一つにトライエイジガンダムを選んだ理由を、赤裸々に語るのだった。



## 第五十五話 「パラダイス・ロスト」

リリカたちがカーンの一団を始末して尚、ヴァルガの地に平穏が訪れることはない。

鳴り響くレッドアラートは絶え間なく、そして少しでも気を抜いてしまえば、彼方からダインスレイヴやサテライトキャノンといった戦略兵器が飛んでくるこの地は、ユユが言った通り、正に「大戦争」の練習としてはこれ以上ないほどに適任だった。

『貰ったぜ……っつうわあああッ!』

「遅いですわよ、ステルスで奇襲するなら気配を読まれるより先になさいな」

ミラージュ・コロイドを解いて背後から襲いかかってきたブリッツガンダムを、カエデは逆手持ちにしたシザーソードで貫き通すと、地上と空中の双方から飛び交う弾幕砲火を、舞い踊るようなマニニューバで捌いていく。

ヴァルガは確かに地獄に違いない。

「……そ、そこっ……!」

『な、何故バレて……うおおおお!!』

ドツズライフルを収束モードに切り替えて、物陰に潜んでいた都市迷彩のジムスナイパーIIを撃ち抜きながら、リリカは胃袋がキリキリと痛むような錯覚と共に、はあ、と荒い息を静かに吐き出す。

無制限のフリーバトルが理論上タイムアップなしで展開されているこの戦場は、上下左右の全てが敵の巣窟であり、しかも下手に撃墜数を稼いで目立ってしまえば、自分たちがヘイトを買って集中狙いを受けるというおまけ付きだ。

そんな状況下でも、安定した回避と攻撃による漸減をこなしているユユは流石「二桁の魔物」というべきだし、彼女には及ばないとしても、ヴァルガに足繁く通っているだけあって、カエデの立ち回りもまたこなれたものであるのに違いはない。

ヘイトコントロールの一環として、あえてキョウスケのようなハイランカーの戦いをつっ切って離脱するという戦法も存在するらしい

が、それもハイリスクな択であることには違いなく、否応なく目立つた状況に対してのリアクションを取らなければならない、というのは、ヴァルガ慣れしていないリリカにとっては重荷だった。

だが、住めば都などとは冗談でも言えたものではない場所ではあるものの、ある程度対応するためのコツを掴めば、生存し続ける、逃げ続けることだけはそう難しいものではない。

リリカがCファンネルを巧みに操って、死角から飛来する弾丸への防御に充てたところから射線を逆算して、ミワがGNスナイパーライフルIIによるピンホールショットで、狙撃手として潜んでいたガンナーガンダムを撃墜する。

「大丈夫？ リリカちゃん」

「う、うん……ありがとう、お姉ちゃん……っ、そこー！」

お礼を言っている暇すらならない。

リリカは手短にミワへと返礼を伝えると、直上からの降下を試みていたウェイブライダーにドツズライフルの一撃を見舞う。

息をつく間もない波状攻撃にリリカたちは確かに適切な対処をしていたが、それでもユククラスの腕前であっても、擦り傷一つ負わずにこの三百六十度全てが敵で満たされている戦場を切り抜けるのは難しい。

フルブランシュが告げているイエローコーションに焦りを感じながらも、リリカはCファンネルの残弾数を数えて、トライバードを肩から切り離すという選択肢を取る。

「行つて、トライバード……！」

無人の自律支援機と化した両肩のパーツに備えられているシグマシスキャンオンが、左右からリリカを挟み撃ちしようとしていたフォビドゥンガンダムとレイダーガンダムのコックピットを焼き払い、真下に控えていたカラミティガンダムをミワの弾丸が撃ち落とす。

確かにここは地獄には違いない。

心拍数は跳ね上がり、今もこめかみの辺りに脂汗が滲む嫌な感じが生きていることは確かだ、もう一度潜りたいかと問われれば、リリカは即座に首を横に振るだろう。

だが――

「背中は何させてねえ、リリカちゃん……！」

「うん……！　お願い、お姉ちゃん……！」

次第に、バラバラだったミワとの呼吸が重なり合っていくようなこの焦燥感と絶望感と隣り合わせになった、まだ名前の見つけられない感情の萌芽は、そう悪いものじゃない。

リリカはその奇妙な感覚に、引き立ったような笑みを浮かべつつ、眼前に迫ってきたガンダムエクシアに向けてトリガーを引いた。

爆炎がモニターを遮った隙を窺うかのように、エクシアの背後に控えていたソードストライクがリリカに向けて対艦刀、シユベルトゲベルを振りかぶるが、それを残ったCファンネルで処理すると即座に、リリカは強行軍の戦列へと復帰する。

「リリカさんに負けてはいられませんわね、わたくしも……と言いたいところですけど！」

「ふふ……そう、ここでは焦った方が負けるのです……こんな風に」

リリカとミワが背中合わせになりながら奮闘する光景に心打たれたのか、カエデも鼻を鳴らしながら、自身に切り掛かってくる、種類もバラバラなガンプラの一団をシザーソードの一撃で叩き斬っていく。

そして、カエデが大振りな一撃を放った隙を狙って飛びかかってきたガイアガンダムへと、妖艶な笑みを浮かべたユユが予め「置いて」いたフォトン・ファンネルが突き刺さり、その機体をテクスチャの塵へと帰せしめる。

百花繚乱というにはあまりにも物騒だが、青いクリアパーツが乱舞して虚空に軌跡を刻む様は、どこか花卉が舞い散るように場違いな優雅さを、見る者に感じさせるほどに、ユユの戦いは洗練されていた。

「これが、ヴァルガ……」

「ええ、ユユたちの遊び場、そして修練の場です、ふふ……」

かつて「リビルドガールズ」のアイカはログイン初日からヴァルガに飛ばされて、尚生還してみせた猛者であるという噂をリリカも耳にしたことはあったが、ある程度慣れてきた自分ですらいつぱいいつぱ

いなのに、初日で生還したのが本当の話であれば、相当なことだ。

そして、こんな物騒な場所を修練の場としている上級者たちも同じである。

だが、こんな地獄だからこそ、忘れてはならないことはユユたちのような上級者であつたとしても共通のものだ。

それは——「ハードコアデイメンション・ヴァルガに、安息の地などというものは原則的に存在しない」という先人たちの金言に他ならない。

瞬間、リリカの脊髄をびりびりと灼けるような痛みにも似た感覚が走り抜ける。

それが擬似的な感覚のフィードバックの範疇であるのか、錯覚であるのかは定かではない。

だが——とびきりの、何かが確実に「ヤバい」と思わせる予兆がりリカの脳裏には閃いていた。

「お姉ちゃん！ カエデさん！ ユユさん……！」

「これは……」

『……』

レーダー前方から迫り来るその点は静かに、文字通り歩くような速さで悠然とリリカたちへと迫り来る。

否——「それ」の瞳には、リリカたちなど映ってはいないのだろう。ポップする無数の通信ウィンドウには怒号と悲鳴が巻き起こり、そして「それ」が歩いた道には光の柱が林立し、巻き込まれたダイバーたちの機体を、その装甲の厚みや特殊性の有無を問わずに破壊していく。

暴力の化身とでもいうべき、理不尽の体現というべきその存在が歩む度に数多のダイバーがテクスチャの塵へと化していくというのに、どこか「浄化」とでも表現するのが相応しいような妖しい美しさを兼ね備えているそのガンプラは、辛うじてストライクフリーダムをベースにしたのであろうことだけが伺えた。

だが、わかるのはそれだけだ。

「……これはこれは、ヤバいねえ……！」

「逃げるのは自由、ということですね……！」

その光の柱が何であるのかはわからない。

だが、ストライクフリーダムをベースにしている以上、ドラグーンのようなものか、あるいはヴォアチュール・リユミエールないしアルミュレ・リユミエールをベースにしている可能性は高い。

ミワは一瞬、悠然と歩むその破壊と破滅、浄化の化身のコックピットを狙い撃とうとしたが、背筋を伝う猛烈な殺気と覇気とでもいうべきものに気圧されて、震える指先はトリガーを引くことはなかった。

結果論ではあるが、その光の柱や纏う光の衣がアルミュレ・リユミエールをベースにしていたのなら、ミワが今用いているGNスナイパーライフルIIでは容易く防がれて——ABAPSFDSですら、通用していたかどうかわからない——のだから、彼女の選択は賢明なものだった。

「ふ、ふふ……ふふふ……」

「ユユさん……？」

『野生のレイドボス』……何もかもが不明で包まれている謎の実力者が、ヴァルガにはいると聞いていましたが、よもやこれまでとは……！

その破滅の化身は、ただ「野生のレイドボス」という二つ名で呼ばれていることと、墮天使の王をモチーフとしたダイバーネームを冠する女性が操っている、ということしか周知されていない。

それは単純にエンカウント率が低いのもあれば、エンカウントしたダイバーが彼女をじっくりと観察できるほど長時間、生存することが不可能であるということも大きい。

個人ランキングが何位であるとか、どの大会で優勝しただとか、そんな肩書きも襲いくる破滅の前には、何の意味もなさない。

何を想い、何を描き、「彼女」はこのディメンションへといたずらに終末を齎しているのかを窺い知ることが、リリカにはできなかった。

だが——逃げようにも逃げるできない。

ただ、遭遇した時点で詰んでいる。

ユユもまた戦慄に背筋を震わせている時点で、それは明白だった。

『……』

「……っ、怖い……」

「……大丈夫……じゃないねえ、ミワも……あの手の相手は苦手だよお」

チャンピオンとして君臨するクジヨウ・キョウヤがもしも敵対する存在の全てを冷徹に排除し続け、誰と馴れ合うこともなくその座に居座り続けていたのならば、ちやうど彼女のようになったのだろう。

ただ威圧と戦慄を振り撒く恐怖の化身にして、強さという暴力の頂点。

孤独であるが故に、孤高であるが故に上り詰めることができたのであろうその執念や強さに、リリカが思うことは何も無い。

何も無い、というよりは何か湧いてくる余地がない、という方が正しいのだろう。

だが、このままもたもたしていれば、あの「光」は自分たちを呑み込んで、喰らい尽くすことは明白だ。

リリカは迷うことなく必殺技のスロットを選択し、ブランシユアクセルによる離脱を試みる。

「カエデさん、お姉ちゃん、私と手を繋いで……！　ユユさんは……！」

「ええ、わかりました……i f s プロージョン、どこまで通用するか……！」

『……！』

その選択が、彼女の逆鱗に触れたのかどうかはわからない。

或いはノーモーションでその速度が倍化して離脱していくリリカのフルブランシユに手を引かれているミワとカエデの姿も、それに続く形で全力のブーストを噴かしているユユのG―アイデアも、ただ視界に捉えた存在として等しく映っているだけなのかもしれない。

ただ、わかることは――

リリカはがくん、と、両肩に鉛の塊がのしかかってくるような恐怖と絶望――それすらも通り越して、ただ「重い」という感覚に全てが支配されたような錯覚を抱いていた。

瞬間、「それ」はただ手を掲げただけだった。

だが、ただそれだけで立ち並ぶ無数の光の柱が何であるのか、ということを否応なく、リリカたちと、その巻き添えとなった大勢のダイバーへと刻み込んでいく。

駆け抜ける光の軌跡には、最早いかなる護りも意味を持たない。

「これ、は……い！」

「ひか、り……なん、ですの……!?!」

穿たれるのは破壊にして浄化の痕。

曇天が支配するヴァルガの空を切り裂いて、荒れ狂う極光が全てを——リリカを、ミワを、カエデを、そしてユユをも呑み込んで、ただ無へと帰していくだけだ。

ifsプロージョン・フルドライブの護りによってユユだけはリリカたちより長く生き延びることができたものの、スリップダメージのように蓄積していた戦闘ダメージも相まって、テクスチャの塵へと還ったことは同じだった。

ハードコアデイモンション・ヴァルガは魔境である。

蠱毒の壺にして戦闘狂のラスト・リゾート、様々な蔑称で呼ばれているその所以はただ、シンプルに地獄を体現しているからに他ならない。

確かに得るものこそ大きかったものの、そのデス・エンカウントによって全てを消し飛ばされた無力感もまた大きい。

GBNという大海が果てしないものであることをその身に刻みながら、リリカたちはロビーへと強制送還されていくのだった。



「……と、まあ、最後の方はともかくとしても、大戦争イベントはあんな調子で、四方八方から敵が襲いかかってくるのです……ふふ」

撃墜されたのはいつ以来だろうか、ユユはどこか喜悦にも似た感情に胸を躍らせながら、いつものように妖艶な流し目を送りながら静かに微笑んでみせる。

「わかつちやいましたけれど、貴女は相当な大物ですわね……」

ヴァルガ慣れしているはずのカエデにとつても、あの理不尽の化身との遭遇は相応に堪えるものがあつたらしく、カフェテリアの椅子、その背もたれに体重を預けながら、どこか投げやりにそんなことを言い放った。

とはいえ、黙り込んでいる、というよりは机に突っ伏してへたり込んでいるリリカもそれは同じだった。

長らく忘れていたが、自分のエンカウント運はあまり良い方ではないのだ。

それにしたって限度があると呟きたくもなったが、あれだけの強者がGBNに存在しているというのは、途方もない壁が目の前に現れたような挫折感と、そしてどこか悔しさのようなものをリリカに抱かせていた。

強くなりたいたと、そう願う。

あれに勝てるかどうかは別な話であるとしても、かつて貰った言葉に報いるように、「クジヨウ・キヨウヤには誰でもなれる」という激励に応えられるようにはなりたいたいという気持ちだが、確かにリリカの胸の内側には芽生えていたのだ。

「……ま、負けちゃいましたけど、その……」

「うむうむ、リリカちゃん」

「……その、『大戦争』、私も頑張ろうかなって……だから、その……ありがとうございます、ユユさん……」

「ふふ……ユユとしても予定が少しばかり狂ってしまいましたけれど、リリカさんのお役に立てたのなら幸いです……ふふふ」

あははは、と、ユユは普段のどこか超然とした雰囲気からかけ離れた、年頃の少女のような笑い声を上げると、眦に浮かんだ涙を拭う。

「ふふ……ごめんなさい、お友達とこうして遊んだのがいつ以来なのか、ユユにも思い出せなくて、それがどうにも可笑しかったのです……ふふふ」

「いつ以来でもいいんじゃないかなあ、今のミワたちは……フオースなんだからねえ」



まだ引つかかりのようなものが拭えているとは言い難い。

リリカもミワも、そして新たに加入したユユも、カエデだってそれぞれの都合を抱えていて、そういう寄り合いがこのフォースで、「アナザーテイルズ」であるということは頭の中でわかってはいたけれど、それがどこか心で理解できたような感覚に、ミワも、カエデも、そしてリリカもまた、声を揃えて一頻り笑う。

それでも、祭りはまだまだ始まってすらないのだ。

頼んでいたアイスココアをNPDの店員から受け取りつつ、リリカたちは相も変わらず「アトミラール」がアングル・サムのおマーヂュとして「GHC」の戦力を募集する広告が表示されている街頭ヴェジョンを見上げ。

「え、えつと……それじゃあ、その……『大戦争』に向けて……」

「乾杯乾杯、だねえ」

「ええ、乾杯ですわ!」

「ふふ……乾杯です」

四つのグラスを宙に掲げて、「アナザーテイルズ」として四人は、来るべき祭りに向けて、杯を交わすのだった。

## 第五十六話 「幕を開ける饗宴」

『諸君、私はこの戦いが好きだ』

文字通りGBNの中心であるセントラル・エリア、そのメインターミナルに掲げられた電光掲示板やフォロスクリーンに映し出された金髪に片眼鏡、そして白い軍服と軍帽といういかにも「海軍将校」な出で立ちをした青年が、咳払いと共に滔々と語り出す。

『GBNが好きだ、艦隊戦が好きだ、そしてMS戦が好きだ。戦闘機の戦列が対地爆撃でもってMSの一個中隊を撃滅した時など心が躍る』かの有名な漫画に出てくるウォーモンガーの如く、静かに、しかし確実に滾る熱をその冷徹な仮面の裏に隠して、その男は、「アトミラル」は言葉を紡ぎ続ける。

始まるうとしていた。

今まさに、胎動する戦いはこの第四世界のほぼ全てのサーバーを巻き込んで、鉄風雷火の産声を上げようとしている。

何が、と、問われれば、大戦争が、と答えられる程度には、リリカもGBNに馴染んできたものだった。

息を呑んで、イベントの開催を待っているのはリリカたちだけではない。

以前に戦ったクラシック調のメイド服に身を包んだ集団も、そして、かつては苦い敗北を喫したある種宿命のライバルともいえる「エーデルローゼ」の面子も、リリカが知らないダイバーも、アトミラルの演説によってその火蓋が切られる瞬間を、今か今かと待ち続けている。

『ファイターたちが己の意地と誇りをかけてぶつかり合う様など最早感動すら覚える……だが、諸君の前で今更語る必要はあるまい。その協力によって今年もまたこの「大戦争」イベントが始められたことを感謝すると同時に、我々「GHC」はその総力をもって、諸君らと戦わせてもらうことをここに宣言し——大戦争の開幕としようではないか』

どちらが生きるか、くたばるか。

誰かが口にしたわけではないが、そんな殺伐とした戦場の空気シリカは少しだけ怖気付いて身を震わせるが、武者震いだとばかりに、今この言葉こそを待ちわびていたのだとばかりに歓喜を満面に称えるダイバーたちは数多い。

『イベントが開始されました。これよりセントラル・エリアを除く全サーバーをレイドバトルモードに移行します』

「待ってたぜえ、この時をよおー！」

機械音声が無機質に「大戦争」の開始を告げると同時に、「戦争屋」の異名を戴くそのダイバー、「アリム」が歓喜の雄叫びを上げたのと同じに、無数のダイバーがそれぞれ、事前にランダムでの配置が決まっている戦場へと解け、転送されていく。

二万対二万という途方もない数の戦いだが、そのどちらかが全滅するまで戦い合うのではなく、侵攻側は各エリアに配置された拠点を、そのゲートキーパーを倒すことで制圧しながら前に進み、防衛側である「GHC」はひたすら制限時間一杯までそれを守り抜く、というのが「大戦争」イベントの要旨である。

「さてさて、鬼が出るか蛇が出るか、だねえ」

「どこに配置されるかにもよりますけれど」

「ふふ……どこに配置されたとしても、そこを目指せばいいだけです、そうでしょう、リリカさん……？」

「……は、はい……頑張ります……！」

侵攻側の戦場における配置先は、転送される直前まで明らかにされていない。

対して防衛側は最初からどこのエリアにどの戦力を置くかというのを最初から決められるのだが、これはある種侵攻側と防衛側では基本的に防衛側が不利を背負う、という不均衡への是正措置のようなものだ。

リリカたちはめいめいに気合を入れて、コンソールに浮かぶ転送ボタンにそつと触れた。

ただそれだけで仮想の躯体は解け、そしてあるべき戦場へと再構築されていく。

始まらんとしていた。或いはもう既に始まっていた。  
二万と二万が鎬を削る一心不乱の大戦争が。  
或いは、ダイバーたちにとっての祝祭が。



ジャパン・エリアの首都圏外れ、現実に即して再現された神奈川県横須賀市にその本拠を構えているアトミラールは、優雅に妻が淹れてきてくれた紅茶を啜りながら、始まった「大戦争」の行方を、無数に分割されたフォロスクリーンから観察していた。

「今年は……いや、今年もか。『AVALON』と『第七機甲師団』が宇宙に配置されてくれたというのは都合がいい」

この戦いにおいて、「GHC」が組み立てている戦略はただ一つだ。以前の敗北からの教訓を得て、ただ圧倒的な物量と火力で侵攻するダイバーたちを漸減して、このヨコスカ基地に近づかせないことだ。

無論、マゼラン大陸からやってきた猛者たちや、ステルスを気配で察知して先に撃破するような上位ランカーたちをも欺いてその鎌を首にかける「死神」であったり、或いはそれこそ自身が話題に出したツートップのフォースなど、例外が発生することは織り込み済みである。

以前はチャンピオンがほとんど一人で領土の三割を奪還するといふ凄まじい活躍を見せたために、卓袱台をひっくり返す勢いで崩れ落ちたアトミラールであったが、今回はその苦い敗北から教訓を得て、自慢の大艦隊の殆どに改装を施していた。

その成果は、すぐ明らかになることだろう。

ヨコスカ基地の地下ドックにその姿を横たえている改ドゴス・ギア級戦艦「天城」のブリッジで、アトミラールと、そしてその傍に佇む伴侶である女性——「コンゴウ」は静かにほくそ笑んで、今のところは自分たちの描いた筋書き通りに進行してくれている戦場を、オーケストラを導く指揮者のごとく俯瞰するのだった。



『敵機確認、フォトンリングレイを射出後に全艦、マルチ隊形へと移行せよ』

傭兵たち、或いはこの「祭り」に参加した有志たちが漆黒の宇宙を埋め尽くす勢いでこの大気圏直上の衛星軌道に殺到してきているのを確認し、拠点であるルナツォを離れた改ラー・カイラム級戦艦「扶桑」のブリッジに腰を据える女性は淡々と指示を下す。

確かにアトミラルが語る通り、このGBNにおいて戦艦というカテゴリーに属している艦艇たちは概ね不遇の烙印を押されている。

その理由は至極単純で、まず作るのが途方もなく難しく、そしてまかり間違って1/144というサイズで作ってしまうば置き場にも困るという、一般的なご家庭にはあまりにも厳しい前提条件の存在が挙げられるのだが、逆にいえばそれを解決してしまえば、運用そのものまで何かしらのナーフがかかっているということはないために、盛大に暴れられるのだ。

艦首のミサイル発射管を取っ払って、そこにハイパーメガ粒子砲を埋め込んだ改ラー・カイラム級に続いて、同じような改造が施された無数の同型艦やマゼラン級が、横並びになって侵攻するダイバーたちを待ち構える。

その異変に気づいたのは、他でもなく一番槍を切ったアリムと、彼女に轡を並べる、ガンダムアストレイノワールをブルーフレームの色で塗装した機体を駆る青年——傭兵派遣専門フォース「セルピエンテ・クー」を率いるダイバー「ナユタ」だった。

「……っ、まずいぜ、奴さんたち何か仕掛けてくるつもりだ!」

「聞こえているか、オープンチャンネルで送ったこの通信を受け取った機体は今すぐに上下に逃げることを推奨する。二度は言わない、わかったか」

ぶつきらばうにナユタが告げた言葉を、同じく衛星軌道近くに配置

されたりリリカたちもまた受け取っていた。

チエック・メイドの十三人や、「エーデルローゼ」がナユタからの報告を受け取るなり一も二もなく上下に散開した辺り、何かヤバいものが飛んでくる、というその計画は確かなのだろう。

先日、ヴァルガで邂逅したあの破滅と終焉、浄化の化身ほどではないにしろ、リリカもまたそれを本能的な危機感が知らせるままに察知して、ミワたちへと通信を送る。

「お姉ちゃん、カエデさん、ユユさん……！」

「然り然り、郷に入ってはなんとやらだねえ……！」

「あれはフォトンリンググレイ……つまり」

「GHCお得意の掃討戦ということでしょうか……ふふ」

元より、宇宙エリアにおける要衝であるルナツを放棄して「扶桑」が前線に出てきている辺り、彼女たちに任せられた役目は恐らく、地上へと降下しようとする戦力の漸減に他ならない。

彼我の距離がいくら空いていようと、ビーム兵器の減衰がないのがこの宇宙空間だ。

そして仮にここで「扶桑」が落ちてルナツを制圧されたとしても、宇宙エリアにはコンペイトウやゼダンの門といった要衝がまだ控えている。

故にこそその捨て鉢とは言わないまでも、己の艦隊を勘定に入れない特攻。そしてそれは、他人からの指示を嫌うような孤高のプレイヤーたちにとってはとにかく効果的だ。

素直にナユタからの指示を聞いて散開していた「アナザーテイルズ」や「チエック・メイド」のようなフォースはともかく、話も聞かずに強襲をかけていた機体群がどうなったのかについては、その数秒後に炸裂した無数の閃光の束が全てを物語っていた。

『全艦連動、ハイパーメガ粒子砲を拡散モードで発射！』

『アイ・アイ・مام！ ハイパーメガ粒子砲、拡散モードで発射します！』

瞬間、光が爆ぜて駆け抜けていく。

それは上下に逃れた無数のガンプラをもロックオンして唸り、猛り

狂う閃光のメイルシュトローム。

「……み、皆、私に捕まってください！ ブランシユアクセル、フルブースト……！」

巻き込まれば死は必然だとわかっていたからこそ、あの野生のレイドボス相手には通用しなかったものの、リリカはミワとカエデの両手を握り、そしてユユが足にしがみついているのを確認した上で躊躇いなくブランシユアクセルを起動した。

ここはリソースを温存したまま切り抜けられるような場所ではないことぐらい、上下に分かれながらもその閃光の余波に焼かれていく、或いは不幸にもマルチロックのターゲットになって爆散していくガンプラたちの末期が、なによりも雄弁に物語っている。

閃光の嵐が去った後に残されたガンプラは、当初の戦力から計算しておおよそ七割弱から六割強といった風情だった。

戦力が六割に達した時点でその戦闘は敗色が濃厚であるとされているデッドラインにギリギリ達するか達しないかといった風情で、かつてあの「アルス」が送り込んできた大艦隊を相手に放たれたその砲撃は、一瞬にして侵攻側の勢力のほとんどを撃滅せしめている。

「畜生、何がどうなってやがるんだ!？」

「落ち着け、まずは戦況の把握を——」

「第二射までには時間があるはずだ、そこで立て直せ！」

阿鼻叫喚といった具合に大混乱を起こしているダイバーを叱咤するようにナユタは叫んで、奇しくもあの閃光から生き残っていたアリムと足並みを揃えて、旗艦である「扶桑」を撃墜すべく呐喊していく。ナユタの見立て通りに、ハイパーメガ粒子砲という兵器は連射が効くわけではない。

一度放たれてしまえばそのリキャストには膨大な時間を要するし、なによりラー・カイラム級ならともかく、マゼラン級では一発撃つのが限界といった具合にエネルギーを馬鹿食いするのもまた確かなのである。

「ハッハハハア！ ジャベリンはな、こう使うんだよ！」

アリのウォーモンテローが投擲したビーム・ジャベリンが、「扶

桑」を庇うようにその艦体を盾としたマゼラン級のブリッジを貫いて、背後に潜む「扶桑」の装甲にも突き立てられる。

「負けていられませんね……ふふふ」

最早改マゼラン級は第二射までに用をなさないと判断したのだから。

ユユが戯れに放ったIFBRの一撃から、残存している改ラー・カイラム級を守るための盾となって爆散していく。

「こちらとしても長く付き合っではいられんのだがな……！」

そして厄介なのが、「扶桑」をはじめとした改ラー・カイラム級戦艦を改マゼラン級が身を挺して護ったことで、その格納庫から次々と戦闘機や可変モビルスーツが射出されていることだ。

ここで持久戦を展開して二射目に持ち込みたいのか、或いは手薄になっっているルナツーをはじめとした拠点を制圧されることを嫌ってか、「扶桑」は絶対防衛線をこの衛星軌道上に策定しているらしい。

或いは、何か別の理由でもあるのだろうか――

前線で対空機銃を掃射している「扶桑」の攻撃を潜り抜けながら、ソードピストルによる斬撃でそのブリッジを両断しつつ、ナユタは一瞬、考えを巡らせたが、その答えはすぐ側にこそあった。

先ほどのハイパーメガ粒子砲から逃れていたのは何も自分たちだけではない。

密集隊形に切り替え、対空砲火を厳密にする「GHC」の戦艦群による迎撃を、曲芸飛行のような軌道で切り抜け、そのまま重力の井戸の底へと潜行していく一団を見て、ナユタは得心する。

『「アナザーテイルズ」だったか……ユキが言っていた通り、やるものだな」

「お喋りしてる暇があんなら手動かしな、ナユタの旦那よお！」

「了解している、こちらも艦隊を制圧次第、彼女たちに倣って強襲戦闘に移行する」

分散して派遣していた「セルピエンテ・クー」の偵察隊から、ゼダンの門方面は「第七機甲師団」が、そしてコンペイトウ方面は「AV ALON」が中軸となって制圧に乗り出しているという情報を得た上



で、ナユタは大気圏へと突入していくリリカたちを一瞥し、通信ウィンドウ越しに凶暴な笑顔を浮かべるアリムの言葉にそう返した。

リリカたちが立てていた作戦は、そのままそっくりユユと戦ったのと同じ超短期決戦だ。

「……領土を六割制圧しないと勝ちにはならない……」

「でもでも、大本営を潰しちやえば、手足は動かなくなるよねえ」

「兵は拙速を尊ぶものですわ、さあ、参りますわよ！」

「ふふ……お兄様は恐らく地上でしょうか……」

大艦隊から発進した、主に可変機を中心にしたモビルスーツ隊を撃退しながらリリカたちが目指す先はただ一つ、「GHC」の大本営であるヨコスカ基地だ。

そしてそれは、今はゼダンの門とコンペイトウを制圧しにかかっている「AVOLON」と「第七機甲師団」も同じである。

ちまちまと陣取り合戦を繰り返していれば、有利になるのは当然のように戦場全体を俯瞰し、指揮と連携が行き届いている「GHC」の側になるだろう。

だからこそ、とにかく一秒でも早く大本営を制圧することで末端を機能不全にして現場がある程度混乱しているところでようやく陣取りゲームを再開するという、この「大戦争」イベントにおけるある種のセオリーを遂行すべく、リリカたちは追撃隊として、直上から決死の急降下攻撃を敢行するリゼルやムラサメを撃退しながら、ヨコスカ基地へと降下すべく、虚空に浮かぶ青い星の引力に身を任せる。

「……っ、く……」

大気圏突入の際にかかるGをフィードバックした擬似感覚に歯を食いしばりながら、リリカはフルブランシユの放熱機構をフル稼働させて、単身での突入という無茶を敢行していた。

ミワとカエデはこの時のために持ってきたシールドを盾に、そしてユユはIフィールドシールドを展開しながら、先行するリリカへと続く形で流星となって、ヨコスカ基地へと降下していく。

その先に待ち受けているものが今に勝るとも劣らない地獄であるとしても、ありつただけの理不尽は今までのクソゲー遍歴と、そして先

日のヴァルガで味わってきたばかりだ。

だからこそ、リリカはその白きガンダムに勇気を乗せて、二万の大軍を率いる大本営へ、きつと猛者たちが雁首を揃えて待ち構えているであろう決戦の地へと、微かな笑みを無意識の内に浮かべながら、飛び込んでゆくのだった。

## 第五十七話 「交錯する宿星たち」

リリカたち「アナザーテイルズ」がGHC艦隊の包囲を突破して、ヨコスカ基地へと降下する傍らで、もう一つのフォースが同じように大気圏突入を試みていたことを知るものは少ない。

かつてロータス・チャレンジという難攻不落の要塞に呐喊し、そして第二次有志連合戦では奇しくも今回と同じように、「AVALON」の本拠であるフォースネスが存在するエリアまで奇襲をかけたあの「BUILD DIVERS」が有するペンギンを模したスペースシャトルが、降り注ぐ弾幕砲火の中を駆け抜けて、今大気圏へと突入しようとしていた。

「コーイチさんはナノラミネート塗料で強化してたって言ってたけど……！」

そのシャトルに格納された白亜の機体——「ガンダムダブルオースカイメビウス」のコックピットで、それを操る今最もチャンプに近い男と噂されるダイバー、「リク」は絶え間なく響く振動に奥歯をきつく噛み締めた。

GHC艦隊の統率は、旗艦である「扶桑」がセルピエンテ・クーナユタによつて撃沈させられたことで乱れつつあったものの、後続の「山城」がそれを引き継ぐことで、揺らぎかけていた衛星軌道絶対防衛線は、立て直しつつあった。

だからこそ、無理やり突入するのであれば今しかない。

と、いった風情でシャトルを操縦しているコーイチとモモは弾幕砲火の雨霰を無理やり掻い潜り、そして時には主砲の直撃を受けながらも、ヨノモリ塗料謹製のナノラミネート塗料と、そして対ビームコーティングトップコートという二重の防壁を駆使することで強行突破を試みていたのだ。

ダブルオースカイメビウスやジェガンブラストマスターといった、ビルドダイバーズが抱えている戦力を宇宙における陣取り合戦に投入しないのかという懸念は確かにあった。

だが、事前に話を合わせていたロンメルからは、「GHC」が最も力

を入れる場所があるとするならばそれは本拠地であるヨコスカ基地に他ならず、この「大戦争」の趨勢が決まるとするならばいかに早く大本営を壊滅させられるかということにかかっているということ、リクたちは遊撃隊としてヨコスカ基地への急襲に加担する——はずだった。

大気圏を突破したビルドダイバーズを待ち受けていたのは、トーチカや固定砲台、配備されたMSによる迎撃ではなかった。

「気をつけて、リク君！ 何か物凄いスピードで接近して——！」

『あーっはっは!!! 悪いですけどこれも大人の事情、このバエルと……アリア・フアリドがお相手仕りますわ、「ビルドダイバーズ」！』  
コーイチが警告するよりも早く、そして疾く、蒼天を裂いて現れたものは、たった一機のモビルスーツ、それだけに他ならない。

だが、その名乗りを聞いて安堵の表情を浮かべられるほど、リクは己の実力を過信していなければ、その馬鹿げたと評されてもおかしくない無謀な賭けに出た女性の覚悟を笑い飛ばすことなどできない人間だった。

アリアが突撃すると同時に振り下ろしたバエル・ソードの一撃は、ナノラミネート塗料による全塗装が施されているはずのスペースシャトル、その装甲を易々と切り裂いて両断せしめる。

バエル。

その存在はリクもよく知っていた。

映像作品「機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ」に登場する、ソロモン七十二柱の悪魔の名を冠するガンダム・フレームモデルの一号機にして、劇中ではマクギリス・フアリドが操ることで、実に三百年という間改修らしい改修を受けていなかったのにもかわらず、大規模改装されたガンダム・キマリスヴィダールと互角以上に打ち合うという活躍を見せている。

そして、目の前に聳え立つガンダム・バエルは、HGのそれをベースにしながらも関節部以外は徹底的な作り込み——ほぼゼロからの作り起しが施されていることでほぼ別物と化しており、原作におけるその勇姿を遺憾なく再現しているものだ。

それだけでアリアというダイバーが、バエルという機体に並々ならぬ情熱を注いでいることが窺える。

両断されたことで格納庫が露わになりながらも、「ビルドダイバーズ」の面々は散り散りになることで続く電磁砲からの追撃を逃れ、迎撃の弾幕砲火が待ち構える戦場へと飛び去っていく。

『あのジエガンの改造機を基地の攻略に回したのは賢明ですわね、しかしわたくしとてただ「GHC」にここの守護を任されたわけではありませんことよ!』

「わかつてます、だからこそ俺は……あなたを倒して前に進む! アリアさん!」

『その意気や良し! わたくしとバエルの力……しかとその目に焼き付けるのですわあああああッ!!』

背部にマウントされたメビウスビームキャノンを変形させて、メビウスアロンダイトを展開したリクは、アリアのバエル・ソードによる剣戟に怯むことなく光の翼を広げて突撃する。

その勇姿は、今最もチャンピオンに近い男と評されただけあり、アリアほどの実力者を前にしても尚怯むことはない。

だが、これは一対一の決闘ではなく、リアルタイムで戦況が目まぐるしく移り変わっていく陣取り合戦だ。

極端な話、アリアは別にリクを倒せなくとも、彼をここに足止めしているだけで仕事になるし、リクの側としては一刻も早くアリアを倒すかその追撃を振り切るかして、どうにか戦況を好転させなければならぬのである。

そういう意味で今、戦況を握っているのはアリアの方だった。

——だが、そんな遅滞戦を繰り返したところで何が面白いのだろうか。

確かにハイランカーを基地に侵入させるなどは言われたが、別にあれを倒してしまっても構いはしないのだろうと、アリアは口元に獐犷な笑みを浮かべて、瞬きをする間も与えないほどの剣戟を、ダブルオースカイメビウスへと浴びせかけた。

アン、ドウ、トロワのリズムで放たれる斬撃の輪舞は、リクほどの

腕前をして守勢に回らざるを得ないほどに苛烈なものだ。

それでも、アリアのリズムを一瞬で掴んだのは彼がチャンプに最も近いと言わしめただけのことはあるだろう。

「はあああああッ！ トランザム……インフィニティだ！」

『もつと……もつとですわ！ わたくしにその力を示すのです、バエル!!!』

返す刀をぶつけて、激しい鏝迫り合いを繰り広げながら、リクとアリアは闘志を剥き出しにして剣を振るう。

だが——その横顔には、微かながらも笑顔が浮かんでいた。楽しい。

確かに焦燥感が今もリクの、そしてアリアの脊髄をちりちりと焦がしているが、その感覚も含めて「楽しい」と感じるからこそ、このGNなのだ。

白亜の機体が真紅に染まり、そして悪魔の王は紅い眼光の尾を引いて、大空高くぶつかり合う。

しかしまだ、大戦争は、この一心不乱の戦いは、まだまだ始まったばかりなのだ。

それを示すかのように、「AVALON」と「第七機甲師団」が中軸となつて勢力の盛り返しを凶っている宇宙だけではなく、「BUILD DIVERS」と——そして「アナザーテイルズ」が降下した地上でも、鉄風雷火が吹き荒れているのであった。



「……こうも早く大気圏降下組が現れてくるとはね」

「チャンプの足止めには成功してはるはず……」

「コンゴウ、今回の戦い、有望な新人が多いようだ……我々も覚悟を決めなければならぬのかもしれないだろうね」

ヨコスカ基地の司令部にして、ドックに今は係留されている改ドゴス・ギア級戦艦「天城」のブリッジで、予想以上にハイスピードで展開されている宇宙の戦況と、そして今ビルドダイバースや「アナザー

「テイルズ」に続いて次々と降下してくる傭兵部隊を俯瞰しながらそつと目頭を押さえた。

確かに問題のチャンプと、そして因縁のロンメルをなんとか抑えるために宇宙エリアは最初からルナツォを放棄する前提で、絶対防衛線を衛星軌道上に構築、ゼダンの門とコンペイトウになるべく上位の戦力を集結させることで遅滞戦を行う——それまでは恙無く進んでいたのだが、見誤ったとするならば「セルピエンテ・クー」の連中と、「アナザーテイルズ」なる新鋭フォースだろうか。

とはいえ、地上も地上で問題がなくなつたわけではない。

『なんだこいつ、どこから——』

『死ぬぜえ……俺の姿を見たやつは、皆死んじまうぞ！』

「……『死神』か、これはベルリンも持たないかもしれないな」

地上における主要な拠点は今回ベルリン、トリントン、北京、ニューヨーク、ブラジル、そして南アフリカに策定しているが、その一つが早速、ランキングには名を連ねていないものの、気ままに現れては戦場を荒らし回っていくとされるデスサイズの改造機を使うダイバーにしつちやかめつちやかにされ、そしてかの修羅場、「マゼラン大陸」からの来訪者たちは南アフリカ支部を破竹の勢いで踏み荒らしているのが現状だ。

いきなり領土の七割が失われるという懸念はないもの、戦力の逐次投入が悪手である以上、このヨコスカ基地だけは文字通り死んでも守り抜かねばならないし、それは各サーバーにおける主要な拠点も同じなのだ。

「全く……二万の軍勢を率いてもこれだ、だから」

「だから……GBNは面白いデスカ、テイトク？」

「ああ、全く持ってその通りだ！ 全軍に伝えろ、ここに蟻の一匹であつても踏み入れさせてはならないとな！」

アトミラールは脊髄を燃やされるような焦燥と、胃の辺りに痛みを感じながらも不敵に微笑んで、二万の軍勢に激励を下す。

そして、遊撃隊が上空からの迎撃を試みているヨコスカ基地——その対空砲火は更に激しさを増して、戦場の隙間を縫って降下してきた

のであろうレイダーガンダム制式仕様を引き裂いて、テクスチャの塵へと帰せしめる。

「僕とて伊達に……『GHC』の名を背負っているわけではないぞ……！」

眼光鋭く、アトミラールは静かに呟く。

そうだ、チャンプがなんだ。ロンメルがなんだ。

この戦いは、まだまだ始まったばかりなのだから。

そうとばかりにモニターを睨み付ける伴侶の姿にコンゴウは苦笑を浮かべながらも、「GHC」の副将として、各地の支部から飛び込んでくる悲鳴に対しての対処とそして戦力の配分というタスクに戻っていくのだった。



ヴァルガが何もかもが野放図になった地獄だとしたら、このヨコスカ基地は理路整然とした地獄が展開されているとわかっていい。

なんとか対空砲火を切り抜けて、着水点からヨコスカ基地に上陸を果たしたりリリカたちであったが、その苦労を嘲笑うかのように、いっぞやのレイドバトルを思い起こさせる大戦力が、寡兵であつても容赦はしないとばかりに怒涛の勢いで押し寄せてくるのだ。

「さてさて、どうしたものかねえ……つ、と……！」

遙か遠方に備え付けられている「アルテミスの傘」——アルミューレ・リュミエールが展開されているユニットを超長距離射撃でぶち抜きながら、ミワはこめかみにじわり、と脂汗が滲むのを感じていた。

『蟻一匹たりとも入れるなどは提督のお達しだ！ 野郎共、ボーナスが貰えるかもしれないんだから全力を果たせ！』

『コンゴウさんからエールを貰ったんなら、頑張らないわけにやあ行かんよなあ！』

ロービジカラーに統一されたウインダムが、次々と基地から発信しては、水中からの上陸を試みているゾゴックやズゴックといった水陸両用型のモビルスーツへと爆撃を加えて、基地正面からの正面突破を



愚直に試みるリリカたちにはドツペルホルン連装砲による手厚い歓迎が届けられる。

「……っ、お願い、Cファンネル！」

上陸したのはいいが一步も前に進めていないという現状を憂いながらも、リリカは決して焦ることなく、迎撃を一つずついなしながら、じりじりと、狙われやすいミワを守る形で戦線を押し上げていた。

思い返すのは、この「大戦争」に向けて参加した練習の記憶。

ヴァルガでは、今と同じように四方八方からの攻撃が飛び交い、拳げ句の果てには振り切れることも耐え切れることもできない「光」によって蒸発させられるという理不尽な経験をしたが、それに比べれば、現状はまだマシな方だ。

そして、その隙間で密かに参加していた武術大会——タイガーウルフが主催する「龍虎祭」において、最近破竹の勢いでフォースランキングを伸ばしているだけでなく、運営が作った金策ミッションで当たりを引き続け、殿堂入りを言い渡されるなど様々な伝説を現在進行形で作り上げている「ビルドライジングのケイ」と戦ったときのことを、リリカは思う。

ミサイルの中にトリモチを仕込むという搦手によりCファンネルの斬れ味を鈍らされたのは痛手だったが、なによりも対応できなかったのはあの必殺技だ。

今考えてみても、引き分けという結果に持ち込めたのが不思議な戦いであったが、あれだけの激戦に比べれば、推定戦力比が何対一であるかもわからない現状は、まだまだマシな方だと胸を張って言える。

そして、ドツペルホルンや基地に張り巡らされたトーチ力から飛んでくる弾にあの瞬間接着剤が仕込まれたトリモチが詰まっていけない以上——Cファンネルによる防護は、十全に機能するということだ。

「……お、お願いします！ カエデさん、ユユさん……！」

「リリカさんのためならば……お任せあれ、ですわ！」

「ふふ……これだけ固まってくれていると、かえって都合がいいというもの……！」

どんなに無尽蔵に見える戦力だとしても、どんなに絶え間なく降り

注いでいるように見える弾幕でも、それを操作しているのが人間かAIかという事情の違いはあったとしても、共通して「隙間」が生まれるというのが、リリカの得た教訓であり見解だった。

ブランシユに乗っていたときに戦った「MS斬りの悪魔」ことアズキは確かに強敵で、その洗練された剣術の型を一つ一つ繋ぎ合わせる戦い方には終始圧倒されていたものの、人間が呼吸を必要とする生き物である以上、リリカがそこに一瞬の隙を見出したのもまた確かなことである。

そしてそれは、「GHC」が誇る正面警護であつても同じだった。

微かに弾幕砲火が途切れた一瞬、その瞬間を見出してリリカはカエデとユユに、ツインバスターライフルと、IFBRによる掃討射撃を要請する。

目の前に見えるロービジカラーに統一されたウインダムの編隊は、全身にくまなくディテールが追加されるなど、相応にカスタマイズが施されているが、同じように作り込まれたカエデやユユが持っているツインバスターライフルと、そしてIFBRを耐えられるほどの装甲値は備えていないというのが、リリカの推測だった。

そして、その推測が正解であつたことは程なくして証明される。

『来るぞ、構えろ！』

『構えろつたつて、うわあああッ！』

それでも反応して、アンチビームシールドを構えられた辺り、ヨコスカ基地に配備されている戦力は末端であつたとしても一流だということだろう。

しかし、圧倒的な、不可避の暴力から逃れることはできない。

あの日リリカたちが遭遇した「光」を纏う極光の化身であったり、或いはグラン・サマー・フェスティバルの時に鉢合わせてしまったオーマ・リ・オーが振るつた超広範囲攻撃の余波で蒸発した時であったり、範囲で巻き込んで威力で圧殺する攻撃の奔流から逃れることは極めて難しいことなのだ。

ウインダムの大群がテクスチャの塵に還つたことによつて生まれ、戦場の空白地帯に、次々と海中で息を潜めていた水陸両用型のモビ

ルスーツがぞろぞろと上陸していく光景を横目に見て、リリカはほつと胸を撫で下ろした。

第一の防衛ラインは突破できたということだ。

そして、一際高く水飛沫を上げて上陸してきたそのガンダムを、リリカは小さく一瞥する。

『水中戦力の掃討は俺たちがやっておいた。その……ありがとう、「アナザーテイルズ」……コアチェンジ・マーキュリートウアース、ドッキング・ゴー……!』

そのガンダム——群青色のアーマーに身を包んだ【メルクワンガンダム】のアーマーが外れて、海中から飛び出してきた支援機から分離した青色のアーマーに身を包んでいく姿を、リリカはただ見送ることしかできなかったものの、彼の顔と、そして今【アースリイガンダム】に姿を変えたガンダムには、見覚えがあった。

レイドバトル「アルス」戦の立役者である「もう一つのビルドダイバーズ」こと「BUILD DIVERS」は、海中からヨコスカ基地への上陸を試みていたのであった。

そして、彼の——「ヒロト」のアースリイガンダムに続く形で、【ガンダムイージスナイト】や【ウォドムポッド】、【エクスヴァアルキラндаー】といった「BUILD DIVERS」の面々が次々に海中から姿を現し、第二防衛ラインへと戦線を押し上げていく。

ヒロトからすれば、些細な一言だったのかもしれない。

リリカは眦にじわり、と滲んだ涙を拭いながら、彼らに続く形で第二防衛ラインまでフルブランシユを加速させる。

「……ありがとう、って……言ってくれた……」

知らない人から疎まれることはあっても、感謝されることは人生で数えるほどすらなかった。

だからこそ、そんな些細な一言が、だけど、リリカにとっては大きな一言が、ただ嬉しかったのだ。

「……良かったねえ、リリカちゃん」

「……うん、お姉ちゃん……!」

だからこそ、負けられない。

泣き虫な自分は、些細なことで今みたいに涙を零してしまいかも  
れないけれど、誰かの厚意に報いるために、そして今側で支えてくれ  
ているミワたち——「アナザーテイルズ」の仲間たちと、フルブラン  
シュのために必ず勝利を持ち帰らんと、リリカは静かに、しかし激し  
く、心火の炉に炎を灯すのであった。

## 第五十八話 「宇宙戦艦大戦争」

【GHCと】 大戦争イベントスレpart. 124 【俺らの戦い】

1. 名無しの兵士ダイバーさん

ここはフォースアライアンス「GHC」が主催する「大戦争」イベントについて語り合うスレッドです。大戦争に向けてのビルド構築やアライアンスの提案など、専門的な話題はそれぞれ別のスレッドでお願いします。

Q. 「大戦争」イベントって何？

A. 一言でいうならセントラル・エリア以外の全サーバーを舞台にした超巨大な陣取り合戦です。二万対二万で戦います

Q. どうやったら勝てんの？

A. 「GHC」が持つてる領土の七割を制圧するか六割以上を制圧した状態で本拠地のヨコスカ基地を制圧したら俺らの勝ち、時間内に失敗したら負けです

Q. 「大戦争」に参加してみたいんだけど

A. 傭兵プレイかその経験がなければ傭兵派遣フォースと一時的にアライアンスとか組むと参加できます、詳しくは専スレで聞いてください

【GBNまとめwiki】<http://www.gbn.jp/wiki/>

【GBNビルド構築相談スレ】<http://www.gbn.jp/build/>

【GBNフォースアライアンス募集スレ】<http://www.gbn.jp/fo/>



24. 名無しの兵士ダイバーさん  
とうとう始まっちゃったな

25. 名無しの兵士ダイバーさん  
一体何が始まるんです？

26. 名無しの兵士ダイバーさん

大惨事大戦だ

27. 名無しの兵士ダイバーさん

大惨事（主にチャンプ一人が巻き起こす）

28. 名無しの兵士ダイバーさん

大惨事（アトミラールの胃壁が）

29. 名無しの兵士ダイバーさん

二万の軍隊率いてるのに領土の三割をチャンプに奪還されたあれは嫌な事件だったね……

29. 名無しの兵士ダイバーさん

まともにやりあつたら「GHC」なんて本来勝ち目ないはずなのに  
な

30. 名無しの兵士ダイバーさん

チャンプはさあ……（定型文）

31. 名無しの兵士ダイバーさん

なんかそれでアトミラールが吹っ切れたらしいから今年は大分違うことになるかもしれないってこの前配信で言ってたな

32. 名無しの兵士ダイバーさん

あー、そういや「アルス」戦でお披露目してたあの拡散ハイパーメガ粒子砲ぶっ放してくる可能性とかあんのか、胃が痛くなってきた

33. 名無しの兵士ダイバーさん

どう考えても波動砲です本当にありがとうございます

34. 名無しの兵士ダイバーさん

あの後艦隊とかもリニューアルしてるし、何よりあれだけの軍勢突破しても本拠地のヨコスカ基地にテトラちゃんとかとユニちゃんって障壁が待ち構えてるのがなあ

35. 名無しの兵士ダイバーさん

今年はどうダメかもわからんね

36. 名無しの兵士ダイバーさん

それでもチャンプなら……ロンメルさんならきつとなんとかしてくれる……！

37. 名無しの兵士ダイバーさん

他力本願で草

38. 名無しの兵士ダイバーさん

いや冷静に考えてさあ、傭兵やってたらそういう奴らとフォー스アライアンス組んでれば参加できるとはいえ二万対二万って正気じゃないし、言つちまえば俺らは烏合の衆みたいなものだぞ、チャンプとかあの辺がおかしいだけで普通なら勝ち目ないからなこのイベント

39. 名無しの兵士ダイバーさん

言うて「セルピエンテ・クー」とか戦争屋のアリムとかあの辺もかなり強いから烏合の衆って程じゃないんじゃない？

40. 名無しの兵士ダイバーさん

今年は「ビルドダイバーズ」も参戦してるからな、負ける気せーへんGBNやし

41. 名無しの兵士ダイバーさん

早速死亡フラグ立てるのやめてくれませんかね

42. 名無しの兵士ダイバーさん

どっちのビルドダイバーズだよ

43. 名無しの兵士ダイバーさん

どっちもだよ

44. 名無しの兵士ダイバーさん

GHCもGHCでバエルお嬢様やルヴィーラネキを戦力に加えるから正直なところどっちが勝つのかに関しちやこれももうわかんねえな、お前どう？

45. 名無しの兵士ダイバーさん

アトミラールも今年は荒れるかもしれないって言ってたしルールにエラツタ入ってるしでその辺はわからん、正直楽しんだ奴が勝ちだと思う

46. 名無しの兵士ダイバーさん

大戦争が始まると普段見ない連中とかも参戦してくれるから地味に嬉しいんだよな、マゼラン大陸のSD使いたちとか都市伝説じゃなかったんだなってびっくりしたわ

47. 名無しの兵士ダイバーさん

この前はベルリン支部を瞬く間に制圧してたあの連中か……ランキング外でもこのゲーム強い奴ら多いから侮れないんだよな

48・名無しの兵士ダイバーさん

Eランクダイバーだと思ってたら実はGPD復帰のエンジョイ勢でした！とか割とよくあるから困る

49・名無しの兵士ダイバーさん

おい誰だよフラグ立てた奴

50・名無しの兵士ダイバーさん

早速フラグ回収されてて草

51・名無しの兵士ダイバーさん

フアーwwwwwwww

52・名無しの兵士ダイバーさん

まさかルナツの防衛放り投げて拡散ハイパーメガ粒子砲戦術取ってくると思わんかったわ

53・名無しの兵士ダイバーさん

チャンプー！早く来てくれー！手遅れになっても知らんぞー！

54・名無しの兵士ダイバーさん

ヨコスカ基地直上エントリーは去年経験済みだから衛星軌道を絶対防衛線にしたのはある意味英断だな、ルナツとか別に落ちてもGHC的に痛手ではないしなあ

55・名無しの兵士ダイバーさん

そのチャンプはゼダンの門に配備された戦艦の数が多くて苦戦してるっぽいな、どこに配置されるかは運ゲーとはいえアトミラールも随分辛酸舐めさせられてご立腹だったんだろうな

56・名無しの兵士ダイバーさん

ダメだ、「第七機甲師団」はコンペイトウに配置されてるし完全に分断されてるわこれ、制圧までファストトラベル使えないからヨコスカ基地奇襲組は頑張ってくれ

57・名無しの兵士ダイバーさん

頑張れじゃねえよお前も頑張るんだよ

58・名無しの兵士ダイバーさん



タカキも頑張ってたし！

59・名無しの兵士ダイバーさん

タカキは休め

60・名無しの兵士ダイバー

冗談言ってる場合じゃねえんだよなあ

61・名無しの兵士ダイバーさん

あの「アルス」相手に向けられた暴力がこっちに降り注げばどうなるかって話だわな……

62・名無しの兵士ダイバーさん

誰か白色彗星持ってない？ あれでも引つ張り出さんと勝てん気がする

63・名無しの兵士ダイバーさん

そんなもん「ナイトメアハロウイン」ですら作ってるか怪しいんだよなあ

64・名無しの兵士ダイバーさん

一瞬で衛星軌道に展開してた戦力の六割近くが消し飛んで草も生えない

65・名無しの兵士ダイバーさん

お、「セルピエンテ・クー」の連中とアリムは生きてたみたいだな、旗艦の首落としにかかっているわ

66・名無しの兵士ダイバーさん

あんなもん連発できないから降下するなら今だぞ

67・名無しの兵士ダイバーさん

げえっ、密集陣形！

68・名無しの兵士ダイバーさん

こりや二射目は早々に捨てて少しでもヨコスカ基地に降下する連中減らすって算段か……「AVOLON」と「第七機甲師団」が分断されちまつてるのが完全に俺らにとつちや裏目だな

69・名無しの兵士ダイバーさん

それでも「アナザーテイルズ」とかは降下に成功したっぽいな

70・名無しの兵士ダイバーさん

降下してからが本当の地獄だぞ、太平洋沿岸に配置されたけど水中も基地近くも迎撃戦の準備万端で上陸できねえ

71. 名無しの兵士ダイバーさん

レイテ級戦艦とかまたレアなもん作ってんなおい……

72. 名無しの兵士ダイバーさん

キット化されてないからあれフルスクラッチだよな、それを三隻浮かべて水中にユーコン級とかまで配備されてるとか今年のGHCは俺らを全力で潰しにかかってきてんな

73. 名無しの兵士ダイバーさん

水中はなんか知らんけど小文字の方のビルドダイバーズがいくれるから割となんとかなるっぽいぞ、むしろ空挺降下組が無理無理の無理よ

74. 名無しの兵士ダイバーさん

他の有名ランカーとかも運良く別のデイメンションに散ってる感じか

75. 名無しの兵士ダイバーさん

FOEさんがニューヨーク支部の制圧に乗り出してるって話が出てきた、地上に関しては割とヨコスカ基地に戦力集中してるからなんとかかなりそうな気配はしてこないでもない

76. 名無しの兵士ダイバーさん

ベルリンと南アフリカが今のところこっち側有利に運んでる感じだな、マゼラン大陸の連中は伊達じゃないな

77. 名無しの兵士ダイバーさん

あのデスヘルのカスタマイズ機ってランカー？ 見たことないけどやたら強えわ

78. 名無しの兵士ダイバーさん

わからん、だが取り敢えず地上は膠着状態で宇宙がやや不利ってとこか……実質六割守れば勝ちだから流石にアトミールも戦力集中させるところに集中させて捨てるのは捨てる感じだな

79. 名無しの兵士ダイバーさん

フォビドウンヴォーテクスとか投入してくる奴があるか馬鹿！お

かげで俺のアメイジングズゴックがスクラップにされて涙が出ますよ

80. 名無しの兵士ダイバーさん  
金満集団だからな、何が出てきてもおかしくはないぞ

81. 名無しの兵士ダイバーさん  
普段チャンプやらロンメルさんにしっちゃんかめっちゃんかにされてるだけでアトミラルっつーかGHCも十分脅威なんだよなあ……

82. 名無しの兵士ダイバーさん  
そりゃあ全鯖巻き込んだレイドで戦艦の使用も無制限となりや連中の土俵か、クソっ、絶対ヨコスカ基地潰してやるわ

83. 名無しの兵士ダイバーさん  
その意気だ、せめてチャンプがゼダンの門取り返すまでは持ち堪えてくれ、俺はニューヨークの攻略で手一杯だから頼むわ

84. 名無しの兵士ダイバーさん  
【速報】ヨコスカ基地第一防衛ライン突破

85. 名無しの兵士ダイバーさん  
「アナザーテイルズ」がやってくれたみたいだな

86. 名無しの兵士ダイバーさん  
さり気なくアルテミスの傘も潰されてるから第二防衛ライン以降も少しだけど楽になったな

87. 名無しの兵士ダイバーさん  
乗り込めー

88. 名無しの兵士ダイバーさん  
わあい

89. 名無しの兵士ダイバーさん  
レイテ級三隻は小文字の方のビルドダイバーズが潰してくれたっぽいし橋頭堡は確保できたな、俺も今から上陸するわ

90. 名無しの兵士ダイバーさん  
言うてまだまだ迎撃設備と戦力残ってるし対空砲火と対地迎撃には気をつけるんだぞー



リリカたちがヨコスカ基地の第一防衛ラインを突破してしばらく、「AVAILABLE」が配置されていたゼダンの門もまた、攻略が進んでいた。

虎の子であるトライエイジシステムを起動したチャンピオンの一撃によって、ゼダンの門に配置されていた艦隊の実に八割が消失するという戦果は、反撃の狼煙として十分であり、戦況を観測しつつ要塞内部の制圧に乗り出していた「エーデルローゼ」の面々も、ここに来てようやく戦況が大きく動き出したのだと感じていた。

「ディフェンダーはゼダンの門の最奥部に配置されているわ、リーシャは前衛を、ランシエは殿をお願い。サーヤは私と一緒にガーディアンを葬るまでエネルギーと戦力を温存、これでいいわね？」

「ええ、依存はないわ、ユキ」

「了解しました、盾役は任せてください」

ユキから飛ばされた指示に従って、単縦陣の形になってゼダンの門内部を突き進んでいく「エーデルローゼ」だったが、戦力の大半は宙域と外周部に配置されていたこともあって、内部へ侵入してからはさほど苦労した印象はない。

ディフェンダーとして配置されている機体がなんなのかは知らないが、リーシャとランシエが新たにアメイジングストライクフリーダムとハイペリオンをミキシングした「ストライクハイペリオン」の二枚盾があれば対応は可能な範囲だと、要塞内部に配置された戦力からユキは推測する。

地上がどうなっているかについては掲示板などでリアルタイムで確認しているものの、どうにもニューヨーク支部や北京支部といった主要な拠点だけは死守すべく、ベルリンと南アフリカ以外の戦況は芳しくない、というのが現状であるようだ。

その事実になんげばかり焦りを覚えながらも、ユキは己に課された使命を、ゼダンの門の制圧を全うすべく期待を加速させる。

ストライカーコアユニットに接続されている二枚のゲシユマイ

ドイツヒ・パンツァーと、そして二門のレールガン。それはユキが来るべき決戦に備えて制作した、「ガンダムストライクセカンド」の決戦装備のようなものである。

レイダー、フォビドゥン、カラミティをモチーフとしたその装備にユキは「ヴァイスストライカー」という名前を付けていた。

ヴァイス、といつても白を意味するドイツ語ではなく、悪を意味する英語の方が由来であり、文字通り「悪の三兵器」の要素を全て取り込んだそのストライカーが持ちうる戦力は絶大なものとなっている。

辿り着いた最奥部に鎮座していた、地球連邦カラーに塗り替えられたジオングが、侵入者であるユキたちの存在を感知して、メガ粒子砲を一斉射する。

——だが。

「効きません！ ユキさん！」

「了解したわ、三十秒以内で片付ける。サーヤ、出口でランシエのバックアップに回って」

「わかったわ、ユキ！」

リーシャのストライクハイペリオンが展開していたアルミューレ・リユミエールがジオングの放ったビームを防いで、影に隠れていたユキは躍り出ると同時に、出口付近の警戒に当たっているランシエのバックアップへとサーヤを回らせる。

正直に言ってしまうのであれば、期待外れもいいところだった。

要塞のデイフェンダーとして配置されているのがまさかジオング一機だけだというのは、物足りないにもほどがある。

もちろん、リソースが限られている以上アトミラールはゼダンの門に侵入されてからではなくされるまでの防衛に力を入れていたというのは理解できるのだが、ご自慢の艦隊もあのチャンプが掃討してしまった以上、自分たちのやっていることはただの事後処理に過ぎない。

ジオングが展開した有線ビーム砲を、左腕に装備している打突兵装——「パンツァーアイゼンイー」で弾き返すとユキはストライカーパック上部に装備している二連装レールガン「エクツァーン改」で、ジ

オングの胴体部を一撃の元に撃ち抜いた。

だが、ジオングとしてもガーディアンを任せられただけの意地があり、なんとか頭部を切り離して脱出を図ったものの、即座に駆け抜けてシユベルトゲベールを一閃するヴァイスストライクセカンドによって、五秒もしない内にテクスチャの塵へと還っていく。

【Result：拠点「ゼダンの門」を制圧しました】

無機質なシステム音声が、宇宙に聳える要塞の一つが陥落したことを「エーデルローゼ」に、そしてゼダンの門周辺で戦っていた傭兵連合に告げるものの、ユキがそこに何か感慨を抱くことはない。

ただ、やるべきことをやって全うした。

そこに満足してはまだまだ二流だと、かつて「セルピエンテ・クー」に所属していたとき、ナユタから教えられた言葉を思い返して、ユキはコックピットの中でふう、と、小さく息をついた。

「ファストトラベルが解禁されたわね。私たちも行くわ」

「衛星軌道ですか？ それともコンペイトウの支援に？」

「……戦局から見れば、どこに行くにしろ地上を優先するべきね。悪いけれど、コンペイトウは『第七機甲師団』に任せることにするわ」「了解しました、それでは」

ユキからの指示を受けたリーシャたちは、衛星軌道エリアへと転移していく。

ゼダンの門が落ちたということは、チャンプがどちらに向かうかはわからないが、最大戦力である彼がフリーになったということだ。

先ほどまでは掲示板も悲観的になっていたが、ここからならどうとでも巻き返すことができる。

「……それにしても、『アナザーテイルズ』ね」

ユキはファストトラベルによって衛星軌道へと転送されながら、地上の要衝にして「GHC」の本拠であるヨコス力基地で奮闘しているのであるそのフォースの名前を誦じて、静かに目を伏せた。

確かに有望なフォースだとは思っていたが、これだけの短期間でここまで伸びてくるとは思いもよらない幸運だ。

だからこそ、自分も今の位置に胡座をかいているわけにはいかな

い。

——より強く、そしてより高く飛ばなければ、ただ、落ちていくだけなのだから。

ユキは言葉には出さず心中でそう呟き、新たなる戦場へと解けていくのだった。

## 第五十九話 「流星、空を切り裂いて」

リリカたちがヨコスカ基地上陸の橋頭堡を切り開いてからしばらく、宇宙の戦線も傭兵連合側に天秤が傾きつつあったのか、大気圏からあらゆる手段を用いて降下してくるガンプラたちが、時には迎撃の対空砲火で四散し、時には上陸を果たしたはいいものの、未だ健在である「GHC」制式仕様のウインダムたちに包囲殲滅をかけられるという光景が展開されていた。

しかし、「GHC」側も無傷で済んでいるわけではなく、宇宙からであれば映像作品「機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ」のようにウェイブライダー形態のリゼルC型をサーフボード代わりにして大気圏突入を果たした猛者たちもいれば、対空砲火を掻い潜って、今や最前線となっている第三防衛ラインまで合流してくるダイバーたちが後を絶たないのもまた事実であり、それがアトミラールの頭を悩ませている。

宇宙が動き出したということは、あのチャンプが情勢をひっくり返したのだろう。

チャンプが配置されたゼダンの門と、今も「第七機甲師団」が奮闘し続けているコンペイトウには上陸を阻止するため、多めに戦力を割いていたつもりだったのだが、いざ蓋を開けてみればこれだ。

「……とはいえ、よく持った方ではあるね」

「Oh, Jesus……相変わらず無茶苦茶にも程がありマース……」  
巨大な拳によって粉碎されていく艦隊を一瞥し、アトミラールの隣に控えているコンゴウもまた目を見開いて、溜息を吐き出す。

チャンプに必殺技であるトライエイジシステムを切らせたのは、戦術的に成功であったものの、戦略的に見ればゼダンの門が落ちることで衛星軌道に敷いた布陣を突破される確率が上がるのは大きな痛手だ。

アトミラールは目頭を押さえて嘆息するが、それでも未だ健在の「山城」を筆頭とした残存艦隊は敢闘している方である。

だが、目下の問題はヨコスカ基地の防衛ラインが第三まで突破され



ているということだろう。

アライアンスを組んだフォースや、自社に所属するダイバーの中でも選りすぐりの戦力を配置したつもりではあったのだが、中々どうして事がうまく運んでくれないのが戦場の常ということだ。

そんなことはわかっているのだが、ここで傭兵連合をどうにか押し返せるかどうかで、「GHC」の未来は決まるといってもいい。

それについては正直なところ微妙なラインにあることも同じだ。

南アフリカ支部を瞬く間に陥落させたマゼラン大陸からの来訪者たちは多くのダイバーたちの畏敬を集めながらもベルリンとモスクワに分散して侵攻を続けているし、ニューヨークでは例のFOEさんが暴れ回り、北京の大地は「ジャバウォックの怪物」によって踏み荒らされている。

「どうしてこう、ハイランカーというのは災害のようなダイバーしかないのだろうね、コンゴウ」

「災害だからデース」

「……それもそうか、しかしこのまま引き下がるわけにもいかない。

『天城』浮上の準備を進めてくれ、コンゴウ。その間に……いや」

一瞬己の中に浮かび上がってきたその選択肢は、確かに合理的なものではあった。

だが、「GHC」が有する戦力の中でも筆頭である三桁ランカー……ダイバーネーム「ユニ」は、アトミラル自身の愛娘であり、そんな娘を仮想とはいえ死地へと送り込んで時間稼ぎを頼まなければならぬという状況への不甲斐なさと、そして親心が邪魔をして、アトミラルが抱かんとしていた鉄心が揺らいでいく。

第三防衛ラインまでこうも早く辿り着かれたのは、あの「アナザーテイルズ」という最近話題のフォースに所属している「緋きスナイパー」が見事にアルテミスの傘をぶち破ってくれたせいだ。

歯噛みするアトミラルだったが、最終防衛ラインまで戦力を温存している間に第三防衛ラインが突破されましたとあっては、「第七機甲師団」と並んで称される戦略派フォースとしての名折れでもある。

ここに来て、戦力の逐次投入に近いことをやらされている時点でア

トミラールとしては大分屈辱に唇を噛むような事態であったし、何よりそれをやらかしてくれた「アナザーテイルズ」をマークしていなかった自身の判断ミスに、苛立ちが募っていく。

『お父さん』

「ユニか、突然どうしたんだい？」

『わたし、行くよ……テトラお姉ちゃんと一緒に』

突如として通信ウィンドウにポップしてきた愛娘の姿とその言葉に、頭を抱えていたアトミラールは呆気にとられたような表情を浮かべた。

ここから逆転の目があるとするなら、それは「天城」の拡散ハイパーメガ粒子砲によって敵を一網打尽にすることぐらいしかない。

だからこそ、少しだけ予定を早め、最終防衛ラインの要石として残っていたユニと、そして彼女が口にした個人ランキング4位の「現人神」の一柱である「テトラ」を先攻させて、浮上までの時間を稼ぐかどうかで揺らいでいたのだが、それさえ娘にはお見通しだったようだ。

「……すまない、ユニを死地に送り出すような真似をしてしまつて」  
『ううん、大丈夫だよ、お父さん……生きてたら、生きてるなら負けじゃないって、チャンスはあるんだって、テトラお姉ちゃんやお父さんたちがわたしに教えてくれたから……それじゃ、行ってくるね』  
少しだけウエーブがかかった薄紫色の髪とよく似た愛娘の瞳には、かつてのマスダイバー動乱によって負った傷の名残などどこにもない。

一角の戦士として、ダイバーとしての覚悟が宿ったその目に成長と、少しの寂しさのようなものを感じながらも、白磁をイメージした複雑な光沢塗装が行われているギャンと共に飛び立っていく愛娘の機体——ギャン・クリーガーとウィンダムの子ミキシングモデルである【ギャン・ダム】を見送って、アトミラールは軍帽を少しだけ目深に被った。

そうだ。

何を怖気付く必要がある。

「そうだ、ここに多くのダイバーが集っているのなら、一網打尽にすれば済む話だ……全く、ユニには教えられたな」

「ええ、テイトク……親が見ぬ間に子は育つ、そういうものデース」

一発逆転の博打にも近い策ではあったものの、それでも打てる手があるのであれば戦線を放棄するなど、総指揮官としては愚行もいところだ。

少なくともこのGBNにおいては、何度敗北したとして、何度挫折を味わったとしても立ち上がることができるのだから。

アトミラールは案の定、第三防衛ラインの要として配置していた、漫画作品「機動戦士ガンダム0083 Rebellion」に登場する連邦仕様のビグ・ザムが「アナザーテイルズ」のリリカによって撃墜されたのを横目に見ながらも、その瞳には苛烈な闘志を宿して、残存する戦力に指示を下していく。

『提督、第三防衛ラインは限界です、最終防衛ラインまでの後退を——！』

「今増援が行く！　そして『天城』を浮上させる！　だからこそ、厳しいのはわかっている……だからなんとか持ち堪えさせてくれ！」

『……っ、了解しました！　第一から第三中隊を再編、「アナザーテイルズ」をマークします！』

「頼んだぞ……！」

アナザーテイルズ。

全く無名のフォースだったことを侮っていた訳ではないが、中々どうしてやってくれるものだとアトミラールは苦笑と、そして少しの憤慨を唇の端に滲ませながら、地下ドックに格納されている大本営にしてこのヨコスカ基地のデイフェンダーを務めている「天城」の抜錨へと取り掛かってゆくのだった。



「やああああ……っ……！」

ミワの超精度による定点射撃でフィールドジェネレーターを破

壊されたビグ・ザム（連邦仕様）の巨体を、リリカがリミテッドコー  
ルによって呼び出したトライスラッシュユブレイドの刃が真つ二つに  
切り裂いていく。

大気圏から次々と流星のように味方の増援が現れてくれることも  
あつて、ヨコスカ基地における戦力の均衡は傭兵連合、つまりはリリ  
カたちの方に傾きつつあつた。

「ふふ……数を揃えて戦う、基本的な戦術です……ですが、ユユはそう  
甘い女ではありませんよ……？」

「ええ、全くですわ！ これぐらい、ヴァルガと比べればなんてことあ  
りませんもの！」

ユユとカエデを遊撃手として、リリカがミワを守りながらアタツ  
カーとして侵攻していく作戦は、他のダイバーたちが奮闘してくれて  
いることもあつて概ね上手くいっていた。

勿論、この破竹の進撃、その中心にいるのが「アナザーテイルズ」で  
あることに疑いはないものの、ここまでラインを押し上げられたのは  
傭兵連合側の奮闘が大きいこともまた確かである。

計三機配置されていたビグ・ザム（連邦仕様）の一機は、ヒロトの  
アースリイガンダム、もといコアガンダムIIを中心とした大型合体  
機である「リライジングガンダム」が正面から潰しているし、もう一  
機残っている方に至っては、リゼルC型をサーフボードに戦場へ舞い  
降りてきたアリムが一人で相手取っていた。

「ハツハハハア！ いいねえ、いいねえ、戦争だ！ おい野郎共！ だ  
んまりしてる暇があんなら弾撃ちな！ タンク役ならアタシが引き  
受けてやるからよ！」

傭兵集団「セルピエンテ・クー」を率いるナユタはまだ他のメンバー  
と共にルナツー防衛師団だった艦隊の掃討に当たっているものの、ア  
リムが知る限りではコンペイトウ方面も「第七機甲師団」の奮闘に  
よつて巻き返しつつあるらしいし、この本拠地を潰せば趨勢は一気に  
こちらへ傾くといつてもいい。

だからこそ、彼女の操るウォーモンテローはジャベリンを巧みに  
扱つてビグ・ザム（連邦仕様）の対空砲火を掻い潜り、その注意を一

身に引き付けているのだ。

「さてさて……撃てって御所望なら撃つしかないよねえ、リリカちゃん」

「うん、お姉ちゃん……私は正面を警戒するから、Cファンネル……全部持つてって」

「ありがとねえ、それじゃそれじゃミワちゃん、頑張っちゃおうよ……！」

残存するCファンネルがバリアを形成してフリーダムガンダムルージュティラユールを包み込み、その内側から構えたツダの対艦ライフルをミワは残存している最後のビッグ・ザム(連邦仕様)のIフィールドジェネレーターへと向ける。

リリカもすつかり遅しくなったもので、迫り来る「GHC」制式仕様様のウインダムを一对多数という不利な条件下に置かれても問題なく処理しているし、カエデとユユに至っては戦場を好き放題引つ掻き回しているのだから、狙撃に心配はない。

照星を覗き込む瞳が、Iフィールドジェネレーターを捉え、すう、と短い呼吸と共にミワが必中の弾丸を放とうとした、その時だった。

『な、なんだ!? 空から何か降って——うわあああッ!』

『こいつは……ダインスレイヴだ! 超小型の!』

前線でウインダムと鏝迫り合いをしていたグレイズリッターを操るダイバーが悲鳴を上げるのと同時に、秒間何連射なのかを数えることが馬鹿馬鹿しくなるほどの弾幕砲火が降り注いで、傭兵連合のガンブラを次々にテクスチャの塵へと還していく。

ミワはその状況にあつても動揺せずに引き金を引いていたものの、リリカのCファンネルが大分消耗していたこともあって、フリーダムガンダムルージュティラユールも、VPS装甲の庇護があるとはいえ、決して軽んじることのできないダメージを負わされていた。

「お姉ちゃん!」

「……っ、今のは効いたねえ……!」

左腕は破損し、頭部メインカメラの右側もまた大破、背中インコムを搭載したウイングバインダーもほぼ大破と、Cファンネルに守ら

れていなければどうなっていたかわかったものではない惨状に、ミワは小さく歯噛みする。

「お姉ちゃんに……手は出させない……!」

リリカはその超小型ダインスレイヴを発射するガトリングガンとでもいうべきものを装備した空中の機体を舐めつけて、弾幕砲火を回避しながらドツズライフルによる牽制射撃を放った。

しかし——突如として戦場に飛来した影は、そのウインダムとギャン・クリーガーを足して二で割ったような機体だけではない。

『「アナザーテイルズ」のリリカちゃんだっけ？ 悪いけど、あーしたちにも退けない理由があっかんね……!』

白磁をイメージして、徹底的なまで丁寧に白立ち上げからウレタンクリアによるコーティングが施されたそのギャンは、構えていたシールドでドツズライフルの一撃を文字通り跳ね返すと、ウインダムとギャン・クリーガーを足して二で割った機体、ユニのギャン・ダムを守るようにその眼前へと立ちはだかる。

極めて緻密に磨き出された光沢を放つ表面は、「ヤタノカガミ」と似たような性質を得ることに成功していた。

リリカは自身の方に跳ね返ってくる弾に困惑しながらも、ならば、とばかりに、残っている遠隔操作兵装——TRYファンネルをその機体、【ザ・ギャン】へと解き放ち、牽制をかける。

「わ、私だって……私だって……!」

「リリカさん、危ないですわ!」

だが、リリカは知る由もないものの、このザ・ギャンを操るダイバー「テトラ」は、個人ランキング4位に名を連ねる猛者の中の猛者とでもいうべき存在だ。

手動で操作していたのにも関わらず、リリカが放ったTRYファンネルの軌道を全て瞬時に見切ると、テトラはリリカが次に位置取るうとしている場所を予測して、そこにあらかじめビームサーベルによる斬撃を「置いて」いたのだ。

それに気づいたカエデがシザーソードで防御してくれなければ、今頃自分は細切れになっていたことだろう。

「あ、ありがとうございます……カエデさん……」

「なんのこれしき、リリカさんを守るのはわたくしの役目でもありませんから、当然ですわ!」

上位ランカーの神がかった実力に冷や汗を滲ませ、リリカはカバーに入ってくれたカエデへと感謝する。

だが、その代償は決して軽視できるものではない。

ただのビームサーベルであるはずなのに、対ビームコーティングが施されているにも関わらずカエデのシザーソードは機体の代わりに両断されてスクラップとなり、それに気付いたユユが合流しようとした刹那の隙に、彼方から飛来した一発の弾丸がそれを阻む。

『申し訳ありませんが、お二人の邪魔をさせるわけにはいきませんので』

「ふふ……元傭兵メイドのルヴィーラさん、でしたね……ユユの邪魔をするというのであれば……」

『するのであればどうなるのか、それを示すのは言葉ではなく結果です』

四脚に改造したルヴィーラの機体が構える狙撃銃は、狙いを付けたユユのG―イデアが持つIFBRを的確に射抜いて爆散せしめる。

咄嗟に展開したIFフィールドシールドによって、二撃目の直撃は免れていたものの、あのルヴィーラという狙撃手の腕前はミワのそれに勝るとも劣らないといった風情だろう。

そして何より、自分を挑発してきたということは、この場における脅威がユユである、ということをなによりもわかっているということだ。

できることならば無視してリリカたちのカバーに入りたいものの、狙撃手を放置すればどうなるか、というのはGBNの歴史が物語っている。

「お兄様であれば、もう少し器用に対処できたものを……!」

珍しく微かな苛立ちを露わにして、ユユはIFフィールドサーベル……IFBSを展開すると、ルヴィーラの予測射撃を全て掻い潜ってその懐に飛び込まんとするが、四脚への改造を施したことで、地上に

おける旋回性と機動性を高めたその機体はのらりくらりと距離をとって、中々ユユを近づけさせようとはしてくれない。

だが、地走型の機体は、それが尖った長所であるなら、短所も存在しているということだ。

戦況を俯瞰してしていたリリカが切り離れたトライバードが、ルヴィーラを捉えて、機体の先端部に備えられていたシグマシスキャノンを発射する。

それ自体は、ダメージだけを見るならば有効打とはなり得なかったものの、スナイパーに狙撃の準備をする時間を与えないという意味では、極めて合理的に機能していた。

『ファンネルとは……！』

「ふふ、リリカさんらしいですね……そしてファンネルは、ユユも持っているのですよ……？」

ユユは妖艶に、囁くような声で呟くと、そのファンネル——フォトン・ファンネルをリリカに続いて射出する。

背部ユニットから放出される余剰出力が形成したフォトン・ファンネルは、リリカが作った導線へと追いつまれたルヴィーラの機体に襲いかかり、直撃こそしなかったものの、腕部や頭部には確実なダメージを与えていた。

恐らくこの戦いの行く末はここで決まる。

ザ・ギャンと切り結びリリカも、ギャン・ダムを相手に舞い踊るようなマニユーバでユニを翻弄しているカエデも、ルヴィーラを相手取るユユも。

そして、地に伏しながらも無事だった狙撃銃を守りながら「その」瞬間に備えているミワも、この戦場にいる誰もが薄々と、そんな空気を感じていた。

宇宙での戦いにもケリが付いたのか、次々と、無数の機体がヨコスカ基地に、或いは「GHC」が誇る拠点に降下してくる様は、さながら流星のようだ。

駆け抜けるその一瞬、空を切り裂く願い星に望みを託すように、リリカは一瞬だけ目を伏せると、トライスラッシュユブレイドを大上段に



構えて、テトラの「ザ・ギャン」へと果敢に斬りかかるのだった。

## 第六十話 「イマジナリイ・アーク」

一桁の現人神、二桁の魔物、三桁の英傑。

その名を轟かせる彼らと鉢合わせた時、並のダイバーは何もできずに死んでいくしかないのだろうか？

答えは否である。

確率論的な、極めて考えるのが馬鹿馬鹿しくなるような可能性の話ではあるのだが、例え始めたての初心者であっても、「一撃当てる」という条件だけなら、相手がチャンピオンであったとしても達成できる可能性はあるにはあるのだ。

それがどれだけ天文学的な数字で、かつ現実的でないかを考慮しなければの話ではあるのだが、少なくともゼロであるということはあり得ない。

だからこそ、彼らは誰よりも臆病でいることを是としている。

ゼロにならない可能性を限りなくゼロへと近づけるために、そして下からは追いかけられ、上へは登り詰めなければならぬという甚大なプレッシャーを常に受けているハイランカーたちが取る戦術は、概ね似通っているといってもいい。

即ち、勝ち筋を拾うのではなく負け筋を潰すのだ。

トライスラッシュブレイドと切り結んでいたかと思えば、テトラが操るザ・ギャンは突如としてリリカのフルブランシユを蹴り飛ばして、弾頭一つ一つがフルスクラッチのシールドミサイルを発射する。

明るく、誰にでも優しいその人柄からは想像できないほどに冷徹なその戦い方から伝わってくる勝利への執念とでもいうべきものは、リリカの背筋を震え上がらせ、満身創痍のフルブランシユを追い込んでいく。

だが、負けられないのはリリカもまた同じなのだ。

「ブランシユアクセル、フルブースト！」

『お、来たね来たね、例の必殺技……！』

ノーモーションで突如として倍速化したフルブランシユの挙動に若干面食らいながらも、テトラはその余裕を崩すことなく、進行方向

を見切つて、そこにビームサーベルの斬撃を「置いて」おく。

事前にアトミラーから知らされていたから良かったものの、もしも全くの初対面であったなら確かにこのブランシユアクセルという必殺技は厄介なものであつただろう。

テトラが全てリリカの行動を読み切つていたことで、リリカは置いていたサーベルによる斬撃に自ら飛び込む形となる。

トライスラッシュブレイドを保持していた右腕を切り飛ばされたリリカは愕然として、眼前に聳える白磁の機体をただ見つめることしかできなかつた。

確かに一撃、鏑迫り合いに持ち込むことはできたかもしれない。だが、それだけだ。

逆についてしまえば、テトラがそれ以上を許してしまえばそれは負け筋に直結しかねないファクターであつたからこそ、彼女はランキングだけを見るならば遥かに格下であるリリカに対しても侮ることなく、本気で挑んでいたのだ。

だが、リリカももう、ただ泣いているばかりではない。

ごしごしと眦に浮かんだ涙を拭いながら、リリカは瞬時に使える武装の残りを把握する。

左腕は健全、右腕は肘から先が切り落とされたものの、トライバードの使用に支障はなく、そしてブランシユアクセルを発動させているために今のフルブランシユは、全身が攻撃判定に包まれているということになる。

それでも、勝てる可能性は少ないだろう。

と、いうより、例えばフルブランシユが万全であつたとしてもテトラにリリカが勝てる可能性は皆無に等しい。

だからこそ、選択肢はただ一つだ。

速度を活かし、ザ・ギャンを振り切つて逃走する——だがそれも、あの神がかった精度の予測斬撃が許してくれないだろう。

ならば、どうかこの場を生き延びる以外に選択肢はない。

リリカが腹を括つて、ザ・ギャンへと特攻をかけようとしたその瞬間だつた。

『後ろ！』

「読まれてたか……！」

先ほどまでビグ・ザム（連邦仕様）の相手をしていたりライジングガンダムのコアユニットとなっていたコアガンダムIIが小型のアツザム・リーダーを投擲したものの、テトラはそれさえも読み切つて斬り払つてみせる。

「えっと……『アナザーテイルズ』、こっちは『BUILD DIVERS』だ。支援する」

ぶつきらぼうにそう告げたコアガンダムIIを操るダイバー、ヒロトはビームサーベルを展開して、ザ・ギャンへと斬りかかっていく。

他の面々は地上で未だに尽きることが知らない「GHC」の戦力に苦戦させられていた中、ヒロトだけが空中に飛び上がったのは一度装着したアースアーマーをボルト・アウトすることで隙を作り出したからだだった。

だが、ライジングガンダムへの合体は著しくエネルギーを消耗する。

今のヒロトができることといえば足止めが精一杯だったが、蒼天を裂いて降り注ぐのは何も、彼一人だけではなかった。

「ごめん、手間取った！　こちら『BUILD DIVERS』のリク、今から君たちを援護する、『アナザーテイルズ』！」

同じく満身創痕といった風情で、右肩にはバエル・ソードの破片が突き刺さり、そして全身各所に大小様々な傷を負いながらも、なんとかアリアを下していたリクとガンダムダブルオースカイメビウスも、最前線に立つリリカを支援すべく、残された左腕に構えたメビウスアロンダイトでザ・ギャンへと勇猛に斬りかかっていく。

『テトラお姉ちゃん……！』

「おっと、悪いですけれど……貴女の相手はわたくしでしてよー！」

『っ、強い……！』

ユニが慌てて三対一という状況を打開すべく、テトラへのカバーに入ろうとしたのを見計らつて、カエデもまた、満身創痕のウイングゼロノーベルのスラスタを全開にして、ビームサーベルをギャン・ダ

ムへと振り下ろした。

混沌とした戦場ではあったが、その趨勢は、均衡を保つ天秤は確実に傭兵連合の側に傾きつつあるのは最早火を見るよりも明らかだった。

各地の拠点の制圧率は約四割に達しつつあり、その間にこのヨコスカ基地が落とされてしまえば、「GHC」はその自慢の統率力を失って瓦解することだろう。

だからこそ、リリカたちは死に物狂いでこのヨコスカ基地を制圧しにかかっているのだが、それがわかっているからこそ「GHC」も事實上、最終防衛ラインを押し上げる形でなんとか巻き返しを図ろうとしているのだ。

つまるところ、「GHC」にはまだ逆転の切り札が残されている。

リリカは戦線をじりじりと押し上げながらも、どこか根底に抱いていた違和感の正体に気付いて、はっ、と思わず顔をあげる。

テトラとユニも彼らが温存していた切り札であることに間違いはないだろう。

特に、ギャン・ダムによる火力支援は一時的にとはいえ傭兵連合の地上戦力の大半を喪失させるほどに強力なものであったし、なんなら今も超小型ダインスレイヴという、掠っただけでもヤバい代物を撒き続けている。

リクとヒロト、そしてリリカの三人に包囲されたテトラは一転して防御態勢に追い込まれていたものの、それでも、その瞳から焦りの類は伝わってこない。

むしろどこか余裕さえ感じさせるのは、虚勢も少なからずあるのだろうか、一桁ランカーとして戦場における状況の把握を適切に行えているからだといってもいいだろう。

ならば、この状況を覆せる切り札とは何か。

リリカはTRYファンネルをリクとヒロトが斬りかかるタイミングを作りやすいように、死角へと回して射出しながら考える。

あのビグ・ザムは確かに防衛ラインの切り札として相応しいものだったといえるだろう。

だが、ミワの狙撃によつてそれがご破算になったからこそ今、傭兵連合は有利に戦えているのだが、それさえひっくり返せるものがあるとするなら――

刹那、宇宙での記憶がリリカの脳裏にフラッシュバックする。

一瞬にして、衛星軌道上に展開した傭兵連合の六割が壊滅したあの拡散ハイパーメガ粒子砲。

あれがまだ残されていて、そしてヨコスカ基地に配備されているとしたら。

「っ、皆さん……！」

だが、それを何と伝えたものか。

大地が鳴動し、木々が悲鳴を上げるようにざわめいたのは、リリカが言葉に詰まったその一瞬、刹那の隙を突いてのことだった。

要塞化された「GHC」の本拠であるヨコスカ基地の司令部が二つに割れて、その地下から抜錨してくる白亜の巨体が、もはや1/1サイズに拡大されたモビルスーツですらも比較の対象とするのが馬鹿馬鹿しくなるほどの威容を湛え、大空高く抜錨する。

そして、その白亜の方舟がただ何もせず地下で起動の準備を待っていたわけではないことぐらいは、リリカにも瞬時に理解できた。

――逃げて！

リリカが咄嗟に叫んだ言葉が、どれだけのダイバーに通じていたのかはわからない。

だが、その巨体が、戦艦が浮上した瞬間に多くのダイバーたちは本能でそれを悟っていたといつてもいいだろう。

『ここまでよく戦った……君たちの敢闘は素晴らしいものだった、傭兵諸君』

白い滅びをもたらす巨艦のブリッジからポップした通信ウインドウには、軍帽を目深に被った長身の青年――アトミラルが、いつになく低く威圧的な声音で無慈悲に告げる姿が映し出されていた。

『だが、これでお別れだ――フォトンリングレイ、射出』

それを止められるだけの余力は、最早リリカたちには残されていなかった。そしてそれは、前線で侵攻してくる傭兵連合を食い止めてい

たテトラとユニをはじめとした「GHC」の兵士たちも同じだった。

『離脱！ ボサボサしているとあーしたちも巻き込まれっかんね！』

ザ・ギャンを操るテトラはいつになく切迫した声で叫び、カエデが今大上段から振りかざしたビームサーベルでそのコックピットを切り裂かんとしていたギャン・ダムを、ユニを搔つ攫つて浮上した巨艦、改ドゴス・ギア級戦艦「天城」の背後へと一息に駆け抜けていく。

「どうする、ヒロトオ!? リライジングはもう使えねえぞ！」

「……っ、すまない、カザミ！ 俺のミスだ、あれはもう——」

「……いいや、まだだ！ ユツキー！」

「……カエデさん、お願いできますか!？」

「合点承知ですわ！ この場にいる全ダイバーに通達しますわ、少しでも生き延びなければ……わたくしに続きなさい！」

どうするかを決めている時間の一秒でも惜しいとばかりに、「天城」の艦首に設けられた二門の特装砲が光を帯びていく刹那、リクは戦力として温存していたユツキーの「ジエガンブラストマスター」に、そしてリリカはカエデにツインバスターライフルによる迎撃を指示して、テトラたちが駆け抜けていった方向へと全力でブーストを噴かした。

それは、死に行つてこいと、そう言っているのと同義であるとりりカも把握している。

だが、カエデは何一つ嫌な顔をせずに、むしろそれでこそとばかりに毅然と笑顔を浮かべて、フォトンリングレイが展開された真正面に機体を運ぶ。

「ビルドダイバーズのユツキーさんでしたわね、貴方も大概物好きですわね」

「まあ、そうですね。でも……カエデさんもそうなんですよね？」

「ええ、全く。むしろこの状況でこそ、わたくしの望んでいるものは手に入る……!」

傭兵連合のガンプラたちも、カエデの呼びかけに集う形で、真正面から拡散ハイパーメガ粒子砲を止めるべく、続々と火力自慢たちが戦場へと集い、青空にその威容を誇る「天城」を撃ち落とすべく、各々

の武器にチャージを始める。

それは最早狂気の沙汰だといっても良かった。

勝ち目が万に一つもない無謀な賭けであることに、何ら疑いはない。

だが——この「大戦争」イベントにおける戦場は、何もヨコスカ基地に限定されたものではないのだ。

自分たちがここで倒れたとしても、相手に「天城」という切り札を使わせたというだけで、それだけで価値がある。

無論、相当な兵力を喪失することも織り込んだ上で尚、総大将であるアトミラールをこの戦線に引きずり出せたというのはアドバンテージとして勘定できるものに違いはない。

『……力は更なる力によつて滅ぼされる。ハイパーメガ粒子砲、放て！』

『Fire! 撃ちー方ー始め!』

「ここでわたくしが倒れようとも……」

「僕たちが倒れようとも……」

『死なば諸共だああああッ!!』

瞬間、真白く爆ぜた閃光がリリカたちの視界を塗り潰していく。

ジェガンブラストマスターと、カエデのウイングゼロヌーベルのツインバスターライフル、そして無数の傭兵連合のガンプラたちが放つた照射ビームは確かにぶつかり合い、僅かにハイパーメガ粒子砲の氣勢をある程度は削ぐことに成功していた。

だが、フォトンリングレイという強烈な増幅装置を経由して発射されたそのビームを、いかに出力自慢であるとはいえモビルスーツが持つ最大火力で捌き切れるかといえば、答えは否であることぐらい自明の理だ。

フォトンリングレイを起点に拡散したビームはその勢いを、威力をある程度削がれながらもヨコスカ基地に無数の光の柱を立ち上らせて、前線に残存していた傭兵連合のガンプラたちを次々に破壊していく。

それでも、カエデたちの行いが決して無駄であったわけではない。



白い極光が全てを塗りつぶしていく中で、「それ」は確かに、異色の光を纏って輝いていた。

それがここにいたことは、そしてカエデたちが息を合わせて一斉射を放つことで、絶妙にハイパーメガ粒子砲の威力を削げたのは、何千分の一、何万分の一という偶然であったのかもしれない。

だが、大気圏内という条件も手伝って減衰したビームは辛うじて、戦線の中心で棒立ちになっていたその黄金の機体——全身にヤタノカガミ加工を施し、最早原型が胴体と頭部とフォルファントリーぐらいいしかないほどにカスタマイズされた「スペリオルスーパーシユペールスーパーハイペリオン」の装甲で弾き返せるほどにまで、弱体化していたのである。

「ぬううあああアツ!? 何が、何がどうなっている!?!」

何万分の一という奇跡を掴み取ったそのダイバー……「ホツシー」もまた、何が起きているかを理解してはいなかった。

ようやくベルリン支部の制圧が終わってヨコスカ基地に乗り出したかと思いきや、突然目の前で眩しい光が照らしたとしか、彼には認識できていない。

だが、ホツシーとスペリオルスーパーシユペールスーパーハイペリオンがそこに立っていたのは、アトミラールが愕然とする大誤算にして、そして傭兵連合にとっては、望外の幸運であったといってもいい。バリア効果のあるフォトンリングレイによってある程度減衰しながらも、自らが放ったハイパーメガ粒子砲がそのまま跳ね返ってくるという予想外の事態にアトミラールは愕然とし、コンゴウもまた口元を手で覆って目を丸く見開いていた。

結論ならいってしまえば、それだけで「天城」が沈むことはなかった。

だがそれは艦体に重篤なダメージを負わせ、前線に展開していた傭兵連合のほぼ全てが壊滅するという結果と比べても、差し引きマイナスと言って差し支えない大打撃を、「GHC」へと与えていた。

——そして。

「……どうやら間に合ったようだ、アトミラール！　これで終わりに

させてもらおう！」

「合わせるぞ、キョウヤー！」

宇宙に聳える三つの拠点、ルナツーとゼダンの門、コンペイトウの制圧を完了させた「AVALON」というよりはチャンピオンたるクジョウ・キョウヤと、同じく「第七機甲師団」でただ一人生き残ったロンメルが「天城」の直上へと降下すると同時に、それぞれの得物を第一艦橋へと叩きつける。

そして、同時に降下してきた「セルピエンテ・クー」のナユタもまた、手にしていたソードピストルを「天城」の主砲を目掛けて投擲した。

それは確率に起こすのであれば何千万分の一、或いはそれにも満たない奇跡だったのかもしれない。

だが、確実にこの場において「天城」を、そしてアトミラールを仕留められるだけの札は、満身創痍になりながらも傭兵連合に残されていたのだ。

蒼空に立つ「天城」の真下という死角に潜んでいたミワは、右手だけで残りの弾数が一発だけという状態になっていた対艦ライフルを、そのエンジン部に狙いを定めて着実に構える。

「スナイパーを放っておくと、こうなるってねえ……！」

『……いけません！』

「させつかよ！ 行け、『アナザーテイルズ』！ ここは俺に……任せときなあ！」

ルヴィーラはそれに気付いていたものの、構えた狙撃銃の一撃を、眼前に躍り出たカザミの【ガンダムイージスナイト】が身を挺して防ぎ切ったことで、その妨害行動は不発に終わってしまった。

チャンスがあるならば今しかない。

リリカもまた、ヒロトとリクがテトラを抑えているその一瞬の間を見計らって、機体の出力を一気に引き上げていく。

「ブランチュアアクセル……マキシブースト！」

四倍速を超えたそのスピードは、中破状態だったことも手伝って、フルブランチュでさえも処理しきれないほどの過剰出力と余剰の熱

を生み出して、白輝の機体を大きく軋ませる。

強制ログアウト寸前まで加速したフルブランシユは、全身に攻撃判定を纏っていることも手伝い、放たれた銀弾と化してただ「天城」のエンジン部を目指して突き抜けていく。

『いつけえええええ!!』

ミワとリリカの叫びが重なり合う。

先行して放たれたミワのABAPSFDsが微かに穿った孔を広げていくように、全身をFXバーストモードのような攻撃判定に包んだりリカのフルブランシユが突き抜け、そして。

『……力は、更なる力によって滅ぼされる、か……確かに、その通りだったのかもしれない』

『テートク……い』

燃え盛るブリッジの中で、涙に暮れるコンゴウを抱きしめて、アトミラールは微かに目を閉じて、優しくその髪を撫でながら天を仰いだ。

そして——空に聳える白銀の城塞、夢想にして仮想の方舟は、爆炎の中に沈んでテクスチャの揺らぎの中に掻き消えていく。

【Result…ヨコスカ基地が制圧されました】

無機質な機械音声は、事実上とはいえ傭兵連合の勝利を告げるのはあまりにも淡々としていた。

だが、それを意に介するダイバーなどどこにもいない。

ある者は歓喜を、ある者は落胆を、全身で表現するかのように、怒号にも似た歓声と、そして悲鳴が戦場だった場所に響き渡る。

紙一重だった。どちらが勝ってどちらが負けるかわからない勝負だった。

だからこそ、喜びも嘆きもまた、大きな渦となってこの仮想の海を包み込むのだ。

「……やったよ、フルブランシユ……えへへ」

そして、リリカもまた——胴体、正確に言うならば分離させていたコア・ファイターのコックピットで一人、にへら、と頬を緩めて——静かにその美酒を、勝利を呑み干すように、控えめな笑みを浮かべる

の  
だ  
っ  
た。  
。

## 幕間其の五：「デイアフター・フェスティバル」

【GHCと】大戦争イベントスレpart. 132 【俺らの戦い】

1. 名無しの兵士ダイバーさん

ここはフォースアライアンス「GHC」が主催する「大戦争」イベントについて語り合うスレッドです。大戦争に向けてのビルド構築やアライアンスの提案など、専門的な話題はそれぞれ別のスレッドでお願いします。

Q. 「大戦争」イベントって何？

A. 一言でいうならセントラル・エリア以外の全サーバーを舞台にした超巨大な陣取り合戦です。二万対二万で戦います

Q. どうやったら勝てんの？

A. 「GHC」が持つてる領土の七割を制圧するか六割以上を制圧した状態で本拠地のヨコスカ基地を制圧したら俺らの勝ち、時間内に失敗したら負けです

Q. 「大戦争」に参加してみたいんだけど

A. 傭兵プレイかその経験がなければ傭兵派遣フォースと一時的にアライアンスとか組むと参加できます、詳しくは専スレで聞いてください

【GBNまとめwiki】<http://>

【GBNビルド構築相談スレ】<http://>

【GBNフォースアライアンス募集スレ】<http://>



158. 名無しの兵士ダイバーさん

大戦争乙

159. 名無しの兵士ダイバーさん

お疲れ

160. 名無しの兵士ダイバーさん

今年はどうなるかと思ったけどやっぱりすげえよチャンプは……

161. 名無しの兵士ダイバーさん

ロンメルと一緒に大気圏から合体攻撃エントリーとか何気にとんでもないことを当然のようにやる男

162. 名無しの兵士ダイバーさん

目立ってなかったけど「第七機甲師団」も流石だわ、寡兵をまとめ上げてコンペイトウ制圧してたし

163. 名無しの兵士ダイバーさん

今回アトミラールはチャンプの足止めと衛星軌道の防衛に力入れてたからなあ、チャンプがゼダンの門に飛ばされたせいもあるんだろうけど正直勝ってたか負けてたかでいえば運ゲーだった気がするんだよな

164. 名無しの兵士ダイバーさん

最後にアトミラールの策を潰したMVPが金ペリオン兄貴で大草

原

165. 名無しの兵士ダイバーさん

マジであいつ射線に突っ立ってただけらしいからな……

166. 名無しの兵士ダイバーさん

普段は俺のスーパーなんかハイペリオンは無敵だア!とかロールプレイしてるのに視点見たら宇宙猫みたいな顔になっててダメだった

167. 名無しの兵士ダイバーさん

いやあんなことある?

168. 名無しの兵士ダイバーさん

そうはならんやろ、みたいなことがやたら起きてたから大戦争は地獄だぜ

169. 名無しの兵士ダイバーさん

いやでも最後に屑運引ただけで今年の「GHC」は十分本気だったと思うぞ、太平洋沿岸組だったけどわざわざデプ・ログとかフライマンタで絨毯爆撃してくるわユーコン級やらレイテ級やらが並んでるわで小文字の方のビルドダイバーズがいなけりや生きた心地し

なかった

170. 名無しの兵士ダイバーさん

レイテ級の主砲を耐えたあのイージスの改造機何あれ？

171. 名無しの兵士ダイバーさん

ガンダムイージスナイトだな、キャプテン・ジオンの弟子みたいな「カザミ」ってダイバーが使ってるんだけどとにかく硬いことに定評がある

172. 名無しの兵士ダイバーさん

宇宙も宇宙で開幕からハイパーメガ粒子砲一斉射でほとんど戦力消し飛ばされたりで散々だったな、結局何もできなかった

173. 名無しの兵士ダイバーさん

>>>172

次に活かせばそれでいいじゃん？

174. 名無しの兵士ダイバーさん

まあ死んだから報酬貰えないとかじゃないしな

175. 名無しの兵士ダイバーさん

撮れ高MVPは金ペリオン兄貴だけど今回割と「アナザーテイルズ」が頑張ってたな

176. 名無しの兵士ダイバーさん

真っ先にヨコスカ基地エントリー決めた連中か、ユウちゃんが新しく入ったフォースだつてことは知ってたけど他の面子も凄まじいな

177. 名無しの兵士ダイバーさん

超長距離から「アルテミスの傘」の発生器ぶち抜いたる赤砂も大概だけどハイパーメガ粒子砲にツインバスターライフルぶつけた暴走お嬢様も度胸あんなーって感じ

178. 名無しの兵士ダイバーさん

リリカちゃんカワイイヤッター！

179. 名無しの兵士ダイバーさん

可愛い……？（ノーモーションで突然高速化する白いAGE-1FXみたいな奴を横目に見ながら）

180. 名無しの兵士ダイバーさん

>>>179

は？

181. 名無しの兵士ダイバーさん  
リリカちゃんにはへらって笑う顔が可愛いってそれ一番言われているから

182. 名無しの兵士ダイバーさん  
それ以上は専スレか女性ダイバースレでやってくれよなー頼むよー、でも最後に「天城」ぶち抜けたのはリリカちゃん達の協力プレイが大きいのも間違い無いんだよなあ

183. 名無しの兵士ダイバーさん  
ヨコスカ基地制圧してからはあつという間だったけどそれはそれとしてニューヨークで暴れ回ってたFOEさんだとか瞬く間に南アフリカ支部を制圧した謎のSD軍団とか相変わらずヤバイ奴らが多すぎる

184. 名無しの兵士ダイバーさん  
マゼラン大陸だっけ？ あのデイメンション行ったことないんだよな

185. 名無しの兵士ダイバーさん  
>>>184  
俺昔SD使ってたから行ったことあるけどあれは序盤の村でラストダンジョンの敵とエンカウントするような魔境だった、なんだかんだメタられて不遇扱いされてるSDだけであいつら見たら同じこと口が裂けても言えなくなる

186. 名無しの兵士ダイバーさん  
二万対二万っていつでも過疎ってるとこは守りも手薄になるからその辺から堅実に拾っていった連中もなかなかやるわね

187. 名無しの兵士ダイバーさん  
いやユニちゃんとテトラちゃんのコンビ強すぎたわ、ギャンとウィングダム混ぜるとかいう発想もだけどあの超小型ダインスレイヴがエグすぎるんだよなあ……

188. 名無しの兵士ダイバーさん



全体的に火力偏重だからな、「GHC」の傾向って

189・名無しの兵士ダイバーさん

それにしたってユニちゃんも三桁ランカーだけあるわな

190・名無しの兵士ダイバーさん

テトラちゃんのギャンに至っては塗装の光沢だけでビーム弾き返すとかいうわけわからんことやってたからなー、リリカちゃんよく生き残れたよ

191・名無しの兵士ダイバーさん

結果論ではあるけどアトミラルが浮上焦らなかつたら俺ら負けてたのかね

192・名無しの兵士ダイバーさん

どうだろうなー、その辺はマジでわからん、宇宙でチャンプは必殺技使わされてたっぽいし仮に「天城」が浮上するのが遅ければいかにユニちゃんとテトラちゃんでも弾切れとかEN切れとかそういう懸念もあつただろうし

193・名無しの兵士ダイバーさん

何にせよ報酬も旨いし今年も勝ててよかったわな

194・名無しの兵士ダイバーさん

この報酬全部アトミラルのポケットマネーから出てるんだと思うとなんだか嬉しいような申し訳ないような凄い複雑な気分になる

195・名無しの兵士ダイバーさん

銭ゲバロリは嬉々として受け取ってた辺り人間性って出るもんだな

196・名無しの兵士ダイバーさん

そういや「リビルドガールズ」も参加してたんだっけ、北京攻略班だったっけ？

197・名無しの兵士ダイバーさん

>>>196

うん、まあだからヨコスカ基地決戦にはいなかったな、FOEさんとか他にも不在の奴らは割と多かつたけど

198・名無しの兵士ダイバーさん

その辺は大戦争の都合上ヨコスカだけを潰したら勝ちってわけじゃないからなー、現に最後まで抵抗続けてた支部も多かったし

199・名無しの兵士ダイバーさん

次はもつと広域を殲滅できる兵器を開発してくるとかアトミラールが言ってたな、そんなことしなくていいから……（良心）

200・名無しの兵士ダイバーさん

戦争が終わったら次の戦争に向けての準備が始まるんだなって

201・名無しの兵士ダイバーさん

皮肉効いてんなあ、次のイベはフォースバトルトーナメントだから間違いでもないんだなこれが



「フォースバトルトーナメント……ですか……？」

セントラル・エリアに設けられたカフェの一角に陣取ったりリリカは、カエデから提示されたタブに映し出されていた情報を見て小首を傾げた。

「ええ、GBN最大のお祭りといっても過言ではありませんわ。無論リリカさんが参加を辞退されるのであれば、わたくしも身を引きますが」

フォースバトルトーナメント。それは読んで字の如く、GBNという電子の海に数多存在するフォースが鎬を削り合い、ただ一つしかない頂点を目指して戦うというイベントに他ならない。

例年であれば、不動のチャンプ、クジヨウ・キョウヤが率いる「VALON」がその王座を独占してきたこのイベントは、自分たちの実力をどこまで試せるかというダイバーたちにとつての試金石であり、参加すること自体が一種のステータスとなる由緒あるものでもあるのだが、最大の特徴はフラッグ戦と呼ばれる特殊ルールを採用していることだろう。

フラッグ戦というのは単純に、全機殲滅を勝利条件とする一般的なフォース戦の形式とは異なり、フラッグ機として設定された一機さえ

倒してしまえば、極端な話相手が百機残っていて、こちらの残存戦力が一機であつても勝利が確定する、というものだ。

多くの場合はフォースリーダーがフラッグ機を兼任することが多いのだが、例外的にあえてそうしないケースも存在する。

第十四回フォーストーナメントにおける決勝戦では、「AVALON」がクジヨウ・キョウヤをフラッグ機としたのに対して、対戦相手である「第七機甲師団」はリーダーのロンメルではなく、スナイパー役のダイバーをフラッグ機とする作戦を用いてその喉元まで食い下がったことが有名な事例として挙げられるだろう。

リリカはカエデから提示された概要を流し読みしながら、少しだけ考え込むような仕草を見せて、小さく俯いた。

別に断る理由が特段存在するわけではない。

フォースのメンバーであるカエデや、口にこそ出していないものの、くすくすと妖艶な笑みを浮かべて自分たちを見つめているユユが参加したがっているのなら、それを承諾するのも、便宜上とはいえリーダーの役目であることには違いないだろう。

机に突っ伏して、強制ログアウト措置が取られるか心配になるラインですやびーと寝息を立てているミワへとリリカは助けを求めるように視線を移したが、これでは期待できそうにない。

別に、受けたくない理由は見当たらない以上、何かの記念だと思つて参加するのは実際、そう悪くない選択肢なのだとはリリカも理解している。

ただ、どこかで何かが、言い表せないような声が喉の奥で引っかかっているような、そういう微かな違和感があるだけなのだ。

それに、曖昧な理由で辞退する、というのも誠実ではないだろう。

カエデは本心から自分を気遣つて「参加しなくてもいい」と言ってくれたのだろう。

だが、それかカエデの誠意で、確固とした理由があつての言葉であるなら、確固たる理由がないままに拒否するというのもなんだか気が引けるといふ、そういう話だった。

他人の厚意ほど断るのが難しいものはない、とはどこかのお空で誰

かが言っていた言葉であったが、正にその通りだろう。

それに、「大戦争」イベントだつて最初は怖かったけれど、やってみれば案外楽しかったのだ。

リリカはふんす、と、気合を入れ直すように小さく息をつく。

だつたら、これだつていつもの食わず嫌いに違いないのだと、そう結論付けて、リリカはこくり、と、カエデから持ちかけられた提案への同意を示す。

「え、えっと……初めてだから、色々わからないかもしれませんが、その……」

「ふふ……大丈夫です、リリカさん。その辺りはユユたちもフォローさせていただきますから……ね？」

その言葉を待っていた、と、ばかりに立ち上がると、ユユはリリカの耳元で、甘くとろけるような声でそう囁いた。

台詞を取られてしまいましたわね、と肩を竦めるカエデを横目に、リリカはそのなんだか甘酸っぱくてくすぐったいユユからの戯れに背筋を震わせて、頬を桜色に赤らめる。

やっぱり、ユユにとつては戦うことが一種の趣味というかステータスなのだろう。

それにしたつて耳元でいきなり妖艶な声音で囁かれれば顔の一つも真っ赤になるものだ、と、リリカは頭から湯気を噴き出しそうな勢いで耳までかあつと、滲んだ熱が回っていくのを感じていた。

「んう……くあ……決まった決まった……？」

「貴女寝落ち寸前でしたわよ、ミワさん。ええ、リリカさんからの承認を頂いたので、『アナザーテイルズ』はフォースバトルーナメントに参加することになりましたわ」

「ふむふむ……それにしてもフォースバトルーナメントかあ、ミワたちも随分遠いところまで来たんだねえ」

カエデからの通達に、どこか隠居じみた言葉をしみじみとミワは呟いていたが、実際、ミワからすればもう一度この戦いの場に立つことになるとは思ってもいなかったことだし、なによりも、かつて過ちを犯した自分を受け入れてくれるフォースがあつて、その再起の場とし

て戦いに臨むというのは、どこか不思議な心地がするものなのだ。  
「……え、えっと、その……なんて言ったらいいのか、わからないです  
けど……」

顔を真っ赤にしながらもカエデから回ってきたタブの参加申請を  
手早く済ませたリリカは、ふう、と小さく息をついて、頼んでいたア  
イスココアのグラスを右手に握った。

「ふふ……リリカさんの言葉でいいのです」

「ええ、ユユさんの仰る通りですわ、リリカさん」

「然り然り……それじゃありリリカちゃん、リリカちゃんとしての一言、  
お願いね〜」

「……っ、えっと……大戦争イベントの成功と、これからのフォースバ  
トルトーナメントに向けて……乾杯、です……っ！」

『乾杯！』

リリカが取った音頭に合わせて、きいん、と、グラスの角が触れ合  
う音が、人々の行き交うロビーへと微かに響き渡る。

部活をやっていたクラスメイトは、こういう打ち上げ会を頻繁に  
行っていたらしいのだが、リリカにとっては初めてのことだった。

仮想空間とはいえ、そんな緊張に手を震わせながら、掲げられた三  
つの杯に自分のそれを重ねていく。

ずっと、遠いものだとばかり思っていた。

溶けることのない氷が冷やす、少しだけざらついたような喉越しの  
ココアを流し込みながら、リリカはその、日常の、放課後の延長線上  
にある名前のない時間を舌先で転がすように味わって、小さく喉を鳴  
らす。

だけど、仮想とはいえ、望んだ時間が、この少しだけ気怠いような  
微睡みが背中から包んでくれるような穏やかな木漏れ日のひととき  
が、舌先から甘味となつてじわりと伝わってくるようで。

——ありがとうございます。

今はまだ、涙に流れて口には出せなかったけれど、そんな得難いも  
のを噛みしめるように、リリカは小さく、フォースバトルトーナメン  
トについて議論を交わすカエデたちへと頭を下げるのだった。

## 第六十一話 「レイズ・ユア・フラッグ」

フラッグ戦をやるに当たったの課題、というより戦略的な駆け引きは二種類存在する。

フォースバトルトーナメントに参加を決めたリリカたちだったが、問題はそこにあった。

「以前にもお話しましたけれど、通常であれば『AVALON』のようにフォースリーダーがそのままフラッグ機を務めるケースが多いですわね」

カエデはコンソールを操作し、以前に開催された大会のログを表示していく。

ピアニストのようにしなやかな指先が踊る度に、各大会の戦歴を元にして運営が公表しているデータの数々がリリカの眼前に表示されるが、やはり、カエデが口にした通り、参加したフォースにおけるフラッグ機の割合は、フォースリーダーが大半を占めていて、「第七機甲師団」のようにあえてリーダーをフラッグ機としないフォースは少数派である、ということをし、そこに記された数字が物語っていた。

GBNにおいてフォースを結成する場合、その場において一番ランクや実力の高いダイバーがそのリーダーを務める、というのは割と一般的なケースである。

そしてそれは単純に、実力者をフラッグ機とする向きが強いということでもあった。

現に、フォースリーダー以外をフラッグ機としたフォースを見ても、そのフォースの中で一番ランクであったり実力が高いダイバーをそれに選定している、という統計データが公開されている以上、慣例に従うのであれば、「アナザーテイルズ」もまた、リーダーであるリリカではなく、個人ランキング64位のユユをフラッグ機と定めるのがベターなのだろう。

注文したアイスココアをすすりながら、リリカはふむふむと小さく首を縦に振って、相槌を打つ。

カエデの言葉にリリカは納得していた。

自分がリーダーといってもそれは名義上の話だし、それ以上でも以下でもないのだから、勝てる確率が高い作戦を選ぶというのはそのまま間違っている考えではない。

だが、それに異を唱えたのは他でもないユユ自身だった。

「ふふ……お待ちください、カエデさん」

「なんですの、ユユさん？」

「その提案……少しだけひっくり返した視点で見えてはいかがですか？」

ユユは口元を長い袖で覆いながら妖艶に笑う。

想定した盤面をひっくり返す。さながらチェス盤を対局する側の視点から俯瞰するように。

囁くように彼女の薄い唇から紡がれたその言葉に反応したのは、リリカでもカエデでもなく、今の今まで眠たげに机に突っ伏していたミワの方だった。

むくり、とおもむろに身を起こして、くあ、と小さく欠伸をすると、ミワはユユの言葉を補足するように語る。

「ふむふむ……なるほどねえ、ミワたちが取るべきは『第七機甲師団』式の方がいいってことかな」

「ふふ……流石です、ミワさん。ユユはその方が……勝ちを拾える確率が高いと、そう踏んでいるのです」

「……え、えっと、どういうこと？ お姉ちゃん……」

#### 第七機甲師団。

それは「智将」の異名をほしいままにするやたらとモコモコしたオコジヨのダイバールックにその獰猛にして冷徹な本性を包み隠した食わせ者として有名である「ロンメル」が率いる戦略派フォースの名前である。

三年前に開催された、第十四回フォースバトルトーナメントの決勝戦ではチャンピオンであるクジヨウ・キヨウヤ率いる「AVOLON」に辛酸を舐めさせられているものの、それでもその奇策はチャンプの喉元にまで届きかけた、鋭い牙であったことは間違いない。

フラッグ機をスナイパー役に設定することで自身の存在を囿とし、

チャンプを引きつけるその作戦は、可変合体機構を用いているMS【バウ】によって人数の誤認をかけるなど、様々な副次策を用意していたからこそ成功に届きかけていたのだ。

しかし、自分たちが同じことをするとしても、四人という人数とそして特殊な分離合体機構がある機体は存在しないため、成功には程遠いのではないだろうか、リリカは小首を傾げてミワへと問いかける。

「えつとねえつとね、敵のまさかと思う瞬間が、ミワたちにとってはチャンスになるっていうか……言い方は悪いけど、ユユさんを囮にする、ってことだよお」

「ふふ……その通りです、ミワさん。敵はユユのことをよく知っているなら、慣例通りの戦術を取ればユユに狙いが集中する……その間に戦場を攪乱できて、いざという時には逃げられるリリカさんがフラッグ機を務めていれば、ユユが落ちて、敵にとっては徒労に終わるということです」

——相手の裏をかく、というものです。

ユユは注文した玉露を優雅にすすりながら、ほっと一息をつく。「確かに……」

囮といえば確かに聞こえは悪いかもしれないが、IFBDを搭載しているユユのG-アイデアがタンク役を務めるというのは戦術的にも理に適っているし、最悪何かがあればブランチュアセルによって戦線を仕切り直すことができる、というリリカのフルブランチュがフラッグ機を務める適性があるというのもまた確かだ。

だがそれは、事が全て上手く運べばの話である。

ユユがタンク役を務めている時点でフラッグ機ではないと悟られる可能性だつてあるし、逆にリーダーをフラッグ機とする慣例を信じてリリカが集中的に狙われる可能性もある。

作戦とはそんなものであるとはいえ、痛し痒しだ。

リリカはぷすぷすと黒煙を噴き上げそうな勢いで頭を抱えて、どちらを採用したものかと思悩む。

「ふむ……一理ありますわね、ただ、リリカさんが集中的に狙われる可



「能性もありましてよ、ユユさん？」

「ふふ……それはユユも織り込み済みです。そしてリリカさんなら確実に、とは言わずとも生き残れる手札を持っているのですから……それに、そうなたらカエデさん自身が敵を許しておかないはず……ふふ」

「むむ……まあ、言われてみればその通りではありますわね」

ユユの言葉は巧みであり、自分の望む方向へと意見を誘導しているようにも聞こえるが、二桁ランカーとして名を連ねる彼女がその戦略のリスクとリターンを理解していないはずもない。

ただ問題があるとすれば、リリカの心理的な負担だろう。

カエデはしてやられたとばかりに唇を渋く引き結んで、アイスココアを啜っているリリカをちらりと一瞥する。

リリカに何かあればすっ飛んでいく覚悟があるのは事実だし、その時が来ないのが戦略的には一番であるものの、やはり事が全て想定通りに運んでくれないのが実戦だ。

リリカのことを信頼していないのではなく、むしろその反対であるからこそ、ブランシユアクセルがあるとはいえフラッグ機としての責任に緊張を感じないかどうかを、どうしてもカエデは気遣ってしまうのである。

「……え、えっと……ありがとうございます、カエデさん……」

「ええと……何のことですか？」

「……わ、私のこと、心配してくれて……でも、私、頑張ってみようと思っんです……」

頑張る。それが結果としてどうなるかはともかくとして、フォーสบトルトーナメントに挑むこと自体が一つの決断であったのだから、やれることはやらなければいけない。

そんな責任感がリリカを駆り立て、普段は控えめに八の字を描いている柳眉をきりっ、と逆立たせる。

「リリカさん……ええ、リリカさんがそう仰るのなら、わたくしとしては言うことなどありませんわ、ユユさん、ミワさん、どうやら多数決でそちらのプランを採用ということでもよろしいですわね？」

「ミワはそれで問題ないよお」

「ふふ……ありがとうございます、それではフォースバトルトーナメントに向けて、張り切っていくといたしましょう、リリカさん」

「え、えっと……頑張ります、えい、えい、おー……い」

リリカが音頭を取ると、きいん、とグラスの角を触れ合わせて、四人は戦場に赴く決意を一つ、確かなものとして杯を飲み干した。

フォースバトルトーナメント。

GBNの頂点を決める戦いの一つに数えられる大舞台に、緊張していないかといえば嘘になる。

だが、それでも——カエデが、ユユが、ミワが頑張っているのなら、自分も頑張らなくてはならないのだから。

リリカはそう強く心に誓って、今も襲いくる恐れを踏み倒すように、ごくり、となくなったアイスココアの代わりに、お冷やを一息に飲み干すのだった。



『さあ始まりましたフォースバトルトーナメントオ！ 実況はご存知窓辺のモクシユンギクことミスターMSが務めさせていただきます！ 誰が一番強いのか、誰が一番上手いのか！ それを叫びに来た勇者たちの激戦が今、幕を開けようとしていまっせ！』

やたらとハイテンションな関西弁の青年がマイクに向けて大声を張り上げる傍で、リリカはフルブランシユのコックピットで出撃までの瞬間を、押し寄せる緊張と背中合わせになりながら待機していた。

運がいいのか悪いのか、抽選の結果「アナザーテイルズ」の配置は、Aブロックの第一試合というトップバッターを飾ることに決まっています、それがより、ばくばくと跳ね回る心臓の鼓動を急ぎ立てている。落ち着け、と自分に言い聞かせても、そうそう上手くいくものではない。

フラッグ機を引き受けた重圧、そしてこのフォースバトルトーナメントという、勝ち抜き制であるが故に無意識に感じさせている緊張。

その全てがリリカを鉛の綿で包み込んで、締め付けているかのよう  
な錯覚を与えるのだ。

『——と、長々と前置きをするのも野暮ってもんですわな！ それ  
じゃあ始まりませ、Aブロック第一回戦！ フォース「アナザーテ  
イルズ」対「ホロウ・ヴァイキング」！ 両者出撃の準備をお願いし  
まああす!!!』

対戦相手として決められた「ホロウ・ヴァイキング」は、ミワによ  
る事前調査によれば、あの「エヴァンジェルミ」と肩を並べる新進気  
鋭の実力派フォースであるらしい。

それがいかほどのものであるかは、残念ながら戦ってみなければわ  
からないものの、一戦目から油断のできないカードの配置は流石、  
フォースバトルトーナメントといったところだろう。

カタパルトから滑り出すフルブランシュの機動を制御しながら、リ  
リカは、ミワのフリーダムルージュティラユールから送られてくる情  
報から戦況を分析しつつ、ユユとカエデを前衛に、そしていつでもミ  
ワを庇える位置に陣取って、敵が攻めてくるその瞬間を待つ。

『ふふふ……まさかいきなり噂の「アナザーティルズ」と戦わされるこ  
とになるとは思ってたけど、ここで仕留めれば大金星、何より  
あたしたちが狙ってるのはチャンプの首だ！ 野郎共、花火を上げて  
突っ込むぞ!』

『了解っす、船長!』

ミワが展開していたクリアインコムが敵の通信を傍受して、「アナ  
ザーティルズ」にその情報が共有される。

開幕に何かを仕掛けてから突っ込んでくるのだろう。

バトルフィールドに設定された漆黒の宇宙、デブリ帯に身を潜めて  
いたミワは恐らくそれを範囲攻撃だと推察して、リリカと合流する。

「とりあえず、位置は割れてるねえ……仕掛けるよお!」

観測機として改造したクリアインコムから、相手の機体構成と位置  
は既にわかっているのなら、初手で仕掛けてくることに、後の先を取  
るのは容易なことだ。

ミワはツダの対艦ライフルを構えると、敵の青と黄色のツートンカ

ラー……ハリソン・マディン専用機を意識して塗装されたのであろう  
クロスボーンガンダムX1が放ったその弾頭を狙って、引き金を引い  
た。

銃口から吐き出される徹甲弾は偏差を全て読み切った上で、クロス  
ボーンガンダムX1が放ったその一撃——核弾頭を的確に射抜いて  
誘爆を引き起こす。

『船長、赤砂です！』

『そんなのわかってる！ 全員射線は見たな!? フリント隊はスナイ  
パーを狙え！ あたしとウイタエはあのG-イデアを殺る！』

初撃の奇襲を潰されても動揺しないのは、流石の実力派といったと  
ころだろう。

ミワは小さく舌打ちをしながら、クリアインコムを回収しつつ、狙  
撃ポイントを変えるために慣性移動でゆっくりとデブリ帯の中を泳  
いで回る。

「……お姉ちゃん」

「大丈夫だよお、最初のがブラフだったのはちよつと痛いけど、でも  
ねえ……！」

射線から狙撃位置を割り出せる辺り、確かにあのX1を駆るダイ  
バー、「トルマリ」は結構な実力者なのだろう。

宣言通りに前線へ展開していたユウのG-イデアに向けて、ムラマ  
サブラスターのビーム刃を発振しながら切り掛かっていくトルマリ  
ンのX1をフォローするように、続く、白く塗られたX2と銀色に塗  
られたX3がカエデの足止めにかかる。

「抜けられた!? くっ、二対一で挟まれたとはいえ失態ですわ……！」  
『悪いけどこっちも命がけだよ！ 船長の行く道を邪魔させたりなん  
かしないんだから！』

ビームザンバーを両手に携えた白いクロスボーンガンダムX2を  
駆るダイバー、「ウイタエ」はカエデの焦燥を見抜いたように獰猛な笑  
みを浮かべて、ミワとリリカの元へと強襲をかけるフリント二機の背  
中を一瞥する。

スナイパーは見つけたのなら親の仇のごとく追い回して撃破しろ。

それは誰が語ったともしれないGBNの不文律であり、ウイタエたち「ホロウ・ヴァイキング」はそれに従っただけのことだ。

そして、フリント隊二機は切り札ともいえる核弾頭を温存している。

完璧に射線と狙撃位置がわからなくともいい。

デブリ帯ごとスナイパーを消し炭にしてしまえばそれで済む話なのだから、とばかりに、二機のフリントが、X1のそれと同じ形状をしたザンバスターの先端に接続した核弾頭の引き金を引こうとした瞬間だった。

「お願い、Cファンネル！」

ミワを守るために、そして何かあった時は前線に合流できるようにという位置どりをして待機していた白輝のガンダムが、リリカのフルブランシュが左手を掲げ、分離したファンネルがフリントの右腕を切り落とす。

『真下か！ クソツ、こんな単純な手に……』

『落ち着け、まだ右手がもげただけだ！ 負けが決まったわけじゃない！』

宇宙というのは当然ではあるが、前後左右だけでなく上下もまたバトルフィールドに含まれる。

だからこそ全方位への警戒をしなければならぬために、ダイバーたちは宇宙戦を忌避する傾向にあるのだが、その理由が今リリカがそうしたように、真上や真下という、人間の死角をついた奇襲をかけることが常道になっているからだだった。

だが、フリント隊も冷静だ。

右腕とザンバスターを喪失したのを確認するなり、その場から急速に離脱してミワの追撃を回避して、襟に当たる部分からビームサーベルを引き抜いてまずはリリカから仕留めようと、意趣返しに、そのフレキシブル・スラスターの特性を活かして上下からの挟撃を試みる。

『近づけばあッ！』

『まさか味方ごと撃ってくるわけでもないはずだ！』

「……っ、嫌な位置取りされちゃったねえ、でも……！」

「……お願い、お姉ちゃん!」

挟撃というシンプルながらも極めて有効で対処しづらい相手の選択に対してリリカはまず、直上から急降下してくるフリントへの攻撃を反撃の手札として選択した。

バックラーから発振したビームサーベルを先読みでぶつけて、罅迫り合いに持ち込んでいるその隙について、真下からの突撃をかけてくる敵を、あえて懐に誘い込む。

かつての姉であったなら、そして自分がフラッグ機でなかったなら、ミワは確かにリリカごと二機を殲滅するという道を選んでいただろう。

——だが。

下からの突撃を敢行したフリントが掲げるビームサーベルがフルブランシュの脚部へと触れようとするその一瞬を狙って、ミワは徹甲弾のトリガーを引く。

があん、と、強烈なりコイルがフィードバックされて銃身にブレが発生しながらも、放たれた弾丸は、フリントのコックピットを撃ち抜いていた。

『緋きスナイパー……ッ……!!』

「悪いけど、そのあだ名は全力で返上中だよお」

そして、爆発に巻き込まれそうになったリリカはブランシユアクセスを数秒間だけ起動するという荒技で、残されたフリントの左腕を切り刻みながら、その真後ろへと回り込む。

『なんだ、何が起こって——!?!』

「これで、終わりです……っ!」

ブランシユアクセスは攻防一体の切り札ではあるものの、札を温存して試合に負けたのであれば本末転倒だ。

クイーンをうかつに動かすなどというのはチェスの定石だが、それでも高い制圧力を持った駒を寝かせたまま腐らせているというのもまた悪手には違いない。

だからこそ、結果的にいえばリリカのとった戦術は間違いではなかった。

急速に、そしてノーモーションで背後に回り込んでくるフルブランシュに反応しながらも、対応が間に合わず、ビームサーベルを突き立てられたフロントは、爆散、テクスチャの塵へと還っていく。

これで、後顧の憂いは断ったといってもいいだろう。

——だが、戦いはまだ続いている。

リリカは束の間の安らぎに小さく息を吐き出しながら、前線で挟撃を受けているカエデを支援するために、愛機を、フルブランシュを加速させるのだった。

## 第六十二話 「本気だからこそ」

フロント隊が撃破されたという報せは、トルマリンの元にも飛び込んできた。

今のところ、フロント隊がミワとリリカを抑えているうちになんとかカエデをウイタエとあと一人、X3を操るダイバーである「クエリ」が挟撃し、自身がなんとかタイマンでフラッグ機と目しているGーイデアを撃退しよう、というのが彼女の作戦だったのだが、その目論見はフロント隊が撃破されてしまったことで崩れたといってもいい。

さりとて、トルマリンの元に次に切るための手札は残されていないかった。

漆黒の宇宙にフォトンが描く蒼光の尾を引いて、自身の構えたムラマサブラスターとIFBSで鏝迫り合いを繰り返しているユユを睨みつけながら、身体を蝕む焦燥から、トルマリンは思わず喉を掻き筆りたくなる衝動に駆られる。

「ふふ、見たところ、貴女がフラッグ機のようなですね……？」

『それを知って何になる!?!』

「そうでなくても落とすだけのことです……ふふ」

ユユがその妖艶な笑みを崩していないのは、勝者の余裕といったところだろう。

Gーイデアの肘から分離したビギニングガンダムのビームサーベルが柄の上下から薙刀のようにビーム刃を発進したかと思えば、それらは敵を切り刻む光の車輪となって、トルマリンが操るハリソンカラーのX1を切り裂かんと、その死角から回り込んでくる。

二桁の魔物。

対峙する、レガンダムを思わせるその機体を見て、トルマリンはただ恐怖にも似た感情を覚えていた。

確かに自分たちはチャンプを倒すと意気込んで、そのための練習だって欠かさずにやってきた。

ある日は高難度ミツシヨンの攻略に丸一日を費やして、ある日は買収込んだ高速リペアキットを利用して、ハードコアディメンション・



ヴアルガに潜り続けて——そうしてやっと見えてきた光明があったからこそエントリーしたフォースバトルーナメントのはずが、自分たちが翻弄されているのは、「二桁の魔物」を擁するとはいえまだまだ駆け出しのフォースに過ぎない相手だ。

これを悪夢と呼ばずして、なんと呼べばいいのか。  
理不尽にも似た現実を前にトルマリンは歯噛みする。

そして何も、苦戦を強いられていたのは彼女だけではない。

ウイタエとクエリ——白いクロスボーンガンダムX2と、銀色のクロスボーンガンダムX3を操る彼女たちもまた、カエデという、ランクだけを見れば自分たちよりも格下であるダイバーのマニューバに翻弄されて、トルマリンの救援に向かうことができずにいたのだ。

『この、のらりくらりと！』

「あら、ごめんあそばせ。あちらは片付いたようですし……こちらから行かせてもらいますわ！」

『だめ、クエリ！ 焦らないで！』

一向に攻撃が当たらないことに業を煮やしたのか、クエリは手にしていたショットランサーを構えると、来るなら来いとばかりに、戦場へと優雅に佇むウイングゼロヌーベルを標的に据えて突撃を敢行する。

結果からいってしまえば、無情ではあるがそれはただの愚策でしかない。

特にフロント隊が落とされたことによって、リリカとミワがフリーになっていて、ということ、頭に血が上るあまり忘れていたのは致命的だといえるだろう。

クエリがカエデの喉元を食い破ろうと突撃を敢行したその瞬間に、銀色の対ビームコーティング塗装が施されたクロスボーンガンダムX3の五体が切り刻まれて四散する。

『な、何?! 何があったの!?!』

「……お、遅れてごめんなさい、カエデさん……!」

「いいえ、グッドタイミングですわりリリカさん！」

彼方から飛来してきたその正体は、果たしてフリーになったリリ

カが、フルブランシユが放っていたCファンネルであり、完全に意識をカエデだけに釘付けにされていたクエリではそれを見切ることが出来なかったのだ。

だから焦るなどといったのに、と、ウイタエもまた業を煮やししながら、両手に保持していたバタフライ・バスターで新たに参戦してきたリリカへと牽制を加える。

とはいえそれが焼け石に水であることぐらい、ウイタエにもわかっていていた。

カエデが手強い存在であり、飛び込み参上してきたリリカというダイバーがそれなりに名を上げている存在であることもさながら、何よりも大きいのはこの場における数的有利が丸々ひっくり返ったことだろう。

この戦いにおけるフラッグ機は自身ではなくトルマリンのX1であるものの、クエリのX3が四肢をもがれてコックピットを撃ち抜かれたことで、絶対数で見れば二対四、そしてうち一機は今も隠れ潜み、どこから撃ってくるのかわからないスナイパーだ。

そこに勝機があるかないかで問われれば、悔しいもののウイタエもまた、首を横に振らざるを得ない。

だが、だからといってそれが諦める理由にはならないこともまた、わかっていていた。

『生きてさえいればチャンスはある……！ 船長の夢を叶えるために、そこをどけえええッ!!』

「……わ、私だって……！」

「そう、わたくしたちだって退けと言われて素直に退くような理由など、ハナからここに持ち合わせてなどいないのですわあああッ!!」

二刀流を振りかざし、無謀だと知りながらもトルマリンのためにその小数点以下の確率を、神が見離しても尚その手につかみ取ろうとするウイタエの姿勢は、リリカもカエデも嫌いではなかった。

むしろ、誰かのためにここまで必死になれるという、それだけで、十分すぎるほどにリリカから見ればウイタエの献身は眩しいものであったし、そこまでの覚悟を持って一人の戦士として挑みかかってく

るならば、カエデにとってそれはこれ以上ないほどの喜びなのだ。

シザーソードを構えたカエデのウイングゼロヌーベルと、リミテッドコールによって呼び寄せたトライスラッシュユブレイドを構えたりリカのフルブランシユもまた、ウイタエの覚悟に応えるかのように突撃を敢行して、宇宙にスラスターが描く星座を刻む。

『負けられない……負けられないの！ 船長のために！』

「……わ、私だって……っ……！」

「負けられないのはこちらと同じ！ ならばそれ以上は剣で語ることですわ！」

言葉など無粋だとばかりに問答を一方的に打ち切って、カエデはシザーソードを白く塗られたX2に向けて振り下ろす。

退けない理由を互いに持ち合わせているなら、現実ならまだしもここはGBNで、今行われているイベントはフォースバトルトーナメントだ。

ならば拳で、剣で、銃火を交えて語り合う他に手段はない。

カエデのシザーソードを受け止めた一瞬、足を止めたその瞬間を狙って、ブランシユアクセルによって加速したりリカのフルブランシユが胴薙ぎにウイタエのクロスボーンガンダムX2を切り裂いていく。

『きやあああああつ！』

『ウイタエ！ くそっ……私たちは、「ホロウ・ヴァイキング」は！』

ウイタエは、胴体が裂かれた瞬間、即座にコア・ファイターによる離脱を試みたが、カエデのマシンキャノンによる追撃で四散して、テクスチャの塵へと還っていった。

確かに彼女も腕は悪くないダイバーだった。

だが、リリカたちもまた激戦の中で成長しているのだ。

いつまでも、蹲って泣いてばかりの自分ではいられない。

ずきり、と胸の奥に何か形容し難い痛みが走るのを覚えながらも、リリカは残った機体——フラッグ機であるトルマリンのX1を追撃すべきか逡巡し、周囲を警戒しつつもこの場に留まることを選択する。

「……はあ、っ……はあっ……」

「お疲れ様ですわ、リリカさん。とはいえ……まだ終わったわけではない以上、油断は禁物ですけれど」

どうしてこんなに息が詰まるのだろうか。

カエデからの激励を受け取りながらも、リリカはどこか居心地が悪いような、そうでなければ呼吸の循環がうまくいっていないような圧迫感を、胸の中に感じていた。

その理由はわからない。

ただ、どうしても我慢できないほど重く、鋭い痛みが胸に、心臓に張り付いて離れてくれないのだ。

そして、とうとうトルマリンのX1だけを残すに至った「ホロウ・ヴァイキング」だったが、船長と慕われる彼女は、目に涙を溜めながらも、まだ諦めてはいなかった。

あえてフルクロスを採用せず、近接戦によって圧倒することを選んだ戦略。フレキシブル・スラスターを活用することで相手を追い込むための戦術。

全ては裏目に出たり無駄になってしまったかもしれないが、それはトルマリンが仲間たちと——彼女が「船員」と呼ぶフォースメンバーたちと寝る間も惜しんで一生懸命に考えてきたことだった。

無駄かもしれない。そこに意味などないと笑われるかもしれない。

『……う、ここで……ここであたしが負けたら、本当に意味がなくなっちゃうんだっ！』

それを無駄にしたいはなかった。

打倒クジヨウ・キヨウヤという、人が聞けば嘲笑か憐憫を向けられるような笑みを本気で信じて、そしてここまで戦い抜いてきた努力が、ただ一度の敗北で水の泡と消えるかもしれないのが、フォースバトルトーナメント……つまるところ、勝ち抜きという試合形式が抱える根本的な問題点、とも呼ばないような、些細な構造の弊害だ。

トルマリンは本気だった。

誰かに笑われたとしても、誰かに後ろ指をさされたとしても、本気で自分と船員たちがいつかあの「AVOLON」を、クジヨウ・キヨ

ウヤを打倒するという夢を描き続けて、そして初めてその舞台に立ったのが今回の大会なのだ。

だがそれは今、夢と共に水泡へと帰そうとしている。

ユユが放ったサーベルファンネルによって全身を刻まれながらも、フラッグ機と目していたユユだけを倒してしまえばまだそこに光明は見出せると信じて、トルマリンが突撃を試みた次の瞬間だった。

があん、と、重苦しいリコイルの反動が伝える音が響いたかと思えば、虚空から飛来する鉛弾が、ユユの懐に飛び込もうとしていたハリソソカラーのクロスボーンガンダムX1、そのコックピットを貫く。

『……そ、そんな……あたしたち、ここで……』

「……………」

通信ウインドウにポップした悲壮な表情を見て、リリカはそこにかける言葉など見つけられるはずもなかった。

ミワもまた、少しだけ気まずそうに目を逸らしながら、試合を決めた弾丸を放った対艦ライフルのストックを岩壁に突き立てて、ふう、と、小さく息をつく。

【Battle Ended!】

【Winner:アナザーティールズ】

そうして、無機質な機械音声がリリカたちの勝利を告げる。

当たり前のように、それ以上でも以下でもないとばかりに淡々と響き渡るその声が、リリカは今、お門違いであるとわかっていながらも、どこか恨めしいような、そんな気分を抱かずにはいられなかったのだ。



「いやー、負けちゃったね……うちの船長が話せる状態じゃないから、代わりに私が代理だけど……グッドゲームだったよ、『アナザーティールズ』。私たちの分も……次も、頑張ってね」

リリカたちがロビーへと帰還したその瞬間に目撃したのは、子供のように泣きじやくっているトルマリンと、そしてその傍らで彼女を宥

めるようにその背中をさすっている、フロント隊の二人とそしてクエリという構図だった。

その輪から抜け出てきたウイタエが求めてきた握手に応じながらも、リリカはどこか暗澹とした気分で、「グッドゲーム」と返すことはできたものの、それ以上の言葉は何も紡ぎ出さずにいた。

きっと、トルマリンは本気だったのだろう。

今も涙を流し続けている彼女を見れば、それはすぐにわかることだ。

だが、リリカたちだつて決して手を抜いていたわけではないし、むしろ全力でぶつかり合ったからこそその結果だったからこそ、ウイタエはトルマリんに代わって、「グッドゲーム」と言葉をかけてくれたのだろう。

いってしまえば、GBNは遊びでしかない。

この大会だつてそうだ。

勝てば、勝ち抜けば、確かにこのアクティブユーザー二千万人という膨大な数を誇るゲームにおける名声を欲しいがままにすることができるかもしれない。

だが、それだけだ。

副賞としてBCやトロフィーの類も贈呈されるかもしれないが、極論を述べるのであれば、それ自体には何も意味がないのだ。

だからこそ、勝てば嬉しい、負ければ少し悔しい程度に、さながら記念受験のようにフォースバトルトーナメントに挑むダイバーは多いと聞くが、トルマリンたち「ホロウ・ヴァイキング」は決してそうではなかったのだろう。

遊びだからこそ。そこに何の意味もないように見えるからこそ、本気になれる。

だから、負けた時の悔しさだつて人一倍に膨れ上がるのだ。

そんなことはリリカにもわかっていた。

いや、違う。

わかっていた、つもりだったのだ。

勝つて次の試合に駒を進めたというのに、暗澹とした気分で満たさ

れている己の胸の内側にある悲鳴の、痛みの、その名前をリリカは何よりもよく知っている。

悲しいのだ。そして、悔しいのだ。

自分が自分であることでさえも、むしろ自分が自分であるということとそのものが、恨めしくて仕方なくなるその感情と——自己嫌悪とあるいは憎悪と、いつだってリリカは背中合わせに生きてきたのだから。

この戦いは、負ければそこで終わりなのだ。

ここ最近はずつと戦いに身を置いていたから、感覚が麻痺していたものの、そもそもトーナメントというのはそういうもので、「次」があるかどうかわからないという重圧はリリカにもものしかかっている。

思い出す。

幼い頃に、いつも姉の後ろを走ることしかできなかった徒競走のことを。

いつも、テストで頑張って八十点を取っても、姉は軽々と百点を叩き出して、それに対して関心も示さなかったことを。

リリカが申し訳なきように、しかし、フラッシュバックに怯えて震えながら向けてきたその視線に、ミワは少しだけ気まずそうに顔を逸らした。

「……そっか……負けたら、終わりなんだ……」

「ええ、そうよ。それがこのフォースバトルトーナメント」

どこか諦めたように、全てを投げ出すようにリリカが言葉を紡いだその瞬間だった。

つかつかとロビーの中心へと歩み寄ってきた、リリカよりも小柄な体躯に、腰まで伸ばした銀色のロングストレートという出で立ちをしたダイバールックの少女が——ユキが、それをぴしやりと突っぱねるようにそう断言する。

「……あ、貴女は……」

「……二回戦まで駒を進めたと……私たちと次に当たるかもしれないから聞いたから来てみれば、その醜態は何？ 悪いけれど……半端な覚悟で私たちと当たるつもりなら、今ここでリタイアすることを勧め

ておくわ」

動揺するリリカに対して遠慮も何もすることなく、ユキは氷のような温度をその視線に込めながら、テクスチャの塵となって解けていく。

どうやら、彼女の率いる「エーデルローゼ」はブロックの一回戦第二試合目選ばれていたらしい。

実況席がやたらとハイテンションな関西弁で捲し立てている何事かも遠く、リリカはただ、この電子の海で一人、自分が置き去りにされたような感覚に溺れていた。

「なんですよ、あの女は！」

「……エーデルローゼのユキさん、でしたか……ふふ、少しばかり血気に逸ったお方そうですね……」

「……リリカちゃん……」

カエデたちが三者三様に発した言葉でさえも止まない耳鳴りにかき消されてノイズと化していくような錯覚に蝕まれながら、リリカはロビーにへたり込む。

「……半端な、覚悟……」

そうだ。命こそかかっていなくとも、これはゲームであって遊びではない。

己が呟いた言葉に打ち震えながら、そして涙をこぼして船員たちに運ばれていくトルマリンの姿を脳裏に描きながら、リリカもまたはらはらと、静かに涙を零すのだった。



## 第六十三話 「放っておけないってこと」

「お前が俺を雇う日が来るとはな」

時は暫し遡り、「大戦争」が終わった直後。

セントラル・エリアから遠く、木々がひしめく密林に覆われたエリア、「アマゾン・エリア」に居を構えるその簡素なフォースネストで、一人の青年と一人の少女が相對していた。

青年——アストレイノワールをブルーフレーム色に塗装したガンブラを愛機としている、ダイバーネーム「ナユタ」は、少女、ユキから提示されたBCの桁を数えながら、どこか冗談めかしてそう呟く。その隊員含めて無愛想で無口で、何を考えているかわからないと評されることが多い傭兵派遣専門フォース「セルピエンテ・クー」を率いるナユタであったが、訪ねてきたのが縁があり、かつ気心も知れた相手ということもあって、商談の場でも少し肩の力が抜けているのだろう。

ユキから見れば相変わらず、以上の言葉は見当たらないのだが。

「それで金額は適正でしょう。私たち『エーデルローゼ』は、貴方を傭兵として雇用するためにここに来ているの。できる？」

「可能か不可能かで問われれば可能だ。だが——」

「だが、何？」

「……いや、つまらない感傷だ。お前がいつになく本気になっているのを見たのは初めてだからな」

「……」

ユキは元々、セルピエンテ・クーに所属する傭兵ダイバーの一人だった。

高額な報酬を受け取る代わりに依頼主からの要望を完全に遂行する、無口で無愛想で無感情な傭兵たちの一部として戦っていた頃も、手を抜いていたというわけではない。

いつだってユキは本気で依頼に取り組んできたし、クライアントからの要望は八割以上叶えてきたと記憶している。

だからこそ、あの時——ユキの目から見ても「末期」だった「エー

デルローゼ」は、その再生に全てを託すために、どうやって金策したのかも想像できないほどの大金を携えてこの、業界ナンバーワンにしてはやたらと寂れたフォースネストを訪れたのだ。

そして今は、自分が傭兵時代に貯め込んでいたBCといくつかこなした宝探しミッションの報酬を売却した金をかき集めて、この蛇の巣に飛び込んでいるのだから、ユキ自身、そこに因果を感じるところはある。

だが、「本気」とはどういうことなのだろうか。

ナユタの言い回しは、彼が口下手だから、言葉を選び損ねたというよりも、むしろ数年ぶりに同級生と再会したときのような驚きをそこに湛えている。

だからこそ、ユキもまたしばらく会っていないなかったかつてのリーダーへと、おうむ返しに問いかけるのだ。

「本気……私は手を抜いていたつもりはないわ。いつだって。どういうこと？」

「勘に触る言い方だったら済まないな。だが、そうだな……お前はそのフォースに、俺を傭兵として雇用したいと思うほどに入れ込んでいる。それが少しばかり意外だったのかもしれない」

セルピエンテ・クーは、基本的に去るものは追わず、来るものは拒まずの精神で運営されているために、ユキのように傭兵先に居つくこととなった元メンバーは意外と多い。

それでフォースとして成り立っているのは、ひとえにこのナユタが持つ腕前とカリスマ、そして傭兵としての適性を見抜く眼があるからだほう。

だからこそ、ナユタを雇用するための料金は法外なものに設定されている。

確かにユキは傭兵時代、指名されることが多く、その全てのBCを貯蓄に回していたのだから、それに手が届くほどの金額を持参してきたとしても驚きはないのだが、あの潰れかけのフォースに、他人に対してそれほど関心を持たないユキが入れ込んでいる、というのが、彼にとってには不思議で仕方なかったのだ。

「……放っておけないの」

口を滑らせた。

ユキがナユタからの問いに答えていたのは、そう表す他にない。

ただ、もしも自分がエーデルローゼに入れ込んでいる理由を考えるなら、ぽろりと口をついて出たその一言に集約されるのは間違いないだろう。

「……放っておけない、か」

人間というのは合理的な活動をするプレイヤーだとは経済学の初歩の初歩で教えられることだが、ナユタはむしろ逆だと思っている。

非合理的で、情動的で、説明ができないことをいつだって、わかっているのに選びたがるのが人間というもので、ユキにだってそういう一面があることそれ自体は何も不思議ではない。

この寂れて、密林の奥地にひっそりと建てられたフォースネストに血走った目で、仮想の躯体でなければその先から血が滲むほどに唇を噛みしめながら現れた、一人の少女のことを傭兵と、傭兵だった女はその脳裏に思い描いた。

「……あの子を、サーヤを見てみると、そう思うの」

どうしてかはわからないけれど。

ぶつきらぼうにそう付け加えて肩を竦めるユキ自身も、正直なところサーヤやエーデルローゼに自分がどうしてここまで入れ込んでいるのか、よくわかっていないところがある。

ただ、大金を積んで自分を引き抜きに来たあの何かに縋り付くような目が、そして血の涙を流しながら、所属しているフォースが空中分解寸前になっても尚、GBNの頂点を決して諦めないそのストイックさに、シンパシーであったり同情であったり、多かれ少なかれそういうものを抱いているのは確かなのかもしれない。

「感情のままに生きることは、そう悪いことでもない」

「ガンダムW？ 貴方の場合でつきり、SEEDが好きなのかと思っ  
ていたけれど」

「意外か」

「意外よ」

「それと同じことだ。人間は多かれ少なかれ割り切れないことや先入観だったり、あるいは——説明がつかない不合理を抱えている」

ナユタは相変わらずどこか煙に巻くような、そうでなければ捉え所をあえて作っていないような言葉を口にするが、言われてみればそんなものだと腑に落ちるのだから、自分も彼と同類だということなのだろう。

自分の作ったフォースでこのGBNの頂点を目指したい、というだけなら、ユキは決してサーヤとエーデルローゼに入れ込むことはなかっただろう。

だが、そのともすれば狂氣的な、自分の作ったフォースがテセウスの船のようになっただとしても「エーデルローゼ」という名前でこの魔境ひしめくGBNの頂点まで登り詰めたいと、そうサーヤが不合理に願っていたからこそ、自分はそこに関心を抱いたのかもしれない、ユキは過去の一欠片をその手に掬い取って振り返る。

サーヤが抱えていた因縁や、エーデルローゼが消滅の危機に瀕していた理由、それは未だにこのGBNに——否、膨大なアクティブユーザーを抱えているGBNだからこそ、ありふれたものであり、ユキはそこに興味を今でも抱いていない。

ただ、彼女が持つ愚直なまでに、どんな手を使ってでも頂点へと昇り詰めようとするその狂気と紙一重の熱意、そして危うさに惹かれているのだ。

「私は彼女の願いに応えたいと思っている」  
「ほう」

「結果論ではあるけれど。だからこそ、ナユタ。貴方を傭兵として雇用するために——元同僚だからじゃなく、フォース『エーデルローゼ』のリーダーとして、それを申し入れに来た」

できるか、できないか。

口にこそ出さずとも、ストレージから提示されたその金額は額に突きつけられた銃口と同じだけの重さを以て、ナユタという男の心臓を掴み取らんとしている。

——人間は、本当に不合理な生き物だ。

自分もその一部であることを自覚しながら、ナユタはふつ、とニヒルな笑みを浮かべて、ユキからの提案を承諾した。

「いいだろう、元々金さえ積みめば規約に違反すること以外は何でもするのが傭兵だ。理由を聞いたことが野暮だったな」

「わかってくれたならいいわ。全力を尽くしてくれることを……いえ、期待するのも失礼ね」

「そうだな」

傭兵はいつもその結果でのみ己を語る過酷な道だ。

クライアントに不手際があったとしても、どれだけ不合理で不条理な条件であろうと、一度引き受けたのなら積み重ねられた金額の分だけの仕事をしなくてはならないし、それは原則的に成功でなければならぬ。いい。

チャンピオンの首を取る。

それがどれほど難しいかなど、最早百の言葉で語り尽くすよりも「クジヨウ・キヨウヤ」の名前それだけで窺い知ることができるほどに理不尽なミツシヨンド。

だが、それでも引き受けた理由を言葉にするのであれば——やはり、先程呟いたヒイロ・ユイの格言がそれに当たるのだろうか、ナユタは一人、ユキには見えないように踵を返して、苦笑するのだった。



打倒「アナザーテイルズ」は、別にユキの使命に含まれているわけではない。

ただ、リリカが勝利を収めたというのにどこか青ざめた顔で敗者のことを気遣うような仕草を見せていたのが、ユキにとっては許せなかったという、それだけの話だ。

とはいえ、ユキに因縁がなくとも、自分が率いているフォースにとって、エーデルローゼにとってその因縁は深いものであるのだから、生半可な覚悟で挑まれるぐらいならば、リタイアしてくれた方がマシだと思うところがあるのもまた事実だった。

この苛立ちは、理不尽から来ているものなのだろう。

エーデルローゼに入れ込むあまり、厳しいことを言ってしまったのかもしれないと、悔やむところはあれど、それを省みる道理はそこにある。

勝負というのは、いつだって真剣でならなくてはいけない。

だからこそ、勝者と敗者が生まれるのは必然で、勝者が敗者を慮ったつもりになることこそが最大の侮辱である、と、ユキがそう言いたかったのであることは、リリカにも理解できた。

ユキとの邂逅を果たした翌日、リリカは一人でテイメンションを放浪しながら、そんなことを考えていた。

勝負という舞台に立てば勝ち負けが発生するのは当然のことで、GNでは極端な話、何度負けただって、ただ一回勝つただけに立ち上がれることが魅力であり、そして自分にとっての理由だと、そう思っていたのだ。

だが、トーナメントとなれば話は違う。

例えば今回負けたとしても、次回また挑戦すればいいじゃないかと、敗者の肩を叩くのはお門違いだ。

きつとあの「ホロウ・ヴァイキング」は、今回だからこそ勝たなければならぬ理由があつて、そして自分たち「アナザーテイルズ」は、違う。

自分自身が、それに釣り合うだけの理由を持っていないのに、勝ってしまったという不合理で不条理な後悔に、リリカはただ苛まれていくのだ。

二回戦の期日まではまだまだ余裕があるけれど、それまでに全てを割り切つて「エーデルローゼ」に挑めるかと訊かれれば、正直なところ自信は全くといっていいほどリリカになかった。

それでもなんとか、絡みつくようなこの感覚を振り解こうとテイメンションを放浪していた末に辿り着いたのが、いつかと同じ——かつて、チイに「前衛のお仕事」を教えてもらった、ヤナギラン畑だった。

月明かりに照らされたその光景は幻想的で、ただ見ているだけでも嫌なことを忘れられそうなものであつたが、それでもリリカの心に絡

み付いた鎖は、どうにも解けそうにない。

その理由はきつと——自分の根底にあるものと、大きく結びついて  
いるからだろう。

流してきた涙のこと。敵わないと、諦めて捨ててきたいくつものこ  
と。

それがあのトルマリンの涙とオーバーラップして、すきりと胸の奥  
が痛むのだ。

このまま前に進んでいいのだろうか。

或いはユキが言うように、リタイアした方がいいのだろうか——し  
かし、そんなことを誰かに相談できるはずもなく、悶々と体育座りを  
して、何をすることもなくリリカは時間を潰していた、その時だった。

「今宵は月が綺麗ですわね、リリカさん」

「……カエデさん……」

「例え仮想であつたとしても……美しいものは美しいのですわ」

スラスターを閃かせ、流星のように駆け抜けてきたウイングゼロ  
ヌーベルの機体が解けて、カエデの躯体がデイメンションへと姿を表  
す。

その表情は穏やかで、怒っているかどうかはわからない。

それでもきつと、カエデならそうではないのだろうかという願望で  
あつたり、或いは信頼であつたり——そういう感情が自分の胸の内側  
にあることも確かだった。

ただ、どうしてか、合わせる顔がないようでリリカは、つい視線を  
逸らしてしまうのだ。

「……ご、ごめんなさい……その……勝手に、いなくなっちゃって  
……」

「構いませんわ。まだ第二回戦は始まっていないのですもの」

そうして、リリカの横に座り込んだカエデはやはり穏やかに微笑ん  
で、後ろめたさを感じながらも必死に絞り出したリリカの言葉を否定  
することなく静かに頷いてみせる。

優しい人だな、と、そう思った。

思えば、優しくしてくれる人なんて、数えるほどしかなくて、だ

からこそ、大事にしなければいけないのに、自分はそのから目を背けて、逃げ出そうとしていたのだ。

リリカは今更、自分の心の弱さから逃げ出してしまったことに重い後悔を抱いて、その眦に、じわり、と涙を滲ませる。

「……………」

「どうしまして？」

「…………その、カエデさんは…………どうして、GBNを始めたんですか…………？」

勝手にいなくなっておいて、不躰なことだとはわかつている。

それでも、リリカは問わずにはいられなかった。

思えば自分がGBNを始めた理由は、誰かと繋がりたい合うためであって、戦いの日々明け暮れることではなかったはずだった。

だが、戦いの中にも繋がりがあつて、だからこそカエデやユユたちと出会うことができ——その一方で、戦えば、トルマリンのように涙を流してしまう誰かが生まれて。

だからこそ、何のために自分が今戦っているのか、そして戦い続けなければいけないのか——その果てに本当に楽しさがあるのか、自分の求めていた理由があるのかわからなくなって、五里霧中のままにリリカは、カエデへと縋るように問いかけていたのだ。

「そうですわね…………最初は確かに、わたくしは『リビルドガールズ』のアイカ様に憧れて、この電子の海を漂うことを選びましたわ」

「リビルドガールズ…………」

その名前は良くも悪くもGBNの中に轟いている、女の子四人組のフォース。最近ではチィの双子の姉である「イリハ」というELダイバーも加わって正確には五人に増えたいののだが、それはそれとしても「リビルドガールズのアイカ」の勇名は良くも悪くも知っているダイバーたちの方が多いことだろう。

そして、その名前は奇しくも、リリカにとっての始まりと同じだった。

あの日、あの時、「ELダイバー争奪戦」の動画を見ていなければ、自分はこのGBNを始めることなどなかったし、画面の中に映る彼女



たちの絆に憧れて、その繋がりをも、誰かと紡ぐ絆を求めて自分はここまでやってきたのだ。

微笑むカエデを横目に見て、リリカはそんな「はじまり」が同じだったことに奇妙な縁を感じながらも、同時に自分からそれを放り出すのと同じことをしようとしていたのだと気付いて、ぽろり、と小さな涙の雫を零してしまう。

「でも……そうですわね。今理由があるのなら、リリカさん。わたくしは……貴女をお慕いしているからこそ、戦いを続けていられるのですわ」

「……わ、私……ですか……？」

「ええ。最近ではミワさんやユユさんに独り占めされることも多くて、こうして二人きりになれる時間が来てくれたことに、本当に感謝しているのですわ」

カエデは微かに頬を朱に染めて、柔らかくはにかんだ。

蕾が綻ぶような、と表すのが正しいその笑みが自分に向けられている理由は、正直なところリリカの中には見当たらない。

それでもカエデにとってかけがえのないであろう理由が自分にあるということが、無性に嬉しくて、そして同時に、それほど慕ってくれているカエデたちから一瞬でも目を背けてしまったことが悲しくて。

「……わ、私……」

「ええ、リリカさん」

「……私、怖いんです……負けたら、それで終わりになっちゃうんじゃないかって、あの人たちみたいに……カエデさんたちと、一緒にいられなくなっちゃうんじゃないかって、その……っ……！」

舌先に探り当てた言葉は、驚くぐらいにシンプルなものだった。

リリカははらはらと涙を零しながら、カエデへと、胸の奥に支えていたものを吐き出すかのように、嗚咽の混じった声でそう叫んだ。

そうだ。終わりになってしまうこと。

ただそれが怖くて、怯えていたのだ。

蓋を開けてみれば随分簡単で、だからこそそんな理由で思い悩んで

いることがどうしても、ちっぽけなことに感じられて、今度はその恥ずかしさに涙がこぼれ落ちてしまう。

「……大丈夫ですわ」

「……カエデ、さん……？」

「終わりになどなりませんわ。リリカさんも……そしてあの人たちも。だからこそわたくしたちは、戦いが終わった時に、『グッドゲーム』と言うのですわ」

確かに今回のフォースバトルトーナメント、その一回戦で「ホロウ・ヴァイキング」の戦いは終わってしまつて、トルマリンはそれを嘆いていたかもしれない。

それでも代わりにウイタエがその言葉を告げてくれているし、フォースバトルトーナメントは、一年に一度とはいえ来年もまた開催されるのだ。

「カエデ、さ……うう、ぐすつ……うえええ、んっ……！」

「リリカさんは、優しいのですね」

過ぎた優しさは、この世界ではきつと毒になるとわかっていても、それでも——本当は、リリカのように小さな痛みを拾い上げていけるような人間が報われるべきなのだろうとカエデは思う。

それでもままならないからこそ、ままならなくてもできることはただ一つだけ残されているからこそ、その感情に従つてカエデは、泣きじやくるリリカの頭を胸に抱いて、髪を優しく撫でるのだ。

使われすぎて、踏み砕かれすぎて、陳腐でバラバラになつてしまつたその思い。

まだきつと、リリカの中に答えは結ばれていないのであろうその想い。

そんな、愛に——ただ一つの言葉にできる精一杯を為すように、カエデはリリカの涙が止むまで一頻り、その細い身体を優しく抱きとめるのだった。

## 第六十四話 「トウ・ザ・ビギニング」

一頻り泣きじゃくった後に、リリカはしばらくその場に座り込んで、カエデと共に、何をすることもなくただ茫洋と仮想の月を眺めていた。

電腦空間にテクスチャとプログラムで構成されたそれは、現実と比べても遜色がないほどに作り込まれているのに、動かしているサーバーが、よつぽど変な原因がなければ止まったことがないという事実には僅かな関心を寄せつつも、リリカの胸の中でわだかまっていたのは、やはりカエデからかけられた言葉に他ならない。

——貴女を、お慕いしているからですわ。

それがどういう意味を持っているかは、そういうことに縁のない十六年を過ごしてきたリリカにもわかってはいるし、あの時カエデがその口にした時の目は、笑っていながらも真剣そのものだったのだから、何かの弾みで口を滑らせたとか、そういうわけではないのだろう。

そして、勝負に関する不文律——勝者と敗者の明暗についてのことがまだ尾を引いているのもあって、リリカの脳内ではいくつもの考えが混線して、ショートを引き起こしそうになっていた。

ばちばちと音を立てて神経が焼き切れていくような、そんな錯覚を抱きながら、ああでもないこうでもない、言葉にし損ねた声が吐息となつて、唇の隙間からそつと漏れ出る。

その姿はきつと、傍目から見れば滑稽に映るのだろう。

リリカは己の奇行にじわり、と涙を滲ませる。

何故カエデが自分なんかを慕ってくれているのか——については、フォースに加入したときに聞かされたけれど、正直まだまだピンとこない。

決意。リリカの内側で眠っている強い衝動に惹かれて、それを「リルドガールズ」のアイカと重ね合わせて、カエデがこの「アナザーテイルズ」に加入したことは、今でもはっきりと覚えている。

そして、リリカにわかることといえば、カエデは決していつも意味のないことを言ったりはしない、という、その高潔ささえ感じるほど

に真っ直ぐな人間だ、ということだ。

自分が口を開くにはまだ足りていないと判断しているのか、視線ではあたたかく見守ってくれてはいるけれど、決して答えを急かすことのない辺りに、その人徳は現れているとあっていいだろう。

慕われている。好きだと言われている。

それはあまりにも唐突で、でも、カエデにとっては今きつと、言わなければならなかったことで。

最近、「アナザーテイルズ」が四人になってからはミワとカエデだけでなく、ユユとも話す機会が増えたことで、確かに結果として一人一人と個別に話している時間は、家でもたまに言葉を交わす姉以外、つまりカエデとユユの間で分けられて、減ってしまっているのだろう。だからなのだろうか。

リリカはそこに、「ホロウ・ヴァイキング」のトルマリンが流していた涙のことを重ね合わせて、きゅつと唇を真一文字に引き結んだ。きつと、トルマリンたちにも「今」でなければいけない理由があった。

だから、カエデにとってその告白は、どうしても「今」でなければならなくて、そしてずっと、答えを待っているのだろう。

すー、はー、と浅く呼吸を整えて、リリカは意を決したように小さく咳払いをすると、おずおずと遠慮がちに、傍で微笑むカエデへと問いかける。

「…………え、えつと、あの…………カエデさん…………」

「どうかしましたの、リリカさん？」

「…………そ、その…………私のこと、あの…………」

「お慕いしている、という話ですか？ うふふ、それなら本気も本気、大マジですわ」

やはりあれは、告白だったのか。

リリカは人生でまるで縁がなかったしこれからもきつとずっとないであろうと思いついていた一大イベントが、唐突に側頭部をガツンと殴り付けてくるような錯覚を抱いた。

告白。

つまり、そういう、ライクじゃなくてラブの方で、相手に好きだと伝えるための手段だとか儀式だとかそういうもので。

それは、それこそカエデが言った通り相手に強く惹きつけられるものを感じたからこそ出てくる言葉で、じゃあ自分はそれに値するのかと考えると、まるで自信がなくて。

ぐるぐると益体もない思考が脳裏で渦を巻くのが、そのまま眩暈に変わったような感覚を抱きながらリリカは、なんとかその言葉を咀嚼して呑み込もうとする。

「……そ、その……失礼かもしれませんが……訊いても、いいですか？」

「ええ、なんなりと」

「……そ、その……わ、私のこと……好きって……それなら、その……どうして、とか、なんで今なのか、とか……ごめんなさい、なんか……断ってるみたいで……」

正直なところ、カエデからの告白が迷惑かどうかについても、リリカは判断がつかずにいた。

なんせ人生で初めての告白なのだ。

相手にそこまで強く思われているということとは素直に嬉しくても、やはりどうして自分なのか、そしてどうしてこのタイミングなのか、といった——いや、準備万端という状況での告白なんてそれはもうプロポーズなのだろうが——ことが気にかかってしまう。

そんな、不躰とも取れるリリカの言葉にもカエデは動じる様子を見せず、いつものように豪胆で剛毅な微笑みを浮かべて優雅に立ち上がった。

そして、お手をどうぞとばかりに華奢な指先が差し伸べられる。

なんだかその所作は貴族のようで、時代が時代ならきつとカエデは宮廷とかそういう場所で暮らしていたのだろうな、と、リリカはどこか現実逃避をするような感想を胸に抱いた。

「好きになったことに理由はありませんわ。確かにリリカさんの目を、その決意をわたくしは尊敬してやまないアイカ様と重ね合わせておりましたけれど……リリカさんはアイカ様ではない。そして、リリ

カさんがリリカさんだから、としか答えられませんわ」

「……私が、私だから……？」

「ええ、誰よりも優しく、そして気高く……強い決意を秘めている貴女の澄んだ瞳に、わたくしの時は囚われてしまったのですわ」

そして、心は燦然と輝く星々よりも熱く燃え上がる。

詩的な言葉を臆面もなく紡ぎ上げるカエデの仕草はどこか芝居がかって見えるほど大仰で、だけどそれが様になっていて、リリカはそれが本気だからなのだろうと、その青い瞳を覗き込んでその結論に至った。

「そして、何故今か、でしたわね」

「は、はい……その……」

「わたくし、何事においても後悔したくありませんの」

それは勝負であつても日常の些細な選択であつたとしても。

カエデは左で胸を握りしめながら、力強く断言する。

後悔。それは決して先に立つことはなく、いつかああしておけばよかった、こうしておけばよかったとたればに変わって、道を歩もうと進めた足に絡みつく重い枷となる。

だからこそカエデは、今この瞬間に、ユユやミワがいない今だからこそ、そして——フォースバトルトーナメントという一世一代の大舞台に立っているからこそ、その秘めていた、秘め続けていた想いをリリカに打ち明けることを決意したのだ。

「後悔……」

「別にリリカさんと二人きりになれたなら、いつ伝えてもわたくしとしては構わなかったのですけれど……こういう機会ですもの。勝つたとしても負けたとしても、そこにそれまでの後悔を残して終わらせたくないと思つたからなのかもしれないわ」

勝ち負け、というのはきつとフォースバトルトーナメントの勝敗という意味だけではなく、自分の告白が受け入れられるかどうか、ということも含まれているのだろう。

饒舌に語りながらも、少しだけ気恥ずかしいのか、頬を桜色に染めているカエデの姿は先ほどまでの、凛々しく燦然と輝く女傑といった

印象から、うら若き等身大の恋する乙女へと装いを改めていた。

確かに、この戦いは——フォースバトルーナメント自体は、「ホロウ・ヴァイキング」たちのように、「アナザーテイルズ」にとって何か大きな意味を持ち合わせているわけではない。

ただ、人生の節目なんてものは大概がそんなものだ。

人はそこに何かしらのドラマを期待するけれど、大概は日常の中に呆気なく埋もれていく。

それに、何もかも意味があつて、何もかも重大な決断を迫られていたのでは、人が胸の内に抱えられずに取りこぼすどころか、破裂してしまう。

そうじゃなくたって、いくつも人は取りこぼしては、それを後悔という名前の呪いに変えていくのだから、カエデの、思い立ったが吉日とばかりに、今を決断の時とした行動力は、リリカにとっては素直な尊敬を抱くのに十分なものだった。

「……そ、その……カエデさん……」

「……リリカさん」

ここまで赤裸々に打ち明けてしまえば、流石に不安を隠すのは難しいのだろう。

カエデは今までに見たこともないほど心配そうな顔をして、リリカの瞳をずい、と、食い入るように覗き込んでくる。

答えなければならぬ。

それがどんなものであったとしても、曖昧に終わらせてはいけぬ。

例えそれが——自分には、まだ理解に至らないことだったとしても。

ごくり、と息を呑み込んで、リリカは呼吸を整えると、今の自分ができる精一杯を、そして悔いを残さない答えを、カエデの瞳を覗き返しながら、その唇から紡ぎ出していく。

「……えっと、その……嬉しい、です……でも。その……好きとか、嫌いとか、私、よく分からなくて……その……お友達すら、いなかったから……えへへ……」

「リリカさん……」

「だから……きつと、カエデさんが納得できる答えに辿り着くには、時間がかかるかもしれません……でも、その、良ければ……お友達から、始めてくれますか……？」

それはきつと、ずつとリリカが探し求めていた願いだった。

恋とか愛とか、それに至るまではまだ遠く、例えば放課後の帰り道にクレープ屋によって、二人で頼んだメニューをシェアしたり、休日にくらりと街に出かけて、予定もなく彷徨い歩いたり。

そんな、他愛もなくて、水面に浮かぶ泡沫のように危うい、思春期の繋がりをずつと、ずつと探し続けて、リリカはこの電子の海に潜ってきたのだ。

そして、それがリリカに答えられる精一杯だった。

しどろもどろになりながらも紡ぎ上げられた答えに、カエデは一瞬だけ目を丸くしたものの、すぐにくすぐすと口許に笑みを湛えて、顔を真っ赤にしているリリカにどこかくすぐるような言葉を返す。

「……ふふ、リリカさんらしいですね。でも……わたくしたち、もうお友達ではありませんこと？」

「……え、あ……それは、その……言葉の綾、とか、そういうので……」

「冗談ですわ。なら……今日ここで、改めてお友達から始めましょう、リリカさん」

——わたくしは、今はそれで十分ですわ。

につこりと、満面の笑みを浮かべるカエデの顔に、「後悔」の二文字はどこにも記されていなかった。

いつか、どこか、今じゃない遠く。

もしかしたら、カエデが望んでいたような未来が来るのかもしれない、いしそうでないのかもしれないけれど、きつとそこに後悔はないと、リリカと共に歩んだ時間は例え途切れたとしても旅路と呼べるものであると、その笑顔は何よりも雄弁に物語っているようで。

強いひとだな、と、リリカは思う。

月並みな言葉ではあるけれど。そして、陳腐ではあるけれど。



カエデだって——十分に、決意に溢れた人なのだ。

キスの代わりに差し伸べられた手を取って、電子の海に浮かべられた大地へとリリカは立ち上がる。

後悔。

勝った負けたはその時に考えればいいとしても、カエデが勇気を出してくれたなら、精算しなければならぬことは自分にも存在しているのだ。

「……その、カエデさん……」

「なんですの、リリカさん？」

「……ありがとうございます」

——私を選んでくれて。私を見つけてくれて。そして、私に勇気をくれて。

万感の思いを込めて、リリカははつきりとその言葉を口に出した。あなたは何のためにゲームをしますか、と問いかけられたとき、きつとこのGBNに迷い込んできたばかりの頃の自分はその答えを持たなかった。

でも今は、違う。

そしてそれは、カエデが見つつけてくれたから、彼女の振り絞った勇気が照らし出してくれたことだから。

きゅつ、と強く掌を握りしめると、リリカはカエデの掌を頬に添えて、善は急げとばかりにログアウトを選択する。

さらさらと現実へと解けていくリリカの軀体を見送りながら、カエデは、相変わらず思い込んだら一直線なその、頑なで強い決意に苦笑を浮かべながら、いつてらっしやいませ、と、小さくエールを口にするのだった。



「くあ……急にどしたの、梨々香ちゃん」

時刻は午前三時を過ぎて、草木が眠ったとしても眼下に見つめる東京の街は煌々と地上にその人工の星座を描いている。

ペランダに美羽を呼び出した梨々香は、何から話したのかと迷いながらも、身体を突き動かしている情動に任せるままに口火を切った。

「……その、あのね、お姉ちゃん。私……カエデさんに告白されたんだ」

「……おお、おお……うん？　なんと……それはびっくりだねえ」

なんとなくそんな感じはしてたけどねえ、と付け加えて小さく欠伸をしながらも、美羽の瞳はどこか動揺を湛えて静かに揺れていた。

カエデがいきなりアクションをかけてきたこともさながら、梨々香がそれを自分から口に出したことも、美羽にとっては意外だったし、なんなら今まで抱いていた眠気が吹っ飛びかねないぐらい驚いている。

「……その……お友達から始めよう、ってことなんだけど、伝えたいのは、そっちもだけど、そっちじゃなくて、その……」

「……フォースバトルーナメントのこと？」

「……う、うん……せつかくの機会だから、その……勝つても負けても……後悔とか、したくないって、私も思ったから……」

きつとそれは、ずっとやり残してきた宿題のようなものだった。

自分が言いたかったことを察してくれた姉の器量の良さに、ずっと憎んでいたはずのそれに今は感謝をしながらも、梨々香は意を決して、おずおずと、しかし臆することなく言葉を紡ぐ。

「……私ね、どうしてお姉ちゃんが生まれた時に、私の分を全部持つてつちやっただらうって、ずっと思ってた」

「……」

何をやっても梨々香は美羽に勝てなかったし、両親だってそれを薄々察していたからこそ美羽の方に期待を寄せるようになって、そして今、部屋という狭い世界に籠っている自分にさえも関心を寄せていないのが梨々香の現状だ。

だから——正直に口にしてしまえば、梨々香はずっと、美羽のことを羨んで、そして恨んでいたことになる。

才能を全部持つて生まれてきた姉と、どんなに頑張っても姉を超え

ることのできない鈍臭い妹。

人間関係も、勉強も、運動も、何もかも全部。

それを一言にまとめてしまうなら、梨々香はずっと、美羽のことが嫌いで嫌いで仕方なかったのかもしれない。

「……いつか言ったよね、お姉ちゃんのこと、全部が全部好きになれないって……」

「うん、うん……覚えてるよお、梨々香ちゃん」

「……でもね、今は……違うの」

「……梨々香ちゃん？」

「……私は、多分……運が良かっただけなのかもしれないけど、きつと意味なんてないのかもしれないけど……お姉ちゃんと違うところがあつて、それに気付けたのはカエデさんが……ユユさんが……お姉ちゃんがいてくれたからで、だから……」

——今は、大好きだよ。大嫌いなどころも。

それはリリカにとって、一世一代の告白だった。きつとうやむやにしたままでも生きていけることなのかもしれない。

深夜のテンションと、カエデからの告白に舞い上がって、恥ずかしいことをしているだけなのかもしれない。

それでも——フォースバトルトーナメントを一つの転機として捉えるなら、それだけは、梨々香が呪いに変えてしまいたくない、ずっと抱き続けてきた後悔であり、精算すべきことだったのだ。

もちろん、全てがきつちりとゼロで割り切れるわけじゃない。

美羽も梨々香も、互いに浮かべている表情は微妙なものだ。

それでも、どこか示し合わせたように交錯した視線には、互いの本気が絡みついていて。

「……随分、遠くに行っちゃったんだねえ」

「……お姉ちゃん？」

「ねえねえ、梨々香ちゃん。美羽はね、梨々香ちゃんが立派になってくれたことが悲しいんじゃないんだよ、むしろ嬉しいんだ」

「……お姉ちゃん……」

「……そっかあ、美羽をまだ、お姉ちゃんって呼んでくれる……それだけだね、うん……らしくないなあ」

「ごしごと、浮かんできた涙を擦る美羽は、その理由がちっぽけなものであることはわかっている。」

カエデのことは人間として好ましいと思っけていても、やっぱり最愛の妹とは片時も離れたくなかったわけで、そして、そこに独占欲とかそういうものがなかったかと問われて首を横に振れば、それは嘘になるわけで。

すっかり遠くまで行ってしまった、まだ頼らないところはあってもたくましくなった妹の成長を喜ぶ心と、そんな寂しさが緋い交ぜになって、涙がこぼれてしまうのだ。

「……お姉ちゃん、その……お姉ちゃんは、私のお姉ちゃんだから……」

「然り然り……美羽は、いつだって、梨々香ちゃんのお姉ちゃんだから……」

「……困った時は、その……ちゃんと、助けて、つて言えるように……なるから……その、変な話だけど……よろしくね……」

「梨々香ちゃんが困ったときは、世界のどこからでも飛んでいくよお、だから……美羽も、よろしくねえ」

グッドゲーム。

ゲームじゃないし遊びでもないけれど、きつと割り切れない全てを割り切つて、新しく気持ちを切り替えるのなら、その言葉こそが相応しい。

だからこそ、その言葉に代えて梨々香は、そして美羽は、後悔を残さないように、そして過去をここで足元に埋めて、明日へと向かう証とするように、かつて仲が良かった頃のように、月明かりが朧に照らす互いの額へ、口付けをそつと落とすのだった。

## 第六十五話 「激突する新星」

『さあ始まりましたフォースバトルトーナメント、Aブロック第二回戦！ 一回戦から激戦が続く中、見事に勝ち抜いた猛者たちは我々に何を見せてくれるのかア！ 一秒たりとも目が離せない戦いの始まりでっせ！ まずは第一試合！ 新進気鋭のニュージエネレーション、「アナザーテイルズ」と、貪欲なまでに勝利を求める超新星、「エーデルローゼ」の対決からお送りいたしまああああすっ！』

実況席でマイクを握る男——ミスターMSの巧みにしてハイテンションなマイクパフォーマンスが、参加こそしなくとも会場から、セントラル・エリアのライブモニターから、その試合が始まるのを今か今かと待ち望んでいる観衆たちのボルテージを、バイブスを煽り立てる。

新進気鋭のニュージエネレーション。

それは誰が呼んだか、「ビルドダイバーズのリック」からこっち、このGBNに現れた有望な新人たちを指す言葉だった。

だがしかし、それは言い得て妙ではある。

この二千万人のアクティヴユーザーを抱える仮想世界では、今日も何処かで激しく瞬く満天の空を彩るように、駆け抜ける流星のように、有望な新人たちが現れて、あるいは消えてを繰り返している。

そういう意味では「アナザーテイルズ」と「エーデルローゼ」はニュージエネレーションたちの中でも長く生き残って、実力派と呼ばれる領域までその片足を踏み入れているといってもいい。

とはいえ、外野の評価がどうであれ関係ない、というのがユキの信条であり、傭兵として培ってきた冷静さの現れでもあった。

「……ユキ」

「どうしたの、サーヤ」

しかしそれとは対照的に、ふわふわと癖のある髪をポニーテールに纏めた少女——サーヤはどこか不安そうに周囲をちらりと一瞥しては、胸の辺りで固めた拳を震わせていた。

緊張するな、というのも無理な話なのだろう。

打倒チャンピオンを本気で掲げているとはいえ、フォーสบトルトーナメントという場が与えるプレッシャーは並みのものではない。負ければその瞬間に積み上げてきたものが無に帰してしまうのだから、この「エーデルローゼ」に人並み以上に思い入れがあるサーヤにとってそれは怖いと弱音を吐くのも領ける問題だ。

ユキはふう、と小さく息を吐くと、落ち着け、とその言葉に代えて、サーヤの肩をぼん、と小さく叩く。

身長では頭一つサーヤの方が高いから、少しだけ締まらない絵面になつてしまったが、それはそれとしても、今回の戦いに当たつて自分はやれるだけの準備をしてきたのだから問題はないと、そう伝わればそれでいいのだ。

ユキは小さく背伸びをした踵を地面につけると、もう一度小さく息を吐いた。

「ありがとう、ユキ。私たちをここまで連れてきてくれて。それに……新機体のアドライブスまで貰つて」

「勝ちたいと願つたのは貴女でしよう、サーヤ。私はそれに応えただけ。それに……そういうことを言うのは優勝してからにきなさい。気を緩めることほど負けに繋がることはないわ」

「……それもそうね」

「割り切りなさい。過去も、因縁も。私たちは——チャンピオンを倒すためだけに、この場に立っているのだから」

ユキはちらりと、対面に陣取っている「アナザーテイルズ」の四人を一瞥した上で、さらりとその銀髪を掻き上げながら、あえてどこか冷たくサーヤに、そして同じように緊張しているリーシャとランシエにそう言い聞かせる。

——面構えが変わっている。

率直にユキの目から見た印象を語るのであれば、そうなるのだろう。

事実、試合開始までに対面していた「アナザーテイルズ」、特に先日までは負けた相手を気遣うように泣いていたリリカの表情は、ほとんど別人と違っていいほどにきりっと引き締まったものになっていた。

それを人は、覚悟と呼ぶのだろう。

自分が「エーデルローゼ」のリーダーとして背負っているものがあるように、リリカにも「アナザーテイルズ」を背負って立つ者としてのそれがある。

当たり前のことではあるが、ユキはそれに少しだけ感心していた。

「エーデルローゼ……油断ならない相手ですわね」

以前に敗北の土の味を思い知らされたことを想起して、カエデは踵を返して一足先に戦場へと解けていくユキを一瞥しながら、少しだけ苦々しくそう呟いた。

視線の先にあるのは、何もユキの小柄な体躯だけではない。

少女たち四人が集っていた中で、おそらく以前にブリッツガンダムを操っていたダイバーの代わりに傭兵として雇われたのである。長身の男——ナユタにも、カエデの、そしてユユの視線は注がれている。

「ふふ……勝つために傭兵を引き入れる……勝利への執念、凄まじいものですね……？」

「くあ……あの『セルピエンテ・クー』を率いてるナユタって人だっけ？　まあ、油断できないよねえ……」

ミワは小さく欠伸をしながらそう呟いたものの、個人ランキング50位という、ユユより数字だけ見れば格上の相手を「エーデルローゼ」が雇っていたとするのなら、戦力差に関しては何とどこちらが有しているアドバンテージは相殺されたといってもいいだろう。

あの「大戦争」の折には、衛星軌道でその戦いぶりを一目見ただけであったものの、それだけで猛者だとわかる程度には、ナユタの腕前は研ぎ澄まされ、そして洗練されたものだった。

「……でも、私も……私たちも、負けられない……」

「ええ、仰る通りですわ、リリカさん」

「ふふ……数字など飾り、戦いの本質とはその戦場で語られるべきものですからね……」

だが、それがどうした。

リリカはぐっ、と拳を握りしめると、か細くもはきはきとした声でその覚悟を、決意をはつきりと口に出す。

三桁の英傑と二桁の魔物が相手であったとしても、自分たちが戦って、勝ってきた——敗者の願いを踏み砕いたのなら、その破片で足を切り裂かれたとしても、前に進み続ける他にない。

そして、ユユが語った通りに、個人ランキングというのは確かに強さの指標としては極めて分かりやすいものの、このGBNにおいては、二千万人という膨大なアクティブユーザーを抱えている都合上、ランキングに数えられない、あえて挑んでいない猛者など枚挙にいとまがない。

例えばそれが、可愛い子を求めて電子の海を放浪するG—Tube rであったり、姿を見た瞬間には相手が死んでいる、という都市伝説紛いの噂とともに語られる「死神」であったり、或いは魔境と謳われる「マゼラン大陸」を根城とするSD使いたちであったり——それだけ猛者がいるなら、ユユが「数字など飾り」と言ったのも頷けるだろう。

だが、それは一つの指標であることもまた確かなのだ。  
ナユタも、そしてユキも、決して悔っていない相手ではない。

「皆、その……頑張ろう……私も、頑張るから……！」

「うんうん、リリカちゃんがそう言ってくれるなら……やるつきやないよねえ……！」

「仰る通りですよ、以前に貰った屈辱も熨をつけてお返しいたしますわ！」

「ふふ……ユユも、『アナザーテイルズ』の一員、その通りにいたしましよう……！」

だからこそ、負けられないし、こんなところでは止まれない。

そんな覚悟と決意を胸に抱きながら、リリカたちもまた掌を重ね合わせる、新たな戦場へと解けていくのだった。



バトルフィールドとして選ばれたのは、いつかの「大戦争」でリリカたちが配置されたのと同じ地球圏、衛星軌道周辺だった。



ただし違いがあるとすれば、リリカたちが配置されたのは、映像作品「機動戦士ガンダム0083」に登場する、「ソーラ・システムII」の反射鏡周辺であることだろう。

暗礁宙域は近くになく、狙撃をするには少しばかり厳しいポジションに配置されてしまったことに対して、ミワは僅かに乱数の女神様に対する敵意を抱いたものの、ここでキレたところでどうしようもないなら、この状況を利用すればいい。

相手がどう出るかについてはわからないものの、この地形は防衛側にとつては割と有利に働くものだ。

無数の反射鏡は、レーザー攻撃や一部のビーム攻撃を反射する特性を持っており、リリカたちは知らないものの、あの「リビルドガールズ」が「ノイエ・シルバリー」と戦った時にあえてミラーを踏み砕くことでドラグーンによる戦術を封じて、数的な不利を覆したという逸話がある。

エーデルローゼ側にドラグーンを持った機体がいるかどうかについてはわからない、というより以前戦ったときはいなかっただものの、応用できる可能性がある、というだけで、いつてしまえば悪用できる可能性がある、というだけで、そのファクターを握っている側は有利を取れるのだ。

鬼が出るか蛇が出るか——そんな風情で、ミワが後衛に、リリカが中衛に、そして突撃前衛にカエデを、そのフォローにユユが向かうという陣形を組んで、「エーデルローゼ」の攻勢に備えていたその時だった。

『悪いけれど、一気に突破する……あのG―セルフは任せたわ、ナユタ』

『了解した、確認するが、フラッグ機ではないんだな?』

『私はそう踏んでいるわ』

『承知した』

ミワが飛ばしていたクリアインコムが傍受した通信が、全員のコックピットに響き渡る。

リリカは早速自分たちの作戦が一つ見破られたことに唇を噛みな

がらも決して諦めることなく、中衛としていつでもカエデとユユの、そしてミワのフォローに回れる立ち位置をキープする。

「流石流石、傭兵は伊達じゃないってことだねえ……！」

ミワはスコープを覗き込みながら微かにそう毒づいた。相手はいくつもの戦場を渡り歩いてきた猛者だ。

ユユの存在をブラフにして勝った第一戦目とは流石に事情が違うということなのだろう。

ただ、幸いなことがあるとするならば、ナユタという最大戦力をユキと同時にリリカへとぶつけるという選択肢を相手が選んだのではなく、ユユをフリーにしないというローリスクな策を選んくれたことだ。

乱戦そのものを「アナザーテイルズ」は苦手にしているわけではない。

だが、「二桁の魔物」と「三桁の英傑」を同時にぶつけられたのでは、リリカも流石に逃げ切れることは難しいと、つまりはそういうことだ。

「ふふ……悪いですけど、ユユも先を急いでいます故」

『それは此方も同じだ、突破させてもらう』

「……ふふ、できるものなら……！」

戦端を開いたのは、ナユタとユユの二人だった。

ブルーフレーム色に塗り直したアストレイノワールと、どこかレガンダムを思わせるカラーリングに染められて、少年的だった独特な顔つきが標準的にガンダムフェイスに置き換えられたG-アイデアの二機は、さながら漆黒の宇宙に新たな星座を出鱈目に刻み付けるような軌道で撃ち合い、避けあい、そして切り結ぶ。

今ここが古代ローマのコロッセウムであったのなら、そして観衆たちの声がリリカたちにも届いていたのなら、それは割れんばかりの歓声でもって、その始まりを讃えていたのであろう。

だが、戦場にあるのは孤独と、言葉のない緊張だけだ。

ナユタがユユを抑えにかかったということは、ユキはフラッグ機をリリカのフルブランシユと見込んだということである。

「やせませんことよー！」

それを察したカエデは、ナユタの対処をユユに一任することにして、脇目も振らずに、リリカが操る白亜のガンダムに突撃する、いわゆるティターンズカラーに染め上げられ、フォビドゥン、カラミティ、レイダーの三機が持つ特徴をストライカーパックに統合したユキの機体、【ガンダムヴァイスストライクセカンド】を、追いかけてようと、左側に偏ったスラスターを展開した。

しかし、それを阻むかのように一条の閃光が駆け抜けて、カエデの上下という死角から、全く同じカスタマイズが施されながらも片方は灰色と青というカラーパターンに、そしてもう片方は奇しくもリリカと似通った白と赤というツートンカラーに染め上げられたアメイジングストライクフリーダムをベースにハイペリオンガンダムを組み込んだ、【ストライクハイペリオン】が強襲をかけてくる。

『それはこちらと同じです、カエデさん！ ユキさんの邪魔は……させません！』

「あら、リーシャさん。ヴァルガ以来ですわね！ しかし……愛の力を得たこのわたくしの前に立ちはだかるのなら、容赦はしませんことよ！」

『何故そこで愛を……？ まあいいです、ランシエ！』

『わかった、リーシャ……って、ああっ!?!』

丁度カエデの真下から、ロムテクニカビームナイフではなくシユパールケルタビームサーベルを構えて、ウイングゼロヌーベルを串刺しにしようとしていたランシエのストライクハイペリオンが、彼方から飛来してきた「何か」にバックパックごとコックピットを撃ち抜かれて爆散する。

『くっ、緋きスナイパー……!』

「なんだかなんだか、敵に塩を送っちゃった気分だねえ……」

「ナイスですわ、ミワさん！ いえ、お義姉様と呼ぶべきでしょうか？」

「やだよお、ミワちゃんの妹は、リリカちゃんしかいないんだから……っ！」

開戦早々ランシエが操る白と赤のストライクハイペリオンを撃墜

したのは、他でもなく最後衛に陣取っていたミワのフリーダムガンダムルージュティラユールだったが、狙撃というものは往々にしてリスクを伴うものだ。

カエデが手に取ったシザーソードでリーシャと切り結んでいる内に、その射線からミワが潜伏していた位置を逆算した、というよりは虎視眈々とその瞬間を狙っていたのであろうその機体は、リリカをも置き去りにして真紅の狙撃手へとブーストを噴かす。

『ミワああああッ!!』

「っ、来たねえ、サーヤ……!」

以前はハイペリオンガンダムを使っていたそのダイバー……サーヤが操る機体は様変わりした、というどころの話ではなく、ドレッドノートガンダムをベースに、レジェンドガンダムやデステイニーガンダムといったサードステージシリーズの要素を組み込んだ【ドレッドノートガンダムオメガ】に更新されていた。

オールレンジ攻撃を機体の主戦術としたそのビルドは、徹底的にミワという狙撃手にして偵察手を炙り出し、追い詰め、そして確実に撃破するために練り上げられたものだ。

機体の脇腹から展開されるプリステイス・ビームリーマーやバックパックから展開されるドラグーン、そして脚部をガンダムAGE―FXから流用することで組み込んだCファンネルが、執念のマニユアル操作によって密度の高い弾幕を形成し、ミラーの上という遮蔽物が無い場所に位置取らざるを得なかったミワを、じわじわと追い詰めていく。

「っ、お姉ちゃん……!」

『よそ見をしている暇などないわ』

一瞬、ミワの救援に向かうか躊躇したが、それを咎めるかのように虚空から飛来してきた電磁砲の弾丸がリリカを正気に立ち返らせる。そうだ。

ユキが言うように、今この瞬間に狙われているのは自分も同じで、一秒たりとも油断がおけないのは同じなのだ。

こうなれば、ミワを信じることしかリリカにはできない。

ドツズライフル牽制射撃として撃ち放つと、リリカは機体からCファンネルをマニュアル操作で展開して、猛追してくる黒いガンダムへとけしかける。

『ファンネル系の武装……見えていなければ確かに脅威に値するわ、でも』

「させない、そこっ……！」

『……っ……!?!?』

あえて目立つ位置にファンネルを置いて、これ見よがしに円周軌道を描いてみせたのは単なるブラフでしかない。

リリカはユキがCファンネルへと気を取られていた一瞬、そこに生まれた隙を見抜いて、収束モードに切り替えてドツズライフルを撃ち放った。

——だが。

「ビームが、曲がって……!?!?」

『ゲシュマイディッツヒ・パンツァー……こんな早々に使わされるとは、私も随分手緩くなったものね……!?!?』

ヴァイスストライクセカンドを捉えていたはずの弾道は、二枚の巨大なバインダーとしか形容できない物体に直撃したかと思えば、そこにダメージを与えることなく、明後日の方向へと逸れて飛んでいく。

ゲシュマイディッツヒ・パンツァー……原典の映像作品ではフォビドウンガンダムが搭載していた、ビームを屈曲させる特殊装甲をユキはストライカーパックに組み込むことで、ビーム攻撃への対抗策としていたのだ。

だが、ガンダム作品に関してはAGEに関して以外はそれほど詳しくないリリカは突然起こった不可思議な現象に戸惑う他になく、そしてお返しとばかりに生まれた一瞬の間隙を突くように、ヴァイスストライクセカンドの左手に装備された大型バッテリーセルと直付けされたロケットアンカー、「パンツァーアイゼンII」がフルブランシユの脇腹を掠めて、傷痕を穿つ。

「いけない、私……油断して……！」

それでも、一瞬の内に直撃コースだけは避けていたのはリリカの危

機感が為せる一種の離れ業であった。

ユキは小さく舌打ちをして、パンツァーアイゼンIIを回収しながら、ストライカー上部に二門備え付けられたレールガン、「エクツァー」を放つが、リリカはそれをもひらりと躲して、展開していたCファンネルにユキへの攻撃を命じる。

『ちっ……何があつたかは知らないけど、出来るようになったのね』

「……負けられない、後悔したくない……だから、私は……！」

『そうね……だからこそ問答は無用！』

ヴァイスストライクセカンドの弾幕砲火と、フルブランシユのCファンネルの軌道が交錯し、戦場に閃く軌跡を刻む。

だがそれは、宣戦の印でしかない。

「リミテッドコール……トライスラッシュユブレイド！」

『トライエイジシステム……だけど制限付きなら、対艦刀で受け切れる！』

更なる戦いを、更なる熱狂を求めて画面の外で観衆たちが雄叫びを上げているのも知らずに、戦場を駆け抜ける白と黒のガンダム——リリカとユキは互いのプライドを懸けてただ、目の前の敵を打ち倒すべく咆哮するのだった。

## 第六十六話 「始まりが故」

『ミワああああッ!!』

スナイパーを見かけたのなら、或いは射線から位置を割り出したのなら、親の仇の如く追い詰める。

誰が語ったのかは知らないが、それはかつてGBNが普及するよりも、GPDが巷を席卷していた頃より更に昔、ジョイスティックとボタンで機体を操作して戦うアーケードゲームの時代から語り継がれてきた格言であり、立派な戦術の一つであった。

だからこそ、というには私情と私怨が混ざっているものの、サーヤが新たに作り出したドレッドノートオメガは、全身にスナイパーの天敵ともいえるオールレンジ兵装を搭載することで決して足を止めさせずに制圧する、というコンセプトでもって作られている。

そしてそれは、正統派なスナイパーとして鳴らしているミワにとって、サーヤが不倶戴天の天敵へと進化したことを意味することに他ならない。

オート操作も混じっているとはいえ、全身に装備したドラグーンユニットや、プリステイスビームリーマーからの補助射撃による弾幕は、さながら、雑談の代わりにビーム兵器を搭載した、エンドレスワルツ版のガンダムヘビーアームズ改に匹敵するといってもいい。

「これはこれは……ちよつとまずいねえ……」

なによりもスナイパーにとつての相棒は、長大な狙撃銃だ。

武器の長さや大きさはそのまま判定の大きさに直結し、そして、フリーダムルージュティラユールにとつて最大の武装であるツダの対艦ライフルを撃ち落とされてしまえば、この戦いにおいてミワが果たせる役割は、ほとんど皆無になるといつて差し支えない。

ミワの戦闘センスは、リリカと比べて狙撃技術に偏重している。

リリカは超長距離からのピンホールショットなど、逆立ちしてます真似できないが、ミワの場合はその逆で、普通のクロスレンジにおけるドッグファイト——多くのダイバーが得意とする量分を、若干ではあるが苦手としているのだ。

だが、その「若干」が致命に至りかねないのが「エーデルローゼ」であり、そして愛機を新たなるものへと変えることで、自身の天敵へと羽化したサーヤであった。

ミワはテイラユールへと強化する前から愛用しているサブマシンガンを腰部のマウントラッチから取り出すと、円周軌道を描いて自身の死角へと回り込もうとするファンネルを叩き落としながら、モニター越しにも伝わってくるその憎悪に、嫌な汗が滲んでくるのを感じ取る。

『……ユキは過去に囚われるなど私に言ったわ』

「……」

『だけど、ミワ……貴女を屠らなければ私は……「私のエーデルローゼ」は前に進めない!』

勝利を至上命題として掲げるが故に、手段を選ばず勝利をもたらしてきたミワという災禍に耐えきれず、去っていったメンバーがいた。

だが、ミワにそう望んだのは、駆け出しながらも超新星の狙撃手として名を馳せている彼女をかつての「エーデルローゼ」に引き入れたのは、サーヤ自身に他ならない。

時間差でマニユアルとオートを切り替えて放たれるオールレンジ攻撃によって、じわじわとフリーダムルージュティラユールの装甲値を削りながら、サーヤはぎり、と強く奥歯を噛み合わせる。

そうだ。自分の選択がこの因縁を生み出したのなら、そこにけじめをつけなければいけないのは、他でもない自分なのだ。

サーヤは構えていたユーディキウムビームライフルの三点射で、ミワをドラグーンの射線へと誘導するように追い込みながら、その瞳に憎悪と後悔、そして慚愧の念を滾らせる。

ミワはその憎悪を、ただ受け止めることしかできなかった。

対艦ライフルを死守し、ドラグーンを叩き落としながらも深紅の狙撃兵は確実にその耐久値を、甞られるかのように消耗し、じりじりと撃墜の二文字まで追い詰められている。

「……そっかそっか……ごめんね、サーヤ……」

『何を今更アツ!!』



「……でもねえ、ここではいそうですかって負けてたら、ミワだって、前に進めないんだよお！」

自身と同じく、旗揚げの頃からメンバーとして在籍していたリーシャが残ってくれたことで辛うじて「エーデルローゼ」が持ち直したのであろうことは、その影には血反吐を吐くようなサーヤの努力と、そしてリーシャの献身があったのであろうことはミワにも予想がつく。

確かに自分は、謝っても許されないようなことをした。

去っていったかつての「エーデルローゼ」に在籍していた面々の顔と名前を思い浮かべて、罪悪感に胸の奥底を切りつけられながらも、ミワは歯を食いしばって、網をかけるように巧みに操られるオールレンジ攻撃から逃れ続ける。

だとしても——いや、だからこそ、ここで負けてやるわけにはいかないのだ。

手を抜いて、サーヤに撃墜されることで気晴らしをさせてやることは簡単だろう。

だが、それは単なる侮辱でしかない。

既にミワが「ホロウ・ヴァイキング」という敗者の屍の上に立っているのなら、そして何より、リリカが率いる「アナザーテイルズ」の一員として戦場に立っているのなら、そんな私情に引つ張られて、わざわざ負けてやるというチョイスは最初から存在しないのだ。

『そうよ……それでいいわ！ 手を抜かれたって腹が立つだけ！ 本気のおんたを倒してこそ、私は、私たちはア!!』

「……ごめんね……だからミワだって、本気でやらせてもらおうよお！」  
サーヤの瞳に映っているものは過去の残滓でしかない。

踏み砕かれてバラバラになった思い出の破片を自らの心臓に突き立てるかのような悲痛な叫びを上げて、徹底した中距離戦を仕掛けてくるサーヤは最早慚愧の化身といっても過言ではないほどの執念と圧をその瞳に宿している。

網をかけるように展開されたドラグーンやCファンネルは確実に、ミワの迎撃によってその数を減らしていたものの、元から積んでいる

数が数だ。

何基撃墜したかを数えるのさえ馬鹿らしくなるほど全身から生えたその無線兵装の数々にミワはサーヤの怨念を感じながら、じわじわと削られていく装甲値と、そしてなんとしても死守しなければいけない対艦ライフルの間で視線を往復させる。

引いた撃鉄がかちり、と虚しい音を立てたのはその時だった。

サブマシンガンの弾が切れたのだ。

「……………」

『貫ったアー!』

そして微かにミワが足を止めたその一瞬を見計らって、サーヤはドラグーンシステムと、己が手にしているビームライフルによる一斉射撃を仕掛けてくる。

またとない好機を逃すかとはかりに放たれたその閃光は怨念と憎悪を乗せて、深紅の狙撃手を喰らいつくすかのように波濤となって押し寄せてくるが、それでもミワは諦めていなかった。

まだ、やれることはある。

もしもこの地形を引いていなかったら、諦めていた。

もしも自分が——否、リリカがGBNを始めていなかったら、そして「アナザーテイルズ」にならなければその瞬間にミワは、勝利へと残されていた、たった一つの光明に気づくことなく、それを投げ捨てていただろう。

いってしまえば、それは博打でしかない。

当たるも八卦当たらぬも八卦という次元ではなく、純粋に、負ける確率の方が圧倒的に高い賭けだ。

それでも——やらないよりは、何も足掻かずに仮想の死を受け入れるよりは何百倍も、何千倍もマシな話に違いはない。

ミワは反射神経へと任せるままに素早くコンソールを操作すると、対艦ライフルに装填している弾の種類を徹甲榴弾へと切り替えると、砲をサーヤではなく足元のミラーに向けて躊躇いなく撃ち放った。

『何を……まさか、自爆……? いや、違う!』

「…………然り然り、当たりだよお……………」

確かに、着弾した瞬間に目標へと陥入し爆発する徹甲榴弾を足元に放つというのは、広義の自爆であることに間違いはない。

だが、ここでVPS装甲に守られているとはいえ自らの手で自らの装甲値をゼロまで追い込むなど、最早侮辱を通り越して尊厳に対する蹂躪であり殺戮だといってもいいだろう。

しかし、ミワの目的は、当たり前だがそんなところにはなかった。果たしてその答えは徹甲榴弾の爆発によって巻き上げられるソーラ・システムIIを構成する破片にこそある。

『な……ッ……!?』

巻き上げられた無数のソーラ・システムIIの破片は、サーヤが放ったフルバーストがフリーダムルージュティラユールへと着弾するほんの一瞬だけ前に、機体を覆いつくすガラスの霧か、そうでなければ宙を漂うひとひらの塵たちの集まりとなって、フルバーストの一部を反射することに成功していた。

とはいえ、その全てを反射できたわけではない以上、フリーダムルージュティラユールの損傷も著しく、首の皮一枚繋がったとでもいふべき、這々の体といった具合である。

対艦ライフルの銃身は僅かに歪み、メインカメラも半分以上が消失、そして左脚部に至っては脱落、バックパックのウイングバインダーについても同様だった。

「でもでも……それだけ大盤振る舞いしたんだから、エネルギーなんて残っちゃいないよねえ……!」

オールレンジ攻撃は、確かにスナイパーにとつての天敵にも等しい。

だが、GBNにおいてもガンダムの劇中においても、持っているだけで相手の全てを全滅しうるようなチートアイテムなど存在しないように、サーヤが操るドレッドノートオメガにも弱点は存在する。

それはひとえに、エネルギー残量の問題だった。

サーヤがそれを知らずにバカスカとドラグーンを撃ち放っていたわけではない。

あくまでもサーヤが目論んでいるのは早期の決着と味方との合流

だ。

だからこそ、私怨もあるとはいえ、序盤から潤沢に、ミワという脅威を、放置すれば災禍を呼び込むスナイパーというポジションに陣取った敵を排除するために全力を尽くしていたのだが、結果からいつてしまえばそれは焦りすぎていたといったところだろう。

勿論、ミワが奇策に打って出て、それを成功させたことが紙一重の延命に繋がったのだから、いつてしまえばそれは結果論でしかない。

だが、失敗は失敗であり、敵の失敗は、こちらが攻勢に出る好機になるということだ。

ミワはここぞとばかりに、失ったセンサー類を補うように、必殺技の起動を選択する。

——SEEDセンス・レイライン。

武装欄に設けられた「Finish Move 01」のスロットに装填されたミワの必殺技は、ある意味では不要の長物であった。

と、いうのも、この必殺技の効果はシンプルなもので、敵機の未来における機動を演算してその可能性を数秒間のみ、「線」としてパイロットに提示するという、ある意味では原作と全く別物になったゼロシステムに酷似したものであり、普通であれば有用なそれであることに違いはない。

だが、ミワは天凾の狙撃手だった。

そこにシステムのアシストなど必要とせず、超長距離射撃や偏差射撃、果てはピンホールショットという曲芸じみた芸当を行えるからこそこの必殺技も長い間塩漬けになっていたのだが、戦いというのは思わぬところで思わぬものが役立つものだ。

トリスリッターをミキシングしたことにより展開が可能となった左肩のサブアームと右腕で微妙に曲がった銃身を構えて、ミワはサーヤが逃亡の一手を選ぶであろうその先をシステムを利用して予測し、そして砲身が歪んだことによるブレと反動、全てを計算に入れた上で、引き金を引く。

「これがミワの……全力だよお、サーヤ！」

弾種を徹甲弾へと切り替えて、ミワが叫びを上げるなり、奇怪な電

子音と共にフリーダムルージュティラユールのダクトが赤熱化し、そしてその双眸は翡翠から紅玉へと装いを改める。

時限強化システムとして機体に組み込まれた、トリスリッター由来の「H A D E S」、その力をも上乘せした必滅の弾丸は、果たしてミワへと提示された未来線の中から一つの光軸をなぞって、サーヤのドレッドノートオメガ、そのコックピットを捉えていた。

——貫け。何より早く、奴より早く！

内心で叫んだのはミワであったのか、それともフリーダムルージュティラユールであったのか、その声を聞ける者がここにいない以上、それはわからない。

だが、放たれた弾丸は確実に、残されていたCファンネルを貫き、碎き、果敢なる挑戦者の、ドレッドノートオメガのコックピットを狙い通りに撃ち抜いていた。

『……ッ、こんなところで……こんなところで負けるの、私は!? 私が止まったら、「エーデルローゼ」は……!』

『しっかりと下さい、サーヤ!』

コックピットに鳴り響くレッドアラートが途絶えて、シグナルロスによってブラックアウトした中で慟哭したサーヤを諫めるかのように、カエデと鏝迫り合いを続けていたリーシャが、通信ウインドウ越しにそう叫ぶ。

『……私たちを、私を信じてください。いつだって、サーヤはそうしてきたでしょう?』

『あ、ああ……っ……』

『それに、今ので緋きスナイパーは……ミワは行動不能になったはずです! 貴女の戦果は無駄ではない! だから、私も!』

涙に暮れるサーヤを宥めながら、リーシャは変幻自在の軌道を描くカエデのウイングゼロヌーベルを視界の中心に、照星の真ん中に捉えて、ストライクハイペリオンにも引き継がれたアルミューレ・リユミエールを展開する。

確かにリーシャが言う通り、フラッグ機が撃墜されるまでこの戦いは終わらない。

そしてリリカとユキの交戦状況はあまり思わしくないものである以上、止まらないのは何もリーシャだけではないのだ。

カエデは迷うことなくゼロシステムを発動して、敵機からの誘導を切りながら、今度は避けるのではなくぶつかり合い、損傷することを覚悟で呐喊をかける。

「そうですわね、リーシャさん！ わたくしも……わたくしが抱く愛のために、リリカさんのために、こんなところでは止まれないのですわ！」

『だったら……！』

「ええ、仰る通り！ あとは剣で語るのみ、このわたくしの必殺技を……！」

『私の必殺技を……！』

——ぶつけ合うのみ！

カエデはゼロシステムとの併せ技で起動させた必殺技である「シユーツィング・ミーティア」を、そしてリーシャはハイペリオンが備えている必殺技であるリュミエール・ランサーを展開して、雄叫びとともに突撃していく。

もしもこの戦いに勝機があるのなら、それは頭数を残しておくことだ。

ユグがナユタに釘付けにされている以上、一人でも多くユキを倒せるだけの戦力が残っていないければ、勝つのは絶望的なのは、火を見るよりも明らかである。

それにもしもナユタがフラッグ機を務めているなら尚更のことだった。

だが、今この瞬間、カエデとそしてリーシャの脳裏に閃くものは、そんな戦いの大局ではなく、まさしくこの時に、相対する好敵手を討ち果たすことのみだった。

リュミエール・ランサーは本来、機体の防御に回すためのアルミューレ・リュミエールを攻撃に転用した、ビームとは微妙に異なる性質を持った武装である。

だが、対ビームコーティングに対して弱点を持っているのは同じで

あり、リーシャはそれを、必殺技により密度を強化することで補っていた。

そして、カエデのシューティング・ミーティアは真正面から相手に高機動力を利用した一撃を叩き込む、極めてシンプルな必殺技である。

ならばこの二つがぶつかり合った時、勝者となるのはどちらであるのか——薄々その答えを、リーシャは勘付いていたのかもしれない。

光の槍に灼かれながらも、波をかき分けるように突き進んでくるウイングゼロヌーベルの姿が、今眼前にある。

ならば、その軍配はカエデの方が上がったということだ。

対ビームコーティングが施されたシザーソードが展開し、光の槍を跳ね除けながら、ストライクハイペリオンのコックピットを挟み込む。

「これがわたくしの……愛の力ですわあああつ！」

『愛……そうですね、それは力になる……そして、私たちは——』

——囚われすぎていた。

愛を抱きながらも嫉妬に狂うことなく、自らを御していたカエデだからこそ成し遂げられたのである。この結果に、リーシャはどこか満足したように、しかし、微かな悔しさを滲ませてそう呟いた。

しかし爆煙のヴェールが晴れて、漆黒の宇宙に露わとなったウイングゼロヌーベルの姿も無惨なもので、その損傷は必殺技同士のぶつかり合いによって中破を通り越し、大破に片足を突っ込んでいる。

だが、生きている限り戦いは続く。

カエデはきつと、死闘の余韻が現れていた表情を引き締めると、苦戦しているリリカを支援すべく、そしてミワもまた、もう一つ用意していた秘策に打って出るべく、それぞれに行動を起こすのだった。

## 第六十七話 「勝利の星よ、燦然と」

ミワとカエデがそれぞれサーヤとリーシャを抑えている間、乱戦エリアから僅かに外れた衛星軌道上では、ユユのG―イデアと、ナユタの「ブラウアストレイノワール」が、漆黒の宇宙空間に新たな星座を描き出すか、そうでなければ光でその虚無を塗り替えるかのような勢いで打ち合っていた。

「ふふ……フォトン・ファンネル、ブラスター・ファンネル射出、マニユアル操作に切り替え……！」

『……長い異名は伊達ではないな、しかし此方も退けないのなら押し通るまでだ』

ほぼ差し違える形であるとはいえ、サーヤとリーシャを二人が倒してくれたというのはユユにとっては僥倖だ。

こうなれば残された最悪の負け筋は、ナユタを自分が引きつけきれずにユキと合流されてリリカが挟撃されることで、極端な話、いつてしまえばナユタを倒せなくてもここに釘付けにしているだけで、ユユの仕事は成立しているということでもある。

しかし、共に個人ランキング二桁という立ち位置にありながらも、否、あるからこそ、それがいかに難しいかというのはユユも委細承知の上だ。

絶え間なく死角を狙って時間差攻撃を放つ二種類のファンネルによる攻撃を時には回避し、時には斬り払うナユタの腕前は、対峙するユユも思わず背筋が震えるほどに鬼気迫るものだった。

IFBRの残弾を確認しながら牽制射として相手に回避を強要した先に、肘の部分から分離したサーベルファンネル……ビギニングガンダムの対刃式ビームサーベルを置いておくことで、ユユはブラウアストレイノワールをそのキリングレンジへと誘導したが、ナユタは超人的な反射神経でもって、残された右腕でサーベルファンネルを切断すると、それを好機と見てユユへと距離を詰めてくる。

「……っ……！」

——失策だったか。



ユユは思わず眉を顰める。

確かにブラウアストレイノワールの左手は奪えたかもしれない。だが、懐に飛び込まれての近接戦となれば不利になるのはこちら側だ。

バックブーストを噴かすのも間に合わないだろう。

瞬時に判断を切り替えて、ユユはあえて右手でソードピストルによる斬撃を受け止めると、射出していたブラスター・ファンネルをナユタの背後に配置して、照射ビームを放たせた。

自分も巻き添えになることは承知の上だ。

だが、こうでもしなければ、最強の傭兵集団を率いる長であるこの男が止まるはずはない。

ユユは仮想のそれであるとはいえ、死と隣り合わせの緊張感に口元を綻ばせながら、鉄面皮を保って淡々と自身を追い詰める仇敵を睨む。

『損傷が酷いな……してやられたようだ』

「それは此方とて同じこと……ふふ、ユユもまだまだのようですね……しかし、ここを通す訳にはいかないのです……!」

レーダーと通信のログを見る限り、ミワはレッドアラート、カエデはイエローコーションをコックピット内に響かせながらもまだ生きていることは察せられる。

ナユタと比べれば不得手とするクロスレンジでの鏖迫り合いを行いなながら、自身の機体もイエローコーションを発しているのにもかかわらず、ユユはぎり、と歯を食いしばって嵐のような斬撃を受け流していく。

この持ち場だけは死んでも離れられないのなら、石にかじりついてでも、例え不得手であろうとも、やり通す他に道はないのだ。

同じく、虚空に出鱈目な軌道を描きながら高速戦闘を展開するリリカとユキを一瞥して、ユユはソードピストルの斬撃に合わせてIFBSを抜き放つ。

フルブランシユとヴァイスストライクセカンドの戦いは、互角とは決して言えないものの、善戦をしているとあって差し支えはないだろう。

う。

ユユはあの機体こそがフラッグ機だと目しているが、実力だけで考えるのなら今対峙しているナユタのブラウアストレイノワールがそれに当たる可能性も大いに考えられる。

だからこそ、タンク役を引き受け、同時にもう一つの戦線を支えるアタッカーも兼任するという過酷な任務をユユは引き受けているのだ。

罅迫り合いを解くようにフォトン・ファンネルを両機の間割り込ませて、仕切り直しを行うようにユユは全力でバックブーストを噴かし、ブラウアストレイノワールとの距離を取った。

『逃れたつもりか、だが……！』

「イブリース……！」

ノワールストライカーに搭載されたレールガンによってナユタは距離を離れたユユを追撃するが、残されていた肘部分のビームサーベルをユユは呼び寄せて、それを盾にすることによって直撃を免れる。

第二ラウンドはここからだ。

満身創痍というにはまだ遠くとも、決して軽視できない損傷をその身に負いながらも、Gの形象は翡翠の双眸に、ユユの心火を映したような強い光を灯すのだった。



逃げ回っているだけでは戦いにならないことは、リリカにもわかっている。

フォビドウンガンダム、カラミティガンダム、そしてレイダーガンダムという「悪の三兵器」の特徴をそのバックパックに統合しながらも、決して機動性を損なうことなくフルブランシュを追い詰めるユキの腕前は、以前対峙した時よりも研ぎ澄まされていた。

リリカの危機感知能力が並外れているからこそ、生存自体はできているものの、目の前に立ちはだかる強大な「三桁の英傑」という壁に

対して、今のところ決定打と呼べるものや、それに繋がる布石はないに等しい。

あのゲシュマイディツヒ・パンツァーというビームを歪曲させる特殊装甲がある限り、ドツズライフルが役に立たないと判断して投棄したのはいいが、こちらが中距離からの牽制を事実上封じられているのに、相手はそれが行える、というのは決して思わしいことではない。『しづといわね、出来るようになった、というべきかしら』

「……わ、私だって……負けれないんです……！」

『そうね。負けれない……なら、示すべきは御託じゃないわ』

リリカが操っているCファンネルの包囲を巧みに掻い潜りながら、ユキは愛機の左腕に接続されている、大容量バッテリーセルも兼ねたユニットから再び、破砕球「ハイパーミョルニル」の代用としてアタツチメント接続しているロケットアンカー、「パンツァーアイゼンII」を放つ。

無論、ユキはリリカが素直に捕まってくれることは最初から期待していない。

案の定とでもいうべきか、その攻撃を見切っていたリリカはパンツァーアイゼンIIとバッテリーセルを繋いでいるリード線をCファンネルによって切断すると、肩のユニットを分離させ、自律支援機「トライバード」として射出した。

リリカもそれは薄々と感じていたことだった。

このGBNにおいても、そしてガンダム作品においても、絶対無敵の装備——例えるなら、伝説の勇者が振るう聖剣のようなものは存在していない。

例えば映像作品「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」において、ストライクフリーダムガンダムは鬼神の如き活躍を見せていたし、リリカが知っている「機動戦士ガンダムAGE」においても、ガンダムAGE—FXは損傷らしい損傷を負うことなく最終回を迎えている。

だがそれは、パイロットの技量と性能が噛み合っているからという部分が大きい。

極端な話、GBNにしろ何にしろ、鍛え上げられたプレイヤースキルこそが最大の武器なのであり、武装それ一つだけで戦局を覆せるようなものが存在するのなら、普通のゲームであれば即座に下方修正が施されるし、そんな大それたものが、幾度もバージョンアップを重ねた今もあるならGBNは神ゲーなどと呼ばれていない。

脳裏へと、走馬灯のように幾つもプレイしてきたクソゲーの数々を浮かべて、リリカはブランシユアクセルを起動させると、バックラーからビームサーベルを発振して、正面からユキのヴァイスストライクセカンドへと果敢に切り掛かっていく。

『無駄よ、そんな見えすいた攻撃では……!』

「……いいえ、無駄なんかじゃない……です! トライバード!」

『ッ、まさか貴女……!』

ユキの手によって作り込まれたゲシュマイティツヒ・パンツァーはビームサーベルの刃さえも湾曲させて無力化するほどの完成度に至っている。

だが、リリカがトライバードに命じたそれは、機首先端に搭載されたシグマシスキャノンの全力照射だった。

そんなことをすれば、湾曲された余波でフルブランシユがダメージを負うことは目に見えている。

無論、リリカもそれは理解していないはずがない。それでも、もしもこの戦いの先に勝利を見据えるのであれば、これしか手はないのだ。

砲口を向けた二基のトライバードが吐き出した光の奔流が容赦なくヴァイスストライクセカンドと、そしてフルブランシユを呑み込んで、モニターを真っ白に染め上げていく。

だが、これでいいのだ。

「……ごめんね、フルブランシユ……でも、これで……!」

ぎしぎしと、鉄の軋みと呻きを立てるフルブランシユに、内心で詫びながらも、リリカは毅然としてその先に勝利を見据えていた。

ただでさえ腕前で劣っている「三桁の英傑」を相手に自爆紛いの戦術を取ること自体、自らの意思でその背中を地獄へと蹴り込んで

ようなものだ。

だが、フルブランシユの作り込みだけであれば、そこに懸けた想いだけであれば、きつとユキのヴァイスストライクセカンドに勝るとも劣らない完成度に至っていると、リリカはそう信じている。

そう。いかなる盾を貫く矛も、いかなる矛をも通さない盾も、この世には存在しない。

それを示すかのように、爆炎が晴れた後にあつたものは、追加の大容量バッテリーセルと、そしてゲシユマイディツヒ・パンツアーの一枚を失い、中破状態まで追い込まれたヴァイスストライクセカンドの姿だった。

一見自爆にも、無謀に見えるシグマシスキャノンの照射は、リリカの狙い通りにヴァイスストライクセカンドのエネルギーを大幅に削り取ることに成功していたのだ。

だが、その代償は決して軽んじられるものではない。

反動をもろに受けることになったフルブランシユの装甲は各部が溶解し、コックピットには絶え間なくレッドアラートが鳴り響いている。

——それでも。

リリカは眦に涙を滲ませながらも、その先に、砂漠に紛れた一粒の宝石を探すように、そうでなければ数百光年の彼方で輝くスペクトルをその手に掴み取るように、視線は確実に勝利へとその焦点を結んでいた。

『……失態ね、そう、失態……だからこそ、貴女はここで葬る！ それ  
が私に課せられた使命であり責任だから……！』

『……っ、まだお願い、あと少しだけ……フルブランシユ！』

ユキは一瞬その結果に呆然としながらもすぐに正気を取り戻し、無事だった右手に保持していた対艦刀で急襲するCファンネルを切り裂くと、躊躇いなく武装スロットを「Finish Move 01」——必殺技のそれに切り替える。

『……SEEDセンス・マニユーバ！』

「ブランシユアクセル……マキシブースト！」

奇しくも、白と黒という対照的なカラーリングが施された二機の必殺技は、よく似通った性質を備えていた。

SEEDセンス。原作においては火事場の馬鹿力のようなものと形容されていたそれを、時限強化という形でシステムに押し込めたそれは、使い手の戦い方によって千変万化といった風情でその装いを変えるものだ。

ミワのレイラインが、狙撃に特化したスタイルであるならば、ユキのそれは機動戦に特化した、ある種ブランシユアクセルからモーシヨンの高速化を省いて、その分を速度に割り振ったとでもいうべきものだった。

事実、SEEDセンスを解放したユキは、アクセルをマキシブーストまで解放したフルブランシユに食い下がるだけではなく、追い詰めて破壊するために徹底した弾幕砲火を放っている。

頭部バルカンと胸部の機関砲から放たれる鉛弾は、たかがバルカンであったとしても、高速戦闘であれば十分な脅威となりうるものだ。

高速状態においては、受けるダメージもまた速度に比例したものである。

フルブランシユの装甲が穿たれていく音を聞きながら、リリカは心臓を冷たい手で握りしめられたような緊張感と、そこに込められたユキの「本気」から来る闘志であり殺意に恐れ慄く。

これが、英傑の本気。

藪を突いて蛇を出すとはいったものだが、追い詰められたユキの攻撃は蛇などという生温いものではない。

あれは獅子だ。手負いの傷を負いながらも我が子を守らんとする母獅子のそれと同じ苛烈な闘志が、ユキの眼光には宿っている。

対艦刀による一撃で、トリスラツシユブレイドをリミテッドコールしようとした右腕を斬り飛ばされながら、リリカはぎり、と奥歯を噛み締めた。

ブランシユアクセルはマキシブーストまで、理論上できる最大値まで解放しているというのに、ユキはそれに食い下がってきている。

言い換えるのならそれは、ブランシユアクセルを切り札としてい

たりリカにとって、勝利が絶望視されたのと同義だった。

残された左腕を庇うように、回収したトライバードからTRYファネルを切り離してリリカは射出するが、ファネルの速度では覚醒したヴァイスストライクセカンドを捉えきれずに、その斬撃は虚しく空を切る。

『言っただけでしよう、負けられないと……！ 私はあの子に「エーデルローゼ」を託された……チャンピオンを倒せと依頼された、そのミッションを完遂するまでは倒れられない！』

「……わ、私だって……私だって、『アナザーテイルズ』の……リーダーですっ……！ だ、だから……だから！ 貴女が相手でも、どんなに勝つのが絶望的でも！」

——最後の瞬間まで、決して諦めたりなんかしない！

リリカは涙をこぼしながらも咆哮し、遠ざかっていく勝利の星を追いかけるように機体を走らせる。

神様に祈るようなことなんてしない。

星に願いをかけるようなことなんてしない。

それは自分が成し遂げなければいけないことだ。

あれは自分が掴み取らなければいけないものだ。

星の金剛をその手に取るまでは、そしてAGE—1ブランシユが自分にくれた勇気と、「アナザーテイルズ」の皆が自分にくれた温もりに報いるためには、今までと同じように諦めて、棄てて、泣いていたのでは意味がない！

リリカは一瞬目を瞑るが、次の瞬間にはそれを見開いて、生存している味方の方向へと機体を走らせる。

カエデもミワも満身創痍だ。

正直にいつてしまえば、個々の戦力としては期待できないだろう。

だが——アナザーテイルズは、一つのチームだ。

「リリカさん！ わたくしの力、存分にお使いくださいな！」

満身創痍のウイングゼロヌーベルが、カエデが、ユキの機体を狙ったと見せかけて、左手に保持していたシザーソードを投擲する。

邪魔だとばかりに、次の瞬間にカエデは荒れ狂う漆黒の凶星にその

コックピットを斬り裂かれ、テクスチャの塵へと還っていくが、その目的はしかと果たされていた。

彼方の戦場を一瞥すれば、頭部を損傷し、脚部も損壊しながらも「蛇の尾」を束ねる傭兵たちの主を食い止めているユユの姿がある。

そして、今——この場を見渡せば。

「……頼んだよお、リリカちゃん！」

「お姉ちゃん！」

『邪魔だツ!!』

ユキのコックピットを狙って、大破状態のフリーダムルージュティラユールが、ミワが、弾倉に残されていた最後の一発を放つが、怒りに荒れ狂うユキが残っていた、片方のゲシユマイディツヒ・パンツァーから放たれる大出力ビーム……「フツケヴァイン」によって消し飛ばされていく。

それは時間にして僅か一瞬だったのかもしれない。

だが、一瞬——例えそれが刹那にも満たない1fの世界であったとしても、それだけの隙があれば、戦況は如何様にも覆るということは、あのハードコアディメンション・ヴァルガの地獄が、そして混沌を大鍋で煮詰めたような「大戦争」が、自分たちをここまで導いてくれた、その「隙」の重要性を教えてくれた「MS斬りの悪魔」が、何よりも雄弁に物語っている。

——ありがとう、ブランシュ。

今は自宅の棚で静かに眠っている始まりの機体に感謝を捧げて、リリカは更なる博打に、己の敗北を天秤の対価に捧げて打って出る。「ブランシュアクセル・マキシブースト……オーバーナイトロー！」リリカが叫んだその瞬間、フルブランシュは一つの彗星となっていた。

宇宙の漆黒を塗り潰すように真白く、純白の輝きをFXバーストモードのように全身から放つフルブランシュの速度と機体から放出される余剰出力は、最早その放熱機構をもってしても受け止めきれない領域に達していた。

その反動で機体がバラバラに砕けても、すり減って、削られても、リ



リカは、そしてフルブランシユは、その刹那の隙を決して見逃すことなく、戦場を駆ける流星となつて、ユキのヴァイスストライクセカンドへと突撃をかけていく。

カエデがくれた実体剣が。ユユが盾となつてくれていたことが。そして、ミワがくれた時間が。

それら全てがあつたからこそ、リリカは——フルブランシユは、この瞬間に残されたゲシユマイティヒ・パンツァーごとヴァイスストライクセカンドのコックピットを、確かに貫いていたのだ。

『……ふ、ふふ……』

「……はあ、っ……は、あっ……」

『戦いの中で戦いを忘れた……やっぱり、感情に任せるものではないわね……』

ユキは微かに口元を綻ばせながら、己を悔いるように、しかし勝負自体に後悔はないとばかりに、全てを受け入れるかのように爆散し、テクスチャの塵へと還つていく。

両手が震え、リリカは思わずコックピットにへたり込む。

【Battle Ended!】

【Winner:アナザーテイルズ】

そして、無機質な機械音声が、フラッグ機であつたユキのヴァイスストライクセカンドを倒したことにより、「アナザーテイルズ」が勝利したことを淡々と告げる。

それはいつてしまえば、いくつもの偶然が重なつた末のことだったのかもしれない。

合縁奇縁、袖擦り合うも他生の縁とばかりに、今までリリカたちが紡いできた軌跡が織りなした、砂漠の砂粒に紛れたダイヤモンドを探し当てるが如き奇跡。

だが、それは——燦然と光り輝く勝利の星は、奇跡であつても、偶然であつても、今この瞬間、リリカの両手に必然として、確かに瞬いているのだつた。

## 第六十八話 「リビルドガールズ」

「私から何も言うことはないわ。グッドゲーム、『アナザーテイルズ』、また刃を交える機会があれば……次は負けない」

「……こちらこそ、グッドゲーム、でした。私も……私たちも、おんなじです」

「……それもそうね、それじゃあ、健闘を祈っているわ」

フォース「エーデルローゼ」との戦いを勝利で飾り、帰還したロビーでリリカとユキは握手と言葉を交わしていた。

思い返してみれば、紙一重の勝利だったと、リリカは深く息を吐く。薄氷を踏むように、蜘蛛の糸を手繰り寄せるかのように、いくつもの偶然と必然を積み重ねた末に手にした勝利は、リリカたちをその栄光で照らしていたが、強く光が生まれ出でれば、そこに刻まれる影もまた深く、色を濃くするものだ。

ロビーの片隅で泣きじやくっているサーヤを宥めるリーシャと、そしてユキを一瞥すると、リリカは喉元まで出かかった言葉をぐつと呑み込んで、何も言わずに踵を返す。

「……リリカちゃん、強くなったねえ」

「……そうかな、よくわかんない……でも」

「でもっ」

そんなミワもまた、勝敗という形で現れたフォースバトルトーナメントがもたらす痛みを胸の内側に隠しながらも、どこか誘うようにリリカへと問いを投げかける。

リリカとしては、自分が強くなったという実感は正直なところあまり湧いていない。

一回戦も二回戦も、作戦勝ちと綱渡りのような戦いを制しただけで、あのチャンプのように誰も彼もを圧倒する、一騎当千の戦いを見せたわけではない、というのはさすがに欲張りすぎだとしても、根本的な部分で何か自分の中で決定的な変化があったとは思えないのだ。

「でも……もしそう見えてるなら、それは、その……お姉ちゃんやカエデさん、ユユさんのおかげだ、って……そう思う……」

ただ、他者の視線から見た自分と、自らの視点で俯瞰した自分の像に齟齬が生まれるのは必然で、もしもミワたちから見て自分が強くなつたように感じられるのなら、それは他でもないミワたちのおかげなのだ、リリカは素直にそう感じていた。

思えば、GBNを始めた時から、あまりいい滑り出しとはいえないような不運に見舞われたり、自分より遥か格上の相手と戦ってきたりで、そんな日々が金床となり、鎚となり、確かにリリカを鍛えてきたのかもしれないが、そんな日々を過ごしてこれたのは、このゲームを続けられたのは皆がいてくれたからだ。

「まあ、わたくしがリリカさんの一助になれていたのならこれ以上光栄なことなどありませんわ！」

「むむ……でもでも、ミワもそれは同じかなあ」

ぱん、と柏手を打って全身で喜びを表現するカエデと、どこかそれを冷ややかに見詰めながらも妹の言葉に同意を示すミワを、そしてそんな二人の様子に苦笑を浮かべているリリカを一望すると、ユユはくすくすと妖艶に、しかし少しのあどけなさを残してその口許に笑みを浮かべる。

「ふふ……仲良きことは美しきこと、ですね」

「……え、えつと……ユユさんも、その……」

「ふふ、ありがとうございます……わかっていきます、リリカさん。ユユも……ユユも貴女の『お友達』だと言ってくれるなら、それに勝る喜びはありませんから……ふふっ」

きつと、繋がりをどこかで求めていた。

それは、ユユの偽らざる本心であり、リリカを、その人柄を信頼しているからこそ打ち明けられた言葉でもある

兄のように孤高なプレイスタイルを貫いて頂点の近くまで駆け上がることへの憧れを捨てたわけではない。

ただきつと、どこかでこんな風に放課後の一時にも似た、木漏れ日が差し込む窓辺で過ごす時間のような穏やかさを求めていたことも確かであり、だからこそユユは気紛れに傭兵を試したり、デイメンシオンを散歩してみたりしていたのだが、結局それはどこまで行つて

も「一人」だった。

だからこそ、四人でいる今が愛おしい。

軽口を叩き合って、反駁しながらもリリカが大好きだという点では互いに譲ることのないミワとカエデが、そしてその間に挟まれておろおろと困惑しているリリカが。

その輪の中に自分がいる、という事実が、ユユにとつては数多葬つてきた敵の数より、築き上げてきた伝説や異名よりも価値のあるものなのだ。

「ふふ……ユユもこのままではリリカさんのことを、もつと、もつと好きになつてしまいそうですね……?」

「なんですの!?! ここに来て煌めく舞台に飛び入り参戦ですの!?!」

「むむむむ……リリカちゃんのおねーちゃんとして深刻なりりカちゃん成分の欠如が恒常的になつちやうよお……」

「ふふふ……冗談です。でも、お友達として仲良くなりたいのは本心ですよ……? ふふ……」

しなだれかかるようにリリカの右腕に抱きつきながら、ユユは火に油を注ぐように、いがみ合っていたカエデとミワに向けてちよつとした冗談を飛ばしてみせる。

勿論、本気でリリカを奪い合う親愛なんだか友愛なんだか、それとも一つ線を描いた恋愛なのかはわからないが、そんな番外戦をやるつもりはユユにはないし、カエデとミワもそれをどこかでわかっているからこそ、困ったように笑っているのだ。

そんな、他愛もない——あまりにも、大人たちから見れば取るに足らないような時間が何よりも愛おしくて。

リリカはじわり、と眦な涙を滲ませる。

どうやらまだ、泣き虫が治ってくれるまでは時間がかかりそうだ。

その声が聞こえたのは、そんなことを茫洋と考えながら、ごしごしと袖口で、リリカが涙の雫を拭っていた時のことだった。

「えっと……貴女たちが『アナザーテイルズ』でいいんだよね?」

取り立てて特徴があるわけでもなく、年相応のハイトーンボイスといった風情の声がりりカたちの耳朶をふるわせて、音の鳴る方へと振

り返れば、そこには、フリルが多くあしらわれた、アイドル風の衣装に身を包み、ふわふわとウェーブがかかった長いピンク髪で頭頂部にお団子を二つ結えたといった風情の髪型をした少女と——その少女の左腕に縋り付く、銀髪に鳶色の瞳をした少女が直立している姿がある。

その声を、リリカはどこかで聞いた気がした。

その姿を、リリカはどこかで見たような気がした。

そして、その答えがリリカの喉元まで出かかった直前、かつてない動揺を示しながら目を白黒させて、カエデが一足先にそれを叫ぶ。

「ま、まさか……『リビルドガールズ』のアイカ様ですよ!？」

「さ、様? うーん……なんていうかそこまで大層な人間じゃないんだけど……」

「とんでもない! わたくし、カエデ・リーリエと申しますわ。貴女に……貴女たちに憧れてこのGBNを始めた一人ですよ、だから、わたくしにとってアイカ様、貴女は憧れの人なのですわ!」

「あ、あはは……なんていうか、そりやどうも……」

やたらとハイテンションに、興奮した様子でアイカの両手をとって目を輝かせるカエデの姿に、リリカは少しだけ胸にささくれが立つような痛みを感じながらも、その感情そのものには理解を示していた。

「……アイカさん、随分有名になったんですね……」

「うーん……まあ、やらかしたことはいっぱいあるからね……」

そして、カエデにアイカの両手をとられたことで、リリカと同じようにむくれていた銀髪の少女——エリイが、どこか皮肉まじりに頬を膨らませながらアイカへと囁くように語りかける。

やらかしたことはいっぱいある、というのはアイカとしては不本意な部分が大半で、ファンアートの差分の八割が大体包丁やら長短を問わずドスを持って返り血に塗れている辺りは特にそうなのだが、それでも、自らの意思である「ELダイバー争奪戦」を起こしたのは確かなことで、それは認めざるを得なかった。

「……え、えつと……アイカさん、ですよね……?」

「うん。アイカ。あたしはアイカ。こっちは……恋人のエリイちゃ

ん」

「……………、……いびと……!?!」

「まあ、ふふ……」

いい加減匂わせることにも限界があったので、一年ぐらい前にガンスタグラムの中でアイカはエリイと付き合っていることをカミングアウトをしていたのだが、ガンプラバトル一辺倒のリリカはそれを知らなかったため、ぼふ、と湯気が爆ぜるような音を立てて顔を真っ赤にしてしまう。

ユユはなんとなく、二人の手の絡め方や指の這わせ方でそれを察していたものの、真っ赤になってフリーズするリリカが面白かったため、いつも通り妖艶に微笑むだけで、それ以上何も言うことはなかった。

「お、誰かと思えば次の対戦相手はあん時のねーちゃんか」

「チイ、知っているのですか?」

「んー、まあ知ってるといえば知ってるかな」

アイカとエリイに送れる形でつかつかと踵を鳴らし、ロビーの中心へと歩んできた人影は、さながらデコボココンビといった風情で、大人と子供くらいの身長差があったのだが、リリカはその内一人——小さい方こと、チイの存在はしつかりと、はつきりと覚えている。

あの時自分に「前衛のお仕事」を教えてくれた恩人にして、普段は何重にも猫を被りながらガンダムベースシーサイド店で「会いに行けるELダイバー」として接客に勤しんでいる銭ゲバ。

そうになると、その隣に佇むすらりと長い脚をした金髪の女性が、消去法で「リビルドガールズ」のタンク役を務めている「アキノ」ということになるのだろう。

本来であればリリカもカエデのようにアイカにサインをねだってみたり、他愛もない言葉を交わしてみたりしたいところだが、わざわざ数あるフォースの中から自分たちをあの「リビルドガールズ」が探し当ててきた理由は、チイが呟いた通りなのだろう。

次の対戦相手。

その言葉に、底冷えがするような不安を感じて、リリカは思わず背

筋を震わせる。

確かに「エーデルローゼ」は強敵だった。

彼女たちと戦うときにも、不安の全てを擲って戦っていたかと問われればそれは勿論否であるし、緊張で冷や汗を流していたことだって覚えている。

ただ、色んな意味で有名なフォースであり、そしてリリカ自身にとっても一つの出発点となったフォースであるあの「リビルドガールズ」が次の試合の相手である、という事実は、それとはまた違った、胃が締め付けられるような緊張感をもたらすのだ。

「え、えつと……その……次の対戦相手、つて……」

「うん、あたしたち『リビルドガールズ』と貴女たち『アナザーテイルズ』が戦うから挨拶だけでもしようと思っただけ……なんていうかごめんね、騒がしくて」

「い、いえ……！　そ、その……私も、アイカさんに憧れて……『リビルドガールズ』に憧れて、このGBNを始めたので……」

「あはは、そっか……何か嬉しいな、そう言ってもらえるの。じゃあ、次の試合で会おうね、えつと……」

「……り、リリカ、です……っー」

「うん、リリカちゃん。すっかり覚えたからね」

要約すると顔と名前は覚えたから確実に仕留めてやる、という一種の宣戦布告のようにも聞こえかねないが、アイカにそういう意図はないのだろうか。

嫉妬でむくれていたエリイの機嫌を取るように他愛もない言葉を交わしながら、カフェブースのある方向へと去っていくその背中と、相変わらず二人の仲良しカップルぶりを冷やかすチイとそれを咎めるアキノという、「リビルドガールズ」を象徴するような光景をリリカはただ、静かに見送ることしかできなかつた。

「うむうむ……あれが噂の『リビルドガールズ』かあ、なんだか色んな意味で濃い人たちだったねえ」

「何を言ってますの、あの胃もたれしそうなくらいお互いにお熱な無垢な愛情こそ尊ぶべきものなのですわ！　アイエリは世界の真理で

すのよ！」

「ふふ……恋ならぬ、濃いという意味なら、ユユたちも大概ですけどね……？」

相変わらず、同じ方向を向いているのか明後日の方向を向いているのかわからないフォースメンバーの様子にどこかリリカは胃痛を訴えていた腹部が少し癒されていくのを感じながらも、それはそれとして押し寄せてくる緊張に、手汗を滲ませる。

本人たちにはその自覚はないのだろうが、今や「リビルドガールズ」は実力派フォースとして数えられる強豪だ。

そういう意味では自分のエンカウント運は悪い方に働いたのかもしれない。

情報の洪水に頭を抱えそうになりながら、勝利と敗北、その狭間でちりちりとリリカの心は静かに焦げ付いていく。

「リリカさん」

「……あ、えつと、はい、カエデさん……」

「何もそんなに緊張することはありませんのよ？」

「……で、でも……カエデさんも……相手は、あの……」

そんな落ち着かない様子を察してか、歩み寄ってきてくれたカエデからふい、と視線を晒してしまうことに罪悪感を感じながらも、リリカはどうしてもその全てを見透かしたような蒼い瞳を覗き込むことができなかった。

負けたくない、という気持ちは、どうやら自分の中にも深く根を張っていたらしい。

敗者として去っていくトルマリンたちを、そしてサーヤたちを思い返しながリリカは、再び押し寄せてきたここで終わってしまう、凍りつく恐怖に足が竦んで、歩みを止めてしまう。

だが、カエデは吹き抜ける春風のように、そうでなければ安らぎの里に零れ落ちる陽だまりのようにリリカ手を取ると、優しく微笑んで、その唇から言葉を紡ぐ。

「大丈夫ですわ、リリカさん。相手が誰であつても何でもあつても……わたくしたちは、わたくしたちでしよう？」



「あ……………」

「何も終わりませんわ。むしろ勝とうが負けようが、これから続いていくのですわ」

勝負が見せる明暗に、そして敗北が見せる闇に引き摺り込まれそうになつていた足首からその手を振り払うように、カエデは満面に笑みを浮かべてふんす、と気合を入れるようにそう語ってみせた。

「ふふ…………カエデさんの言う通り、ユユはまだ、加入して日が浅い身…………皆様のことをもっと知りたいですし、もっとお話したい…………それは別に、フォースバトルーナメントの勝敗に関わらないこと、でしよう?」

「然り然り。リリカちゃん、リーダーとして強くなってくれたのは嬉しいけど…………あんまり気を張つてばかりだと、パンクしちゃうよお」  
参加しているのがトーナメントである以上、勝敗を気にするなどいうのは土台無理な話でもある。

それでも、そこだけに囚われて、呑まれてしまったのでは——自分が何のためにこのゲームを始めたのか、他の誰かの理由ではなく、リリカ自身の理由を見失ってしまったのでは、本末転倒もいいところだ。

折れそうになつた背骨を支えてくれる温かな言葉の掌に、その温もりにリリカはじわり、と涙を滲ませて、ぺこり、と小さく頭を下げる。  
「…………え、えつと…………ぐすつ、その…………ありがとう、……………」  
「わたくしとリリカさんの仲ですわ。これぐらいどうってことありませんことよ!」

「然り然り、ミワとリリカちゃんの姉妹仲ならこれぐらい当たり前だよお」

「ふふ…………お二人とも、仲がよろしいのですね…………ですが、ユユも同じですよ…………? うふふ…………」

相も変わらず、真剣な場面だといふのにどこか締まらないやり取りを繰り返している「アナザーテイルズ」の面々に、リリカはつられて笑みを浮かべながらも、心の底から「良かった」と、そう安堵の念を抱く。

もしもここにいるのがミワじゃなかったら、カエデじゃなかったら、ユユじゃなかったら、きつと自分はどこかで潰れていたのだろうか。

そして、その糸を手繰り寄せたのは、他でもなく、まだ震えている小さな自分の掌がそうさせたのだ。

だからこそ、リリカは気紛れで意地悪な、天の上でサイコロを降る女神様へと感謝を捧げるのだ。

自分たちを引き合わせてくれたことを。そして、きつと——「リビルドガールズ」とあの日出会ったことと、これから、刃を交えることを。

それら全てに感謝を込めて、リリカは「ありがとう」と唇から言葉を紡いで、蕾が綻ぶような笑みを、満面に浮かべるのだった。

## 第六十九話 「旅路は遙か遠くとも」

フォース「リビルドガールズ」を傾向で区分するのであれば、彼女たちは速攻型、手札を早々に叩きつけることで勝利を手にするタイプだと目されているが、その認識は半分正解で、半分間違っているといえる。

何よりも厄介なのは、彼女たちが擁するELダイバー、チイが情報の収集に長けている、ということであり、事と次第によっては試合前に試合が決まっている、といったゲーム展開がなされることは珍しくない。

情報を制する者は試合を制する、偵察とは最も能動的な攻撃手段である、というのはフォースランキング第2位を飾る「第七機甲師団」のやたらともふもふしたオコジョ、ロンメルが口にしたとされている言葉だが、その真偽はともかくとしても示されている内容は確かなことだ。

それを示すかのように、フォースバトルーナメント、Aブロック第三試合の初戦を飾る「アナザーテイルズ」対「リビルドガールズ」の戦いにおいて一番槍を飾ったのは、「リビルドガールズ」だった。

戦場選ばれた、ヘリウム3貯蔵タンク宙域に描かれた星座を閉じ込めるように、青白い閃光がモニターを駆け抜けていく。

ちょうど、第二試合と同じようにユユが囷と盾を務めるために先行したところに「リビルドガールズ」がぶつけてきたのは同じくチームのタンク役を務めるアキノであったが、彼女の機体——シナンジュをガンダムフェイスに改修し、V字アンテナを取り付けた「ミネルヴァガンダム」が本来携えているはずのIフィールドソードはその手になり。

「ふふ……このユユと一騎討ちをお望みですか……?」

『ええ、その通りです。悪いですが……しばし付き合ってくださいませす!』

「……サイコ・フィールドとは、してやられましたね……分の悪い賭けは嫌いではありませんが……!」

ならばその女神を象徴する大剣はどこに行ったのか。

ビーム・トンファアを展開して猛襲をかけるアキノに、IFBRでの牽制射撃を放ちながら、ユユはモニターの右側を一瞥する。

そこには宇宙の水面を泳ぐ回遊魚のように、ちようどユユとアキノを包み込むように二振りのIFフィールドソードが、ドラグーンシステムの挙動を応用することでサイコ・フィールドを築き上げる——奇しくも彼女たちがああ「ELダイバー争奪戦」で見せたサイコ・キャプチャーと似た機能を搭載したことで、二人は一時的に戦場から隔離されたのだ。

それが意味することは何か。

早々に必殺技である「モード・ブリューナク」を展開して襲いかかってくるアキノの太刀筋を受け止めるユユのこめかみに汗が滲む。

それは極めてシンプルであり、相手からの追撃戦に弱いスナイパーと、そしてフラッグ機を守るための盾である自身が不在となったのに等しいということだ。

ユユとアキノを包み込むサイコ・キャプチャーを一瞥すると、被弾も恐れずに宇宙を駆けるチイの「ガンダムグラスランナー」は、ミワが放った徹甲弾によってコックピットを貫かれるものの、虚空から現れたのは撃墜判定の降りた残骸ではなく、チイの容姿をメカに押し込めたような機体——「モビルドールチハヤ」の存在であった。

『悪いな、赤砂のねーちゃん！ スナイパーは親の仇みてーに追い詰めて潰せって言われてんだ！ エリイ！ 今ので見えたな?!』

『は、はい……！ トランザム、そしてお願い、フィン・ファンネル！』  
「……っ、サイコ・キャプチャーといい、してやられたねえ……！」

そして、エリイの操る再構築の白兔、キハールIIとハイズルIIのミキシングで生み出された「リビルドウォート」は、ミワにとって天敵といっても差し支えない相手だ。

搭載されているフィン・ファンネルの性能もさながら、それを巧みに、肩のジェットエンジンをGNドライブに置き換えることで獲得したトランザムと同時にマニュアルで制動してみせるその技量は、ミワの瞳から見ても卓越したものであった。

遊撃手から臨時的なタンクにポジションを移し替えたカエデがエリイを追いかけるものの、チイの妨害もあつてそれも上手くいかない。

そもそもアタッカーであるカエデを盾役に回さざるを得ない時点で、盤面を握っているのは自分たちではなく、対峙する「リビルドガールズ」だという証左であり、それをわかっているからこそ、カエデもミワに軽口を叩くことなく、チイの突破に全力を注いでいるのだ。

「しかし、やってくれましたわねこの銭ゲバロリ……そこをお退きなさいな！」

『へっ、銭ゲバは……褒め言葉だぜ、暴走お嬢様！』

「言ってくれるじゃありませんの！」

モビルドールチハヤが装備している武装は、自衛と相手の虚をつくために搭載された最低限のそれであり、大火力と格闘火力を両立させているウイングゼロヌーベルに対しては相性が悪い。

だからこそ、チイが選んだものは逃げの一手だった。

シザーソードを振りかぶり、切りかかってくるのに合わせてミラージュコロイドを展開し、モビルドールチハヤの輪郭は虚空へと溶け込むように揺らぎ、ブレて透明になっていく。

『まさか卑怯とは言わねーよな、カエデのねーちゃん！』

「とんでもない、むしろ姿を消すというのなら、気配で察知して潰すのみですわ！」

だが、そう宣言しながらもシザーソードをマウントラッチに戻して、ツインバスターライフルを両手に保持したカエデの行動もクレーバーだった。

ローリングバスターライフル。選ばれたものが地上ステージであればもつと有効に作用したのだろうか、ステルス機に対して範囲で薙ぎ払うという回答をぶつけるのはある種、戦場の常識でもある。

それでも——この戦場を支配しているのは、「リビルドガールズ」であり、彼女たち四人組の「目」を務めているエリイだった。

『させません……！ お願ひ、ファンネル！』

「っ、この……っ!?!」

「ごめんねえ、カエデさん……！　ちよつちミワは無理っぽいよお……！」

ローリングバスターライフルの態勢に移行したその隙を見透かしていたかのように、二基のフィン・ファンネルが光の網を描いてカエデのツインバスターライフルを、ウイングゼロヌーベルの右手をもぎ取っていく。

ミワとしても援護をしたいのは山々だったが、トランザム特有の機動力で戦場での位置取りを自在にこなし、そして残った四基のフィン・ファンネルをぶつけられている今では、どうしようもない。

スナイパーの弱点は、一度位置を割られれば追いかけられ続けることだ。

そして足が止まる武装がほとんどを占めているミワのフリーダムルージュティラユールにとっては、ファンネルの管理や武装の回し方ではサーヤと比較して一日の長があるエリイとリビルドウォートはまさしく天敵であり、ファンネルのリキャストが始まる寸前に回収した時は、トランザムの機動力でもって圧力をかけてくるのだからどうしようもない。

特に、サブマシンガンによる牽制を振り切って、クロスレンジまで飛び込まれるのが、ミワにとっては深い痛手だ。

ビームサーベルを抜き放ち、対艦ライフルのバレルを切り落とすと、エリイは反撃を封じるように、回収していたフィン・ファンネルでフリーダムルージュティラユールの右腕をもぎ取り、左脚を破壊していく。

「これはこれは……きつついねえ……」

『負けられません……アイカさんのために……！』

「ただどけど、ミワだってリリカちゃんのために負けられないんだよお！」

右肩に生きていたサブアームで、ミワは移植したトリスリッターのバックパックからハイパー・ビームサーベルを抜き放つと、エリイへと斬りかかるが、いかんせんにわか仕込みの剣術だ。

トランザムを発動していることも相まって、その剣先がエリイを捉

えることはなく、虚しく空を切るだけだった。

追い込まれている。

その焦りを感じているのはミワだけではなく、アイカと対峙しているリリカもまた同じである。

速攻をかけてきた、アイカの機体——ウラヌスアーマーをベースに、「フェアライズガンダム」の時と比較して、手足の大幅なグローアップを果たした「フェアライズガンダム」は、初手からその時限強化機構である「システム・フェアリー・テイル」を起動させ、光の尾を煌めかせながら、リリカのフルブランシュを猛追する。

脊髄が焼けつくような緊張感の中、リリカは焦りを感じながらもブランシュアクセルをフルブリストで起動して、ビルドボルグを抜き放って果敢に切り掛かってくるアイカの一撃を、左腕のバックラーから発振したビームサーベルによって受け止めようと試みた。

だが、対ビームコーティングが施された刀身は容易く、ビームサーベルの刃ごと、フルブランシュの左腕を両断する。

「……っ、強い……これが、『リビルドガールズ』……!」

『悪いけど……リリカちゃん、あたしたちも負けらんない、だから……エリイちゃんのために!』

「……皆のために!」

——ここで勝つ!

声を揃えてリリカとアイカが叫ぶと同時に、リミテッドコールによって呼び出したトリスラッシュブレイドを構え、ブランシュアクセルをマキシブリストまで解放したフルブランシュが、虚空に新たな星座を刻むかのようなマニユーバで、なんとかフェアライズガンダムを振り切ろうと試みる。

だが、速度であればアイカもまた劣っていない。

手足の拡張とコア部分の新調に伴って、フェアライズが、妖精の女王がその身に宿している出力は膨大なものとなっている。

そして、システム・フェアリー・テイルは、モーションの高速化こそそこに付随していなくとも、理論的にはブランシュアクセルとよく似通った必殺技だ。

同じ原理で繰り出される技であるならば、あとは出力と腕の純粋な比べ合いとなる。

目視するのが困難なほどに、かかるGのフィードバックが強制ログアウト寸前まで至った、その領域へと足を踏み入れている二機のマニューバは、研ぎ澄まされ、解き放たれた剣先とよく似ていた。

その手に勝利という星の金剛を手にするために、リリカは、そしてアイカは歯を食いしばって、高速下において互いの得物を振り回し、切り結ぶ。

だが、そこにある感情は何も焦燥だけではない。

『おうおう……喜んでんじゃねーか、アイカ、リリカのねーちゃん』  
『奇遇ですわね、わたくしも……否、わたくしたちは皆同じ！』

チイはビームピアサーによってカエデの剣撃を受け流しながら、戦場から伝わってきたその想いに、アイカとリリカのガンプラが発する「声」に耳を傾けて、どこかしみじみとそう呟く。

そして、カエデが答えたように、今この瞬間、この舞台で抱いている想いは、フォースメンバーの、そして人とガンプラの垣根を取り払って、合一されているといってもいい。

——楽しい。

きつと、その感情を起源として生まれてきた、観客席で見ているチイの双子の姉——ELダイバー「イリハ」がそう呟いているであろうその一言に集約される。

苛烈ながらも、そして追い込まれていながらも、リリカが抱いているのは負けに対する恐れよりも、自分たちよりも遙か高みに至っている「リビルドガールズ」への畏れであり、そして、この時間がもつと続いてほしい、という、胃の辺りがきりきりと痛む感覚とは相反する不合理な感情だった。

エリイのフィン・ファンネルが、ミワのフリーダムルージュティラユールを撃墜したのを、リリカの視界はモニターの端に捉えていた。

「お姉ちゃん！」

「……っ、ごめんねえ、リリカちゃん……！」

「……あとは……あとは、任せて、お姉ちゃん！」



言葉が走った。

申し訳ないと目を伏せたミワに対して、リリカが咄嗟に絞り出していたそれは、ほとんど無意識の内に生まれ出たものであり、舌先が反射によって紡ぎ出していたものかもしれない。

だが、それを形成しているのは、今までリリカが培ってきたフォーリーダーとしての責任感であり、そして——一人のダイバーとして、このGBNを楽しむ者としての自覚に他ならなかった。

ここから逆転できる手段はまだまだ存在している。

戦術の常道として、そして「リビルドガールズ」の傾向からして考えられるのは、フォースリーダーであるアイカがそのままフラッグ機を兼ねているパターンだ。

そしてこのフラッグ戦は、味方が何機撃墜されていようと、フラッグ機を仕留めれば勝ちになるという特殊ルールでの戦いであるなら、まだまだリリカたち「アナザーテイルズ」が勝利を手に行ける可能性は完全に潰えたというわけではない。

アイカがそれを見込んだ上で、ユユを封じ込めるという形での短期決戦を挑んできたのなら、こちらも相応のリスクを負つての戦いをする他にないだろう。

「リリカさん！」

『おっと、カエデのねーちゃんの相手はチイだぜ！ 背中向けた時点で後ろからズドンだ！』

「……………くっ、随分とやってくれますわね！」

「……………大丈夫です、カエデさん……………お願い、フルブランシユ……………！ ブランシユアクセル、マキシブースト！ オーバー……………ナイトロー！」

『エリイちゃん、フェアリイ・ストライク・ブライド、お願い！』

『わかりました、アイカさん……………！ リビルドパワーゲート、射出します……………！』

そんなリリカの心意気に応えようとしたのか、それともマキシブーストを超えてさらに加速したフルブランシユを脅威と見たのかは定かではないが、アイカもまた、最大の必殺技をもって応戦することを決め込んでいたらしい。

エリイが射出した四基のフィン・ファンネルが形成したパワーゲートを通過したフェアライズガンダムの速度はオーバーナイトロに匹敵する、戦場を駆け抜ける流星にも等しいものだ。

「…………やあああああッ!!!」

『エリイちゃんのために……………ここでぶっ倒れるおおお!!!』

——瞬間、光が爆ぜる。

加速エネルギーと剣先に集中していた純粋な出力同士の激突は、膨大な衝撃波を伝えて、周囲のオブジェクトを破碎し、そしてぶつかり合う二機のガンダムの装甲を融解させていく。

そのぶつかり合いそのものは、瞬間的なものであるとはいえ互角であるといっても差し支えはなかった。

だが——もしも、そこに勝敗を分かつ一線があるとするとするなら、それはひとえに、今まで戦ってきた経験と、そしてアイカにかけられたエリイの支援という、必殺技の重ねがけという条件だろう。

互角に打ち合っていたはずの剣先はじりじりと押し返されて、アイカが叫び通したエリイへの愛がそのまま上乘せされたかの如く、トライスラッシュブレイドの刃を貫いて、ビルドボルクの剣先はフラッグ機であるリリカの、フルブランシユのコックピットへと、真っ直ぐに突き立てられていた。

——ああ、遠いなあ。

リリカがこぼした涙は無重力の中で雫となって、ひとひらの、星の欠片として宙を漂う。

シグナルロストの赤文字が漂い、ブラックアウトしたモニターの向こうにまだいるのである。アイカの——自分にとつての始まりとなった好敵手の姿を脳裏に浮かべながら、リリカはそつと虚空に手を伸ばす。

【Battle Ended!】

【Winner:リビルドガールズ】

わかっていたことなのかもしれない。

だとしても、それはどうしようもなく悔しくて、どうしようもなく悲しくて、涙は堰を切って溢れ出てくるけれど、リリカはどこかそん

な気持ちとは背反する、晴々とした想いも胸の内に抱いていた。

「……ねえねえ、リリカちゃん」

撃墜されたミワからの通信を繋いで、リリカはごしごしと涙を擦りながら、問いかけるようなその言葉に答えを返す。

「うん、お姉ちゃん……」

「……GBN、楽しい？」

それはきつと——今まで歩んできた旅路についてのことであり、そしてこれだけ歩んでも尚、いくつもの分厚い壁があつて、舗装さえもされていない険しい道のりが待ち構えていることを踏まえての問いかけだったのだろう。

きつとこの先、GBNを続けるのなら、今日のようなことはいくらでも待ち受けていて、心がへし折れてしまいそうになるような挫折も待ち構えているに違いない。

アイカたちとの戦いは、確かに一つの決戦だったかもしれないが、その長く永い道から見れば、燦然とこの仮想の海に瞬き続ける星々から見れば、その一秒にも満たない出来事だったのだろう。

それでも、リリカの答えは決まっていた。

一人なら、一人だけだったなら、きつと諦めていた。

そして、何のために泣いてきたのかもわからずに、何のために棄ててきたかもわからないいくつものことに、GBNが新たに加わっただけなのかもしれない。

それでも——リリカは、一人じゃなかった。

それはただの偶然で、幸運に恵まれただけなのかもしれない。

だが、リリカたちは「アナザーテイルズ」として一つの絆を結んでいた。その事実だけは、神が卓袱台をひっくり返したとしても覆りようがない。

だからこそ、リリカはその気紛れに——幸運の女神様が微かに綻ばせた笑顔に感謝を捧げるかのように、涙をこぼしながらもそつと微笑んで、ミワからの問いかけに、はつきりと答えを返すのだった。

「うん……楽しいよ、皆と……一緒だから！」

栄光は、勝者の頭上だけに光り輝くものではない。

敗者たちにも、舞台を降りた者たちにもまた道が続いているのなら、その未来を照らし出すかのように、時に降り注ぐことがある。

——勝者には祝福を、敗者には栄光を。

幸運の女神様がそう呟いたかのように、リリカが浮かべる笑顔は、どこか春の梢にも似た、穏やかで——そして、ここで満足することなく「次」に向かう挑戦者としての意思を、止まることのない覚悟を宿したものに、勝者が手にした星の金剛にも匹敵する輝きを放っていることに違いないのだった。

## 最終話 「これはわたしの物語」

久しく袖を通していなかったワイシャツに、腕を潜らせる。

胸の前で留めるボタンは少しだけ窮屈になっていて、あんまり大きくなってもいいことなんてないのに、と人が聞けば贅沢な悩みに聞こえるような言葉を溜息に変えて、梨々香は憂鬱な自分を鼓舞するようにぴしやりと頬を叩いた。

フォースバトルトーナメント、Aブロック第三回戦で「アナザーテイルズ」が敗退しても、自分たちのGBNにおける日常が変わったわけではなかったし、むしろトーナメントに臨む前よりも姉とカエデが叩き合う軽口が増えたり、ユユが時折提案するスリリングな賭けに乗ってみたりと、その結び付きは一層強固になったと、梨々香はそう思っている。

そして何故梨々香が久しく袖を通していなかった制服などを着込んでいるかといえば、答えは、敗退した翌日のユユの提案にこそあった。

『オフ会なるものを、ユユもしてみたいのです』

あまり人様に誇れるような戦績でなかったとしても、一応フォースとして挑んだ初めてのトーナメントということで何かの記念といえど記念になるし、何よりユユのどこか切羽詰まったようなその提案に、一抹の寂しさのようなものを感じ取ったから——と、いうのはきつと野暮になるのだろうか。

ミステリアスで、妖艶で、何を考えているのか時折わからなくなることもあるし、自分たちより遥かに腕前も上回っているユユだったけれど、その内心はきつと梨々香に近い、等身大の少女のそれなのだろう。

そして今、梨々香が制服を着込んでいるのは、GBNのAvatarと少しでも自身の印象を近づける為なのと、そして。

こん、こん、こん、と、梨々香の部屋のドアをノックする音が聞こえたのは、ブレザーに袖を通し終えて、プリーツスカートのホックを留めた時のことだった。

「梨々香ちゃん梨々香ちゃん、準備できてる〜?」

「あ、えっと……うん、お姉ちゃん。ちょうど今終わったところ」

フルブランシユは、アタツシユケースにも似た公式グッズである、ガンプラと武装類が収まる窪みが設けられた緩衝材が中に詰まっている輸送用ボックスに入れてあるし、リボンタイにもズレはない。

鏡を一瞥してみれば、寝癖もちゃんと梳かして、美羽とは違う真っ直ぐ、腰の辺りまで伸びた栗色のロングヘアがそこには映し出される。

「うむうむ……ちょうどよかったみたいだねえ、それじゃ行くっか」

「うん、確か……新宿駅の東口だったかな……」

「然り然り、その辺は美羽も覚えてるから大丈夫だよお」

扉を開けば、蛍光灯の灯りに照らし出された廊下と、そして自身と瓜二つながらも、髪の毛だけは父親に似てふわふわとゆるくウェーブがかかっているそれをセミロングにまとめた姉の姿が視界に映し出される。

考えてみれば、リアルで美羽と会話をしたのはあのベランダでのやり取りの他に、最近は晚ご飯を食べる時も家族と食卓を囲んでいるからその機会は豊富なのだが、随分と久しぶりなような気がするから不思議なものだ。

苦笑する梨々香に、美羽は小首を傾げつつも、さながら梨々香がいならそれでいいかと納得した様子を見せて、手にしていたアタツシユケースのような物体——ガンプラ用の輸送ケースを掲げてみせる。

「梨々香ちゃん梨々香ちゃん、フルブランシユ、持った?」

「うん、大丈夫……お姉ちゃんから教えてもらったコスメとかも、全部入ってるよ、えへへ……」

「うむ、ぐつどぐつどだよお梨々香ちゃん、まあ梨々香ちゃんはお化粧なんてしなくても十分キュートなんだけどねえ」

それでもお化粧は、自分を世界に際立たせるものだから。

美羽はきつと、母親からの受け売りであろうその言葉をナチュラルメイクが施された美貌に乗せて笑ってみせる。

二卵性ではあるけれど、双子として生まれてきたこともあって、梨々香の顔立ちには美羽とよく似通っていて、それが本当ならきつと自分も容姿に自信を持っていいのかもしれないけれど、まだそれはちよつとだけ難しい。

薄いピンク色のリップグロスを塗った唇を引き締めて、梨々香は長く自分の生活拠点となっていた自室にどこか別れを告げるような気分、ガンプラ用輸送ケースをトートバッグの中に仕舞い込んでから扉を閉めた。

「それじゃあ行くっか行っか梨々香ちゃん」

「うん。えつと……えへへ、こうするの、久しぶりだね」

「うむうむ……GBNだとカエデさんに取られちゃったからねえ」

梨々香がおずおずと差し出した手を取って、美羽は心底嬉しそうに微笑みながら、恋敵、なのかそうでないのかはともかく、梨々香が告白を受け入れた相手の名前を呼ぶ。

そういえば、すっかり舞い上がっていたというか処理落ちを起こしていたけれど、オフ会を開くということはカエデのリアルにも出会うということだ。

梨々香はとくん、と心臓が高鳴るのを感じながらも、今は姉から寄せられた温もりにすぎるように、指先を絡めるようにして手を繋いだ。

きつと、全部を抱え込んで歩いていくことなんて誰にもできない。

梨々香自身がそうだったように、取りこぼして、拾おうとしたらまた別なものがこぼれ落ちて、気がつけば両手に収まるか収まらないか程度のものしか残らないのが、人生というものなのかもしれない。

——それでも。

空いた時間を利用して見た、GBNでアーカイブ化されている「機動戦士ガンダムUC」の主人公、バナージ・リンクスのように心の中で梨々香はそう呟いて、新しい旅への一步を踏み出していく。

それでも、きつと拾い続けようとすることはできるから。

取りこぼしてしまっても、誰かと一緒なら——こぼれ落ちてしまったものだって、拾いあっていけるはずだから。

かつての自分が聞いたらきつと疑うか、ありえないと切り捨てるよ  
うなことを心の中に浮かべて、梨々香は美羽と手を繋いだまま、家の  
玄関から澄み渡る日差しが照らす外の世界へと踏み出していくの  
だった。



オフ会を開きたい、というユユの要望に当たって、場所をどこにす  
るかが考えどころであったのだが、それについては意外なほどあつさ  
りと解決の目を見ることがになった。

と、いうのも、自分たちと対戦していた「リビルドガールズ」も、あ  
の非公式第三次有志連合戦こと「E.L.ダイバー争奪戦」の後にオフ会  
を開いていたようで、その伝手があるからと、「いいところ」を紹介し  
てもらったのだ。

いいところ、というのは取りも直さず、信頼がおける場所というこ  
とで、一も二もなく梨々香たちはそれを承諾したのだが、驚愕するこ  
とになったのはその店の名前を見てからだ。

「あら、アナタたちが梨々香ちゃんと美羽ちゃんかしら？ 会うのは  
随分久しぶりねえ、梨々香ちゃん。アタシよ。マギー」

そう、GBNを始めたばかりの頃、初心者狩りから自分を助けてく  
れたマギーが経営しているバー「アダムの林檎」が、GBNにおける  
オフ会の聖地みたいなものだと言われた時、梨々香はずっと連絡  
を取っていなかったこともあってひっくり返りそうになったものだ  
が、それでも嫌な顔一つせず引き受けてくれた辺り、彼女の人徳とい  
うものが窺えるだろう。

GBNと比べれば細身で、褐色だった肌は透き通るように白いとい  
う違いはあれど、その独特の息遣いから、梨々香は目の前にいる紫色  
に染めた髪を束ねている人物がマギー本人なのであると確信を得る。

「お、お久しぶりです、マギーさん、その……」

「いいのよお。梨々香ちゃんの活躍、アタシもぼつちり見てたんだか  
ら。そしてこっちは……美羽ちゃんね。アナタのことも色々知って



るわよ？ うふふ」

「どうもどうも……あの頃の二つ名は返上できるように鋭意努力中だよお」

聞けば、梨々香がGBNを始める以前、「エーデルローゼ」周りのゴタゴタがあつて以来の美羽は荒れに荒れていたというところで、「赤砂」、「緋きスナイパー」の異名が轟いていたのもその辺が多少噛んでいるといえなくもないらしい。

だが、過去は過去で今は今だ。

冗談よ、と、ばちこーん、と擬音が聞こえてくるような濃いウインクを美羽に飛ばして、マギーはその、荒れ果てていた頃からは想像もつかない美羽の姿に穏やかな笑みをそつと浮かべてみせる。

「もし、貴女、ハンカチを落としましたこと？」

不意に、背後から声が聞こえたのはその時だった。

踵を返して振り返れば、そこには赤毛に碧眼という出で立ちながらも、自分たちと同じ制服に身を包んだ少女が、確かに梨々香の持ち物である、フリルのあしらわれたハンカチを手にしている姿がある。

どこことなくその所作に気品や優雅さを感じながら、梨々香は呆然とハンカチを受け取りつつ、恐る恐るといった調子で問いかける。

「え、えつと……ありがとうございます。その、もしかして……カエデさん、ですか……？」

「ええ、いかにもわたくしは楓・フロレンス・新見と申しますけれど……んん？」

小首を傾げると同時に、梨々香の全身を舐めるように凝視すると、楓と名乗った少女は、どこか合点がいったようにぼん、と右の拳で左の掌を打ち据えた。

「ええ、ええ、そうですわ。わたくしはカエデ。カエデ・リーリエと名乗った方がわかりやすいですわね、リリカさん？」

「わあ、やっぱり……えへへ、会えて嬉しいです、楓さん」

「わたくしもですわ！ この時を一日千秋の思いで待ち侘びていたのですわ！ ええと……」

「梨々香……蔵前梨々香、ですつ。えへへ……その、おんなじ学校だつ

たんですね……」

楓が着ている制服は、リボンタイの色から何から梨々香が着ているのと同じものであり、それは彼女が同じ学年——一年生であることの証でもあった。

「本当はもつといいよそ行きをお見せしたかったのですけれど……こういうった機会ですから、制服の方がいいかと悩みましたわ、でも結果的には正解だったようですわね！」

ぎゅーつ、と、それこそ会えるまでの間待ちわびていた想いを体温に乗せて伝えるように、楓は気高く、しかし柔らかく咲いた大輪の笑顔を浮かべると、梨々香へと熱い抱擁を交わし、頬を擦り合わせる。

その様子に美羽は少しだけ複雑な表情を浮かべながらも、なんだかんだでリアルでも変わった様子のない腐れ縁で結ばれた相手に苦笑を浮かべながら、場を譲るようにマギーの隣へと歩み寄っていく。

「まあ、お熱い……ということは、結々が一番遅れてしまったようですね……ふふ」

そして、最後の一人が訪れたのはたつぷり五分間ぐらい梨々香と楓が熱い抱擁を交わしていたのを、通行人からの視線に気付いて解こうとしたまさにその瞬間だった。

GBNではいわゆるお嬢様結びに結えた黒髪を黒いリボンで括つて、更には黒い和装に身を包んでいる黒尽くめな出で立ちではあったが、梨々香たちのそれとは違う制服に身を包んでいる黒髪の少女——ユユこと、山南結々が、蠱惑的でいたずらな笑みを浮かべて梨々香たちへと歩み寄ってくる。

「いえ、わたくしたちも今来たばかりですわ、誤差ですわ誤差」

「然り然り、結々さんもなんだかりアルでも変わらないみたいで安心したよお」

「そうですか？ ふふ……このリボンは、お兄様から頂いたものなので気に入っているのです……」

GBNと同じく黒いリボンでお嬢様結びに結えた髪を掻き上げながら、少しだけ照れ臭そうに頬を赤らめて結々は口元を綻ばせる。

はじめてのオフ会ということもあって緊張していたことは確か

だったけれど、変に身構えていたのがなんだか馬鹿馬鹿しくなるぐらい、「アナザーテイルズ」はリアルでも変わらなくて。

梨々香は、すー、はー、と、呼吸を小さく整えると、本当であれば「アダムの林檎」に着いてから言おうと思っていたことを伝えるべく、全員に視線を配って、唇を引き結んだ。

「あら、梨々香ちゃん。何かあったのかしら？」

「え、えっと……マギーさん。本当はお店についてからの方がいいんですけど、聞いてほしいことがあって……」

「今じゃなきやダメなのね、それで……何かしら？」

野次馬たちが何かを囁し立ててきたなら容赦はしないとばかりにマギーは周囲を鋭い眼光で舐めつけると、何かを言い出そうと背筋を疼かせている梨々香に視線を戻して、元の穏やかな笑みを浮かべる。

きつとこれも、縁がなせるものなのだろうと梨々香は思う。

マギーが気を配ってくれなければ、きつと自分は店に着いてから、で引き伸ばして、多分オフ会の間もずっとそれを伝えることを先延ばしにして、なあなあにしてしまったかもしれない。

だからこそ、ここで。

明日に踏み出すために、梨々香は過去に決着をつけることを決意する。

「えっと、その……私、ずっと学校に行ってなかったんです……」

「梨々香ちゃん……」

梨々香は、自分が俗に言う引きこもりであることと、そして長い間学校に行っていない身であることを、事情を知っている美羽を除いた「アナザーテイルズ」の面々と、そしてマギーに包み隠さず打ち明ける。

「で、でも……その……遅いかもしれないですけど、ちゃんと……明日から、学校に行こうって、そう思ったんです……！ その、それは、えっと……皆が、いてくれたから……皆が、勇気をくれたから、私も、頑張ろうって……そう思って……」

しどろもどろになりながら、途中で言葉を詰まらせながらも、梨々香はしっかりと胸の内側でわだかまっていた思いを、全員から視線を

逸らすことなくはつきりと言葉に出して紡ぎ上げる。

その眦にはじわり、と涙が滲んでいて、最後の方は消え入りそうになりながらも、梨々香はきちんと、過去の自分にけじめをつけるべくそう言った。

「遅いなんて、そんなことはありませんわ」

「楓さん……」

「そうだよお、梨々香ちゃん。美羽も頑張ってサポートするから、ね？」

「お姉ちゃん……」

「……ふふ、やはり結々が見込んだ通り、貴女は優しく、勇気がある人なのですね、梨々香さん」

「結々さん……」

世間体もあって、何を言われるかわからないと恐れを抱いていた自分が恥ずかしくなるくらいに、「アナザーテイルズ」の面々は、そしてマギーは穏やかな笑みを浮かべると、拍手の代わりにそっと視線で激励を送って、梨々香の小さな、だけど精一杯に振り絞った勇気を肯定する。

繋がりがかった。

誰かと、いつか、どこかで。

それはきつと、世界にありふれた願いで、いつもどこかで誰かがそう願って、時には叶って、時には叶わなくて、運命の女神様の掌で弄ばれ続けている。

いつてしまえば、自分は運が良かっただけなのかもしれない。

それでも、梨々香は、梨々香自身が掴み取ったその繋がりに、ずっと求め続けていた願いの結実にただ、涙と共に感謝を捧げる。

いつもどこかで誰かが何かを願い続けるように、今、この駅の周りを行き交う人々にもそれぞれの感情があって、物語があって、梨々香のそれは一つだけの青空に照らし出される無数の欠片の一つでしかないのかもしれない。

それでも、これは梨々香が描き出した、そして、梨々香が掴み取った——自分だけの物語に他ならない。

誰かにとつてのアナザーテイル。もう一つの御伽噺。

それでも、梨々香にとつてはかけがえのない、憧れから始まった、長い旅路のフェアリー・テイル。

そこにいくつもの困難が横たわっていることを知りながらも、貫つた勇気の追い風に帆を張つて、梨々香は明日へと船を出す。

きっとその勇気が、笑顔が、そして流してきた涙が、いつか自分を照らし出してくれると、そう信じて、梨々香は涙に飾られた笑顔で、新たな一歩を踏み出すのだった。